第６節　近世以降

１　近世以降の概要

近世（江戸時代）以降に位置づけられる遺構について近世陶磁器やかわらけなどが出土した遺構をこの時期の遺構と判断した。この時期の遺構としては、掘立柱建物、井戸、近世墓、土坑、性格不明遺構がある。

この他、時期を特定できない掘立柱建物や溝などについても、本節で報告することとする。以下に、掘立柱建物、井戸、近世墓、土坑、溝、小穴の順に報告し、最後に遺構外から出土した近世から現代までの遺物について報告する。

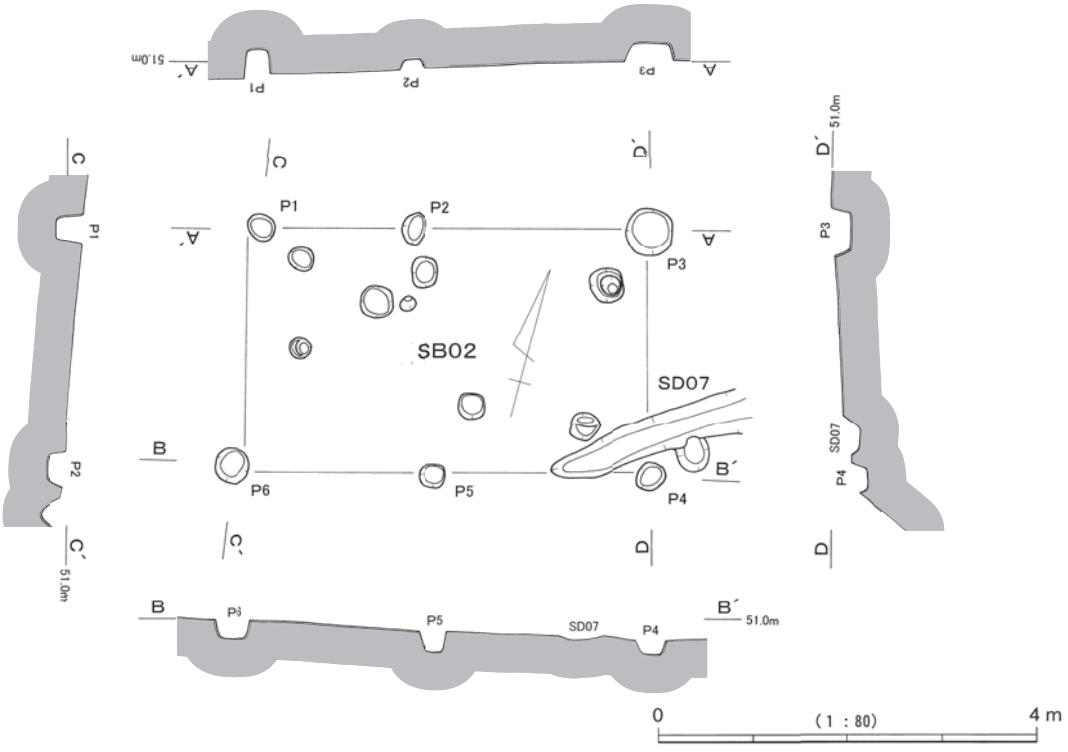
２　掘立柱建物

掘立柱建物は時期比定が非常に難しく、さらに形態的な特徴から中世と近世の建物を区分することも困難であることから、ここでは、中世以降に位置づけられる掘立柱建物と時期不明の掘立柱建物について報告する。

（１）２号掘立柱建物（SB02，第91図，第９表）

位置　SB02は、２区Ｊ71グリッドに位置する。

特徴　SB02は１×２間、約2.6×4.4ｍの東西に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-75°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.7である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋は通らない。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.6ｍ、2.5ｍで、南側で2.2ｍ、2.2ｍであり、梁の西側で2.6ｍ、東側で2.6ｍである。身舎柱は正対していない。



第91図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図①

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.5m、深さ0.2～0.3mでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB02は、建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB02からの出土遺物はない。

時期　SB02は出土遺物がないことから時期を特定することができない。近世以降であろうか。

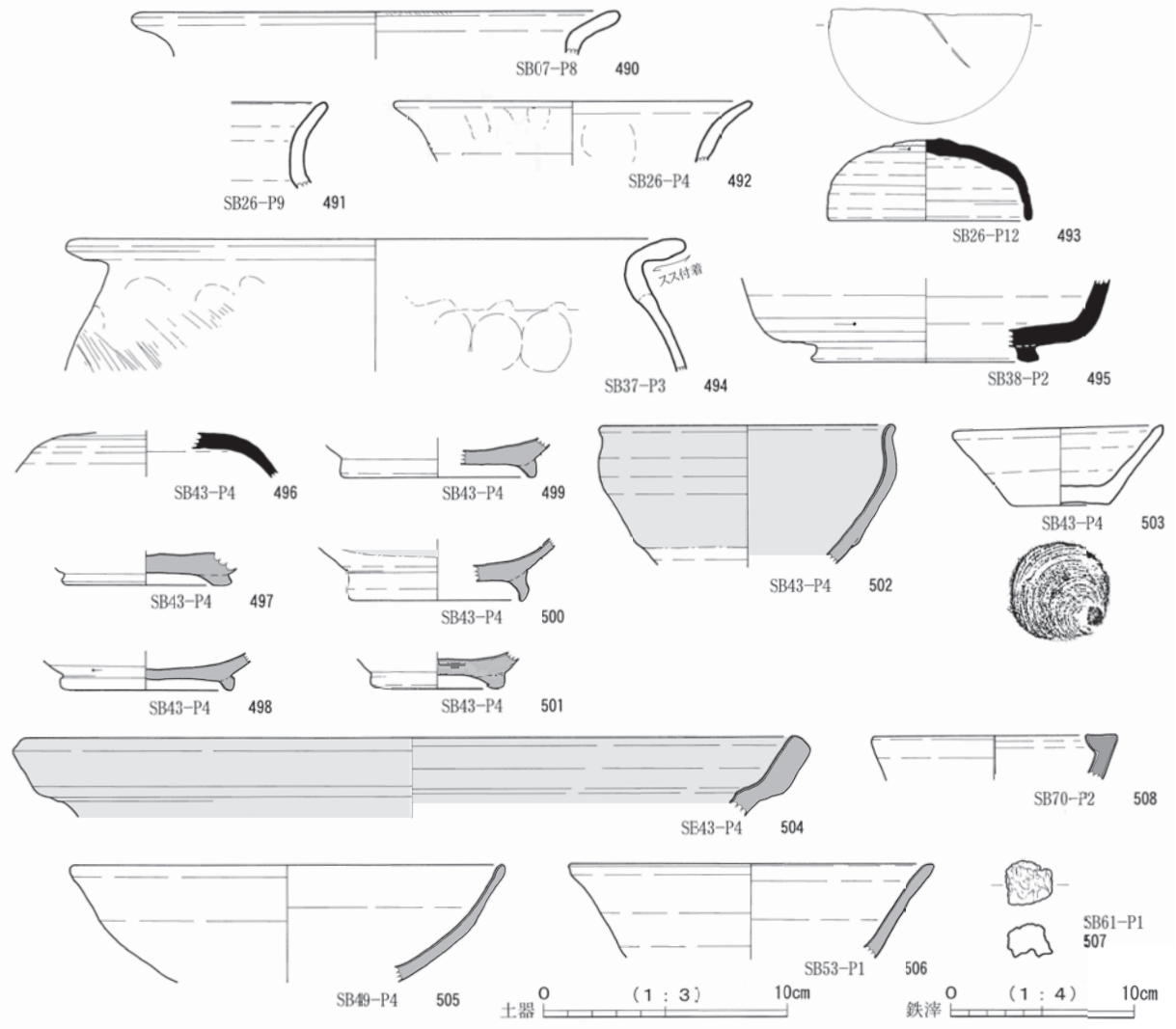
（２）７号掘立柱建物（SB07，第92・93図，第９・14表，図版58）

位置　SB07は、２区Ｇ73グリッドに位置する。SB06などと重複関係にある。

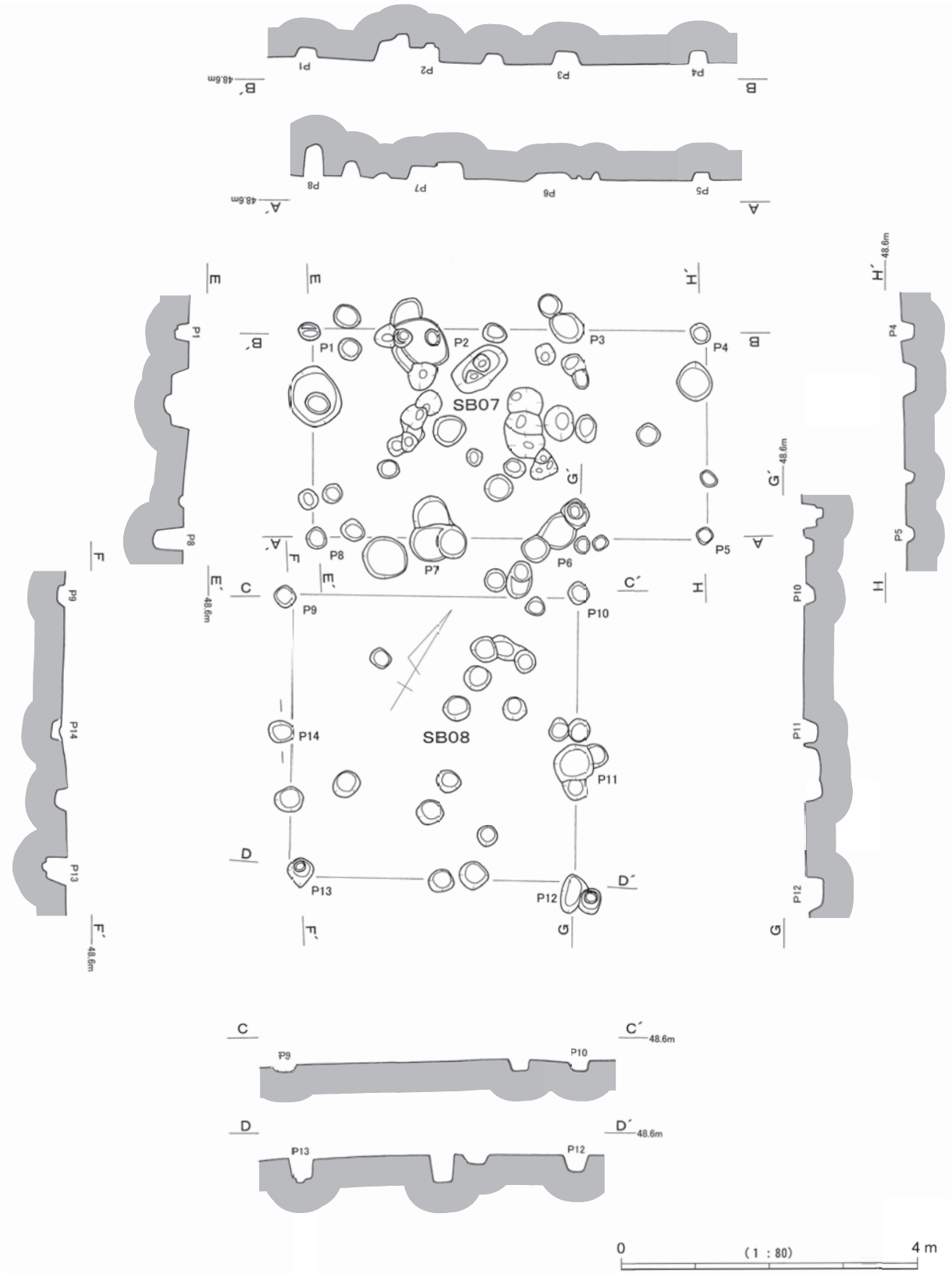
特徴　SB07は１×３間、約2.8×5.3mの東西方向に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ８で構成）で、主軸をN-59°-Eに向け、棟は北西－南東に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.9である。梁と桁はやや斜交する。桁の柱筋はほぼ通っている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.7m、1.8m、1.8mで、南側で1.6m、1.8m、1.9mであり、梁の西側で2.8m、東側で2.8mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.2～0.4mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB07は梁と桁がやや斜交するものの、柱間が桁と梁でほぼ同一であることから判断して、やや規格



第92図　近世の掘立柱建物出土遺物実測図①



第93図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図②

性のある建物といえる。

出土遺物　SB07からは、Ｐ８から近世陶磁器などが出土しており、土師器（490）を図示した。

土師器（490）は、甕の破片であり、コ字形の頸部で、口縁部は外上方へ向かって直線的に延びるも

のである。奈良時代～平安時代に位置づけられる可能性が高い。

時期　SB07は小片のため図化していないが近世陶磁器片が出土していることから、近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

（３）８号掘立柱建物（SB08，第93図，第９表）

位置　SB08は、２区F73・74、G73・74グリッドに位置する。SB07と壁面を平行させており、同時期に存在していた建物である可能性が高い。

特徴　SB08は１×２間、約4.0×4.0ｍのほぼ正方形に近い建物（P９～P14で構成）で、主軸をN-30°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：１である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋はとおらない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.8m、1.9ｍで、東側で2.2m、1.8ｍであり、梁の北側で4.0m、南側で3.8ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.1～0.3ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P13には柱の痕跡が確認でき、10cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB08は建物の構造からすると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB08からの出土遺物はない。

時期　SB08は出土遺物がないことから、築造時期を確定できないが、SB07と壁面を平行させていた可能性が高いことから、同一の時期に存在した建物であった可能性が高い。

（４）９号掘立柱建物（SB09，第94図，第９表）

位置　SB09は、２区Ｆ73・74、G73・74グリッドに位置する。SB10などと重複関係にある。

特徴　SB09は１×３間、約4.4×6.3ｍの南北に長い建物（Ｐ１～Ｐ８で構成）で、主軸をN-24°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4である。梁と桁は斜交し、柱筋もずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.2m、1.7m、1.9ｍで、東側で1.8m、3.1m、1.4ｍであり、梁の北側で4.4m、南側で4.4ｍである。身舎柱は大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.1～0.4ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB09は建物の構造から判断すると、規格性の低い建物であると判断できる。

出土遺物　SB09からは出土遺物はない。

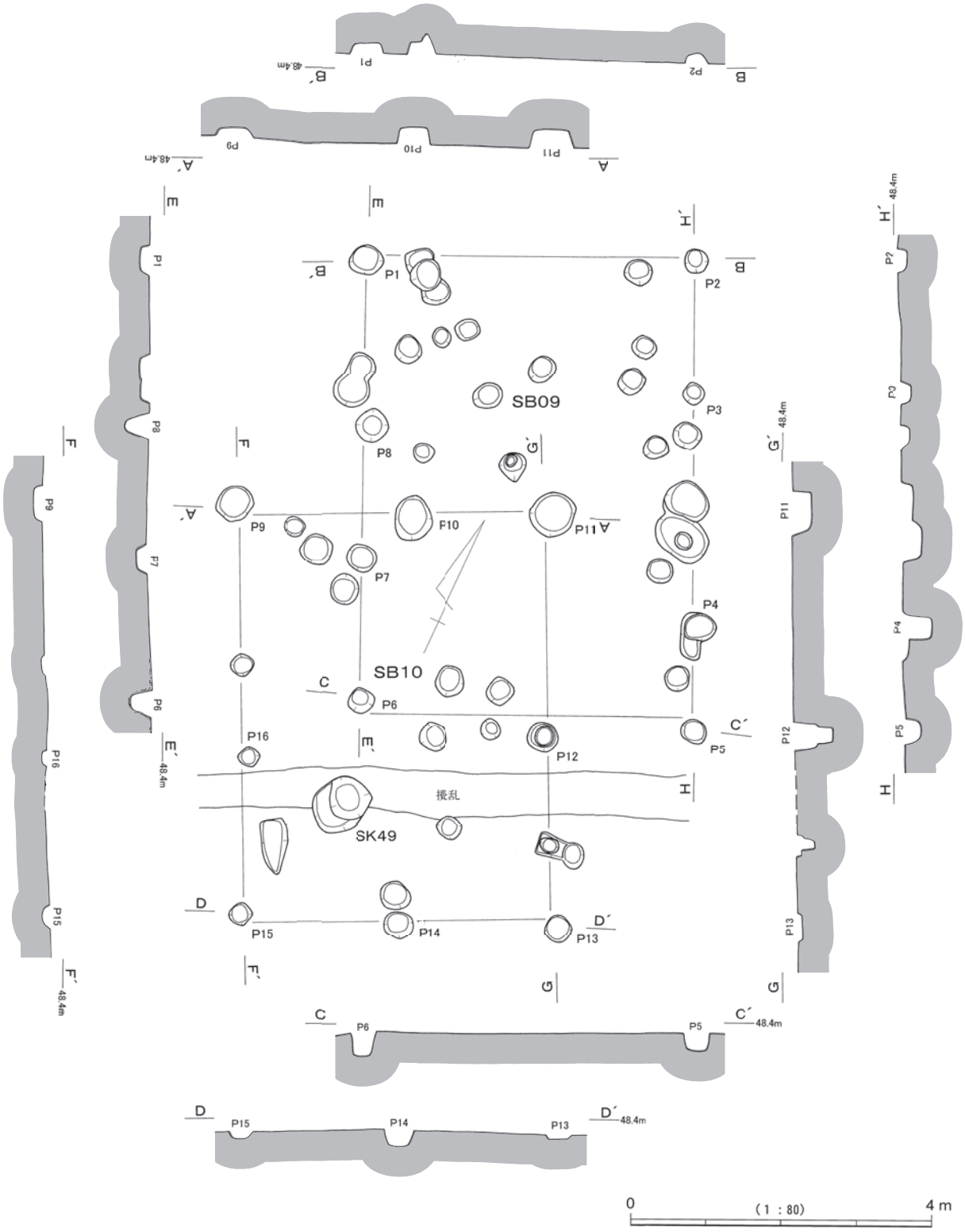
時期　SB09は出土遺物がないことから時期を特定できないが、後述するSB10などと建物の主軸方向が一致しており、同時期である可能性が高いことから、近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

（５）10号掘立柱建物（SB10，第94図，第９表）

位置　SB10は、２区Ｆ73・74グリッドに位置する。SB09などと重複する。

特徴　SB10は２×２間、約4.2×5.4ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ９～P16で構成）で、主軸をN-26°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.3である。梁と桁は斜交する。梁、桁ともに柱筋は通らない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から3.3m、2.1ｍで、東側で3.0m、2.4ｍであり、梁の北側で2.4m、1.8m、南側で2.1m、2.1ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、梁、桁ともにずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.1～0.5ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P12には柱の痕跡が



第94図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図③

確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB10は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB10からは、近世陶器（擂鉢）、かわらけ、灰釉陶器、須恵器などが出土したが、小片のため図化していない。

時期　SB10からは、近世陶器片が出土しており、近世（江戸時代）以降に帰属する可能性が高い。

（６）12号掘立柱建物（SB12，第95図，第９表）

位置　SB12は、２区Ｇ73グリッドに位置する。

特徴　SB12は１×２間、約2.9×5.4ｍの南北に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-８°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.9である。梁と桁は斜交する。桁の柱筋はほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.4ｍ、3.0ｍで、東側で2.6ｍ、2.8ｍであり、梁の北側で2.8ｍ、南側で2.9ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.3ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB12は、建物の構造からみると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB12からは遺物は出土していない。

時期　SB12からは遺物が出土していないことから、時期を特定することはできない。

（７）13号掘立柱建物（SB13，第95図，第９表）

位置　SB13は、２区Ｆ73・74グリッドに位置する。

特徴　SB13は１×２間、約4.0×6.4ｍの東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-58°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5～1.6である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋はずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から3.0ｍ、3.4ｍで、南側で3.0ｍ、3.0ｍであり、梁の西側で3.9ｍ、東側で4.0ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.8ｍ、深さ0.2～0.4ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ２には柱の痕跡が確認でき、約20cmの丸太が使用されたと想定できる。

SB13は建物の構造からすると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB13からの出土遺物はない。

時期　SB13は出土遺物がないことから、時期を特定することは難しい。

（８）15号掘立柱建物（SB15，第96図，第９表）

位置　SB15は、２区Ｇ72グリッドに位置する。

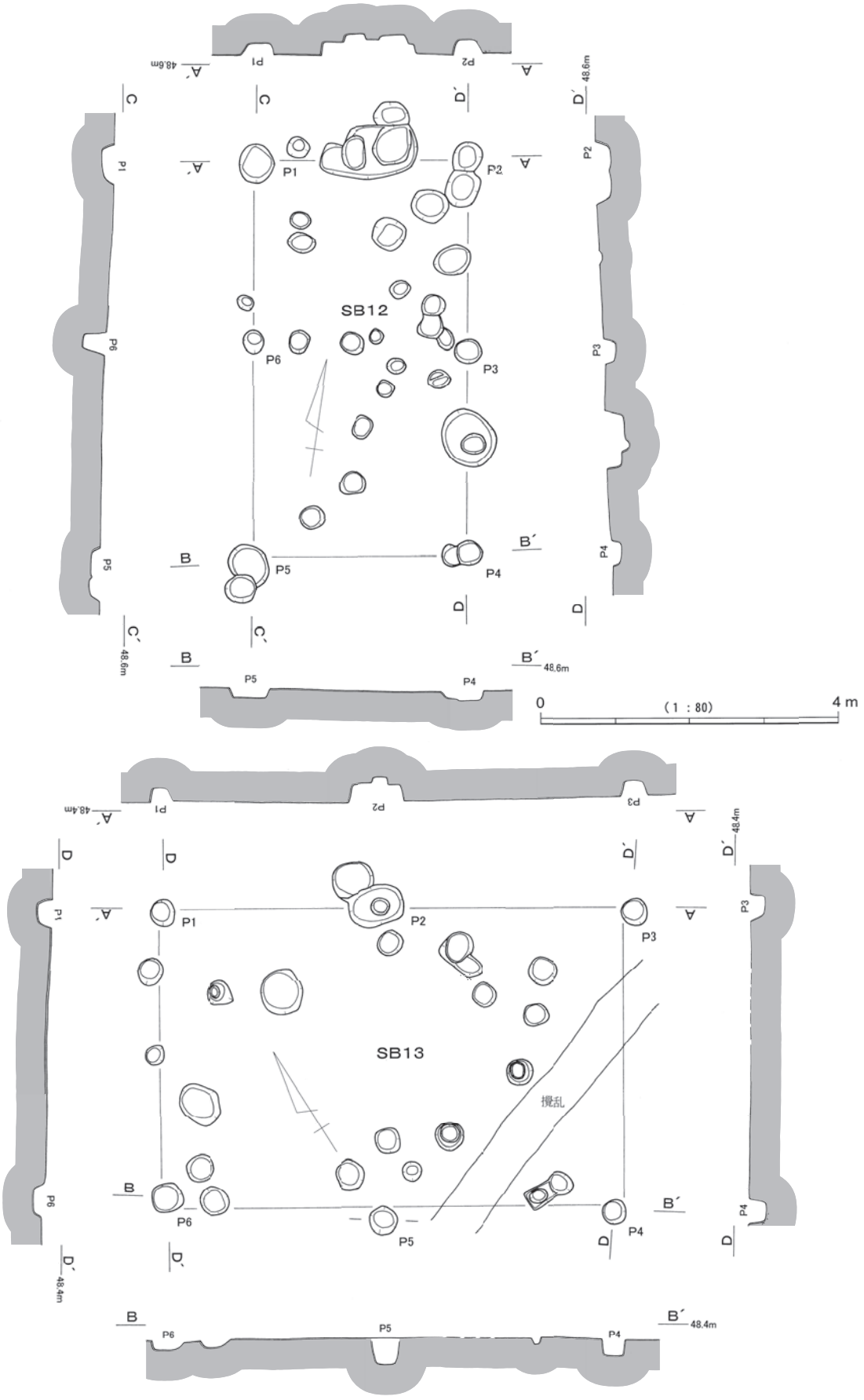
特徴　SB15は１×２間、約4.2×3.6ｍの南北に長い長方形建物（Ｐ１～Ｐ５で構成）で、主軸をN-9°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：0.8である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋は直線的である。柱間の距離は、桁の北側は柱の位置が攪乱されており不明、南側で西側から1.8ｍ、1.8ｍで、梁の西側で4.0ｍ、東側で4.2ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB15は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB15からの出土遺物はない。

時期　SB15は出土遺物がなく、時期を特定することはできない。



第95図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図④

（９）16号掘立柱建物（SB16，第96図，第９表）

位置　SB16は、２区Ｆ72・73、Ｇ72グリッドに位置する。

特徴　SB16は２×３間、約4.4（庇を除く）×6.0ｍの庇を有する南北に長い長方形建物（Ｐ１～P14で構成）で、主軸をN-18°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁はやや斜交し、柱筋は通らない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.0m、2.0m、2.0ｍで、東側で1.9m、2.1m、2.0ｍであり、梁の北側で2.0m、2.0m、南側で2.1m、2.3ｍである。庇は1.0×6.0ｍで西側に取り付けられ、柱間は北側から2.0m、1.9m、2.1ｍである。おおむね2.0ｍを基準にしている可能性が高い。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.2～0.3ｍでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB16は柱間の距離が2.0ｍとほぼ一定しているが、柱筋が通らないこと、梁と棟が斜交することから、やや規格性のある建物といえる。

出土遺物　SB16からは出土遺物はない。

時期　SB16は出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

（10）17号掘立柱建物（SB17，第97図，第９表）

位置　SB17は、２区Ｆ71・72、Ｇ71・72グリッドに位置する。

特徴　SB17は１×２間、約4.6×7.0ｍの東西に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-90°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁は斜交し、柱筋もややずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から3.3m、3.8ｍで、南側で3.3m、3.3ｍであり、梁の西側で4.6m、東側で4.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。なお、柱間距離がやや広いことから、掘立柱建物ではなくＰ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６あるいはＰ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５で構成される竪穴建物（の主柱穴）の可能性もある。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.1～0.2ｍで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB17は、建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB17からの出土遺物はない。

時期　SB17は出土遺物がないことから、時期を特定することはできない。

（11）18号掘立柱建物（SB18，第98図，第９表）

位置　SB18は、２区Ｆ70・71、Ｇ70・71グリッドに位置する。

特徴　SB18は２×２間、約5.0×5.7ｍのほぼ正方形に近い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-57°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.1である。梁と桁は斜交する可能性が高く、柱筋も通らない。柱間の距離は、桁の北側で、西側から不明（3.0m前後）、2.6ｍで、南側で3.4m、2.2ｍであり、梁の西側は不明、東側で2.6m、2.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

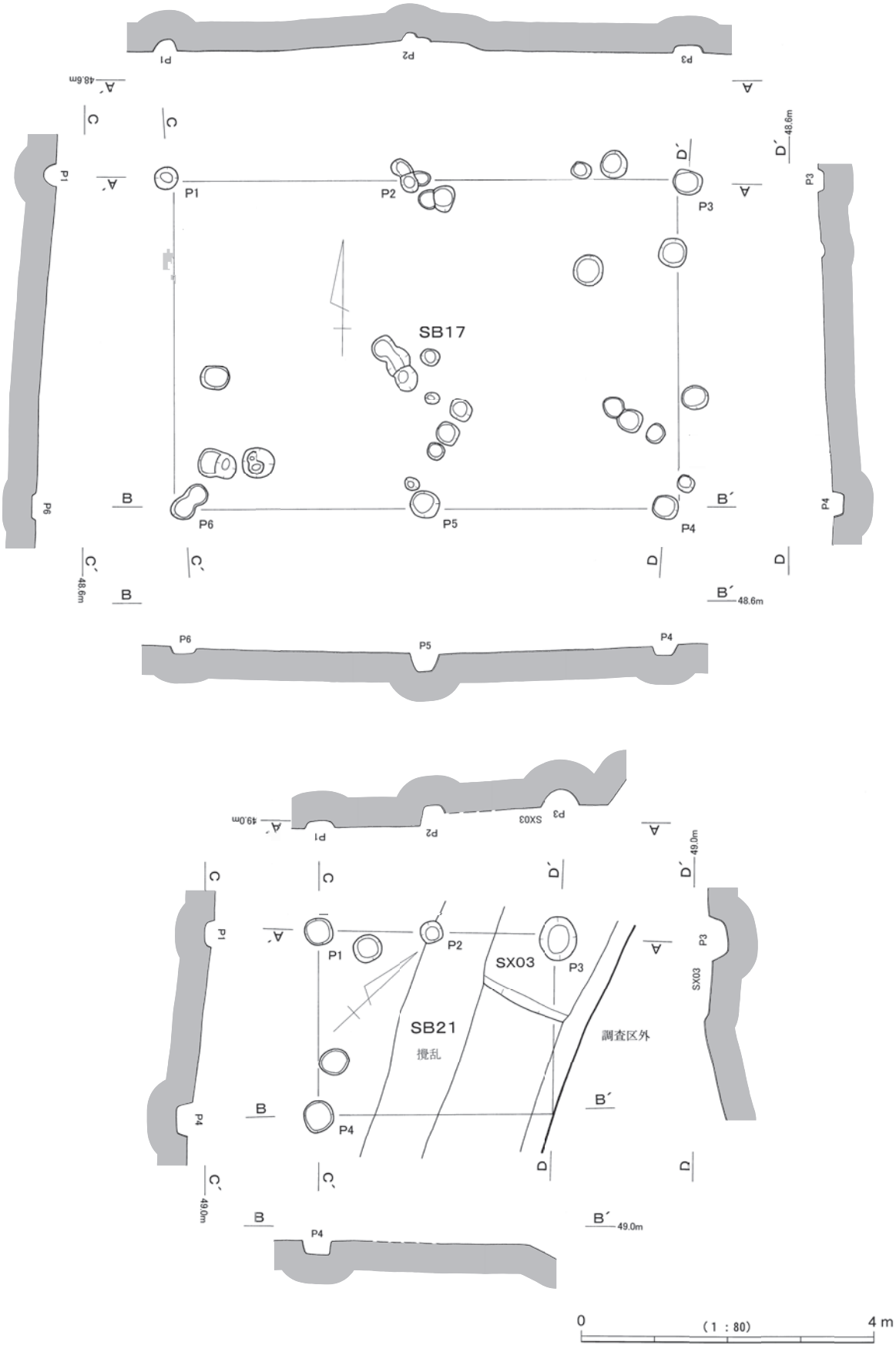
柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.2～0.4ｍでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB18は規格性が非常に低い建物であり、掘立柱建物ではない可能性もある。

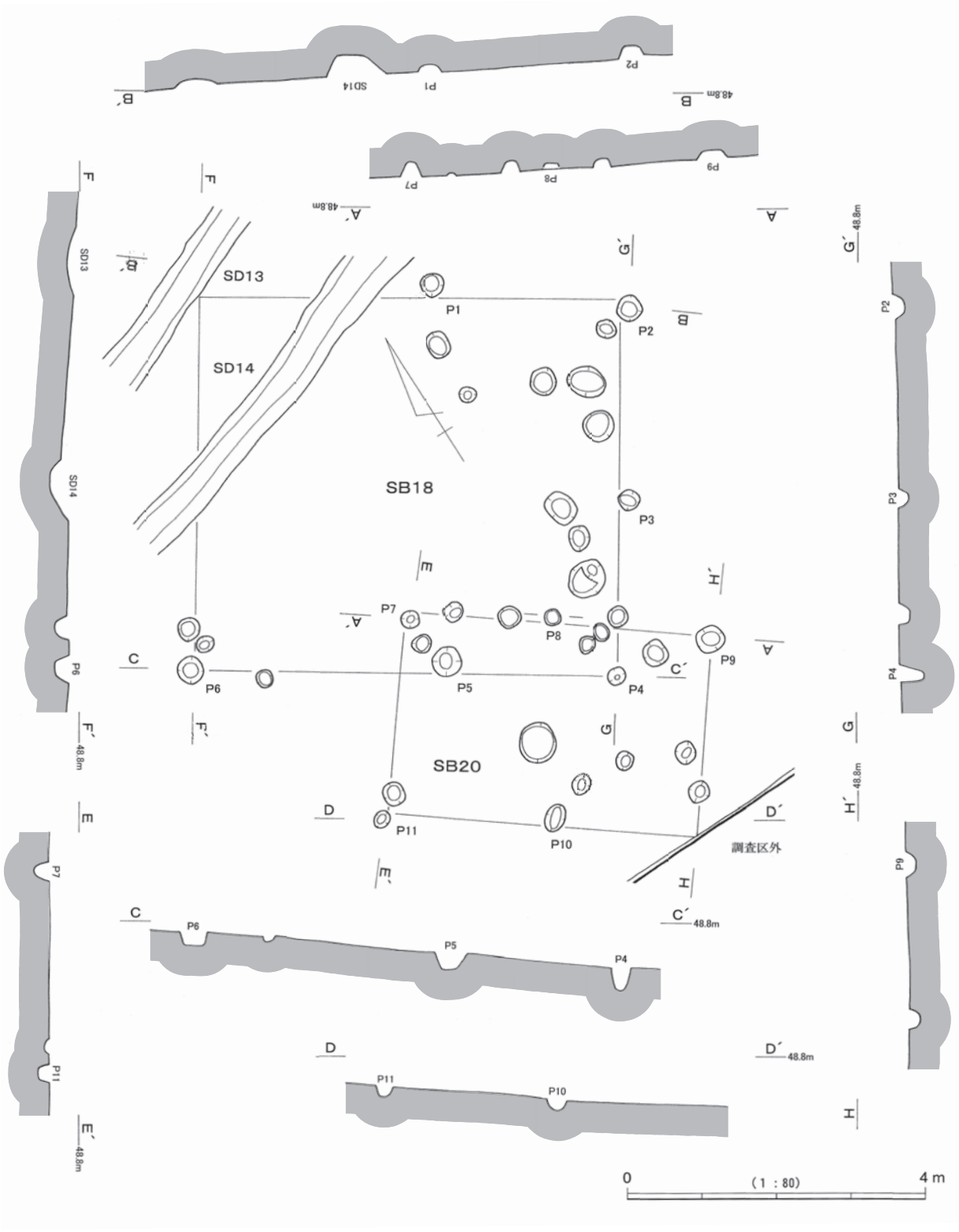
出土遺物　SB18からの出土遺物はない。

時期　SB18の出土遺物はないことから時期を特定できない。

第96図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑤



第97図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑥



第98図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑦

(12) 20号掘立柱建物（SB20，第98図，第９表）

位置　SB20は、２区Ｆ70・71グリッドに位置する。

特徴　SB20は１×２間、約2.7×4.0ｍの南北に長い長方形建物（Ｐ７～P11で構成）で、主軸をN-53°-Wに向け、棟はほぼ北西-南東に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5であ

る。梁と桁は斜交し、柱筋はずれる。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.9m、2.2mで、南側で2.3m、不明（1.7m前後）であり、梁の西側で2.7m、東側は不明（2.4m前後）である。身舎柱は対称位置からずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB20は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB20からの出土遺物はない。

時期　SB20は出土遺物がなく、時期を特定することはできない。

（13）21号掘立柱建物（SB21，第97図，第９表）

位置　SB21は、３区西側Ｅ69・F69グリッドに位置する。

特徴　SB21は１×２間、約2.6×3.2mの小型の長方形の建物（Ｐ１～Ｐ４で構成）で、主軸をN-43°-Eに向け、棟はほぼ北東-南西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.2である。梁と桁は直交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.5m、1.7mで、南側は不明であり、梁の西側で2.6m、東側は不明である。身舎柱は南側が失われており、正対していたか不明である。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

Ｐ１-Ｐ３間は、柱間が狭いことから、Ｐ２はこの建物に伴わない可能性もあり、その場合はＰ１・Ｐ３・Ｐ４と調査区外の存在する可能性が高い柱穴で構成される竪穴建物であった可能性もある。

SB21は掘立柱建物であるとすれば、構造からみて規格性の低い建物のといえる。

出土遺物　SB21からの出土遺物はない。

時期　SB21は出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

（14）22号掘立柱建物（SB22，第99図，第９・14表）

位置　SB22は、３区西側Ｅ68・69、Ｆ68・69グリッドに位置する。

特徴　SB22は１×２間、約4.0×5.4mの南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-19°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4である。梁と桁はやや斜交し、柱筋はややずれる。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.4m、2.6mで、東側で2.4m、2.6mであり、梁の北側で4.0m、南側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.8m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴（Ｐ１・Ｐ６）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

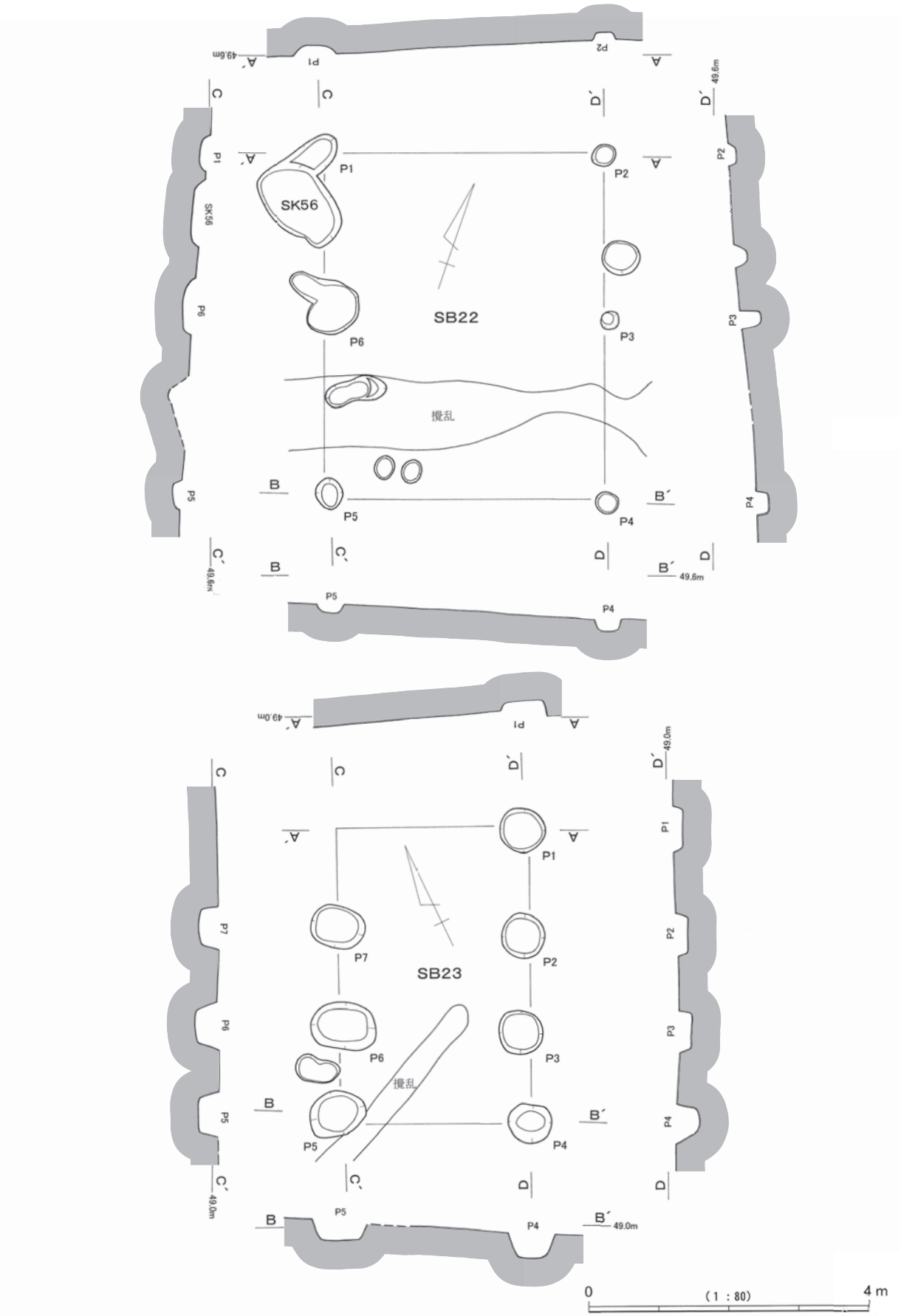
SB22は建物の構造からみると梁と桁が直交すること、梁の長さが南北で一致すること、桁の長さと柱間距離が東西で一致することから、やや規格性のある建物といえる。

出土遺物　SB22-Ｐ１から近世陶磁器などが出土しているが、小片のため図化していない。SB22-Ｐ１は本調査時にSK56とともに発掘されており、この遺物は本来SK56に伴う遺物であった可能性もある。なお、第３節で述べたようにSB22-Ｐ１からは弥生土器が出土しており、第25図51に図示している。

時期　SB22からは近世陶磁器が出土しており、近世以降に位置づけられる可能性が高いが、Ｐ１から出土した陶磁器がSK56に伴うものとすれば、SB22の帰属時期を特定することはできない。

（15）23号掘立柱建物（SB23，第99図，第９表）

位置　SB23は、３区西側Ｅ68・69グリッドに位置する。



第99図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑧

特徴　SB23は１×３間、約2.8×4.2mの南北に長い長方形の建物（P１～P７で構成）で、主軸をN-25°-Eに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から不明（1.4m前後）、1.4m、1.4mで、東側で1.6m、1.3m、1.3mであり、梁の北側で2.8m前後、南側で2.8mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形あるいは楕円形で、直径（長軸）は0.6～0.9m、深さ0.1～0.4mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず､木柱は残存していない。

柱間の間隔に対して、柱穴が大きすぎることから、たまたま円形あるいは楕円形の土坑が並んでいた可能性も残る。

掘立柱建物との仮定が正しければ、SB23はほぼ1.4mを基準に柱が配置されていることから、やや規格性の高い建物となる。

出土遺物　SB23-P３から瓦片が出土しているが、図示していない。

時期　SB23の出土遺物は桟瓦である可能性が高いことから、早くとも江戸時代中期以降である。

（16）25号掘立柱建物（SB25，第100図，第９表）

位置　SB25は、２区E73グリッドに位置する。

特徴　SB25は１×２間､約3.4×4.4mの長方形の建物（P１～P６で構成）で､主軸をN-°39-Eに向け、棟はほぼ北東－南西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.3である。梁と桁は斜交し、柱筋もずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.8m、1.6mで、東側で2.2m、2.2mであり、梁の北側で3.4m、南側で3.2mである。身舎柱はずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.7m、深さ0.1～0.2mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB25は、建物の構造からみると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB25-P１から山茶碗などが出土しているが、小片のため図化していない。

時期　SB25は、P１から出土した遺物により、中世前期（12世紀）以降であることが判明する。

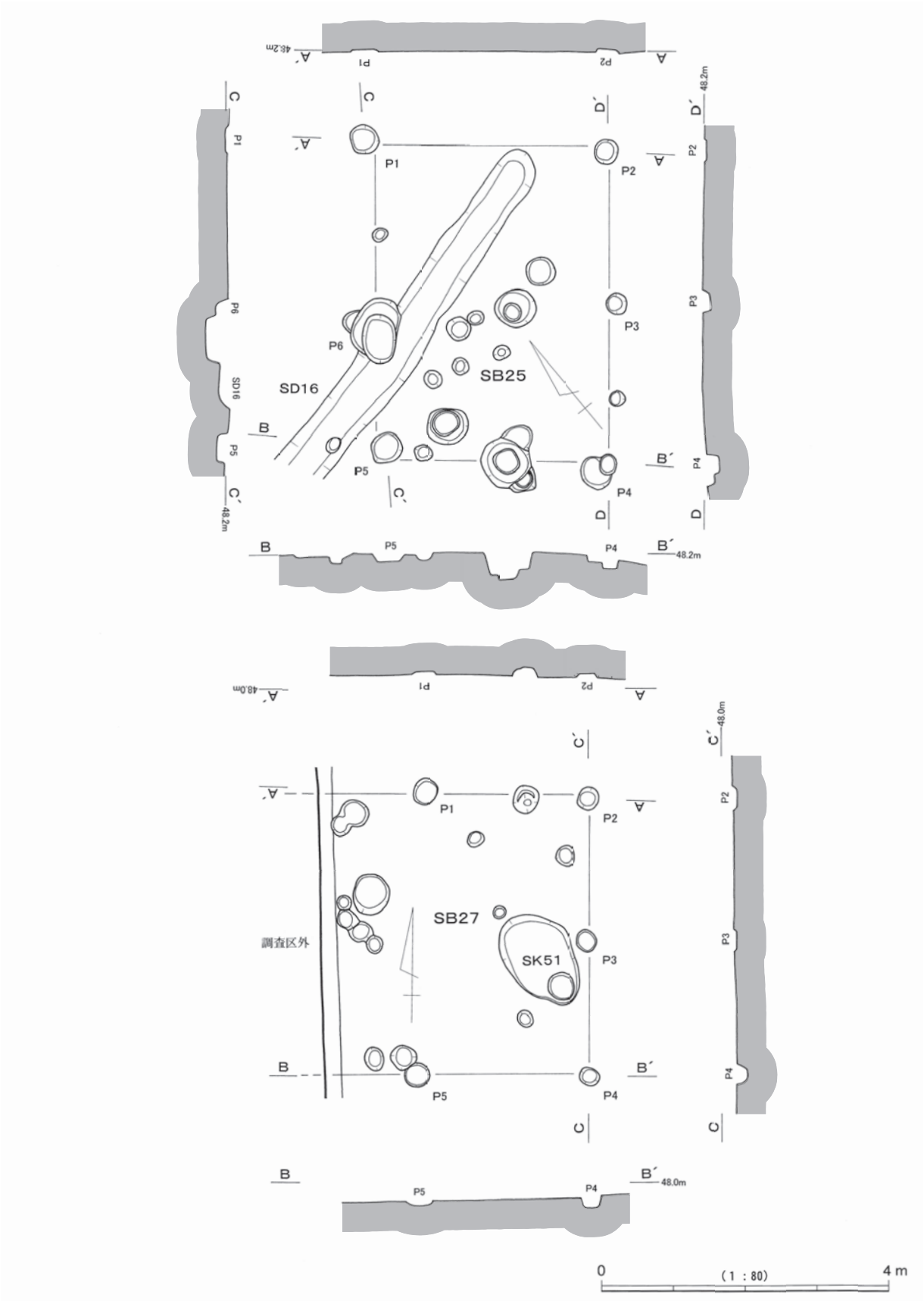
（17）26号掘立柱建物（SB26，第92・101図，第９・14表，巻頭図版６・９，図版21・58）

位置　SB26は、２区E72・73、F73グリッドに位置する。

特徴　SB26は１×５間あるいは２×５間､約5.4×9.6mの東西に長い長方形の建物(P１～P15で構成)で、主軸をN-75°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.8である。梁と桁はやや斜交する。柱筋は桁、梁ともにほぼ一直線である。梁南側のP10と北側のP２は正対していないことから、P２が身舎柱だとすれば、入口は東側であった可能性がある。また、P９が当建物に伴うとすれば､ここにも入口があった可能性がある。一方で､身舎柱が正対しないことから、P２・P９・P10はSB26の柱穴ではない可能性もあり、その場合は１×５間の建物となる。

柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.8m、2.0m、1.7m、2.1、2.0mで、東側で1.8m、1.8m、2.0m、1.8m、2.2mであり、梁の北側で5.3m、あるいは1.6m、3.7m、南側で5.4mあるいは2.8m、2.6m、あるいは2.8m、1.2m、1.4mである。P２・P９・P10が身舎柱だとすれば、身舎柱は対称位置には確認できず、大きくずれている。上述したように入り口を設けるためであろうか。SB26の柱間はおおむね1.8m前後で柱が配置されていることになる。

柱穴はやや不整形な円形で､直径は0.4～0.9m､深さ0.1～0.6mで一定していない。大型の柱穴（P６）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P１・P３・P４・



第100図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑨

Ｐ８・P11・P13には柱の痕跡が確認でき、約20～30cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB26は柱間の間隔がややずれること、梁と桁が斜交するが、柱間がおおむね1.8mであること、身舎柱が正対することなどから判断して、やや規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB26からは山茶碗、かわらけ、須恵器、土師器などが出土しており、このうち土師器、須恵器を図化した。

土師器甕（491・492）は、コ字形の頸部で、口縁部は外上方に向かって立ち上がるものである。奈良時代～平安時代に位置づけられる可能性が高い。須恵器杯蓋（あるいは短頸壺蓋，493）は半球形の天井部で、口縁部と天井部の間には凹線を巡らせる。口径が約8.5cmと小型であること、天井部の肩が張るような形態であることから、短頸壺蓋の可能性がある。天井部には「一」字形のヘラ記号が刻まれている。湖西産須恵器で、遠江Ⅳ期後半（７世紀後半）に位置づけられる可能性が高い。

時期　SB26は、図示していないがＰ７から山茶碗が出土しており、中世前期以降の規格性のある掘立柱建物の可能性が高い。Ｐ６からはかわらけあるいは土師質土器が出土していることから、中世後期まで降る可能性があるが、近世までは降らない可能性が高いと考える。

（18）27号掘立柱建物（SB27，第100図，第９表）

位置　SB27は、２区Ｅ72グリッドに位置する。SB28と重複関係にあるが、SB28よりは新しい可能性が高い。

特徴　SB27は１間以上×２間、約2.3m以上×4.0mの東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ５で構成）の可能性が高く、その場合は主軸をN-90°-Wに向け、棟は東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：0.6以上である。梁と桁はやや斜交し、梁の柱筋はほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.3mで、南側で2.4mであり、梁の東側で北側から2.0m、1.9mである。桁の身舎柱はずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB27は建物の構造から判断して、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB27からの出土遺物はない

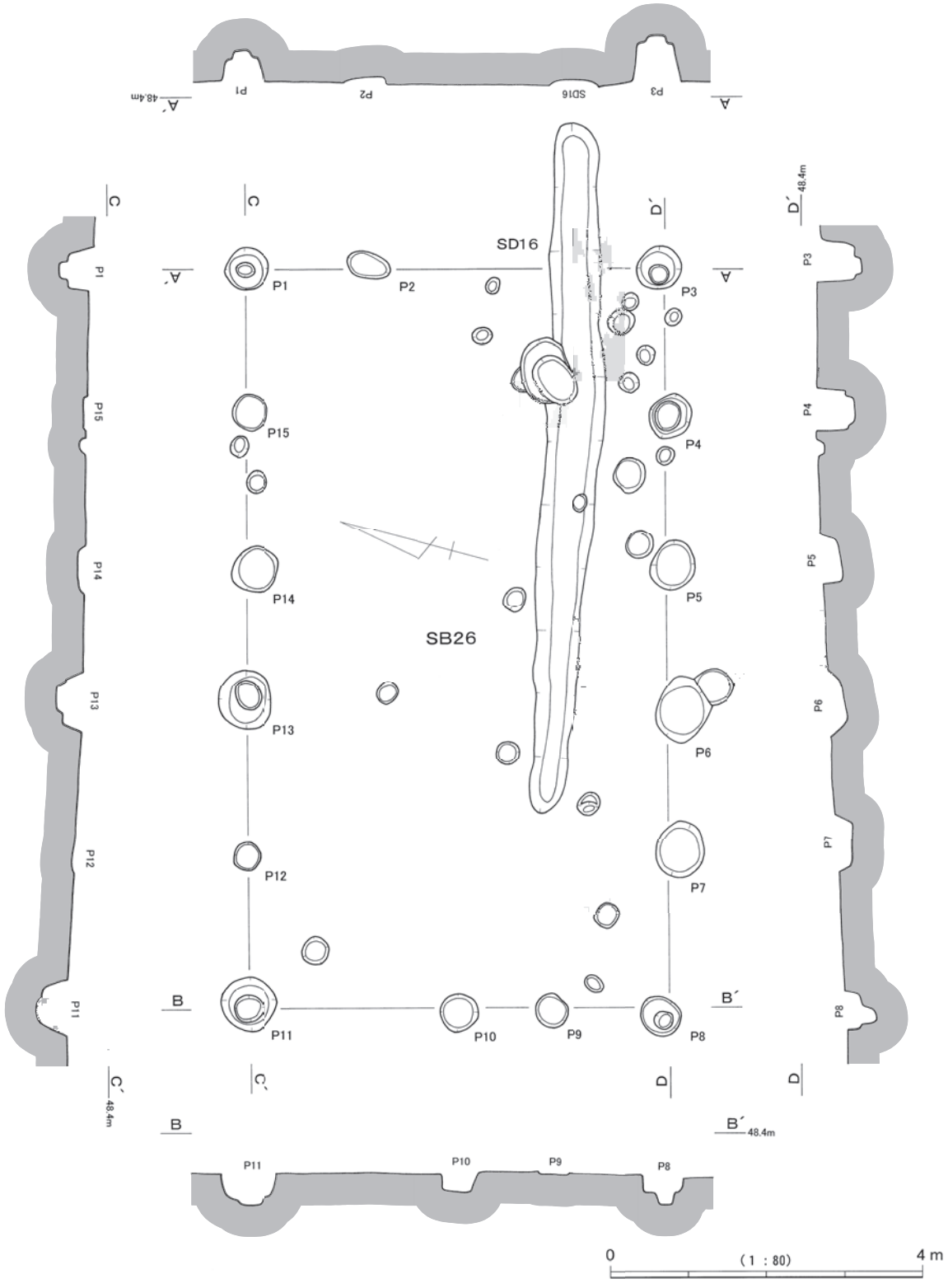
時期　SB27は出土遺物がないことから時期を特定できない。

（19）29号掘立柱建物（SB29，第102図，第９表）

位置　SB29は、３区西側Ｄ69・70グリッドに位置する。

特徴　SB29は３×３間、約5.0×5.6mのほぼ正方形に近い総柱建物（Ｐ１～P15で構成）か、あるいは２棟の掘立柱建物（3.4×5.6mのＰ１・Ｐ３・P13・P14・Ｐ７・Ｐ９・P10・P11で構成される１×３間の建物と3.4m×5.6mのＰ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ８・P15・P12で構成される１×３間の建物の２棟）の可能性がある。ここでは前者の可能性を想定して報告する。

建物の主軸をN-25°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.1である。梁と桁は斜交し、梁、桁、身舎柱の柱筋はややずれているがおおむね一直線である。土坑や小穴との切合関係が激しく、推測の部分もあるが、柱間の距離は、桁のＰ１-Ｐ９間で、北側から2.0m、1.7m、1.9mで、Ｐ２-Ｐ８間で1.8m、1.7m、2.0m、Ｐ３-Ｐ７間で1.9m、1.5m、2.0m、Ｐ４-Ｐ６間で1.9m、1.8m（前後）、1.8m（前後）である。梁のＰ１-Ｐ４で西側から1.8m、1.6m、1.6m、P11-Ｐ５間で1.6m、1.8m、1.6m、P10-P14間で1.7m、1.6m、1.8m（推定）、Ｐ９-Ｐ６間で1.6m、1.6m、1.8mである。梁、桁ともに、1.8mを基準としていた可能性がある。身舎柱はほぼ対称位置に



第101図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑩

確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.8mと想定でき、深さ0.1～0.6mで一定していない。大型の柱穴（P１・P９など）は攪乱により大きくなっている可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P１・P10などには柱の痕跡が確認でき、約20cmの丸太が使用されたと想定できる。

SB29は総柱建物であるとすれば、身舎柱が一直線に配置されることなどから、やや規格性のある建物といえる。

出土遺物　SB29はP４から近世陶器などが出土しているが、小片のため図化できない。

時期　SB29は、近世の遺物が出土していることから、近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

（20）30号掘立柱建物（SB30，第102図，第９表）

位置　SB30は、２区D72・73グリッドに位置する。

特徴　SB30は１×３間、約2.4×5.9～6.2mの東西に長い建物（P１～P８で構成）で、主軸をN-71°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：2.5～2.6である。梁と桁はやや斜交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.7m、1.7m、2.8mで、南側で1.6m、2.0m、2.4mであり、梁の西側で2.3m、東側で2.4mである。身舎柱はP２とP７についてはほぼ対称位置に確認できるが、P３とP６については大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴（P１）は柱が抜き取られたか、あるいは別の土坑の可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P３には柱の痕跡が確認でき、約20cmの丸太が使用されたと想定できる。

SB30は建物の構造からすると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB30-P６から近世陶器が出土しており、それ以外からは土師器や灰釉陶器が出土している。ただし、いずれも小片のため図化できない。

時期　SB30はP６から近世陶器が出土しており、近世（江戸時代）以降に位置づけられる可能性が高いが、本調査段階では図中P６とした文字の西側にある小穴まで含めて一括して遺物を取り上げており、この近世陶器が直接この建物に伴わない別の小穴に伴う可能性もあることから、その場合にはSB30は平安時代まで遡る可能性がある。

（21）32号掘立柱建物（SB32，第103図，第９表）

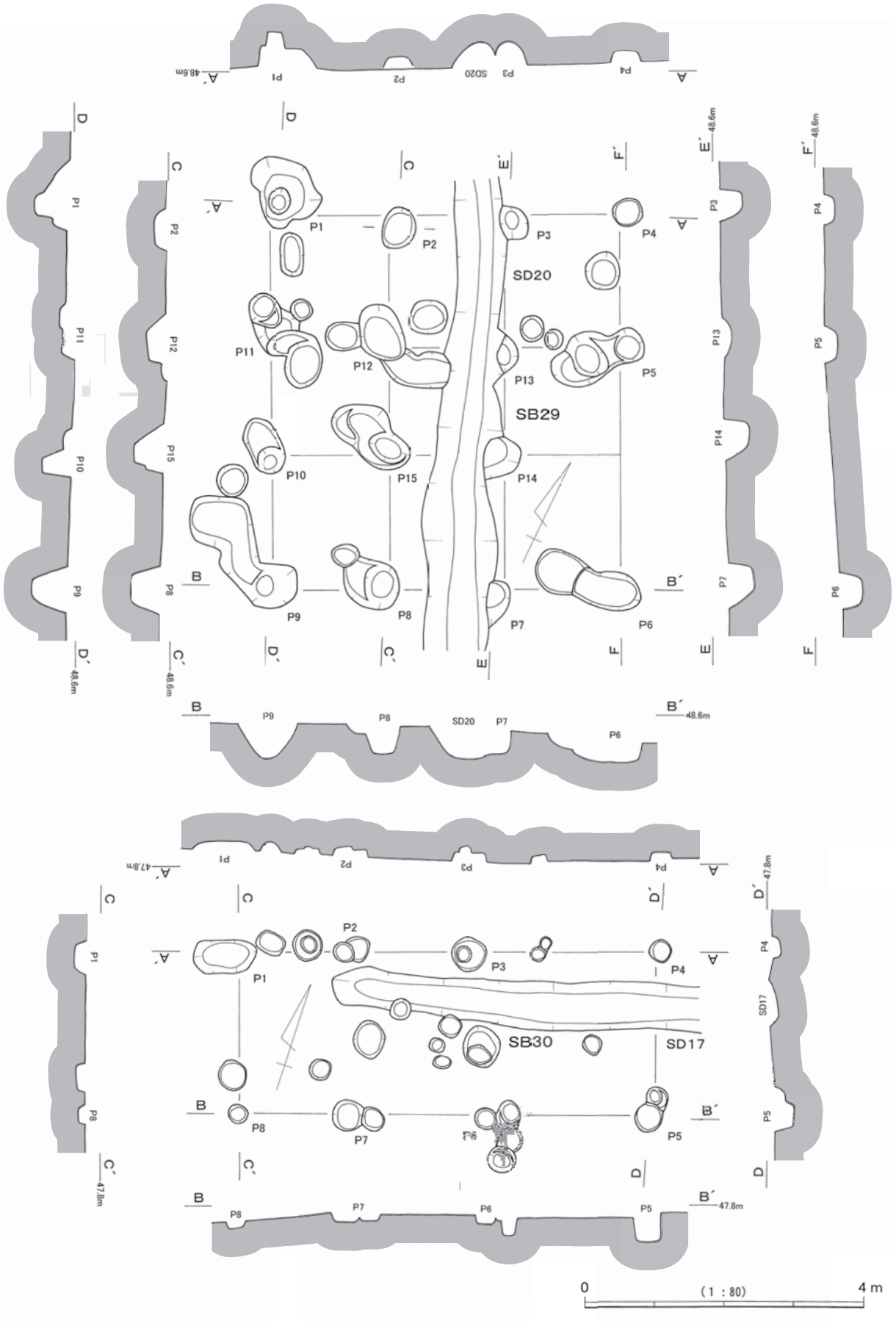
位置　SB32は、２・３区東側に跨り、C71・72、D71・72グリッドに位置する。

特徴　SB32は１×２間、約2.8×4.2mの南北に長い長方形の建物（P１～P５で構成）で、主軸をN-28°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁は斜交し、柱筋はほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.8m、2.4mで、東側で2.1m、2.1m（前後）であり、梁の北側で2.8mである。南側が不明なので中央では中央（P５-P３）で2.7mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

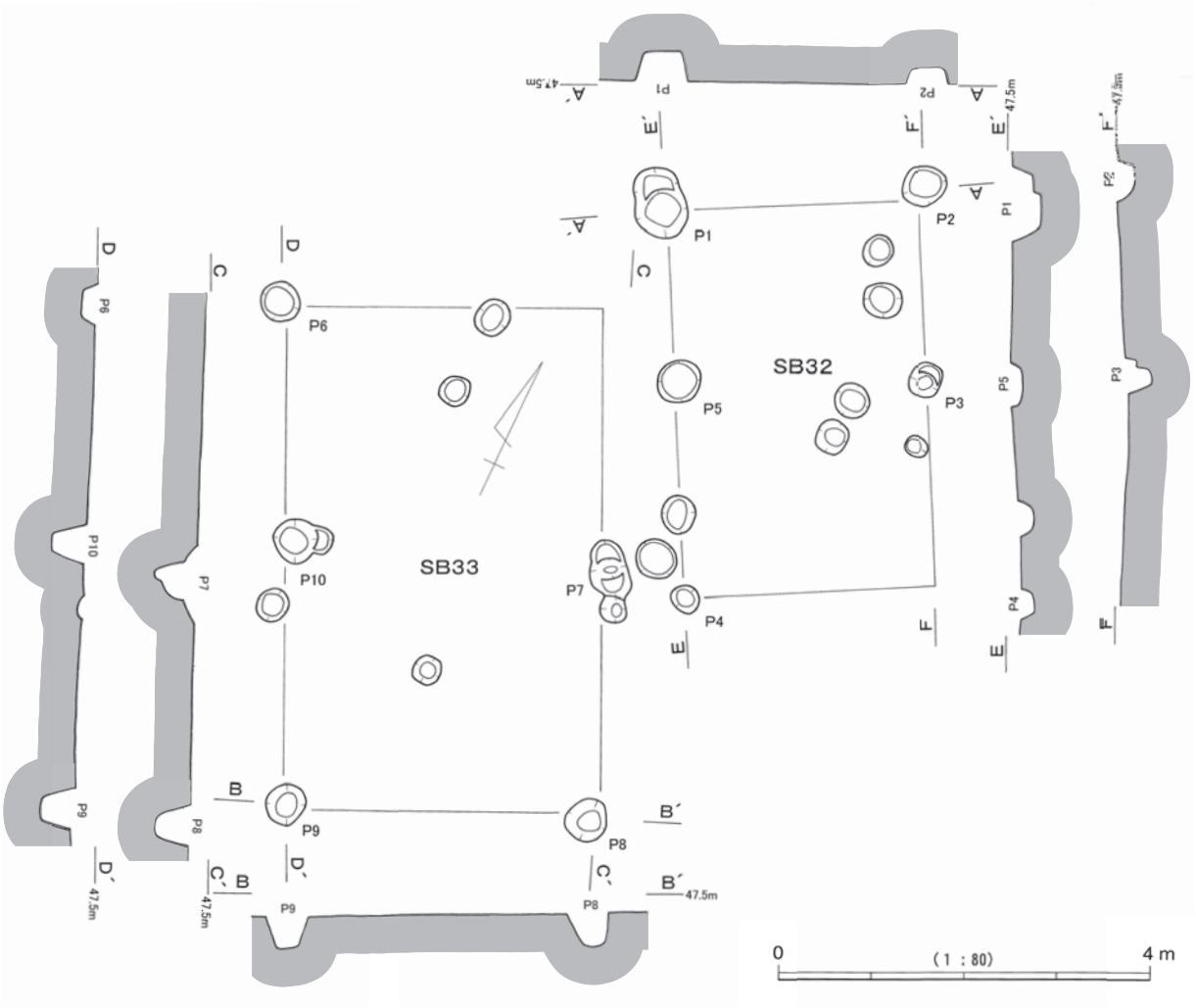
柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴（P１）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB32は、南東隅角の柱穴が確認できないことから、P１・P２・P３・P５で構成される竪穴建物（の主柱穴）の可能性がある。

SB32は掘立柱建物とすれば、建物の構造からみると規格性の低い建物といえる。



第102図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑪



第103図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑫

出土遺物　SB32からの出土遺物はない。

時期　SB32は出土遺物がないことから、時期を特定することはできない。

（22）33号掘立柱建物（SB33，第103図，第９表）

位置　SB33は、３区東側Ｃ71・72、D71グリッドに位置する。

特徴　SB33は１×２間、約3.4×5.4mの南北に長い長方形の建物（Ｐ６～P10で構成）で、主軸をN-25°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.6である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.6m、2.8mで、東側で2.6m前後、2.8m前後であり、北側が不明なので中央で3.4m、梁の南側で3.4mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4m前後、深さ0.2～0.5mで一定していない。大型の柱穴（Ｐ７）は柱が抜き取られた可能性、柱穴の切合関係がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ７には柱の痕跡が確認でき、約20cmの丸太が使用されたと想定できる。

SB33は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB33からの出土遺物はない。

時期　SB33は出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

（23）37号掘立柱建物（SB37，第92・104図，第９・14表，図版58）

位置　SB37は、３区東側Ｂ72グリッドに位置する。

特徴　SB37は１×２間以上、約4.1×4.4m以上の西北-東南に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ５で構成）で、主軸をN-48°-Wに向け、棟はほぼ西北-南西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.1以上である。梁と桁は斜交する。桁の柱筋はややずれるがほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.1m、2.4mで、東側で2.0m、1.2m以上であり、梁の北側で4.1m、南側は不明なので中央で4.1mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.1～0.4mで一定していない。大型の柱穴（Ｐ４）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB37は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB37からは近世陶器、山茶碗、土師質鍋などが出土している。このうち土師質鍋を図化した。鍋（494）は、く字形の口縁部で、口縁部は肥厚し、端部は丸く収められている。胴部はやや開き気味に垂下した後、底部に向かって急激に窄まる形態と想定する。外面にはハケ調整、内面には粘土紐の積み上げ痕や、指頭圧痕が確認できる。494は中世以降に位置づけることができる。

時期　SB37は図示していないが、近世陶器が出土していることから、近世以降であることが判明する。

（24）38号掘立柱建物（SB38，第92・104図，第９・14表，図版58）

位置　SB38は、３区東側Ｂ71・72グリッドに位置する。

特徴　SB38は２×２間以上、約4.6×4.0m以上の南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）の可能性が高く、SB39と同一の建物を構成していた可能性もあるが、SB39で後述するように柱穴の掘方の形状や根入れの深さなどが異なることから、別の建物と判断した。

SB38は主軸をN-20°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：0.9以上である。梁と桁はやや斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.2m、2.3m以上で、東側で2.1m、1.9mであり、梁の北側で2.2m、2.4mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.1～0.6mで大きな差がある。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB38は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

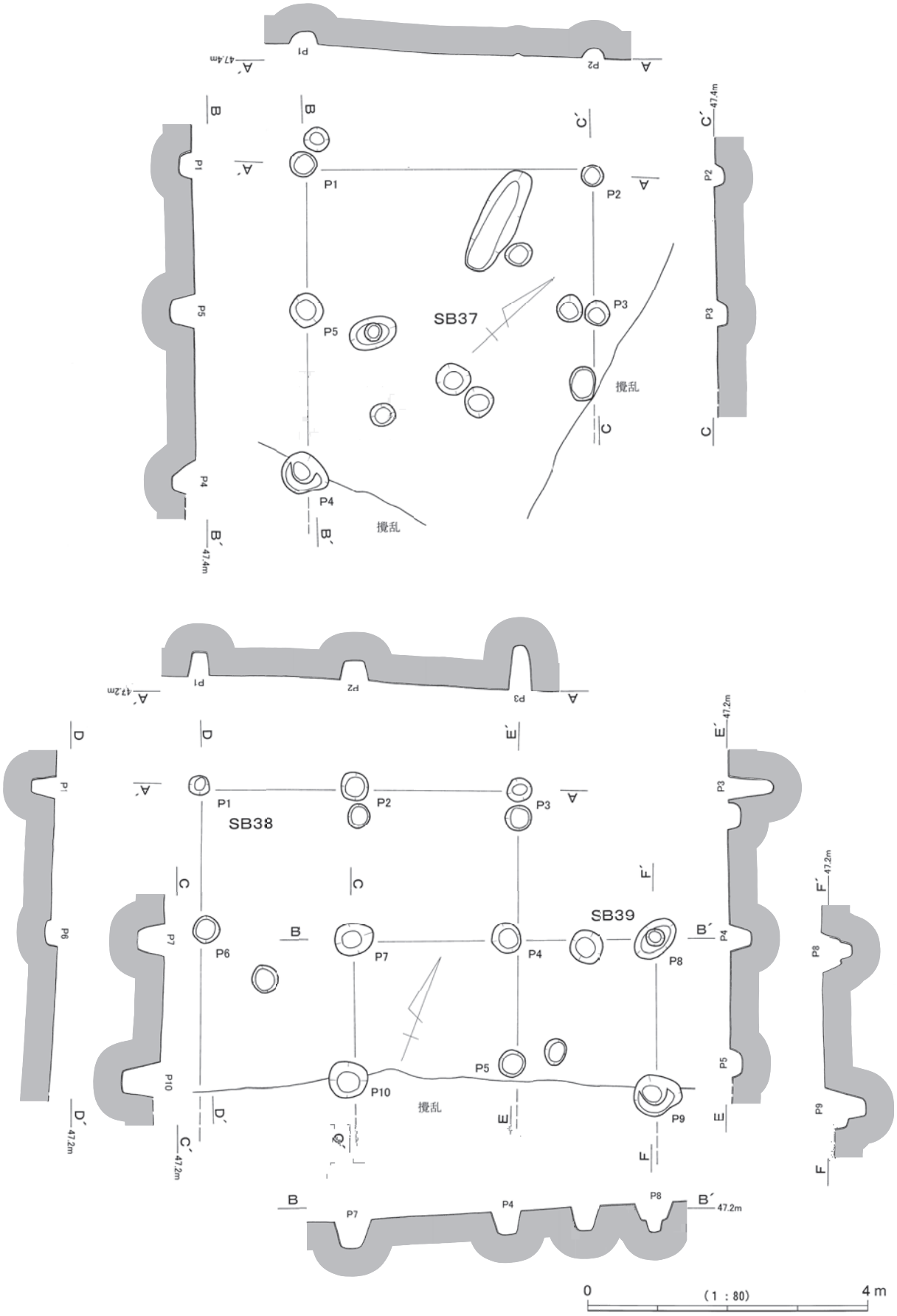
出土遺物　SB38からは、山茶碗、かわらけ、常滑甕（瀬戸美濃大窯併行期）、須恵器などの遺物が出土している。このうち、須恵器有台杯（495）を図示した。これ以外の出土遺物については小片のため図化していない。須恵器有台杯（495）は、箱形の杯部にハ字形の短い高台が貼り付けられるものである。高台径がやや狭いように感じる。遠江Ⅴ期（８世紀）に位置づけることができる。湖西産須恵器の可能性が高い。

時期　SB38は、瀬戸美濃の大窯併行期の常滑甕が出土しており、中世後期（16世紀）以降に位置づけられる可能性が高い。

（25）39号掘立柱建物（SB39，第104図，第９表，図版21）

位置　SB39は、３区東側Ｂ72グリッドに位置する。

特徴　SB39は１×１間以上、約4.4×2.2m以上の南北に長い長方形の建物（Ｐ７～P10で構成）であった可能性が高い。SB39はSB38と同一の建物を構成していた可能性があるが、後述するように柱穴の掘方の形状や根入れの深さなどがSB38とは異なることから、別の建物と判断した。



第104図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑬

SB39は主軸をN-21°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：0.5以上である。梁と桁は直交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.0ｍで、東側で2.2ｍであり、梁の北側で4.4ｍ、中央（P10-P９間）で4.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.7ｍ、深さ0.4～0.6ｍで一定していないが、根入れの深度が深い。大型の柱穴（P９）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P８・P９には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

出土遺物　SB39からは小片のため図示していないが、近世陶器、山茶碗、かわらけなどが出土している。

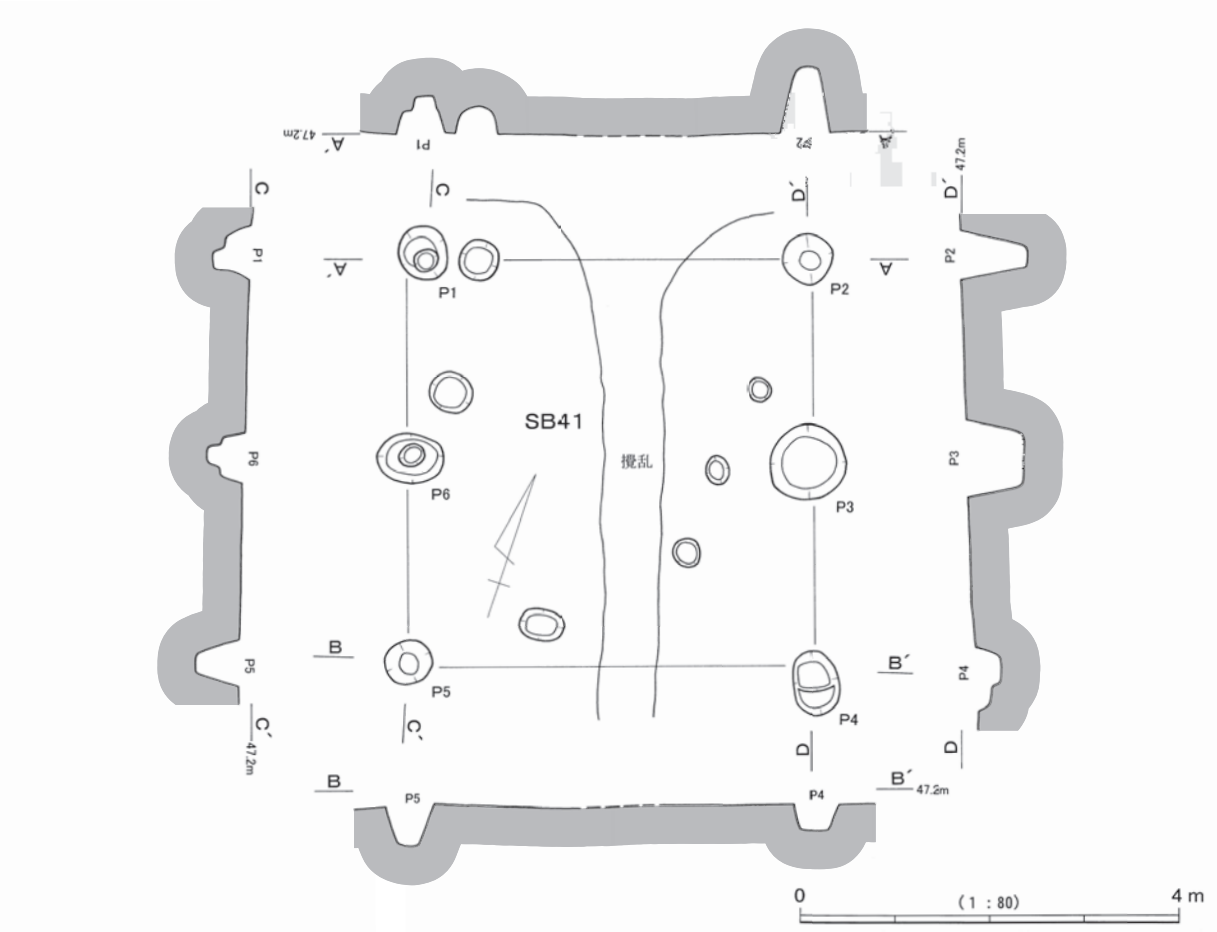
時期　SB39は出土した近世陶器から、近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

（26）41号掘立柱建物（SB41，第105図，第９表，図版22）

位置　SB41は、３区東側A72・73、B72・73グリッドに位置する。

特徴　SB41は１×２間、約4.2×4.4ｍのほぼ正方形に近い建物（P１～P６で構成）で、主軸をN-19°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。梁と桁はほぼ直交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.0m、2.3ｍで、東側で2.2m、2.2m、であり、梁の北側で4.0m、南側で4.2ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.5～0.8m、深さ0.3～0.7ｍで一定していない。根入れの深さが



第105図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑭

深い。大型の柱穴（Ｐ３）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ６には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB41は梁と桁がほぼ直交するが、柱間の距離は一定していないことから、規格性の低い建物といえる。

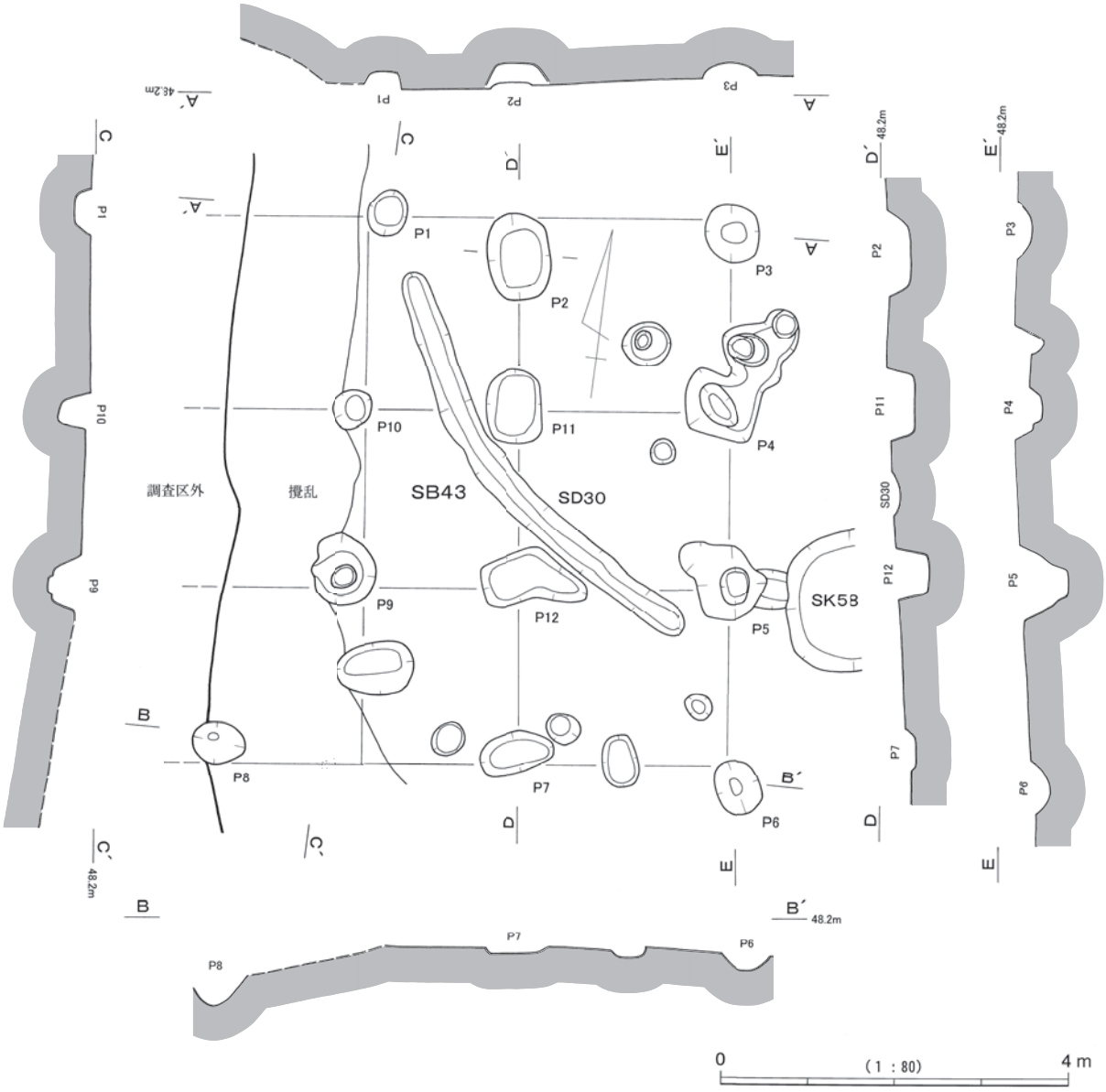
出土遺物　SB41からは近世陶器、かわらけなどが出土したが、小片のため図化していない。

時期　SB41は出土した近世陶器から近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

（27）43号掘立柱建物（SB43，第92・106図，第９・14表，巻頭図版15・16，図版22・45・53・58・66・67）

位置　SB43は、３区西側Ａ68、Ｂ68・69グリッドに位置する。

特徴　SB43は３×３間以上、約6.0×6.4ｍのほぼ正方形の総柱建物（Ｐ１～P12で構成）の可能性があるが、Ｐ２～Ｐ７については掘方の規模が大きく、他の柱穴とも形状が異なることから、Ｐ１・Ｐ３・



第106図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑮

Ｐ４・Ｐ５・Ｐ９・P10で構成される１×２間、約4.4×4.2m以上のほぼ正方形の建物である可能性も残る。

いずれにしても建物の主軸はN-９°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。

梁間に対する桁行の割合は前者の場合はほぼ１：１で、後者の場合もほぼ１：１である。梁と桁は斜交し、柱筋も通らない。

柱間の距離は、Ｐ１-Ｐ９間で、北側から2.3m、1.9mで、Ｐ２-Ｐ７間で1.8m、2.0m、2.0mであり、Ｐ３-Ｐ６間で2.0m、2.0m、2.3m、Ｐ１-Ｐ３間で1.6m、2.4m、P10-Ｐ４間で1.8m、2.4m、Ｐ９-Ｐ５間で2.0m、2.4m、Ｐ７-Ｐ６間で2.5mであり、一定していない。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形あるいは方形で、直径・長辺は0.4～1.0m、深さ0.2～0.6mで一定していない。大型の柱穴（Ｐ２・P11・P12）は柱が抜き取られた可能性があるものの、形態が異なることから柱穴ではない可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ４・Ｐ５・Ｐ９には柱の痕跡が確認でき、30cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB43は図上では総柱建物として想定可能であるが、その可能性は低く、いくつかの建物が重複している可能性がある。建物の構造からみると、規格性も低い建物といえる。

出土遺物　SB43はＰ４から瀬戸美濃（登窯）擂鉢（504）・天目茶碗（502）などが出土しているが、図中Ｐ４と書かれた上の重複する小穴を一括して取り上げており、本建物に伴わない可能性もある。これ以外の柱穴からは、Ｐ９から近世陶器が出土している。このほか須恵器、灰釉陶器、山茶碗などが出土した。

須恵器は杯蓋（496）で、半球形の天井部である。７世紀代で、湖西産須恵器の可能性が高い。灰釉陶器碗（498～501）は胎土と高台の特徴から、498が宮口窯産で、松井編年宮口Ⅲ-２期（10世紀中頃）、499～501が清ヶ谷産で、三角高台の499が松井編年清ヶ谷Ⅲ-２期（10世紀中頃）、爪形高台の500が清ヶ谷Ⅳ-１期（10世紀後半）、潰れた三角高台の501が清ヶ谷Ⅳ-４期（11世紀後半）に位置づけられる可能背が高い。山茶碗（497）は潰れた高台である。渥美湖西産で、松井編年渥美湖西Ⅲ-１期（13世紀前半）に位置づけることができる。瀬戸美濃天目茶碗（502）は、形態的特徴から藤澤編年（藤沢1987）登窯第４小期（17世紀末）に位置づけることができる。瀬戸美濃擂鉢（504）は、口縁部の特徴から登窯第８小期（18世紀末）に位置づけることができる。かわらけ（503）は硬質な焼成であり、口縁部が直線的に立ち上がること、口径が９cm未満であることから17世紀前半以降に位置づけられる可能性が高い。

時期　SB43はＰ９から出土した近世陶器から、近世（江戸時代）以降に位置づけることができ、Ｐ４から出土した瀬戸美濃擂鉢がSB43の柱穴に伴うものとすれば、18世紀末（江戸時代中期末）以降の建設とすることができる。

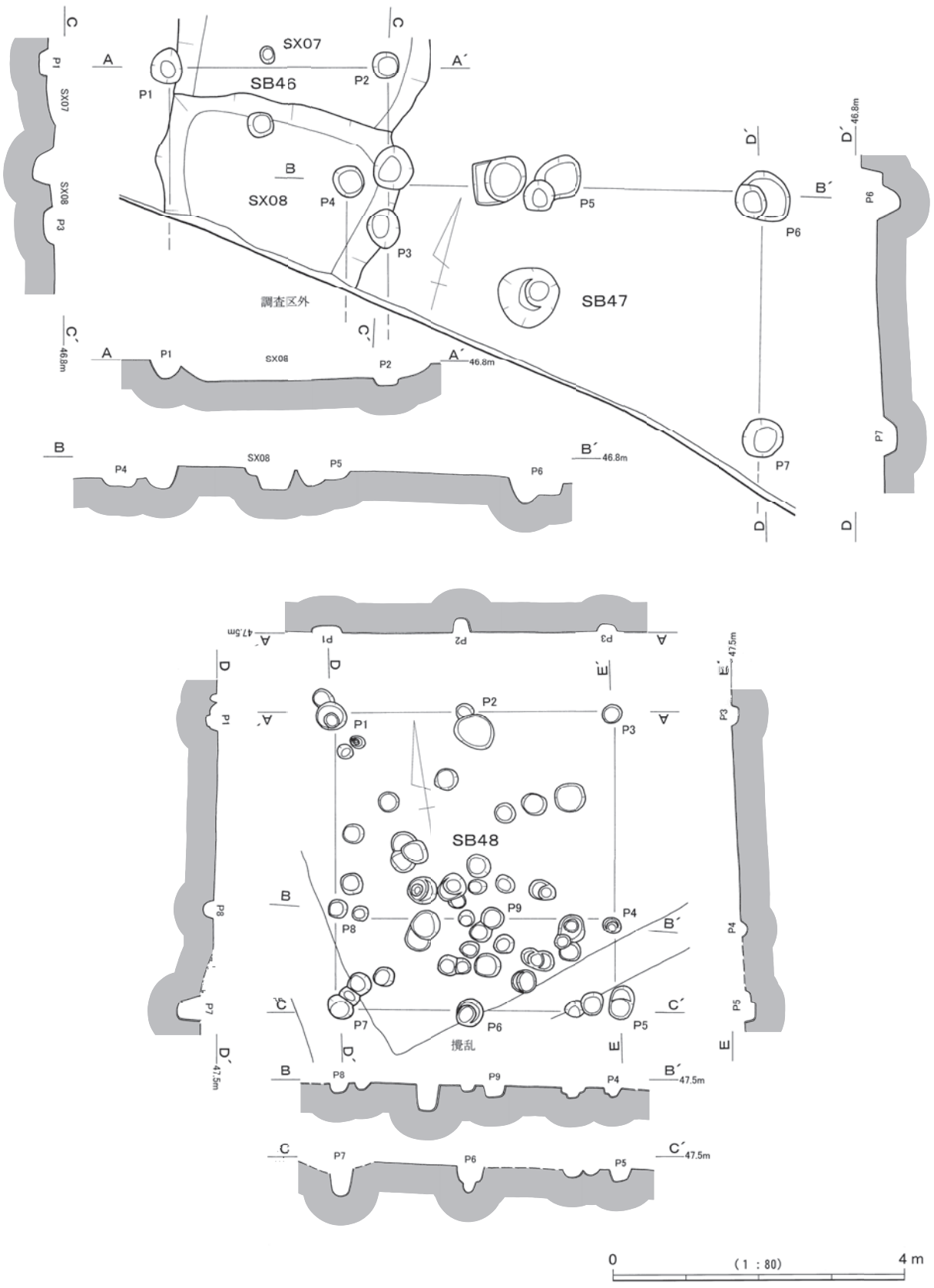
（28）46号掘立柱建物（SB46，第107図，第９表）

位置　SB46は、３区西側Ａ70・－Ａ70グリッドに位置する。SX07・08と重複関係にあるが、これらを破壊していることから、中世以降の建物の可能性が高い。

特徴　SB46は１×１間以上、約3.0×3.2m以上の南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ３で構成）である可能性が高い。主軸をN-15°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：１以上である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側は不明、東側で2.2m、1.0m以上であり、梁の北側で3.0mである。身舎柱については不明である。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.5m、深さ0.1～0.2mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB46は確認できた柱数が少ないため、確定的ではないが、構造的にみると規格性の低い建物といえる。



第107図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑯

出土遺物　SB46からの出土遺物はない。

時期　SB46は出土遺物がないことから時期を特定することができないが、SX08を破壊していることから、少なくとも平安時代後期以降で、中世以降に帰属する可能性が高い。

（29）47号掘立柱建物（SB47，第33・107図，第９・14表，図版43）

位置　SB47は、３区西側Ａ71、－Ａ70・71グリッドに位置する。SB46と重複関係にあるが、前後関係は不明である。SX08とも切合関係にあり、SX08を破壊していることから、それよりは新しいことが判明する。

特徴　SB47は１×２間、約3.4×5.8ｍの東西に長い長方形の建物か、２×２間以上の南北に長い長方形の建物（Ｐ４～Ｐ７で構成）の可能性がある。前者の場合は、主軸をN-76°-Eに向け、棟を東西に向けていた可能性が高く、後者の場合は、主軸をN-14°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。東西・南北割合は１：0.6以上である。梁と桁は直交する。柱間の距離は、Ｐ４-Ｐ６間で、西側から2.6ｍ、3.0ｍで、Ｐ６-Ｐ７間で3.4ｍであり、一定していない。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.8ｍ、深さ0.2～0.6ｍで一定していない。大型の柱穴（Ｐ６）は柱が抜き取られた可能性や攪乱された可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB47は確認した柱数が少ないため確定的ではないが、建物の構造からみると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB47の出土遺物は灰釉陶器、須恵器などが主である。このほか調査段階で遺構番号が重複してしまった柱穴（SB47-Ｐ７）については、重複する別の小穴からの出土の可能性が排除できないが、近世陶器が出土している。またＰ４から須恵器が出土している。この須恵器箱形杯（第33図81）を図示した。底部は平底で、口縁部は逆ハ字形に直線的に立ち上がる。湖西産で、遠江Ⅵ期（９世紀前半）に位置づけることができる。

時期　SB47は、調査段階で小穴番号が重複しており、この重複する小穴番号から近世陶器が出土しているため、それがSB47-Ｐ７出土であるとすれば、近世以降、それが別の小穴だとすれば、山茶碗以降の遺物が出土していないことから、SB47は平安時代後期まで遡る可能性がある。

（30）48号掘立柱建物（SB48，第107図，第９表）

位置　SB48は、１区Ｃ76・77、Ｄ76グリッドに位置する。

特徴　SB48は２×２間、約3.8×4.0ｍのほぼ正方形の間仕切りのある建物あるいは、南側に庇の付く建物（Ｐ１～Ｐ９で構成）、あるいは、Ｐ８・Ｐ９・Ｐ４が当建物に伴わず、１×２間の建物（Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５～Ｐ７で構成）の可能性がある。前者の場合は主軸をN-81°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。後者の場合は主軸をN-９°-Eに向け、棟を南北に向けていた可能性が高い。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、Ｐ１-Ｐ３で、西側から1.8ｍ、2.0ｍで、Ｐ８-Ｐ４で2.2ｍ、1.6ｍ、Ｐ７-Ｐ５間で1.8ｍ、2.0ｍであり、Ｐ１-Ｐ３間とＰ７-Ｐ５間はほぼ一致する。Ｐ１-Ｐ７で北側から2.6ｍ、1.4ｍ、Ｐ２-Ｐ６間で2.8ｍ、1.3ｍ、Ｐ３-Ｐ５間で3.0ｍ、1.0ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。柱間の距離から判断すると、Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５～Ｐ７で構成される南北にやや長いほぼ正方形の建物の可能性が高い。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4ｍ、深さ0.1～0.4ｍで一定していない。やや大型の柱穴（Ｐ５）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB48は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB48-Ｐ６から山茶碗片が出土したが、小片のため図示していない。

時期　SB48からは山茶碗が出土していることから中世前期（鎌倉時代）以降に帰属する可能性が高い。

（31）49号掘立柱建物（SB49，第92・108図，第９・14表，巻頭図版11，図版23・27・45）

位置　SB49は、１区Ｃ76・77グリッドに位置する。

特徴　SB49は１×２間、約2.5×4.4ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-35°-Eに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.8である。梁と桁はやや斜交し、桁の柱筋はずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.9ｍ、2.2ｍで、東側で2.2ｍ、2.4ｍであり、梁の北側で2.5ｍ、南側で2.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6ｍ、深さ0.2～0.4ｍで一定していない。大型の柱穴（Ｐ１・Ｐ２）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ３・Ｐ４には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB49は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB49からはＰ３から山茶碗、Ｐ４から灰釉陶器などが出土しているが、多くが小片であり図化が困難であることから、このうちＰ４から出土した灰釉陶器碗（505）を図化した。505は大型の碗で、体部は外上方に向かって内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収められており、外反しない。清ヶ谷産で、松井編年清ヶ谷Ⅳ-３期（11世紀後半）に位置づけることができる。

時期　SB49は、Ｐ３から出土した山茶碗から、中世前期以降に位置づけることができる。

（32）51号掘立柱建物（SB51，第108図，第９表）

位置　SB51は、１区Ｂ77、Ｃ76・77グリッドに位置する。

特徴　SB51は１×３間、約3.0×7.0ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ８で構成）で、主軸をN-38°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：2.3である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋はずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.4ｍ、1.8ｍ、2.8ｍで、東側で2.4ｍ、1.9ｍ、2.6ｍであり、梁の北側で3.0ｍ、南側で2.8ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.5ｍ、深さ0.2～0.4ｍでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ７には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

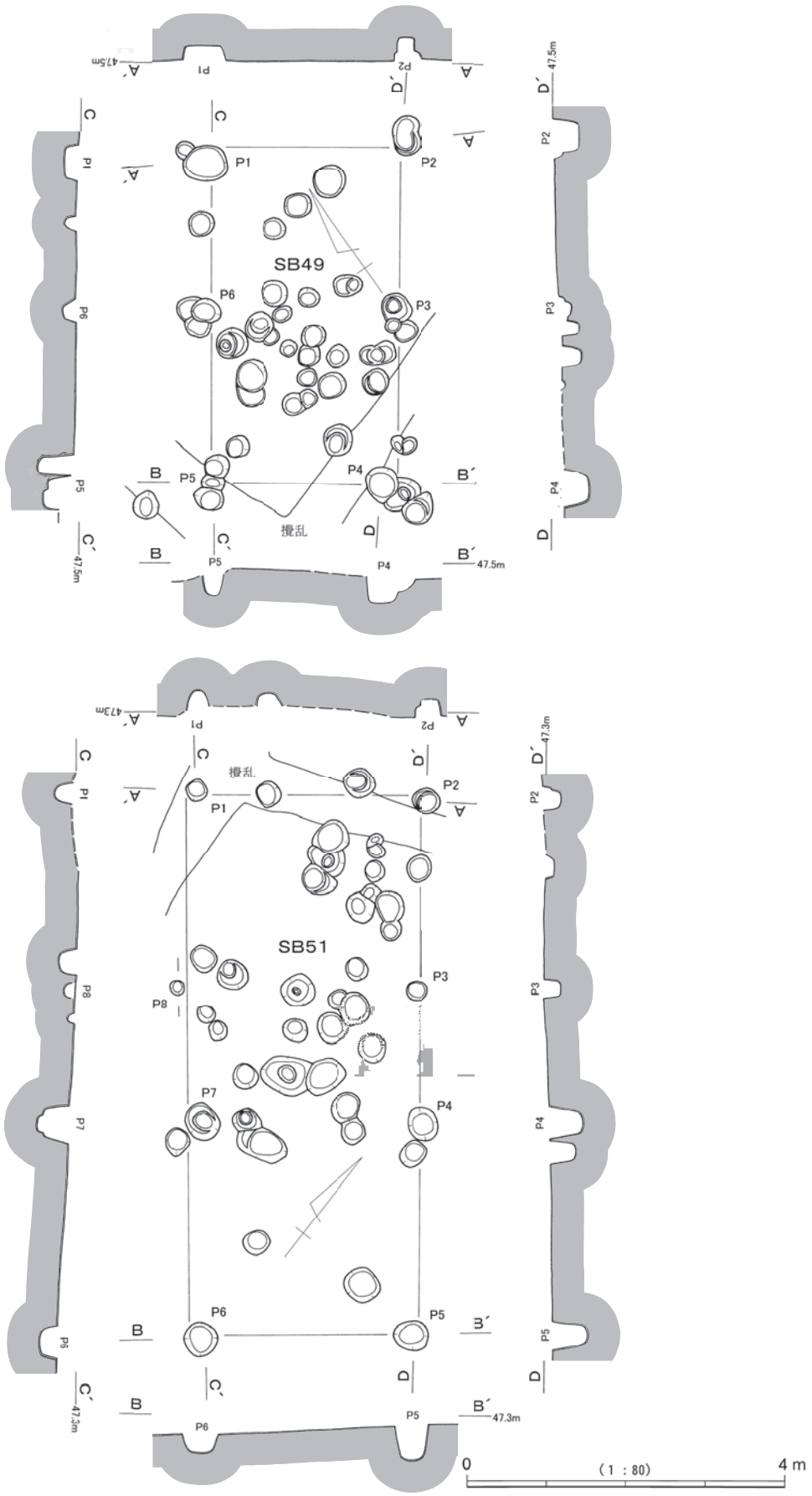
出土遺物　SB51からは、山茶碗、灰釉陶器片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　SB51はかわらけの時期を特定することは困難であるが、少なくとも山茶碗の時期（13世紀前半）以降であることは間違いなく、中世以降に建設された可能性が高い。

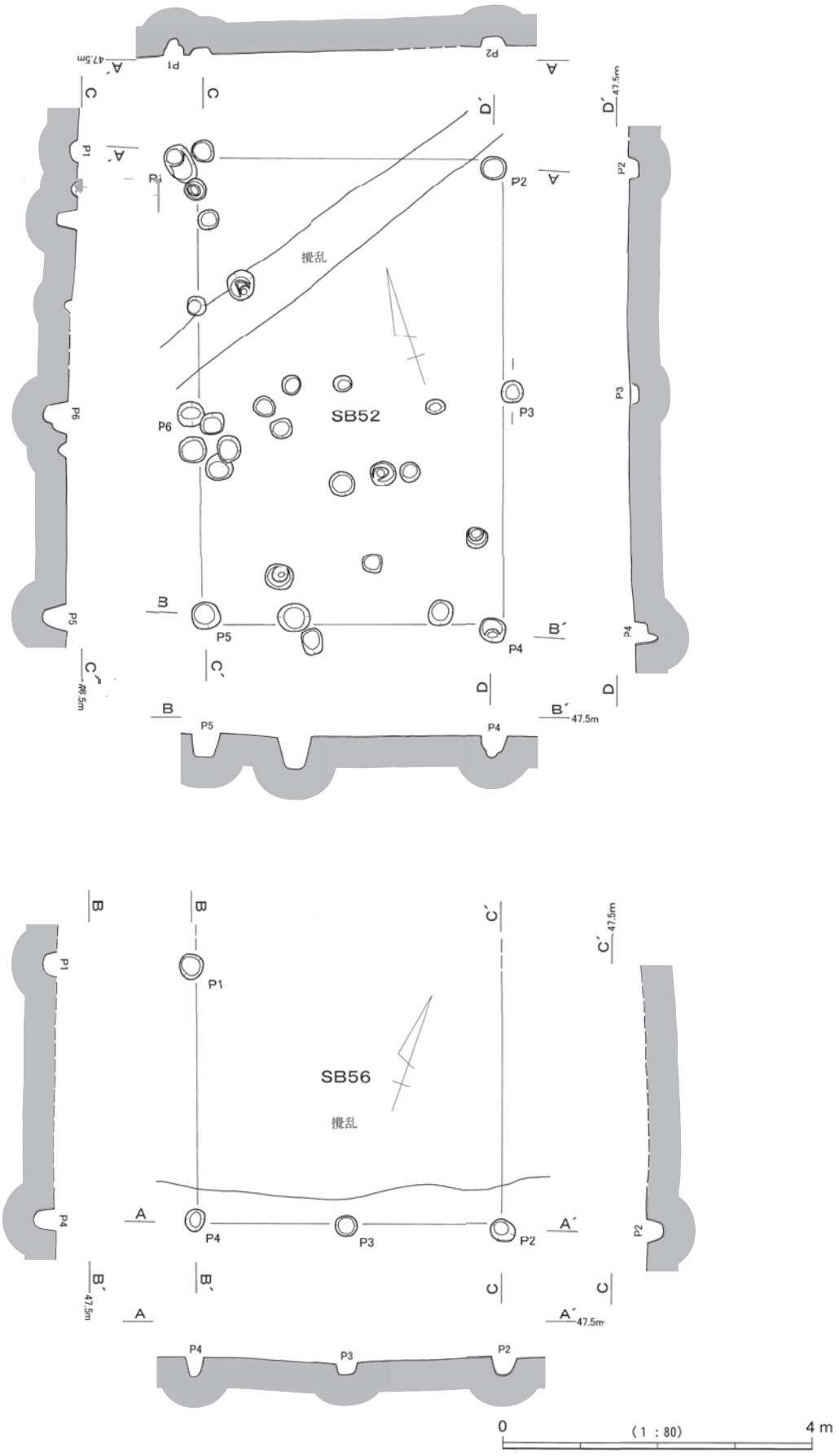
（33）52号掘立柱建物（SB52，第109図，第９表）

位置　SB52は、１区Ｃ77グリッドに位置する。

特徴　SB52は１×２間、約4.0×6.0ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-17°-Eに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁は斜交し、桁の柱筋は東西ともにずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から3.4ｍ、2.6ｍ、で、東側で3.0ｍ、3.0ｍであり、梁の北側で4.0ｍ、南側で3.8ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に



第108図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑰



第109図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑱

確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴（P１）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P４には柱の痕跡が確認でき、10cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB52は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

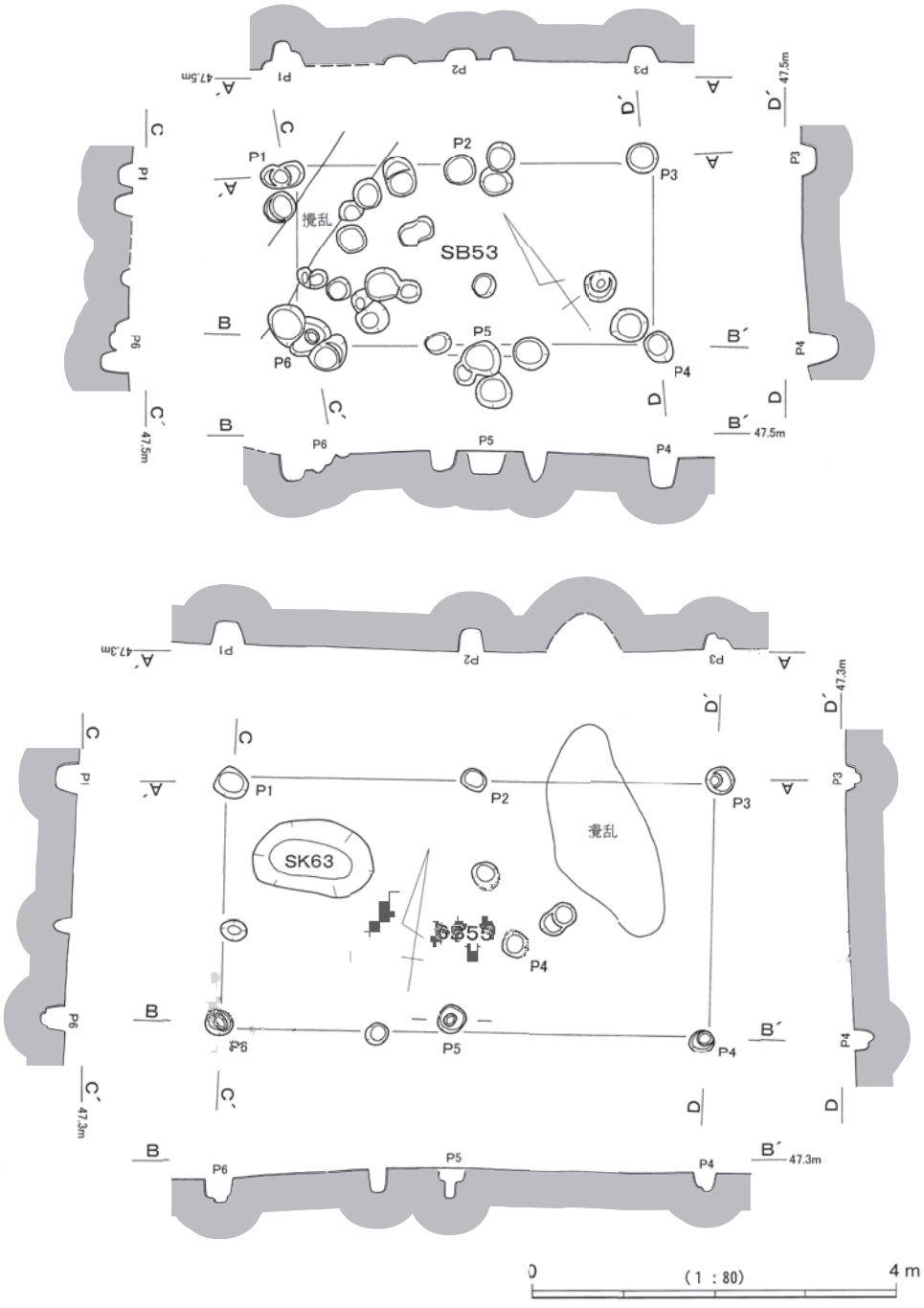
出土遺物　SB52からは、かわらけ、灰釉陶器などが出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　SB52はかわらけが出土していることから、中世後期（戦国時代）以降に位置づけられる可能性が高い。

（34）53号掘立柱建物（SB53，第92・110図，第９・14表，図版24・53）

位置　SB53は、１区C76・77グリッドに位置する。

特徴　SB53は１×２間、約4.0×2.0mの建物（P１～P６で構成）で、主軸をN-54°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：２である。梁と桁は斜交する。柱筋は通らない。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.0m、2.0mで、南側で1.8m、2.0mであり、梁の西側で1.8m、東側で2.0



第110図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑲

ｍである。おおむね2.0ｍを基準としている。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.2～0.4ｍで一定していない。

SB53は建物の構造からみると、柱間の距離がほぼ２ｍと同一であるが、梁と棟が斜交するなど、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB53からは、山茶碗とかわらけ、灰釉陶器などが出土したが小片のため多くが図化できず、山茶碗（506）を図示した。506は直線的に逆ハ字形に立ち上がる口縁部で、口縁部はやや外反させる。胎土および形態的な特徴から、渥美湖西産で、松井編年渥美湖西Ⅲ－１期（13世紀前半）に位置づけることができる。直線的に立ち上がる形態は、尾張（常滑，知多産）産山茶碗の影響を受けている可能性がある。

時期　SB53は、出土した山茶碗から最も遡って中世前期（13世紀前半）以降に位置づけられるが、北垣遺跡出土のかわらけは16世紀以降に位置づけられるものしか出土していないことから判断して、16世紀以降に位置づけられる可能性が高い。

（35）55号掘立柱建物（SB55，第110図，第９表）

位置　SB55は、１区Ｂ77・Ｃ77グリッドに位置する。

特徴　SB55は１×２間、約2.8×5.4ｍの東西に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-81°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.9である。梁と桁は斜交し、柱筋はずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.6m、2.8ｍで、南側で2.6m、2.8ｍであり、梁の西側で2.7m、南側で2.8ｍである。身舎柱は大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.2～0.3ｍで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ３～Ｐ６には柱の痕跡が確認でき、約10cmの丸太が使用されたと想定できる。

出土遺物　SB55からはかわらけなどが出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　北垣遺跡では中世後期（戦国時代）以降にかわらけの出土量が多くなることを考慮すれば、SB55は中世後期以降の建設とすることができる。

（36）56号掘立柱建物（SB56，第109図，第９表）

位置　SB56は、１区Ｂ76グリッドに位置する。

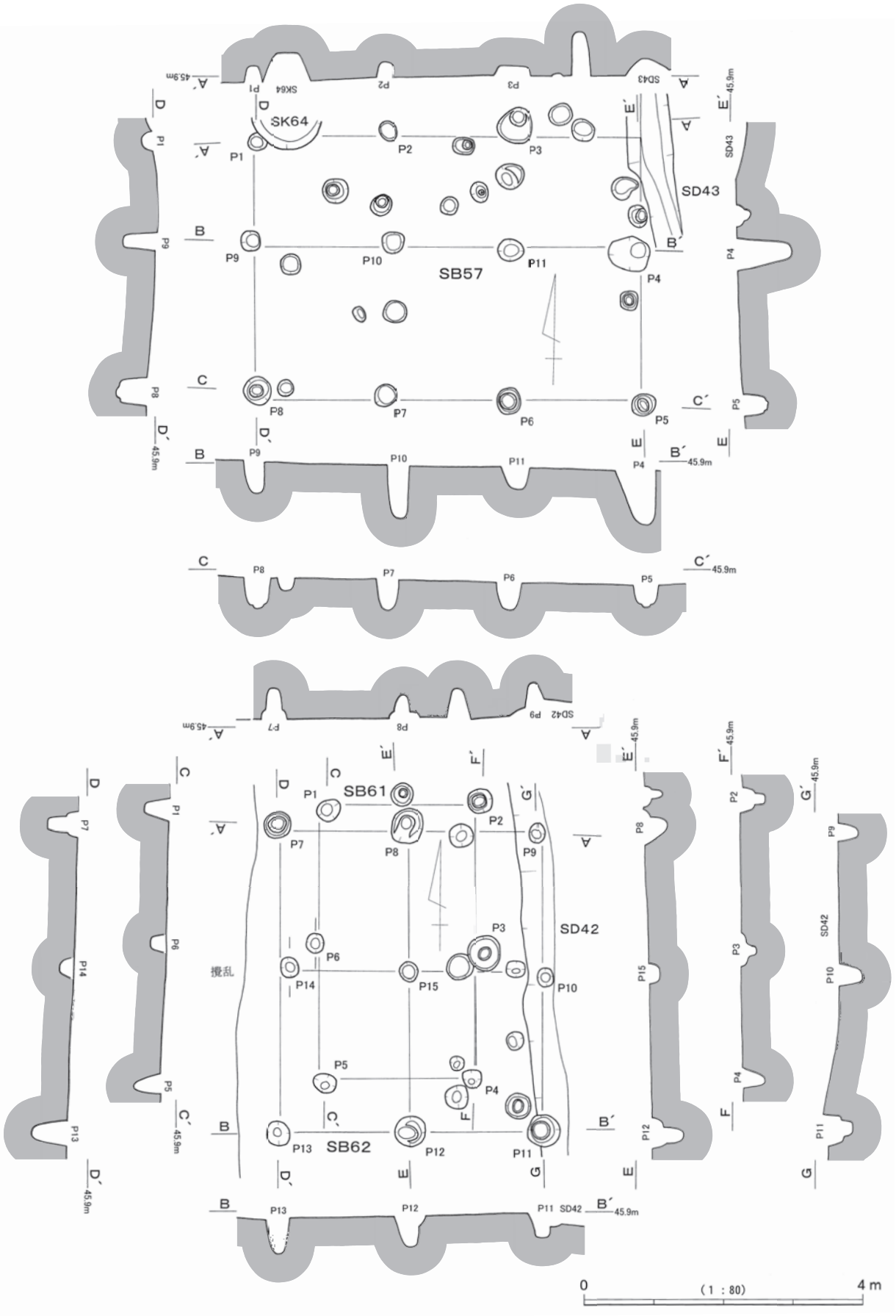
特徴　SB56は２×１間以上、約4.0×3.3ｍ以上の南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ４で構成）で、主軸をN-20°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：0.8以上である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、3.3ｍであり、梁の北側は不明、南側で西側から2.0m、2.0ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.3m、深さ0.2～0.3ｍでほぼ一定している。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB56は建物の構造からすると、やや規格性のある建物といえる。

出土遺物　SB56からの出土遺物はない。

時期　SB56は単独で立地しており、遺物も出土していないことから、時期については特定することは困難である。



第111図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑳

（37）57号掘立柱建物（SB57，第111図，第９表，図版24・25）

位置　SB57は、１区－A76・77グリッドに位置する。

特徴　SB57は２×３間、約3.8×5.6ｍの東西に長い長方形建物（P１～P11で構成）で、１×３間の建物に庇が取り付けられる建物の可能性がある。主軸をN-89°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.6（１：2.5）である。梁と桁はほぼ直交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.9m、1.8m、1.8m前後で、中央で2.0m、1.7m、1.8mで、南側で1.8m、1.8m、2.0mあり、梁の西側で1.4m、2.2m、P２-P７で1.6m、2.2m、P３-P６で1.8m、2.2m、東側で1.6m、2.2mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.2～0.8mでほぼ一定している。大型の柱穴（P４）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P５・P６・P８には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

おおむねP９-P４とP８-P５は柱筋も通り、身舎柱も正対する位置に所在することから、SB57は規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB57からは土師器、土師質鍋、かわらけと思われる土器が出土したが、小片のため図化できない。

時期　SB57からは、土師器片が主に出土しているが、中にかわらけあるいは土師質鍋片と想定されるような小片もあることから、それらをかわらけ（土師質鍋）と判断すれば、基本的に中世後期以降の可能性が高い。一方、かわらけなどではない場合は、平安時代以前に位置づけられる可能性もある。

（38）58号掘立柱建物（SB58，第112図，第９表，図版24・25）

位置　SB58は、１区－A76・77グリッドに位置する。

特徴　SB58は１×２間、約4.0×4.0ｍのほぼ正方形に近い建物（P１～P６で構成）で、主軸をN-０°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：１である。梁と桁は斜交する。桁の身舎柱は柱筋が通らない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.0m、1.8mで、東側で2.2m、1.8mであり、梁の北側で3.9m、南側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.5m、深さ0.2～0.5mで一定していない。大型の柱穴（P４）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P２・P５・P６には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB58は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

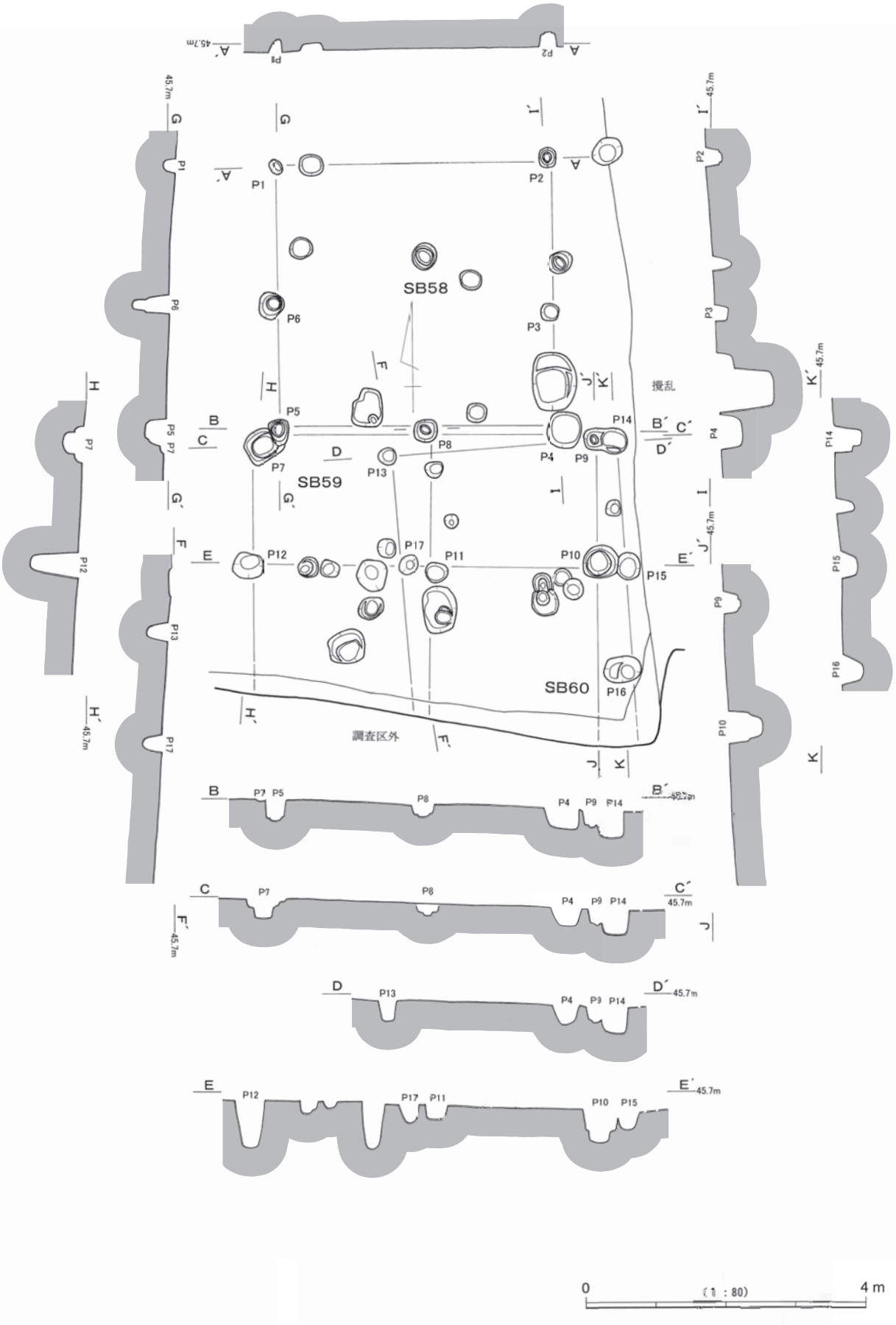
出土遺物　SB58からはかわらけなどが出土しているが、小片のため図示していない。

時期　SB58はかわらけが出土しているが小片のため時期を決定するのは困難であり、中世後期以降に位置づけたい。

（39）59号掘立柱建物（SB59，第112図，第９表，図版24・25）

位置　SB59は、１区-A76・77、-B76・77グリッドに位置する。

特徴　SB59は２×１間以上、約5.0×1.8m以上の総柱建物（P７～P12で構成）か、１間×２間の東西に長い建物である可能性がある。前者の場合は主軸をN-０°-Wに向け、棟は南北あるいは東西に向けていた可能性が高く、後者の場合は主軸をN-90°-Eに向け、棟を東西に向けていた可能性がある。南側は調査区外のため不明である。



第112図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉑

梁間に対する桁行の割合は１：0.4以上である。梁と桁はやや斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.8ｍで、東側で1.8ｍであり、梁の北側で西側から2.4m、2.4m、南側で2.6m、2.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.3～0.7ｍで一定していない。大型の柱穴（Ｐ７）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ７～P10には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB59は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB59は、Ｐ７から近世陶器、P10から鉄滓、その他の柱穴から土師器などが出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

時期　SB59はＰ７から出土した遺物から、近世以降に位置づけられる可能性があるが、Ｐ７は柱穴と小穴が切合関係にあり、近世陶器はSB59を壊した時の遺物の可能性が残るため、SB59についてはもう少し古い可能性もある。

（40）60号掘立柱建物（SB60，第112図，第９表，図版24・25）

位置　SB60は、１区－Ａ77・－Ｂ77グリッドに位置する。

特徴　SB60は１×２間以上、約3.2×3.4m以上の南北に長い建物（P13～P17で構成）で、主軸をN-５°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：１以上である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.6ｍで、東側で1.8m、1.6ｍであり、梁の北側で3.2ｍである。身舎柱は対称位置に確認できず、大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.2～0.4ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB60は建物の構造からみると、大きく身舎柱がずれるなど規格性の低い建物といえる。また、P16に対応する身舎柱が存在しないことから、掘立柱建物ではない可能性も残る。

出土遺物　SB60からは、かわらけ片が出土したが、小片のため図化していない。

時期　SB60は、出土したかわらけが小片のため時期を特定することが難しい。中世後期以降に位置づけられる可能性が高い。

（41）61号掘立柱建物（SB61，第92・111図，第９・17表，巻頭図版７，図版25・26・75）

位置　SB61は、１区－Ａ78・79グリッドに位置する。

特徴　SB61は１×２間、約2.2×4.0ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-０°-Wに向け、棟は南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.8である。梁と桁は斜交し、柱筋は通らない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.9m、2.0ｍで、東側で2.2m、1.8ｍであり、梁の北側で2.2m、南側で2.2ｍである。身舎柱は対称位置に確認できず、大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.2～0.4ｍで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ２・Ｐ３には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB61は建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB61-Ｐ１からは鉄滓（第92図507）が出土した。

時期　SB61は出土した鉄滓から中世以降に位置づけられる可能性が高く、近接する中屋敷遺跡の事例からすれば鉄滓は近世に位置づけられる可能性があることから、中世以降近世に位置づけたい。

（42）62号掘立柱建物（SB62，第111図，第９表，巻頭図版７，図版25～27）

位置　SB62は、１区－Ａ78・79、－Ｂ78・79グリッドに位置する。

特徴　SB62は２×２間、約3.8×4.4ｍのやや南北に長い長方形の総柱建物（Ｐ７～P15で構成）で、主軸をN-０°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.2である。梁と桁はほぼ直交し、柱筋について梁はほぼ一直線であるが、桁はややずれる。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.1m、2.3ｍで、東側で2.1m、2.2ｍであり、梁の北側で1.8m、1.9m、南側で1.9m、1.9ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。なお、P10・P14が柱筋からずれているとともに正対しないことから判断すれば、SB62は後述するSB63のような、Ｐ７-Ｐ９・P11-P13で構成される１×２間の建物である可能性もある。その場合は主軸をN-90°-Wにとり、棟を東西に向ける建物である可能性がある。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.5m、深さ0.3～0.5ｍでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。P11で柱穴底から石材が１点出土しているが、根固め石かどうか判然としない。木柱は残存していないが、Ｐ７・11には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB62は身舎柱が正対しないものの、柱間が桁と梁でおおよそ一致することから、SB62はやや規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB62からは、P12からかわらけが出土したが、小片のため図化していない。

時期　SB62は、出土したかわらけは小片のため時期を特定できないが、中世後期～近世の一時期に位置づけられる可能性が高い。

（43）63号掘立柱建物（SB63，第113図，第９表）

位置　SB63は、１区Ａ79・80、－Ａ79・80グリッドに位置する。

特徴　SB63は１×２間（Ｐ１-Ｐ６で構成）あるいは２×２間（Ｐ１～Ｐ７で構成）、約3.8×4.2ｍのほぼ正方形に近い建物である。身舎柱Ｐ７に対応する柱が確認できないことから、前者の可能性が高い。

主軸をN-14°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.1である。梁と桁は斜交する。柱筋はほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.7m、2.1ｍで、南側で2.0m、1.8ｍであり、梁の西側で北側から4.2ｍか2.0m、2.2m、東側で4.0ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できず、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.2～0.3ｍで一定していないが、根入れの深度は（標高）はほぼ一致している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１-Ｐ５には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB63は建物の構造からみると、やや規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB63からの出土遺物はない。

時期　SB63は遺物が出土していないことから、時期を特定することが困難である。

（44）64号掘立柱建物（SB64，第113図，第９表，図版26）

位置　SB64は、１区－Ａ79・80、－Ｂ80グリッドに位置する。

特徴　SB64は１×３間、約4.6×5.7ｍの東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ８で構成）で、主軸をN-83°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.2である。梁と桁は直交し、柱筋はほぼ一直線である。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.9m、1.8m、2.0

ｍで、南側で2.1m、1.8m、1.8mであり、梁の西側で4.6m、南側で4.6mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.2～0.3mで、根入れの深さ（標高）はほぼ一定している。大型の柱穴（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、それぞれの柱穴には柱の痕跡が確認でき、15～20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB64は梁と桁がほぼ直交すること、梁と桁の柱間の間隔が、ほぼ一定であること、身舎柱が正対することなどから判断して、規格性の高い建物といえる。北垣遺跡の掘立柱建物の中では数少ない規格性の高い建物であることから、やや特殊な位置づけがなされていた建物である可能性が高い。

出土遺物　SB64からの出土遺物はない。

時期　SB64は出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

（45）65号掘立柱建物（SB65，第113図，第９表）

位置　SB65は、１区－Ａ80・－Ｂ80グリッドに位置する。

特徴　SB65は１×３間、約2.1×7.4mの東西に長い長方形の建物（Ｐ９～P16で構成）で、主軸をN-85°-Eに向け、棟がある場合はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：3.5である。梁と桁は斜交し、柱筋もずれる。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.2m、2.1m、2.8mで、南側で2.6m、2.0m、2.8mであり、梁の西側で2.0m、東側で2.1mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.1～0.4mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P10・P14には柱の痕跡が確認でき、10～15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB65は建物の構造からみると、規格性の低い建物であるといえる。柱間の間隔が一定しないこと、柱筋がずれることから、掘立柱建物かどうかも明確ではない。

出土遺物　SB65からの出土遺物はない。

時期　SB65からは出土遺物がなく、時期を特定することは難しい。

（46）68号掘立柱建物（SB68，第114図，第９表）

位置　SB68は、１区－Ａ82グリッドに位置する。

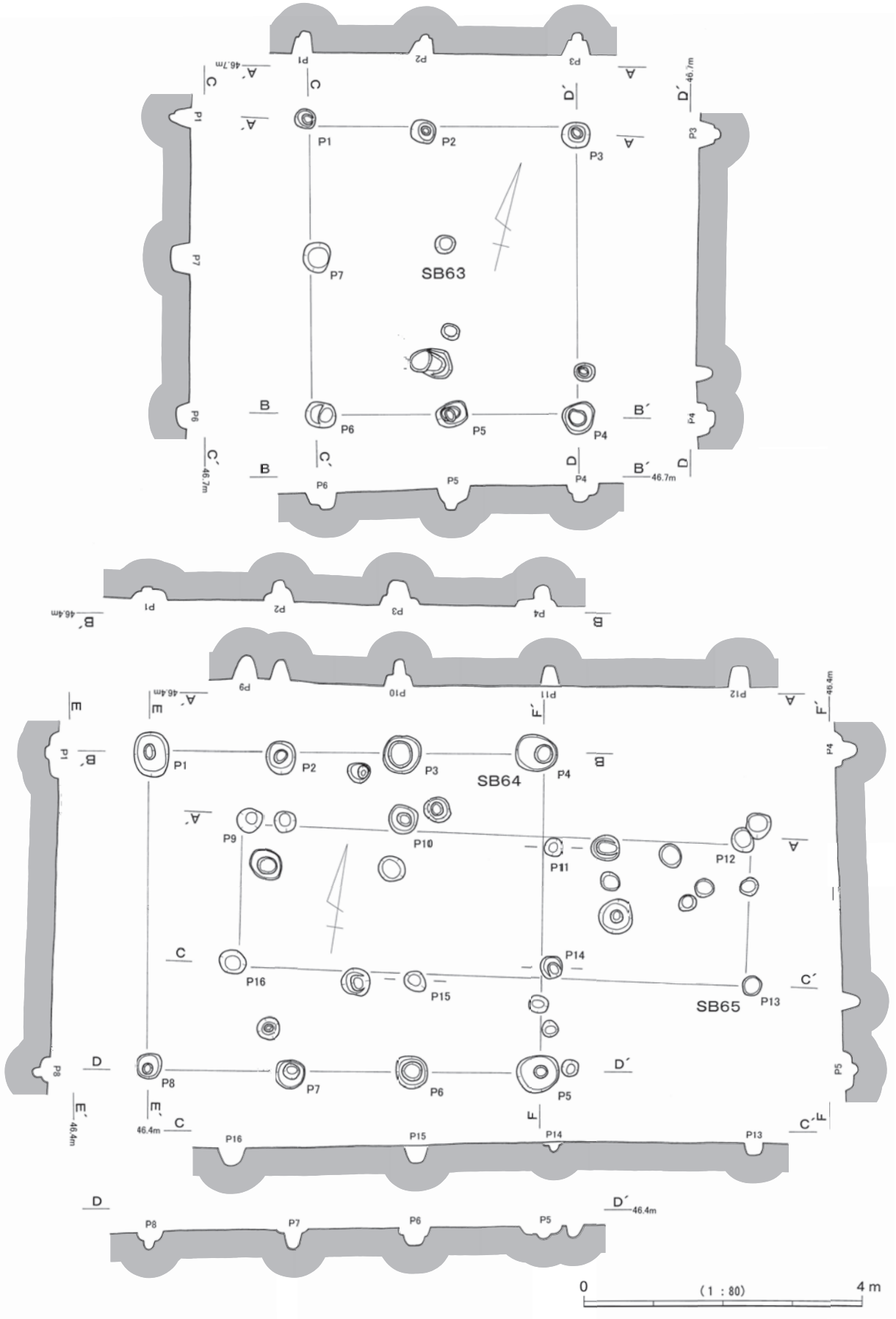
特徴　SB68は２×１間以上、約5.1×2.8m以上の東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ４で構成）の可能性が高く、その場合は主軸をN-54°-Eに向け、棟がある場合には東西（西北西－東南東）に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：0.5以上である。梁と桁はほぼ直交するが、柱筋はややずれる。柱間の距離は、梁の西側で、北側から2.1m、3.0mで、桁の北側で2.8m、南側で不明である。身舎柱については、桁側は攪乱のためＰ２の対称位置に確認できない

柱穴はやや不整形な円形あるいは隅丸方形で、直径は0.3～0.4m、深さ0.3～0.4mでほぼ一定しているが、根入れの深さが異なる。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４には柱の痕跡が確認でき、10～15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB68は建物の構造からみると、やや規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB68からの出土遺物はない。

時期　SB68は出土遺物がないことから、時期を特定することはできない。



第113図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉒

（47）69号掘立柱建物（SB69，第114図，第９表，図版27）

位置　SB69は、１区－Ｂ81・82、－Ｃ81・82グリッドに位置する。

特徴　SB69は１×２間、約2.4×3.5ｍの東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-70°-Wに向け、棟がある場合にはほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.5である。梁と桁は斜交し、柱筋もずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.8ｍ、1.7ｍで、東側で1.6ｍ、1.6ｍであり、梁の西側で2.4ｍ、南側で2.4ｍである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.4ｍ、深さ0.2～0.6ｍで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ６には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB69は建物の構造からすると、規格性の低い建物である。小型の建物であることから、簡易な建物であった可能性が高い。

出土遺物　SB69からの出土遺物はない。

時期　SB69は出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

（48）70号掘立柱建物（SB70，第92・114図，第９・14表）

位置　SB70は、１区南東隅、－Ｂ82・－Ｃ82グリッドに位置する。

特徴　SB70は１×１間（Ｐ１-Ｐ３・Ｐ５で構成）、あるいは１×２間（Ｐ１-Ｐ５で構成）、約2.8×4.9ｍの東西に長い長方形の建物で、主軸をN-75°-Eに向け、棟がある場合にはほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.8である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から4.9ｍで、南側で2.4ｍ、2.4ｍであり、梁の西側で2.7ｍ、東側で2.8ｍである。身舎柱は対称位置に確認できない。Ｐ４の対称位置にあるべき身舎柱が存在しないことから、建物の構造は前者の可能性が高い。

柱穴はやや不整形な円形あるいは隅丸方形で、直径は0.4～0.5ｍ、深さ0.3～0.7ｍで一定していない。根入れの深さは深い。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ５には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

出土遺物　SB70-Ｐ２・Ｐ５から近世陶磁器が出土しているが、青磁１点（508）のみ図化した。508は、肥前青磁である。口縁部を内側に向けて突起させている。香炉であろうか。

時期　SB70は出土した遺物から、近世以降に位置づけることができる。

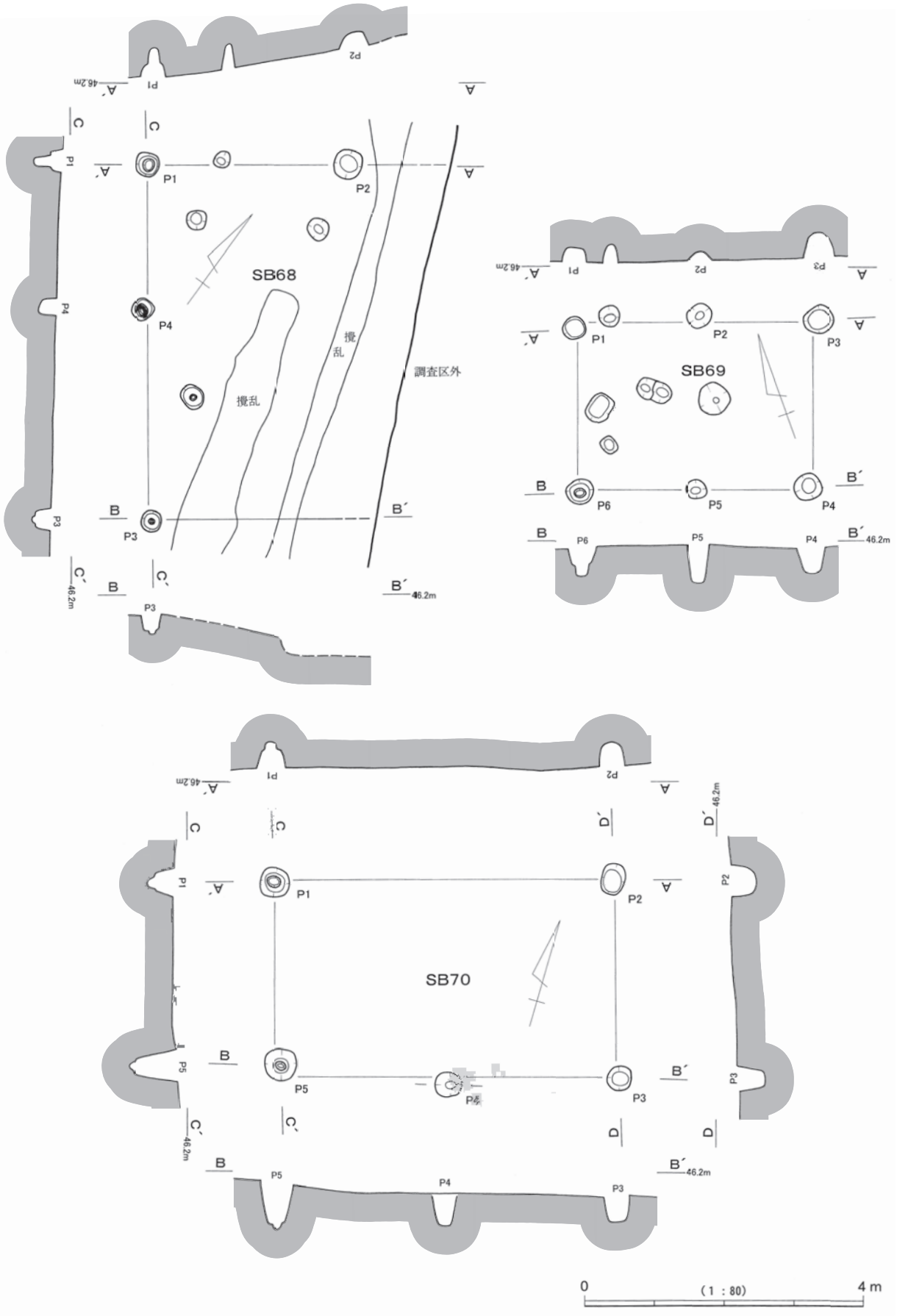
（49）５号掘立柱建物（SB05，第34図，第９表）

位置　SB05は、２区Ｇ73・H73グリッドに位置する。

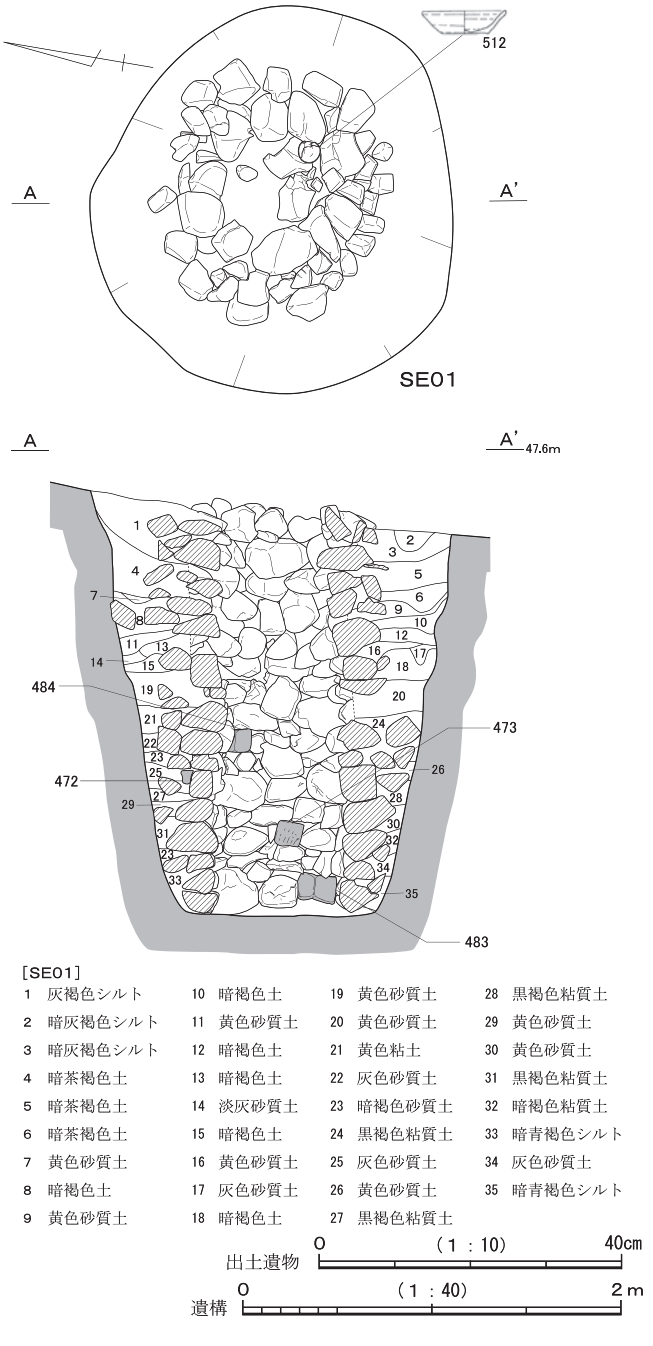
特徴　SB05は１×２間、約3.6×7.6ｍの南北に長い長方形の建物（Ｐ１-Ｐ５で構成）で、主軸をN-12°-Eに向け、棟がある場合にはほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：2.1である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から3.6ｍ、4.1ｍで、東側で4.0ｍ、3.6ｍであり、梁の北側で3.6ｍ（推定）、南側で3.6ｍである。身舎柱は対称位置に確認できない。

柱穴はやや不整形な円形あるいは隅丸方形で、直径は0.3～0.8ｍ、深さ0.2～0.3ｍで一定していない。大型の柱穴（Ｐ２・Ｐ４）は柱の抜き取りが行われた可能性がある。根入れの深さは浅い。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ３・Ｐ５には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

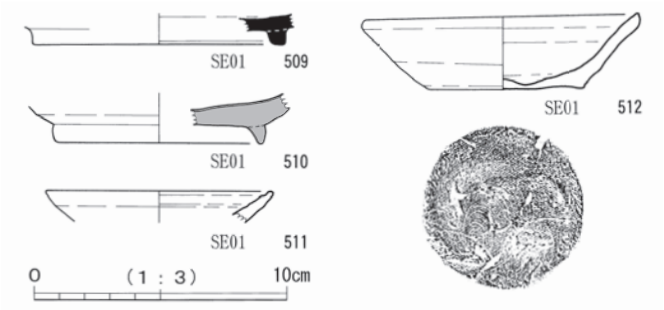
出土遺物　SB05からの出土遺物はない。



第114図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉓



第115図　井戸　実測図



第116図　井戸出土遺物実測図

時期　SB05は遺物が出土していないことから、時期を特定することはできない。

3　井戸

井戸は１基のみ確認した。北垣遺跡の今回の調査で確認した唯一の井戸である。調査面積の割に井戸の数が少ないことから、調査区より南側に井戸が存在している可能性が高いか、近くに湧水地点があり、井戸を作る必要がなかったなどの理由が想定できる。

（１）SE01（第115・116図，第11・14表，巻頭図版７，図版30・63）

位置　SE01は、３区西側、Ｂ70グリッドに位置する。

特徴　SE01の掘方内に石組を行い井戸とした石組井戸である。

SE01の掘方は、やや不整形な円形で、断面は逆長台形である。規模は上端で東西約2.1m、南北約1.8m、下端で直径約1.1m、深さ約2.3mである。

井戸は河原石や石塔の部材を用いて内部が円形になるように組み上げられた石組で、小口面を内側に向けて積み上げたものが多いが、長手や平手を内側に向けたものもある。土層を観察すると、１段に対しおおよそ１～２層が対応しており、１段ずつ裏込めを行いながら石を積んでいったことがわかる。裏込めは土砂とともに河原石を入れている場所もある。井戸は円形で、その内法は上部で直径約0.5m、下部で約0.6mであり、下部から上部に向かってやや持ち送られながらほぼ垂直に積み上げられたことがわかる。井戸の石組は現状で16段残存している。使用された石材は10～30cm程度であり、20～30cmのものを壁に、それ以下のものを裏込めに使用する傾向にある。

出土遺物　井戸内での出土遺物は、須恵器、灰釉陶器、かわらけ、近世陶器が出土した。このうち、須恵器、灰釉陶器、かわ

らけを図示した。このほか、石組に再利用された石塔の部材（472・473・483・484）がある。なお、石塔については、第５節で報告した。

須恵器は有台杯（509）で、高台部分のみ出土した。遠江Ⅴ期に位置づけられる可能性が高い。湖西産須恵器である可能性が高い。

灰釉陶器は碗（510）である。低い三日月高台である。底面は糸切り後ヘラ削り調整が行われている。510は胎土の特徴から清ヶ谷産で、高台の特徴から松井編年清ヶ谷Ⅲ－２期（10世紀中頃）に位置づけられる可能性が高い。

かわらけ（511・512）は、口径が11cmに近い512と、９cm前後の511がある。512は底部から外上方へ逆ハ字形に立ち上がるものである。底部が広いわりに器高が低いことから、松井編年の16世紀後半頃に位置づけることができる（松井1993）。511は全体的な器形が不明あることから、時期を特定することは難しいが、17世紀前半頃に位置づけることができる。

時期　SE01は出土した遺物から、近世（17世紀）以降に位置づけることができる。

４　近世墓

近世墓は７基を認定した。このうちSK37は銭貨が伴うことから近世墓である可能性が極めて高いが、これ以外の６基（第119図）については墓であることを示す遺物は出土していないものの、円形の土壙で、断面が箱形あるいは台形でSK37と規模が類似するものについて近世墓と認定した。なお、SK38～40についてはSK37と近接した位置に存在することから、２区北側から西側にかけては中世以降墓地であった可能性が高い。

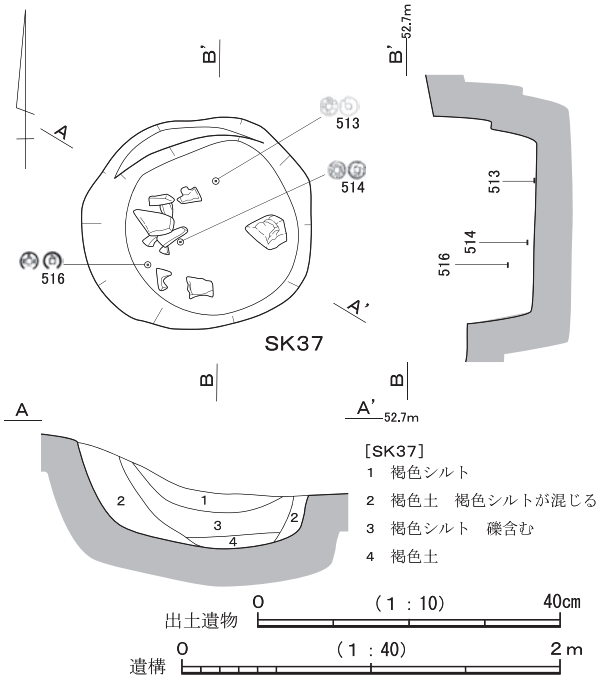
このほか、円形土坑（第121図）については平面・断面形態がSK37と異なることから、今回は機能を特定せずに土坑として報告するが、一部は近世墓であった可能性がある。

（１）近世墓SK37（第117図，第10・18表，図版28・63）

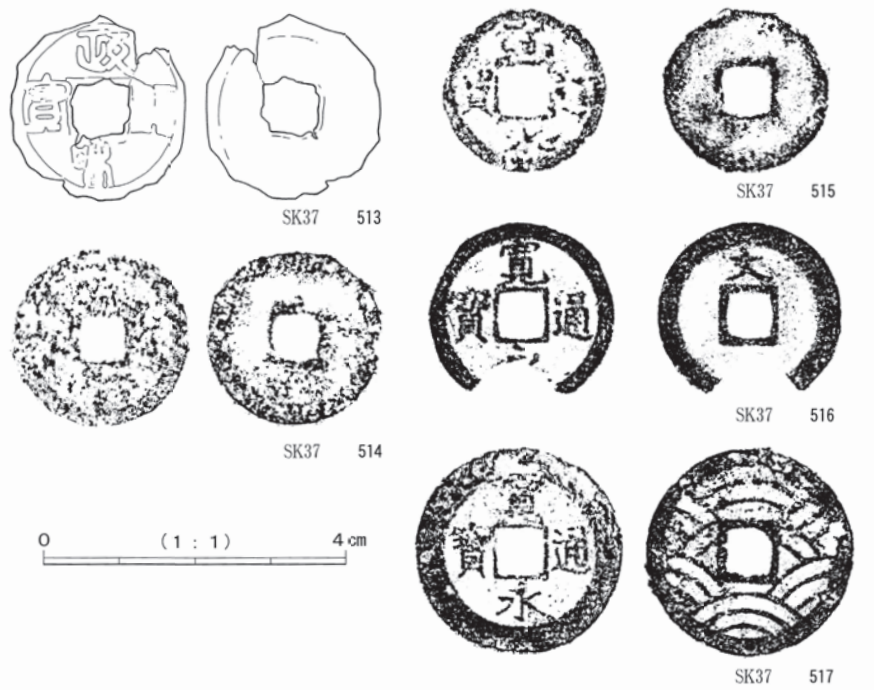
位置　SK37は、２区北西隅、H68グリッドに位置する。南西約10mに近世墓（の可能性が高い）SK38が位置する。

特徴　SK37はやや不整形な円形の土壙で、断面は箱形である。規模は長軸（東西）約1.2m、短軸（南北）約1.1m、深さ約0.5mである。３層から礫が出土しており、２層が壁面に沿って堆積していることから、２層は棺（桶棺）と裏込め、１・３層が棺の中に落ち込んだ土砂である可能性、あるいは元々あった別土坑（２層）を掘り込んでSK37（１・３・４層）が掘り込まれた可能性がある。後述するが、後者の可能性が高いと判断している。

どちらにしても、内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、最終的なSK37の利用については桶を用いた座棺であった可能性が高い。内部から出土した石材は蓋に載せられていた石材であろうか。



第117図　近世墓　実測図①（SK37）



第118図　近世墓出土遺物実測図①

遺物出土状況と出土遺物　SK37からは銭貨５枚（銅銭４枚・真鍮銭１枚）が出土した。513・514が床面近くから、516が床面から10cmほど高い位置から出土した。残りの２点は２・３層中から出土した。

SK37から出土したのは銭貨５点（513～517）のみである。513は「政和通寶」（初鋳1111年）、514は錆による劣化が進行しており、肉眼・X線写真においても判読できない。513は宋銭である。515・516は「寛永通寶」の一文銭で、ともに「寶」の貝の「ハ」部分が「ス」状ではなく「ハ」状であることから新寛永であることがわかる。515は「寛永通寶」（新寛永，初鋳1668年）である。516は「寛永通寶」一文銭（新寛永，初鋳1668年）の文銭、517は真鍮製「寛永通寶」の二十一波の四文銭（初鋳1768年）である。

SK37の被葬者には、輸入銭と日本銭の二者を組み合わせて、六道銭としている可能性があるが、木村弘之氏（木村2008）によれば、渡来銭は江戸時代前期、延宝２（1674）年に使用が禁止されており、江戸時代中期に両者を使用することは考え難いことから、元々中世墓があったところに、近世墓が掘削された可能性を想定したほうが良い。これは、渡来銭が床面直上、「寛永通寶」がやや上位から出土しており、一緒に副葬されたわけではない可能性が高いことからも判断できる。

時期　SK37は「寛永通寶」の四文銭（初鋳1768年）が出土していることから、江戸時代中期後半以降に位置づけることができる。

ただし、上述したようにもともと中世墓が営まれていた場所にSK37が掘削された可能性があり、その場合は中世墓（戦国時代）と、近世墓（近世中期以降）に位置づけることができる可能性が高い。

なお、SK37の帰属時期である18世紀後半は、後述する蔵骨器が骨壺として利用された瀬戸美濃製品の年代とほぼ同一であり、江戸時代中期後半は墓地であった可能性が高いことが判明する。

（２）近世墓の可能性が高いSK01（第119図，第10表）

位置　SK01は調査区北端、２区Ｌ72グリッドに位置する。中世墓SK02などに近接して掘削されているが、円形土壙であることから中世墓ではなく、近世墓と判断した。

特徴　SK01はやや不整形な円形の土壙で、断面は箱形であった可能性が高い。規模は長軸約0.95m、短軸約0.8m、深さ約0.05mである。SK01は浅いことから断定はできないが、内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK01からの遺物はない。

時期　SK01は出土遺物がないものの、円形土壙であることなどの特徴から近世墓であると判断した。出土遺物がないため時期を特定することが難しい。

（3）近世墓の可能性が高いSK38（第119図，第10表）

位置　SK38は2区北西隅角、G67グリッドに位置する。近世墓SK37から南西に10mのところに位置し、約1.2m南西にSK39、そのさらに南西約1.0mのところにSK40が位置する。

特徴　SK38はやや不整形な円形の土壙で、断面は箱形である。規模は長軸約0.9m、短軸約0.8m、深さ約0.2mである。内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK38からの出土遺物はない。

時期　SK38については時期を特定できないが、SK37と形態・規模が類似することから近世墓と判断した。近世のどの時期に帰属するかについては、特定することは難しい。

（4）近世墓の可能性が高いSK39（第119図，第10表）

位置　SK39は、2区北西隅角、G67グリッドに位置する。北東約1.2mにSK38、南西約1.0mにSK40が位置する。

特徴　SK39はやや不整形な円形の土壙で、断面は逆台形である。規模は長軸約0.9m、短軸約0.8m、深さ約0.15mである。内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK39からの出土遺物はない。

時期　SK39からは出土遺物がないことから時期を特定できないが、SK37と形態・規模が類似することから近世墓と判断した。近世のどの時期に帰属するかについて特定することは難しい。

（5）近世墓の可能性が高いSK40（第119・120図，第10・14表）

位置　SK40は2区北西隅角、G67グリッドに位置する。北東約1.0mにSK39が位置する。

特徴　SK40はやや不整形な円形の土坑で、断面は箱形である。規模は長軸約1.25m、短軸約1.2m、深さ約0.2mである。内部からは焼土は確認できないことから、土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK40からの出土遺物は、山茶碗（518）などである。

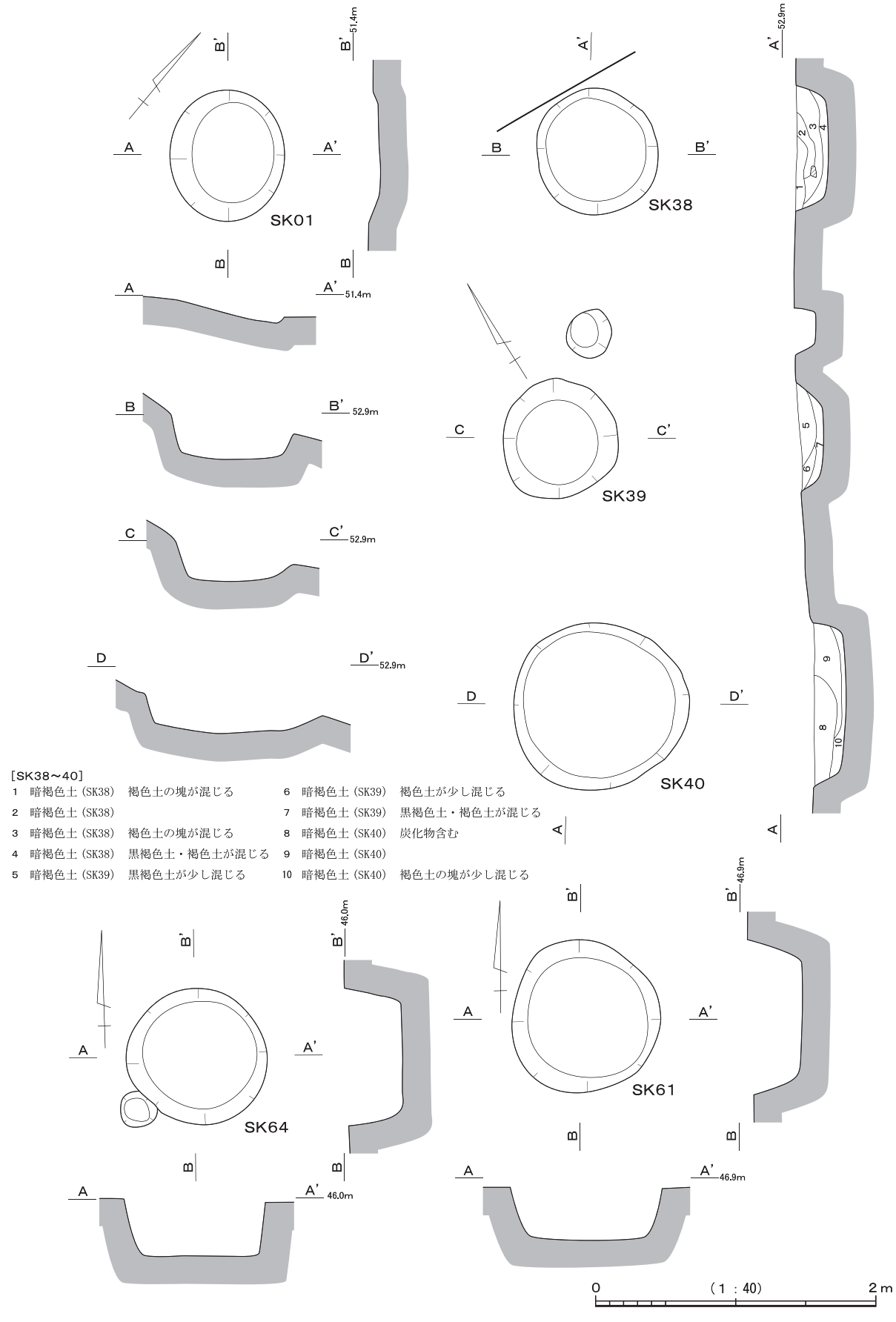
山茶碗（518）は、口縁部の小片である。逆ハ字形に直線的に開き、口縁端部はわずかに外反する。尾張（知多産，常滑産）の可能性が高く、中野編年常滑（知多）5型式（13世紀前半～中頃）に位置づけられる可能性が高い。

時期　SK40については、出土したのは山茶碗であり、中世まで遡る土坑の可能性も排除できないが、近世墓SK37と形態・規模が類似することから近世墓と判断した。近世のどの時期に帰属するかについて特定できない。

（6）近世墓の可能性が高いSK61（第119図，第10表）

位置　SK61は調査区南側、3区東側A73グリッドに位置する。上述したSK37ほか3基とは離れた位置にあり、形態的にはSK37に類似するものの位置が離れていることから近世墓ではない可能性も残る。

特徴　SK61はやや不整形な円形の土坑で、断面は箱形である。規模は長軸約1.1m、短軸約1.05m、深さ約0.4mである。内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、墓の場合は土葬の可能性が高い。



［SK38～40］

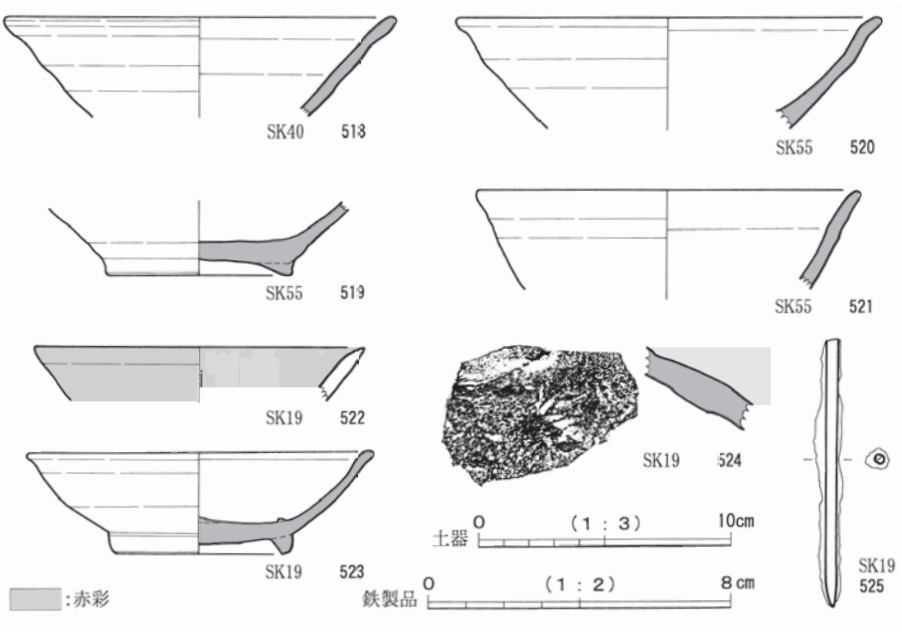
1　暗褐色土（SK38）　褐色土の塊が混じる
2　暗褐色土（SK38）
3　暗褐色土（SK38）　褐色土の塊が混じる
4　暗褐色土（SK38）　黒褐色土・褐色土が混じる
5　暗褐色土（SK39）　黒褐色土が少し混じる
6　暗褐色土（SK39）　褐色土が少し混じる
7　暗褐色土（SK39）　黒褐色土・褐色土が混じる
8　暗褐色土（SK40）　炭化物含む
9　暗褐色土（SK40）
10　暗褐色土（SK40）　褐色土の塊が少し混じる

第119図　近世墓　実測図②

円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK61からの出土遺物は近世陶磁器のほか須恵器、土師器が出土しているが、いずれも小片のため、図化していない。

時期　SK61は出土した遺物から近世に位置づけられ、近世墓SK37と形態・規模が類似することから近世墓と判断した。近世のどの時期に帰属するかについては明らかにすることができない。



第120図　近世墓出土遺物②および土坑出土遺物実測図

（７）近世墓の可能性が高いSK64（第119図，第10表）

位置　SK64は調査区南側、１区－Ａ76グリッドに位置する。SK61同様近世墓SK37から離れており近世墓ではない可能性もある。ただし、SK61から約35ｍのところにあり、こちら側も墓地として利用されていた可能性がある。

特徴　SK64はやや不整形な円形の土壙で、断面は箱形である。規模は直径約1.0ｍ、深さ約0.4ｍである。内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、近世墓との仮定が正しければ土葬の可能性が高い。円形の掘方であることから、桶を用いた座棺であった可能性が高い。

出土遺物　SK64からの出土遺物は、かわらけと擂鉢（中世）が出土しているが、小片のため図化していない。

時期　SK64については、近世墓SK37と形態・規模が類似することから近世墓と判断した。近世のどの時期に帰属するかについては、確定することはできない。

（８）近世墓関連遺物（第151図，第14表，図版70）

上記した７基のほか、近世墓に伴う蔵骨器（699）が２区（表面採取）から出土した。

699は瀬戸美濃の有耳壺であり、美濃産の可能性が高い。藤澤編年登窯第７小期（18世紀後半）に位置づけられるものである。この壺の底部には、墨書で「歳三十」と記載されている。名前は記載がないが、数えで三十歳（満29歳）でなくなった被葬者の火葬骨を納めた蔵骨器である可能性が高い。

したがって、この壺は18世紀後半に位置づけられることから、北垣遺跡内において18世紀後半まで墓地が営まれていたことが明らかとなる。

5　土坑

ここでは、近世以降に帰属する土坑および時期不明の土坑について報告する。

土坑の形態ごとに報告する。

（１）SK15（第121図，第10表）

SK15は、調査区北西、２区Ｊ70・Ｋ70グリッドに位置する。

SK15の平面形は隅丸長方形であり、断面はＵ字形であるが、南側には段が確認できる。この段部分については別遺構の可能性がある。

南北約1.2m、東西約1.05m、深さ約0.45m、段部分の深さ0.15mである。内部からは焼土、炭化物などは出土していない。

出土遺物はなく、時期を特定することはできない。

（２）SK48（第121図，第10表）

SK48は、２区Ｇ74グリッドに位置する。

SK48はやや不整形な隅丸長方形あるいは楕円形の土坑で、断面はＵ字形である。南北（B-B′方向）約1.4m、東西（A-A′方向）約1.2m、深さ約0.4mである。内部からは焼土、炭化物などは出土していない。

SK48からの出土遺物はなく、時期を特定することはできない。

（３）SK52（第121図，第10表）

SK52は、２区Ｄ72グリッドに位置する。

SK52は、楕円形の土坑で、中央が円形に窪んでいる。断面は逆凸形である。中央の土坑については、別遺構の可能性がある。規模は上段で長軸（南北）約1.2m、短軸（東西）約0.95m、深さ約0.3m、下段（円形部分）は、直径約0.4m、深さ約0.1mである。

SK52からの出土遺物はなく、用途、帰属時期ともに不明である。

（４）SK53（第121図，第10表）

SK53は、２区Ｄ72グリッドに位置する。

SK53は、やや不整形な楕円形で、断面は皿状である。SK52と近接し、規模・形態ともに類似することから同じような性格をもつ遺構の可能性がある。長軸約1.25m、短軸約1.0m、深さ約0.1mである。

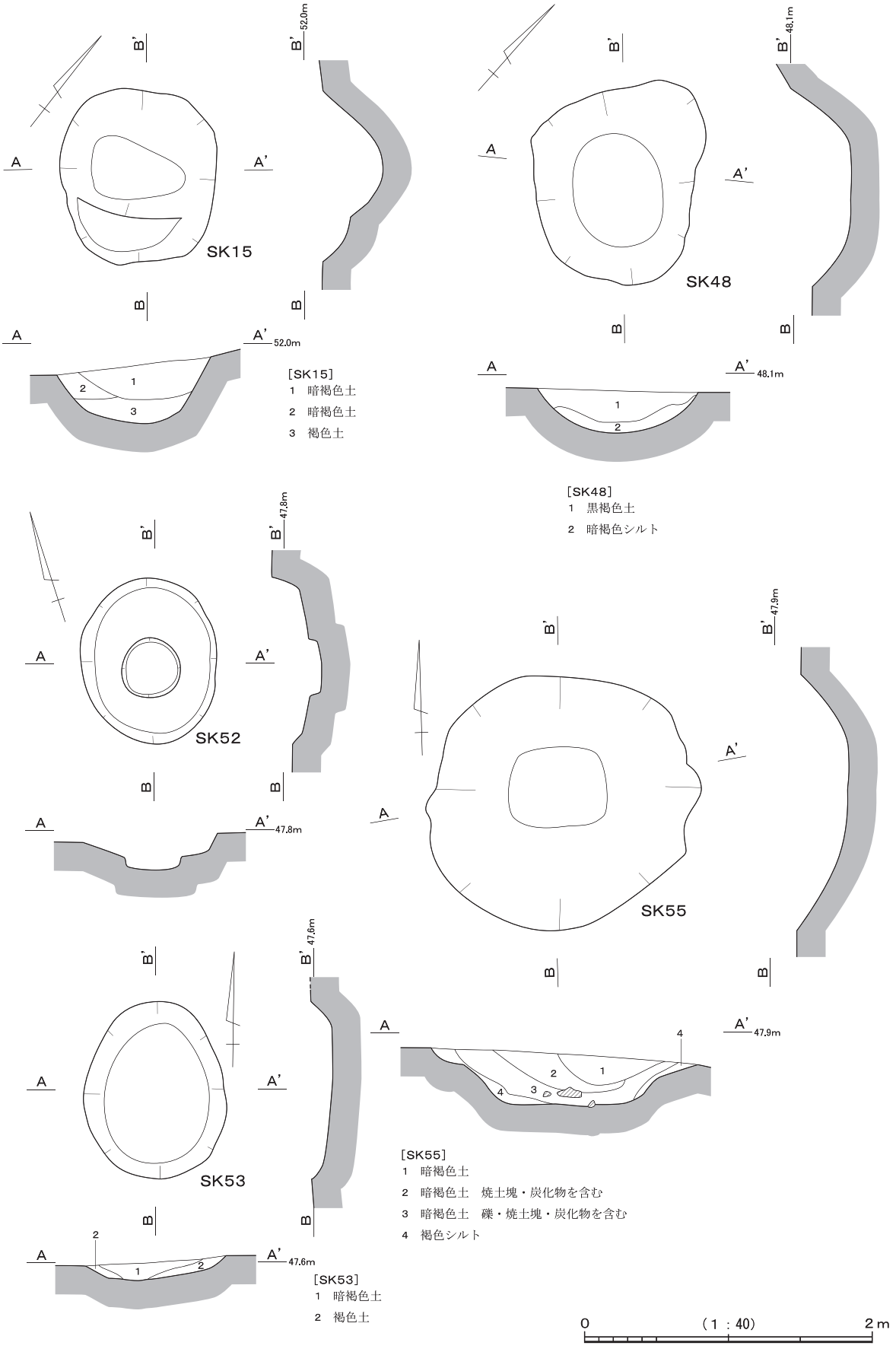
SK53からの出土遺物はなく、性格・時期ともに不明である。

（５）SK55（第120・121図，第10・14表，図版63）

SK55は、３区西側Ｃ70グリッドに位置する。

SK55は、やや不整形な大型の円形土坑で、断面は南北（B-B′方向）がＵ字形、東西（A-A′方向）が、ひ字形の２段状である。規模は南北約1.8m、東西約1.9m、深さ約0.4mである。内部からは礫・焼土、炭化物が含まれる土砂がレンズ状に堆積している。近隣で火を使うような作業が行われていた可能性が高い。

SK55からの出土遺物には、山茶碗、須恵器、近世陶器が出土したが、多くが小片のため、図化できるものは少なかった。第120図には山茶碗（519～521）を図示した。519は底部片である。やや潰れた三角高台である。胎土の特徴から渥美湖西産で、松井編年Ⅰ－２～Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。



第121図　近世および時期不明の土坑　実測図①

520・521は口縁部の破片であり、520は直線的にハ字形に広がる体部から、口縁部直下を強く撫でて口縁部を外側へ外反させる。521は直線的に口縁部までハ字形に延びる。胎土の特徴から渥美湖西産で、口縁部の形態から520が松井編年Ⅱ期、521が松井編年Ⅲ-１期に位置づけることができる。

SB55は図化していない遺物の中に近世陶器が含まれていることから近世以降に位置づけることができる。

（６）SK16（第122図，第10表）

SK16は調査区北西側、２区Ｊ70・Ｋ70グリッドに位置する。

SK16は東西に長い長楕円形の平面で、断面は逆台形である。全長約2.05m、幅約0.9m、深さ約0.4mである。内部からは小礫が出土したが、焼土・炭化物などは出土していない。

SK16からの出土遺物はなく、性格および時期を特定することができない。

（７）SK17（第122図，第10表）

SK17は調査区北西側、２区Ｊ69・70グリッドに位置する。SK16は北西約5.0mの位置に所在しており、形態・規模が類似することから同様の性格を有する遺構である可能性が高い。

SK17は長楕円形の平面で、断面は逆台形である。規模は全長約2.05m、幅約1.2m、深さ約0.2mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できない。

SK17は出土遺物がなく、時期を特定することはできない。

（８）SK19（第120・122図，第10・14表，巻頭図版10，図版29・63）

SK19は調査区北西側、２区Ｉ70グリッドに位置する。SK19はSK17の南約9.0mの位置に位置しており、形態的にも類似することから、同様の遺構である可能性が高い。

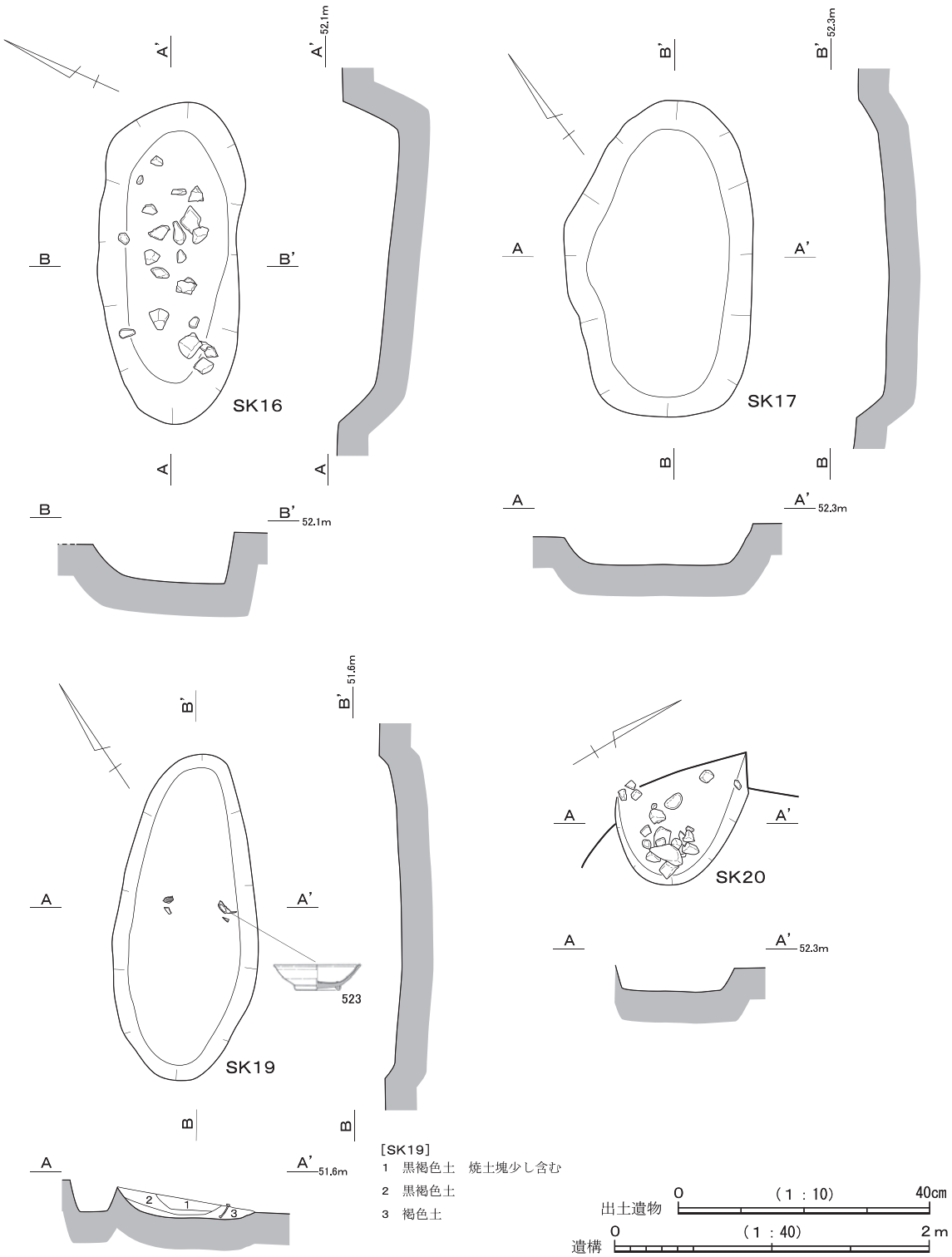
SK19は長楕円形の平面で、断面はＵ字形である。全長約2.1m、幅約0.9m、深さ約0.1mである。内部からは１層から若干焼土塊が出土しており、後世の流入土である可能性が高い。近隣には中世墓（火葬）が存在することから、そうしたものから流れ込んだ可能性が高い。

SK19からは、灰釉陶器、土師器、鉄釘、近世陶器が出土している。このうち図化できた土師器（522）、灰釉陶器（523）、常滑（524）、鉄釘（525）を図示した。

土師器は杯（522）で、内外面に赤彩されている。底部径と口径に差のある第60図220のような杯の可能性が高い。須恵器編年遠江Ⅵ期（鈴木敏1998）ごろに位置づけられる可能性が高い。灰釉陶器（523）は碗で、ほぼ完形に復原できる。底部は低い三角高台で、体部から口縁部は底部から外上方へ直線的に伸び、口縁部をわずかに外反させる。底部は糸切り後ヘラ削り調整を行っている。内面見込みには重ね焼きの痕跡が残るが、上に重ねられた碗の高台が２つ分確認できることから、２回焼成されたことがわかる。この結果、過度の焼成を受けて器壁が膨らんでいる部分や発泡した部分が確認できる。こうしたやや不良品が流通していたといえる。胎土の特徴から清ヶ谷産で、形態的特徴から松井編年清ヶ谷Ⅳ-１期（11世紀前半）に位置づけることができる。常滑（524）は甕あるいは壺の破片で、外面には押印文施されているが、格子ではなく、上下に一直線、その内部に「×」状、「×」の間を埋めるように放射状に窪みが観察できる。小片であることから時期を特定できない。中世以降に位置づけられる。

525は上部が欠損しているが鉄釘の可能性が高い。頭部は欠損している。断面は円形である。

SK19は図示していない遺物の中に近世陶器や丸釘が含まれることから、近世でも比較的新しい時期に位置づけられる可能性が高い。



第122図　近世および時期不明の土坑　実測図②

（９）SK20（第122図，第10表）

SK20は、調査区北西側、２区Ｊ69グリッドに位置する。

SK20は北西側が調査区外のため全形は不明であるが、残存部位の形状からは楕円形あるいは長楕円形であった可能性が高い。断面は逆台形である。残存長約0.9m、幅約0.8m、深さ約0.15mである。内部からは小礫が20数片出土している。

SK20からは桟瓦片が出土しているが、小片のため図化していない。したがって、SK20は近世に位置づけることができ、少なくとも江戸中期以降に位置づけることができる。

（10）SK35（第123図，第10表）

SK35は、調査区北西側、２区H68、Ｉ68・69グリッドに位置する。

SK35は、長軸方向をSD05と攪乱によって破壊されており全体的な形状は不明であるが、楕円形であった可能性が高い。残存長約1.75m、幅約1.3m、深さ約0.15mである。焼土や炭化物は出土していない。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

（11）SK44（第123図，第10表）

SK44は、２区Ｉ72グリッドに位置する。周囲に遺構はなく、単独で機能した土坑の可能性が高い。

SK44は、やや不整形な楕円形の土坑で、断面はU字形である。長軸約0.9m、短軸約0.65m、深さ約0.25mである。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

（12）SK45（第123図，第10表）

SK45は、２区H73グリッドに位置する。竪穴建物SH01の主柱穴に近接しており、SH01の貯蔵穴の可能性がある。ただし、遺物が出土していないこと、貯蔵穴としては規模が大きいことから、SH01の貯蔵穴と特定するまでに至らない。

SK45の平面形は楕円形で、断面は逆台形である。中央やや西側を小穴で破壊されている。長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約0.25mである。土層は１層が小穴の土層、２・３層がSK45に直接伴う層位である。焼土や炭化物は確認できない。

SK45からの出土遺物はなく、時期を特定できない。遺構の性格についてはSH01に伴う貯蔵穴の可能性があるが、時期の異なる別用途の土坑であった可能性もある。

（13）SK47（第123図，第10表）

SK47は、２区G72グリッドに位置する。

SK47はSB16の柱穴といくつかの小穴と切合関係にあるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。SK47は本来楕円形の土坑であった可能性が高い。断面は皿状である。全長1.4m前後、幅約0.9m、深さ約0.1mである。出土遺物はなく、時期・性格ともに特定することはできない。

（14）SK56（第123図，第10表）

SK56は、調査区北西隅近く、３区西側Ｅ68グリッドに位置する。SB22の柱穴と切合関係にあるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。

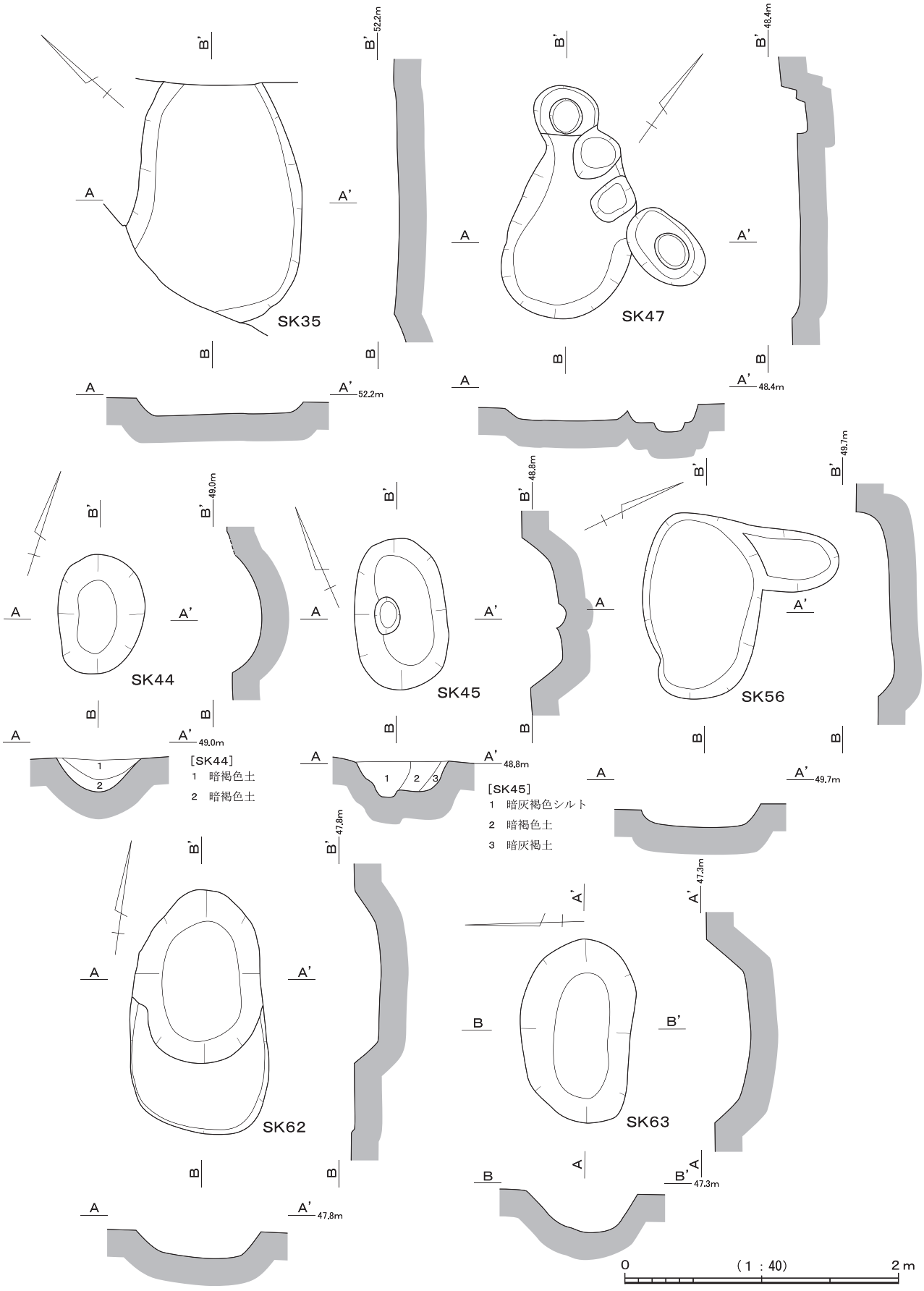
SK56は、やや不整形な楕円形の土坑で、断面は皿状である。長軸約1.35m、短軸約0.85m、深さ約0.2mである。焼土や炭化物は出土していない。出土遺物には弥生土器のほか近世陶器がある。弥生土器については、第25図51（本章第３節）に図示した。近世陶器は小片のため図化していない。

SK56は出土した土器から近世以降に位置づけることができるが、遺構の性格については不明である。

（15）SK62（第123図，第10表）

SK62は、１区Ｃ73・Ｄ73グリッドに位置する。

SK62は、２つの土坑が切合関係にあった可能性が高い。北側の深い部分をSK62A、南側の浅い方を



第123図　近世および時期不明の土坑　実測図③

SK62Ｂとして報告する。Ａ・Ｂの関係は不明であるが、SK62Ｂ→SK62Ａの順に掘削された可能性が高い。

SK62Ａは、やや不整形な楕円形の土坑で、南北約1.3m、東西約0.9m、深さ約0.2mである。内部からは焼土・炭化物は出土していない。

SK62Ｂは、北側をSK62Ａに破壊された可能性が高い。南北残存長約1.0m、東西約1.0m、深さ約0.05mである。

SK62からの出土遺物は近世陶器、山茶碗、須恵器などが出土しているが、小片のため図化できなかった。SK62の時期は出土した陶器から近世以降に位置づけることができる。

（16）SK63（第123図，第10表）

SK63は、１区Ｃ77グリッドに位置する。

SK63はやや不整形な楕円形で、断面は逆台形ないしはＵ字形である。長軸約1.35m、短軸約0.85m、深さ約0.35mである。内部からは焼土、炭化物ともに出土していない。出土遺物もなく、時期および遺構の性格を特定することはできない。

（17）SK65（第124図，第10表）

SK65は、１区Ａ78・79、－Ａ78・79グリッドに位置する。

SK65の平面形は東西に長い隅丸長方形であり、断面は逆台形である。全長約2.8m、幅約1.5m、深さ約0.25mである。内部からは焼土・炭化物は出土していない。出土遺物はなく、時期を特定することはできない。

（18）SK67（第124図，第10表）

SK67は、１区Ａ81グリッドに位置する。SK68が3.0mの距離にあり、長辺を同一方向に向けること、形態と規模が類似することから、同様の性格の遺構である可能性が高い。

SK67の平面形は隅丸長方形であり、断面は箱形である。全長約1.75m、幅約0.7m、深さ約0.35mである。出土遺物はないことから、時期および性格について不明である。SK68と同じような性格の遺構との仮定が正しければ、SK68は近世に位置づけられることから、SK67も近世の可能性がある。

（19）SK68（第124図，第10表）

SK68は、１区Ａ81グリッドに位置する。SK67が北西約3.0mに位置する。

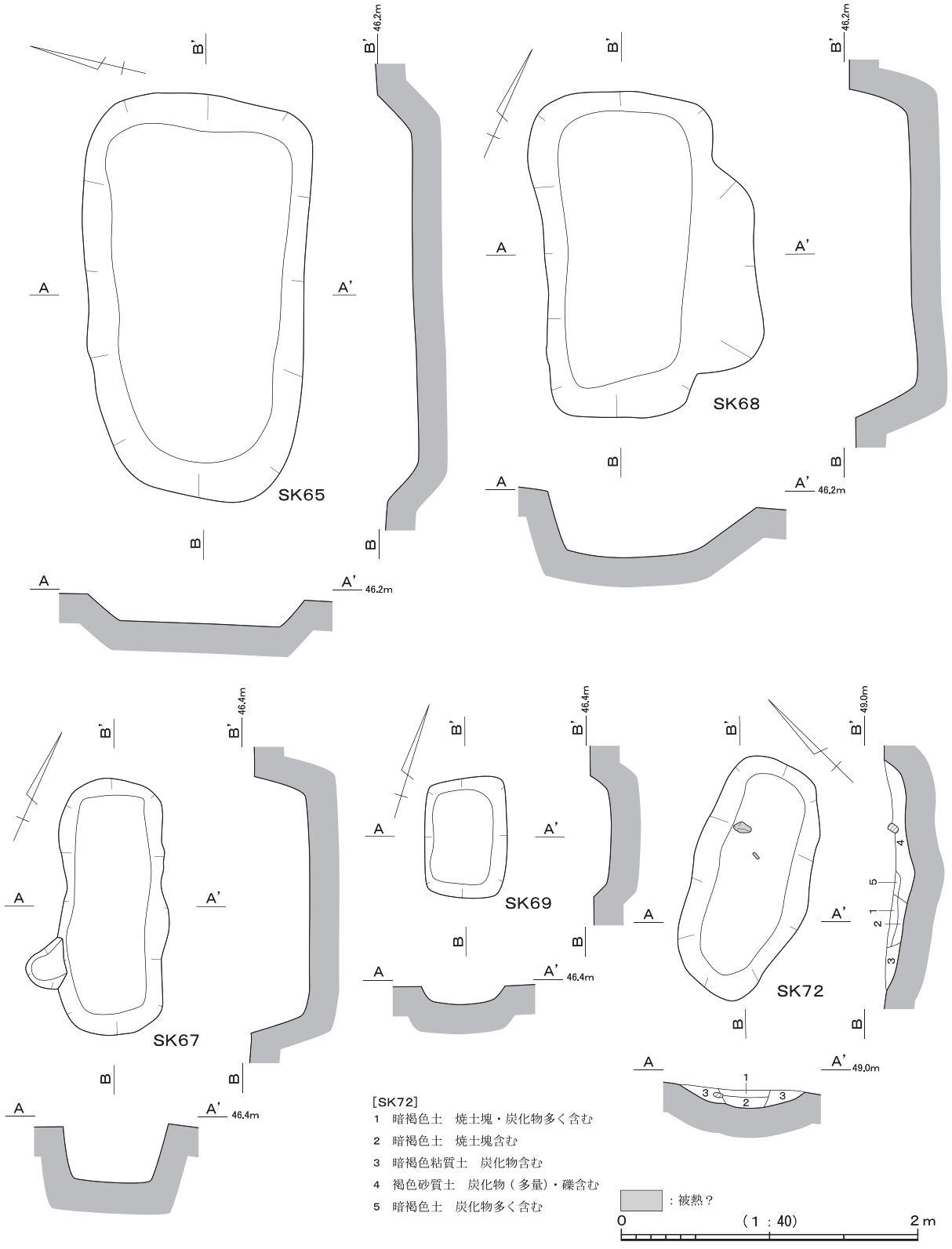
SK68の平面形は、逆長台形に近い隅丸長方形であり、断面は逆台形である。全長約2.2m、最大幅約1.25m、深さ約0.4mである。内部からは焼土や炭化物は確認できない。出土遺物は近世陶器、かわらけなどがあるが、小片のため図化していない。

SK68は出土した近世陶器から、近世以降に位置づけることができる。

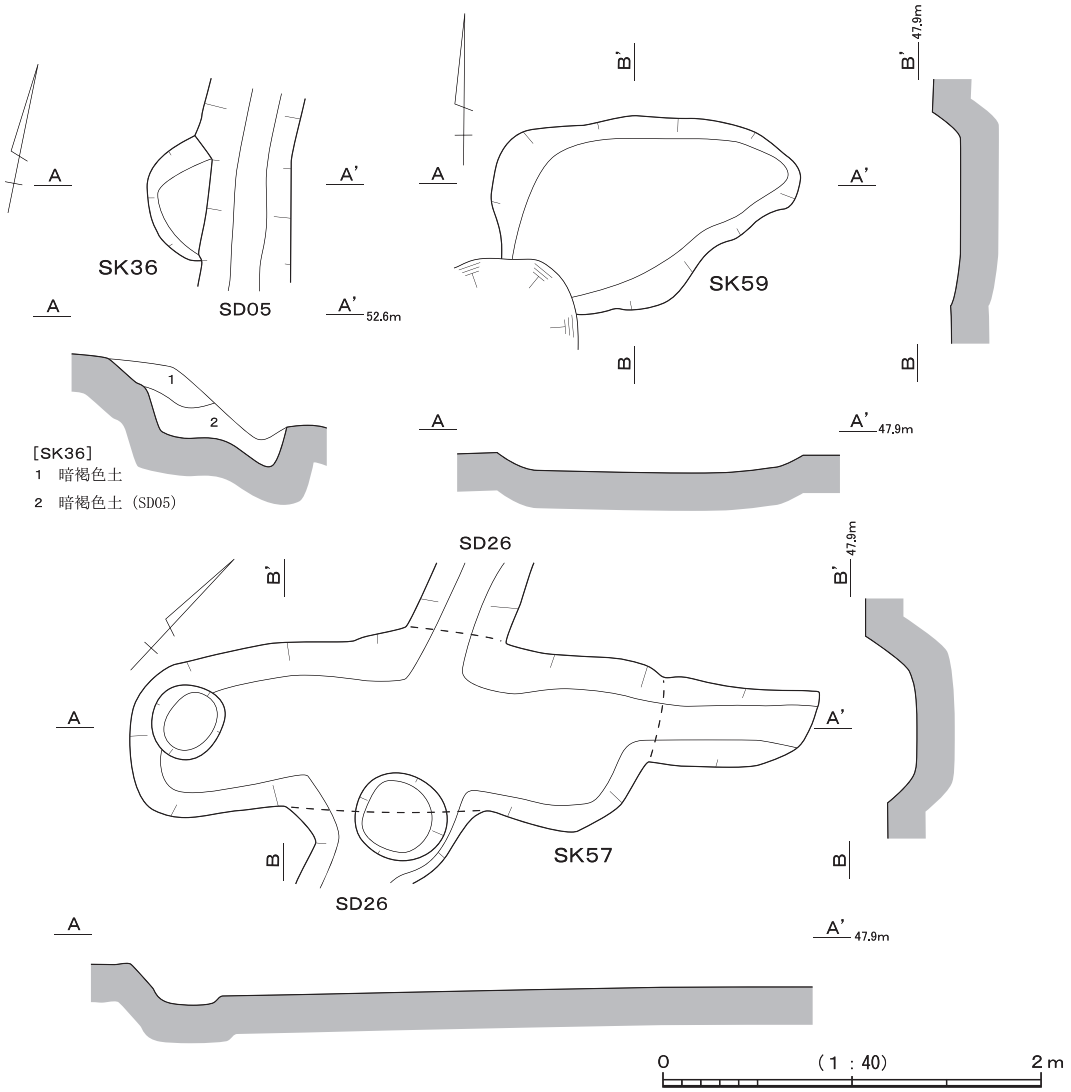
（20）SK69（第124図，第10表）

SK69は、１区南東側、－Ｂ81グリッドに位置する。

SK69の平面形は長方形であり、断面は逆台形である。全長約0.8m、幅約0.55m、深さ約0.1mである。内部からは焼土・炭化物は出土していない。出土遺物は鉄滓、土師器などが出土しているが、小片のため図示していない。SK69は時期を特定できる遺物が出土していないことから、時期も特定できない。鉄滓が出土していることから、中世以降である可能性が高い。



第124図　近世および時期不明の土坑　実測図④



第125図　近世および時期不明の土坑　実測図⑤

（21）SK72（第124図，第10表，図版27）

SK72は、２区H71・G71グリッドに位置する。SH03と重複関係にあり、その炉の可能性も考えられるが、炉としては規模が大きいこと、下層に炭化物を多く含む層（４層）が確認できることから、炉ではないと判断した。

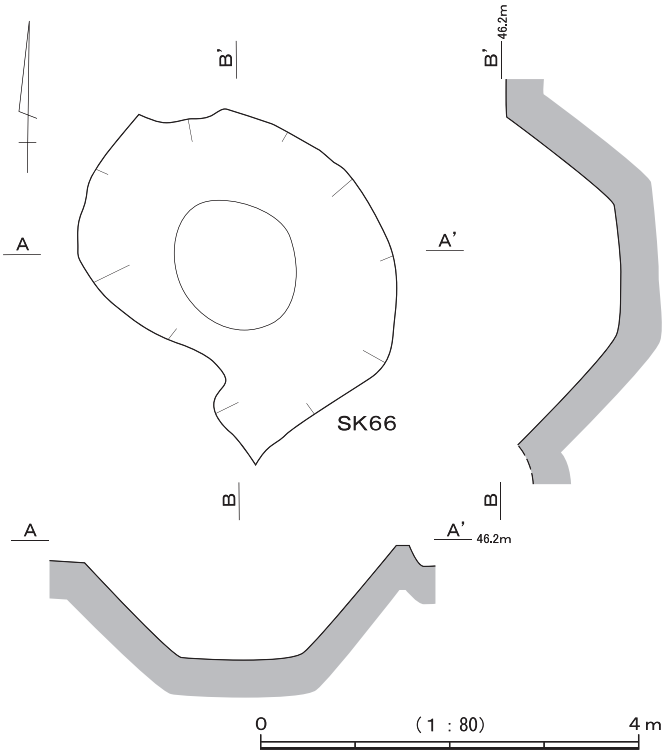
SK72の平面形はやや不整形な隅丸長方形であり、断面は皿状を呈する。内部には炭化物を含む層（３・４層）があり、それを掘り込むように焼土を含む層（１・２層）が堆積している。中には被熱している可能性が高い礫が含まれており、この土坑で火を使う行為が行われた可能性が高い。全長約1.65m、幅約0.85m、深さ約0.15mである。SK72からの出土遺物はなく、時期および遺構の性格を明らかにできない。

（22）SK36（第125図，第10表）

SK36は、調査区北西側、２区H68グリッドに位置する。

SK36は、SD05を破壊している。東側が耕作等の影響により失われ、全体的な形状は不明であるが、楕円形あるいは隅丸方形であった可能性がある。断面は皿状である。残存長（南北）約0.65m、残存幅約0.3m、深さ約0.2mである。

SK36からの出土遺物はなく時期は不明であるが、SD05を破壊していることからSD05より新しく位置づけることができ、SD05が17世紀代のかわらけを出土していることから近世前期以降に位置づけられることから、SK36についても近世前期以降に帰属する可能性が高い。



第126図　近世および時期不明の土坑　実測図⑥

（23）SK59（第125図，第10表）

SK59は、調査区南西側、３区西側A69グリッドに位置する。

SK59は不整形な土坑で、断面は皿状である。全長（東西）約1.65m、幅(南北)約1.05m､深さ約0.15mである。内部からは焼土・炭化物ともに出土していない。出土遺物はなく、時期および遺構の性格を明らかにすることはできない。

（24）SK57（第125図，第10表）

SK57は調査区南西側、３区西側B69グリッドに位置する。

SK57は、何本か（SD26と東西の溝状遺構）の溝状遺構に破壊されているため、平面形態が不明確であるが、北東－南西に長い隅丸長方形の土坑で、断面は逆台形であった可能性が高い。推定の全長は2.8m前後、幅約0.9m、深さ約0.3mである。出土遺物はなく、時期を明らかにすることはできない。

（25）SK66（第126図，第10表）

SK66は１区－A79グリッドに位置している。SD41・42に破壊されており、それらより古く位置づけることができる。

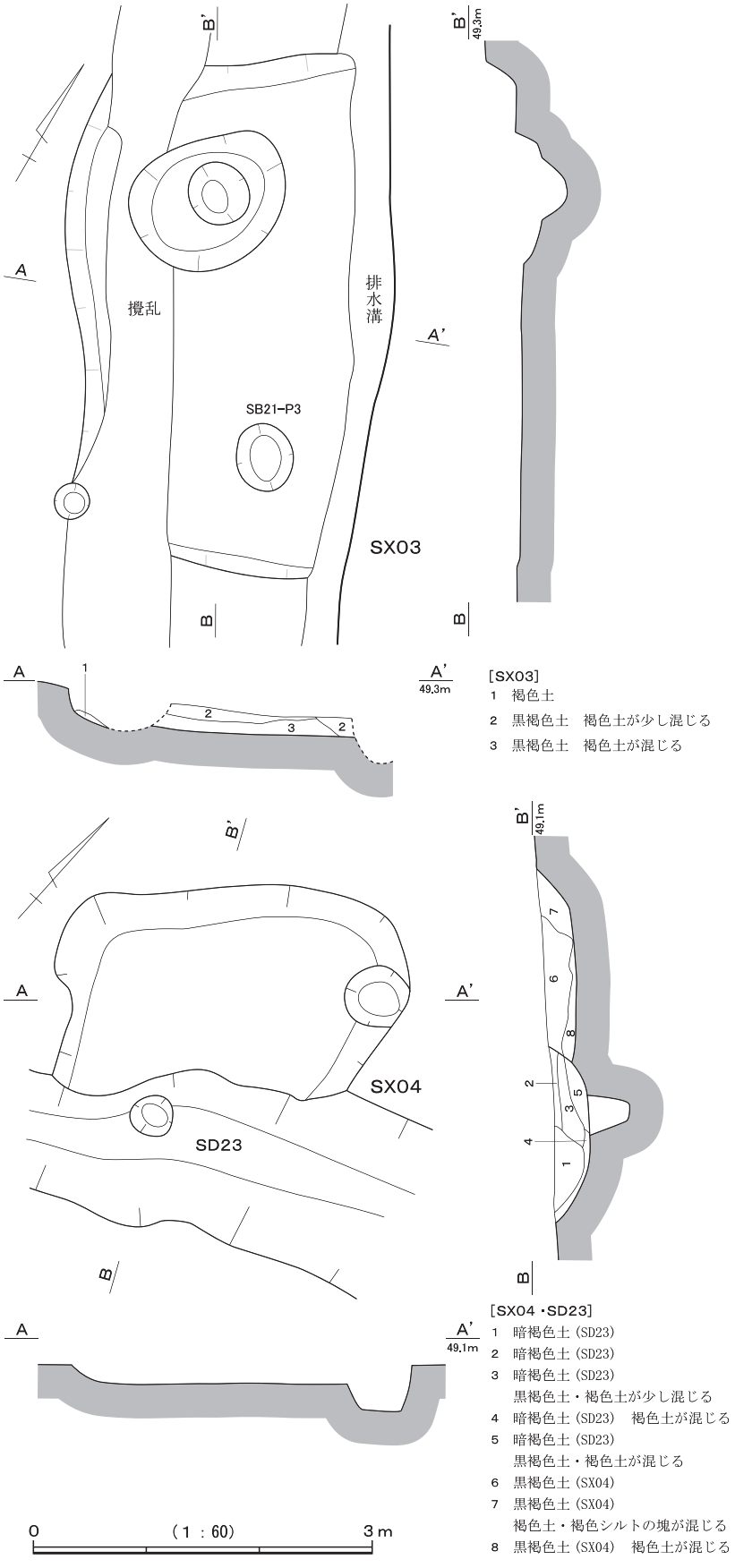
SK66の平面形は不整形な円形で、断面は逆台形である、南北最大約3.5m、東西約3.4m、深さ約1.2mである。内部には炭化物・焼土ともに含まれていない。出土遺物はなく、時期および遺構の性格を特定することは難しい。不整形であることを根拠にすれば、風倒木の痕跡の可能性がある。石組や木組は確認できないが、北垣遺跡の中では、やや深い位置まで掘り込まれていること、規模が大きいことから井戸あるいはSD41・42と関連する集水坑の可能性もある。

６　性格不明遺構

性格不明遺構のうち近世に位置づけられるものと時期不明のものを報告する。

（１）SX01（第30図，第13表）

SX01は、２区G72・H72グリッドに位置し、SH13を破壊して掘削された土坑状の性格不明の遺構である。平面形は南北に長い長楕円形で、断面U字形である。南側と東側に別の小穴が位置している。規



第127図　近世および時期不明の性格不明遺構　実測図

模は南北約1.05m、東西約0.65m、深さ約0.2mである。内部からは近世陶器、かわらけが出土しているが、小片のため図化できなかった。

SX01は近世陶器が出土していることから、江戸時代以降に位置づけることができる。

（２）SX03（第127図，第13表）

SX03は、３区西側、Ｆ69グリッドに位置する。SB21と重複関係にあるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。東側を鉄塔(電線)の建設により大きく攪乱されており、全体的な形状は不明である。残存部位は隅丸方形であり、竪穴建物の可能性がある。この場合は、SB21-P３とした小穴はこの建物の主柱穴となる可能性がある。また、SX03内にある小穴が、SX03が竪穴建物とした場合の主柱穴ではないとすれば、北西隅角の土坑は貯蔵穴の可能性もある。SX03の全長（南北）約4.7m、残存幅（東西）約2.5m、深さ約0.3mである。

出土遺物はなく、時期および遺構の性格を明確にすることはできない。

（３）SX04（第127図，第13表）

SX04は、３区西側、D68・Ｅ68グリッドに位置する。SX04は南側をSD23により大きく破壊されているが、北側の形状からやや不整形な方形であった可能性が高い。残存

長（南北）約1.8m、最大幅（東西）約3.1m、深さ約0.25mである。遺構内からは焼土や炭化物は出土していない。出土遺物もなく、時期および遺構の性格を明らかにすることはできない。

７　溝状遺構

ここでは、すべての溝状遺構について報告する。

（１）SD01（第128・129図，第12・16表）

SD01は、調査区北側、２区Ｌ72グリッドに位置する。

SD01は東側がすでに失われている。Ｌ字形で、断面は逆台形である。南北約2.3m、東西1.9m以上である。Ｌ字形に折れ曲がることから区画溝（暗渠）の可能性がある。

出土遺物は、鉄釘（526）のみである。鉄釘は円形の頭部で、身の断面も円形である。

SD01は出土した鉄釘から近世（江戸時代）末期以降に位置づけられる可能性が高い。

（２）SD02・03・04（第128・129図，第12・14表）

SD02～04はほぼ同じ位置に所在することから、併せて報告する。

SD02～SD04は調査区北側、２区Ｊ70・71、Ｋ71グリッドに位置する。いずれも断面Ｕ字形である。尾根が伸びる（南北）方向と直交した位置にあることから、自然流路ではなく、区画溝であった可能性が高い。SD03とSD02の関係をみる（E-E′断面）とSD03がある程度埋まった段階でSD02が形成され、さらにSD02が埋まった後SD03が再度掘り直され、機能していた可能性がある。

SD02・04からの出土遺物はなく、SD03から須恵器と想定する壺（527）破片が出土した。壺破片は平底の可能性が高く、底面はヘラ削りが行われた可能性が高い。胴部は底部から逆ハ字形に立ち上がっており、外面には平行タタキ調整、最下部にそのタタキを消すようにヘラ削り調整が行われている。内面はタタキ調整後ナデ調整して当て具の痕跡をナデ消している。時期を特定することは難しいが、遠江Ⅴ期～Ⅵ期の須恵器壺の可能性が高い。

SD02・04の時期については不明であるが、SD03とそれほど離れた時期とは考え難いが、SD03から出土した遺物についても、流れ込みの可能性があり、時期を特定できない。

（３）SD05（第128・129図，第12・14表）

SD05は、調査区北西側、２区Ｉ68・Ｈ68グリッドに位置する。

SD05は、尾根が伸びる方向と並行しており、自然流路の可能性が高い。SD05はA-A′断面を観察すると、東側の古い溝（２層）だったものが流れを変えて西に寄った（１層）と想定できる。SD05は蛇行しており、断面はＵ字形である。出土遺物は、かわらけ（528）が出土している。

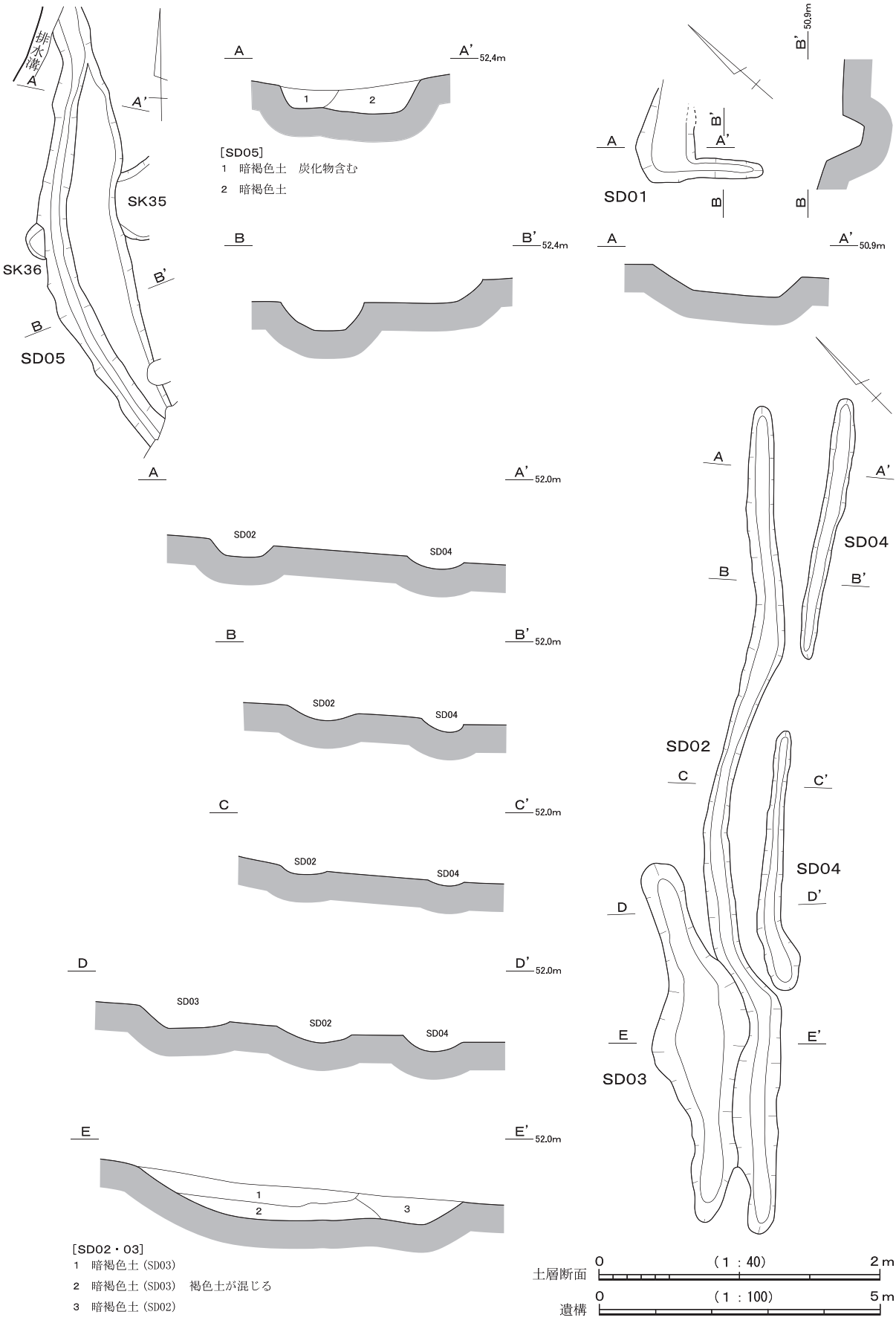
かわらけ（528）はロクロ成形かわらけで、底部は平底で、糸切痕が残存する。体部は底部から一旦内側にやや窪んだ後、逆ハ字形に立ち上がる。口径9.4cmと小型である。形態的な特徴から、17世紀代に位置づけられる可能性が高い。

SD05は、かわらけが出土していることから江戸時代前期以降であることが判明するが、詳細な時期については不明である。

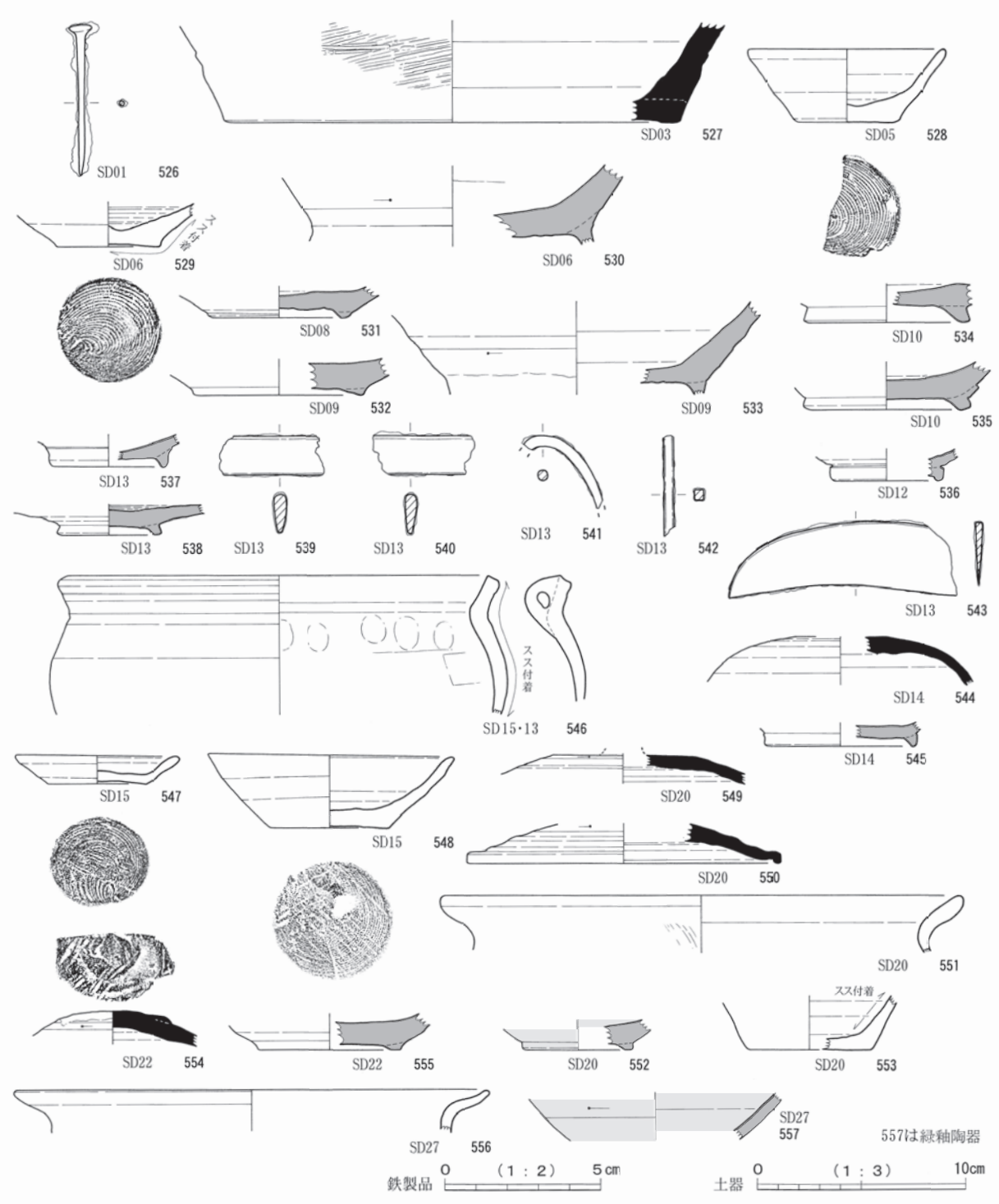
（４）SD06（第129・130図，第12・14表，図版55）

SD06は調査区北西側、２区Ｈ68グリッドに位置する。

SD06はSD05と並行しており、自然流路の可能性が高い。SD06の断面形を見ると、A-A′断面間で何



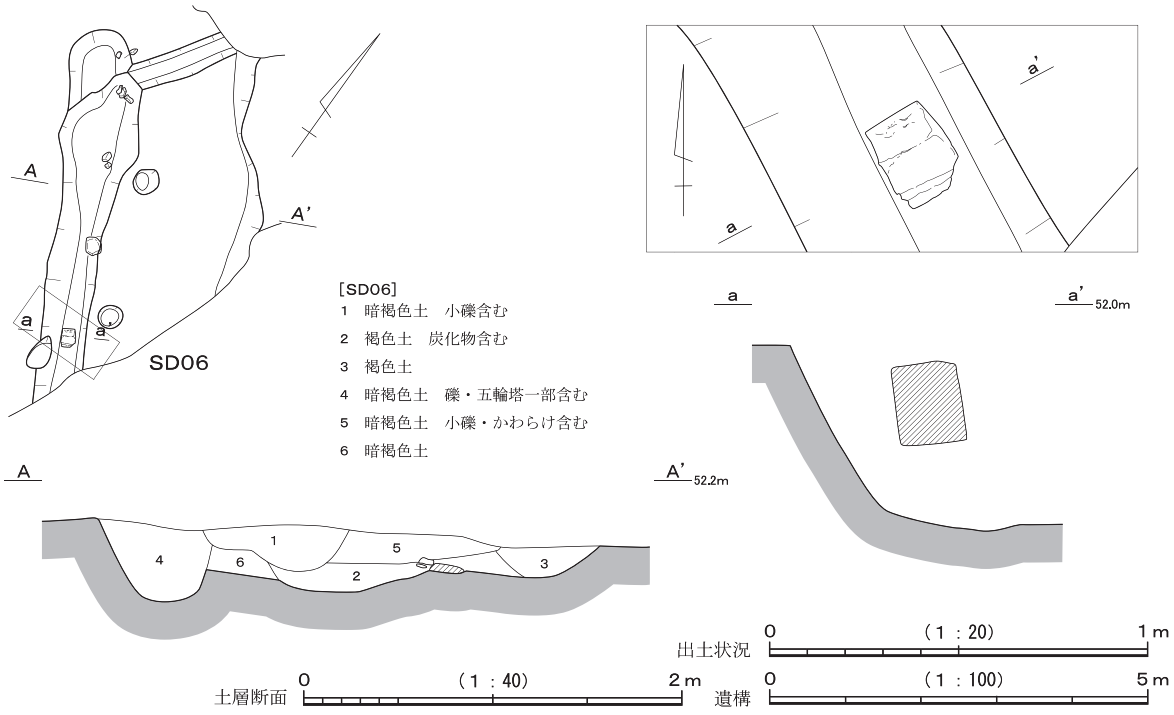
第128図　溝状遺構　実測図①



第129図　溝状遺構出土遺物実測図①

回もほぼ同じ位置で流路が変わっていることがわかる。断面を見る限りでは５～６回流路が移動している可能性が高い。SD06の１層から石塔（宝篋印塔，２区表土とした485・486・488・489のどれか）が出土しており、少なくとも、西側の溝については、中世末以降に埋没した可能性が高い。

SD06からの出土遺物は、近世陶器、常滑、かわらけなどが出土しているが、かわらけ（529）と山茶碗片口鉢（530）を図示した。かわらけ（529）は口縁部を欠損している。底部は平底で、糸切痕が残存する。体部は底部から一旦内側に窪んだ後、外上方へ直線的に開く形態である。SD05出土の528と類似



第130図　溝状遺構　実測図②

する形態であったと想定でき、松井編年で、17世紀代に位置づけることができる。山茶碗片口鉢（530）は台付である。台部は太い爪形であった可能性が高く、体部は口縁部に向かって直線的に延びる形態であったと想定する。胎土の特徴から尾張産（知多産）で、12～13世紀ごろに位置づけられる。

SD06は出土した図示していない近世陶器から、最終段階は近世以降に位置づけることができる。

（５）SD07（第27図，第12表）

SD07は、２区Ｊ71グリッドに位置する。SH06を破壊していることから、奈良時代以降の溝であることが判明する。

SD07は尾根が伸びる方向と直交しており、かつ直線的であることから自然流路ではなく、区画溝の可能性が高い。SD07からの出土遺物はなく、時期を明確にすることはできない。

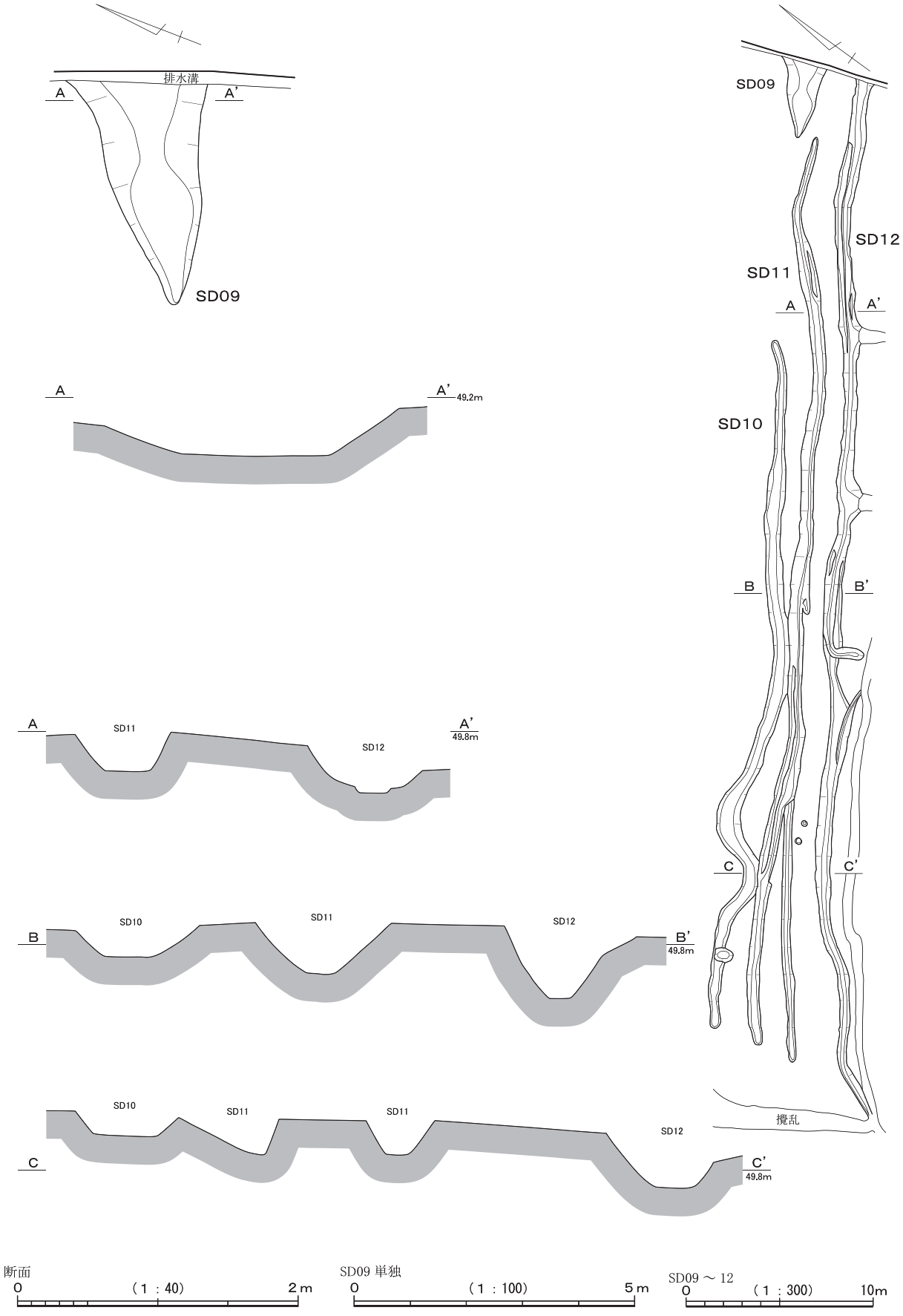
（６）SD08（第29・129図，第12・14表）

SD08は、２区H69・Ｉ69グリッドに位置する。SH10・11を破壊しており、それらより新しいことが判明する。

SD08は東西方向に伸びており、尾根が伸びる方向とは直交することから自然流路ではなく、区画溝であった可能性が高い。断面はU字形である。

SD08の出土遺物は山茶碗､常滑が出土しており､このうち山茶碗１点（531）を図示した。山茶碗（531）は底部片で、潰れた低い高台で、高台の高さはほとんど底部と同じであり、形骸化している。胎土の特徴から尾張産（知多産，常滑産）で中野編年常滑（知多）６型式に位置づけることができる。

SD08は出土した山茶碗から、中世以降に位置づけることができ、常滑甕片が出土していることから中世後期以降の可能性が高い。



第131図　溝状遺構　実測図③

（７）SD09～12（第129・131図，第12・14表，図版28・45・53）

SD09～12はほぼ同じ位置に並行して存在するため、一括して報告する。SD09～SD12は、２区Ｇ69、Ｈ69～71、Ｉ70～72、Ｊ71～73、Ｋ73グリッドに位置する。

SD10～12はほぼ平行しており、東西に向けて伸びている。尾根の伸びる方向とは直交していることから、区画溝あるいは排水のための溝の可能性が高い。SD09は緩やかな傾斜面に存在しており、自然流路の可能性が高い。

出土遺物は、SD09からは山茶碗など、SD10からは近世陶器、かわらけなど、SD11からは常滑など、SD12からは常滑、かわらけなどが出土した。多くの個体が小片のため図化できなかったが、SD09の山茶碗（532）、灰釉陶器か山茶碗（533）、SD10の山茶碗（534・535）、SD12の灰釉陶器（536）を図示した。

山茶碗（532）は底部片で低い高台である。胎土の特徴から渥美湖西産で、松井編年渥美湖西Ⅲ－２期（13世紀後半）に位置づけられる。灰釉陶器あるいは山茶碗の片口鉢（533）の高台は細い爪形高台で、底部と体部下位にはヘラ削り調整が行われている。内面には自然釉が付着しているが、灰釉陶器のような発色である。胎土の特徴から清ヶ谷産の可能性が高く、松井編年灰釉陶器Ⅳ期～山茶碗Ｉ期に併行する時期に位置づけられる可能性が高い。

山茶碗（534・535）は底部片で、534は太い三角高台で、やや高い。535は潰れた三角高台である。両者ともにもみ殻痕は確認できない。いずれも渥美湖西産で、前者は松井編年Ｉ期、後者は同じくＩ－２期～Ⅱ期に位置づけられる。

灰釉陶器碗（536）は底部片で低い三日月高台（あるいはやや潰れた低い三角高台）である。清ヶ谷産で、松井編年清ヶ谷Ⅲ－２期に位置づけることができる。

SD09～SD12は、SD10は近世陶器が出土していることから、江戸時代以降、SD09・11・12についてはSD10と平行することから、近世に位置づけられる可能性が高い。

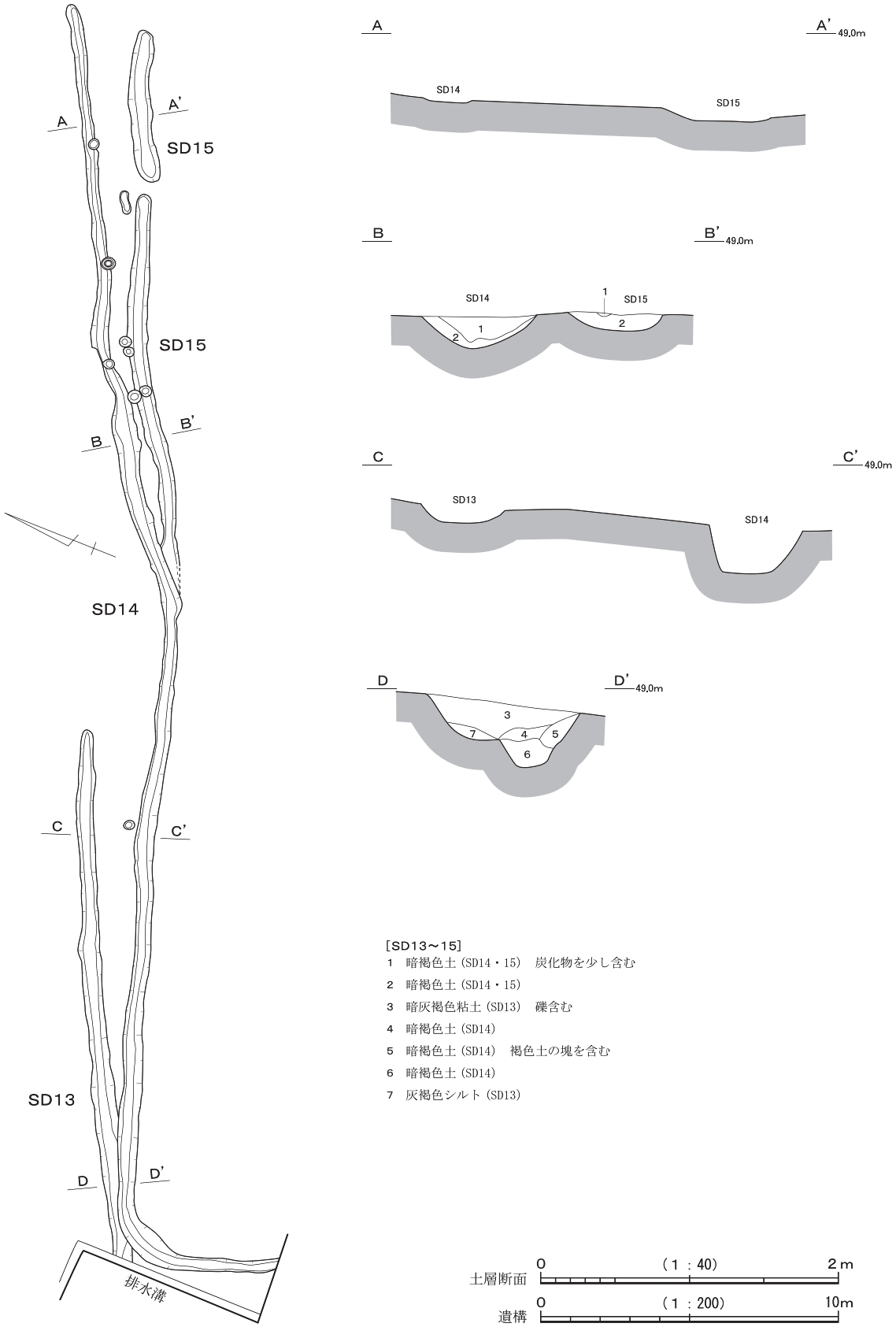
（８）SD13～15（第129・132図，第12・14・16表，図版28・45・58・63・64・75）

SD13～15は同じ位置にほぼ平行して存在することから、一括して報告する。SD13～15は２区Ｆ69・70、Ｇ70～73、Ｈ72・73グリッドに位置する。

SD13・15がSD14を壊している可能性が高い。SD13～15は東西方向に伸びており、尾根の伸びる方向とは直交する。SD10～12と10～20m離れてほぼ平行しており、何らかの有機的な関係があった可能性がある。SD14は西側がＬ字形に折れ曲がることから自然流路ではなく、区画溝であることが判明する。断面も逆台形であり人工的に掘削された可能性が高い。SD14は南北約5.0mで、東西は約42.5m、幅1.0m前後、深さは最深部で約0.4mである。SD13・15は断面Ｕ字形である。

SD13からの出土遺物は、近世陶器、鉄製品などがある。SD14からの出土遺物は常滑、灰釉陶器・山茶碗などがある。SD15からの出土遺物は、かわらけ、山茶碗などが出土した。このうち図化できたものを図示した。

SD13出土の灰釉陶器碗（537）は底部片で、爪形高台である。清ヶ谷産で松井編年清ヶ谷Ⅳ－２かⅣ－３期に位置づけることができる。538は近世陶器の可能性が高い灰釉掛けの皿である。底部は低い貼り付け高台で、底部には糸切痕が残存する。外面には釉薬が塗布されていない。瀬戸美濃の灰釉反皿であろうか。鉄製品539・540は長辺一方に刃が付けられており、利器であることが判明する。小刀や鎌の破片の可能性が高い。543は鎌の切先である。本来は後述するSD34出土の鎌（第141図569）のような形態であった可能性が高い。棒状鉄製品541・542は用途不明品である。断面は前者が円形、後者が方形である。このほかSD13とSD15で出土した破片が接合した土師質内耳鍋（546）がある。したがって、SD15とSD13はほぼ同時期に機能していた可能性が高い。内耳鍋（546）は、く字形口縁の内耳鍋で、底部は



第132図　溝状遺構　実測図④

欠損している。口縁部は直線的に外上方へ伸びるもので、口縁端部は緩やかな凹線が確認できる。内耳は口縁端部直下に貼り付けられる。胴部は扁平な球胴であった可能性が高い。外面にはススが付着しており、使用されていたことがわかる。鈴木正貴氏の内耳鍋分類遠江Ａ２類に位置づけることができ16世紀後半に位置づけられる可能性が高い（鈴木正1996）。

SD14出土の須恵器（544）は杯蓋（あるいは杯身）で、天井部は丸い。天井と底部との境部分は欠損しているため時期を特定することは難しいが、想定される口径が13cm前後であることから、遠江Ⅲ期後葉に位置づけられる可能性が高い。北垣遺跡に古墳時代後期の集落の初現期の遺物である可能性が高い。灰釉陶器碗（545）は低い三角高台（あるいは低い三日月高台）である。胎土の特徴から清ヶ谷産で、松井編年清ヶ谷Ⅲ－２期に位置づけられる可能性が高い。

SD15出土のかわらけ（547・548）は、いずれもロクロ成形かわらけである。547は皿状のかわらけで、底部が広く器高が低い。548は大型のかわらけで、底部が広く。器高が高い特徴がある。これらの特徴から、いずれも松井編年で16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

SD13・15は同一個体の破片が出土していることから近世以降、SD14については近世陶器が出土していないことから、中世後期以前まで遡る可能性がある。

（９）SD16（第133図，第12表）

SD16は、２区Ｅ72・73グリッドに位置する。

SD16は東西に向かって伸びており、自然流路ではなく、区画溝である可能性が高い。断面はＵ字形である。SD16からの出土遺物はなく、時期を明らかにすることはできない。

（10）SD17（第133図，第12表）

SD17は２区Ｄ72・73グリッドに位置する。SB30の柱穴と切合関係にあるが、前後関係を明確にすることができなかった。SD17は東西方向に向かって伸びていることから、区画溝の可能性が高い。出土遺物には、灰釉陶器、須恵器などがあるが、小片のため図示できない。

近世陶磁器やかわらけなどが出土していないことから、中世以前に位置づけられる可能性がある。

（11）SD18（第38図，第12表）

SD18は２区Ｃ72・Ｄ72グリッドに位置する。SD17は北側2.0ｍのところにあり、ほぼ平行する。

SD18は東西方向に伸びており、自然流路ではなく、区画溝の可能性が高い。断面Ｕ字形である。出土遺物は、土師器などが出土しているが、小片のため図化できなかった。近世陶磁器やかわらけなどが出土していないことから、中世後期以前に遡る可能性がある。

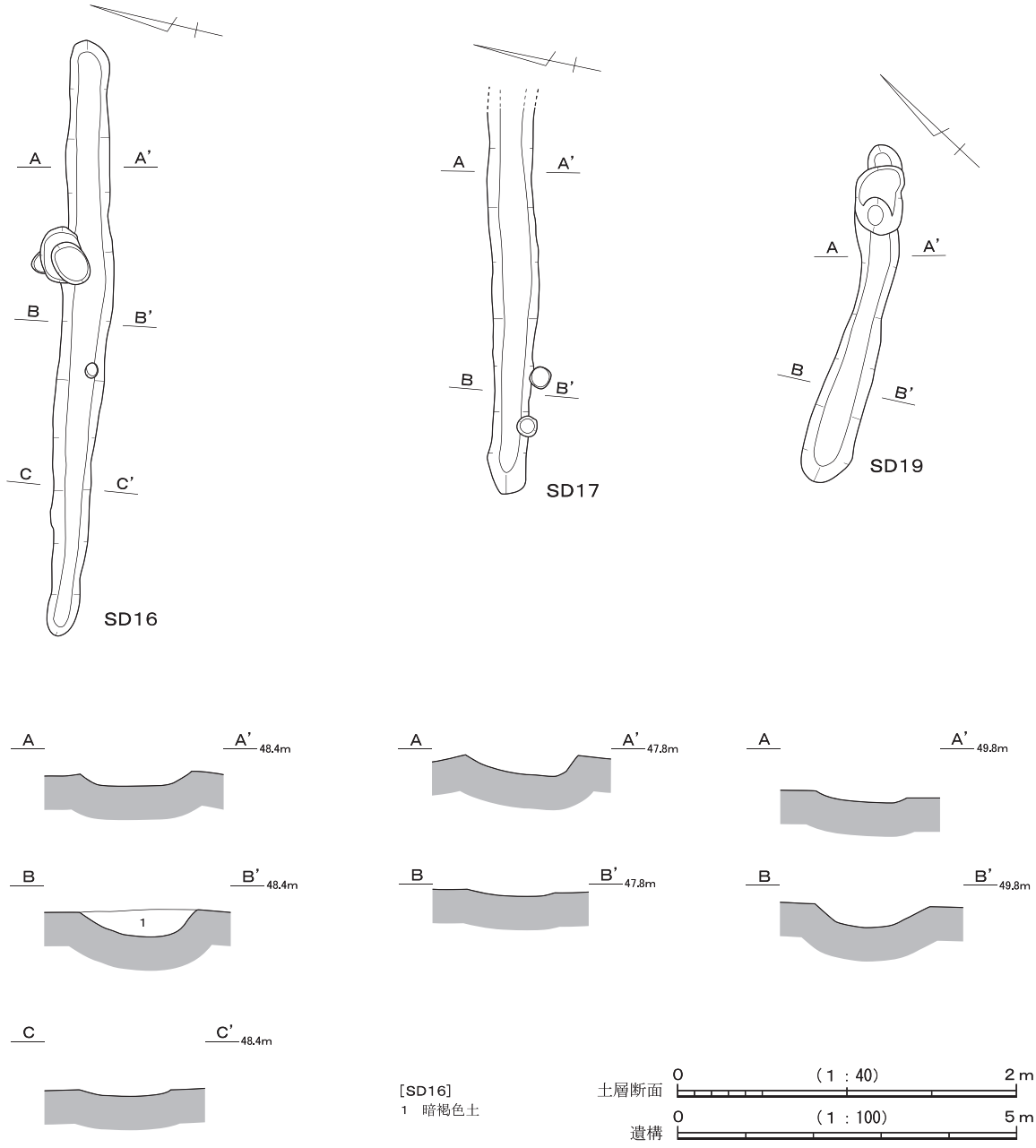
（12）SD19（第133図，第12表）

SD19は３区西側Ｆ68・69グリッドに位置する。東西方向に伸びるため区画溝の可能性が高い。断面Ｕ字形である。出土遺物はなく、時期を特定することはできない。

（13）SD20（第129・134図，第12・14表，巻頭図版11，図版43・46）

SD20は、３区西側Ｃ69・70、Ｄ69・70、Ｅ69、Ｆ69グリッドに位置する。

SD20は、南北に長い溝で、等高線に直交している。断面はＵ字形の部分もあるが、B–B′のように逆台形の部分も確認できることから、人力によって掘削された区画溝の可能性が高い。南側に向かって深さが深くなる。レンズ状堆積をしており、自然に埋まった可能性が高い。



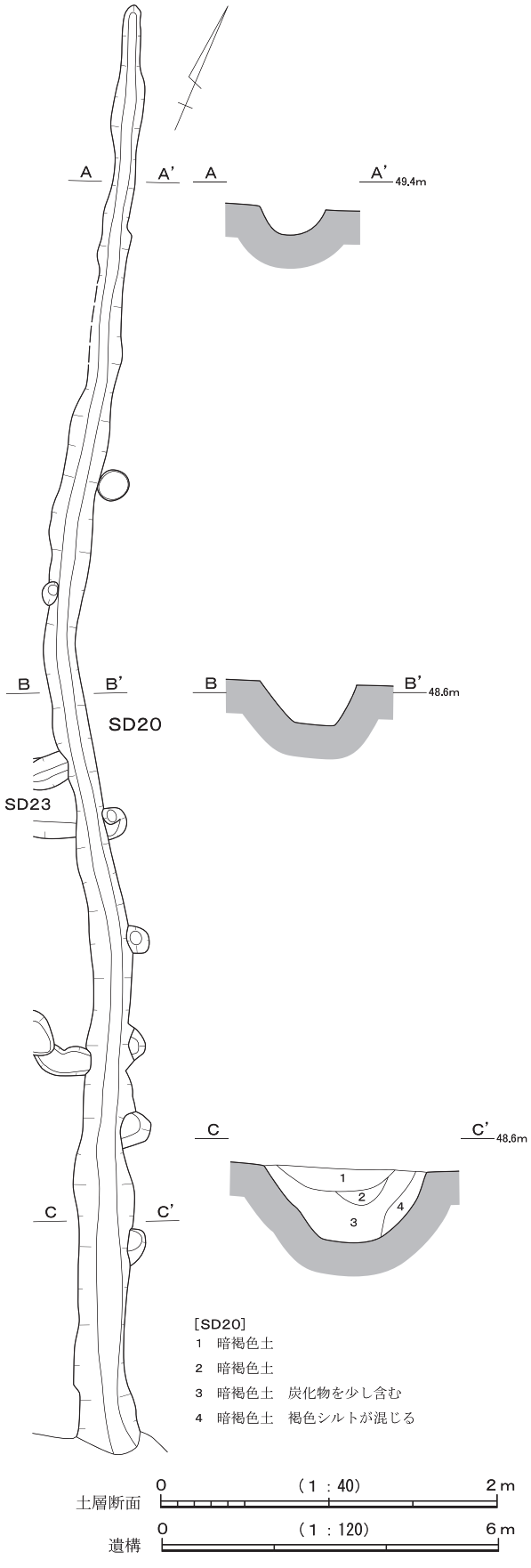
第133図　溝状遺構　実測図⑤

出土遺物には、近世陶器、かわらけなどが出土しているが、小片で図化できないものが多い。須恵器、土師器、灰釉陶器、かわらけを図化した。

須恵器は摘蓋（549・550）である。いずれも摘みを欠損する。550についてはハ字形に開いた後、口縁部を垂直に短く垂下させるものである。遠江Ⅴ期後半頃に位置づけられる。いずれも湖西産の可能性が高い。土師器甕（551）は口縁部の破片である。コ字形の頸部で、口縁部は外上方へ直線的に延びるものである。奈良時代～平安時代に位置づけられる。

灰釉陶器碗（552）は、底部片で、角高台で、内外面ともに刷毛塗りされている。猿投産の可能性が高く、黒笹14号窯式期（９世紀前半）に位置づけられる可能性が高い。

かわらけ（553）はロクロ成形かわらけであるが、表面の磨滅が著しく、底部の糸切痕については残存していない。底部は平底で、体部は底部から外上方へハ字形に開くものである。形態的特徴から、松



第134図　溝状遺構　実測図⑥

井編年で18世紀に位置づけられる。

SD20は、自然堆積により埋没していることから、出土遺物が掘削の時期を反映しているか慎重に判断する必要があるが、少なくとも近世以降までは機能していた可能性が高い。

（14）SD21（第135図，第12表）

SD21は、調査区西隅、３区西側Ｄ68、Ｅ68グリッドに位置する。

SD21は、南北に延びる溝であり、等高線に直交している。南側にはSD22があることから、本来はSD22と同一の溝だった可能性がある。断面はＵ字形である。SD21からは須恵器小片が出土したが図化できない。

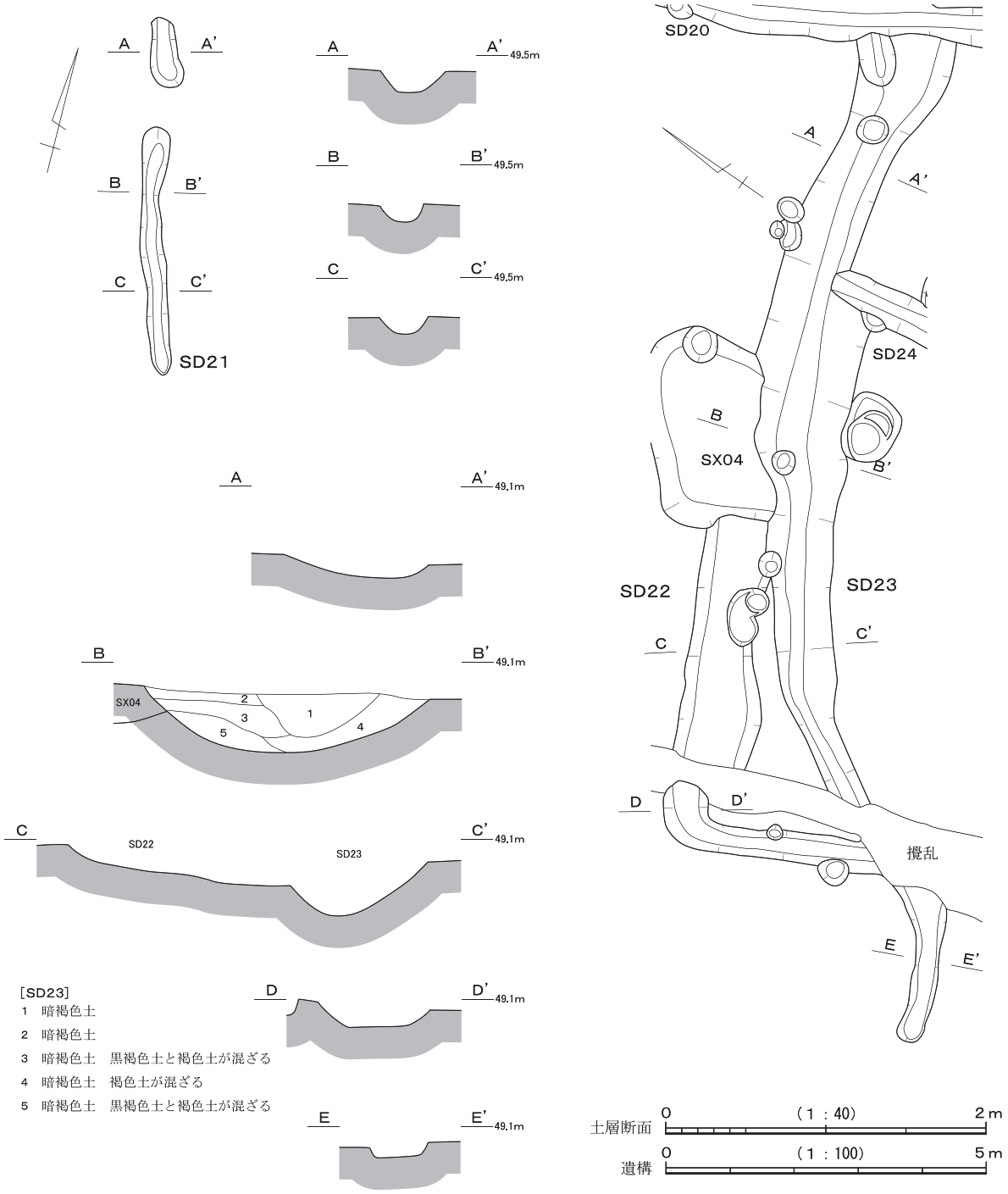
SD21は出土したのが須恵器小片のみであることから、奈良～平安時代に遡る可能性があるものの、SD20と平行することから、近世以降に下る可能性が高い。

（15）SD22・23（第129・135図，第12・14表，図版53）

SD22・23は同一場所に所在することから一括して報告する。SD22・23は、調査区西側、３区西側Ｄ68・69、Ｅ68グリッドに位置する。SD23がSD22を破壊している可能性が高く、SD22→SD23の順に掘削された可能性が高い。

SD22　SD22はＬ字形に曲がる溝であることから、区画溝である可能性が高い。東側部分をSD23に、南側を攪乱で削平されており、本来の長さは不明である。断面は逆台形である。出土遺物は近世陶器、かわらけなどが出土し、図化できた須恵器と山茶碗を図示した。

須恵器は杯蓋（あるいは杯身，554）の破片である。天井部はヘラによる切り離し後一部にヘラ削り調整を行うのみでほぼ未調整である。黒色砂粒を多く含むことから湖西産ではない可能性が高い。遠江Ⅳ期前半を前後する時期に位置づけられる可能性が高い。山茶碗（555）は低く潰れた形骸化した高台である。渥美湖西産で、松井編年渥美湖西Ⅲ－２期に位置づけることができる。



第135図　溝状遺構　実測図⑦

SD22は図化していない遺物の中に近世陶器が含まれることから、近世以降も機能していた可能性が高いことがわかる。ただし、SD22・23は調査時には一括して遺物を取り上げてしまっているため、SD23に近世陶器が含まれていた可能性があるため、SD22については、近世以前に遡る可能性もある。

また、SD21と繋がる可能性が高いことから、SD22が近世まで機能していたとすればSD21も近世以降まで機能していた可能性が高いことが推測できる

SD23　SD23はSD22を破壊して掘削された可能性が高い溝である。やや蛇行するものの、区画溝の可能性が高い。断面はU字形である。SD23はSD22と一括で取り上げているため、SD22で取り上げた遺

物の中に近世陶器があることから、少なくとも近世以降に掘削された溝であることが判明する。

（16）SD24～26（第136図，第12表）

SD24～26はほぼ同じ位置に平行して掘削されていることから関連する溝と判断し、一括して報告する。SD24は途中で攪乱に破壊されているが、すぐ南側にSD25が存在しており、SD24・25は同位置の溝であったと推断できる。SD24～26は調査区西側、３区西側Ａ69、Ｂ69、Ｃ69、Ｄ69グリッドに位置する。

SD24・25　SD24はSD23にほぼ直交する溝である。断面は逆台形の部分が確認できることから人工的な溝で、区画溝の可能性が高い。SD24・25からは常滑、灰釉陶器などが出土しているが、小片のため図化できなかった。常滑は小片のため時期を決定できないことから、SD24・25については、中世後期以降に機能していたと考えたい。

SD26　SD26はSD25に平行する溝で、断面は逆台形である。区画溝の可能性が高い。SD26からは灰釉陶器などが出土しているが、小片のため図化できない。SD26は中近世の遺物が出土していないことから、平安時代以前に掘削された可能性がある。

（17）SD27・SD28（第129・137図，第12・14表，巻頭図版９・13，図版42）

SD27・28はほぼ同じ位置に平行していることから一括して報告する。調査区西側、３区西側Ｂ69・70、Ｃ69・70グリッドに位置する。

SD27・28は近接するSD21やSD24～26とは延伸方向が異なることから、それらとは別に機能していた溝である可能性が高い。土層断面（A–A′）を観察すると、SD27・28に亘って１層が堆積していることから、SD27・28は同時期に機能していた可能性がある。

SD27・28は近世陶器や山茶碗などが出土したが、多くが小片のため図化できず、SD27から出土した土師器と緑釉陶器のみ図化した。

土師器（556）は遠江型甕の口縁部片である。頸部はコ字形で、口縁部は水平に近いもので、口縁端部は上方へ向かって引き出されている。奈良時代～平安時代前期頃に位置づけられる。

緑釉陶器（557）は碗の体部片である。時期は確定できないが、黒笹14号窯式～黒笹90号窯式（９世紀）に位置づけることができる。胎土の特徴から愛知県名古屋市周辺に所在する猿投産の可能性が高い。

SD27・28からは図示していないが、近世陶器が出土しており、近世以降も機能していた可能性が高い。掘削時期については特定できないが、近世に掘られた可能性が高いと想定したい。

（18）SD29（第137図，第12表）

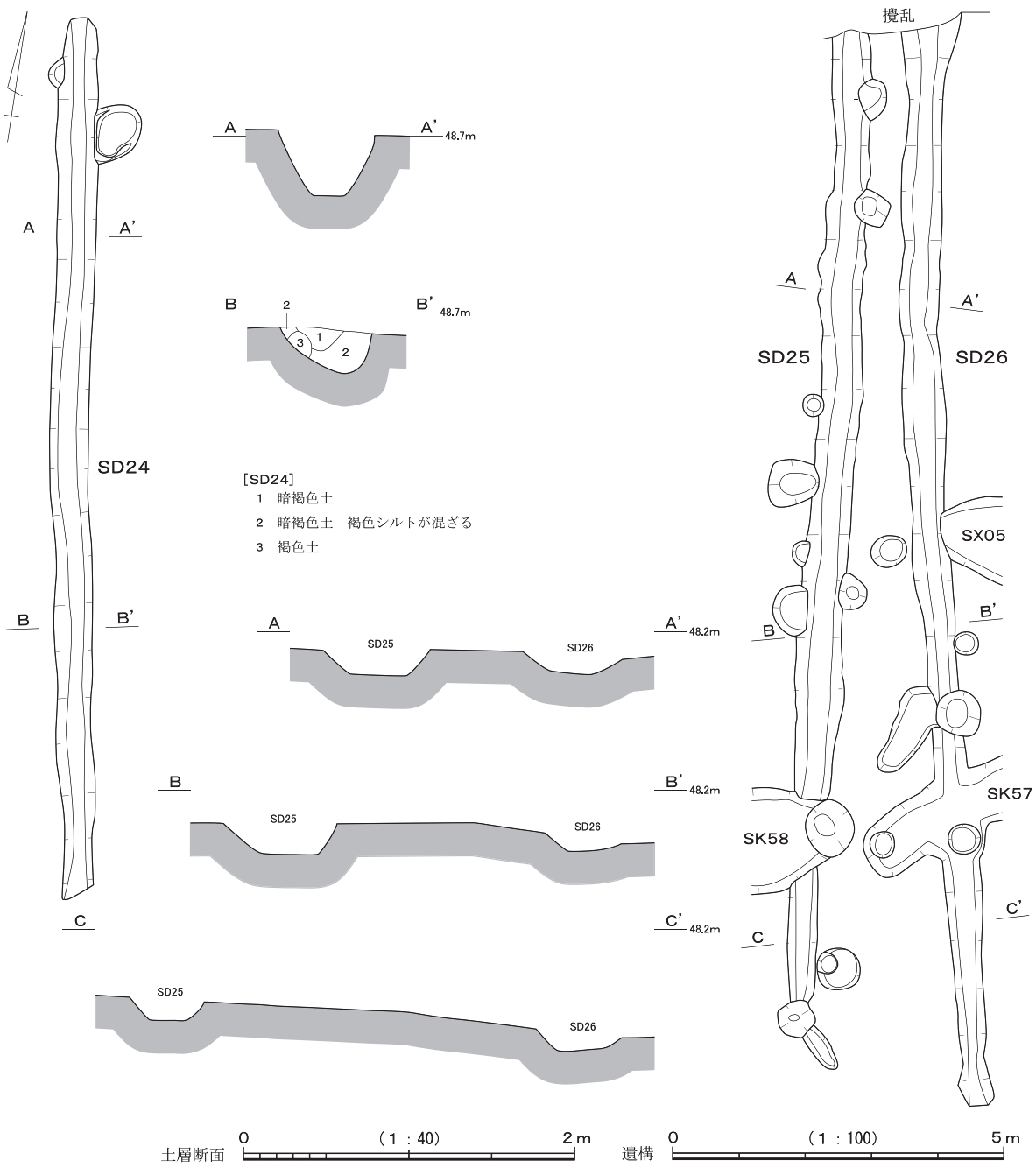
SD29は、調査区西側、３区西側Ｃ68・69グリッドに位置する。

SD29は東側がＹ字状であることから本来は二つの溝であった可能性がある。西に向かって幅を広げている。断面は皿状である。調査区西側の調査区外は浅い谷が入り込んでいた可能性があり、底へ向かっての自然流路の可能性がある。

SD29からの出土遺物はなく、時期を特定することができない。

（19）SD30（第137図，第12表）

SD30は調査区西側、３区西側Ｂ68・69グリッドに位置する。北西～南東に向かって伸びる溝である断面はＵ字形である。SD30からの出土遺物はなく、時期を特定することは難しい。



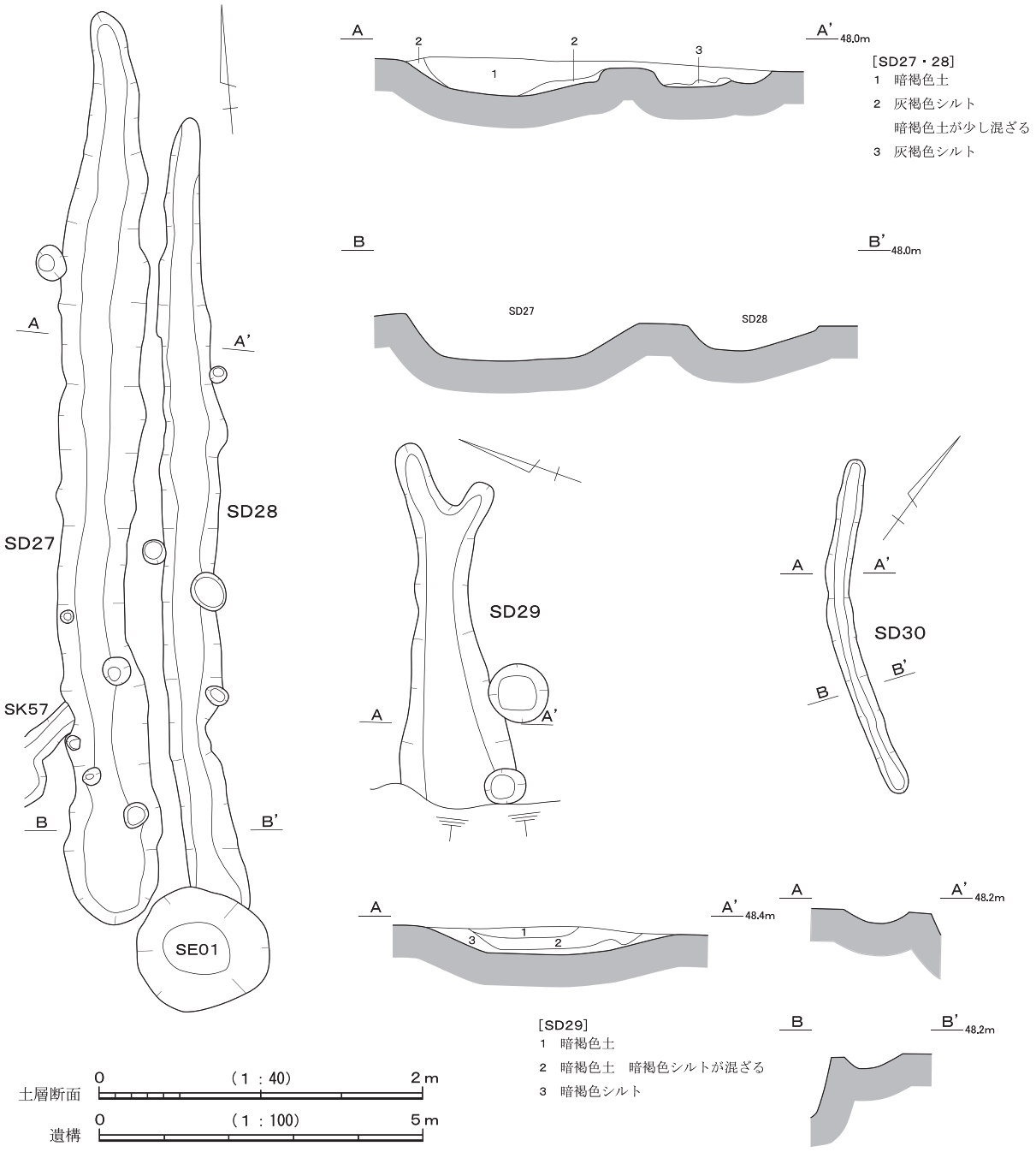
第136図　溝状遺構　実測図⑧

（20）SD31（第138図，第12表，図版29）

SD31は調査区東側、１区Ｃ79・80、Ｄ79グリッドに位置する。東側は調査区外である。調査区外は斜面になっており、半分以上が失われている可能性が高い。

SD31の残存範囲は東側が開放するコ字形である。断面はU字形に近い逆台形であった可能性がある。コ字形で囲まれた範囲は、南北約6.0m、東西4.5m以上である。溝の幅は、北側で0.9m前後、南側で1.8m前後、西側で1.5m前後である。深さは西側で0.2m前後、南側で0.3m前後である。

東側に同じようにコ字形であったとすれば、ロ字形に囲まれた範囲となる。遺物が出土していないことから断定はできないが、方形周溝墓の可能性がある。逆にいえば方形周溝墓であるからこそ遺物が少なく、かつ新しい時期の須恵器や土師器、かわらけ、中近世陶磁器が含まれていない可能性もある。



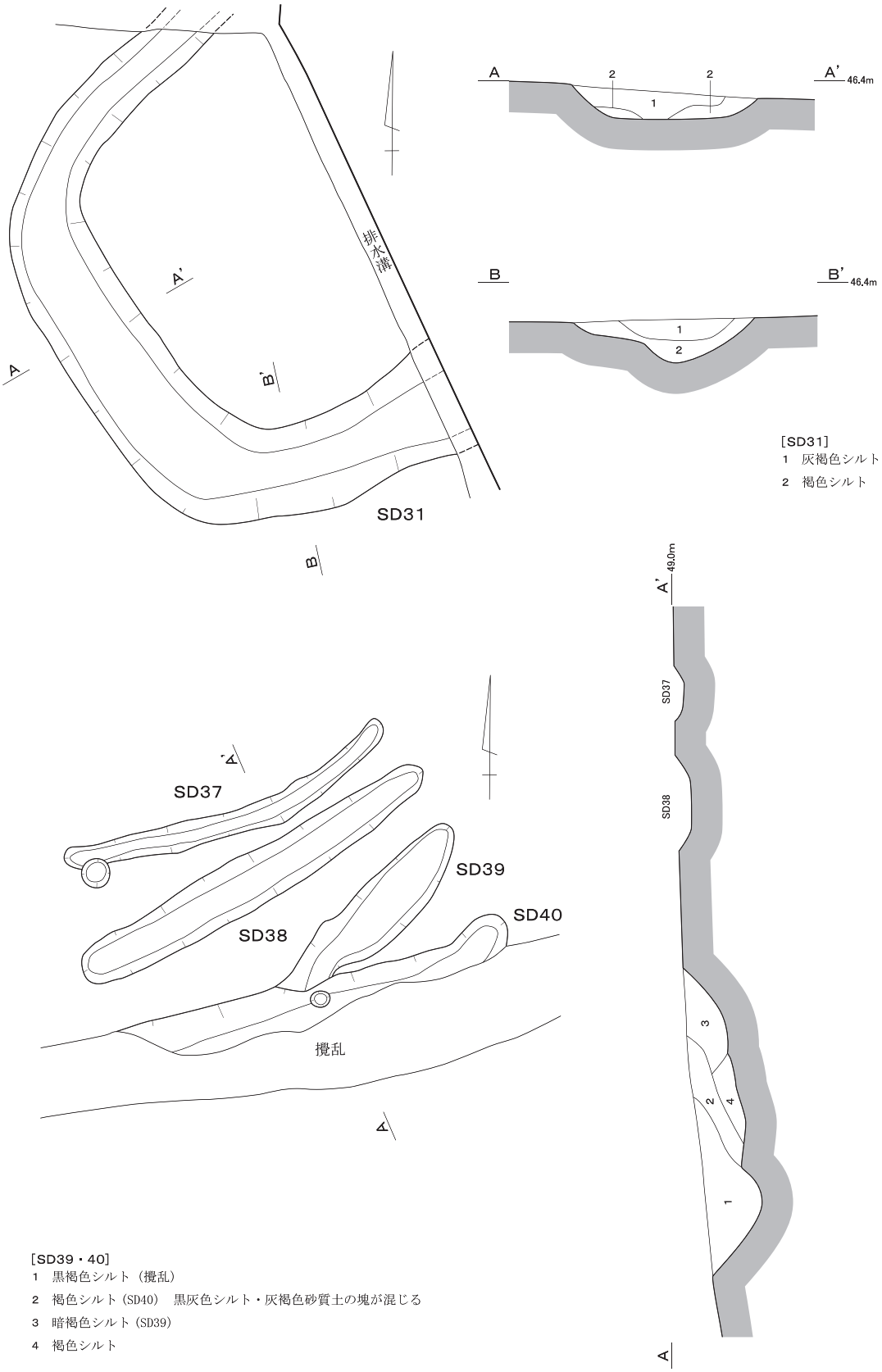
第137図　溝状遺構　実測図⑨

SD31からは出土遺物がなく、時期を特定できない。方形周溝墓であるとすれば、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる可能性がある。

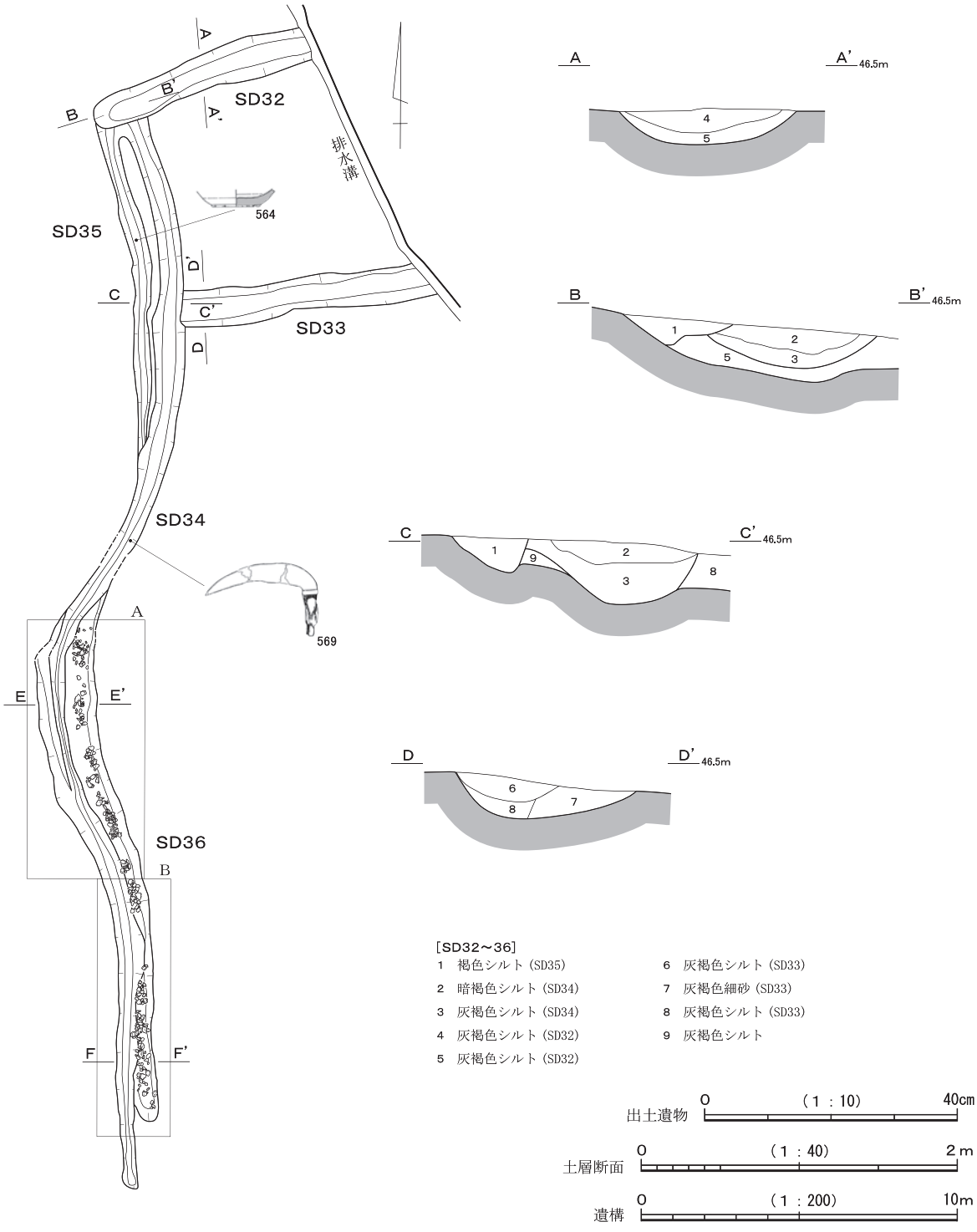
（21）SD37～40（第138図，第12表）

SD37～40は同じ位置にあり、ほぼ平行することから一括して報告する。SD37～40は１区Ｂ78・79グリッドに位置する。約４～７ｍの短い溝である。東北東から西南西に延びる。断面は皿状あるいはＵ字形である。SD39・SD40は重複関係にあり、土層断面を見るとSD40がSD39を破壊している可能性が高い。

SD37～40は出土遺物がなく、時期を特定することはできない。



第138図　溝状遺構　実測図⑩

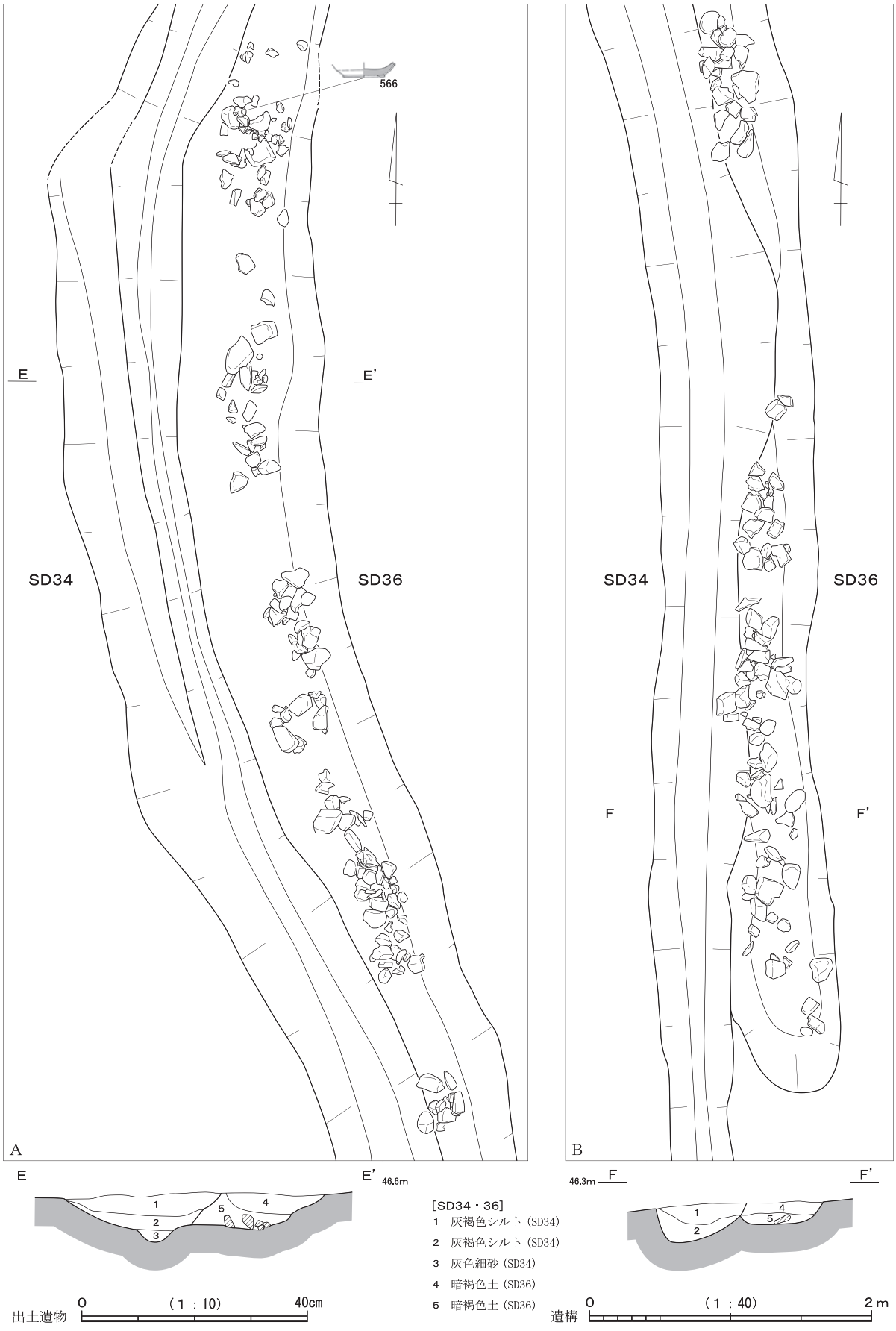


第139図　溝状遺構　実測図⑪

（22）SD32～36（第139～141図，第12・14・16表，巻頭図版12，図版29・45・53・57・64）

SD32～SD36はほぼ同じ位置にあることから一括して報告する。SD32～36は、１区－A79、A79、B79・80、C79・80グリッドに位置する。

SD32・33　SD32・SD33は東西に向かって伸びる。SD32・33ともに、東側が調査区外、西側がSD34に破壊されている。両者ともに断面U字形である。SD32からの出土遺物はなく、時期を特定できない。SD33からは山茶碗、肥前青磁碗が出土した。山茶碗（558）は無台碗で、底面は糸切り未調整で、ソダ



第140図　溝状遺構　実測図⑫

痕が残る平底である。胎土の特徴から渥美湖西産で、松井編年渥美湖西Ⅲ－２期に位置づけることができる（松井1989）。肥前青磁碗（559）は近世後期に位置づけられる可能性が高い。したがって、SD33は近世（江戸時代）後期以降に位置づけられる可能性が高い。

SD34～36　SD34～36はほぼ同じ位置にある溝で、掘り直しや流路の変更があったものである。蛇行することから区画溝とは断定しにくいが、排水などのための溝であった可能性が高い。

土層断面から見ると、C–C′断面ではSD35の１層が、SD34の３層を掘り込んで形成されていることから、SD34→SD35の順であることがわかる。一方、E–E′およびF–F′断面では、SD34の１～３層が、SD36の４・５層を掘り込んで堆積したと判断できるため、SD36→SD34の順であることが判明する。したがって、３者は、SD36→SD34→SD35の順で掘削された可能性が高い。断面はいずれもＵ字形である。SD36は底面上から小礫が出土しており、暗渠として機能していた可能性が高い。

出土遺物は、SD34では近世陶器、常滑など、SD35ではかわらけ、SD36では常滑が出土した。

SD34出土遺物　SD34出土遺物で図化できたものを報告する。

560は土師質土器で、内耳鍋あるいはホウロクの口縁部の破片である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外側に若干折り返されたような状況を呈する。内耳鍋とすれば、口縁部は図よりも内湾度を増した状態で表現する必要があるが、鈴木正貴氏分類の内耳鍋Ｃ類の可能性が高く、16世紀後半～17世紀前半頃に位置づけることができる（鈴木正1996）。一方、ホウロクであるとすれば、金子建一氏分類のＢ類の可能性がある。この場合も16世紀後半～17世紀ごろに位置づけられる可能性が高い（金子1996）。561は遠江型甕の底部である。外面は底部と胴部にススが付着している。562は灰釉陶器碗で、高台は潰れた三角高台である。宮口産で、松井編年宮口Ⅳ－１期に位置づけられる可能性が高い（松井1989）。563～566は山茶碗で、563は高台が太い、潰れた三角高台である。高台には籾殻痕は確認できない。565は潰れた三角高台であるが、やや高い。564は潰れかかっているがやや高い高台、566は潰れて形骸化した高台である。胎土の特徴からいずれも渥美湖西産で、563は松井編年渥美湖西Ⅰ－１期、564はⅠ－２～Ⅱ期、565はⅢ－１期、566はⅢ－２期に位置づけられる（松井1989）。

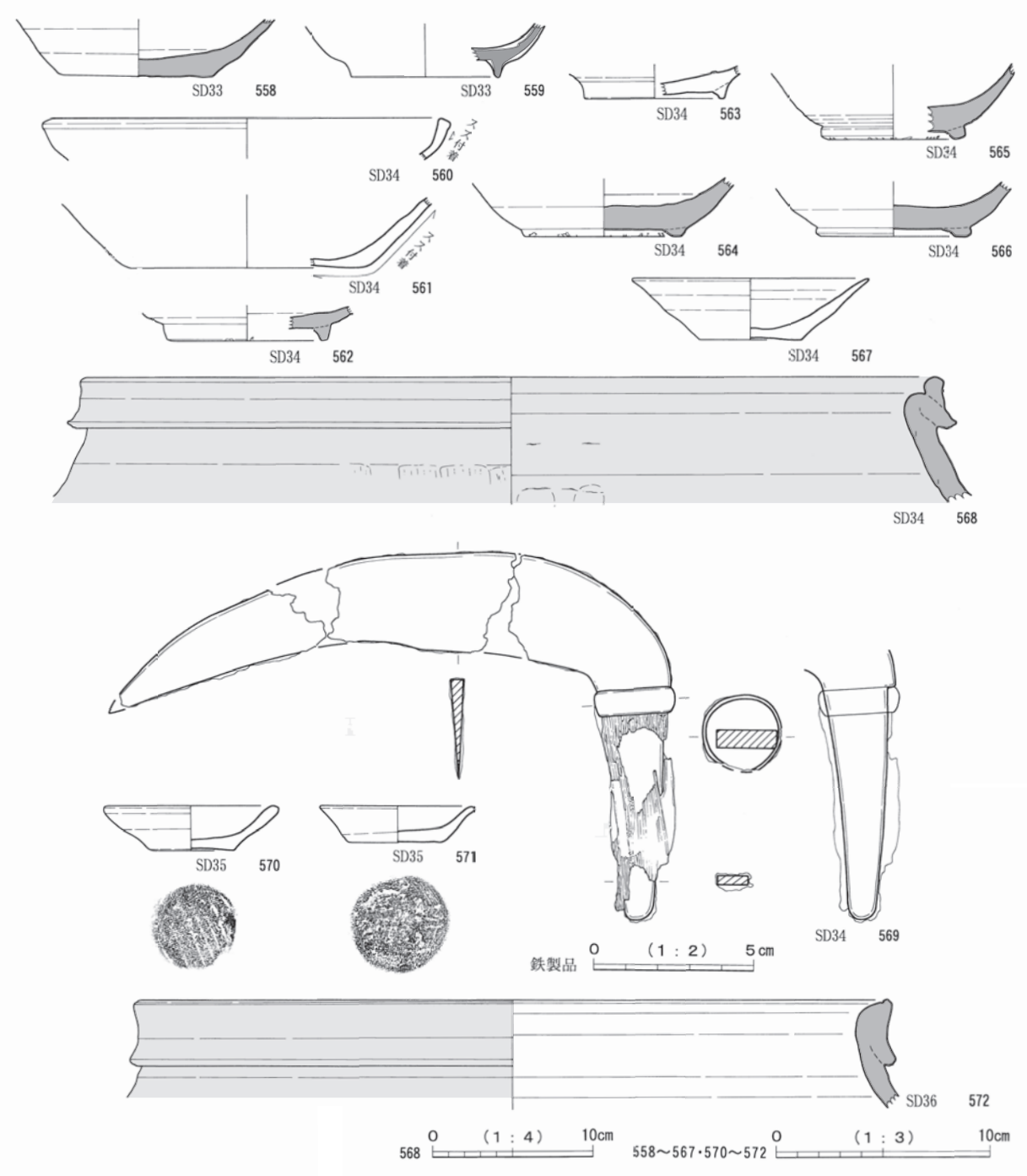
かわらけ（567）はロクロ成形かわらけである。底部が狭く、口径が約11cmとやや大きい。体部は底部から一旦内側に入った後、外上方に直線的に広がるものである。松井編年で16世紀後半頃に位置づけることができる。常滑甕（568）は頸部から口縁部の破片で、Ｎ字形の口縁部である。常滑６ｂ型式に位置づけられる可能性が高い。

鉄鎌（569）は木柄付きである。木柄と鎌本体は責金具で固定されている。茎と刃部の間には背側に段を設け責金具が外れないようにしている。茎は茎尻に向かい先細り、茎尻は丸尻である。刃部はやや内湾しながら先端まで伸びるもので、切先は細い。近世以降と推測するが時期を特定することは難しい。

SD35出土遺物　SD35からはかわらけが出土した。両者（570・571）ともに、皿状の小型のロクロ成形かわらけである。底部には糸切痕が残存する。底部が小さいわりに口径が大きい特徴から、松井編年で16世紀後半頃に位置づけられる（松井1993）。

SD36出土遺物　常滑甕の口縁部片（572）が出土した。572は口縁部がＮ字形であり、口縁部外側が内側よりもわずかに高く、外側の幅が広い。これらの特徴から中野編年常滑９型式（15世紀前半～中頃）に位置づけることができる（中野1995・2005）。

SD34～SD36の時期　最も古いSD36から出土した遺物の中に常滑甕（16世紀前半～中頃）のものがあり、中世後期以前まで遡る可能性がある。SD34は近世陶器が出土しており、近世（江戸時代）以降に位置づけられる。切合関係からSD35はSD34よりも新しく位置づけることができることから、近世（江戸時代）以降に位置づけることができる。

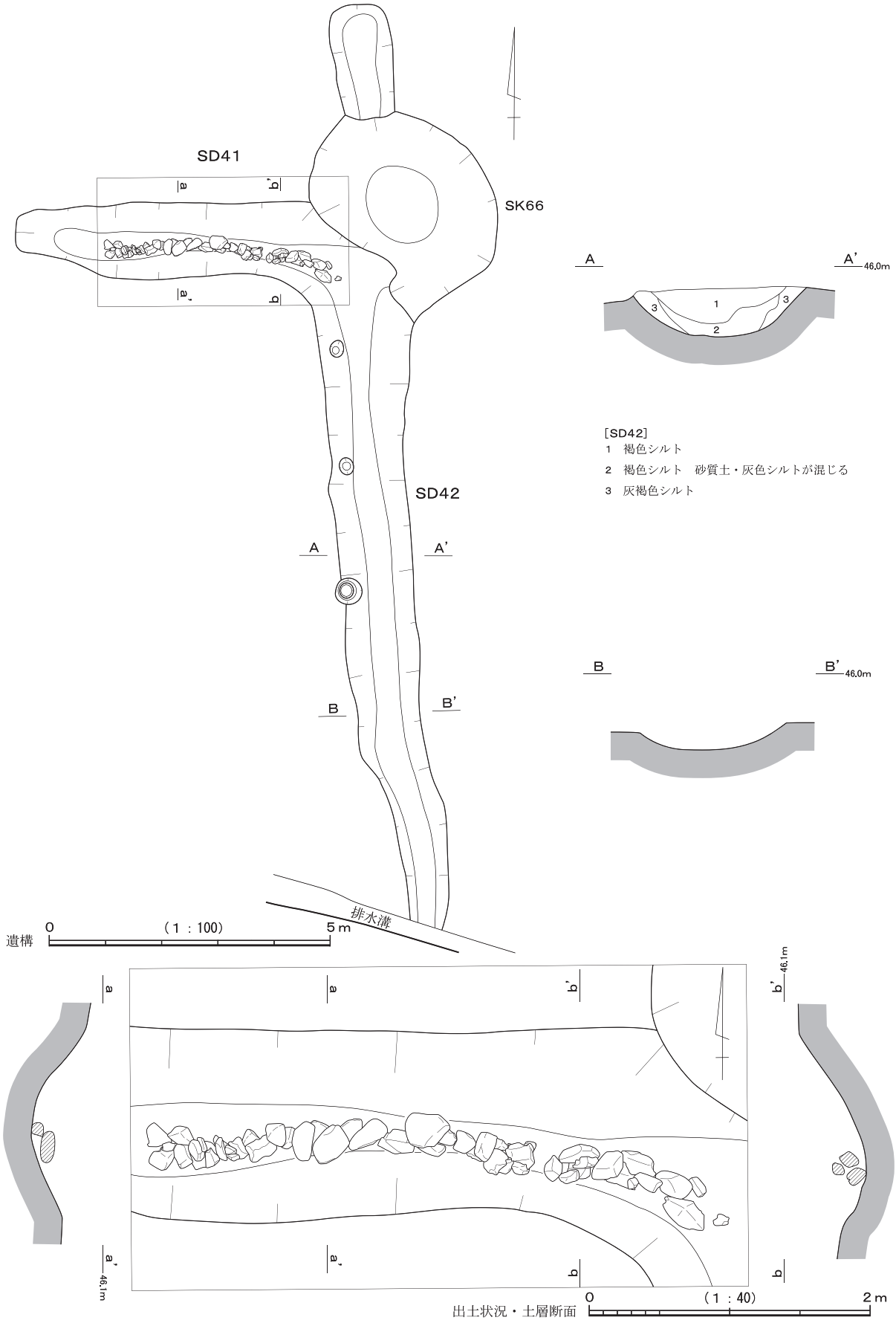


第141図　溝状遺構出土遺物実測図②

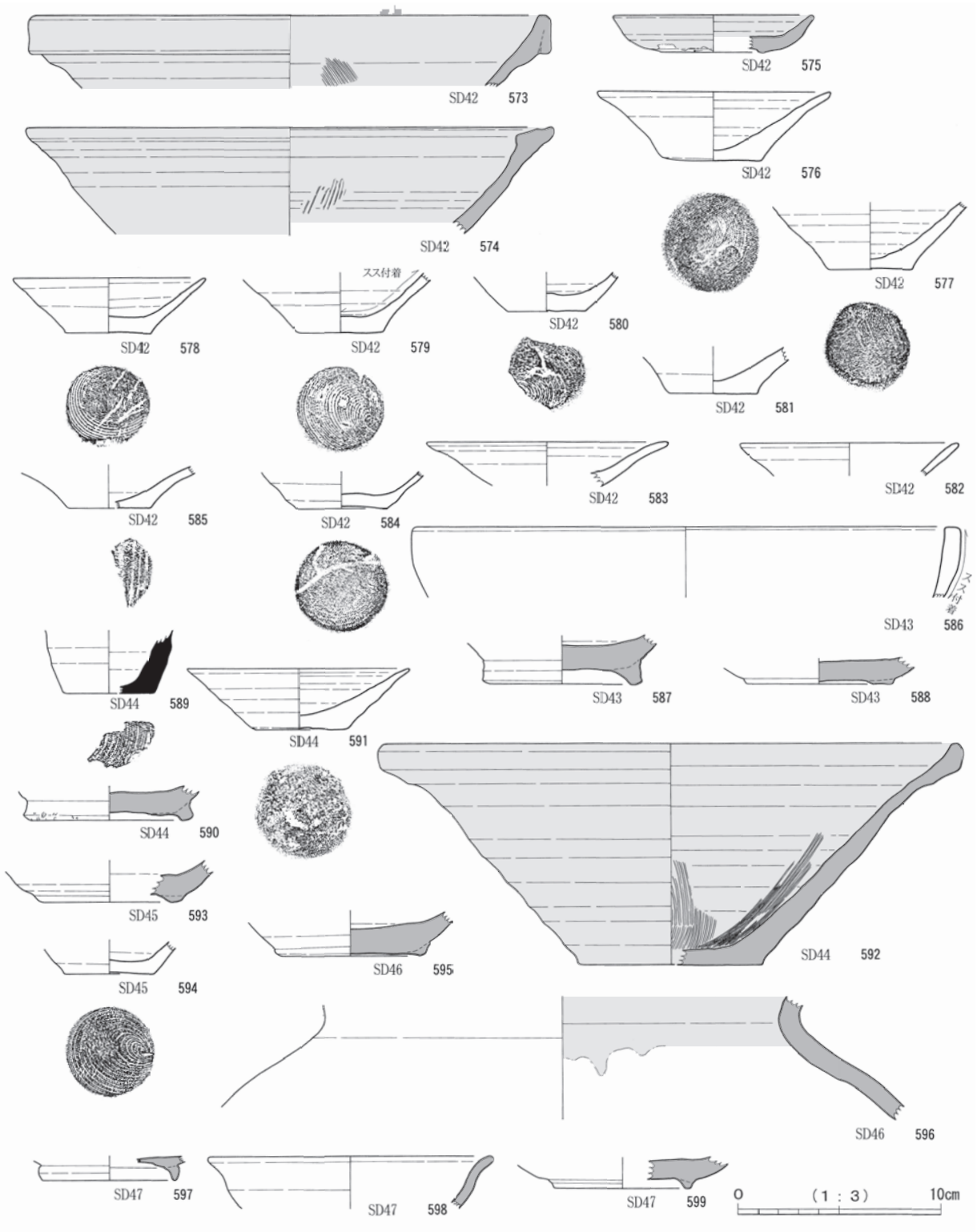
（23）SD41・42（第142・143図，第12・14表，巻頭図版12，図版64）

SD41・42は別々に遺構番号を付加したが、同一の溝の可能性が高い。SD41・42は１区－Ｂ79、－Ａ78・79、Ａ79グリッドに位置する。

SD41・42は本来Ｔ字形に交差する溝であった可能性が高い。SD41にはSD36のように底面上に礫が据えられており、暗渠として機能していた可能性が高い。SD42には礫は確認できない。SD42の北側はSK66の北側まで伸びている。SK66との切合関係は明らかにすることができなかった。両者ともに断面Ｕ字形である。土層断面A–A′を見ると、一旦堆積した土砂を掘り込むように２層が堆積していることから掘り直しが行われた可能性がある。



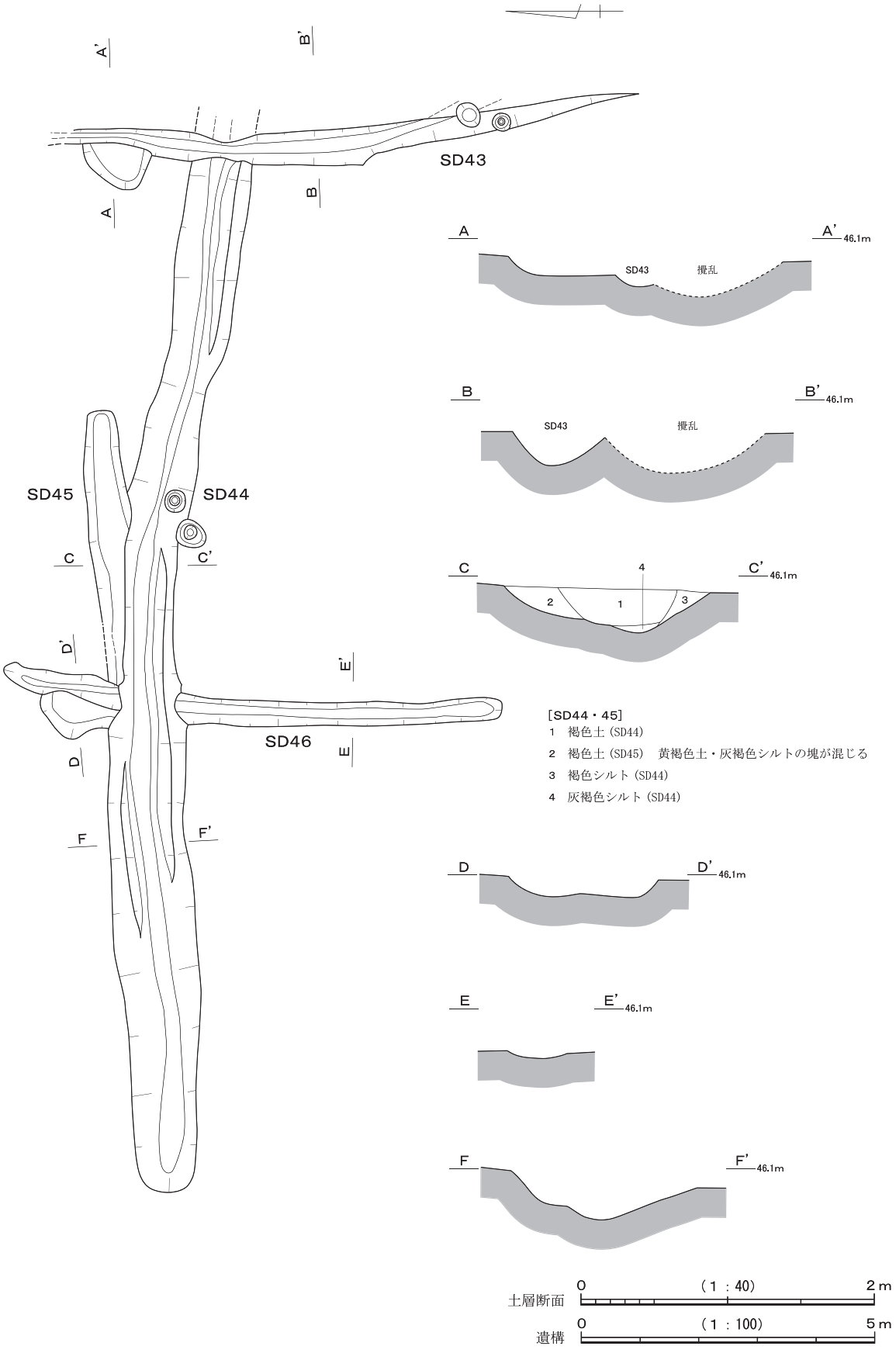
第142図　溝状遺構　実測図⑬



第143図　溝状遺構出土遺物実測図③

SD41からの出土遺物はない。SD42からは、かわらけ、中世陶器などが出土した。小片のため図化できないものが多いが、このうち中世陶器とかわらけを図示した。

擂鉢（573・574）は、573が瀬戸美濃大窯期の製品で、口縁部を外側に折り返す特徴から藤澤編年大窯３期後半（藤澤1991・2005）、574が志戸呂製品で、口縁部内面に段をつける特徴から17世紀後半～18世紀前半に位置づけることができる。575は、初山の丸皿である。藤澤編年瀬戸美濃大窯３期後半併行（16



第144図　溝状遺構　実測図⑭

世紀後半～末）に位置づけられる（藤澤2005）。かわらけ（576～585）はすべてロクロ成形かわらけである。体部の立ち上がり状況や、焼成具合などから判断して、576・577が松井編年（松井1993）で16世紀後半、578・579が17世紀前半、580～583が17世紀、584・585の体部が内側に沿って立ち上がる特徴などから18世紀代に位置づけることができる。

したがって、SD41・42はかわらけの年代が18世紀代まで降るものがあることから、少なくとも18世紀代まで機能していた可能性が高い。

（24）SD43～46（第143・144図，第12・14表，巻頭図版12，図版53・57・58・65）

SD43～46は同一箇所に位置することから一括して報告する。SD43～46は、調査区南側、１区－A76・77、A75～77グリッドに位置する。

SD43・SD46は南北に向かって伸び、SD44・45は東西に向かって伸びる。SD45とSD44は重複しており、C-C′断面をみると、SD44がSD45を掘り込んでいることから、SD45→SD44の順であることがわかる。いずれも断面はＵ字形である。SD43とSD44、SD44とSD46の前後関係については明確にすることができなかった。

SD43からは土師質鍋、山茶碗など、SD44からは近世陶器、かわらけなど、SD45からは近世陶器、かわらけなど、SD46からは山茶碗、常滑などが出土した。小片が多く、図化できたものは少ない。

SD43出土の土師質土器（内耳鍋，586）は半球形の内耳鍋で、口縁部は内湾傾向であるがほぼ直立することから、鈴木正貴氏の遠江の内耳鍋Ｂ２類に位置づけられる可能性が高く、17世紀後半～18世紀初頭ごろに位置づけられる可能性が高い（鈴木正1996）。外面にはススが付着している。山茶碗（587・588）は、前者が高く太い高台で、後者が形骸化した低く潰れた高台である。両者とも渥美湖西産で、587が松井編年Ⅰ期、後者がⅢ-２期に位置づけることができる（松井1989）。

SD44出土の須恵器（589）は小型の壺の可能性がある。底部は平底で小さく、胴部はやや内湾しながら立ち上がる。壺Ｇと呼ばれる平底で胴部が細く長い頸の小型長頸壺の可能性がある。この想定が正しければ、遠江Ⅵ期に位置づけることができる（鈴木敏1998）。湖西産の可能性が高い。山茶碗（590）は底部片で、底部はやや低い高台で、籾痕が確認できるが、高台径がやや大きいことから、松井編年渥美湖西Ⅰ-２～Ⅱ期に位置づけられる。かわらけ（591）はロクロ成形かわらけで、硬質な焼き上がりと、体部が底部から直線的に外上方へ立ち上がる特徴から、松井編年で17世紀前半に位置づけることができる（松井1993）。擂鉢（592）は瀬戸美濃古瀬戸段階の擂鉢である。藤澤編年古瀬戸後Ⅳ新～大窯１段階に位置づけることができる（藤澤2005）。この擂鉢の内面は滑らかであり、何回も使用されたことがわかる。

SD45出土の山茶碗（593）は形骸化した低く潰れた高台であり、松井編年渥美湖西Ⅲ-２期に位置づけられる（松井1989）。かわらけ（594）は、ロクロ成形かわらけで、底部がやや上げ底であることなどから、18世紀代に位置づけることができる（松井1993）。

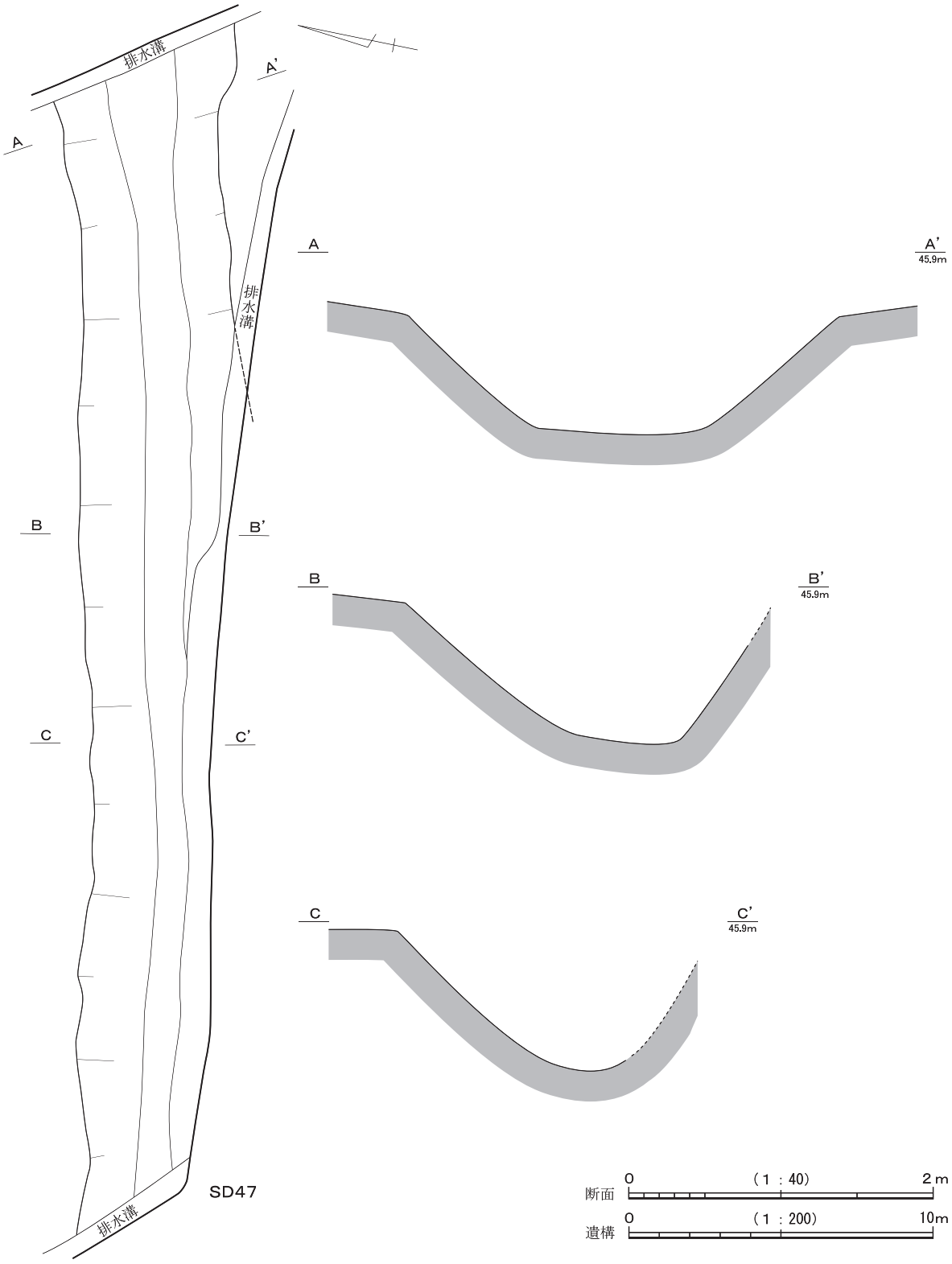
SD46出土の山茶碗（595）は形骸化した低く潰れた高台で、松井編年渥美湖西Ⅲ-２期に位置づけることができる（松井1989）。常滑甕（596）が肩部の破片であり、時期を特定するには至らない。

SD43～46については、SD46が山茶碗と常滑であり、中世まで遡る可能性があるが、それ以外はいずれも江戸時代以降に位置づけることができる。

（25）SD47（第143・145図，第12・14表，図版53）

SD47は、調査区南東隅角、１区－C81～83グリッドに位置する。

SD47は幅5.0m、深さ約0.8mの大型の溝で、大型の区画溝である可能性が高い。調査区の南東端での検出のため、何を区画したのか判断しにくいが、集落を区画にした溝である可能性が高い。断面はＵ

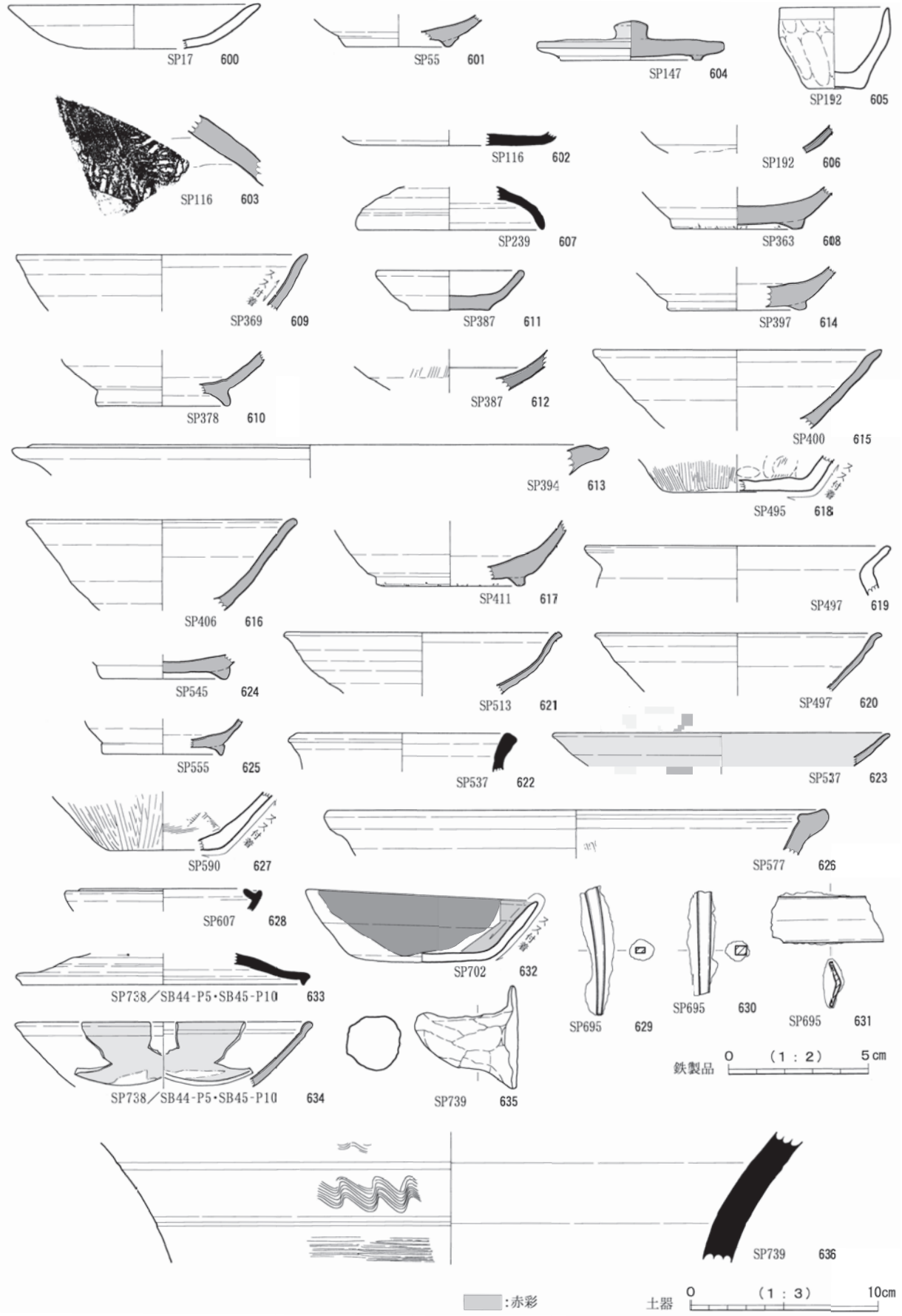


第145図　溝状遺構　実測図⑮

字形である。

出土遺物は、近世陶器、常滑、かわらけなどが出土しているが、小片のため図化できた個体は少ない。

灰釉陶器碗（597）は爪形高台で、胎土の特徴から宮口産で、松井編年宮口Ⅳ-２期に位置づけられる。山茶碗の口縁部片（598）は、口縁部を外反させるもので、松井編年渥美湖西Ⅰ-１期に位置づけること



第146図　小穴出土遺物実測図①

ができる。山茶碗（599）は潰れた低い高台で、渥美湖西Ⅲ−１期に位置づけられる（松井1989）。

SD47は、図示していない遺物から最終的に近世以降に埋没した可能性が高いが、掘削時期を特定するには至らなかった。掘削時期も近世であろうか。

（26）溝状遺構まとめ

溝状遺構は47条確認し、基本的には暗渠、区画溝が多いと判断したが、竪穴建物や掘立柱建物との時期的な関係が不明確であることから、何を区画していたのかについては明確にすることができない。

7　小穴（図版31）

北垣遺跡では、非常に多くの小穴（Pit）が出土し、中には柱の痕跡を確認できるものもあるが、掘立柱建物を想定するまでには至らないものが多い。したがって、今回想定した以上の掘立柱建物が存在する可能性が高い。

また、上述した掘立柱建物の中には石材を根固め石や礎石に用いたものは確認できなかったが、図版31に掲載した小穴には石材が出土した小穴（SP92・402・635など）があることから、掘立柱建物の一部には不同沈下を防ぐために石材を利用した建物も存在した可能性がある。

なお、小穴から出土した遺物については、第146・147図に示し、遺構外出土の近世以降の遺物とともに報告する。

8　小穴および遺構外出土遺物

（第146〜154図，第14・16〜18表，巻頭図版９・11・12・15・16，図版43〜45・53・56・65〜75）

（１）須恵器（第146・147図，第14表，図版43）

607（SP239）は半球形の杯蓋（杯Ｈ蓋）で、口縁部と天井部は稜線で区画する。口縁端部は丸く収められる。遠江Ⅳ期前半を前後する時期に位置づけられる。湖西産の可能性が高い。628（SP607）はたちあがりのある杯身（杯Ｈ）で、立ち上がりは口縁部よりわずかに高いだけであることから、遠江Ⅳ期前半でもⅣ期後半に近い時期に位置づけることができる。

633（SP738ほか）は摘蓋で、水平に近い天井部で、口縁端部は内側に向かって折り返される。遠江Ⅴ期後半頃に位置づけることができる。650（SP841）は摘蓋で、天井からハ字形に垂下し、口縁部をＬ字形に折り曲げるものであり、遠江Ⅴ期前半に位置づけられる可能性が高い。

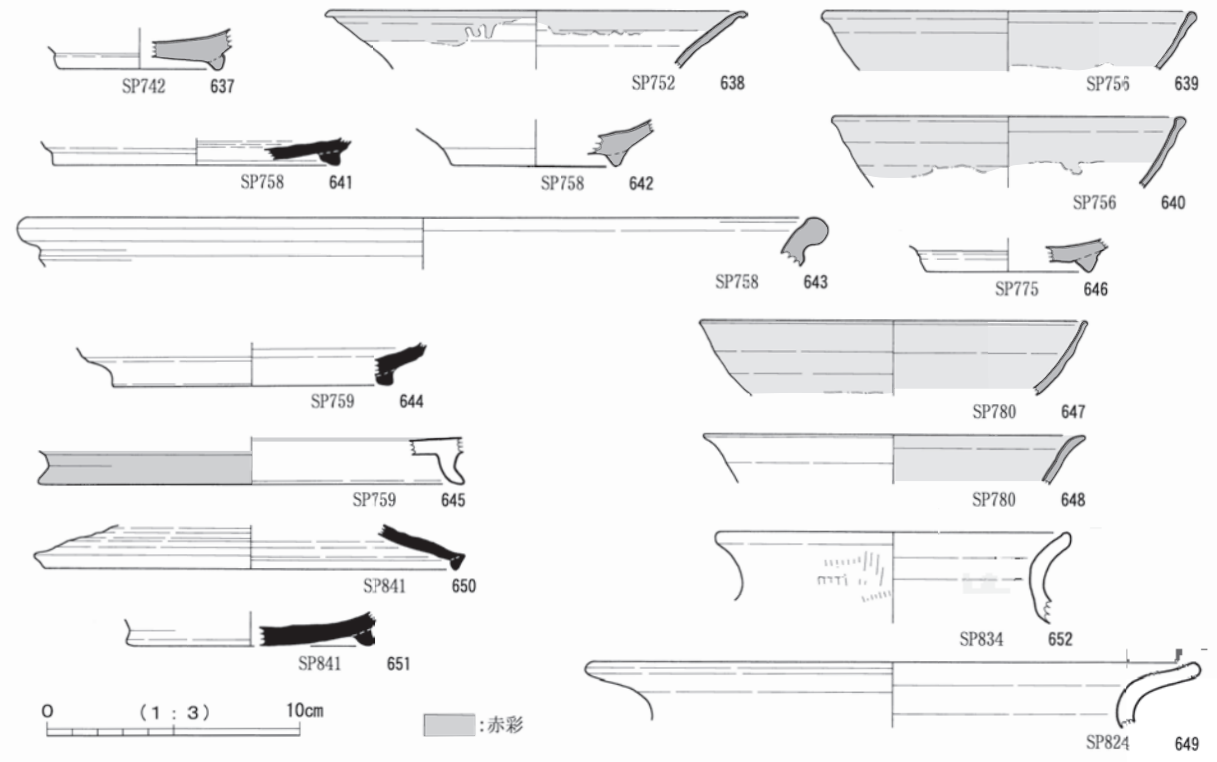
641（SP758）は有台杯で、底部が高台よりも垂下するものである可能性が高い。遠江Ⅴ期前半に位置づけることができる。644（SP759）も有台杯であるが形状が不明なため時期は特定できない。651（SP841）は有台杯であるが、焼成が弱く、土師器のような焼き上がりである。底部が高台よりも下に下がるもので遠江Ⅴ期前半に位置づけることができる。

602（SP116）は箱形杯である。底部片であり、時期を特定することは難しい。

622（SP537）は短頸壺の口縁部であり、口縁部はほぼ直立し、口縁端部は外側にやや拡張され、外形する面をもつ。時期を特定することは難しい。

636（SP739）は大型甕の頸部片で、破片下部は横方向のカキメ調整、その上位に波状文、その上に稜線を一条巡らせ、さらに波状文を施すものである。波状文の方向から文様は右利きの工人が描いた可能性が高い。時期を特定することは難しい。

603（SP116）は甕の胴部片であり、外面には平行タタキ調整が行われている。タタキが須恵器に施されるものと異なることから、灰釉陶器や山茶碗段階の甕の可能性がある。



第147図　小穴出土遺物実測図②

（２）土師器（第146・147図，第14表，図版44・65）

605（SP192）は土師器のミニチュア土器で、手捏ね成形である。底部は平底で、体部は直立に近く外上方へ向かって立ち上がった後口縁部をほぼ垂直に立ち上がるものである。奈良時代～平安時代に位置づけることができる。

632（SP702）は、杯であり、口縁部の内面に赤彩が行われている。外面にも塗られていた可能性が高い。口径と底部径の差が大きい。口縁部のナデ調整は丁寧に行われていることから、遠江Ⅵ期併行期（K14窯式併行期）の土師器杯（９世紀前半）に位置づけることができる。口縁部の一部にススが付着しており、灯明に使用されていたことがわかる。

645（SP759）は有台盤で、盤の内外面と台の外面に赤彩が行われている。台部はやや高く、盤から垂直に垂下した後急激に外側に外反させている。この特徴から遠江Ⅴ期前半併行期に位置づけることができる。

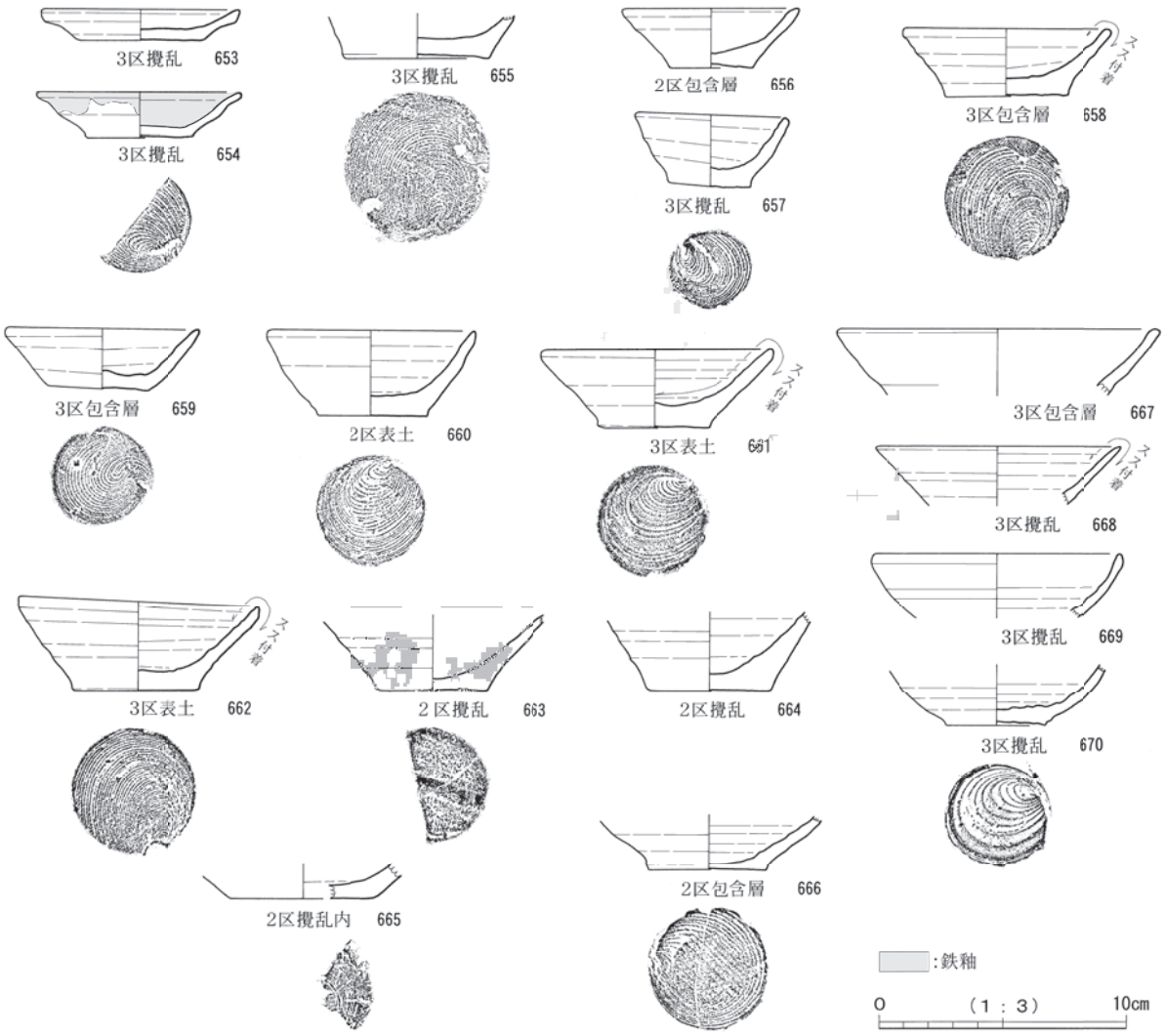
618（SP495）・627（SP590）は甕底部片で、平底で、外面にはハケ調整が行われている。

619（SP497）はく字形口縁の甕あるいは鍋である。時期を特定することは難しい。649（SP824）・652（SP834）は甕の口縁部片で、頸部はコ字形で、652は口縁部が外上方へ向かって立ち上がるもの、649はほぼ水平に延びるものである。奈良時代～平安時代に位置づけることができる。

635（SP739）は甑の把手である。角形の把手で、口縁部先端を上に向かって急激に尖らせる。

（３）灰釉陶器（第146・147図，第14表，巻頭図版11，図版45）

清ヶ谷産　620（SP497）は口縁部を外側に向かって急激に外反させることから松井編年（松井1989）清ヶ谷Ⅲ－２期、638（SP752）・647（SP780）は口縁部を外反させるものでⅢ－１期、621（SP513）・623（SP537）・648（SP780）は、外側に向かって外反させるが638よりは突出度が弱いもの、外反度が弱いものでⅢ－２期、625（SP555）は低い三日月高台でⅢ－２期、639（SP756）・640（SP756）は外反



第148図　近世以降の遺構外出土遺物実測図①

せず、口縁部を肥厚させることで外反しているように見せるものでⅢ－１期、601（SP55）は低い三角高台であることからⅣ－１期、610（SP378）はやや高い爪形高台であることからⅣ－２期に位置づけることができる。

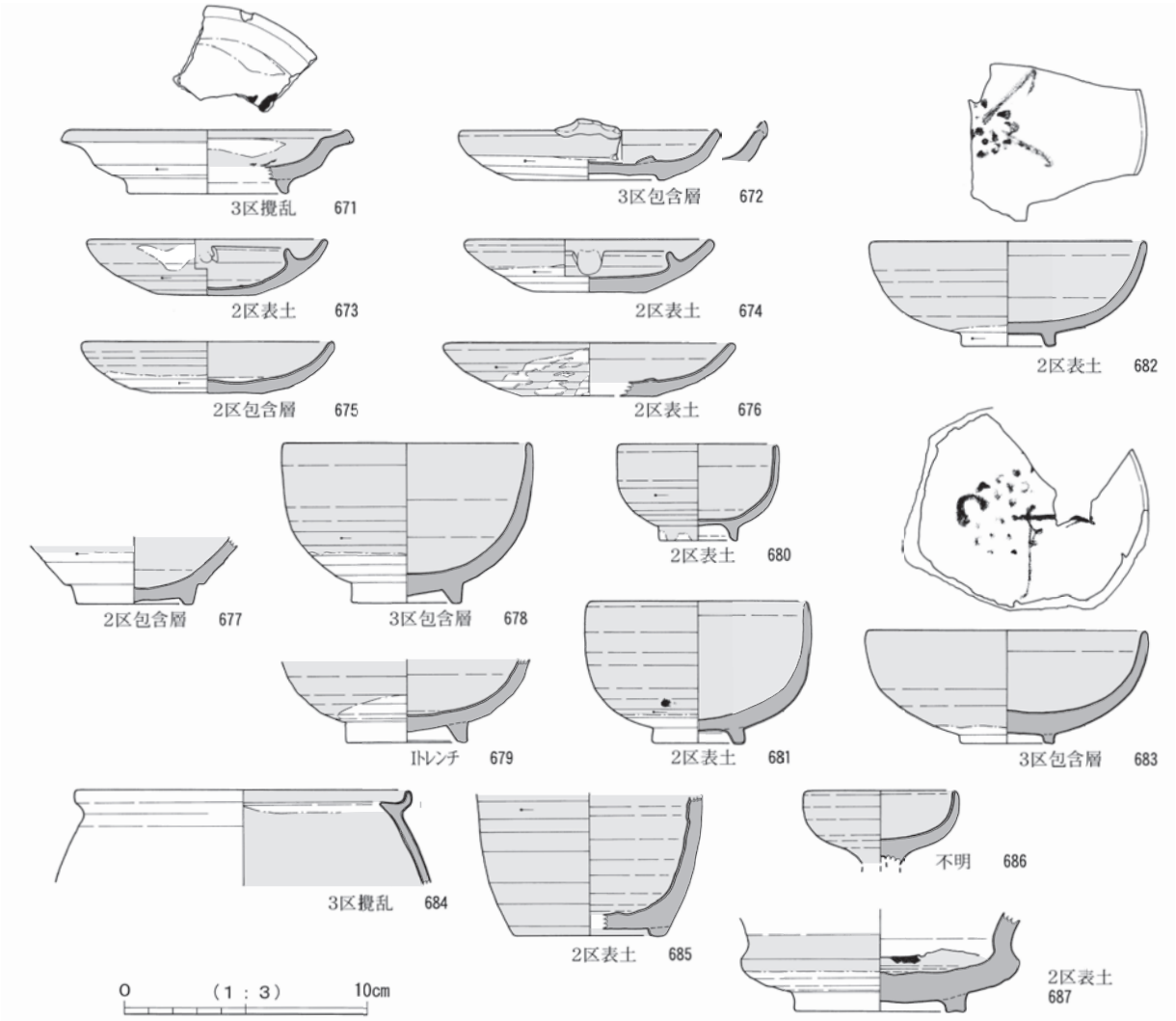
宮口産　624（SP545）・637（SP742）・642（SP758）・646（SP775）は低い三角高台であり、松井編年宮口Ⅳ－１期に位置づけることができる（松井1989）。

その他　643（SP758）は鉢、壺あるいは甕の口縁部破片であるが、灰釉陶器あるいは山茶碗の胎土と類似することからここで報告する。口縁部は玉縁状に丸く仕上げられており、口縁部内面は強く撫でられている。口縁部直下に段を設けている可能性が高い。類例を見出すことができず、新しい時期の遺物である可能性も残る。類例をご存知の方に御教示願いたい。

（４）山茶碗（第146図，第14表，図版53・64）

渥美湖西　615(SP400)は直線的に伸びて、口縁部をやや外反させることから松井編年(松井1989)Ⅰ－１期､616(SP406)は直線的に立ち上がり口縁部をやや外反させ丸く収めることからⅠ－２期､609(SP369)はほとんど外反していないことからⅡ期、608（SP363）・617（SP411）は低く潰れた高台であることからⅢ－１期、614（SP397）は潰れて形骸化した高台であることからⅢ－２期に位置づけることができる。

東遠江　山皿611（SP387，図版64）は、底部から外上方へ向かって立ち上がるが、底部から立ち上



第149図　近世以降の遺構外出土遺物実測図②

がる時内側に一旦入るものであることから東遠系山茶碗Ⅱ期に位置づけることができる（松井1989）。

（５）白磁（第146図，第14表，巻頭図版12）

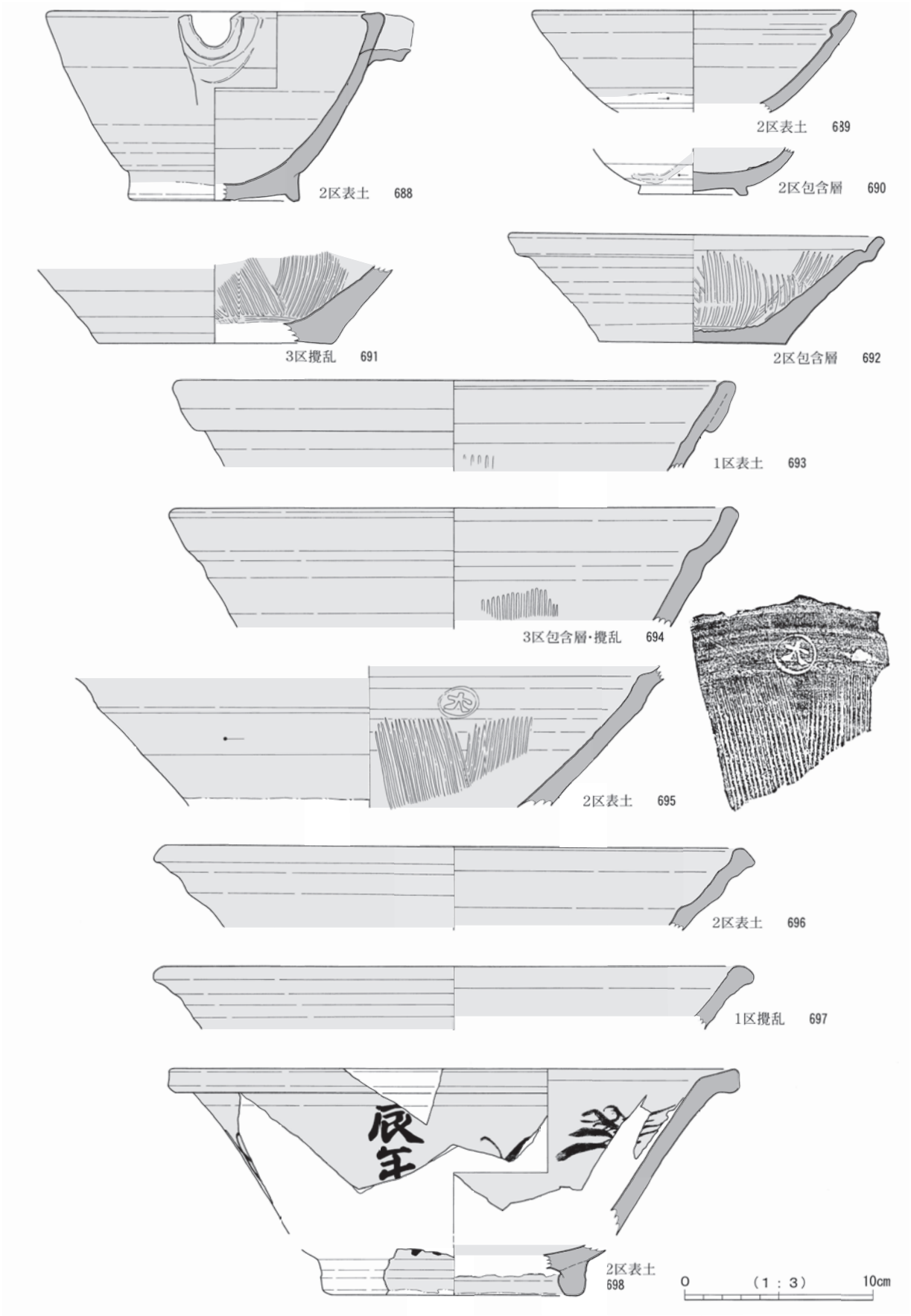
606（SP192）・612（SP387）は白磁の小皿である。606は外面に稜線が確認できる。606・612ともに内面に沈線がある。

（６）かわらけ（第146・148図，第14表，巻頭図版16，図版65）

非ロクロ成形かわらけ　SP17出土の600は手づくね成形である。平底で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。16世紀前半に位置づけることができる。

ロクロ成形かわらけ　北垣遺跡から出土した大部分のかわらけがロクロ成形であり、非ロクロ成形は10点にも満たない。この傾向は隣接する中屋敷遺跡（大谷2011）の傾向と合致している。

皿状のかわらけ（653）は、小型のもので、広い底部に短く直線的に立ち上がる口縁部で、口縁部は肥厚させられ、三角形状を呈している。16世紀後半頃に位置づけられる。655～670は硬質な焼き上がりを呈しており、松井一明氏の研究（松井1993）によれば、おおむね17世紀以降に生産されたものに多いとされることから、近世に位置づけられるが、655は底部がやや広く、体部がやや内湾傾向にあることから17世紀代に位置づけられる可能性が高く、それ以外は口縁部が直線的にあるいは外反気味に外上方



第150図　近世以降の遺構外出土遺物実測図③

へ伸び、口径が９cm前後のもの（656～666・668）、と水挽きの痕跡が目立ち、内湾して立ち上がるもの（667・669・670）があり、656～670は18世紀代に位置づけられる可能性が高い。

鉄釉が塗布されたかわらけ　志戸呂の鉄釉の縁釉小皿のように内面全体と、口縁部外面に鉄釉をかけたかわらけ（654，巻頭図版16）が出土している。底部は糸切り未調整で、体部は外上方に向かって立ち上がり、中ほどで稜をつけてさらに外反させて立ち上がるものである。鉄釉を塗布することから、志戸呂産のかわらけである可能性が高い。口縁部が外反することから、17世紀代に位置づけることができる可能性が高い。

（７）瀬戸美濃（第146・149～151図，第14表，巻頭図版15・16，図版66～70）

北垣遺跡では、瀬戸美濃は古瀬戸、大窯期の製品は少なく、近接する中屋敷遺跡とは様相が異なる。登窯期の製品は多く確認できるが、破片が多く図化できたものは少ない。

604（SP147）は瀬戸産の土瓶の蓋で、18世紀末～19世紀に位置づけられる。634（SP738ほか）は灰釉掛けの碗（の可能性が高い）である。18世紀代に位置づけられる可能性が高い。

671は折縁鉄絵皿で、見込みに鉄釉で文様が描かれている。文様については不明である。美濃産で、藤澤編年（藤澤1987）登窯第２か３小期に位置づけることができる。灯明皿は５点（672～676）出土しており、形態的な特徴から672が美濃産で登窯第７小期、673・674が美濃産で登窯第10小期、675・676が美濃産で登窯第10か11小期に位置づけることができる。

677は天目茶碗で、高台は削り出し高台である。美濃産で登窯第１か２小期に位置づけることができる。678・679は尾呂茶碗で、美濃産、登窯第７小期に位置づけることができる。680は小碗で、美濃産、登窯第８小期に、681は湯呑で瀬戸産、登窯第９小期に位置づけることができる。

682・683は梅文皿で、見込みに梅文が描かれている。ともに瀬戸産で登窯第８小期に位置づけることができる。685は、灰釉掛徳利である。瀬戸産で、登窯第７小期に位置づけられる。686は仏餉器で、瀬戸産で、登窯第８か９小期に位置づけることができる。684は灰釉土瓶の可能性が高く、18世紀末～19世紀初頭ごろに位置づけられる可能性が高い。687は瀬戸産であるが、器種不明である。体部内面には文様がほどこされていた可能性がある。

688～690は片口鉢である。688は美濃産で登窯第７小期に、689は登窯第11小期、690は瀬戸産で、登窯５～７小期に位置づけることができる。

691～697は瀬戸産の登窯期の擂鉢で、口縁部の特徴から、692は登窯第５か６小期、693は登窯第５小期、694が登窯第８小期、695が登窯第８か９小期、696が登窯第９小期、697が登窯第10か11小期に位置づけることができる。691については口縁部が欠損しているため時期を特定できない。695は体部内面に「大」（○の中に大）字のスタンプが押印されている。窯印であろうか。

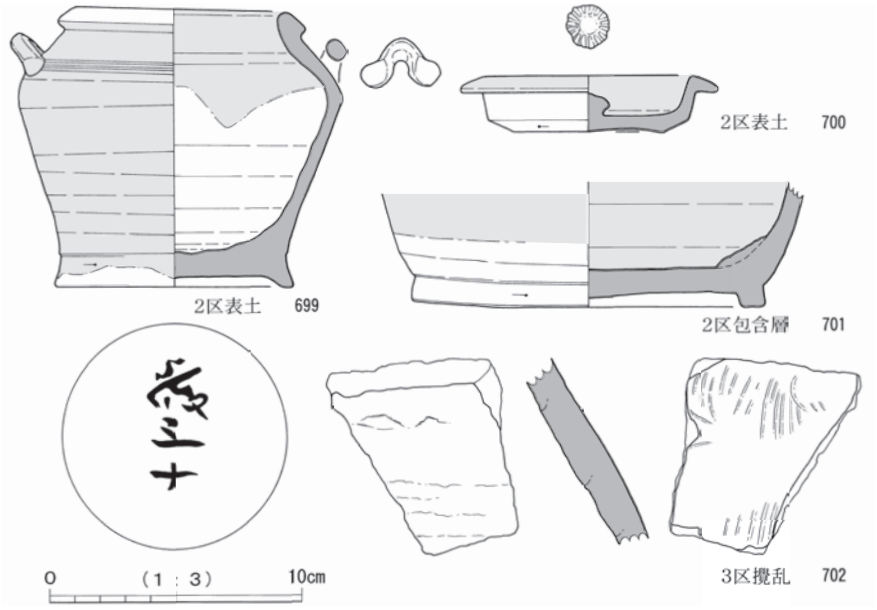
698は手水鉢で、瀬戸産、登窯第11小期に位置づけることができる。外面には墨書で「辰年」と書かれており、購入した年なのであろうか。藤澤編年による実年代を考えれば、登窯第11小期は1850年を前後する時期であり、この辰年は、幕末の1844・1856・1868年のいずれかの可能性が高い。

699は近世墓の報告でも記述したように、蔵骨器として利用された壺である。底部に「歳三十」の墨書がある。器種は有耳壺で、美濃産、登窯第７小期に位置づけることができる。

700は土瓶蓋で、刻みの施された摘みが確認できる。瀬戸産で登窯８か９小期に位置づけられる。701は甕で、瀬戸産、登窯第８～11小期に位置づけられる。

（８）古志戸呂・志戸呂（第146・152図，第14表，巻頭図版12・16，図版70・71）

626(SP577)は擂鉢で、口縁部を突起させることから、古志戸呂(藤澤編年古瀬戸後Ⅳ古段階併行期)に



第151図　近世以降の遺構外出土遺物実測図④

位置づけることができる。

703は、把手付蓋で、半環状の把手が取り付けられる。19世紀代であろう。704は天目茶碗で、17世紀ごろに位置づけられる。705～707は擂鉢で、口縁部の形態から705が17世紀前半、706が17世紀後半から18世紀前半頃に位置づけられる。707は17世紀前半に位置づけられる可能性がある。

708は徳利の可能性があるもので、底部は平底、胴部は筒形である。水注しの可能性も残るが、時期を特定できない。709は香炉であり、体部は波打つ形態であり、口縁部直下には薄い粘土板を貼り付けて、外側から内側へ押圧することで波状あるいは花弁状の装飾を施している。口縁部は外側へ向かい引き出されている。この特徴から、17世紀中頃に位置づけられる可能性が高い。

（９）渥美・常滑（第146・151図，第14表，図版56）

613（SP394）は口縁部の破片であるが、口縁端部は一旦外側に向かって屈曲させた後で、端部を上へ引きだすものである。形態的には常滑甕あるいは壺の口縁部に類似する形態が確認できることから、常滑の可能性が高い。その場合は中野編年常滑２～３型式に位置づけられる可能性が高い（中野2005）。

同時期の渥美湖西古窯群の大アラコ窯（松井編年渥美湖西Ⅰ期の窯）にも同様の口縁部形態があることからその可能性も排除できない。いずれにしても知多半島から渥美半島の山茶碗の初期段階の甕あるいは壺の口縁部形態の可能性が高い。

702は渥美の壺あるいは甕の破片と想定されるもので、外面には自然釉あるいは灰釉が施されている。

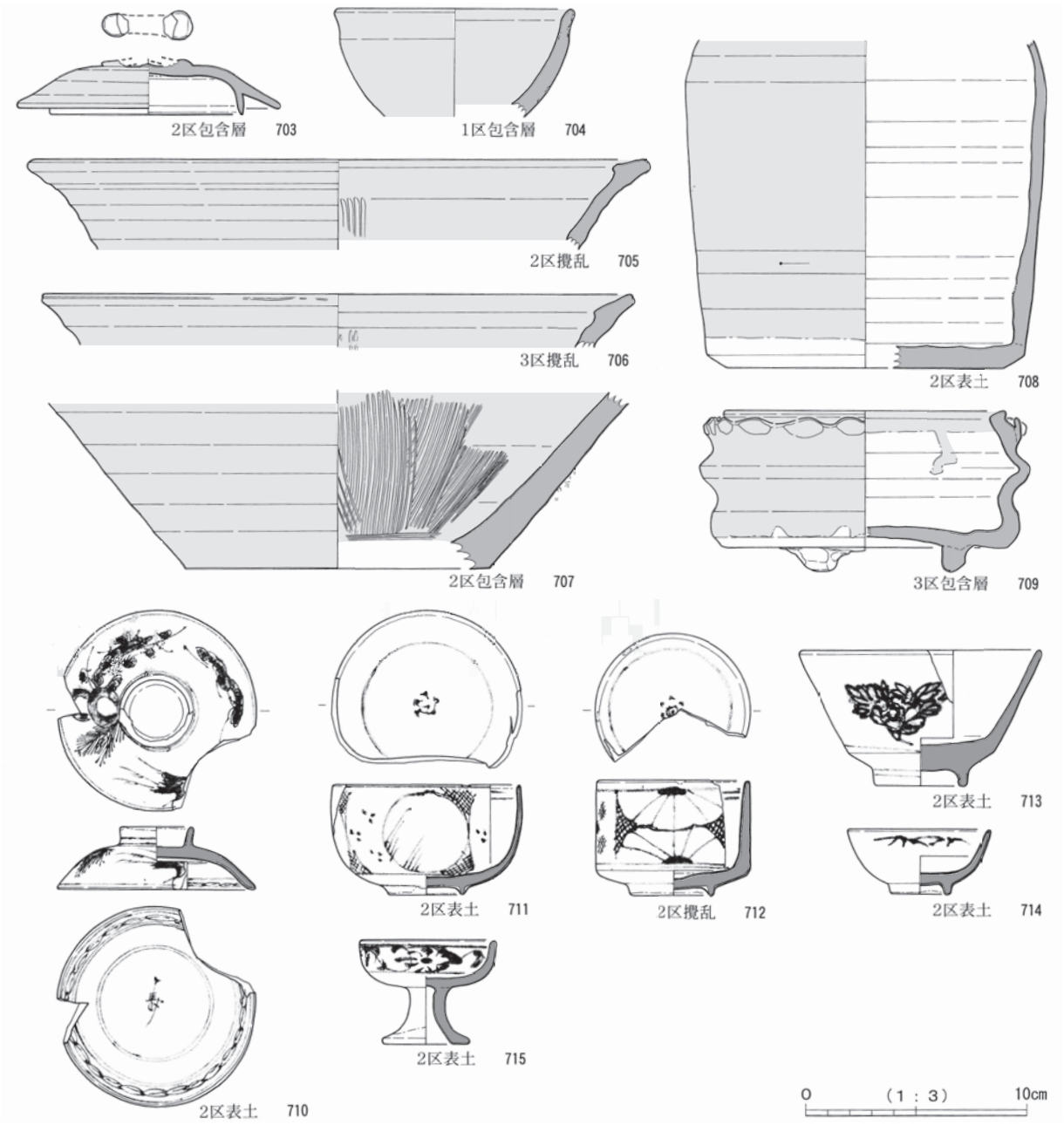
（９）肥前（肥前染付，第152図，第14表，巻頭図版16，図版71・72）

肥前産の可能性が高い染付を報告する。一部瀬戸美濃が含まれている可能性がある。

710は環状把手付蓋で、見込みには「寿」が染めつけられている。内面には口縁部に「ｅ」を逆にしたような絵を連ねた文様とその下位に二重の横線が２段に亘って施される。外面には吉祥の文様（松竹梅と鶴か）が描かれている。711は丸碗で見込みにはコンニャク印判が、外面には円を基調とする文様が４箇所に描かれる。712は筒形碗で、内面見込みにコンニャク印判が、外面には方形の枠の中半円と直線で表現された文様が描かれている。713は広東碗で、外面には樹木文あるいは花文が描かれる。714は小碗で、外面口縁部に笹葉のような文様が描かれる。715は仏餉器で、外面に花文が描かれている。いずれも肥前Ⅴ期（18世紀後半～19世紀中頃）に位置づけられる（大橋1993）。

（10）上記以外の陶磁器（第153図，第14表，図版72）

718は磁器徳利であり、産地は不明である。染付で「∧中酒□」（∧は山か）と「圓田」と書かれている。後者は北垣遺跡が所在する字名であり、前者は４文字目が「店」であるとすれば、円田にある山中



第152図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑤

酒店の徳利である可能性が高い。

716・717は汽車徳利で、716が湯呑、717が急須である。急須には「お茶は」、「静岡」と記載されている。足立順司氏の御教示により、豊岡村（現・磐田市）敷地にあった「遠州製陶」製の汽車徳利であることが判明した。第二次世界大戦後の1950年ごろの製品の可能性が高い。国鉄二俣線（掛川駅～新所原駅，現在の天竜浜名湖鉄道）で売られたお茶を入れた汽車徳利だったと想定できる。

（11）瓦（第153図，第14表，図版73）

軒桟瓦　720は軒桟瓦（燻瓦）である。大部分が欠損しているが軒丸の瓦当部分はほぼ完存している。軒平の瓦当は欠損している。軒丸の文様は三巴文である。江戸時代後期以降現代までの可能性があり、時期を特定することは難しい。

道具瓦　719は道具瓦であるが、どの部位に使用されたものかについては不明である。手造で作成さ

れたものである。まず箱形の台を造り、その上に粘土紐を弧状にしたものを積み上げてトンネル状に成形し、その上部に粘土を充填する。その後で表面を撫でつけて粘土紐の継ぎ目を消した上で中央の筒状部分には粘土紐を貼り付けて鋸歯状に刻みをいれ鰭を表現し、筒状部分には線刻で鱗を表現している。筒状部分の上部にはヘラを使って立体的に波文を表現している可能性が高い。おそらくモチーフは(昇)龍の可能性が高い。製作時期は近世後期～現代の一時期と考えるが、時期を特定できない。

(12) 銅製品（第153図，第16・18表，巻頭図版13，図版74）

銭貨　真鍮銭（721）は「寛永通寶」の四文銭である。裏面の波文が十一波であることから、初鋳は1769年である。

分銅（錘）　分銅（錘，722）は鐘形で、X線写真撮影（図版74）の結果、中実であることが判明した。胴部は肩部に最大径があり、底部に向かってやや窄まる、肩部は二段の段差が造られている。半環状の鈕である。X線写真（図版74）をみると、分銅を縦に半截した位置に鋳バリが観察できることから、二つの鋳型を合せて、それに銅を流し込んで製造したことがわかる。現状で重量は144.569ｇである。肩部には「五十」と読める文字が刻まれている。度量衡の単位とすれば722の現重量からは「五十匁」の可能性が高いが、一匁＝約3.75ｇ×50匁＝187.5ｇであり、40ｇ程差がある。これを錆による銅成分がしみ出した結果とすればよいが、全く別のことを意味する記号である可能性も残る。なお、鈕があることから棹秤の分銅である可能性が高いことから、厳密な重さの分銅ではないことも考えられる。

時期を特定することは難しいが、形態からみれば平安時代よりも遡ることはなく、中世以降近代までの可能性がある。なお、分銅の位置づけについては第６章で評価したい。

銅碗　銅碗（725）は小型の銅碗で、底部は内側に向かって潰れており、本来丸底であったかのか、平底であったのかどうかは不明である。口縁部は内湾しながら立ち上がる。時期は不明である。

大きさは、口径4.4cm、器高1.3cm、器厚１mmである。

(13) 煙管（第153図，第16表，図版74）

煙管は雁首（723）と吸口（724）が出土し、羅宇（723）も一部残存している。真鍮製の可能性が高く、鈍い金色を呈している。江戸時代に位置づけられる可能性が高い。

(14) 鉄製品（第146・154図，第16表，図版75）

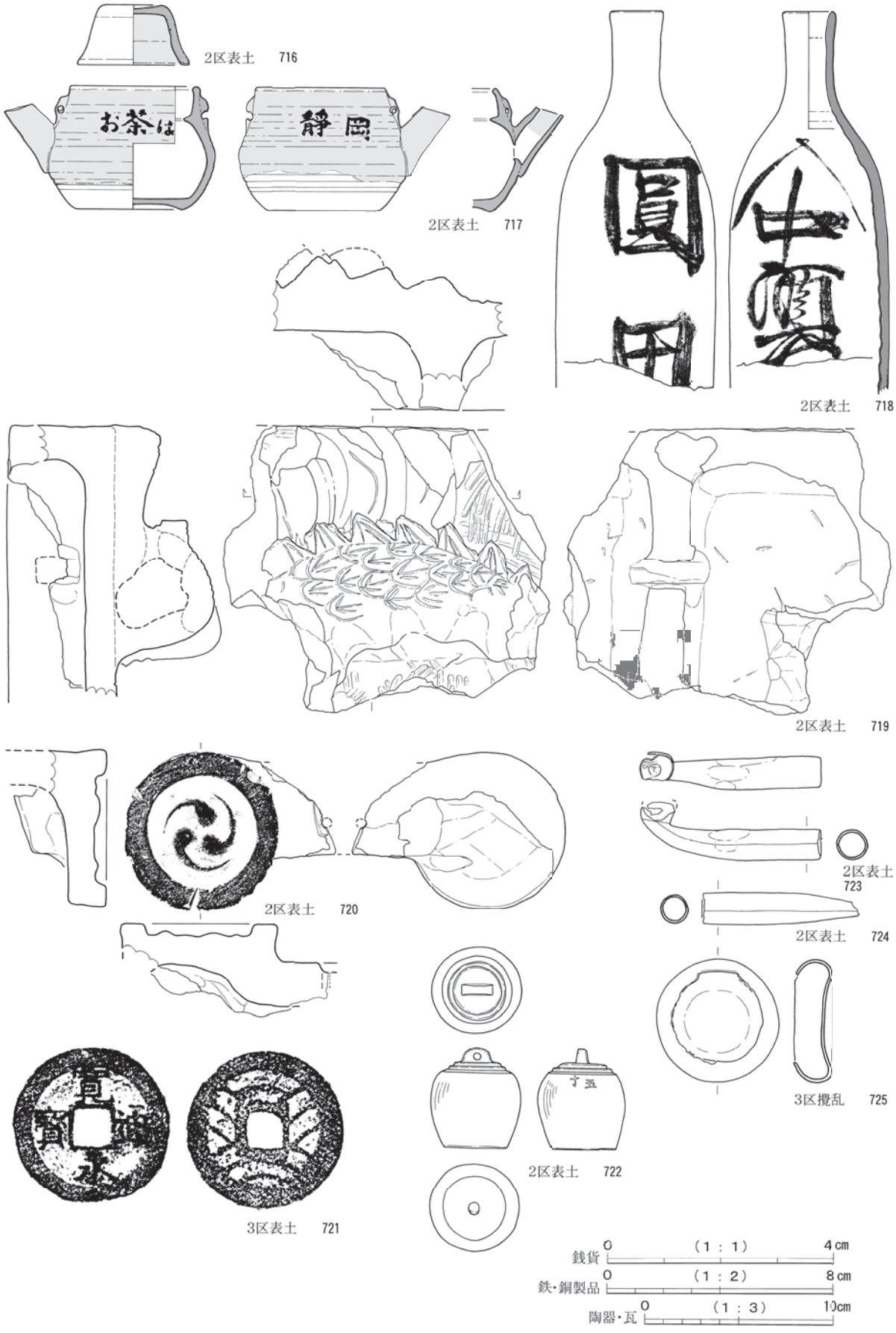
629・630（ともにSP695）は棒状で、図下部に向かって幅を狭めることから釘の可能性が高い。631（SP695）は断面がへ字形の鉄板であり、用途は不明である。

726は、先端が熊手状に分かれるもので、漁具のヤスの可能性がある。727は鉄製鎌の刃部である。728は小刀の茎の可能性がある。729は棒状の製品であるが、用途は不明。730は鉄板状のもので一部が折り返されている。732は楔の可能性が高く、733は726と同じくヤスの先端の可能性がある。734は棒状の鉄製品である。後述するように鉄滓が出土し、その分析結果からは北垣遺跡で小鍛冶が行われていたことは明らかであり、これらの鉄製品は再利用するための廃材である可能性もある。

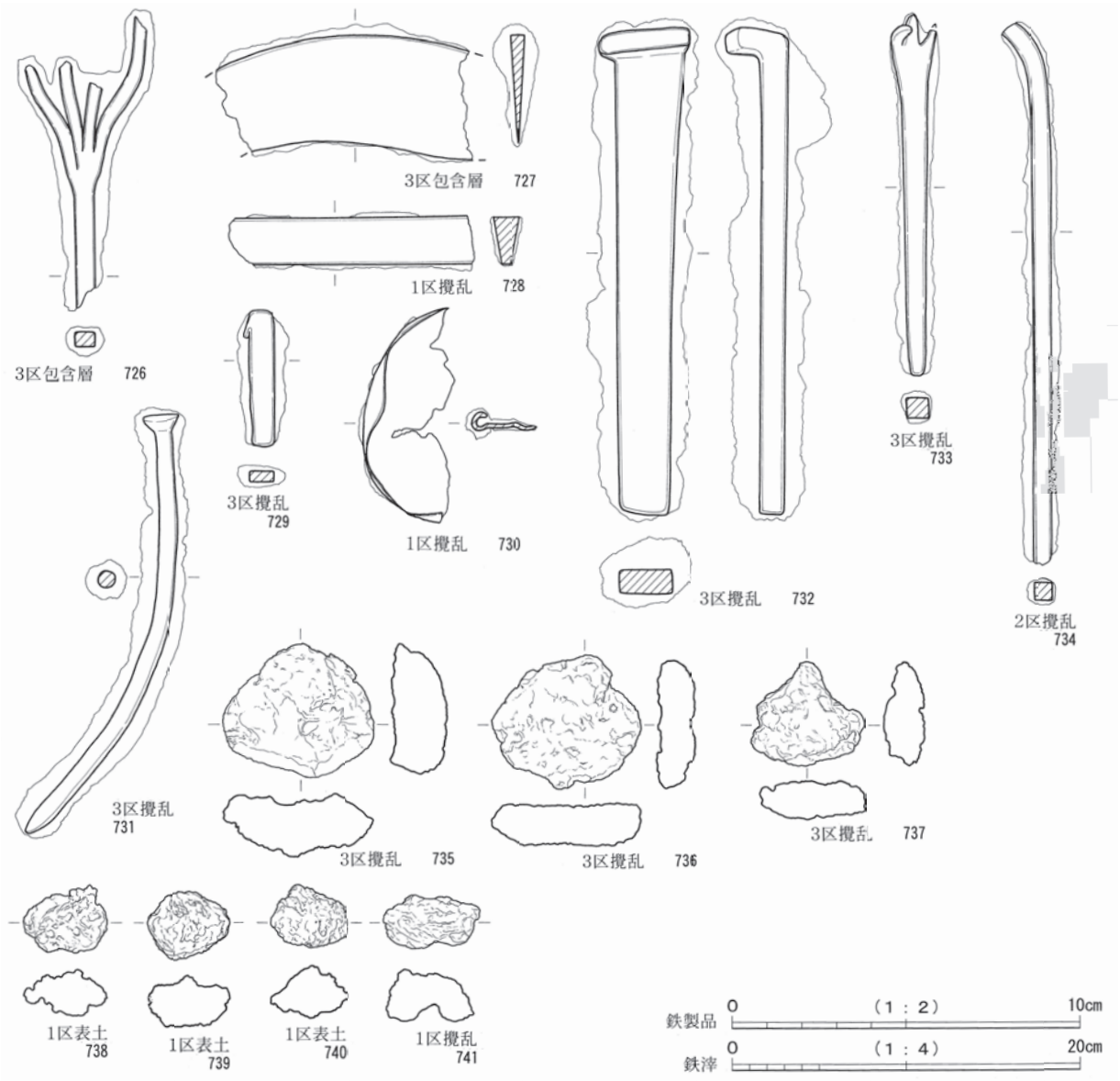
731は円頭で、身断面が円形の釘であり、近世（江戸時代）末期以降である可能性が高い。

(15) 鉄滓（第154図，第17表，図版75）

鉄滓は遺構出土のものを含めて30点が出土しており、うち中・大型のものを７点図示した。後述するように１区と３区から鉄滓が主体的に出土し、さらに大型の３点（735～737）は３区から出土していることから判断すれば、３区周辺で鍛冶が行われた可能性が高いといえよう。



第153図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑥



第154図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑦

第 7 節　遺構観察表

1　竪穴建物の概要

第 8 表　北垣遺跡検出竪穴建物一覧表

時期	No	Fig	PL	区	grid	主軸方位	平面形	規模(南北×東西)	炉or竈	貯蔵穴	床面	出土遺物
縄文or弥生	SH14	18	6･7	3	D71	N−26°−W	円or楕円	(5.7±)×(5.3±)	炉	不明	貼床？	なし
弥生後期～古墳前期	SH01	19･21	6･7	2	H73	N−31°−W	−	(3.3＋)×(3.3＋)	炉	不明	不明	縄文・弥生土器
	SH04	22	8	2	K72･L72	N−50°−W	隅丸方形？	2.8×3.3	炉？	不明	直床？	弥生土器
	SH05	22	7	2	J72･K72	N−36°−W	隅丸方形	(2.3＋)×4.2	炉	不明	貼床	縄文・弥生土器
	SH15	23	7･8	3	C68他	N−32°−W	隅丸方形	5.0×4.9	炉	不明	貼床	弥生土器
古墳後期～奈良・平安	SH02	26	−	2	H72	N−34°−W	−	(2.15＋)×(1.9＋)	不明	不明	不明	なし
	SH03	26	12	2	G71･H71	N−33°−W	−	(2.45＋)×(2.3＋)	不明	不明	不明	なし
	SH06	27･28	9･10･35	2	J71･72	N−32°−W	方形	(3.2＋)×5.3	竈	有	貼床	須恵器･土師器
	SH07	27･28	11･35	2	I70･71	N−11°−W	隅丸方形	(1.4＋)×2.35	なし？	なし	貼床	土師器
	SH09	27	−	2	I70	N−67°−E	隅丸方形？	(0.9＋)×(2.6＋)	不明	不明	不明	なし
	SH10	29	−	2	I69	N−30°−W	隅丸方形？	(0.55＋)×2.55	不明	不明	不明	なし
	SH11	28･29	11･35	2	I69	N−32°−W	隅丸方形	(1.35＋)×2.2	不明	不明	貼床	灰釉陶器
	SH12	28･29	10･35	2	H68	N−35°−E?	方形？	(1.8＋)×(5.0±)	不明	不明	貼床？	土師器
	SH13	28･30	9･10･35	2	G72･H72	N−33°−W	方形	(5.7±)×5.5	竈	有	貼床	土師器

※規模　「＋」＝以上、「−」＝以下、「±」前後　　単位　(m)
※SH08は欠番

2　掘立柱建物の概要

第 9 表　北垣遺跡検出掘立柱建物一覧表

No	Fig	PL	区	grid	主軸方位	特徴	間数(梁×桁)	梁	桁	面積	柱穴形状	出土遺物	時期
SB01	31	12	2	K72	N−41°−W	総柱	2×2	3.8	3.8	14.4	方or円	なし	古墳～平安？
SB02	91	−	2	J 71	N−75°−E	−	1×2	2.6	4.4	11.4	円形	なし	不明
SB03	32･33	13･14･36	2	H68･69他	N−41°−E	−	(1＋)×3	−	5.6	−	隅丸方形or円形	須恵器･土師器	古墳終末期
SB04	32	−	2	G70･H70	N−42°−E	−	2×2	4.8	5.1	24.5	円形	土師器	古墳～平安
SB05	34	−	2	G73･H73	N−12°−E		1×2	3.6	7.7	27.7	円形	なし	不明
SB06	34	−	2	F73･G73他	N−13°−E	−	1×3	4.0	8.6	34.4	円形	灰釉陶器･土師器･弥生土器	平安
SB07	92･93	58	2	G73	N−59°−E	−	1×3	2.8	5.3	14.8	円形	P8＝近世陶器･山茶碗･土師器･弥生･縄文	近世以降
SB08	93	−	2	F73･74他	N−30°−W	−	1×2	4.0	4.0	16.0	円形	なし	不明
SB09	94	−	2	F73･74他	N−24°−W	−	1×3	4.4	6.3	27.7	円形	なし	不明
SB10	94	−	2	F73･74	N−26°−W	−	2×2	4.2	5.4	22.7	円形	近世陶器･山茶碗･かわらけほか	近世以降
SB11	35	−	2	G73	N−28°−E	−	1×2	3.8	4	15.2	円形	土師器	古墳～平安
SB12	95	−	2	G73	N−8°−W	−	1×2	2.9	5.4	15.7	円形	なし	不明
SB13	95	−	2	F73･74	N−58°−W	−	1×2	4.0	6.4	25.6	円形	なし	不明
SB14	35	20	2	G72	N−56°−W	−	1×2	3.8	5.4	20.5	円形	灰釉陶器	平安
SB15	96	−	2	G72	N−9°−W	−	1×2	4.2	3.6	15.1	円形	なし	不明
SB16	96	−	2	F72･73他	N−18°−W	庇付	2×3	4.4	6.0	26.4	円形	なし	不明
SB17	97	−	2	F71･72他	N−90°−W	−	1×2	4.6	7.0	32.2	円形	なし	不明
SB18	98	−	2	F70･71他	N−57°−W	−	2×2	5.0	5.7	28.5	円形	なし	不明
SB19	36	−	2	F71	N−35°−E	−	2×3	3.8	4.8	18.2	円形	土師器	古墳～平安
SB20	98	−	2	F70･71	N−53°−W	−	1×2	2.7	4.0	10.8	円形	なし	不明
SB21	97	−	3	E69･F69	N−43°−E	−	1×2	2.6	3.2	8.3	円形	なし	不明
SB22	99	−	3	E68･69他	N−19°−W	−	1×2	4.0	5.0	20.0	円形	P1=近世陶磁器･土師器	近世以降
SB23	99	−	3	E68･69	N−25°−E	−	1×3	2.8	4.2	10.9	円形	P3=瓦	近世中期以降
SB24	37	−	2	E72･73他	N−17°−E	−	1×2	4.4	5.8	25.5	円形	須恵器･土師器･縄文土器	古墳～平安
SB25	100	−	2	E73	N−39°−E	−	1×2	3.4	4.4	15	円形	P1=山茶碗･須恵器	中世以降
SB26	92･101	21･58	2	E72･73他	N−75°−E	−	2×5or1×5	5.4	9.6	38.4	円形	山茶碗･かわらけ･須恵器･土師器･縄文	中世以降
SB27	100	−	2	E72	N−90°−W	−	(1＋)×2	2.3＋	4.0	9.2＋	円形	なし	不明
SB28	38	−	2	E72	N−39°−E	−	2×2	3.6	3.8	13.7	円形	須恵器	古墳～奈良

No	Fig	PL	区	grid	主軸方位	特徴	間数(梁×桁)	梁	桁	面積	柱穴形状	出土遺物	時期
SB29	102	−	3	D69･70	N−25°−W	総柱	3×3?	5	5.6	28	円形	P6=近世陶器	近世以降
SB30	102	−	2	D72･73	N−71°−E	−	1×3	2.4	6.2	14.9	円形	P6=近世陶器，土師器･灰釉陶器	近世以降？
SB31	38	−	3	C72･D72	N−62°−E	−	2×2	3.9	4.1	16	円形	灰釉陶器･土師器･弥生土器ほか	平安
SB32	103	−	2･3	C71･72他	N−28°−W	−	1×2	2.8	4.2	11.8	円形	なし	不明
SB33	103	−	3	C71･72他	N−25°−W	−	1×2	3.4	5.4	18.3	円形	なし	不明
SB34	33･39	36	2･3	C72･73他	N−13°−W	−	1×2	4	3.8	15.2	円形	土師器	古墳～平安
SB35	39	−	3	C72	N−73°−E	−	2×2	3.2	3.4	10.9	円形	土師器･弥生土器･縄文土器	古墳～平安
SB36	33･39	36	3	C72･73	N−85°−E	−	2×4	4.2	7.2	30.2	隅丸方形･円形	灰釉陶器･須恵器･土師器ほか	平安
SB37	92･104	58	3	B72	N−48°−W	−	1×(2+)	4.1	4.4+	18.0+	円形	近世陶器･須恵器･山茶碗･土師質鍋	近世以降
SB38	92･104	58	3	B71･72	N−20°−W	−	2×(2+)	4.6	4.0+	18.4+	円形	山茶碗･常滑･須恵器･土師器ほか	中世以降
SB39	104	21	3	B72	N−21°−W	−	1×(1+)	4.2	2.2+	9.2+	円形	近世陶器･山茶碗･かわらけほか	近世以降
SB40	40	−	3	B71	N−11°−W	総柱	2×2	4.6	4.8	22.1	円形	灰釉陶器･須恵器	平安
SB41	105	22	3	A72･73他	N−19°−W	−	1×2	4.2	4.4	18.5	円形	近世陶器･かわらけほか	近世以降
SB42	40	−	3	A71･B71	N−9°−E	−	(1+)×(1+)	2.2+	2.3+	5.1+	円形	土師器･須恵器	古墳～平安
SB43	92･106	22･45･53･58･66･67	3	A68･B68他	N−6°−W	総柱	3×3+	6	6.4+	38.4+	円or方	近世陶器･山茶碗･灰釉陶器･須恵器ほか	近世以降
SB44	41	−	3	A69･−A69	N−76°−E	−	(1+)×3	2.3+	5.5	12.6+	方形	灰釉陶器･須恵器ほか	平安
SB45	33･41	36	3	A69･−A69	N−77°−E		(2+)×3	3.8+	5.2	19.8+	方形	灰釉陶器･須恵器ほか	平安
SB46	107	−	3	A70･−A70	N−15°−W	−	1×(1+)	3	3.2+	9.6+	円形	なし	(中世以降？)
SB47	33･107	43	3	−A70･71他	N−76°−E	−	1×2?	3.4	5.8	19.7	円形	近世陶器･灰釉陶器･須恵器ほか	近世以降
SB48	107	−	1	C76･77他	N−9°−E	−	2×2?	3.8	4	15.2	円形	P6=山茶碗	中世以降
SB49	92･108	23･27･45	1	C76･77	N−35°−E	−	1×2	2.5	4.4	11.0	円形	山茶碗･灰釉陶器･土師器･弥生	中世以降
SB50	42	−	1	C76･77	N−9°−W	−	2×2	3.8	5.2	19.8	円形	灰釉陶器･弥生土器･縄文土器	平安
SB51	108	−	1	C76･77他	N−38°−W	−	1×3	3	7	21	円形	山茶碗、灰釉陶器ほか	中世以降
SB52	109	−	1	C77	N−17°−E	−	1×2	4	6	24	円形	かわらけ･灰釉陶器ほか	中世以降
SB53	92･110	24･53	1	C76･77	N−54°−W	−	1×2	4	2	8	円形	山茶碗･かわらけ･灰釉陶器ほか	中世以降
SB54	43	23	1	B77･C77	N−9°−W	−	1×2	3.2	4.6	14.7	円形	灰釉陶器	平安
SB55	110	−	1	B77･C77	N−81°−E	−	1×2	2.8	5.4	15.1	円形	かわらけ･須恵器	中世以降
SB56	109	−	1	B76	N−20°−W	−	2×(1+)	4	3.3+	13.2+	円形	なし	不明
SB57	111	24･25	1	−A76･77	N−89°−E	−	2×3	3.8	5.6	21.3	円形	かわらけ･土師質土器（鍋）ほか	中世以降
SB58	112	24･25	1	−A76･77	N−0°−W	−	1×2	4	4	16	円形	かわらけ･弥生ほか	中世以降
SB59	112	24･25	1	−A76･77他	N−0°−W	−	2×(1+)	5	1.8+	9.0+	円形	近世陶器･鉄滓ほか	近世以降
SB60	112	24･25	1	−A77･−B77	N−5°−W	−	1×(2+)	3.2	3.4+	10.9+	円形	かわらけ	中世以降
SB61	92･111	25･26･75	1	−A78･79	N−0°−W	−	1×2	2.2	4	8.8	円形	鉄滓	中世以降
SB62	111	25～27	1	−A78･79他	N−0°−W	総柱	2×2	3.8	4.4	16.7	円形	かわらけ	中世以降
SB63	113	−	1	A79･80他	N−14°−W	−	1×2?	3.8	4.2	16	円形	なし	不明
SB64	113	26	1	−A79･80他	N−83°−E	−	1×3	4.6	5.7	26.2	円形	なし	不明
SB65	113	−	1	−A80･−B80	N−85°−E	−	1×3	2.1	7.4	15.5	円形	なし	不明
SB66	44	13	1	A81･−A81	N−64°−E	−	1×2	4	5	20	円形	土師器	古墳～平安
SB67	44	−	1	A81･−A81他	N−70°−E	−	1×(1+)	4	2.2+	8.8+	円形	灰釉陶器･須恵器･土師器	平安（以降）
SB68	114	−	1	−A82	N−54°−E	−	2×(1+)	2.8+	5.1	14.3	円形	なし	不明
SB69	114	27	1	−B81･82他	N−70°−W	−	1×2	2.4	3.5	8.4	円形	なし	不明
SB70	92･114	−	1	−B82･−C82他	N−75°−E	−	1×1	2.8	4.9	13.7	円形	近世陶磁器	近世以降

※　括弧内は現状　　単位　（m）
※　梁および桁の長さは、柱穴の芯芯間距離　「+」＝以上　「±」前後

3　土坑の概要

第10表　北垣遺跡検出土坑一覧表

No	Fig	PL	区	grid	平面	断面	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
SK01	119	−	2	L72	円形	箱形？	0.8×0.95	0.05	なし	近世？	近世墓か
SK02	62～64	16･49～51	2	L72	長方形	逆台形	0.7×1.35	0.2	銅銭	中世後期	中世墓
SK03	62～64	17･49～51	2	L72	隅丸長方形	逆台形	0.7×1.1	0.6	銅銭･灰釉陶器	中世後期	中世墓
SK04	62･63･65	17･46･47	2	L72	隅丸方形	箱形	0.95×0.95	0.45	銅銭･かわらけ･鉄釘	中世後期	中世墓
SK05	62･63	17	2	L72	隅丸長方形	U字形	0.95×1.5	0.35	なし	中世後期？	中世墓の可能性大

No	Fig	PL	区	grid	平面	断面	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
SK06	62・64・66	16・49～51	2	K72	隅丸方形	逆台形	0.85×0.9	0.15	銅銭	中世後期	中世墓
SK07	62・66	16	2	K72	隅丸長方形	逆台形	0.45×0.8	0.15	なし	中世後期？	中世墓(火葬墓)
SK08	62・63	17	2	K72	隅丸長方形	逆台形	0.9×1.3	0.2	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK09	62・64・66	16・47・48	2	K72	隅丸長方形	皿状	0.75×1.0	0.1	銅銭・かわらけ・鉄釘	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK10	62・63	17	2	K72	隅丸長方形	逆台形	0.65×1.0	0.35	なし	中世後期	中世墓の可能性大
SK11	62・67・68	18・49～51	2	K71	隅丸方形	逆台形	0.5×0.8	0.15	銅銭	中世後期	中世墓
SK12	67・68	17・48	2	K71	隅丸方形	逆台形	0.6×0.8	0.1	かわらけ	中世後期	中世墓
SK13	67	18	2	K71	隅丸長方形	逆台形	0.5×1.45	0.4	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK14	67・68	18・49～51	2	J71	隅丸長方形	逆台形	0.45×0.7	0.1	銅銭	中世後期	中世墓
SK15	121	－	2	J70・K70	隅丸長方形	U字形	1.05×1.2	0.45	なし	不明	
SK16	122	－	2	J70・K70	長楕円形	逆台形	0.9×2.05	0.4	なし	不明	
SK17	122	－	2	J69・70	長楕円形	逆台形	1.2×2.05	0.2	なし	不明	
SK18	67	18	2	J70	隅丸長方形	逆台形	0.65×1.15	0.2	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK19	120・122	29・63	2	I70	長楕円形	U字形	0.9×2.1	0.1	近世陶器・鉄釘ほか	近世以降	
SK20	122	－	2	J69	長楕円形？	逆台形	0.8×(0.9＋)	0.15	桟瓦	近世以降	
SK21	69～71	18・49～51	2	I69	長方形	逆台形	0.65×0.95	0.15	銅銭	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK22	69・70	19	2	I69	長方形	逆台形	0.6×0.9	0.15	銅粒	中世後期？	中世墓(火葬墓)
SK23	69～71	19	2	I69	正方形	逆台形	0.9×1.0	0.1	須恵器	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK24	69・70	19	2	I69	長方形	逆台形	0.65×0.95	0.1	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK25	69～71	19	2	I69	隅丸長方形	逆台形	0.7×1.4	0.15	須恵器	中世後期？	中世墓の可能性大
SK26	45・47	15・36	2	I69	長方形	逆凸形	1.65×3.6	0.6	灰釉陶器・須恵器ほか	平安(以降)	10世紀頃の土坑か
SK27	45・46		2	I69	長方形	皿状	1.9×(4.0＋)	0.1	灰釉陶器	平安以降	
SK28	45～47	14・15・37・38	2	I69	楕円形	U字形	1.0×3.0	0.4	須恵器・土師器	古墳終末期	
SK29	69・71・72	15・48	2	I69	不整形	U字形	1.1×1.6	0.25	土師器	中世後期？	中世墓の可能性有
SK30	69～71	19・49～51	2	I69	長方形	逆台形	0.55×0.85	0.25	銅銭・須恵器	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK31	69～71	19・49～51	2	I69	長方形	逆台形	0.55×0.95	0.1	銅銭	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK32	69・70	19	2	I69	隅丸方形	逆台形	0.8×1.25	0.1	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK33	69・70	－	2	I69	隅丸長方形	逆台形	(0.35＋)×1.0	0.15	なし	中世後期？	中世墓の可能性大
SK34	69～71	49～51	2	I69	瓢形？	不明	(0.5＋)×(0.6＋)	－	銅銭	中世後期	中世墓(火葬墓)
SK35	123	－	2	H68他	楕円形	U字形	1.75×1.3	0.25	なし	不明	
SK36	125	－	2	H68	隅丸方形	皿状	(0.3＋)×(0.65＋)	0.2	なし	近世以降	
SK37	117・118	28・63	2	H68	円形	箱形	1.1×1.2	0.5	銅銭・真鍮銭	近世	中世墓を壊して近世墓を造営か。
SK38	119	－	2	G67	円形	箱形	0.8×0.9	0.2	なし	近世？	近世墓か。
SK39	119	－	2	G67	円形	逆台形	0.8×0.9	0.15	なし	近世？	近世墓か。
SK40	119・120	－	2	G67	円形	箱形	1.2×1.25	0.2	山茶碗・灰釉陶器ほか	近世？	近世墓か。
SK41	74	－	2	G70・H70	隅丸長方形	皿状	1.9×2.55	0.15	土師質鍋・かわらけ	中世後期	
SK42	48	－	2	H70	隅丸方形	逆台形	0.75×0.85	0.25	須恵器・土師器	古墳終末期	
SK43	74・75	48	2	H70・71	瓢形	皿状	1.5×2.05	0.2	かわらけ・土師器ほか	中世以降	
SK44	123	－	2	I72	楕円形	U字形	0.65×0.9	0.25	なし	不明	
SK45	123	－	2	H73	楕円形	逆台形	0.7×1.1	0.25	なし	不明	SH01の貯蔵穴？
SK46	24	－	2	G73	隅丸長方形	逆台形	0.65×0.95	0.4	弥生土器	弥生後期	
SK47	123	－	2	G72	楕円形？	皿状	0.9×1.4	0.1	なし	不明	
SK48	121	－	2	G74	隅丸長方形	U字形	1.2×1.4	0.4	なし	不明	
SK49A	47・50	14・36	2	F73	円形	逆台形	0.6×0.6	0.4	土師器	平安以降	竪穴建物の貯蔵穴か
SK49B	50	14	2	F73	楕円形	逆台形	0.65×(0.65＋)	0.2	なし	奈良～平安？	竪穴建物の貯蔵穴か
SK50	73	16	2	E73	円形	逆台形	0.6×0.65	0.2	なし	中世後期？	中世墓の可能性有
SK51	47・49	36	2	E72	楕円形	皿状	0.95×1.45	0.15	須恵器	奈良	
SK52	121	－	2	D72	楕円形	逆凸形	0.95×1.2	0.3	なし	不明	
SK53	121	－	2	D72	楕円形	皿状	1.0×1.25	0.1	なし	不明	
SK54	47・49	－	3	C70	楕円形	皿状	1.2×(1.7＋)	0.2	須恵器	奈良	

No	Fig	PL	区	grid	平面	断面	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
SK55	120･121	63	3	C70	円形	U字形	1.8×1.9	0.4	近世陶器･山茶碗ほか	近世以降	
SK56	123	－	2	E68	楕円形	皿状	0.85×1.35	0.2	近世陶器･弥生土器	近世以降	
SK57	125	－	3	B69	隅丸長方形？	U字形	0.9×2.8±	0.3	なし	不明	
SK58A	76	－	3	B69	円形	U字形	0.7×0.85	0.3	かわらけ･灰釉陶器	中世以降	
SK58B	76	－	3	B69	楕円形	皿状	1.6×1.75	0.2	かわらけ･灰釉陶器	中世以降	
SK59	125		3	A69	不整形	皿状	1.05×1.65	0.15	なし	不明	
SK60	51･52	14･38･39	3	A68･−A68	円形	逆台形	1.75×1.85	0.65	灰釉陶器･須恵器ほか	平安	
SK61	119	－	3	A73	円形	箱形	1.05×1.1	0.4	近世陶器･須恵器ほか	近世	近世墓か。
SK62A	123	－	1	C73･D73	楕円形	皿状	0.9×1.3	0.2	近世陶器･山茶碗ほか	近世以降	
SK62B	123	－	1	C73･D73	楕円形？	皿状	1.0×1.0＋	0.05		近世？	
SK63	123	－	1	C77	楕円形	逆台形	0.85×1.35	0.35	なし	不明	
SK64	119	－	1	−A76	円形	箱形	1.0×1.0	0.4	かわらけ･擂鉢	近世？	近世墓か。
SK65	124	－	1	A78他	隅丸長方形	逆台形	1.5×2.8	0.25	なし	不明	
SK66	126	－	1	−A79	円形	逆台形	3.4×3.5	1.2	なし	不明	
SK67	124	－	1	A81	隅丸長方形	箱形	0.7×1.75	0.35	なし	近世以降？	
SK68	124	－	1	A81	隅丸長方形	逆台形	1.25×2.2	0.4	近世陶器･かわらけほか	近世以降	
SK69	124	－	1	−B81	長方形	逆台形	0.55×0.8	0.1	鉄滓･土師器ほか	中世以降	
SK70	75･77	27･28･48	2	J70･71	正方形	U字形	1.6×1.6	0.2	灰釉陶器･かわらけ	中世後期以降	中世墓(火葬墓)の可能性有
SK71	75･77	48	2	J70･71	円形	U字形	0.6×0.65	0.2	土師器	中世後期以降	
SK72	124	27	2	H71･G71	隅丸長方形	皿状	0.85×1.65	0.15	なし	不明	

単位　(m)

4　井戸の概要

第11表　北垣遺跡検出井戸一覧表

No	Fig	PL	区	grid	形態	掘方	掘方規模	掘方深さ	井戸内径	井戸深さ	出土遺物	備考
SE01	115･116	30･63	3	B70	石組	円形	2.1×1.8	2.3	0.5〜0.6	2.3	近世陶器･かわらけほか	近世以降

※遺物はこの他に井戸の石組に再利用された石塔がある。

単位(m)

5　溝状遺構の概要

第12表　北垣遺跡検出溝状遺構一覧表

No	Fig	PL	区	grid	断面形	全長	幅	深さ	出土遺物	時期	備考
SD01	128･129	－	2	L72	逆台形	2.3	1.0	0.25	鉄釘	近世末期以降	区画溝？
SD02	128･129	－	2	J70･71他	U字形	14.7	0.8	0.1	なし	不明	区画溝？
SD03	128･129	－	2	J70･71他	U字形	6.5	1.7	0.25	須恵器?	不明	区画溝？
SD04	128･129	－	2	J70･71他	U字形	10.6	0.6	0.1	なし	不明	区画溝？
SD05	128･129	－	2	I68･H68	U字形	8.2＋	1.5	0.4	かわらけ	近世以降	自然流路？
SD06	129･130	55	2	H68	U字形	4.9＋	2.6	0.4	石塔･近世陶器･常滑ほか	近世以降	自然流路？
SD07	27	－	2	J71	U字形	5.9	0.5	0.15	なし	不明	区画溝？
SD08	29･129	－	2	H69･I69	U字形	8.7＋	0.4＋	0.2	常滑･山茶碗	中世以降	区画溝？
SD09	129･131	45･53	2	K73	U字形	4.0＋	2.5	0.4	山茶碗ほか	近世以降？	自然流路？
SD10	129･131	28･53	2	H69他	逆台形	37	1.2	0.25	近世陶器･かわらけ	近世以降	区画溝？
SD11	131	28	2	H69他	逆台形	49.6	1.0	0.4	常滑ほか	近世以降？	区画溝？
SD12	129･131	28･45	2	G69他	逆台形	55.6＋	1.0	0.5	常滑･かわらけほか	近世以降？	区画溝？
SD13	129･132	28･45･63･75	2	F69･70他	U字形	18＋	0.8	0.3	近世陶器･鉄製品ほか	近世以降	区画溝？
SD14	129･132	28･45	2	F69･70	逆台形	42.5	1.0	0.4	常滑･山茶碗･灰釉陶器	中世以前？	区画溝
SD15	129･132	64	2	G72･73	U字形	19.2＋	0.8	0.1	かわらけ･山茶碗他	近世以降	区画溝？
SD16	133	－	2	E72･73	U字形	8.8	0.7	0.15	なし	不明	区画溝？
SD17	133	－	2	D72･73	U字形	5.6＋	0.7	0.15	灰釉陶器･須恵器ほか	中世以前？	区画溝？
SD18	38	－	2	C72･D72	U字形	4.3±	1.0	0.2	土師器ほか	中世以前？	区画溝？
SD19	133	－	3	F68･69	U字形	5.1	0.7	0.15	なし	不明	区画溝？

No	Fig	PL	区	grid	断面形	全長	幅	深さ	出土遺物	時期	備考
SD20	129・134	43・46	3	C69・70他	逆台形	26	1.0	0.45	近世陶器・かわらけほか	近世以降	区画溝？
SD21	135	−	3	D68・E68	U字形	5.6	0.5	0.15	須恵器	近世以降？	区画溝？
SD22	129・135	53	3	D68・69他	逆台形	7.8＋	1.3	0.15	近世陶器・かわらけほか	近世以降	区画溝？
SD23	135	−	3	D68・69他	U字形	15.7＋	1.6	0.35	なし	近世以降	区画溝？
SD24	136	−	3	C69・D69	逆台形	13.4＋	0.6	0.4	常滑・灰釉陶器ほか	中世以降	区画溝？
SD25	136	−	3	A69・B69他	逆台形	15.8＋	0.75	0.2	常滑・灰釉陶器ほか	中世以降	区画溝？
SD26	136	−	3	A69・B69他	逆台形	16.6＋	0.65	0.15	灰釉陶器ほか	平安以前？	区画溝？
SD27	129・137	42	3	B69・70他	U字形	14.2	1.3	0.3	近世陶器・山茶碗	近世以降	区画溝？
SD28	137	−	3	B69・70他	U字形	12.3±	1.0	0.15	近世陶器・山茶碗ほか	近世以降	区画溝？
SD29	137	−	3	C68・69	皿状	5.6＋	1.75	0.2	なし	不明	自然流路？
SD30	137	−	3	B68・69	U字形	5.3	0.4	0.1	なし	不明	区画溝？
SD31	138	29	1	C79・80他	逆台形	8.0＋	1.8	0.3	なし	不明	方形周溝墓？
SD32	139	−	1	C79・80	U字形	7.2＋	1.4	0.25	なし	不明	区画溝？
SD33	139・141	53	1	B79・80他	U字形	8.2＋	1.2	0.25	肥前青磁・山茶碗	近世以降	区画溝？
SD34	139〜141	45・53・57・64	1	A79・B79他	U字形	34.7＋	1.0	0.4	近世陶器・鎌ほか	近世以降	区画溝？
SD35	139・141	64	1	A79・B79	U字形	10.5＋	0.7	0.2	かわらけ	近世以降	区画溝？
SD36	139〜141	29・57	1	A79・−A79	U字形	16.8＋	1.0＋	0.25	常滑	中世後期以前？	暗渠？
SD37	138	−	1	B78・79	皿状	5.6	0.45	0.05	なし	不明	区画溝？
SD38	138	−	1	B78・79	皿状	6.4	0.9	0.1	なし	不明	区画溝？
SD39	138	−	1	B78・79	U字形	3.8＋	0.95	0.25	なし	不明	区画溝？
SD40	138	−	1	B78・79	U字形	6.5＋	0.7＋	0.3	なし	不明	区画溝？
SD41	143	29	1	A79他	U字形	6.2＋	1.2	0.5	なし	近世以降	暗渠？
SD42	142・143	64	1	A79他	U字形	16.6＋	1.6	0.35	かわらけ・瀬戸美濃	近世以降	暗渠？
SD43	143・144	53・58	1	A77・−A77	U字形	9.8＋	0.65	0.25	土師質鍋・山茶碗ほか	近世以降	区画溝？
SD44	143・144	53・65	1	A75〜77他	U字形	17.7＋	1.4	0.3	近世陶器・かわらけほか	近世以降	区画溝？
SD45	143・144	53	1	A76	U字形	5.4＋	0.8＋	0.2	近世陶器・かわらけ	近世以降	区画溝？
SD46	144	53・57	1	A76・−A76	U字形	8.5	0.5	0.15	常滑・山茶碗	中世以前？	区画溝？
SD47	143・145	45・53	1	−C81・82他	U字形	38.2＋	5.0	0.8	近世陶器・常滑ほか	近世以降？	区画溝？

※溝状遺構については掘削時期を特定できないため、包含された遺物から最終機能時の時期を示した。
※全長・幅の表記について　「＋」＝以上　「±」＝前後　を示す

単位（m）

6　性格不明遺構の概要

第13表　北垣遺跡検出性格不明遺構一覧表

No	Fig	PL	区	grid	形態	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
SX01	30	−	2	G72・H72	長楕円形	0.65×1.05	0.2	近世陶器・かわらけほか	近世以降	
SX02	53・54	−	2	F74・G74	瓢形	1.5×2.05	0.2	須恵器	奈良	
SX03	127	−	3	F69	隅丸方形	(2.5＋)×4.7	0.3	なし	不明	竪穴建物の可能性あり
SX04	127	−	3	D68・E68	方形	(1.8＋)×3.1	0.25	なし	不明	
SX05	78・79	−	3	B69	楕円形？	1.55×(2.95＋)	0.1	山茶碗・灰釉陶器ほか	中世以降	
SX06	78・79	52	3	A70	正方形？	(2.0＋)×(2.5＋)	0.1	かわらけ・灰釉陶器ほか	中世後期以降	
SX07	55・56	15・41・42	3	A70・−A70	正方形？	3.5×(3.3＋)	0.3	須恵器・土師器	奈良〜平安	廃棄土坑？
SX08	55・57	15・39・40	3	A70・−A70	台形？	3.35×(2.3＋)	0.3	灰釉陶器・須恵器ほか	平安	廃棄土坑？

単位（m）

第８節　遺物観察表

１　土器・陶磁器・瓦観察表

第14表　北垣遺跡出土土器・陶磁器・瓦観察表

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
1	19	32	2	H73	SH01炉	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい黄褐(10YR5/4)	灰黄褐(10YR4/2)	曽利式
2	19	32	3	A72	包含層	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	曽利式
3	19	32	3	−	表土	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	曽利式
4	19	32	2	E72	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明褐(7.5YR5/6)	灰黄褐(10YR4/2)	曽利式or加曽利
5	19	32	3	C72	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	褐(7.5YR4/3)	灰黄(2.5Y6/2)	曽利式
6	19	32	−	−	表土	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	褐(7.5YR4/3)	褐(10YR4/4)	曽利式
7	19	32	3	D71	SH14	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	曽利式
8	19	32	2	H73	SH01	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	灰黄褐(10YR4/2)	橙(5YR6/8)	曽利式
9	19	32	3	−	表土	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	曽利式
10	19	32	2	F75他	攪乱	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR4/2)	曽利式
11	19	32	3	B71	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	曽利式
12	19	32	2	I69	SK26	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	赤褐(5YR4/6)	灰褐(7.5YR4/2)	曽利式
13	19	32	2	H73	SH01炉	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	黄褐(10YR5/6)	橙(5YR6/8)	曽利式
14	19	32	2	H73	SH01	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	褐灰(10YR4/1)	橙(5YR6/8)	加曽利Ｅ式
15	19	32	2	H73	SH01	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	褐灰(10YR4/1)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
16	19	32	2	H73	SH01炉	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	明褐(7.5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
17	19	32	2	H73	SH01炉	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	褐灰(7.5YR4/1)	にぶい褐(7.5YR5/4)	加曽利Ｅ式
18	19	32	2	H72･G72	SH13	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	加曽利Ｅ式
19	19	32	3	C68他	SH15	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	加曽利Ｅ式
20	19	32	2	G73	SB07−P8	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR4/4)	加曽利Ｅ式
21	19	32	2	G73	SB07−P8	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい赤褐(5YR4/4)	加曽利Ｅ式
22	19	32	2	E72	SB26−P8	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	褐(7.5YR4/6)	暗褐(10YR3/4)	加曽利Ｅ式
23	19	32	3	B72	SB38−P2	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい褐(7.5YR5/4)	明褐(7.5YR5/6)	加曽利Ｅ式
24	19	32	2	H73	SP646	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄褐(10YR5/4)	加曽利Ｅ式
25	19	32	2	C72･D72	SD18	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
26	19	32	2	H72	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
27	19	32	2	H72	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR5/2)	加曽利Ｅ式
28	19	32	3	表土	−	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR5/2)	加曽利Ｅ式
29	19	32	2	表土	−	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/4)	加曽利Ｅ式
30	19	32	2	表土	−	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	加曽利Ｅ式
31	19	32	2	確認TR	−	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	加曽利Ｅ式
32	19	32	2	確認TR	−	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR4/2)	加曽利Ｅ式
33	19	32	2	H72他	攪乱	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/4)	加曽利Ｅ式
34	19	32	2	H73他	攪乱	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	加曽利Ｅ式
35	19	32	1	B77	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	灰黄褐(10YR4/2)	加曽利Ｅ式
36	19	32	2	E72	包含層	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
37	19	32	2	J72他	攪乱	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	加曽利Ｅ式
38	19	32	1	C77S	攪乱	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄褐(10YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	加曽利Ｅ式
39	19	32	2	G72	包含層	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	咲畑式
40	19	32	2	F69他	SD13	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	咲畑式
41	19	32	3	C68他	SH15	縄文	深鉢	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	咲畑式
42	19	32	3	−	表土	縄文	深鉢	口縁	−	−	−	−	にぶい褐(7.5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	中期･東海系
43	19	32	2	J71他	SH06	縄文	深鉢	底	95	−	5.5	1.9	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	後･晩期
44	19	−	2	H73	SH01−P2	縄文	深鉢	底	25	−	(8.4)	−	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2)	後･晩期
45	19	33	2	−	包含層	縄文	深鉢	胴～底	60	−	10.3	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	後･晩期
50	25	−	3	C68他	SH15	弥生	壺	肩	−	−	−	−	明黄褐(10YR7/6)	褐灰(10YR4/1)	菊川式
51	25	34	3	E68	SB22−P1	弥生	壺	肩	15	−	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	灰黄(2.5Y6/2)	菊川式
52	25	34	3	C72	SB36−P8	弥生	壺	底	95	−	6.6	−	橙(5YR6/6)	灰オリーブ(5Y6/2)	菊川式
53	25	34	3	A69	SB45−P7	弥生	壺	口縁	−	−	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	菊川式
54	25	34	3	−	攪乱	弥生	壺	口縁	−	−	−	−	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	菊川式
55	25	34	3	D71	包含層	弥生	壺	口縁	22	(13.0)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	菊川式
56	25	34	3	D71	包含層	弥生	壺	肩	20	−	−	−	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄(2.5Y6/3)	菊川式
57	25	34	3	B72他	攪乱	弥生	壺	肩	20	−	−	−	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	菊川式
58	25	34	1	−	攪乱	弥生	壺	肩	−	−	−	−	淡黄(2.5Y8/4)	灰黄(2.5Y7/2)	菊川式
59	25	34	3	−	表土	弥生	壺	肩	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR6/2)	菊川式
60	25	34	3	−	表土	弥生	壺	胴	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	菊川式
61	25	34	3	D71	包含層	弥生	壺	底	80	−	6.0	−	明黄褐(10YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	菊川式
62	25	34	3	−	表土	弥生	壺	底	20	−	(7.1)	−	橙(5YR6/6)	灰オリーブ(5Y5/2)	菊川式
63	25	34	3	D71	包含層	弥生	壺	底	20	−	(11.2)	−	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	菊川式
64	25	34	3	D71	包含層	弥生	台付甕	口縁	10	(15.8)	−	−	にぶい橙(5YR6/3)	にぶい橙(5YR6/3)	菊川式
65	25	34	1	−A82他	攪乱	弥生	台付甕	台基部	95	−	−	−	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	菊川式
66	28	35	2	J71･J72	SH06	須恵器	杯蓋	天井	50	−	−	−	灰白(5Y7/1)	黄灰(2.5Y7/2)	
67	28	35	2	J71･J72	SH06	土師器	甕	底	52	−	(2.6)	−	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	
68	28	35	2	J71･J72	SH06	土師器	台付甕	底	8	(13.7)	−	−	褐灰(10YR5/1)	にぶい黄橙(10YR7/3)	鉢の可能性有
69	28	35	2	J71･J72	SH06	土師器	台付甕	底	10	−	(13.0)	−	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR6/2)	鉢の可能性有
70	28	35	2	I70･I71	SH07	土師器	甕	底	20	−	(5.4)	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
71	28	35	2	I69	SH11	灰釉陶器	碗	体～底	60	−	6.8	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	宮口Ⅲ−2
72	28	35	2	H68	SH12	土師器	甑	把手	100	−	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
73	28	35	2	H68	SH12	土師器	甕	底	75	−	(2.5)	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
74	28	35	2	H68他	SH12･SK43	土師器	壺	全体	60	12.8	8.6	17.7	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
75	28	35	2	H72･G72	SH13	土師器	甕	ほぼ全体	70	(17.3)	5.8	(30.0)	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	貯蔵穴出土

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
76	33	36	2	H69他	SB03-P3・P4	須恵器	長頸壺	全体	80	6.7	−	15.7	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	
77	33	36	2	C72他	SB34-P3	土師器	甕	口縁	3	(25.2)	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
78	33	36	3	C72	SB36-P8	須恵器	杯蓋？	天井	30	−	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	
79	33	36	3	A69	SB45-P7	須恵器	有台杯	底	10	−	(10.0)	−	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	
80	33	36	3	A69	SB45-P9	須恵器	長頸壺？	肩～頸	25	−	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	
81	33	43	3	−A70	SB47-P4	須恵器	箱形杯	全体	25	(12.6)	(8.0)	(3.6)	灰(N6/0)	灰(N6/0)	
82	47	37・38	2	I69	SK28	須恵器	返蓋	全体	97	8.1	−	2.3	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	
83	47	37・38	2	I69	SK28	須恵器	杯身	全体	70	8.3	−	3.2	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	
84	47	37・38	2	I69	SK28	須恵器	杯身	全体	50	8.5	−	3.2	黄灰(2.5Y5/1)	灰(N6/0)	
85	47	37・38	2	I69	SK28	須恵器	杯身	全体	50	(9.2)	−	3.7	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	
86	47	37・38	2	H69・I69	SK28・包含層	土師器	杯	全体	40	(9.5)	−	3.7	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
87	47	37	2	I69	SK28	土師器	甕	口縁	10	(20.2)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
88	47	37・38	2	I69	SK28	土師器	甕	口縁～胴	35	15.7	−	−	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	スス付着
89	47	37・38	2	I69	SK28	土師器	甕	口縁～胴	10	(13.9)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	スス付着
90	47	37・38	2	I69	SK28	土師器	甕	口縁～胴	90	15.0	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	スス付着
91	47	−	2	I69	SK26	土師器	壺？	底	70	−	4.9	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
92	47	36	2	I69	SK26	須恵器	高杯	口縁	10	(15.0)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
93	47	36	2	I69	SK26	灰釉陶器	段皿	口縁～体	−	(17.9)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅲ？
94	47	36	2	E72	SK51	須恵器	摘蓋	口～天井	20	(14.5)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
95	47	36	2	E72	SK51・SB28-P4	須恵器	摘蓋	口～天井	45	16.6	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
96	47	−	3	C70	SK54	須恵器	摘蓋	摘み	80	−	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
97	47	36	2	F73	SK49A	土師器	杯	全体	40	(12.8)	(7.5)	3.9	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(5YR6/4)	スス付着
98	47	36	2	F73	SK49A	土師器	杯	口縁～体	22	(12.6)	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/3)	スス付着
99	47	36	2	F73	SK49A	土師器	甕	口縁	20	(14.8)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
100	47	36	2	F73	SK49A	土師器	甕	底	20	−	(5.0)	−	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	スス付着
101	52	39	3	A68・−A68	SK60	須恵器	甕	肩～頸	15	−	−	−	灰(5Y4/1)	灰(5Y5/1)	森山窯産か
102	52	39	3	A68・−A68	SK60	須恵器	甕	口縁	10	(27.0)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	森山窯産か
103	52	39	3	A68・−A68	SK60	須恵器	甕	胴	−	−	−	−	灰(N6/0)	灰(N6/0)	森山窯産か
104	52	39	3	A68・−A68	SK60	土師器	甕	口縁	8	(24.8)	−	−	黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
105	52	−	3	A68・−A68	SK60	土師器	甕	底	25	−	(6.3)	−	にぶい橙(5YR7/3)	にぶい橙(2.5YR6/4)	
106	52	38	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	全体	100	11.0	6.2	3.3	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	清ヶ谷Ⅳ-2
107	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	口縁	20	(14.5)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	清ヶ谷Ⅲ-2
108	52	38・39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	体～底	75	−	(7.3)	−	灰(N5/)	灰(N5/)	清ヶ谷Ⅳ-1
109	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	93	−	7.1	−	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	清ヶ谷Ⅳ-1
110	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	90	−	8.1	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅳ-2
111	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	90	−	7.8	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ-2
112	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	22	−	(7.6)	−	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	清ヶ谷Ⅲ～Ⅳ
113	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	18	−	(7.9)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	宮口Ⅲ-1
114	52	39	3	A68・−A68	SK60	灰釉陶器	碗	底	20	−	(6.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	宮口Ⅲ-2
115	52	39	3	A68・−A68	SK60	清郷甕	甕(鍋)	口縁	5	(18.1)	−	−	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	灰赤(2.5YR4/2)	
116	54	−	2	F74・G74	SX02	須恵器	摘蓋	口～天井	20	(14.4)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
117	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	摘蓋	口～天井	20	(15.0)	−	−	灰白(N7/0)	灰白(N7/0)	
118	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	摘蓋	口～天井	20	(15.0)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
119	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	摘蓋	口～天井	6	(15.1)	−	−	灰(N6/0)	灰(N6/0)	
120	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	摘蓋	口～天井	12	(15.8)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	
121	56	42	3	A70・−A70	SX07	須恵器	碗形杯身	全体	25	(14.9)	−	−	灰白(2.5Y8/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
122	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	小型杯？	口縁～体	12	(10.9)	−	−	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	小型杯か碗？
123	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	無台杯	底	20	−	(7.2)	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
124	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	有台杯	底	20	−	(9.8)	−	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/1)	ヘラ記号「−」
125	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	有台盤？	底	15	−	(11.1)	−	灰白(2.5Y8/2)	灰白(5Y7/1)	
126	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	箱形杯	口縁～体	8	(13.0)	(8.0)	3.4	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
127	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	盤(皿)？	底	20	−	(8.1)	−	黄灰(2.5Y7/2)	黄灰(2.5Y7/2)	
128	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	無台杯	体	12	−	(9.8)	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	
129	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	短頸壺	口縁～胴	25	(5.2)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
130	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	長頸壺	肩～胴	6	−	−	−	浅黄(2.5Y7/3)	灰白(2.5Y8/2)	
131	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	壺	口縁	15	(10.8)	−	−	灰オリーブ(5Y5/2)	黄灰(2.5Y6/1)	
132	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	甕	口縁	5	(37.0)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	
133	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	甕	口縁	10	(27.0)	−	−	灰(N6/0)	灰(5Y6/1)	
134	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	甕	口縁	10	(21.2)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
135	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	水注？	口縁	25	(6.2)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y4/1)	平瓶？
136	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	杯	口縁～体	8	(16.5)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
137	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	杯	口縁～体	3	(16.1)	−	−	灰(N4/0)	灰(5Y6/1)	
138	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	杯	口縁	4	(15.8)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
139	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	鉢？	口縁～体	6	(25.0)	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(2.5Y8/1)	
140	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	壺瓶類？	底	100	7.7	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(10YR8/1)	鉢？
141	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	壺瓶類？	底	30	−	(6.0)	−	灰白(5Y8/1)	灰白(5Y8/1)	鉢？
142	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	壺瓶類？	底	25	−	(6.7)	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	灰白(10YR7/1)	鉢？
143	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	コップ形	底	25	−	(6.3)	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	
144	56	41	3	A70・−A70	SX07	須恵器	壺瓶類	底	100	−	10.7	−	灰(5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
145	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	杯蓋	摘み	80	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	赤彩
146	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	杯	口縁	5	(13.6)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	黒褐(2.5Y3/1)	内黒土器
147	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	盤(皿)	口縁～胴	6	(14.9)	(12.2)	−	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	内外面赤彩
148	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	甕	口縁	10	(18.4)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	
149	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	甕	口縁	10	(13.1)	−	−	にぶい褐(7.5YR6/3)	灰褐(7.5YR4/2)	
150	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	甕	口縁	6	(28.2)	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
151	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	甕	口縁	5	(27.1)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
152	56	41	3	A70・−A70	SX07	土師器	甕	口縁	10	(26.3)	−	−	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y7/3)	
153	57	39	3	A70・−A70	SX08	須恵器	摘蓋	口～天井	45	15.4	−	−	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
154	57	40	3	A70・−A70	SX08	須恵器	摘蓋	口～天井	8	(14.3)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
155	57	39	3	A70・−A70	SX08	須恵器	箱形杯	全体	70	15.0	12.3	5.0	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	
156	57	39	3	A70・−A70他	SX08・SP758	須恵器	箱形杯	全体	25	(13.9)	(10.0)	3.5	灰(N6/0)	灰(N6/0)	ヘラ記号「−」

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
157	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	箱形杯	底	25	−	(10.1)	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
158	57	40	3	A70･−A70	SX08	灰釉陶器	碗	底	48	−	(7.1)	−	灰白(10YR7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	清ヶ谷Ⅲ−2
159	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	広口壺	口縁	10	(17.0)	−	−	黄灰(2.5Y5/1)	灰黄(2.5Y7/2)	
160	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	碗形杯身	口縁〜体	10	(14.1)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	高杯？
161	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	高杯？	脚	20	−	(9.0)	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
162	57	39	3	A70･−A70	SX08	須恵器	長頸壺	口縁〜頸	90	8.5	−	−	灰オリーブ(7.5Y4/2)	黄灰(2.5Y6/1)	
163	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	水注？	口縁	13	8.1	−	−	灰(N4/0)	灰(N4/0)	
164	57	40	3	A70･−A70	SX08	須恵器	甕	胴	−	−	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
165	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	杯	口縁	8	(16.1)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	
166	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	杯or甕	底	40	−	(3.9)	−	にぶい橙(5YR6/4)	橙(5YR6/6)	
167	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	6	(20.2)	−	−	浅黄橙(7.5YR8/3)	灰白(10YR8/2)	
168	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	6	(19.9)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
169	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	20	(22.0)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
170	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	20	(22.9)	−	−	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	
171	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	8	(24.1)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
172	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	6	(25.2)	−	−	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	
173	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	5	(40.2)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
174	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	5	(33.6)	−	−	にぶい橙(10YR7/2)	にぶい橙(10YR7/2)	
175	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	20	(31.7)	−	−	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y7/3)	
176	57	40	3	A70･−A70	SX08	土師器	甕	口縁	10	(27.8)	−	−	橙(5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	
177	58	42	2	H72	包含層	須恵器	杯身	全体	80	10.6	−	3.5	灰(5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	
178	58	43	2	J73他	攪乱	須恵器	杯蓋	口縁	6	(10.7)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	
179	58	42	2	K72･L72	包含層	須恵器	杯蓋	口〜天井	20	(10.0)	−	−	灰白(10YR8/2)	浅黄橙(10YR8/3)	
180	58	43	2	I68他	包含層	須恵器	杯身	口縁〜体	25	(8.2)	−	−	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	
181	58	43	2	I68他	包含層	須恵器	杯身	口縁	12	(9.2)	−	−	灰(N5/0)	黄灰(2.5Y6/1)	
182	58	43	3	F69他	攪乱	須恵器	返蓋	口〜天井	25	(12.9)	−	−	黄橙(10YR7/2)	黄橙(10YR7/2)	
183	58	42	2	F74･E74	攪乱	須恵器	摘蓋	全体	30	14.4	−	3.2	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
184	58	43	3	−	表土	須恵器	摘蓋	口〜天井	20	(12.4)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
185	58	43	2	E72	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	15	(14.3)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
186	58	43	2	F74他	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	10	(14.8)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
187	58	43	2	D72	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	8	(14.1)	−	−	灰(5Y5/1)	灰白(10YR7/1)	
188	58	43	2	E72	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	10	(16.0)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
189	58	43	3	C69	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	20	(17.0)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
190	58	43	3	A70	包含層	須恵器	摘蓋	口〜天井	5	(17.1)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
191	58	−	2	E72	包含層	須恵器	摘蓋	天井	25	−	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	
192	58	43	2	E72	包含層	須恵器	杯蓋	天井	20	−	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
193	58	−	3	F69他	攪乱	須恵器	杯蓋	天井	25	−	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
194	58	43	2	F72	包含層	須恵器	杯蓋	天井	15	−	−	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
195	58	43	−	確認TR	G	須恵器	無台杯？	体〜底	25	−	(7.7)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	碗形杯？
196	58	(45)	2	J73他	攪乱	須恵器	有台杯	底	15	−	(7.0)	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰褐(7.5YR6/2)	猿投産？
197	58	43	3	−	攪乱	須恵器	有台杯	底	30	−	(10.2)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
198	58	43	2	E76	攪乱	須恵器	有台杯	底	20	−	(9.7)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	
199	58	42	2	F74･E74	攪乱	須恵器	箱形杯	全体	45	12.3	(7.6)	3.7	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
200	58	43	3	B70	包含層	須恵器	箱形杯	底	20	−	(10.3)	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
201	58	43	2	D72	包含層	須恵器	高杯	口縁〜体	23	(16.9)	−	−	黄灰(2.5Y5/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
202	58	42	2	J73他	攪乱	須恵器	平瓶？	把手	−	−	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	水注？
203	58	43	3	A73他	攪乱	須恵器	長頸壺？	頸	40	−	−	−	灰オリーブ(5Y5/3)	灰白(5Y7/1)	平瓶？水注？
204	58	43	3	−	攪乱	須恵器	壺瓶類	底	20	−	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
205	59	43	2	F72	包含層	須恵器	長頸壺	頸	30	−	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
206	59	42	3	D71	包含層	須恵器	長頸壺	台部	35	−	(6.0)	−	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	
207	59	43	3	−	攪乱	須恵器	長頸壺	台部	25	−	(9.3)	−	灰白(2.5Y7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
208	59	43	3	D68	包含層	須恵器	短頸壺	胴	8	−	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y6/1)	
209	59	43	2	D72	包含層	須恵器	壺瓶類or杯身	底	20	−	(4.8)	−	灰(5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	ヘラ記号「×」？
210	59	43	3	−	攪乱	須恵器	壺瓶類	底	80	−	5.3	−	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	
211	59	43	3	A72	包含層	須恵器	壺瓶類	底	50	−	(5.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
212	59	43	3	B69	包含層	須恵器	甕	口縁	15	(18.4)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
213	59	43	3	−	攪乱	須恵器	甕	肩〜頸	18	−	−	−	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	
214	59	43	3	A70	包含層	須恵器	甕	口縁	10	(46.0)	−	−	灰白(5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
215	59	43	3	−	表土	須恵器	甕or鉢	口縁	5	(36.0)	−	−	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	鉢の可能性有
216	59	42	3	A70	包含層	緑釉陶器	碗？	体〜底	10	−	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	猿投産？
217	60	44	3	A70	包含層	土師器	杯蓋	天井	10	−	−	−	橙(5YR7/6)	灰黄褐(10YR5/2)	
218	60	44	2	E72	包含層	土師器	盤(Ⅲ)？	口縁	2	(19.0)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	内外面赤彩
219	60	44	2	−	表土	土師器	脚付盤	脚基部	80	−	−	−	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	赤彩
220	60	44	3	B72他	攪乱	土師器	杯	全体	50	(12.5)	5.5	4.0	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	墨書「十万」?
221	60	44	3	B70	包含層	土師器	杯	口縁	3	(16.0)	−	−	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい橙(5YR6/4)	
222	60	42	2	E72	包含層	土師器	製塩土器？	口縁	20	(12.6)	−	−	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	
223	60	44	2	I73	包含層	土師器	甕	口縁	10	(21.7)	−	−	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	
224	60	44	2	I73	包含層	土師器	甕	口縁	18	(18.5)	−	−	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	
225	60	44	2	D73他	攪乱	土師器	甕	口縁	10	(22.0)	−	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	
226	60	44	3	A72	包含層	土師器	甕	口縁	23	(19.4)	−	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	橙(7.5YR7/6)	
227	60	44	2	E72	包含層	土師器	甕	底	15	−	(8.1)	−	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	スス付着
228	60	44	2	E72	包含層	土師器	甕	口縁	10	(27.0)	−	−	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	スス付着
229	60	44	3	C69	包含層	土師器	甕	口縁	8	(33.1)	−	−	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	
230	60	44	2	F72	包含層	土師器	甕	口縁〜胴	18	(39.1)	−	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	スス付着
231	60	44	2	F72	包含層	土師器	甕	口縁〜胴	45	(38.1)	−	−	灰白(10YR8/2)	にぶい橙(5YR6/4)	
232	60	44	2	F74･E74	攪乱	土師器	台付甕	台基部	25	−	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	大型台付甕
233	60	44	3	F69他	攪乱	土師器	甑	把手	−	−	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
234	60	44	3	A70	包含層	土師器	甑	把手	−	−	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
235	61	46	3	−	攪乱	灰釉陶器	蓋	全体	60	(13.8)	−	4.1	にぶい黄(10YR7/2)	灰白(10Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−1

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
236	61	46	1	D77	包含層	灰釉陶器	段皿	体	5	−	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/3)	K14−K90
237	61	45	1	−	包含層	灰釉陶器	碗	口縁〜体	30	(15.4)	−	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−2
238	61	45	1	−	包含層	灰釉陶器	碗	口縁〜体	12	(16.4)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅳ−2
239	61	45	3	B69	包含層	灰釉陶器	碗	口縁	7	(18.0)	−	−	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	清ヶ谷Ⅳ−2
240	61	45	3	−	撹乱	灰釉陶器	碗	底	60	−	(6.7)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅲ−1
241	61	45	2	F75他	撹乱	灰釉陶器	碗	底	35	−	(6.8)	−	褐灰(10YR6/1)	褐灰(10YR6/1)	清ヶ谷Ⅲ−1
242	61	45	2	D72	包含層	灰釉陶器	碗	底	15	−	(5.6)	−	灰(5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	清ヶ谷Ⅲ−1
243	61	45	1	B78	包含層	灰釉陶器	碗	底	32	−	(6.5)	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅲ−1
244	61	45	3	−	撹乱	灰釉陶器	碗	底	40	−	(8.1)	−	黄灰(2.5Y6/1)	浅黄(2.5Y7/3)	清ヶ谷Ⅲ−1
245	61	45	1	A81・A82	撹乱	灰釉陶器	碗	底	21	−	(6.9)	−	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	清ヶ谷Ⅲ−1
246	61	45	2	F74	包含層	灰釉陶器	碗	底	10	−	(6.8)	−	灰白(7.5Y8/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
247	61	45	3	D70・71	撹乱	灰釉陶器	碗	底	45	−	(7.1)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(10YR7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
248	61	45	3	−	撹乱	灰釉陶器	碗	底	25	−	(7.8)	−	灰白(10Y7/1)	灰白(5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
249	61	45	2	F72	包含層	灰釉陶器	碗	体〜底	60	−	(6.6)	−	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
250	61	45	3	A73他	撹乱	灰釉陶器	碗	底	49	−	(6.1)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅳ−1
251	61	45	3	D70他	撹乱	灰釉陶器	碗	底	14	−	(7.2)	−	暗灰黄(2.5Y5/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅳ−1
252	61	45	3	C73	包含層	灰釉陶器	碗	底	20	−	(6.6)	−	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	清ヶ谷Ⅳ−1
253	61	45	3	F69他	撹乱	灰釉陶器	碗	底	23	−	(7.3)	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅳ−2
254	61	45	3	−	撹乱	灰釉陶器	碗	底	40	−	(7.8)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅳ−2
255	61	45	1	−	包含層	灰釉陶器	碗	体〜底	23	−	(6.6)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−2
256	61	46	−	確認TR	G2	灰釉陶器	碗	体〜底	60	−	6.7	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	清ヶ谷Ⅳ−3 ヘラ記号「○」
257	61	−	1	B76	包含層	灰釉陶器	碗	底	22	−	(4.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	清ヶ谷Ⅳ−4
258	61	−	3	−	表土	灰釉〜 山茶碗	碗	底	80	−	6.7	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅳ−4〜東遠Ⅰ
259	61	45	2	D72	包含層	灰釉陶器	碗	底	27	−	(6.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−4
260	61	45	2	J73他	撹乱	灰釉陶器	碗	底	23	−	(7.2)	−	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2)	清ヶ谷Ⅳ−4
261	61	45	3	−	表土	灰釉陶器	碗	底	20	−	(6.5)	−	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	清ヶ谷Ⅳ−4
262	61	45	3	A70	包含層	灰釉陶器	碗	底	25	−	(8.0)	−	にぶい黄(2.5Y6/3)	浅黄(2.5Y7/3)	宮口Ⅳ−1
263	61	45	1	B79	包含層	灰釉陶器	碗	底	65	−	(6.6)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰黄(2.5Y7/2)	宮口Ⅳ−1
264	61	45	1	−	表土	灰釉陶器	碗	底	30	−	(6.5)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	宮口Ⅳ−2
265	61	46	3	−	表土	灰釉陶器	碗？	体	70	−	−	−	褐灰(10YR5/1)	褐灰(10YR5/1)	森山窯産か
266	61	45	2	D72	包含層	灰釉陶器	長頸壺？	胴〜底	18	−	(6.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ
267	61	45	1	−	表土	灰釉陶器	長頸壺？	胴〜底	10	−	(9.1)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(5Y8/1)	清ヶ谷Ⅳ
275	64	47・48	2	K72	SK09	かわらけ	ロクロ	全体	97	11.2	4.6	3.5	褐灰(5YR6/1)	灰赤(2.5YR5/2)	16L
276	64	47・48	2	K72	SK09	かわらけ	ロクロ	口縁〜体	35	(10.0)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	16L
277	64	47・48	2	K72	SK09	かわらけ	ロクロ	全体	100	11.1	4.1	3.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	16L
278	64	47・48	2	K72	SK09	かわらけ	ロクロ	全体	40	(11.1)	(4.7)	2.9	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
279	64	47・48	2	K72	SK09	かわらけ	ロクロ	全体	100	10.1	4.6	2.3	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	16L
291	64	−	2	L72	SK03	灰釉陶器	碗	底	24	−	(6.0)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	宮口Ⅲ−2
296	65	46・47	2	L72	SK04	かわらけ	ロクロ	全体	95	12.6	7.1	2.7	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	16E
297	65	46・47	2	L72	SK04	かわらけ	ロクロ	全体	25	(12.2)	(6.8)	2.4	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	16E
324	68	48	2	K71	SK12	かわらけ	ロクロ	全体	100	(10.6)	4.2	2.9	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	16L
337	71	−	2	I69	SK30	須恵器	杯蓋	口〜天井	25	(10.0)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
338	71	−	2	I69	SK23	須恵器	杯蓋	口〜天井	10	(9.7)	−	−	灰白(10Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	
339	71	−	2	I69	SK25	須恵器	杯身	底	50	−	(4.0)	−	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	
340	71	48	2	I69	SK29	土師器	甕	口縁〜頸	90	17.8	−	−	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	
341	75	48	2	H70・71	SK43	土師器	甕	口縁〜頸	30	(22.0)	−	−	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	
342	75	48	2	H70・71	SK43	土師器	杯	口縁	10	(12.9)	−	−	灰褐(5YR4/2)	灰褐(5YR4/2)	内外面赤彩
343	75	48	2	J70・71	SK70	灰釉陶器	碗	全体	30	(16.1)	(8.0)	4.3	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	宮口Ⅲ−2・ ス ス付着
344	75	48	2	J70・71	SK71	土師器	甕	口縁〜頸	15	(25.1)	−	−	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
345	75	48	2	J70・71	SK71	土師器	甕	口縁〜胴	15	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
346	79	−	3	B69	SX05	灰釉陶器	碗	底	5	−	(7.1)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−1
347	79	52	3	A70	SX06	須恵器	杯蓋	天井	−	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	火襷
348	79	52	3	A70	SX06	須恵器	摘蓋	口〜天井	25	(14.8)	−	−	灰(N6/0)	灰(5Y6/1)	
349	79	52	3	A70	SX06	須恵器	箱形杯	底	25	−	(10.3)	−	灰白(10YR8/2)	灰白(10YR8/2)	
350	79	52	3	A70	SX06	須恵器	広口壺	肩〜胴	15	−	−	−	青灰(5B6/1)	明青灰(5B7/1)	
351	79	52	3	A70	SX06	灰釉陶器	輪花碗	口縁〜体	15	(18.0)	−	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−1
352	81	52	3	D68	包含層	山茶碗	托	底〜体	40	−	−	1.6	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ
353	81	52	1	B76	包含層	山茶碗	山皿	全体	16	(8.9)	(5.1)	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
354	81	52	1	D77	包含層	山茶碗	山皿	全体	100	7.8	3.9	1.8	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
355	81	52	1	−A79	包含層	山茶碗	碗	底	45	−	(4.8)	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	東遠江Ⅰ−1
356	81	53	3	−	表土	山茶碗	碗	底	23	−	(6.6)	−	青灰(5PB5/1)	青灰(5PB6/1)	東遠江Ⅰ−1か
357	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	30	−	(7.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−1
358	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	97	−	(7.2)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−1
359	81	53	1	B76	包含層	山茶碗	碗	底	90	−	(7.2)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−1
360	81	53	3	確認TR	G1	山茶碗	碗	底	60	−	6.8	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅰ−1
361	81	53	1	−	包含層	山茶碗	碗	底	55	−	(8.0)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−1
362	81	53	2	I71他	撹乱	山茶碗	碗	底	24	−	(7.2)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅰ−1
363	81	53	3	A72	包含層	山茶碗	碗	底	30	−	(7.2)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−1・ ス ス付着
364	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	25	−	(8.4)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−1
365	81	53	1	A77・−A77	表土	山茶碗	碗	体〜底	70	−	(7.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−1
366	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	48	−	−	−	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	渥美Ⅰ−1
367	81	53	3	A73他	撹乱	山茶碗	碗	底	80	−	7.8	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
368	81	53	3	E68	包含層	山茶碗	碗	底	80	−	7.4	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
369	81	53	3	F69他	撹乱	山茶碗	碗	体〜底	24	−	(7.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
370	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	25	−	(9.6)	−	灰白(5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
371	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	体〜底	24	−	(7.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
372	81	53	3	−	撹乱	山茶碗	碗	底	25	−	(7.0)	−	灰白(5Y7/2)	灰白(10Y8/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
373	81	53	3	−	表土	山茶碗	碗	底	85	−	(6.4)	−	灰黄褐(10YR6/2)	褐灰(10YR6/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
374	81	53	3	C69	包含層	山茶碗	碗	口縁～体	40	(15.2)	－	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅱ
375	81	53	1	B76	包含層	山茶碗	碗	口縁～体	11	(16.8)	－	－	灰白(10YR7/1)	褐灰(10YR6/1)	渥美Ⅱ・スス付着
376	81	53	3	C68他	SH15	山茶碗	碗	口縁	5	(16.2)	－	－	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	渥美Ⅱ
377	81	52	1	B76	包含層	山茶碗	無台碗？	底	100	－	4.4	－	灰白(2.5Y8/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅱ
378	81	52･53	1	－	表土	山茶碗	無台碗？	底	48	－	(4.5)	－	灰白(2.5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/3)	渥美Ⅱ
379	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	95	－	7.5	－	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
380	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	40	－	(6.0)	－	灰白(5Y8/1)	淡黄(2.5Y8/3)	渥美Ⅲ−1
381	81	53	1	−A79	包含層	山茶碗	碗	体～底	24	－	(7.8)	－	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
382	81	53	1	B76	包含層	山茶碗	碗	全体	90	－	8.0	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
383	81	53	1	A77･−A77	表土	山茶碗	碗	底	25	－	(7.9)	－	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
384	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	70	－	6.3	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
385	81	53	3	－	表土	山茶碗	碗	底	70	－	7.2	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
386	81	53	1	C79･D79	表土	山茶碗	碗	底	55	－	(7.4)	－	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	渥美Ⅲ−1
387	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	22	－	(8.0)	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
388	81	53	3	A73	包含層	山茶碗	碗	底	90	－	7.6	－	灰白(10YR7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	渥美Ⅲ−1
389	81	53	2	E74	包含層	山茶碗	碗	底	27	－	(8.0)	－	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅲ−1
390	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	60	－	(6.8)	－	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
391	81	53	3	A73他	攪乱	山茶碗	碗	底	30	－	(7.6)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
392	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	50	－	(7.2)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
393	81	52	1	−A79	包含層	山茶碗	無台碗？	底	35	－	(4.6)	－	浅黄(2.5Y7/3)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
394	81	52	2	D75	包含層	山茶碗	無台碗？	底	90	－	3.9	－	灰白(2.5Y8/1)	灰白(5Y8/1)	渥美Ⅲ−1
395	81	53	3	－	表土	山茶碗	碗	口縁～体	18	(15.7)	－	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
396	81	52	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	50	－	(7.5)	－	浅黄(7.5Y7/3)	浅黄(7.5Y7/3)	渥美Ⅲ−2・墨書「ε」
397	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	無台碗	底	65	－	(7.2)	－	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅲ−2
398	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	97	－	7.7	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
399	81	53	1	A77	攪乱	山茶碗	碗	底	27	－	(6.8)	－	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR7/1)	渥美Ⅲ−2
400	81	－	1	−A79	包含層	山茶碗	碗	底	40	－	(7.0)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y8/2)	渥美Ⅲ−2
401	81	53	3	A70	包含層	山茶碗	碗	底	40	－	(6.8)	－	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
402	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	75	－	6.8	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
403	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	40	－	(7.0)	－	灰白(5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
404	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	体～底	28	－	(6.4)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
405	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	40	－	(7.7)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
406	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	45	－	(6.5)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
407	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	70	－	6.4	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
408	81	53	2	D73他	攪乱	山茶碗	無台碗	底	20	－	(6.5)	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
409	81	53	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	60	－	(6.5)	－	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
410	82	52	3	－	表土	山茶碗	碗	全体	15	(14.7)	(7.6)	－	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	常滑6
411	82	52	1	B76	包含層	山茶碗	碗	全体	20	(15.0)	(6.2)	5.2	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	常滑6
412	82	52	2	J73他	攪乱	山茶碗	碗	底	22	－	(6.8)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	常滑6
413	82	52	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	47	－	(7.3)	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	常滑6
414	82	52	3	－	表土	山茶碗	碗	底	50	－	(7.0)	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	常滑6
415	82	52	3	－	攪乱	山茶碗	碗	底	25	－	(6.4)	－	灰黄(2.5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/3)	常滑6
416	82	52	3	－	攪乱	山茶碗	鉢	体～底	20	－	(10.6)	－	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	知多
417	83	55	3	－	攪乱	青磁	碗	底	25	－	(5.6)	－	にぶい黄橙(10YR7/3)	オリーブ灰(10Y5/2)	鎬蓮弁碗Ｂ4類
418	83	54	2	I68他	攪乱	青磁	碗	底	23	－	(5.0)	－	明オリーブ灰(2.5GY7/)	明オリーブ灰(2.5GY7/)	鎬蓮弁碗Ｂ1類
419	83	54	3	－	表土	青磁	碗	底	15	－	(6.6)	－	明オリーブ灰(2.5GY7/)	灰白(7.5Y7/1)	青磁碗Ｄ2かＥ類
420	83	54	3	－	攪乱	肥前青磁	皿	口縁	10	(10.0)	－	－	明緑灰(7.5GY7/1)	明緑灰(7.5GY7/1)	近世
421	83	54	3	B70	包含層	青磁	碗	体	－	－	－	－	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	鎬蓮弁碗Ｂ1類
422	83	54	1	B80他	攪乱	青磁	碗	体	－	－	－	－	明緑灰(5GY7/1)	明緑灰(5GY7/1)	青磁碗Ａ類
423	83	54	3	A70	包含層	白磁	碗	底	25	－	(5.6)	－	灰白(10YR8/1)	灰白(7.5Y7/1)	貿易陶磁
424	83	54	3	－	攪乱	白磁	皿	底	65	－	－	－	灰白(7.5Y7/2)	灰白(7.5Y7/2)	白磁Ⅱorlv？
425	83	54	1	A77他	攪乱	古瀬戸	天目茶碗	口縁	10	(12.2)	－	－	黒(10YR1.7/1)	黒(10YR1.7/1)	後Ⅱ
426	83	54	3	C68	包含層	古瀬戸	平碗	底	55	－	5.6	－	褐灰(7.5YR5/1)	灰白(10Y8/2)	後Ⅲ
427	83	54	3	A72	包含層	古瀬戸	擂鉢	底	20	－	(14.3)	－	明褐灰(7.5YR7/1)	灰褐(7.5YR6/2)	後Ⅳ新～大窯1
428	83	54	1	－	表土	瀬戸美濃	天目茶碗	口縁～体	20	(12.0)	－	－	浅黄橙(10YR8/4)	黒(7.5YR1.7/)	大窯4後
429	83	54	2	I73	包含層	瀬戸美濃	丸皿	底	30	－	5.6	－	灰白(7.5Y8/2)	オリーブ黄(7.5Y6/3)	大窯1～2・端反皿？
430	83	54	3	－	攪乱	瀬戸美濃	擂鉢	体～底	40	－	(11.0)	－	灰褐(7.5YR4/2)	灰褐(7.5YR4/2)	大窯3か4
431	83	54	1	－	表土	初山	擂鉢	体～底	20	－	(11.0)	－	灰褐(5YR4/2)	褐灰(5YR4/1)	大3後
432	84	56	3	A73	包含層	渥美	片口鉢	口縁	5	(31.6)	－	－	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
433	84	56	3	－	攪乱	渥美	片口鉢	底	10	－	(15.1)	－	灰(5Y6/1)	灰黄褐(10YR6/2)	
434	84	56	3	－	攪乱	渥美	片口鉢	体～底	20	－	(13.8)	－	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
435	84	56	3	－	攪乱	渥美	片口鉢	体～底	15	－	(13.5)	－	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y6/1)	
436	84	56	3	－	攪乱	渥美	片口鉢	底	27	－	(14.6)	－	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
437	84	56	2	確認TR	G1	渥美	鉢	胴～底	30	－	(14.9)	－	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
438	84	56	3	－	攪乱	渥美	壺	胴～底	25	－	(9.4)	－	灰(N5/1)	灰(N6/1)	
439	84	55	3	－	攪乱	渥美	壺	胴～底	15	－	－	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/3)	
440	84	55	2	－	包含層	渥美	壺	全体	80	－	8.2	－	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	12L・ヘラ記号「ε」
441	84	56	1	－	表土	渥美	甕	頸～肩	10	－	－	－	灰白(N7/0)	灰白(N5/0)	12C
442	84	56	3	A72	包含層	渥美	甕	肩～胴	－	－	－	－	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
443	84	56	1	−A79	包含層	渥美	甕	肩～胴	－	－	－	－	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	
444	84	56	3	－	攪乱	渥美	甕	肩～胴	－	－	－	－	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2)	
445	84	56	2	－	表土	渥美	甕	胴	－	－	－	－	灰(N4/0)	オリーブ黒(7.5Y3/1)	
446	85	56	3	－	攪乱	常滑？	片口鉢か	口縁	5	(34.6)	－	－	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	12M～13M・渥美か
447	85	57	1	－	表土	常滑	甕	胴～底	20	－	(13.6)	－	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	
448	85	57	3	F69他	攪乱	常滑	甕	胴～底	20	－	(11.7)	－	暗赤褐(5YR3/3)	暗赤褐(5YR3/4)	
449	85	57	2	確認TR	－	常滑	甕	胴～底	12	－	(20.0)	－	明赤褐(2.5YR5/6)	灰褐(5YR4/2)	
450	85	55	2	－	包含層	常滑	壺	胴～底	30	－	10.5	－	灰赤(2.5YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	12L・常滑3

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
451	86	57	3	−	攪乱	常滑	甕	口縁	5	(42.8)	−	−	褐灰(7.5YR4/1)	褐灰(7.5YR4/1)	常滑6a
452	86	57	3	−	攪乱	常滑	甕	口縁	5	(29.6)	−	−	灰赤(2.5YR4/2)	灰褐(5YR4/2)	常滑6a
453	86	57	3	−	攪乱	常滑	甕	口縁	5	(34.3)	−	−	黒褐(5YR3/1)	褐灰(10YR4/1)	常滑6a
454	86	57	3	−	攪乱	常滑	甕	口縁	5	(42.0)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	常滑6a
455	86	55･57	3	−	攪乱	常滑	甕	口縁	15	(44.2)	−	−	灰褐(5YR5/2)	褐灰(7.5YR5/1)	常滑6a
456	86	57	2	I71他	攪乱	常滑	甕	口縁	10	(30.0)	−	−	灰褐(5YR4/2)	灰黄褐(10YR4/2)	常滑10
457	86	57	3	A73他	攪乱	常滑	甕	胴	3	−	−	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	灰黄褐(10YR6/2)	
458	86	57	3	D70他	攪乱	常滑	甕	胴	−	−	−	−	にぶい赤褐(5YR5/4)	淡黄(2.5Y8/3)	
459	86	57	3	A73他	攪乱	常滑	甕	胴	−	−	−	−	灰褐(5YR4/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
460	86	57	3	A73他	攪乱	常滑	甕	胴	−	−	−	−	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
461	87	58	2	F73	包含層	土師質	清郷甕	口縁	25	(24.0)	−	−	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	H72併行・スス付着
462	87	58	2	D75	包含層	土師質	清郷甕	口縁	15	(25.1)	−	−	橙(5YR7/6)	明赤褐(5YR5/6)	H72併行・スス付着
463	87	58	1	−A78	包含層	土師質	羽釜	口縁	10	−	−	−	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	14〜15Cか
490	92	58	2	G73	SB07−P8	土師器	甕	口縁	10	(16.0)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
491	92	−	2	E72	SB26−P9	土師器	甕	口縁	5	(8.0)	−	−	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	
492	92	58	2	E73	SB26−P4	土師器	甕	口縁	15	(14.8)	−	−	にぶい橙(5YR6/4)	灰褐(5YR5/2)	
493	92	58	2	E72	SB26−P12	須恵器	杯蓋	口〜天井	50	(8.3)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	ヘラ記号「−」
494	92	58	3	B72	SB37−P3	土師質	鍋	口縁〜胴	20	(25.6)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	灰白(10YR8/2)	
495	92	58	3	B72	SB38−P2	須恵器	有台杯	体〜底	20	−	(9.4)	−	黄灰(2.5Y6/1)	褐灰(10YR6/1)	
496	92	−	3	B69	SB43−P4	須恵器	杯蓋	天井	12	−	−	−	灰(N7/0)	灰(N7/0)	
497	92	53	3	B69	SB43−P4	山茶碗	碗	底	30	−	(7.0)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
498	92	45	3	B69	SB43−P4	灰釉陶器	碗	底	−	−	(6.9)	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	宮口Ⅲ−2
499	92	45	3	B69	SB43−P4	灰釉陶器	碗	底	23	−	(7.9)	−	灰白(10YR7/1)	灰黄褐(10YR6/2)	清ヶ谷Ⅲ−2
500	92	45	3	B69	SB43−P4	灰釉陶器	碗	底	23	−	(7.2)	−	灰白(10YR7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	清ヶ谷Ⅳ−1
501	92	45	3	B69	SB43−P4	灰釉陶器	碗	底	50	−	(5.5)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−4
502	92	66･67	3	B69	SB43−P4	瀬戸美濃	天目茶碗	口縁〜体	10	(12.2)	−	−	灰白(5Y7/2)	赤黒(2.5Y1.7/)	S 登4
503	92	58	3	B69	SB43−P4	かわらけ	ロクロ	全体	40	(8.5)	4.0	3.3	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	17C前半以降
504	92	66･67	3	B69	SB43−P4	瀬戸美濃	擂鉢	口縁	18	(32.7)	−	−	にぶい褐(7.5YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	S 登8
505	92	45	1	C76	SB49−P4	灰釉陶器	碗	口縁〜体	20	(17.8)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅳ−3
506	92	53	1	C76･C77	SB53−P1	山茶碗	碗	口縁〜体	8	(15.0)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−1
508	92	−	1	−B82	SB70−P2	肥前？	香炉？	口縁	8	(10.0)	−	−	明緑灰(7.5G7/1)	明緑灰(7.5G7/1)	青磁･江戸以降
509	116	−	3	B70	SE01	須恵器	有台杯	底	10	−	(10.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
510	116	−	3	B70	SE01	灰釉陶器	碗	底	23	−	(7.9)	−	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
511	116	−	3	B70	SE01	かわらけ	ロクロ	口縁	5	(9.0)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	17C
512	116	63	3	B70	SE01	かわらけ	ロクロ	全体	80	10.8	6.2	2.9	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	16L
518	120	−	2	G67	SK40	山茶碗	碗	口縁〜体	20	(15.6)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	常滑5
519	120	63	3	C70	SK55	山茶碗	碗	体〜底	60	−	(7.2)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
520	120	63	3	C70	SK55	山茶碗	碗	口縁〜体	25	(16.7)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅱ
521	120	63	3	C70	SK55	山茶碗	碗	口縁〜体	5	(15.2)	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	渥美Ⅲ−1
522	120	−	2	I70	SK19	土師器	杯	口縁	8	(13.0)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	内外面赤彩
523	120	63	2	I70	SK19	灰釉陶器	碗	全体	60	13.4	6.4	4.1	褐灰(10YR6/1)	褐灰(10YR6/1)	清ヶ谷Ⅳ−1
524	120	−	2	I70	SK19	常滑	甕or壺	口縁？	−	−	−	−	灰オリーブ(5Y4/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	中世以降
527	129	−	2	J70	SD03	須恵器？	壺	底	15	−	(22.2)	−	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	
528	129	−	2	H68･I68	SD05	かわらけ	ロクロ	全体	40	(9.4)	(5.2)	3.5	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	17C
529	129	−	2	H68	SD06	かわらけ	ロクロ	体〜底	80	−	5.0	−	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	17C
530	129	55	2	H68	SD06	山茶碗	片口鉢	体〜底	10	−	−	−	青灰(5B6/1)	にぶい黄(2.5Y6/3)	尾張産
531	129	−	2	H69･I69	SD08	山茶碗	碗	底	25	−	(6.9)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	知多6
532	129	53	2	K73	SD09	山茶碗	碗	底	30	−	(8.2)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅲ−2
533	129	45	2	K73	SD09	灰釉？	片口鉢	体〜底	20	−	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	淡黄(2.5Y8/3)	清ヶ谷産
534	129	53	2	H69他	SD10	山茶碗	碗	底	24	−	(8.1)	−	灰白(10YR7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	渥美Ⅰ
535	129	53	2	H69他	SD10	山茶碗	碗	底	50	−	(8.0)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
536	129	45	2	G69他	SD12	灰釉陶器	碗	底	10	−	(5.3)	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅲ−2
537	129	45	2	F69他	SD13	灰釉陶器	碗	底	15	−	(5.8)	−	灰黄褐(10YR5/2)	褐灰(10YR6/1)	清ヶ谷Ⅳ−2or3
538	129	63	2	F69他	SD13	瀬戸？	反皿？	底	100	−	5.1	−	灰白(2.5Y8/2)	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	登窯
544	129	−	2	F69他	SD14	須恵器	杯蓋	天井	20	−	−	−	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	
545	129	45	2	F69他	SD14	灰釉陶器	碗	底	18	−	(7.3)	−	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	清ヶ谷Ⅲ−2
546	129	58	2	F69他	SD13･15	土師質	内耳鍋	口縁〜胴	20	(21.2)	−	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	16L・スス付着
547	129	64	2	G72他	SD15	かわらけ	ロクロ	全体	97	7.9	4.7	1.4	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	16L
548	129	64	2	G72他	SD15	かわらけ	ロクロ	全体	80	11.8	5.7	3.5	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	16L
549	129	−	3	C69他	SD20	須恵器	摘蓋	天井	20	−	−	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
550	129	43	3	C69他	SD20	須恵器	摘蓋	口〜天井	25	(15.0)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
551	129	−	3	C69他	SD20	土師器	甕	口縁	6	(25.2)	−	−	にぶい黄橙(5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
552	129	46	3	C69他	SD20	灰釉陶器	碗	底	24	−	(5.1)	−	灰白(5Y7/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	K14
553	129	−	3	C69他	SD20	かわらけ	ロクロ	体〜底	20	−	(6.0)	−	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	18C・スス付着
554	129	−	3	D68他	SD22	須恵器	杯蓋	天井	45	−	−	−	褐灰(10YR6/1)	褐灰(10YR6/1)	
555	129	53	3	D68他	SD22	山茶碗	碗	底	50	−	(7.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
556	129	−	3	B69他	SD27	土師器	甕	口縁	8	(23.0)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
557	129	42	3	B69他	SD27	緑釉陶器	碗	体	−	−	−	−	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	猿投産？
558	141	53	1	B79他	SD33	山茶碗	無台碗	底	100	−	7.4	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
559	141	−	1	B79他	SD33	肥前青磁	碗	体〜底	8	−	(7.0)	−	明緑灰(7.5GY7/)	明緑灰(7.5GY7/)	
560	141	−	1	−A79他	SD34	土師質	内耳鍋？	口縁	5	(19.2)	−	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	ホウロク？
561	141	−	1	−A79他	SD34	土師器	甕	底	12	−	(11.7)	−	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR6/3)	スス付着
562	141	45	1	−A79他	SD34	灰釉陶器	碗	底	10	−	(7.6)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	宮口Ⅳ−1
563	141	53	1	−A79他	SD34	山茶碗	碗	底	40	−	(7.4)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅰ−1
564	141	53	1	−A79他	SD34	山茶碗	碗	体〜底	90	−	7.4	−	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
565	141	53	1	−A79他	SD34	山茶碗	碗	体〜底	22	−	(6.7)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
566	141	53	1	−A79他	SD34	山茶碗	碗	底	60	−	(7.3)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	渥美Ⅲ−2？

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
567	141	64	1	−A79他	SD34	かわらけ	ロクロ	全体	55	(11.1)	(4.7)	2.9	淡赤橙(2.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	16L
568	141	57	1	−A79他	SD34	常滑	甕	口縁〜頸	8	(40.5)	−	−	にぶい赤褐(7.5YR4/3)	にぶい赤褐(7.5YR4/3)	常滑6b
570	141	64	1	B79・C79	SD35	かわらけ	ロクロ	全体	90	8.2	4.0	2.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	16L
571	141	64	1	B79・C79	SD35	かわらけ	ロクロ	全体	95	(7.3)	4.4	1.7	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	16L
572	141	57	1	−A79・A79	SD36	常滑	甕	口縁	5	(47.6)	−	−	暗赤褐(2.5YR3/2)	にぶい橙(5YR6/3)	常滑9
573	143	64	1	−B79他	SD42	瀬戸美濃	擂鉢	口縁	10	(26.0)	−	−	褐灰(5YR4/1)	褐灰(5YR4/1)	大3
574	143	64	1	−B79他	SD42	志戸呂	擂鉢	口縁〜体	10	(26.2)	−	−	灰赤色(2.5YR4/2)	灰赤色(2.5YR4/2)	17L〜18E
575	143	64	1	−B79他	SD42	初山	丸皿	全体	20	(10.0)	5.0	1.9	にぶい黄橙(10YR6/3)	灰褐(5YR4/2)	大3後
576	143	64	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	全体	80	(11.6)	4.7	3.4	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	16L
577	143	64	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	70	−	4.1	−	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	16L
578	143	64	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	全体	80	9.6	4.2	2.7	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	17E
579	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	70	−	4.4	−	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	17E
580	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	70	−	3.9	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	橙(7.5YR7/6)	17C
581	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	90	−	4.4	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	17C
582	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	口縁〜体	20	(10.8)	−	−	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	17C
583	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	口縁〜体	10	(12.0)	−	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	17C
584	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	80	−	4.5	−	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	18C
585	143	−	1	−B79他	SD42	かわらけ	ロクロ	体〜底	25	−	(4.0)	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	18C
586	143	58	1	−A77・A77	SD43	土師質	内耳鍋	口縁	7	(27.0)	−	−	灰黄褐(10YR4/2)	浅黄橙(10YR8/4)	17L〜18初
587	143	53	1	−A77・A77	SD43	山茶碗	碗	底	48	−	(7.9)	−	灰褐(7.5YR6/2)	灰白(2.5Y8/2)	渥美Ⅰ
588	143	53	1	−A77・A77	SD43	山茶碗	碗	底	80	−	(7.2)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
589	143	65	1	A75・76他	SD44	須恵器	小壺	底	30	−	(4.6)	−	灰(N6/0)	灰(N6/0)	
590	143	53	1	A75・76他	SD44	山茶碗	碗	底	70	−	(8.4)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅰ−2〜Ⅱ
591	143	−	1	A75・76他	SD44	かわらけ	ロクロ	全体	70	(11.0)	4.8	3.0	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	17E
592	143	65	1	A75・76他	SD44	瀬戸美濃	擂鉢	全体	20	(28.5)	(9.1)	11.0	褐灰(5YR5/1)	褐灰(5YR5/1)	後Ⅳ新〜大窯1
593	143	53	1	A76	SD45	山茶碗	碗	底	40	−	(7.2)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
594	143	−	1	A76	SD45	かわらけ	ロクロ	底	80	−	4.4	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	18C
595	143	53	1	−A76・A76	SD46	山茶碗	碗	底	70	−	7.4	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−2
596	143	57	1	−A76・A76	SD46	常滑	甕	肩	3	−	−	−	灰白(5Y7/1)	にぶい赤褐(5YR4/3)	
597	143	45	1	−C81〜83	SD47	灰釉陶器	碗	底	18	−	(6.6)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y8/1)	宮口Ⅳ−2
598	143	53	1	−C81〜83	SD47	山茶碗	碗	口縁	10	(14.2)	−	−	灰白(5Y8/2)	灰白(5Y8/2)	渥美Ⅰ−1
599	143	−	1	−C81〜83	SD47	山茶碗	碗	底	20	−	(6.8)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
600	146	65	1	−A82	SP17	かわらけ	非ロクロ	全体	30	(13.3)	(5.3)	2.4	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	16E
601	146	−	1	−A77・−B77	SP55	灰釉陶器	碗	底	10	−	(5.7)	−	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	清ヶ谷Ⅳ−1
602	146	−	1	−A77・−A76	SP116	須恵器	箱形杯	底	18	−	(10.0)	−	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
603	146	−	1	−A77・−A76	SP116	陶器	甕	胴	−	−	−	−	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	灰釉〜山茶碗
604	146	66・67	1	−B80	SP147	瀬戸美濃	土瓶蓋	全体	40	7.6	−	2.1	にぶい赤褐(5YR4/4)	灰白(2.5Y8/2)	S・18C末〜19C
605	146	65	1	A80	SP192	土師器	ミニチュア	全体	45	(5.9)	(2.8)	4.3	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	鉢
606	146	−	1	A80	SP192	白磁	小皿	体	8	−	−	−	灰白(5Y8/1)	灰白(5Y8/1)	貿易陶磁
607	146	−	1	−A82	SP239	須恵器	杯蓋	口〜天井	7	(9.8)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	灰(N6/0)	
608	146	−	1	C67	SP363	山茶碗	碗	底	40	−	(7.2)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	渥美Ⅲ−1
609	146	53	1	C67	SP369	山茶碗	碗	口縁	8	(15.7)	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	渥美Ⅱ
610	146	−	1	C67	SP378	灰釉陶器	碗	底	10	−	(7.0)	−	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	清ヶ谷Ⅳ−2
611	146	64	1	C67	SP387	山茶碗	山皿	全体	50	(8.0)	(4.2)	2.2	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	東遠江Ⅱ
612	146	−	1	C67	SP387	白磁	小皿	体	5	−	−	−	灰白(10Y7/)	灰白(10Y7/)	貿易陶磁
613	146	−	1	C67	SP394	常滑？	壺or甕	口縁	5	(29.8)	−	−	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	12L？
614	146	53	1	C67	SP397	山茶碗	碗	底	23	−	(7.5)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	渥美Ⅲ−2
615	146	53	1	C67	SP400	山茶碗	碗	口縁〜体	13	(15.5)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−1
616	146	53	1	B77	SP406	山茶碗	碗	口縁〜体	8	(14.6)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	渥美Ⅰ−2
617	146	53	1	C76	SP411	山茶碗	碗	体〜底	30	−	(8.0)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y8/1)	渥美Ⅲ−1
618	146	44	2	I70	SP495	土師器	甕	底	23	−	(8.2)	−	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	ススト付着
619	146	44	2	I70	SP497	土師器	甕	口縁	3	(15.8)	−	−	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
620	146	45	2	I70	SP497	灰釉陶器	碗	口縁〜体	8	(15.0)	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
621	146	45	2	I69	SP513	灰釉陶器	碗	口縁〜体	27	(15.0)	−	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
622	146	43	2	F73	SP537	須恵器	短頸壺	口縁	10	(11.4)	−	−	褐灰(10YR6/1)	灰白(10YR7/1)	
623	146	45	2	E73	SP537	灰釉陶器	碗	口縁	5	(18.0)	−	−	灰黄(2.5Y6/2)	暗灰黄2.5Y5/2)	清ヶ谷Ⅲ−2
624	146	−	2	F73	SP545	灰釉陶器	碗	底	25	−	(6.8)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	宮口Ⅳ−1
625	146	45	2	D73	SP555	灰釉陶器	碗	体〜底	21	−	(6.6)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
626	146	71	2	F72	SP577	古志戸呂	擂鉢	口縁	5	(27.0)	−	−	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	後Ⅳ古
627	146	44	2	G72	SP590	土師器	甕	底	20	−	(6.4)	−	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ススト付着
628	146	43	2	F74	SP607	須恵器	杯身	口縁	12	(9.9)	−	−	暗灰黄(2.5Y5/2)	黄灰(2.5Y5/1)	
632	146	65	2	H70	SP702	土師器	杯	全体	70	(12.4)	7.6	3.6	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ススト付着・内(外)面赤彩
633	146	43	3	A69	※1	須恵器	摘蓋	口〜天井	15	(15.2)	−	−	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	
634	146	−	3	A69	※1	瀬戸美濃	碗？	口縁〜体	20	(16.0)	−	−	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	18C
635	146	44	3	A69他	SP739	土師器	甑	把手	100	−	−	−	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	
636	146	43	3	A69他	SP739	須恵器	甕	頸	5	−	−	−	灰オリーブ(5Y4/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	
637	147	45	3	B69	SP742	灰釉陶器	碗	底	45	−	(6.4)	−	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	宮口Ⅳ−1
638	147	45	3	B69/−A70	SP752	灰釉陶器	碗	口縁	5	(15.7)	−	−	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	清ヶ谷Ⅲ−1
639	147	45	3	B69/A74	SP756	灰釉陶器	碗	口縁	11	(14.8)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−1
640	147	45	3	B69/A74	SP756	灰釉陶器	碗	口縁〜体	18	(14.0)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	清ヶ谷Ⅲ−1
641	147	43	3	B69/A74	SP758	須恵器	有台杯	底	12	−	(10.4)	−	灰白(N7/0)	灰白(N7/0)	
642	147	45	3	B69/A74	SP758	灰釉陶器	碗	底	18	−	(6.7)	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y8/1)	宮口Ⅳ−1or2
643	147	−	3	B69/A74	SP758	灰釉？	鉢or壺甕	口縁	10	(31.5)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	灰釉〜山茶碗
644	147	43	3	C69/B74	SP759	須恵器	有台杯	底	10	−	(11.1)	−	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	
645	147	−	3	C69/B74	SP759	土師器	有台盤	脚	5	−	(16.8)	−	明赤褐(2.5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR7/2)	赤彩
646	147	45	3	B73	SP775	灰釉陶器	碗	底	7	−	(6.5)	−	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	宮口Ⅳ−1
647	147	45	3	C72	SP780	灰釉陶器	碗	口縁〜体	8	(15.3)	−	−	灰白(2.5Y7/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	清ヶ谷Ⅲ−1
648	147	45	3	C72	SP780	灰釉陶器	碗	口縁	8	(15.2)	−	−	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	清ヶ谷Ⅲ−2
649	147	44	3	C69	SP824	土師器	甕	口縁	6	(24.0)	−	−	橙(5YR6/6)	褐灰(10YR5/1)	
650	147	43	3	D68・D69	SP841	須恵器	摘蓋	口〜天井	12	(16.2)	−	−	黄灰(2.5Y6/1)	褐灰(10YR5/1)	

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
651	147	－	3	D68･D69	SP841	須恵器	有台杯	底	20	－	(9.8)	－	灰白(2.5Y7/1)	にぶい黄橙(10YR7/2)	
652	147	－	3	D69	SP834	土師器	甕	口縁	10	(14.0)	－	－	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	
653	148	65	3	B73他	攪乱	かわらけ	ロクロ	全体	65	(7.6)	(5.0)	1.2	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	16L
654	148	65	3	E67他	攪乱	かわらけ	ロクロ	全体	30	(8.2)	(4.3)	1.9	にぶい褐(7.5YR6/3)	暗赤灰(7.5R4/1)	江戸(17C?)･鉄釉掛
655	148	－	3	A73他	攪乱	かわらけ	ロクロ	底	85	－	5.9	－	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	17Cか
656	148	65	2	H68他	包含層	かわらけ	ロクロ	全体	50	(7.2)	(3.4)	2.4	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	18C
657	148	65	3	－	攪乱	かわらけ	ロクロ	全体	98	6.1	3.3	3.0	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	18C
658	148	65	3	D68	包含層	かわらけ	ロクロ	全体	60	(8.2)	5.0	2.7	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	18C･灯明皿
659	148	65	3	A72	包含層	かわらけ	ロクロ	全体	93	7.8	4.0	2.6	にぶい橙(7.5YR7/3)	橙(7.5YR7/6)	18C
660	148	65	2	－	表土	かわらけ	ロクロ	全体	80	8.4	4.5	3.5	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	18C
661	148	65	3	－	表土	かわらけ	ロクロ	全体	80	9.2	4.5	3.1	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	18C
662	148	65	3	－	表土	かわらけ	ロクロ	全体	70	9.6	5.2	3.8	橙(7.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	18C･灯明皿
663	148	－	2	I69･H69	攪乱	かわらけ	ロクロ	体～底	55	－	(4.4)	－	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	18C
664	148	－	2	I71他	攪乱	かわらけ	ロクロ	体～底	75	－	4.7	－	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	18C
665	148	－	2	D74他	攪乱	かわらけ	ロクロ	底	20	－	(5.8)	－	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/3)	18C
666	148	－	2	D76	包含層	かわらけ	ロクロ	体～底	60	－	4.8	－	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	18C
667	148	－	3	E68	包含層	かわらけ	ロクロ	口縁	20	(13.0)	－	－	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	18C
668	148	－	3	D70･71	攪乱	かわらけ	ロクロ	口縁～体	25	(10.0)	－	－	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	18C･灯明皿
669	148	－	3	F69他	攪乱	かわらけ	ロクロ	口縁～体	15	(10.0)	－	－	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	18C
670	148	－	3	F69他	攪乱	かわらけ	ロクロ	体～底	20	－	4.2	－	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	18C
671	149	66･67･68	3	D70他	攪乱	瀬戸美濃	折縁鉄絵皿	全体	20	(12.0)	(6.7)	2.6	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/3)	M登2か3
672	149	68	3	D68	包含層	瀬戸美濃	灯明皿	全体	98	10.6	6.2	2.5	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y5/3)	M登7
673	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	灯明皿	全体	50	(10.0)	4.0	2.3	浅黄(2.5Y7/3)	灰白(5Y7/3)	M登10
674	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	灯明皿	全体	85	10.4	4.8	2.2	灰庵黄(2.5Y5/2)	灰白(7.5Y7/1)	M登10
675	149	68	2	－	包含層	瀬戸美濃	灯明皿	全体	30	(10.4)	4.7	2.1	にぶい黄(2.5Y6/3)	灰白(10YR7/1)	M登10か11
676	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	灯明皿	全体	20	(12.0)	(5.6)	2.2	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	M登10か11
677	149	66･67	2	E74	包含層	瀬戸美濃	天目茶碗	体～底	20	－	4.8	－	灰黄(2.5Y6/2)	暗褐(7.5YR3/4)	M登1か2
678	149	68	3	D68	包含層	瀬戸美濃	尾呂茶碗	全体	55	10.4	4.6	6.6	明黄褐(2.5Y7/6)	黄褐(2.5Y5/4)	M登7
679	149	66･67	－	確認TR	I	瀬戸美濃	尾呂茶碗	体～底	35	－	5.0	－	浅黄(2.5Y7/3)	暗オリーブ(5Y4/4)	M登7
680	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	小碗	全体	50	(6.6)	3.2	4.0	灰白(2.5Y8/2)	灰白(5Y7/2)	M登8
681	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	湯呑	全体	40	(9.3)	3.8	5.9	灰白(5Y8/2)	灰白(5GY8/1)	S 登9
682	149	68	2	－	表土	瀬戸美濃	梅文皿	全体	30	(11.2)	3.9	4.3	淡黄(5Y8/4)	灰白(7.5Y7/2)	S 登8
683	149	69	3	D68	包含層	瀬戸美濃	梅文皿	全体	40	(11.7)	3.9	4.6	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	S 登8
684	149	66･67	3	F69他	攪乱	瀬戸美濃	土瓶か？	口縁～体	10	(13.9)	－	－	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	18C末～19E
685	149	69	2	－	表土	瀬戸美濃	徳利	胴～底	40	－	(6.8)	－	灰オリーブ2.5Y6/	浅黄(2.5Y7/3)	S 登7
686	149	69	－	－	不明	瀬戸美濃	仏餉器	碗	65	(6.4)	－	－	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	S 登8か9
687	149	66･67	2	－	表土	瀬戸美濃	不明	体～底	40	－	(7.0)	－	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい褐(5YR4/4)	S ･近世
688	150	69	2	－	表土	瀬戸美濃	片口鉢	全体	35	(18.1)	(9.1)	10.0	明黄褐(2.5Y7/6)	明黄褐(2.5Y7/6)	M登7
689	150	66･67	2	－	表土	瀬戸美濃	片口鉢	口縁～体	18	(14.2)	－	－	淡黄(2.5Y8/3)	オリーブ黄(7.5Y6/3)	S M登11
690	150	66･67	2	D76	包含層	瀬戸美濃	片口鉢	底	60	－	5.8	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(7.5Y7/1)	S 登5～7
691	150	66･67	3	A73他	攪乱	瀬戸美濃	擂鉢	底	18	－	(12.4)	－	暗赤褐(2.5YR3/3)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	S 登
692	150	69	2	D76	包含層	瀬戸美濃	擂鉢	全体	88	19.9	10.0	5.7	にぶい赤褐(5YR4/4)	灰褐(7.5YR7/6)	S 登5か6
693	150	66･67	1	A77･−A77	表土	瀬戸美濃	擂鉢	口縁	10	(30.0)	－	－	褐(7.5YR4/4)	褐(7.5YR4/4)	S 登5
694	150	66･67	3	A70他	包含層	瀬戸美濃	擂鉢	口縁～体	20	(30.0)	－	－	にぶい褐色(7.5YR5/4)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	S 登8
695	150	66･67･69	2	－	表土	瀬戸美濃	擂鉢	体	10	－	－	－	極暗赤褐(2.5YR2/2)	極暗赤褐(2.5YR2/2)	S 登8か9･「大」の押印
696	150	66･67	2	－	表土	瀬戸美濃	擂鉢	口縁	5	(30.8)	－	－	灰赤(2.5YR4/2)	灰赤(2.5YR4/2)	S 登9
697	150	66･67	1	B79他	攪乱	瀬戸美濃	擂鉢	口縁	3	(32.0)	－	－	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	S 登10か11
698	150	66･67･70	2	－	表土	瀬戸美濃	手水鉢	口縁～底	40	(30.5)	(13.9)	－	灰(5Y8/1)	灰(5Y8/1)	S 登11･墨書「辰年」
699	151	70	2	－	表土	瀬戸美濃	有耳壺	全体	90	9.8	15.4	11.1	灰白(5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/4)	M登7･墨書「歳三十」
700	151	70	2	－	表土	瀬戸美濃	土瓶蓋	全体	40	(10.2)	－	2.3	黒(7.5YR1.7/1)	淡黄(2.5Y8/4)	S 登8か9
701	151	70	2	－	包含層	瀬戸美濃	甕	底	85	－	14.0	－	淡黄(2.5Y8/3)	暗褐(7.5YR3/4)	S 登8～11
702	151	56	3	A73他	攪乱	渥美？	甕or壺	胴	－	－	－	－	灰オリーブ(7.5Y5/3)	灰(5Y6/1)	中世
703	152	70	2	－	包含層	志戸呂	把手付蓋	全体	80	8.8	－	2.4	灰赤(10R4/2)	にぶい赤褐(5YR5/3)	近世(19C)
704	152	71	1	－	包含層	志戸呂	天目茶碗	口縁	12	(9.9)	－	－	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	近世(17C？)
705	152	71	2	F74･F75	攪乱	志戸呂	擂鉢	口縁	3	(28.4)	－	－	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	17E
706	152	71	3	F69他	攪乱	志戸呂	擂鉢	口縁	5	(26.8)	－	－	灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR5/3)	近世(17L？)
707	152	71	2	F74	包含層	志戸呂	擂鉢	体～底	15	－	(14.0)	－	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	17E
708	152	70	2	－	表土	志戸呂	徳利？	胴～底	35	－	(12.6)	－	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	近世
709	152	70	3	A70	包含層	志戸呂	香炉	全体	25	(12.8)	(13.1)	7.3	にぶい褐(7.5R5/3)	にぶい褐(7.5R5/3)	近世(17M？)
710	152	71	2	－	表土	肥前染付	把手付蓋	全体	95	9.1	3.3	2.9	灰白(5GY8/1)	灰白(5GY8/1)	近世(肥前Ⅴ)
711	152	71	2	－	表土	肥前染付	丸碗	全体	70	8.1	3.5	5.0	灰白(5GY8/)	灰白(5GY8/)	近世(肥前Ⅴ)
712	152	71	2	E76･D76	攪乱	肥前染付	筒形碗	全体	65	7.0	3.8	5.2	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)	近世(肥前Ⅴ)
713	152	72	2	－	表土	肥前染付	広東碗	全体	40	(10.8)	4.2	6.2	明緑灰(10GY8/1)	明緑灰(10GY8/1)	近世(肥前Ⅴ)
714	152	71	2	－	表土	肥前染付	小碗	全体	85	6.5	2.8	3.0	明オリーブ灰(2.5GY7/)	明オリーブ灰(2.5GY7/)	近世(肥前Ⅴ)
715	152	71	2	－	表土	肥前染付	仏餉器	全体	95	6.3	4.0	4.8	灰白(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	近世(肥前Ⅴ)
716	153	72	2	－	表土	汽車徳利	湯呑	全体	100	(5.8)	(3.7)	3.1	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(10Y8/1)	現代･遠州製陶製
717	153	72	2	－	表土	汽車徳利	急須	全体	100	6.9	5.7	6.5	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	現代･遠州製陶製･「お茶は」「静岡」
718	153	72	2	－	表土	磁器染付	徳利	口縁～胴	95	2.9	－	－	灰白(5GY8/1)	灰白(5GY8/1)	近代～現代？「∧中酒□」「圓田」
719	153	73	2	－	表土	瓦	道具瓦	一部	－	－	－	－	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	近世～近代？
720	153	73	2	－	表土	瓦	軒桟瓦	軒丸部	－	－	－	－	暗灰3/	暗灰3/	近世～近代？

※1　SP738／SB44－P5･SB45－P10　　単位　残存率(%)　口径･底径･器高(cm)　括弧内は復原値

※2　小穴(SP)出土の639～645については、調査時に遺構番号を重複して付加してしまい、どちらの遺構から出土したかが不明なものである。

※3　備考の表記　C＝世紀　S＝瀬戸産　M＝美濃産　SM＝瀬戸or美濃産　数値の後ろのM＝中葉･中頃　E＝前半･前葉　L＝後半･後葉　登＝登窯期　大＝大窯期　後＝古瀬戸後期　清ヶ谷＝清ヶ谷産、松井編年　宮口＝宮口産、松井編年　渥美＝渥美湖西産、松井編年　知多･常滑＝中野編年　瀬戸美濃製品の時期＝藤澤編年　K14＝猿投黒笹14号窯式　K90＝猿投黒笹90号窯式

2　石器観察表

第15表　北垣遺跡出土石器観察表

No	Fig	PL	区	grid	遺構	種類	石材	全長	幅	厚さ	重量	備考
46	20	33	3	B70	表土	石鏃	黒曜石	1.25	0.9	0.2	0.16	
47	20	33	2	D72	SB31-P2	石鏃未製品	珪質頁岩(灰色)	2.3	2.4	0.6	2.86	
48	20	33	2	I71他	撹乱	石錐	チャート(赤色)	2.92	2.6	1.0	5.54	
49	20	33	2	－	表土	石核	シルト岩	6.5	7.9	5.3	230.0	

単位　全長・幅・厚さ（㎝）　重量（ｇ）

3　金属製品観察表

第16表　北垣遺跡出土金属製品観察表（銭貨を除く）

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	材質	種類	全長 器径	幅 高さ	厚さ	重量	時期	備考
280	64	47・48	2	K72	SK09	鉄	釘	4.8	0.4	0.4	1.870	16世紀	
281	64	47・48	2	K72	SK09	鉄	釘	(2.1)	0.6	(0.6)	2.183	16世紀	
282	64	47・48	2	K72	SK09	鉄	釘	(3.6)	0.3	0.3	1.870	16世紀	
298	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	4.1	0.4	0.5	4.490	16世紀	復原長7.0㎝
299	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(3.6)	0.4	0.3	3.338	16世紀	
300	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(4.4)	0.4	0.6	6.535	16世紀	
301	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(4.0)	0.5	0.3	5.717	16世紀	
302	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(3.0)	0.5	0.4	3.777	16世紀	
303	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(3.4)	0.4	0.2	2.467	16世紀	
304	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	3.1	0.4	0.3	2.764	16世紀	
305	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.6)	0.4	0.2	2.299	16世紀	
306	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.6)	0.3	0.3	1.176	16世紀	
307	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(1.6)	0.4	0.3	1.537	16世紀	
308	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.1)	0.4	0.2	1.972	16世紀	
309	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(1.9)	0.3	0.3	1.945	16世紀	
310	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.2)	0.3	0.3	1.430	16世紀	
311	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.3)	0.3	0.2	1.435	16世紀	
312	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(1.4)	0.4	0.2	0.524	16世紀	
313	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(1.1)	0.3	0.3	1.031	16世紀	
314	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(0.9)	0.3	0.3	0.750	16世紀	
315	65	47	2	L72	SK04	鉄	釘	(2.8)	0.2	0.2	0.747	16世紀	
525	120	－	2	I70	SK19	鉄	釘	(7.0)	0.3	0.3	4.563	不明	
526	129	－	2	L72	SD01	鉄	釘	4.8	0.2	0.2	2.010	近世以降	
539	129	－	2	F69・70・G70・71	SD13	鉄	小刀？	1.2	(3.4)	0.4	6.684	近世以降	
540	129	－	2	F69・70・G70・71	SD13	鉄	小刀？	1.2	(3.3)	0.4	6.533	近世以降	
541	129	－	2	F69・70・G70・71	SD13	鉄	用途不明	(2.4)	(2.6)	0.3	2.781	近世以降	
542	129	－	2	F69・70・G70・71	SD13	鉄	用途不明	(3.1)	0.3	0.3	2.194	近世以降	
543	129	75	2	F69・70・G70・71	SD13	鉄	鎌	2.2	(7.3)	0.2	13.347	近世以降	
569	141	64	1	B79	SD34	鉄	鎌	3.1	15.0	0.4	132.430	近世以降	
629	146	－	2	F73	SP695	鉄	釘	(4.5)	0.3	0.2	3.917	不明	
630	146	－	2	F73	SP695	鉄	釘？	(3.7)	0.5	0.3	3.765	不明	
631	146	－	2	F73	SP695	鉄	用途不明	1.6	4.0	0.2	6.100	不明	
722	153	74	2	－	表土	銅	錘	3.2	3.6	3.2	144.569	中世以前	
723	153	74	2	－	表土	真鍮？	煙管	1.1	(6.4)	0.1	7.795	江戸	
724	153	74	2	－	表土	真鍮？	煙管	1.2	(5.6)	0.1	4.327	江戸	
725	153	74	3	－	撹乱	銅	銅碗	4.4	(1.3)	0.1	13.96	不明	
726	154	75	3	A73	包含層	鉄	不明	(8.4)	3.4	0.4	23.956	不明	ヤス？
727	154	75	3	A73	包含層	鉄	鎌	3.1	(7.0)	0.4	37.321	不明	
728	154	75	1	B79･B80･A79･A80	撹乱	鉄	不明	1.3	7.0	1.4	29.873	不明	小刀茎?
729	154	－	3	－	撹乱	鉄	不明	(4.0)	0.8	0.3	6.683	不明	
730	154	－	1	A78ほか	撹乱	？	不明	(6.1)	(0.5)	0.1	5.879	不明	
731	154	－	3	－	撹乱	鉄	釘	7.0	0.5	0.5	35.914	近世以降	
732	154	75	3	－	撹乱	鉄	楔	14.0	1.6	0.7	139.943	不明	
733	154	75	3	B72ほか	撹乱	鉄	不明	10.3	0.7	0.6	28.990	不明	ヤス？
734	154	75	2	F75ほか	撹乱	鉄	不明	(14.8)	0.6	0.5	24.544	不明	

単位　全長・幅・厚さ（㎝）　重量（ｇ）

4　鉄滓観察表

第17表　北垣遺跡出土鉄滓観察表

No	Fig	PL	区	grid	出土位置	全長	幅	厚さ	重量	備考
507	92	75	1	−A78・79	SB61−P1	3.5	2.5	1.8	15.06	
735	154	75	3	−	撹乱	7	8.6	3.1	343.00	分析試料No.1
736	154	75	3	−	撹乱	7.5	8.6	2.3	225.00	分析試料No.2
737	154	75	3	−	撹乱	5.9	6	2.3	93.58	分析試料No.3
738	154	75	1	−	表土	3.8	4.8	2.7	35.72	
739	154	75	1	−	表土	3.9	4.7	2.9	71.92	分析試料No.5
740	154	75	1	−	表土	3.5	4.4	3.1	48.32	
741	154	75	1	A78・−A78・−B78	撹乱	3.1	4.9	2.9	49.97	分析試料No.4
−	−	−	3	−	撹乱	−	−	−	21.28	
−	−	−	3	−	撹乱	−	−	−	3.77	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	6.38	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	5.05	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	3.92	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	10.00	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	3.16	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.91	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.95	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.60	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.57	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.34	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	0.56	
−	−	−	1	A78・−A78・−B78	撹乱	−	−	−	1.30	
−	−	−	1	−B81	SK69	−	−	−	1.77	
−	−	−	1	−B77	SB59−P10	−	−	−	3.75	
−	−	−	−	−	表土	−	−	−	6.01	
−	−	−	2	I71・Ⅰ72・H69・H70・H71・G69	撹乱	−	−	−	6.84	
−	−	−	2	I71・Ⅰ72・H69・H70・H71・G69	撹乱	−	−	−	3.31	
−	−	−	2	I71・Ⅰ72・H69・H70・H71・G69	撹乱	−	−	−	2.77	
−	−	−	2	I71・Ⅰ72・H69・H70・H71・G69	撹乱	−	−	−	1.25	
−	−	−	2	I71・Ⅰ72・H69・H70・H71・G69	撹乱	−	−	−	1.98	

※自然科学分析の計測値とは若干異なる。

単位　全長・幅・厚さ（㎝）　重量（ｇ）

5　銭貨観察表

第18表　北垣遺跡出土銭貨観察表

No	Fig	PL	区	出土位置	種別	銭名	国名	初鋳年	銭径	内径	孔幅	重量	備考
268	64	49〜51	2	SK06	銅銭	乾元通寶	唐	758	23.0	19.5	6.5	(2.61)	272と貼付していた
269	64	49〜51	2	SK06	銅銭	開元通寶	唐	621	24.5	21.0	6.5	2.67	
270	64	49〜51	2	SK06	銅銭	永樂通寶	明	1408	25.0	21.5	5.2	2.04	
271	64	49〜51	2	SK06	銅銭	嘉祐通寶？	北宋	1056	23.5	20.0	6.5	2.30	
272	64	49〜51	2	SK06	銅銭	政和通寶	北宋	1111	23.0	21.5	7.0	(1.74)	268と貼付していた
273	64	49〜51	2	SK06	銅銭	皇宋通寶	北宋	1038	25.0	21.5	7.1	1.60	
274	64	47	2	SK09	銅銭4枚	左　不明	−	−	−	−	6.8	3.54	X線で「元」の文字
						右　不明	−	−	−	−	6.0		
283	64	49〜51	2	SK02	銅銭	開元通寶	唐	621	25.0	20.5	7.0	2.78	
284	64	49〜51	2	SK02	銅銭	洪武通寶	明	1368	23.5	20.0	6.5	2.67	
285	64	49〜51	2	SK02	銅銭	開元通寶？	唐	621	(23.5)	20.5	6.5	1.04	
286	64	49〜51	2	SK03	銅銭	元豊通寶	北宋	1078	24.5	19.5	6.5	2.19	287・289と貼付していた
287	64	49〜51	2	SK03	銅銭	紹聖元寶？	北宋	1094	25.0	18.0	6.5	2.50	286・289と貼付していた
288	64	49〜51	2	SK03	銅銭	政和通寶？	北宋	1111	24.0	20.0	6.2	2.19	
289	64	49〜51	2	SK03	銅銭	不明	−	−	25.0	21.0	6.0	2.68	286・287と貼付していた
290	64	49〜51	2	SK03	銅銭	不明	−	−	−	−	−	(0.19)	破片
292	65	46･47	2	SK04	銅銭	開元通寶	唐	621	23.5	20.0	6.8	2.20	
293	65	46･47	2	SK04	銅銭	元豊通寶	北宋	1078	24.0	19.0	8.0	2.12	
294	65	46･47	2	SK04	銅銭	元祐通寶？	北宋	1086	24.0	19.5	7.0	2.66	「元符通寶」(初鋳1098年)か
295	65	46･47	2	SK04	銅銭	宣徳通寶	明	1426	25.5	20.5	4.8	3.44	
316	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	25.0	21.0	5.6	3.91	
317	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	24.8	21.5	5.8	2.65	
318	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	25.0	21.5	6.5	2.34	
319	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	25.0	21.0	5.6	1.90	
320	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	−	−	−	(0.05)	322と同一個体の可能性
321	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	−	−	−	(0.08)	323と同一個体の可能性
322	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	−	−	−	(0.22)	320と同一個体の可能性
323	68	49〜51	2	SK11	銅銭	永樂通寶	明	1408	−	−	−	(0.25)	321と同一個体の可能性
325	68	49〜51	2	SK14	銅銭	祥符通寶	北宋	1008	25.0	19.0	6.5	2.28	326・327と貼付していた
326	68	49〜51	2	SK14	銅銭	天祐通寶？	北宋	1086	25.5	20.5	6.5	2.48	325・327と貼付していた
327	68	49〜51	2	SK14	銅銭	元豊通寶	北宋	1078	25.5	21.0	6.5	2.64	325・326と貼付していた
328	71	49〜51	2	SK21	銅銭2枚	左　永樂通寶	明	1408	23.5	20.0	6.0	3.81	
						右　不明	−	−	23.5	22.0	6.5		
329	71	49〜51	2	SK21	銅銭2？枚	左　不明	−	−	−	−	7.5	2.19	
						右　不明	−	−	(24.0)	−	7.5		
330	71	49〜51	2	SK21	銅銭	不明	−	−	−	−	−	(0.62)	破片

No	Fig	PL	区	出土位置	種別	銭名		国名	初鋳年	銭径	内径	孔幅	重量	備考
331	71	49～51	2	SK31	銅銭3枚	左	天祐通寶？	北宋	1086	23.5	19.5	6.5	5.35	
						右	皇宋通寶	北宋	1038	23.0	18.5	6.5		
332	71	49～51	2	SK31	銅銭	開元通寶？		唐	621	－	－	－	(0.28)	破片
333	71	49～51	2	SK30	銅銭5枚	左	永樂通寶	明	1408	23.0	21.0	6.0	12.55	
						右	天〇通寶	－	－	22.1	20.0	6.0		
334	71	49～51	2	SK30	銅銭	聖宗元寶		宋	1101	24.0	19.0	6.5	1.91	
335	71	49～51	2	SK34	銅銭	元豊通寶		北宋	1078	(22.8)	－	6.8	0.73	
336	71	49～51	2	SK34	銅銭	不明		－	－	(23.0)	－	6.0	1.38	
513	118	63	2	SK37	銅銭	政和通寶		北宋	1111	(24.5)	21.5	6.5	2.06	
514	118	63	2	SK37	銅銭	不明		－	－	24.0	19.0	5.8	2.36	
515	118	63	2	SK37	銅銭	寛永通寶		日本	1668	22.0	18.0	6.8	1.27	新寛永
516	118	63	2	SK37	銅銭	寛永通寶		日本	1668	25.0	20.5	6.0	2.26	新寛永・文銭
517	118	63	2	SK37	真鍮製	寛永通寶		日本	1768	28.0	20.0	6.0	4.16	四文銭(二十一波)
721	153	74	3	表土	真鍮製	寛永通寶		日本	1769	28.5	21.0	6.0	4.05	四文銭(十一波)
－	－	－	2	SK22	銅銭	不明		－	－	－	－	－	(0.31)	破片12点。実測不能。
－	－	47	2	SK09	銅銭	不明		－	－	－	－	－	(6.16)	小銅塊大(実測不能)
－	－	47	2	SK09	銅銭	不明		－	－	－	－	－	(1.45)	小銅塊中(実測不能)
－	－	47	2	SK09	銅銭	不明		－	－	－	－	－	(0.40)	小銅塊小(実測不能)

単位　銭径・内径・孔幅（㎜）　重量（ｇ）

6　石塔観察表

第19表　北垣遺跡出土石塔観察表

No	Fig	PL	区	grid	遺構	出土位置	種類	石材	全高	最大幅	奥行	重量	時期
464	88	59・61	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	33.4	13.8	13.1	8.6	16世紀
465	88	59・61	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	29.9	12.2	12.2	6.1	16世紀
466	88	59・61	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(27.1)	12.2	11.5	(3.6)	16世紀
467	88	59・61	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(9.0)	(7.9)	(7.4)	(0.8)	16世紀
468	88	59・61	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(12.1)	9.6	(9.6)	(1.9)	16世紀
469	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(16.8)	11.7	11.5	(3.3)	16世紀
470	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(21.7)	13.2	(11.5)	(4.6)	16世紀
471	88	59・62	3	B70	SE01	覆土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(14.0)	10.2	9.2	(2.2)	16世紀
472	88	59・61	3	B70	SE01	井戸壁体	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(10.1)	11.3	11.2	(1.2)	16世紀
473	88	59・62	3	B70	SE01	井戸壁体	一石五輪塔	凝灰質砂岩	24.0	13.7	13.4	(7.0)	16世紀
474	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(20.5)	11.7	(10.7)	(4.1)	16世紀
475	88	59・61	3	B70	SE01	覆土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(21.7)	10.2	9.2	(3.3)	16世紀
476	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(18.0)	10.9	9.4	(4.1)	16世紀
477	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	13.7	12.9	12.0	(2.8)	16世紀
478	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	11.0	(10.6)	9.6	(1.9)	16世紀
479	88	59・62	2	－	－	表土	一石五輪塔	凝灰質砂岩	(11.9)	12.0	11.4	(2.6)	16世紀
480	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	11.1	20.2	－	(2.6)	16世紀
481	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	11.5	19.3	15.5	(5.1)	16世紀
482	89	59・60	3	B70	SE01	覆土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	9.0	－	－	(1.5)	16世紀
483	89	59・60	3	B70	SE01	井戸壁体	宝篋印塔	凝灰質砂岩	13.2	14.1	12.4	(4.4)	16世紀
484	89	59・60	3	B70	SE01	井戸壁体	宝篋印塔	凝灰質砂岩	13.0	13.4	12.9	(3.5)	16世紀
485	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	20.6	18.8	18.9	(9.8)	16世紀
486	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	18.4	19.9	19.9	12.5	16世紀
487	89	59・60	3	B70	SE01	覆土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	18.9	18.4	16.1	10.9	16世紀
488	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	22.9	22.5	22.4	23.5	16世紀
489	89	59・60	2	－	－	表土	宝篋印塔	凝灰質砂岩	21.1	19.2	18.9	(12.2)	16世紀

※括弧内は残存値

単位　全高・最大幅・奥行（㎝）　重量（kg）

第５章　自然科学分析・人骨鑑定の成果

第１節　鉄滓の自然科学分析の成果

日鐵テクノリサーチ株式会社

１　はじめに

北垣遺跡は、太田川による沖積平野を南に臨む丘陵先端の河岸段丘上に位置し、その周辺には文殊堂古墳群・宇藤横穴墓群・天王ケ谷横穴墓群等の遺跡がある。また、本遺跡から約500m離れたところには、近世の掘立柱建物遺構から鉄滓が出土した中屋敷遺跡が存在する。本遺跡からは、縄文・古墳時代の竪穴建物、奈良・平安時代の竪穴建物、掘立柱建物、中世～近世の掘立柱建物、溝状遺構や墓などが検出されている。本分析調査は北垣遺跡から出土した鉄滓５点の自然科学的調査を行ったものである。

２　調査試料

調査試料の一覧を第20表に示した。鉄滓５点は30～90mmの大きさを有する小型鉄滓である。

第20表　調査試料と調査項目

試料	遺物番号	台帳番号	調査区	遺構名	重量（g）	大きさ（mm）	外観	マクロ組織	ミクロ組織	硬度測定	EPMA	化学成分
1	736	52	3区	攪乱	225	86×77×25	○	○	○	○	○	○
2	735	52	3区	攪乱	343	87×76×36	○	○	○	○	○	○
3	737	52	3区	攪乱	93.6	66×60×23	○	○	○	○	○	○
4	741	58	1区	攪乱	50.3	56×32×30	○	○	○	○	○	○
5	739	3	1区	表土	71.9	48×40×30	○	○	○	○	○	○

※遺物観察表とは大きさ・重量が若干異なる。

３　調査項目および試料調製法

（１）外観観察

肉眼ならびに実体顕微鏡により、遺物の形状・大きさ・表面状況を観察・記録した。

使用装置　　デジタルカメラ　　パワーショットG10型（キャノン製）

実体顕微鏡　　VHX-500型（キーエンス製）

（２）断面マクロ・ミクロ組織観察

代表的な箇所をダイヤモンドカッターにて組織観察用と成分分析用の２片に切断し、組織観察用は洗浄・乾燥後、真空下にて樹脂埋め込みして組織を固定した。その後、鏡面まで研磨して組織を現出し、光学顕微鏡にて観察・記録した。

使用装置　　金属顕微鏡　　BX51M型（オリンパス光学工業製）

（３）硬度測定　　ビッカース硬度計　　AMT-７FS型（マツザワ製）

（４）EPMA定性分析（鉱物相の分析）

上記組織観察用に使用した埋め込み研磨試料を用いて、EPMA（X線マイクロアナライザー）により鉱物相の構成成分の分析を行なった。

使用装置　　X線マイクロアナライザー（EPMA）　　JXA8100型（日本電子製）

（５）成分分析

ダイヤモンドカッターで切り取った試料片は洗浄･乾燥後、乳鉢にて粉砕（60メッシュ以下）し、成分分析用試料とした。分析元素および方法は以下の通りである。

T・Fe、SiO_2、Al_2O_3、CaO、MgO、MnO …… JIS　M8205（蛍光X線；ガラスビード法）
TiO_2、P_2O_5、Cr_2O_3、K_2O、Total …… JIS　M8205（蛍光X線；ガラスビード法）
M・Fe …… JIS　M8213
FeO …… JIS　M8213（酸可溶性鉄定量方法）
Fe_2O_3 …… 計算
Cu、V …… JIS　K0116（ICP発光分光分析法）
Na_2O …… JIS　K0121（原子吸光法）
Total・C …… JIS　G1211

4　調査結果と考察

各遺物の外観と断面マクロ・ミクロ組織を写真14～18に、第21表に各鉱物相の成分と硬さ測定結果および第155～159図に検出元素のX線スペクトル、第22表に平均成分分析結果を示した。以下に、各遺物の特徴と組成を記す。

（１）試料番号No.１鉄滓（第155図，写真14）

大きさは86×77×25mm、重さ225gを測る。表面は滑らかで緻密、茶褐色をした平板で椀型状をした塊である。表面の一部は赤褐色の領域がみられ、酸化鉄（鉄錆）の濃化していることが伺える。断面マクロ組織をみると、空孔内壁周辺には薄く酸化鉄皮膜や湯玉が存在する。近傍に存在する中屋敷遺跡鉄滓と類似する。

構成鉱物はウスタイト（理論化学組成；FeO）と一部に錆化した金属鉄（M・Fe)、ファヤライト（理論化学組成；２FeO・SiO_2）および若干のガラス質珪酸塩からなるがチタン化合物は存在しない。ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO_2）は0.48％と僅かであり、また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は11.5％と高く、炉材成分のAl_2O_3/CaO比に比べはるかに高いカルシウム（CaO）濃度であり、

第21表　鉱物相の成分分析結果（wt％；EPMA）と硬さ

試料No.（鉱物相）	FeO	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	TiO_2	MnO	P_2O_5	Na_2O	K_2O	硬さ Hv
1（W）	98.6	0.31	0.58	－	－	0.48	－	－	－	－	405
（F）	63.1	33.3	－	1.4	2.21	－	－	－	－	－	493
（S）	22.2	46	16.3	11.5	－	－	－	1.04	0.5	1.75	582
2（W）	97.9	0.76	0.54	0.13	－	0.72	－	－	－	－	463
（F）	62.2	33.5	0.19	0.8	3.28	－	－	－	－	－	650
（S）	20.7	46.8	19	9.33	－	0.38	－	0.71	0.4	2.48	645
3（W）	97.6	0.48	1	－	0.27	0.67	－	－	－	－	432
（F）	61.8	32.9	－	3.45	1.83	－	－	－	－	－	606
（S）	1.75	62.5	26.4	0.16	－	－	－	－	0.19	9	493
4（W）	96.2	0.38	1.2	－	0.49	1.71	－	－	－	－	512
（F＋S）	67.3	17	9.5	0.76	1.09	0.76	－	2.16	－	－	
（介在物）											
5（W）	98.3	－	0.93	－	0.4	0.41	－	－	－	－	442
（F）	58.6	32.6	0.23	4.73	3.39	－	0.51	－	－	－	609
（S）	21.5	43	17.5	12.7	0.29	－	－	2.06	－	2.09	376

第22表－1　鉄滓の平均化学組成（wt％）①

試料No.	T・Fe	M・Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	MnO	TiO_2	V
1	59.63	0.44	33.43	47.47	10.73	2.05	0.53	0.39	0.04	0.14	0.004
2	47.25	0.46	54.83	5.96	26.21	4.96	2.44	1.08	0.09	0.42	0.017
3	54.29	0.49	51.75	19.41	16.61	4.15	1.84	0.82	0.09	0.3	0.019
4	51.04	0.33	6.3	65.5	15.18	2.29	0.16	0.16	0.01	0.14	0.002
5	58.54	0.46	64.45	11.41	13.04	3.48	2.6	1.05	0.12	0.17	0.019

第22表－2　鉄滓の平均化学組成（wt％）②

試料No.	Cu	P_2O_5	Cr_2O_3	Na_2O	K_2O	T.C	T.S	TiO_2/T・Fe	MnO/T・Fe	造滓成分
1	0.005	0.195	0.005	0.119	0.559	0.25	0.067	0.002	＜0.001	14.38
2	0.005	0.176	0.005	0.65	1.894	0.13	0.036	0.009	0.002	37.23
3	0.006	0.3	0.011	0.273	1.896	0.26	0.044	0.006	0.002	25.29
4	0.005	0.197	0.005	0.242	0.471	0.46	0.179	0.003	＜0.001	18.5
5	0.002	0.328	0.011	0.174	1.18	0.15	0.046	0.003	0.002	21.52

注）造滓成分＝SiO_2＋Al_2O_3＋CaO+MgO＋Na_2O＋K_2O

鍛冶操作段階でカルシウム分（CaO）を使ったことが伺える。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト（FeO）が405Hv、ファヤライト（2FeO・SiO_2）が493Hv、ガラス質珪酸塩が582Hvとやや低い値である。

平均化学組成のうち、全鉄（T・Fe）は59.6％と高く、チタン分（TiO_2）は0.14％と低い。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2Oの合計）は14.4％と少ない。

外観的特徴と構成鉱物から、鉄の溶融・半溶融状態と接触していた領域にて生成した鉄滓と考えられる。

（２）試料番号No.２鉄滓（第156図，写真15）

大きさは87×76×36mm、重さ343gを測る。黒灰色で一部に茶褐色の領域も存在する塊である。表面は光沢があり緻密である。破面にはファヤライト（2FeO・SiO_2）の大結晶と思われる金属光沢をした領域が存在する。断面マクロ組織をみると、空孔が少なく比較的緻密な構造を示す。

構成鉱物は微細な葉片状のウスタイト（FeO）と大きく発達したファヤライト（2FeO・SiO_2）およびガラス質珪酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO_2）は0.72％と少ない。また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は9.33％と高い。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト（FeO）が463Hv、ファヤライト（2FeO・SiO_2）が650Hv、ガラス質珪酸塩が645Hvと何れも高い値である。

平均化学組成のうち、全鉄（T・Fe）は47％と若干低く、チタン分（TiO_2）は0.42％と低い。造滓成分は37％と高い値である。

本鉄滓は、溶融金属鉄の錆化したものなどが見当たらず、微細結晶のウスタイトに対しファヤライト結晶が大きく発達した状態からみて、充分な熱を受けた状態で生成した産物と考えられる。

（３）試料番号No.３鉄滓（第157図，写真16）

大きさは66×60×23mm、重さ93.6gを測る。茶褐色で大小の空孔が存在する板状の小塊である。断面のマクロ組織は、大きな丸い空孔が多く存在し、溶融金属鉄の錆化したものなどは見当たらない。構成鉱物は、比較的丸みを帯びたウスタイト（FeO）と大きな板状結晶を有するファヤライト（2FeO・

SiO_2）および僅かなガラス質珪酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。また、ガラス質珪酸塩中には極微細な結晶が析出している。ウスタイト（FeO）中のチタン分は0.67％と少なく、ガラス質中のカルシウム分（CaO）は0.16％と低く、炉材成分が多く溶け込んだものである。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト（FeO）が432Hv、ファヤライト（$2FeO・SiO_2$）が606Hv、ガラス質珪酸塩が493Hvとやや低い値を示す。

平均化学組成のうち、全鉄（T・Fe）は54％と高く、チタン分（TiO_2）は0.3％と少ない。造滓成分は25％である。

外観的特徴ならびに構成鉱物および結晶の大きさからみて、No.2 鉄滓とほぼ同様の操作過程をへたものと考えられる。

（４）試料番号No.4 鉄滓（第158図，写真18）

大きさは56×32×30mm、重さ50.3gを測る。黄褐色で大きな亀裂があり、一部には鉄が加熱を受け酸化したと思われる青紫色を示す箇所が存在する。殆どは焼土で覆われている。断面マクロ組織をみると、左側半分は焼土であり、右側は（写真中に丸印をつけた領域）恐らく鉄素材（丸棒？）と思われるものが錆化した領域であり、その周辺には若干の鉄滓成分が存在する。

断面ミクロ組織をみると、鉄素材と思われる黒錆層中には不明瞭であるが網目状に金属鉄が存在し（ミクロ組織写真中の矢印）、この鉄素材の元の材質は鋼材であったことが伺える。また、黒錆層中には非金属介在物と思われる物質が存在する（ミクロ組織写真中の丸印）。この非金属介在物の構成鉱物は、微細なウスタイト（FeO）、ガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。しかし、ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO_2）は1.71％と若干高い値を示す。したがって、この鉄素材の始発原料は砂鉄が使われたことが伺える。また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は0.76％と少ない。

一方、鉱物相（錆層）の硬さは、512Hvと低い値である。

平均化学組成（焼土分を巻き込んだもの）のうち全鉄（T・Fe）は51％強、酸化第二鉄（Fe_2O_3）が65％もあり、金属鉄が錆化したものが多いことが伺える。また、チタン分（TiO_2）が0.14％および造滓成分は18％と少ない。

外観的特徴および焼土と錆化した鉄素材と思われるものが存在することから、本鉄滓は赤熱した鉄素材が何らかの理由で周辺の土砂を巻き込み固化したものと考えられるが、小鍛冶操作で生成したものか（鉄器製作中のもの）、あるいは本鉄素材（廃材）を再利用した時の生成物なのかは不明である。

（５）No.5 鉄滓（第159図，写真17）

大きさは48×40×30mm、重さ71.9gを測る。茶色で一部が灰色光沢を示し、大小の空孔を有する小塊である。断面マクロ組織をみると、No.3 鉄滓と同様に、大小の丸い空孔が多く存在し、鉄錆はあまり存在しない。

構成鉱物は、丸みを帯びたウスタイト（FeO）、柱状のファヤライト（$2FeO・SiO_2$）、およびガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO_2）は0.41％と低く、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は12.7％と高い値である。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト（FeO）が442Hv、ファヤライト（$2FeO・SiO_2$）が609Hv、ガラス質珪酸塩が376Hvと若干低い値である。

平均化学組成のうち全鉄（T・Fe）は58％と高く、チタン分（TiO_2）は0.17％と低い。また、造滓成分は21％程度である。

外観的特徴および構成鉱物から、鉄浴より若干離れた箇所で生成したものと考えられる。

5　まとめ

北垣遺跡から出土した鉄滓５点について、自然科学的調査を行った結果、４点（試料No.１～３，５）は鉄滓であったが、１点（試料No.４）は錆化した鉄素材を伴うものであった。また、鉄滓中にはチタン分（TiO_2）が少なく、殆どが１％以下のものであった。４点の鉄滓は、形態が若干異なるものの、いずれも鉄浴近傍にて生成したものと考えられた。しかし、No.１鉄滓を除いた３点は、溶融した金属鉄の錆化したものが少なく、近傍に位置する中屋敷遺跡（文献８）の鉄滓とは若干異なっていた。また、錆化した鉄器を伴う１点（試料No.４）は、黒錆中に残存する非金属介在物の組成からみて、元は砂鉄を始発原料とした鉄素材であると考えられた。この鉄滓は、鉄器製作中の生成物か、あるいはこの鉄素材の再利用のための操作段階で生成したものなのかは不明であった。

一方、第23表にはこの時代前後の他所から出土した鉄滓組成を示した。１例（梅ノ木沢遺跡）を除きほぼ同様の組成を有する。これら他所の鉄滓は、銑鉄塊あるいは鉄の廃材を素材として鍛冶操作を行ったときの精錬滓と判断されている。本鉄滓は、大きさが小さい（100g以下）こと、溶融金属鉄が錆化したものがNo.１・４を除き見当たらないこと等から小鍛冶操作が想定される。しかし、本遺構からは鍛造剥片や湯玉などが検出していないことから、小規模ながら精錬操作段階で生成した産物とみるのが妥当ではないかと考えられる。

第23表　同時代の出土鉄滓の化学組成例（wt％）

遺跡名	所在地	T･Fe	M･Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	TiO_2	造滓成分	文献
茅ヶ崎城	神奈川	53.57	0.67	50.75	19.23	15.93	4.14	2.64	1.04	0.44	23.71	1
笠井若林	静岡	50.2	0.46	53	12.9	21.7	5.12	1.18	0.88	0.23	28.88	2
小川城	静岡	57.9	－	51.65	24.58	9.19	1.49	1.43	1.41	0.11	13.52	3
養種園	宮城	58.15	0.89	64.63	10.04	17.52	2.25	1.16	0.4	0.1	21.33	4
大京町東	東京	58.1	0.36	47.1	30.21	11.5	2.72	1.11	0.68	0.15	16.01	5
中ノ宮	神奈川	54.3	0.44	57.5	13.7	20.8	3.02	0.55	0.77	0.28	26.12	6
梅ノ木沢	岩手	40.5	0.36	33.7	19.9	30.7	4.43	1.91	0.68	2.99	39.7	7

引用文献

1　横浜市ふるさと歴史財団　2000『茅ヶ崎城Ⅲ』

2　静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』

3　焼津市総務部市史編纂室　2003『小川城』

4　仙台市教育委員会　1997『養種園遺跡発掘調査報告書』

5　永生会・株式会社第三開発　2004『大京町東遺跡』

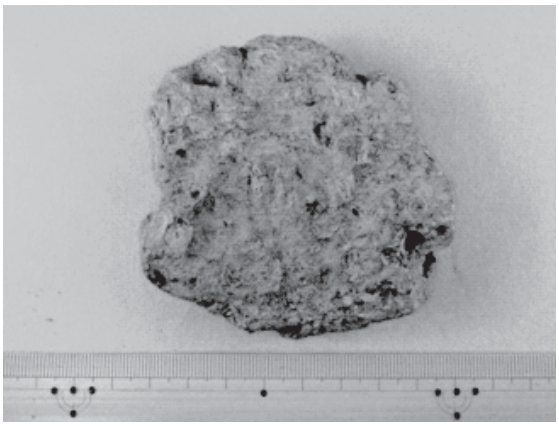
6　横浜市ふるさと歴史財団　1999『中ノ宮遺跡発掘調査報告書』

7　岩手県埋蔵文化財センター　2004『梅ノ木沢遺跡発掘調査報告書』

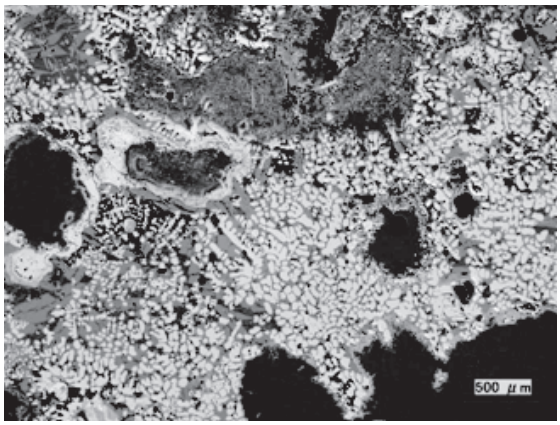
8　静岡県埋蔵文化財調査研究所　2011『弥勒平遺跡・中屋敷遺跡』

（文責）神奈川材料センター所長　山本　広一

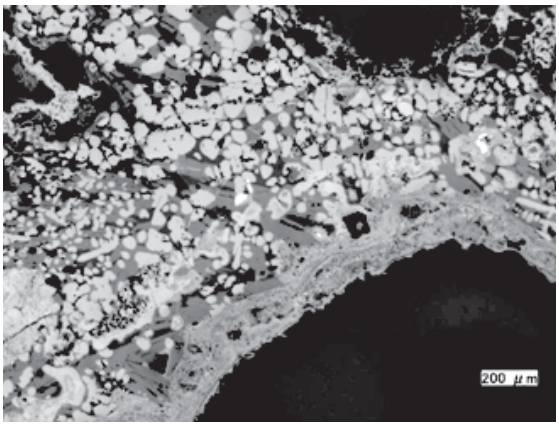
調査・解析担当　伊藤　薫・山下　真理子



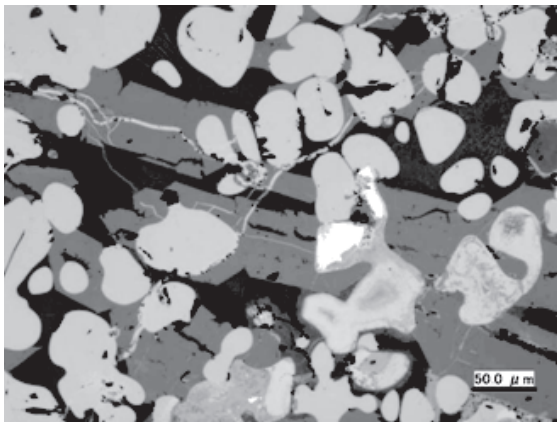
外観



断面マクロ組織

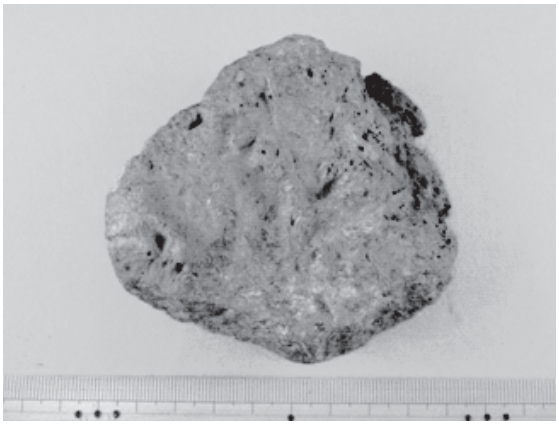


断面ミクロ組織

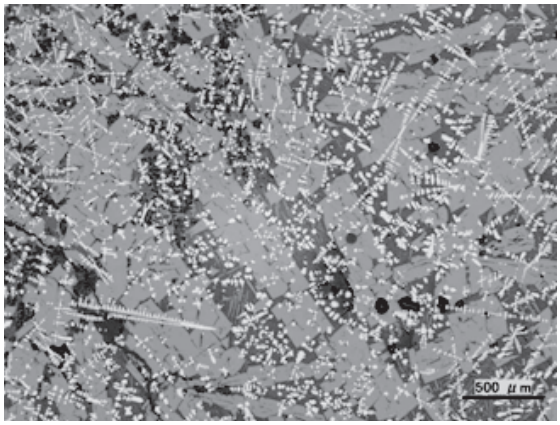


断面ミクロ組織

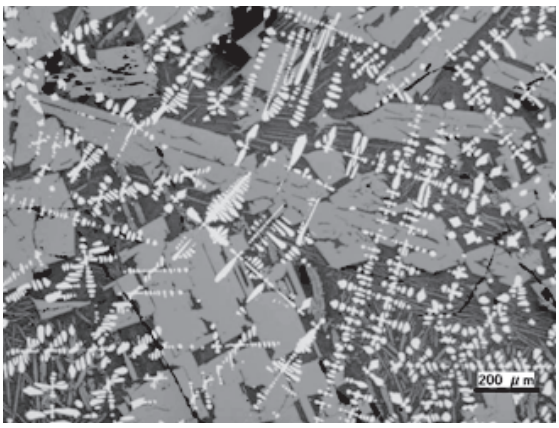
写真14　試料No. 1（遺物番号736）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



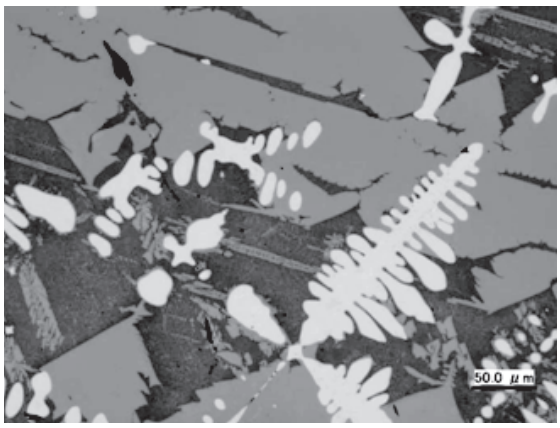
外観



断面マクロ組織

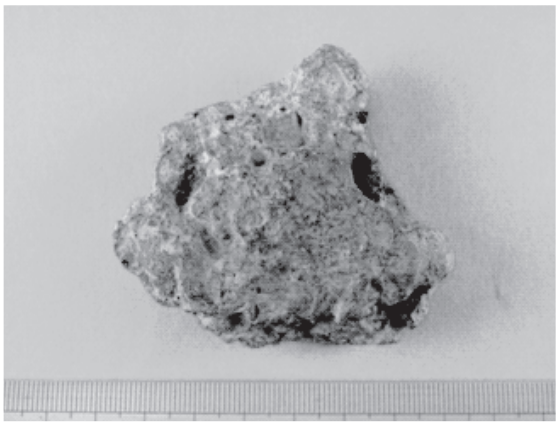


断面ミクロ組織

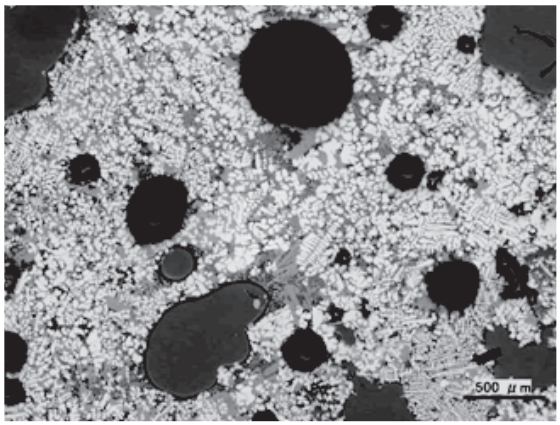


断面ミクロ組織

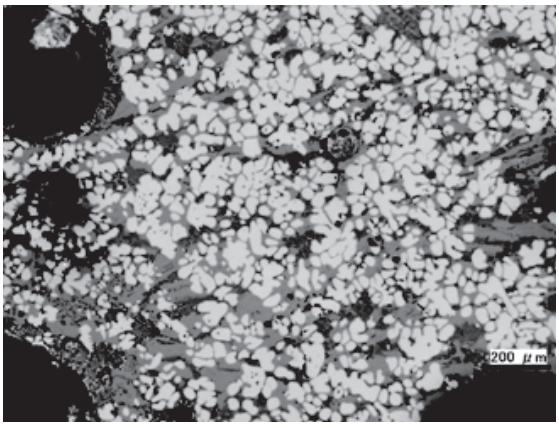
写真15　試料No. 2（遺物番号735）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



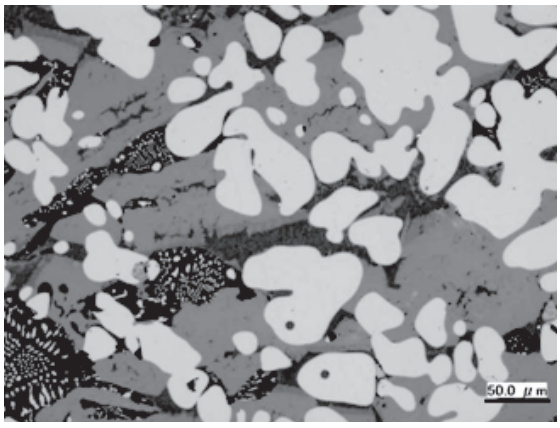
外観



断面マクロ組織

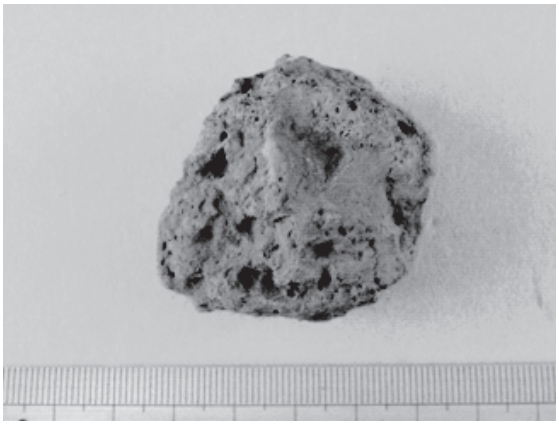


断面ミクロ組織

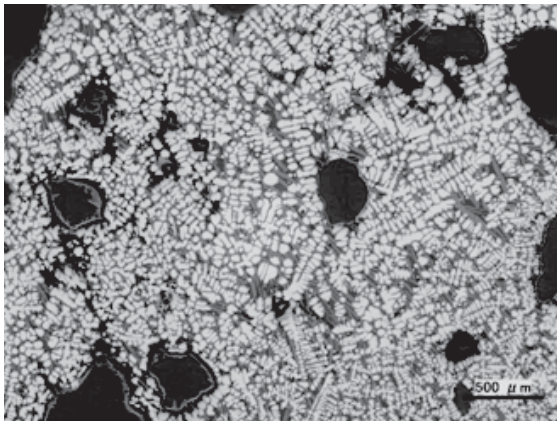


断面ミクロ組織

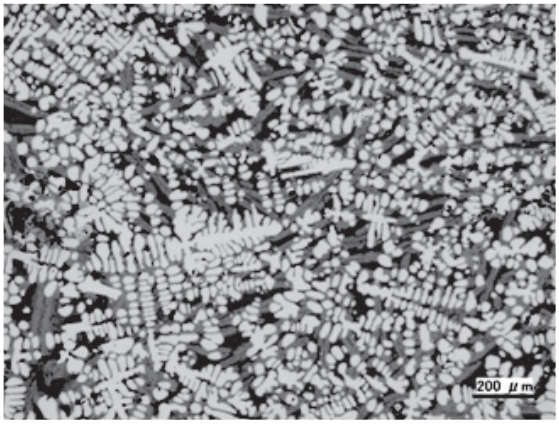
写真16　試料No. 3（遺物番号737）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



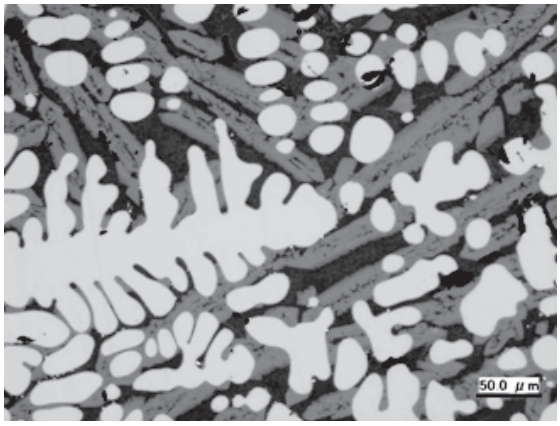
外観



断面マクロ組織

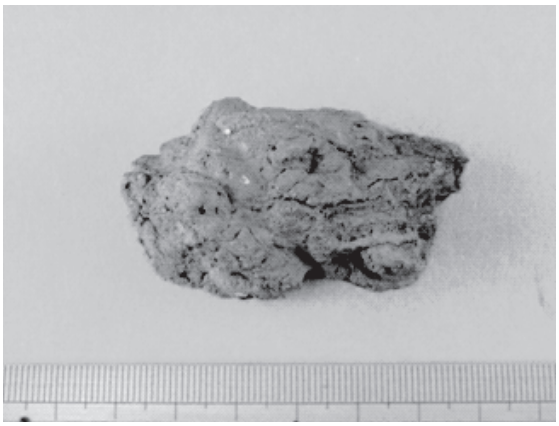


断面ミクロ組織

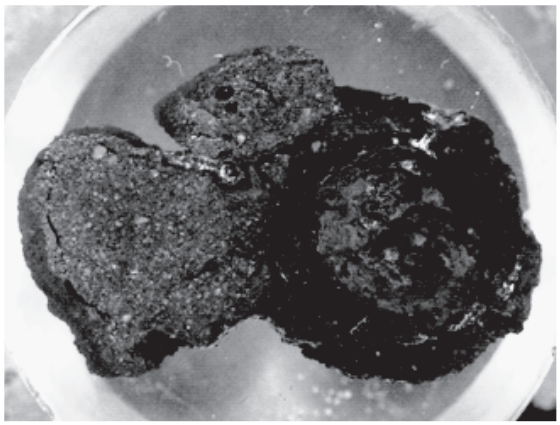


断面ミクロ組織

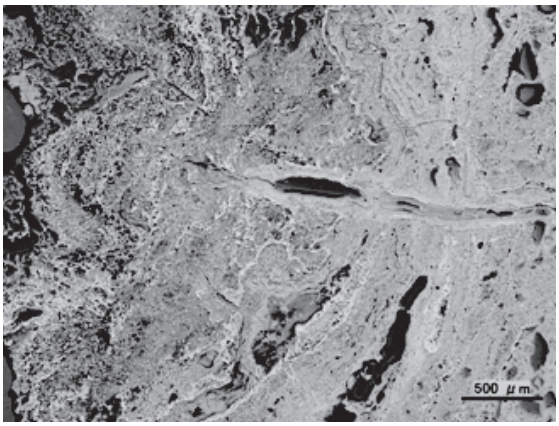
写真17　試料No. 5（遺物番号739）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



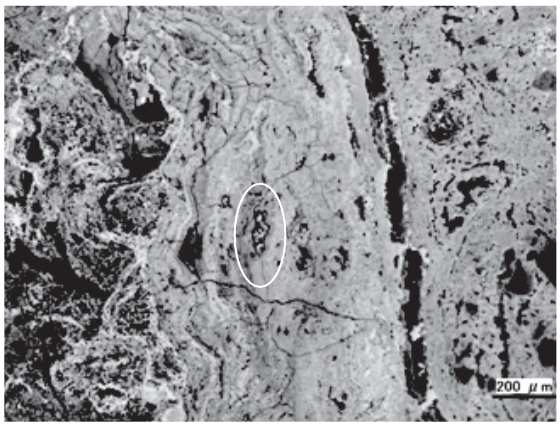
外観



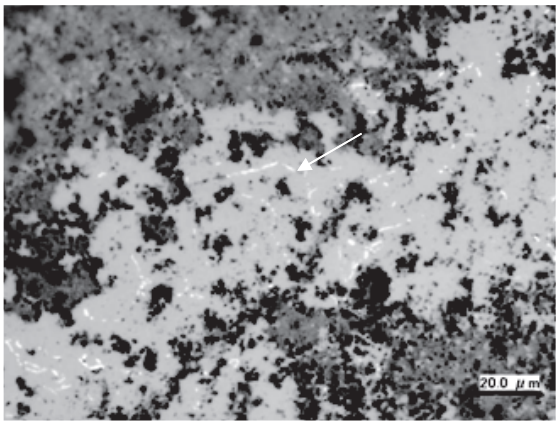
断面マクロ組織（丸印：錆化した鉄器）



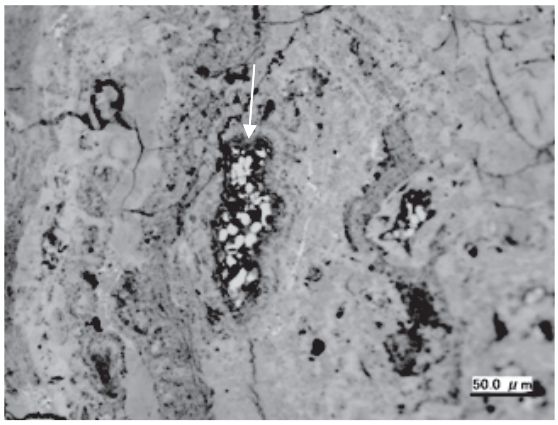
網目状金属鉄



錆層中に存在する非金属介在物

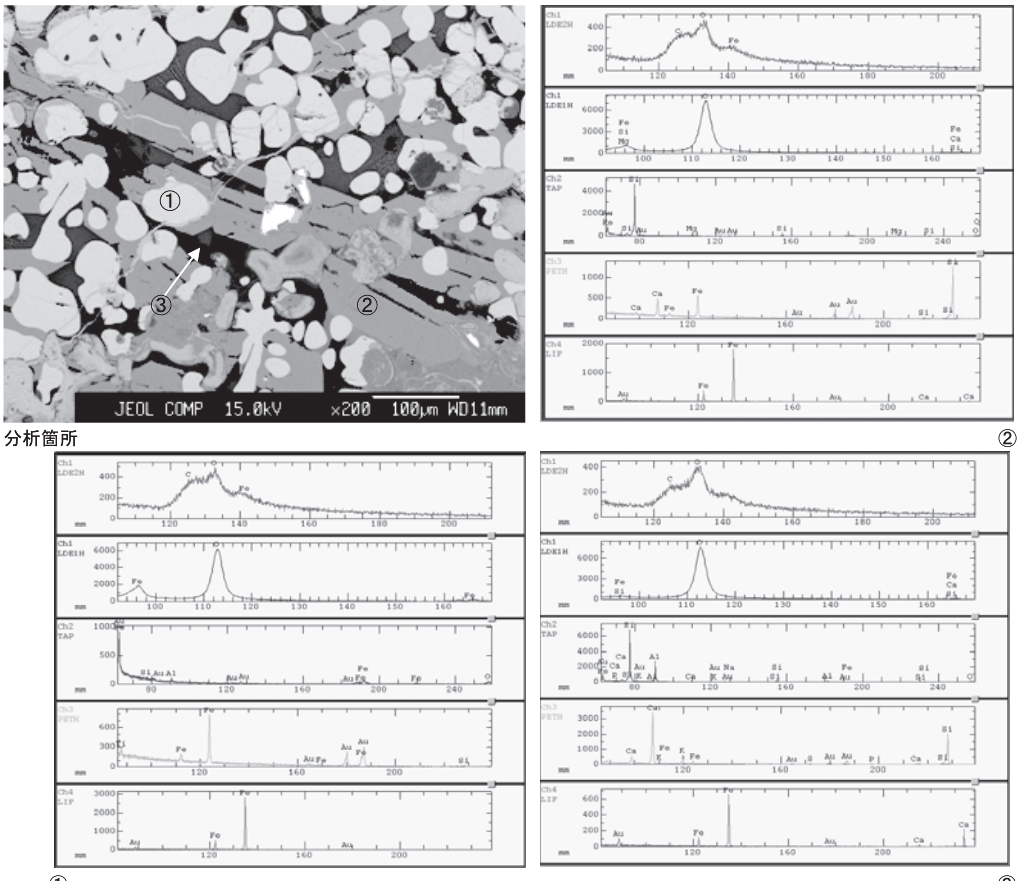


網目状金属鉄（矢印）

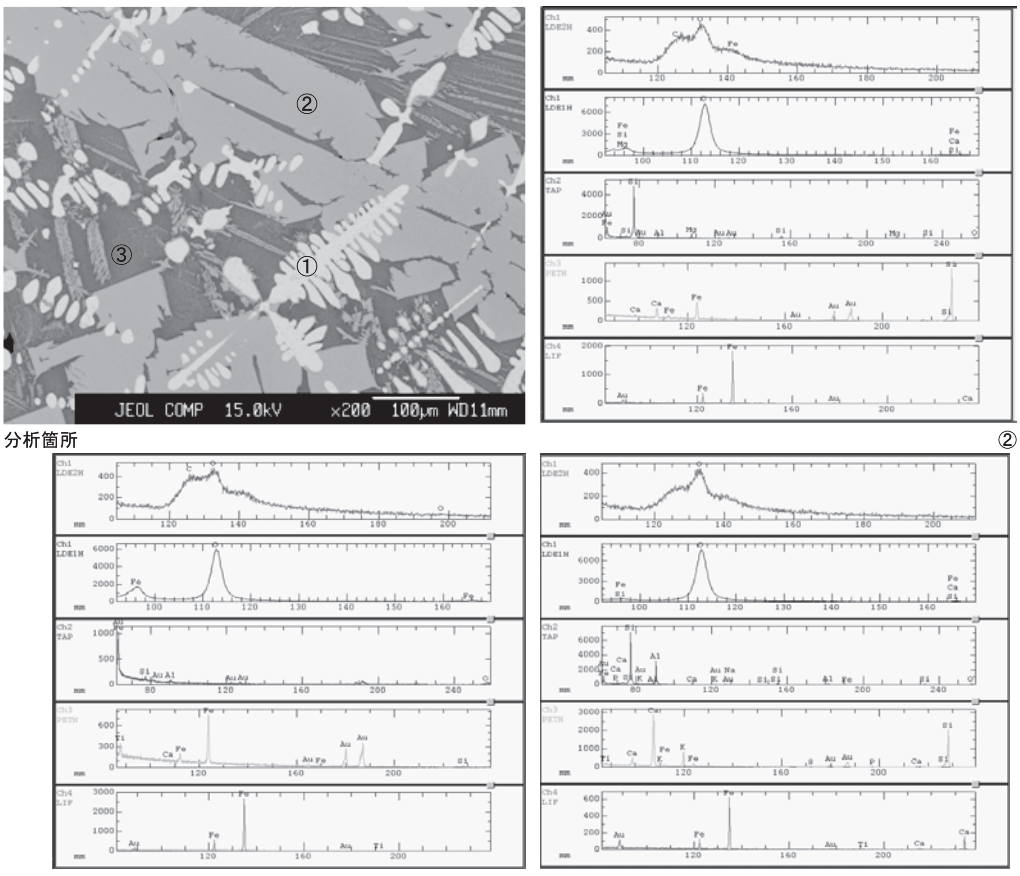


錆層中に存在する非金属介在物（矢印）

写真18　試料No. 4（遺物番号741）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



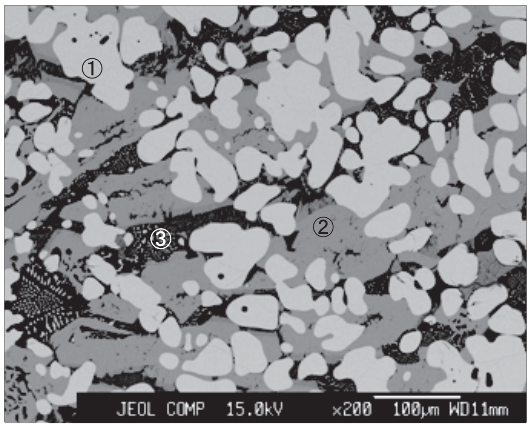
第155図　試料No. 1（遺物番号736）鉄滓　鉱物相のEPMA分析結果



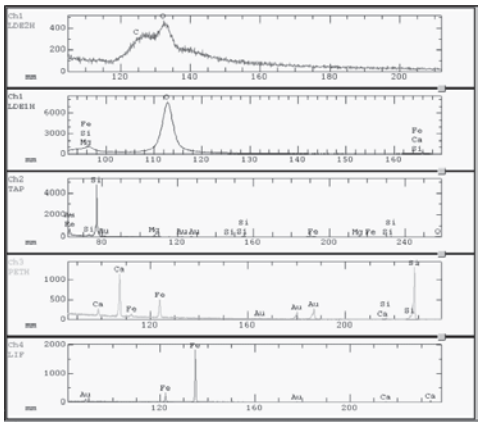
第156図　試料No. 2（遺物番号735）鉄滓　鉱物相のEPMA分析結果

試料 No.1
① ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Al・Si・Ti・Fe・Au
② ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Si・Ca・Fe・Au
③ ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Na・Al・Si・P・S・K・Ca・Fe・Au

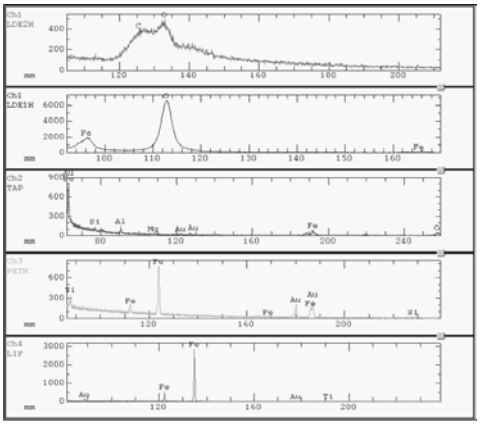
試料 No.2
① ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Al・Si・Ca・Ti・Fe・Au
② ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・Ca・Fe・Au
③ ※ID-Doctor※　Aランク：O・Na・Al・Si・P・S・K・Ca・Ti・Fe・Au



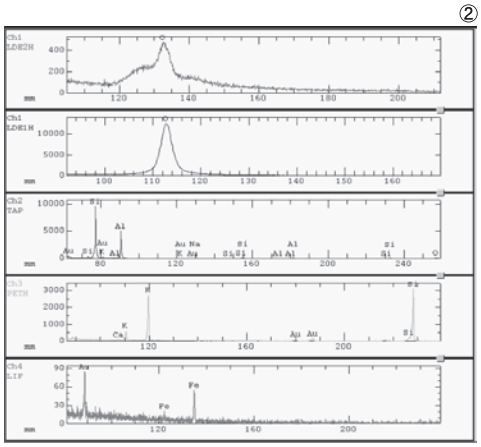
分析箇所



②

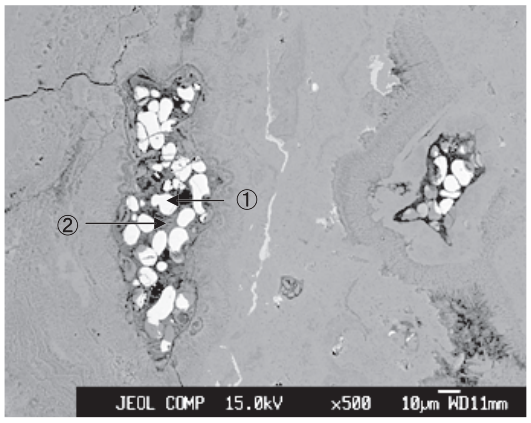


①



③

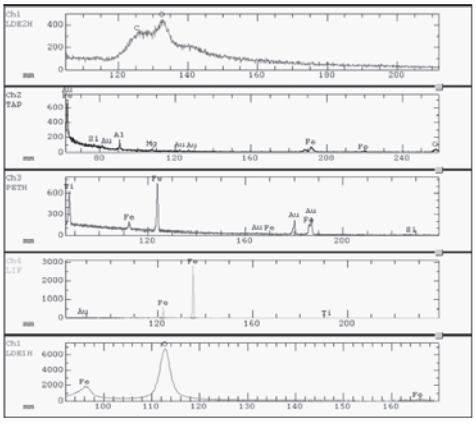
第157図　試料No. 3（遺物番号737）鉄滓　鉱物相のEPMA分析結果



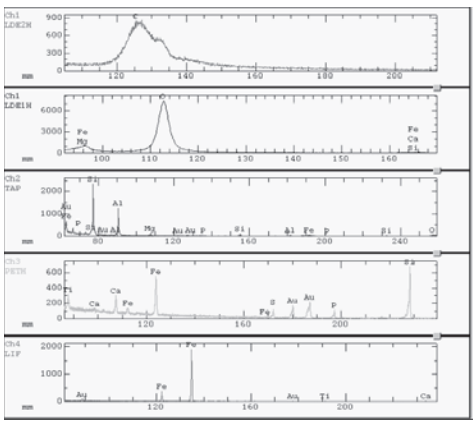
分析箇所

試料 No.3
① ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・Ti・Fe・Au
② ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Si・Fe・Au
③ ※ID-Doctor※　Aランク：O・Na・Al・Si・K・Ca・Fe・Au

試料 No.4
① ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・Ti・Fe・Au
② ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・P・S・Ca・Ti・Fe・Au

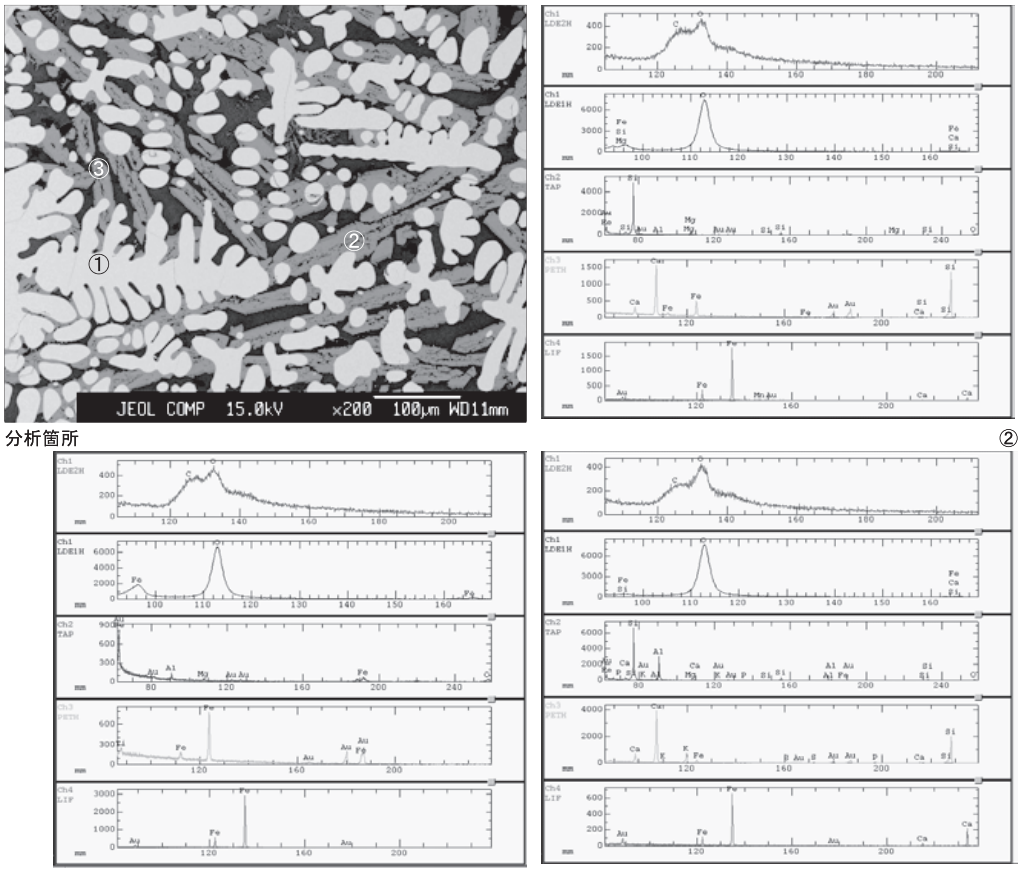


①



②

第158図　試料No. 4（遺物番号741）鉄滓　鉱物相のEPMA分析結果



試料 No.5
① ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Ti・Fe・Au
② ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・Ca・Mn・Fe・Au
③ ※ID-Doctor※　Aランク：C・O・Mg・Al・Si・P・S・K・Ca・Fe・Au

第159図　試料No. 5（遺物番号739）鉄滓　鉱物相のEPMA分析結果

第２節　北垣遺跡出土人骨について

片山一道（京都大学名誉教授）

１　２区北側出土人骨について

２区北側の中世墓付近から出土した人骨（人骨番号No.４）である。

多量の人骨破片が存在する。頭蓋骨と各種長骨の破片が多数存在する。このほか椎骨の破片もある。これらの人骨は火葬骨と火葬を受けていない人骨があり、少なくとも男性骨１体分がある。存在する頭蓋骨がこの男性骨に伴うものであるとすれば､頭蓋骨の癒合の程度から男性は成人である可能性が高い。

歯の破片は３片存在する。そのうち大臼歯の破片が２片あり、この歯は焼けていない。また、緑青を吸着した色素の沈着がみられ、銅銭等の銅製品が近くにあった可能性が高い。歯の咬耗は弱い。

２　表面採取人骨について①

２区で表面採取した人骨（人骨番号No.３－１）である。

大量の骨が存在する。人間の骨の可能性が高いが、中に獣骨が混じる。大部分が火葬骨であるが、焼けていない骨も多少存在する。細片化しすぎており、これ以上の情報を引き出すことは難しい。

３　表面採取人骨について②

２区で表面採取した人骨（人骨番号No.３－２）である。

多量の骨と歯の破片があり、多くは火葬骨であるが、細片のため人獣の判別は難しい。動物の歯については牛のものらしい。この歯は焼けていない。

４　SK22出土人骨について

２区SK22（人骨番号No.１）で出土した。

典型的な火葬骨であり、遺構内から焼土が出土していることと合致する。破片が多数存在し、多くは長骨である。火葬骨のため年齢や性別については判別できない。

※人骨番号No.２については、蔵骨器（遺物番号699）内部の土砂であり、洗浄の結果人骨は含まれていないことが判明したため、鑑定は行っていない。

※本報告については、片山一道氏が鑑定口述したものを、資料整理担当の大谷が記録した。

第６章　北垣遺跡の評価

第１節　北垣遺跡の変遷

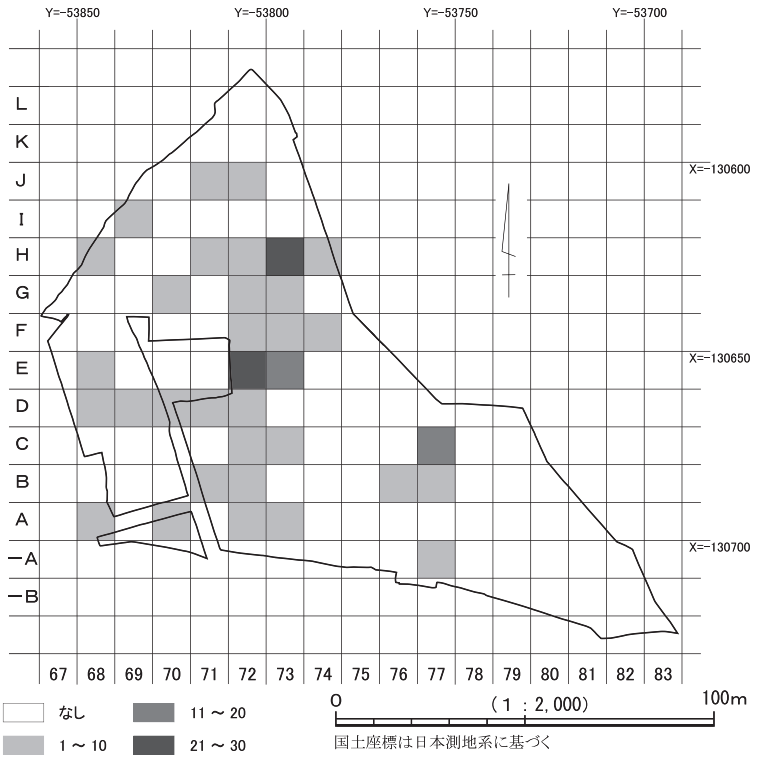
北垣遺跡では縄文時代～近世に亘る遺構と遺物が発見されていることから、長期に亘って遺跡周辺で人々の活動があったことが窺える。ただし、遺構や遺物が確認できない空白期間を挟むため、遺跡周辺での人々の活動は断続的なものであったと考えられる。また、集落として機能していた時期や、墓域が遺跡の中心であった時期といったように、各時代における遺跡の性格も異なる。そのため、本節では遺跡の全体像を捉えるためにも、遺跡の変遷について整理しておきたい。

縄文時代　まず、縄文時代の遺構については、竪穴建物が１軒（SH14）検出された。この竪穴建物は、検出された柱穴が壁近くにあることから、これが側柱であれば、遠江の弥生時代の竪穴建物には側柱が見られないことから縄文時代の遺構と考えられる。また、第160図のように、SH14が検出された位置と同じ調査区の中央部分に集中することから、縄文時代においては居住域が存在した可能性がある。ただし、SH14は縄文時代の遺構ではない可能性も考えられ、他に縄文時代の遺構が検出されていないことから、集落が存在していたかどうかは判然としない。

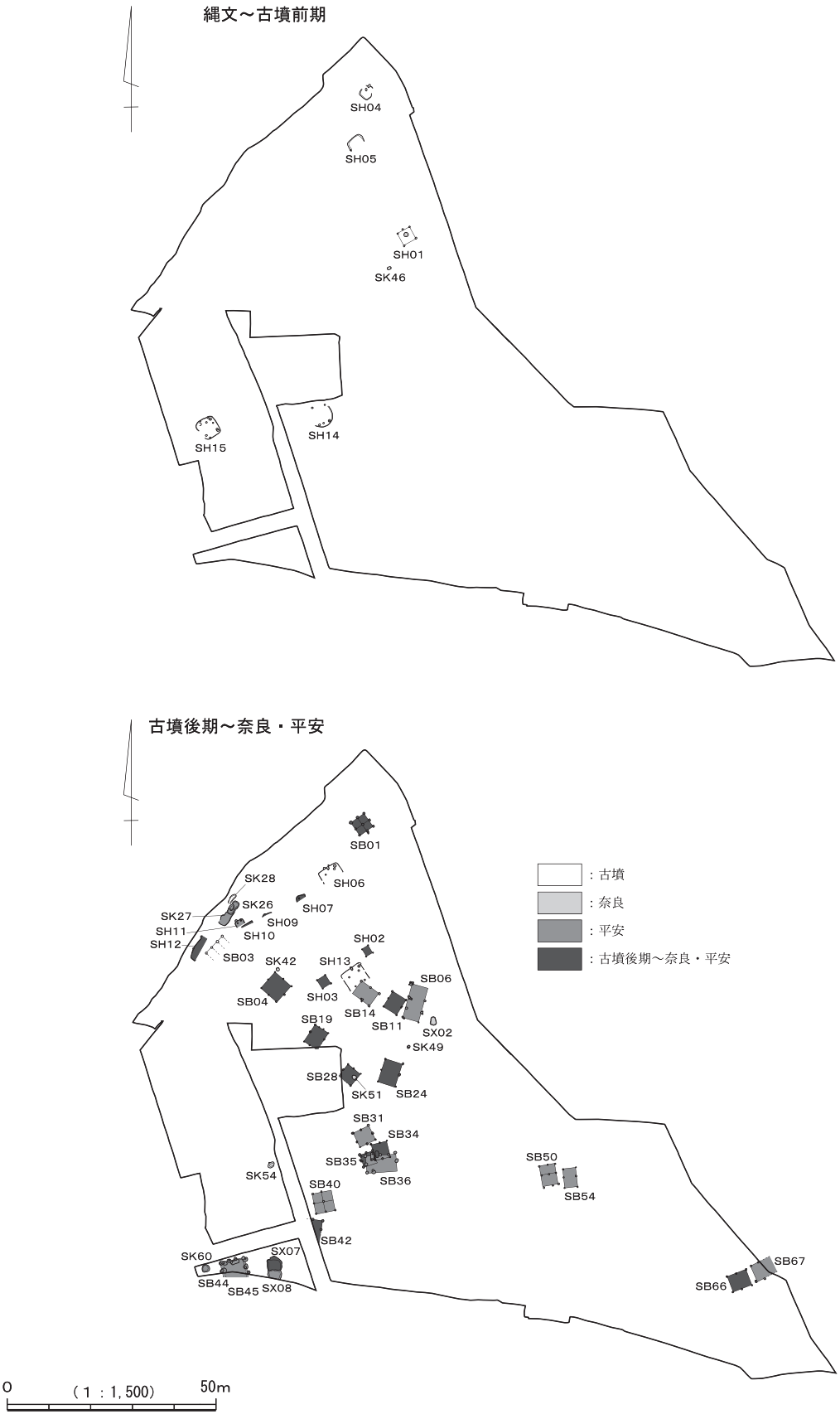
遺物に関しては土器と石器が出土した。土器は曽利式、加曽利Ｅ２～３式、咲畑式（中富式）などの縄文時代中期後半の土器や、後・晩期と考えられる土器も一部出土している。このことから、北垣遺跡では中期後半から後・晩期まで人々の活動があったことが窺える。

広川達麻氏は、縄文時代中期から後・晩期における遺跡の分布について述べており、中期後半になると、それまでの太田川本流付近での分布から、各支流へと分布が広がると述べている（広川1998）。北垣遺跡で出土した遺物は、中期後半のものが最も古く、広川氏が指摘するような森町域で遺跡の広がりに変化の見える中期後半と同じ時期に遺跡が形成されたと考えられる。

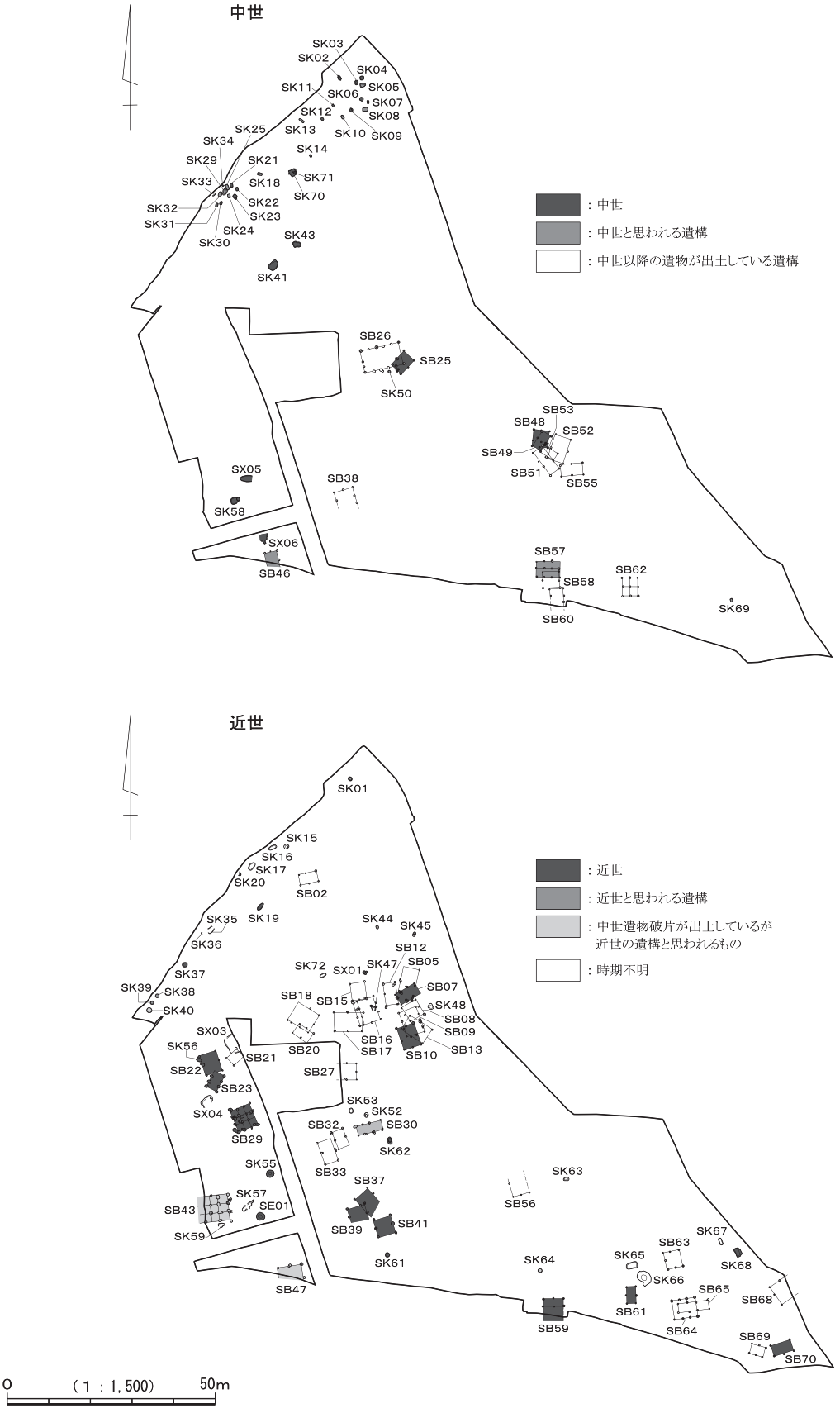
森町域では遺構が検出された遺跡は、天宮遺跡、鍛冶島遺跡、坂田北遺跡など一部のみであり、それ以外の遺跡は、遺物が１点もしくは数点出土する遺跡が多い。これらの遺跡は当時の人々が狩猟採集生活による移動の過程で形成された遺跡と考えられる。北垣遺跡も他の遺跡と同様に、当時の人々の活動範囲の一端を示す遺跡と考えられる。



第160図　縄文土器グリッド別分布図



第161図　北垣遺跡の時期別遺構変遷図①



第162図　北垣遺跡の時期別遺構変遷図②

弥生時代後期～古墳時代前期　縄文時代後晩期以降、北垣遺跡では弥生時代前期・中期の遺物が出土しておらず、遺構も検出されていないため、遺跡がこの時期に一旦途絶えるようである。再び北垣遺跡で遺跡が形成されるのは、弥生時代後期以降と考えられる。

遺構に関しては、弥生時代と考えられるのはSH01・04・05・15である。この中でもSH15は、菊川式土器が出土したことから弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。それ以外の竪穴建物は、時期を特定できるような遺物は出土していないが、建物跡の平面形や柱穴の位置がSH15と類似していることから、弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる。このように弥生時代の遺構と考えられる竪穴建物は４軒であるが、その中でも３つの遺構は時期が不確定であるため、SH15と同時併存していたかどうかは判断できない。遺物に関しては、SH15で出土した土器以外にも、遺構外で菊川式古段階から新段階の土器が出土したため、弥生時代後期に人が居住していたと判断できるが、集落がどのように展開していたかは判然としない。

一方、周辺の遺跡では、北垣遺跡の北側の丘陵上にある文殊堂遺跡などで、弥生時代中期後半に遺跡の形成が開始される。遺跡の開始時期は異なるものの、丘陵上にある墓域（文殊堂遺跡やフケ遺跡など）と、その南側に位置し、墓域よりやや低い丘陵上にある居住域（北垣遺跡）という位置関係になっており、墓域と居住域という関係にあった可能性が考えられる。

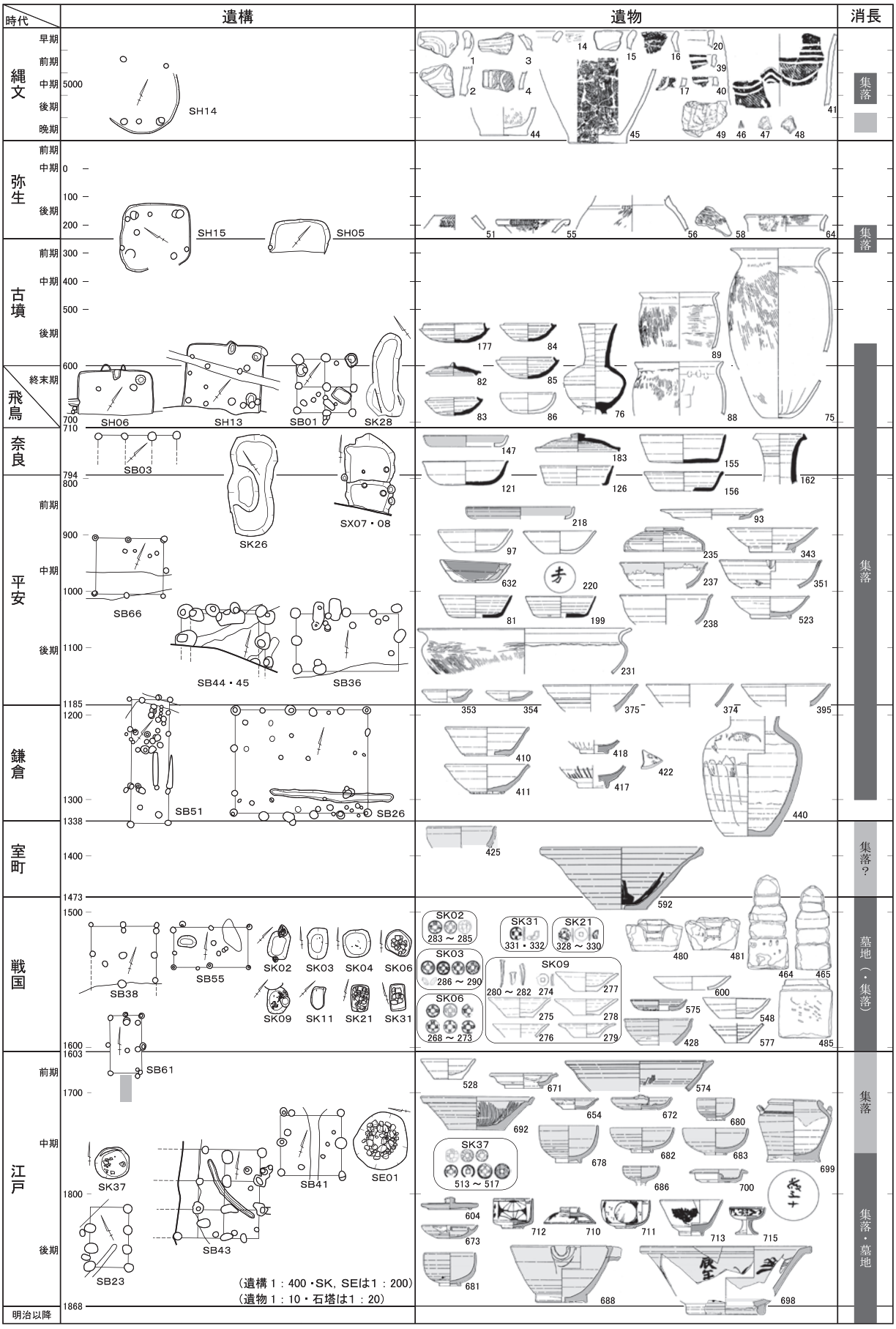
後述するが、北垣遺跡のSH15が存在していた弥生時代後期中葉は、文殊堂遺跡において大型の方形周溝墓（７号周溝墓）が造られる時期でもあるため、関係性が指摘できる。

古墳時代後期～奈良・平安時代　古墳時代以降に関しては、円田の丘陵上において古墳時代中期に古墳が構築されるのに対して、北垣遺跡ではそれらの墓域と同時期の遺構が検出されていない。このことから北垣遺跡は、古墳時代前期から中期にかけて再び空白期間を挟むと考えられる。

北垣遺跡で再び遺跡が形成されるのは、古墳時代後期後半以降と考えられる。古墳時代以降の遺構と遺物に関しては、遺構は、掘立柱建物、竪穴建物、土坑が検出され、出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。竪穴建物や掘立柱建物が多く検出されたことから、北垣遺跡は古墳時代後期以降も再び集落として展開すると考えられる。

この中でも、古墳時代終末期に位置付けられるのは、竪穴建物（SH06・13）、掘立柱建物（SB01）の３軒である。次に、奈良時代の遺構は、竪穴建物（SH11）、奈良時代前葉の土坑（SK51・54）、奈良時代後葉の不明遺構（SX02・07）である。最後に、平安時代の遺構は竪穴建物（SH07）、掘立柱建物（SB06・14・31・36・40・44・45・50・54・67）と、土坑（SK26・27・49・60）である。また、検出された遺構の中でも、SH02・09・10や、SB01・03・04・11・19・34・35・42・66のように、出土遺物がない遺構や、他の時代の遺物が紛れ込んだと考えられる遺構、もしくは小片のみの出土であるため、詳細な時期を特定できない遺構もあり、これらは古墳時代後期後半から平安時代の一時期と捉えられる。このように、一部明確に時期を捉えられない遺構もあるが、北垣遺跡は、古墳時代から平安時代に至るまで、集落として機能していたと考えられる。

一方、北垣遺跡の周辺では、北垣遺跡の北側において文殊堂古墳群、宇藤蓮台古墳群、宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群が、古墳時代終末期においても墓域として展開していることから、墓域と居住域の関係が指摘できる。平安時代に関しても、文殊堂古墳群では12世紀の土壙墓が検出され、天王ヶ谷横穴墓群では横穴墓を再利用した埋葬施設が検出されている。そのため、北垣遺跡と文殊堂古墳群、宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群は、古墳時代後期から平安時代に至るまで、居住域と墓域という関係にあったと考えられる。



第163図　北垣遺跡の主な遺構と遺物の変遷

中世　続いて中世の段階では、中世前期と中世後期（戦国時代）に位置づけられる遺構と遺物がそれぞれ見つかった。中世前期に関しては、SB25・26・48・49・51で山茶碗が出土したことから、平安時代以後においても、鎌倉時代まで、規模は小さいながらも集落が存続していたことが窺える。そして14世紀以降では遺物の出土が激減し、遺構も検出されなかった。そのため、14世紀において再び集落が廃絶すると考えられる。その後、15世紀以降になると遺物の出土が見られるようになることから、周辺では人の活動があったと考えられ、本調査区以外の場所に集落が展開していた可能性がある。

北垣遺跡に再び人の活動が確認できるのは、中世後期（戦国時代）以降と考えられる。この時期の遺構は、土壙墓と掘立柱建物である。掘立柱建物は調査区の南側にあたる丘陵の平坦面で少数検出され、土壙墓は調査区の北側にあたる丘陵の裾部分で集中して検出された。掘立柱建物に関しては、SB38では常滑甕（瀬戸美濃大窯併行期）が出土しており、SB52・53・55・60・62ではかわらけが出土したことから、中世後期に位置づけられる。ただし、出土遺物は小片であるものが多く、詳細な時期を特定することは難しい。そのため、墓域と居住域の分布に違いが見られるが、集落がどのように展開していたかは判然としない。

土壙墓は26基検出され、この中でも、出土したかわらけによってSK04は16世紀前半に、SK09・12が16世紀後半にそれぞれ位置付けられる。それ以外の土壙墓は、規模・形状の類似から16世紀代と考えられる。この他に、北垣遺跡では土壙墓に伴ったものはないが、16世紀代と考えられる石塔の部材が多く出土している。さらに周辺では、文殊堂遺跡、宇藤蓮台遺跡では中世後期の石塔の部材が出土しており、香勝寺では本堂の下より中世後期の石塔が多く出土している。このことから、北垣遺跡を含む円田丘陵の一帯は、中世後期においては墓域としての性格が強かったと考えられる。

北垣遺跡では、SB26・52・53・58・60・62でかわらけが出土したことから、中世後期に位置づけられる掘立柱建物が検出されているが、詳細な時期を確定できるものはなく、建物の時期差やどのように集落が展開していたかは判然としない。そのため、中世の墓域との関係も不明である。

近世　北垣遺跡における江戸時代以降の遺構は、掘立柱建物、土壙墓、井戸、溝が検出された。掘立柱建物に関しては時期不明のものが多数であるが、SB23では瓦片が出土しており、SB29・37・39・41では近世陶器が出土しているため､近世以降にも集落が存在していたことが窺える。土壙墓に関しては、SK37で寛永通宝が出土したことから、江戸時代中期後半に位置づけられる。他にもSK38などの6基が検出されている。また、表採遺物では18世紀後半に位置づけられる蔵骨器が出土しているため、この時期まで墓地が存続していた可能性がある。井戸に関しては、中世後期の石塔の一部が井戸の石材に転用されており、遺物は17世紀前半に位置づけられるかわらけが出土したことから、近世前半においてすでに井戸が使用されていたことが窺える。井戸では石塔の部材が転用されていることから、中世後期の墓域に関わっていた集団とは別の集団が、居住していた可能性がある。

特記すべき遺物としては、鉄滓が出土した。周辺の中屋敷遺跡でも鉄滓が出土しており、中屋敷遺跡では近世に位置づけられるため、北垣遺跡でも近世以降に鍛冶を行っていた可能性が考えられる。

北垣遺跡では、18世紀後半に位置付けられる遺物も出土していることから、江戸時代前半から幕末まで集落として存続していたと考えられる。また、一部では、昭和初期の遺物も出土していることから、明治以降の継続的な土地利用の痕跡が窺える。

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の北垣遺跡

１　森町域の弥生時代集落と北垣遺跡

（１）竪穴建物の比較（第164図）

北垣遺跡の竪穴建物　森町域でこれまで行われた調査によって、弥生時代の集落遺跡がいくつか知られている。ここではそれらの遺跡との比較により、北垣遺跡の性格を考えてみたい。

まず、北垣遺跡の概要についてまとめる。本章第１節でも記述したが、北垣遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられる竪穴建物が４軒出土した。平面形全体が捉えられるのはSH15であり、その形状から隅丸方形を呈していたと考えられる。それ以外の竪穴建物は、遺構の一部が検出されたのみであるが、SH15と同じように隅丸方形を呈していたと考えられる。ただし、SH01は柱穴のみ検出されたため、平面形は不明である。それぞれの遺構の時期に関しては、SH15で菊川式土器が出土したことから、弥生時代後期中葉と考えられ、それ以外の遺構では遺物が出土しなかったため、SH15との類似性から、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の一時期に存在したと捉えられる。

以上のことから、少ない資料ではあるが、北垣遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけて、隅丸方形の竪穴建物を中心の居住域が展開していたと考えられる。出土遺物に関しては、すべて土器で、石器や鉄製品などの土器以外の遺物は出土していない。

森町域の弥生集落　森町域では、竪穴建物などが検出され、居住域が存在したと考えられる遺跡として、西平子遺跡、奥谷田遺跡、片瀬遺跡、綱掛山古墳群、弥勒平遺跡が挙げられる。

太田川東岸の飯田地区にある西平子遺跡では23軒の竪穴建物が検出された。竪穴建物の平面形は隅丸方形、円形、長円形と多岐にわたり、隅丸方形が10軒と最も多く、円形４軒、長円形１軒で構成されている。これらの竪穴建物は、出土遺物から弥生時代末～古墳時代前期が主要時期で、この時期に集落を形成していたと考えられている。検出された遺構の中でも、長円形の竪穴建物（４号住居跡）は規模も大きく、建物の配置から中心的な位置を占めていることから、西平子遺跡で見られる竪穴建物の平面形の違いは、時期差ではなく機能上の違いによる可能性が指摘されている（森町教委1996）。

太田川岸の奥谷田Ⅰ遺跡では、竪穴建物が２軒検出された。検出された１号住居と２号住居はともに隅丸方形の平面形を呈している。遺構の時期に関しては、１号住居祉は弥生時代後期中葉に位置付けられ、２号住居祉は時期の確定が難しいが１号住居跡とほぼ同時期とされている。また、遺物に関しては、１号住居に伴う土器以外は出土していない（森町教委1996）。

一宮川東岸側の円田の丘陵上にある弥勒平遺跡では、少なくとも３軒の竪穴建物が同じ位置で検出された。これらの竪穴建物からは弥生時代中期中葉～後期の遺物が出土しているが、平面形態が方形あるいは隅丸方形であることを考慮して弥生時代後期前半から古墳時代前期の間に同一箇所に建て替えが行われたと考えられている（静岡埋文研2011）。

一宮川東岸にある片瀬遺跡、綱掛山古墳群は、弥生時代中期後葉から後期前葉まで存続した集落遺跡である。綱掛山古墳群で検出された弥生時代の竪穴建物は、平面方形のものが大半を占め、SB04のみが長方形化した楕円形を呈している。遺構の時期としては菊川式古段階の土器が出土したことから、後期前葉の前後と考えられる。土器以外の遺物としては、石器（打製石斧、磨製石斧、石鏃未製品）が出土した。片瀬遺跡では、円形、方形、楕円形、長方形など様々な平面形の竪穴建物が検出された。これらの竪穴建物は、時期による形状の変遷は見られず、弥生時代中期後葉から後期前葉まで様々な形状の竪穴建物が併行して存在していたと考えられる（静岡埋文研2009）。

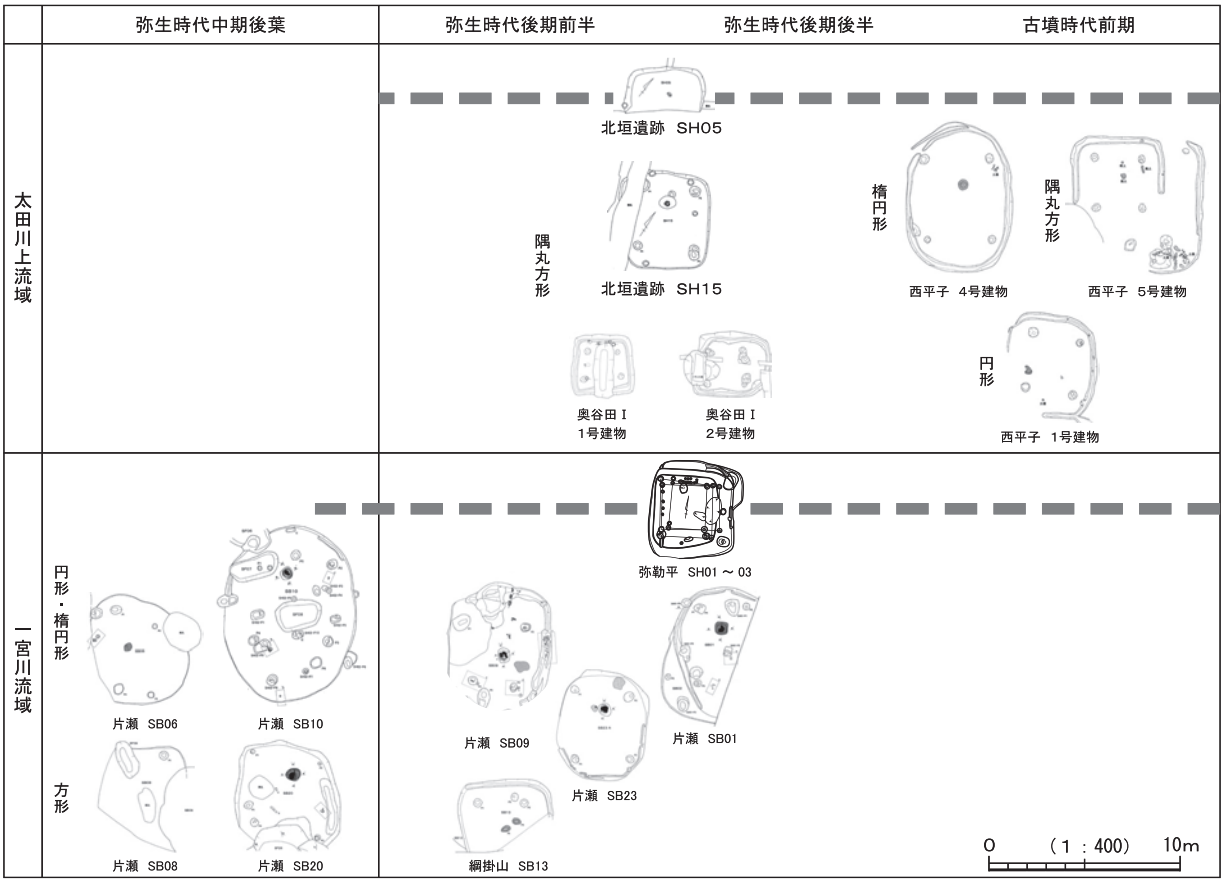
竪穴建物の平面形について　遠江では弥生時代の竪穴建物は、平面形が、中期中葉では方形、中期後葉では楕円形か隅丸方形、後期後半に至ると隅丸方形に変遷していくことが指摘される（井村2002）。一方、森町域では中期～後期で方形、円形、楕円形などさまざまな平面形が存続しており、これらを従来通り時期差による形態の変化と捉えるのではなく、出自の差、集団の差を反映していたと考える意見もある（静岡埋文研2009）。

北垣遺跡で検出されたSH05・15は、隅丸方形である。平面形の把握できる竪穴建物数は少ないため判断が難しいが、北垣遺跡で同じ形状の竪穴建物が検出されている点は、西平子遺跡や片瀬遺跡など森町で確認されるような同時期に複数の平面形態が確認される様相とは合致しない。ただし、田村隆太郎氏が想定するように、平面形態が時期差ではなく性格の違いと仮定すれば、西平子遺跡や奥谷田Ⅰ遺跡のように太田川中流域では隅丸方形の竪穴建物が検出されていることから、これらの隅丸方形の建物を建設する集団と近い関係にある集団が北垣遺跡に居住していた可能性がある。

遺跡の立地の比較　次に遺跡の立地について比較していく。

まず、北垣遺跡に関しては、標高約50m付近に位置しており、低地との比高差はおよそ15mである。同じ太田川西岸の奥谷田Ⅰ遺跡では標高60～50m付近に位置しており、低地との比高差は25～15mである。また、一宮川東岸の弥勒平遺跡では、標高70m付近にあり、低地との比高差が35mある。これらの遺跡は丘陵先端部の平坦部に位置しており、低地に近い位置に立地している。

一方、一宮川西岸の片瀬遺跡や綱掛山古墳群は、標高がそれぞれ90mと100mあり、低地との差が50～60mある。また、太田川東岸の西平子遺跡は、標高が120mあり、低地との比高差が80mある。そして、これらの遺跡は丘陵の先端ではなく、丘陵の奥か丘陵の頂部に位置している。

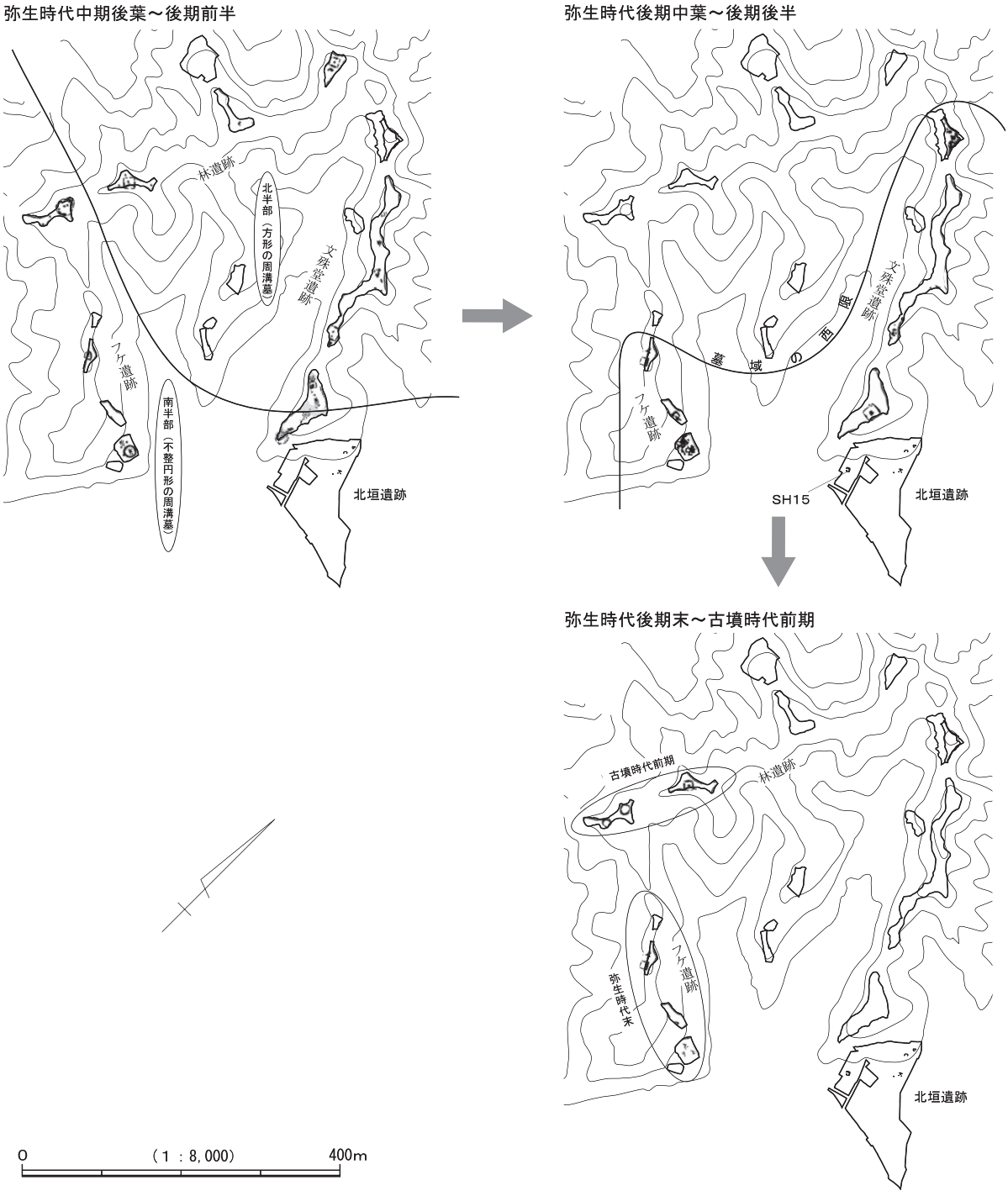


第164図　北垣遺跡と森町域の竪穴建物跡の比較図

このように比較してみると、やや低い丘陵先端の平坦部に位置する遺跡は、小規模な建物群と土器が数点出土しているのに対し、やや高地に位置する遺跡は、土器、石器など種類の多い遺物が出土し、遺跡の規模も大きいことが窺える。拠点となるような集落は周辺とやや隔絶した場所に居住域を築き、周辺の小規模な集落は低地に近い丘陵部に居住域を築いていた可能性がある。

２　北垣遺跡と周辺の墓域との関係について

（１）時期的関係（第165・166図）

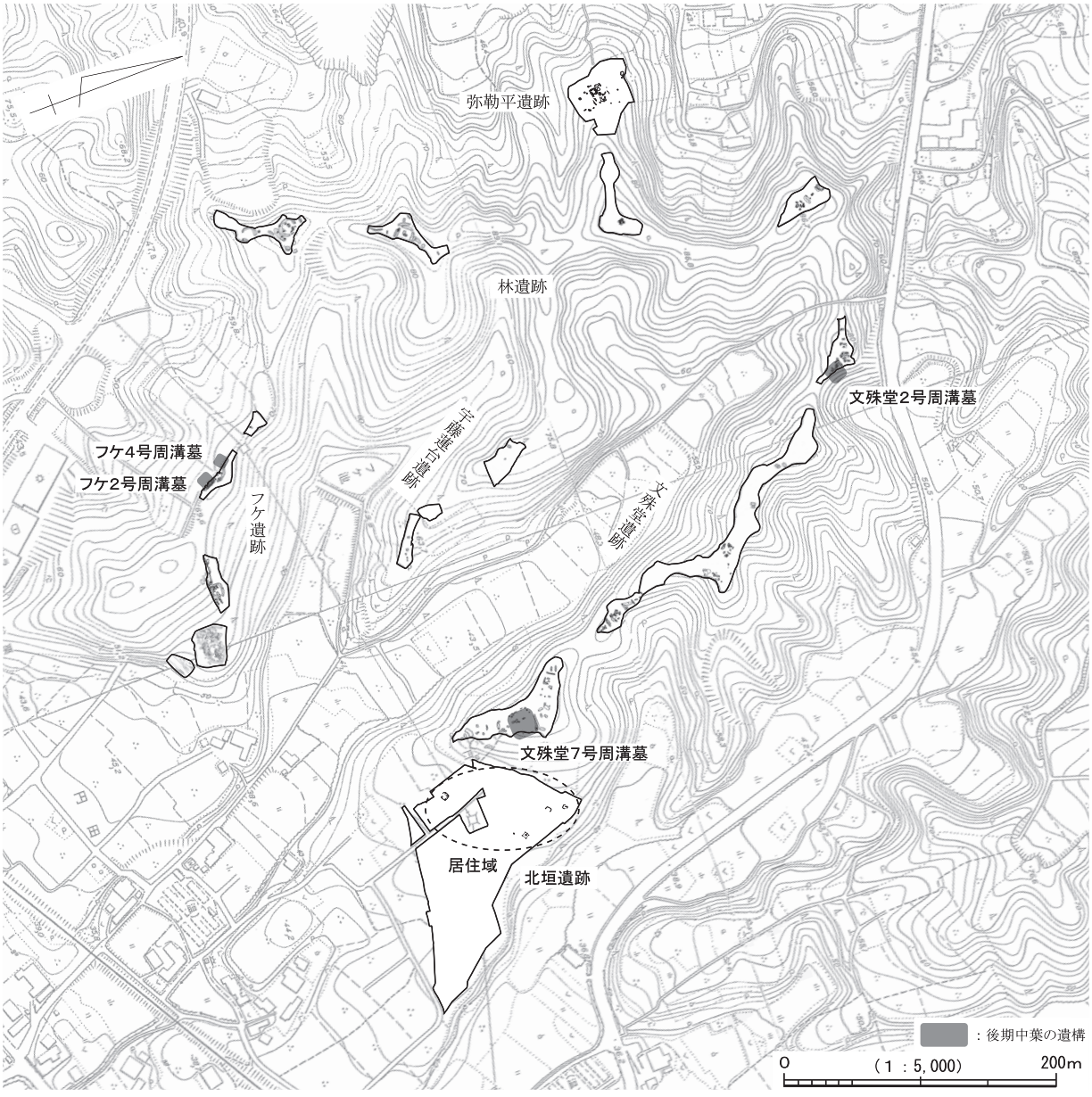


第165図　円田丘陵の遺跡群と北垣遺跡の変遷図

森町域で調査された弥生時代遺跡は居住域に比べ、墓域の遺跡が多く存在している。そのため、墓域と関係する居住域がどのように展開していたのかは、判然としない部分が多い。それに対して、北垣遺跡の周辺では、文殊堂遺跡、フケ遺跡、林遺跡などが北垣遺跡の北側にある丘陵の頂部や、南西側の別の丘陵に展開しており、方形周溝墓、土器棺墓、土壙墓が検出された。これらの墓域は弥生時代中期後葉から古墳時代前期前葉まで墓域として機能していたと考えられている（静岡埋文研2006a）。北垣遺跡では、SH15が弥生時代後期中葉と考えられ、墓域より遅れて形成されたと考えられるものの、弥生時代後期中葉においては、墓域と居住域が同時期に存在していたことが窺える例として興味深い。

墓域の変遷　ここでは、墓域の時期的変遷を整理しつつ、その中で北垣遺跡がどのように関係するか検討していく。まず、円田丘陵の遺跡群（文殊堂遺跡、フケ遺跡、宇藤蓮台遺跡、林遺跡）の変遷を簡単に整理しておく。円田丘陵では弥生時代中期後葉に遺跡の形成が始まる。

弥生時代中期後葉から後期前半においては、円田丘陵の全体に方形周溝墓、円形周溝墓、土壙墓が構築されており、その中でも周溝墓は広範囲へ広がっている。また周溝墓に関しては、分布の違いが見ら



第166図　弥生時代後期中葉の円田丘陵

れ、円田丘陵の北半は方形周溝墓が主体であり、南半は不整円形周溝墓が主体となっている（第165図）。田村隆太郎氏はこのような分布の違いを、遺物の時期差が見られないことから、集団の系統の違いと捉えている（静岡埋文研2006a）。

次に、弥生時代後期中葉から後期後半にかけては、文殊堂遺跡とフケ遺跡で新たな墓域の形成が始まる。一方、それまでの墓域として機能していた文殊堂遺跡のF、G群や、林遺跡においては、弥生時代後期中葉になると終焉を迎える。そして、文殊堂遺跡のI、O群や、フケ遺跡のA～F群に関しては、後期前半から引き続き墓域として機能するものの、それまでとは形態の異なる墓域へと変化していく。

この時期の墓域の特徴としては、周溝墓の分布が後期前半までは円田丘陵全体に広がっていたのに対して、後期中葉以降は円田丘陵の東側に分布の中心を移すことが挙げられる（第165図）。また、周溝墓の形状に関しては、後期前葉まで見られた方形周溝墓と不整円形の方形周溝墓は、後期中葉以降では不整円形の周溝墓は見られなくなり、方形周溝墓のみに統一される。そして、周溝墓の規模に関しては、文殊堂遺跡の７号周溝墓が最大の規模を測り、それ以外の周溝墓は小規模なものである。

最後に弥生時代後期末から古墳時代前期初頭では、墓域の様相が再び変化する。後期中葉までに見られた墓域は後期末以降に継続されず、大半が終焉を迎える。フケ遺跡のA～H群の土壙墓群は、比較的長く存続したが、後期末の早い段階で終焉を迎える。そして新たに林遺跡のD～G群において新たに墓域が形成される。後期後葉まで見られた多数の埋葬施設を有する墓域の形成は終了し、新たな場所に単数・少数の埋葬施設を有する周溝墓を形成するという新たな展開を見せる。

北垣遺跡との時期的関係　このように円田丘陵の墓域の中では、その変遷を大きく３つに分けられている。このような墓域の時期的変遷に対して、田村氏は、墓域を営む集団のとりまく社会の動向が、墓域の展開にも反映されている可能性を考えている（静岡埋文研2006a）。

弥生時代中期後半から後期前半では､北半と南半で墓制の異なる集団の存在が想定されるのに対して、後期中葉から後期後半にかけては墓域が尾根の東側に集中し、それまでにはあまり見られない多埋葬化と密集化の傾向を示す。北垣遺跡のSH15は構築時期が後者の時期と重なることから、後期中葉頃に起こった社会や環境の変化の中で営まれた集落である可能性が考えられる。

その中でも、文殊堂遺跡の南端の墓域は、北垣遺跡と位置的に最も近くにあり、後期前半から後期後半に至るまで継続的に墓域が営まれていた。そのため、文殊堂遺跡の被葬者と北垣遺跡に居住していた人々はより近い関係にあった可能性が考えられる。文殊堂遺跡では、弥生時代後期末には墓域としての機能を終えており、北垣遺跡も出土遺物から、古墳時代前期までで集落の機能を終えると考えられるが、遺構は古墳時代前期まで存続する明確なものが検出されていないため、居住域が墓域よりも早く廃絶するか、古墳時代前期まで存続していたかどうかの判断は難しい。

（２）位置関係（第166図）

まず、後期中葉の円田丘陵の墓域であるが、文殊堂遺跡のA～C、G、I、O群、フケ遺跡のA～F、G、H、J、L群の方形周溝墓と土壙墓がこの時期の遺構にあたる。

この中で、北垣遺跡に最も近いのは文殊堂遺跡にO群に含まれる７号周溝墓である。７号周溝墓は文殊堂遺跡の中でも、丘陵の南端に位置し、その丘陵の裾付近に位置する北垣遺跡（居住域）からは、目立つ場所に立地していたことから、最も近い関係にあったと考えられる。

第３節　古墳時代後期～終末期の北垣集落と墓域の関係

１　北垣遺跡の集落と円田丘陵の古墳群・横穴墓群の関係について

（１）位置関係（第３・167図）

北垣遺跡とその北側にある丘陵上の古墳群、横穴墓群（円田丘陵の古墳群・横穴墓群）の位置関係についてまず確認しておきたい（第３図〈５頁参照〉・第167図）。

第167図　北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群との関係

北垣遺跡と円田丘陵の文殊堂古墳群、林古墳群、宇藤蓮台古墳群、宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群は、天竜浜名湖鉄道円田駅の北東約500～1,000ｍに位置する。北垣遺跡は太田川が開析した平野部を見渡すことができる丘陵平坦地に位置している。谷を挟んで西側には、フケ遺跡などが存在しており、この場所にも集落が存在した可能性がある。一方、両遺跡の北側の丘陵上には、古墳や横穴墓が多数築造されており、北垣遺跡の北側の尾根上には文殊堂古墳群が、その斜面には宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群が、フケ遺跡の北側の丘陵上には宇藤蓮台古墳群や林古墳群が築造されている。特に宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群は総数68基以上の横穴墓が密集しており、北垣遺跡との関係が注目できる。

（２）時期的関係（第167・168図）

北垣遺跡とその北側の尾根に築造された文殊堂古墳群などとの時期的な関係をみて、両遺跡の関係について考えたい。

古墳時代中期中葉～後期前半　文殊堂古墳群、宇藤蓮台遺跡、林古墳群では古墳時代中期中葉から古墳時代後期初頭の初期群集墳が築造されているが、北垣遺跡の今回の調査では同時期の遺構・遺物は確認できない。また、これまでの森町教育委員会による発掘調査や採集された遺物の中にもこの段階の遺物は確認できない。この時期の集落は北垣遺跡内に形成されていたとしても、平野部に近い丘陵先端部であったか、あるいは北垣遺跡には集落は営まれていなかった可能性が高い。現状では後者の可能性が高いと考える。

したがって、当該期の文殊堂古墳群や林古墳群を築造した集団は、北垣遺跡以外の場所に集落を営んでいた可能性が高いといえる。

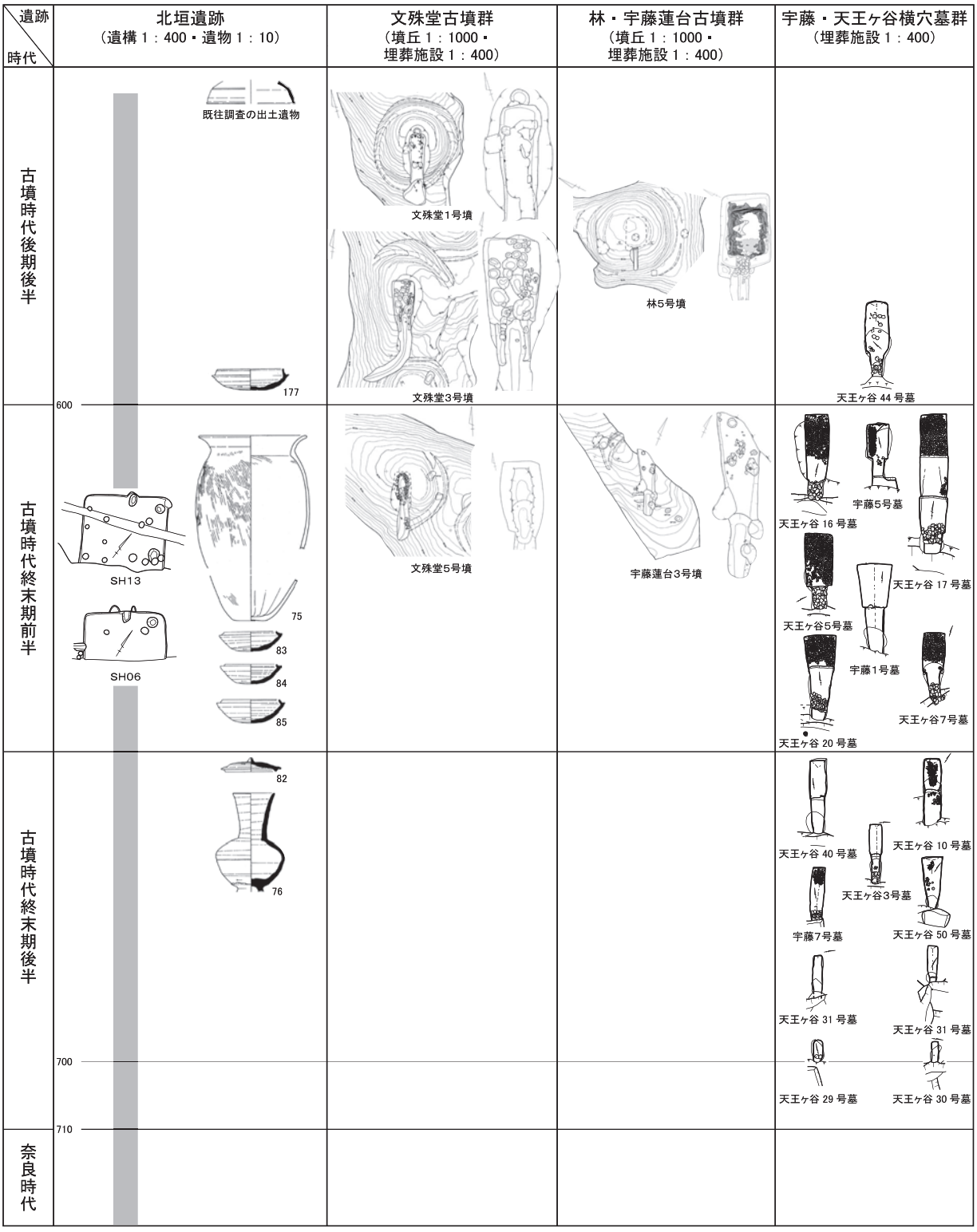
古墳時代後期後半～終末期　第168図に北垣遺跡の竪穴建物と文殊堂古墳群、林古墳群、宇藤蓮台古墳群、天王ヶ谷横穴墓群、宇藤横穴墓群の時期的な変遷図を掲載した。

北垣遺跡では、今回の調査において出土した古墳時代後期で最も遡る資料は須恵器杯蓋（177）であり、遠江Ⅲ期後葉（６世紀末～７世紀初頭）に位置づけられる（鈴木敏2001・2004）。また、これまでに遺跡内で採集されたものの中にこれ以前に遡る可能性がある須恵器杯蓋１点（第12図１,24頁参照）があり、遠江Ⅲ期前葉～中葉（６世紀中頃～後半）に位置づけることができる。したがって、北垣遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭まで続いた集落が衰退した後、古墳時代後期中頃から後半ごろに再び人為が確認できる。遺構として明確なのは、遠江Ⅳ期前半に位置づけられる竪穴建物SH06・13である。この後は時期を特定できる建物は少ないものの、出土遺物からみれば、古墳時代終末期（飛鳥時代）以降鎌倉時代までの遺物が安定して出土していることから、当該期の北垣集落は古墳時代後期以降鎌倉時代まで継続的に営まれていたことが判明した。

一方、文殊堂古墳群や林古墳群などでは、遠江Ⅲ期後半に文殊堂１・３号墳、天王ヶ谷44号横穴墓、林５号墳が築造され、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に文殊堂５号墳、宇藤蓮台３号墳、天王ヶ谷横穴墓群複数、宇藤横穴墓群複数が築造・開削されている。

したがって、北垣遺跡の古墳時代後期の集落の形成とほぼ同時期に文殊堂古墳群、林古墳群、天王ヶ谷横穴墓群が築造されており、北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群の成立には非常に深い関係があったと想定できる。

北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群との関係　円田丘陵の古墳群と横穴墓群の墓道を復原したものが第167図である。このうち林５号墳は墓道を西側に向けており、北垣遺跡の方向への意識は薄いと考えられることから、直接的な関係はなかった可能性が高い（大谷2012）。林５号墳以外の墓道を復原すると、宇藤蓮台３号墳、宇藤横穴墓群、文殊堂１・３・５号墳は北垣遺跡の西側の谷を、天王ヶ谷横穴墓群は東側の谷を墓道としていた蓋然性が高い。つまり、林５号墳を除く円田丘陵の古墳群・横穴墓



第168図　北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群の時期的変遷

群は北垣遺跡が存在する丘陵の東西の谷部を墓道としており、北垣遺跡の集落からはその墓道を見ることができるとともに文殊堂古墳群、天王ヶ谷横穴墓群などを直接望むことができる。

現状では、多くの遺構が失われている可能性が高いこと、直接の関連性を示す遺物が出土していないことから、北垣遺跡で確認された竪穴建物などで生活していた集団が、どの古墳あるいは横穴墓に埋葬されていたか直接的な証拠はない。ただし、金銅装馬具を副葬し、８ｍ程度に復原される横穴式石室を

内蔵する古墳を築造した集団が居住したと想定される大型の竪穴建物や掘立柱建物が存在しないこと、また北垣遺跡は古墳時代後期以降鎌倉時代まで継続的に集落が営まれていたことから判断して、古墳時代後期に開削が開始され、古墳時代終末期を通じて連綿と横穴墓が開削される宇藤横穴墓群や天王ヶ谷横穴墓群に葬られた可能性が高いと想定する。

なお、古墳時代中期中葉から後期前半の文殊堂２・４号墳と１・３・５号墳は同一尾根上に築造されるが、先行する２・４号墳を避けて１・３・５号墳が築造されている。50年程度の時期差があり、２・４号墳を築造した集団と、１・３・５号墳を築造した集団は異なっている可能性が高いが、後者がこの地域に古墳を築くにあたって前にあった古墳を破壊せず、避けて築造していることは、古い時期の文殊堂古墳群の被葬者集団との関係を擬制することで、この地域に拠点を築いた可能性がある。

今後の検討課題　今後の検討課題としては、北垣遺跡の集落の中で、複数の墓制を有する集団が存在し、それぞれの社会的立場において古墳や横穴墓を築造したのか、あるいは北垣遺跡の集団は同じ墓制のみで、古墳は別の場所に居住する集団が築造したのか。また、横穴墓が北垣遺跡の集団の墓制だったと仮定した場合、宇藤横穴墓群と天王ヶ谷横穴墓群の２つの群に分かれて築造したのか（この場合は、両横穴墓群が開削された位置関係から北垣遺跡の集落を築造した集団が大きく宇藤横穴墓群と天王ヶ谷横穴墓群の２グループで、前者がさらに２グループ、後者が４グループに区分されていた可能性がある）など、集落内の集団構成がどのようになされていたのかを復原していくことも重要な課題となる。

第４節　古墳時代後期～平安時代の北垣集落

１　古墳時代後期～奈良・平安時代の集落

（１）北垣遺跡の竪穴建物と掘立柱建物（第169～171図）

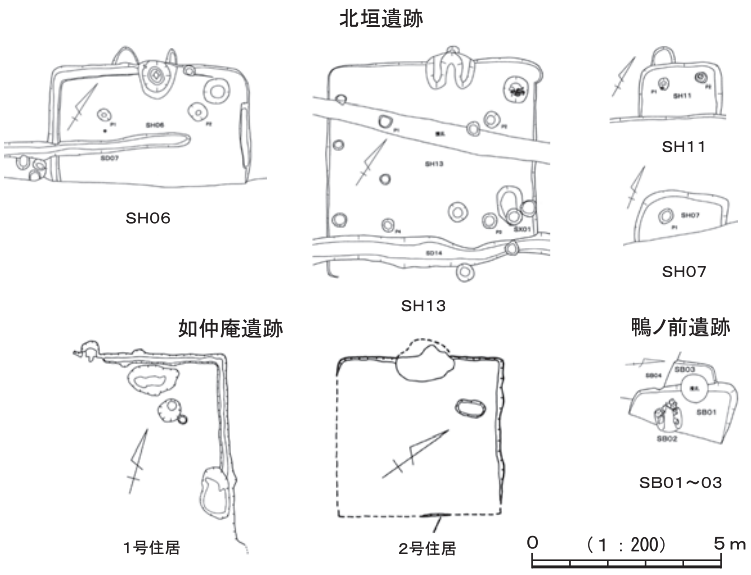
北垣遺跡は近現代の建物や耕作の影響により、遺構の残存状況が良好ではなく、また掘立柱建物など遺構からの出土遺物が少ないことから、近世の遺物が出土していないことなどの消極的な理由で時期を想定した遺構が少なくない。

竪穴建物　北垣遺跡では古墳時代後期から平安時代の竪穴建物は９軒を確認したが、時期を特定できるものが少ない。時期を特定できるものは、古墳時代終末期前半のSH06・13のみであり、それ以外は炉を伴わない竪穴建物であることから当該期に位置づけたものである。

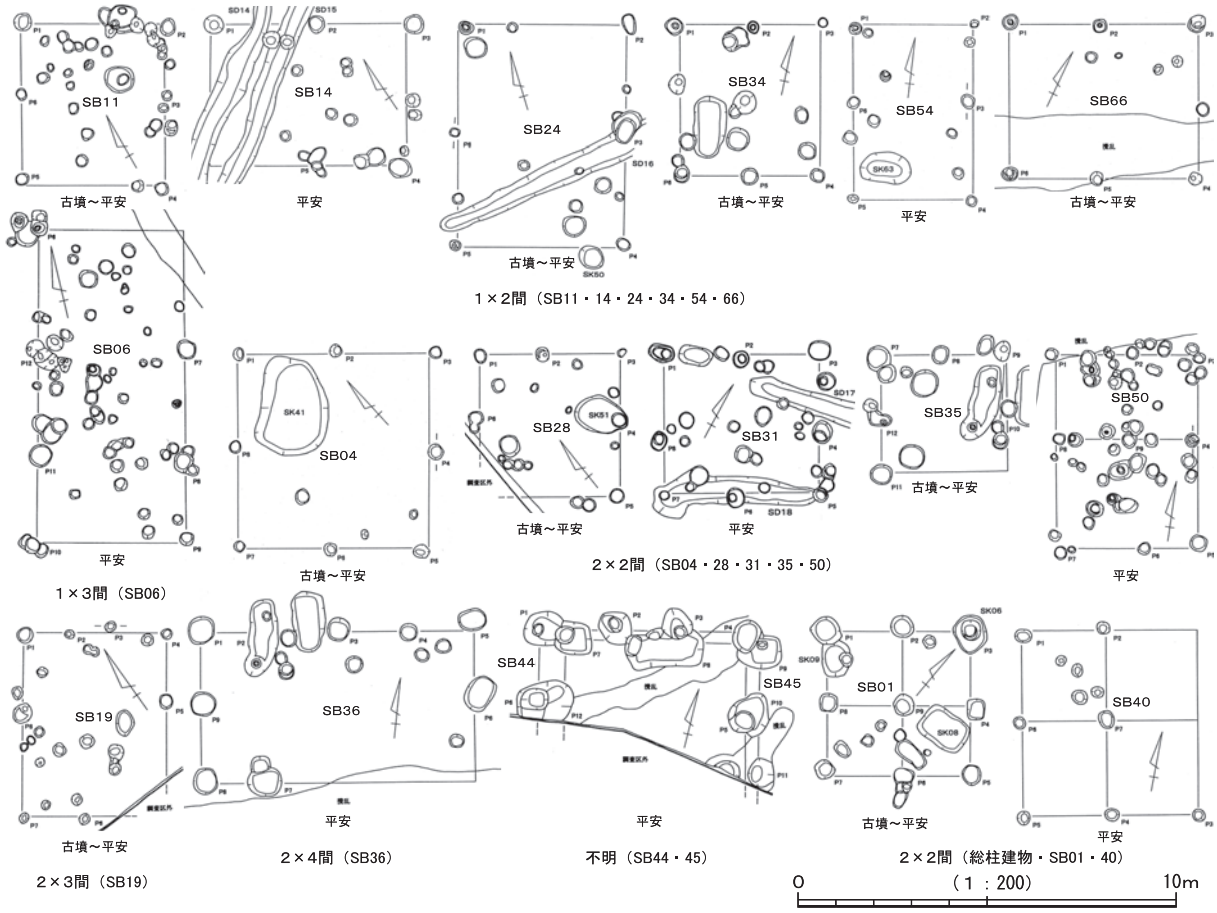
時期が特定できるSH06・13は平面方形で北（北西）壁に竈を取り付ける。太田川中流域では竪穴建物の確認例は少ないものの、SH06・13と同時期の竪穴建物が森町如仲庵遺跡（１・２号住居，森町史編さん委1998）で確認されており、SH06・13同様、平面方形で北（北西）壁に竈を取り付ける（第169図）。規模も一辺５～６ｍとほぼ同大である。貯蔵穴も竈の東側に造り付けられており、太田川中流域の古墳時代終末期前半の竪穴建物は、平面方形で北壁に竈を造り付け、竈の東側に貯蔵穴を掘り込むことが一般的であった可能性がある。

一方、時期が未確定であるが北垣遺跡のSH07・11は竈を伴うかどうか不明確な小規模な竪穴建物である。同様の遺構が森町鴨ノ前遺跡（静岡埋文研2004b）で確認されており（第169図）、平安時代の竪穴建物と想定されている（田村2004）。北垣遺跡ではSH11から平安時代の遺物が出土しており、鴨ノ前遺跡と同時期の可能性がある。田村隆太郎氏は、遠江における平安時代の集落は基本的には掘立柱建物を主体として、竪穴建物はほとんど確認されないとしている（田村2004）。また、田村氏はその中で平安時代の竪穴建物が確認された鴨ノ前遺跡については立地する場所が丘陵裾部であることから、その立地状況などの制約などによる条件により竪穴建物のみで構成される集落があった可能性を想定する（田村2004）。北垣遺跡の場合、SH07・11を平安時代の竪穴建物とした場合は、同時期には掘立柱建物も確認されていることから、田村氏が想定したような竪穴建物で構成される集落ではなく、掘立柱建物を主体としながら、小規模な竪穴建物を伴う集落であったといえようか。この想定が正しければ、SH07・11が小規模であり、竈を伴わないことなどから判断すれば、集落内では特別な役割をもった建物（産屋など）であった可能性も想定しておくべきであろう。

なお、奈良時代の遺物は多く出土しているものの、明確に奈良時代に位置づけられる建物はなく、時期が不明確なSH02・03・09・10・12が奈良時代の竪穴建物である可能性がある。



第169図　太田川中流域の古墳時代後期～平安時代の竪穴建物

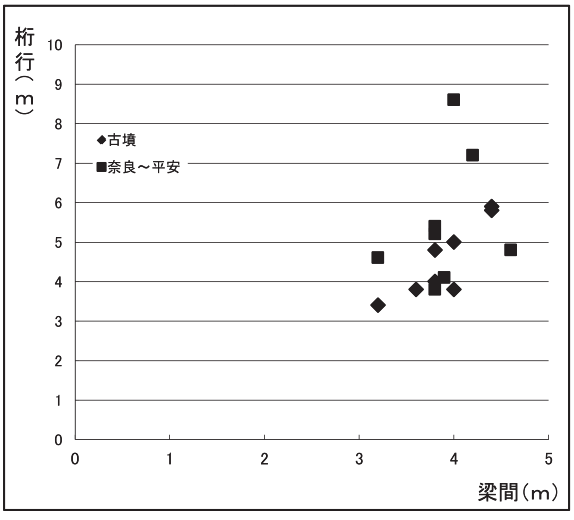


第170図　北垣遺跡の掘立柱建物（古墳時代後期～平安時代）

掘立柱建物　北垣遺跡ではこの時期に位置づけられる掘立柱建物が21棟であり、時期をほぼ特定できる掘立柱建物は、SB03が古墳時代終末期に遡る可能性が高いがそれ以外のSB14・SB54など９棟が平安時代に位置づけることができる。竪穴建物のところで記述したように平安時代の集落は掘立柱建物を中心として、竪穴建物が数軒伴う集落であった可能性が高い。平安時代の竪穴建物は１×２間、１×３間、２×２間が多く、２×４間１棟、２（以上）×３間２棟、２×２間の総柱建物１棟である。このうちSB44・45は同一箇所で重複するとともに、他の建物よりも規模が大きい可能性が高いこと、掘方が方形あるいは隅丸方形で規模が大きく、柱筋はややずれるものの規格性の高い建物であるといえる。したがって、北垣遺跡ではSB44・45が平安時代の中心的な建物であった可能性がある。

一方、SB03と、SH06に近接し、主軸方位が一致するSB01が古墳時代終末期の掘立柱建物である（可能性が高い）が、掘立柱建物数は少なく、竪穴建物と掘立柱建物がほぼ同数あるいは竪穴建物がやや多い集落であった可能性が高い。

竪穴建物同様、明確に奈良時代に位置づけられる掘立柱建物はないが、遺物の出土量は多いことから、掘立柱建物が建設されていた蓋然性は高く、



第171図　北垣遺跡の掘立柱建物の規模
（古墳時代後期～平安時代）

平安時代と同じような間数の建物であった可能性が高い。

古墳時代終末期以降平安時代の掘立柱建物の規模はおおむね12～25㎡の範囲内にある（第171図）。時期が下るにつれて、SB06・36のようにやや大きくなる傾向にあるが、古墳時代から平安時代までおおむね同規模であった可能性が高い。

なお、掘立柱建物がコ字形に配置される、総柱建物が並ぶなどの状況は確認できない。ただし、SB44・45は規格性の高い建物で中心的な建物と想定されることから、今回の調査区外の南側の平坦面に規格的に配置された建物群が存在する可能性は残る。

（２）北垣集落の動向（第161・162図）

北垣遺跡は後述するように、遺物から見ると灰釉陶器と山茶碗段階では遺物量に著しい違いはなく、古墳から続く古代の集落が中世前期（鎌倉時代）まで継続していたと想定することから、ここではそれぞれの時期の特徴についてみておきたい。

古墳時代後期～終末期　上述したように竈を有する竪穴建物が当該期に属すが、調査区北側から北西側にかけて確認されており、一段高くなる丘陵近くに竪穴建物が集中的に築造された可能性がある（第161図参照）。そしてSH06などとSH13のように20ｍほど離れて、竪穴建物群が並んでいた可能性があり、興味深い。一方、当該期に位置づけられる可能性がある掘立柱建物SB01・03は竪穴建物の周囲に造られているものが多い。ただし、森町教育委員会が調査した地点でも古墳時代の遺物が出土しており、丘陵全体に集落が広がっていた可能性が高いものの、丘陵全体に満遍無く建物が築造されたのではなく、数箇所に分かれて建物が築かれた可能性が高い。

奈良時代　奈良時代の遺物は多く出土しているものの、この時期として特定できる遺構は少なく、SX02、SK54などであり、時期が不明確な竪穴建物や掘立柱建物のいくつかがこの時期に位置づけられる可能性が高い。時期不明の掘立柱建物がこの時期に位置づけられるとしても規模の大きな掘方を有するような掘立柱建物は確認できないことから、一般的な集落であった可能性が高い。

平安時代　当該期の建物や土坑などを第161図に示しているが、ロ字形、コ字形などの規格的な配置は確認できず、掘立柱建物についても主軸を揃えているような意図は確認できない。ただし、上述したように規模の大きい掘方を有するSB44・45は同様の建物が同じ場所にほぼ軸を揃えて造り替えられており、この周辺には計画的に配置された建物群が存在している可能性がある。また、古墳時代同様遺跡内全体に建物は存在せず、いくつかの纏まりが複数箇所に分かれて立てられていた可能性が高い。

須恵器・土師器・灰釉陶器のほか緑釉陶器も２点出土しており、一般的な集落よりはやや上位の集落の可能性が高いが、墨書土器は少なく、円面硯など行政で使うような道具類も少ない。

鎌倉時代　後述するように山茶碗も多く出土しており平安時代から継続して集落が営まれていた可能性が高いが、当該期の建物も明確ではないものが多い。確実に中世に位置づけられる建物は少ないことから断定はできないが、いくつかの場所に分かれて建物が建設されていた可能性が高く、その場所の多くは、平安時代にも掘立柱建物が建てられていた場所である。

特殊な建物が存在したかどうか不明確であるが、３区包含層中から托が出土しており、この近くで祭祀が行われたか、小規模な仏堂などが営まれていた可能性がある。鎌倉時代は集落内に小規模な仏堂をもつ集落であった可能性がある。

鎌倉時代以降については、後述するように極端に遺物量が減少することから、北垣遺跡の集落は急激に衰退した可能性が高い。

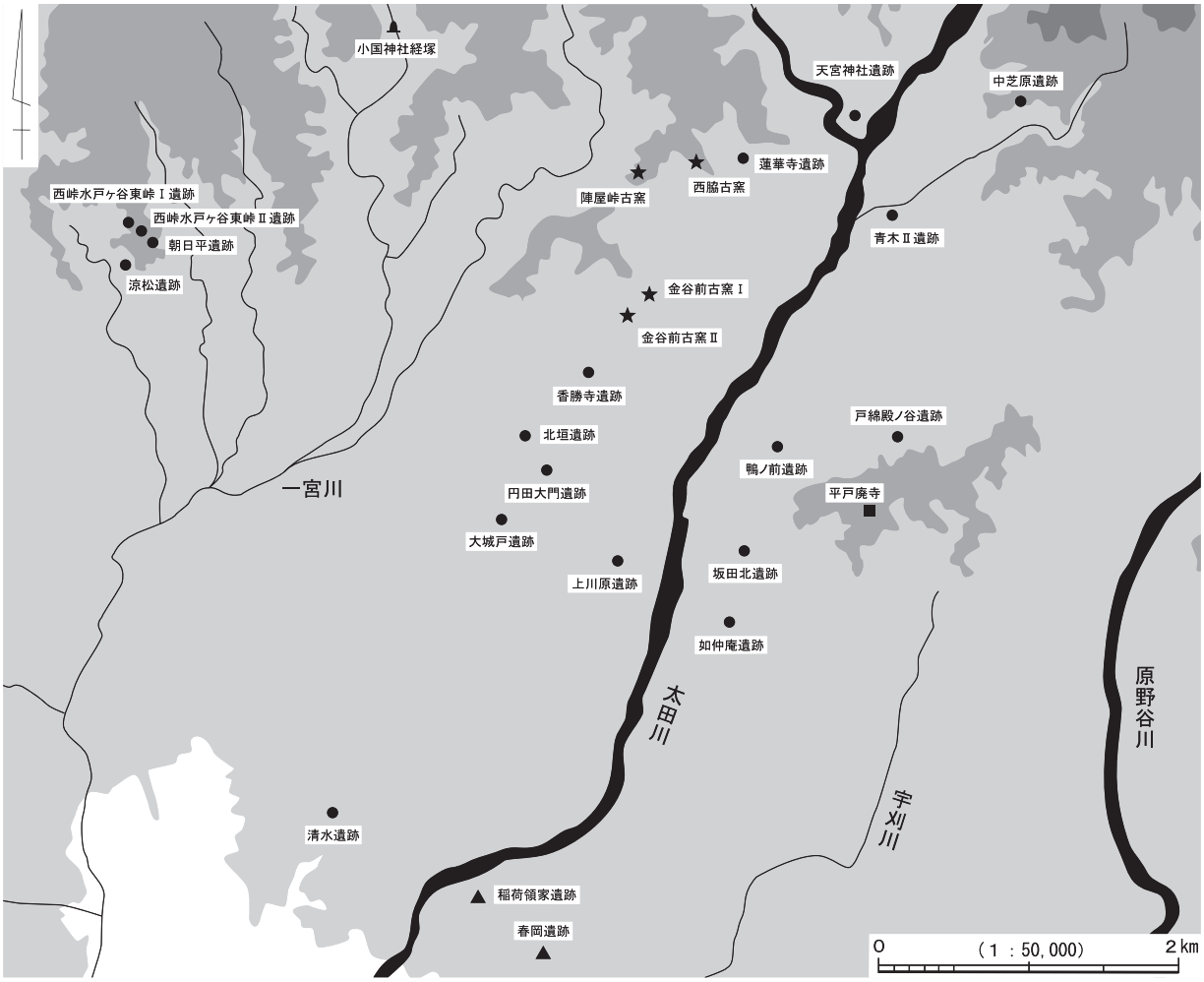
（３）太田川中流域における主な遺跡の動向と北垣遺跡（第172・173図）

ここでは、太田川中流域の古墳時代後期～奈良・平安時代、そして鎌倉時代の集落と遺跡の様相と比較することで北垣遺跡の特徴についてみておきたい。

第172図に古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物が確認された太田川中流域の主な遺跡を示し、第173図にそれぞれの遺跡の盛衰について示した。調査されても調査面積が狭い遺跡や未調査の遺跡が多いことから全体的な様相を把握することが難しいが、太田川を挟んで両岸の丘陵上を中心として遺跡が確認されている。

古墳時代後期～終末期　太田川中流域に形成された遺跡の中でも北垣遺跡は古墳時代後期後半に集落の形成が始まっており、当地域では少ない古墳時代後期の集落遺跡として注目できる。北垣遺跡の周辺に大規模な横穴墓群や、文殊堂１・３号墳のような規模の大きい石室をもつ古墳が築造されたことから判断すれば、北垣遺跡周辺の遺跡が当時太田川流域の中でも中心的な存在だったと想定できる。また、この時期に突如集落が形成されることから、自然環境の変化により平地部に位置していた集落が洪水対策などにより丘陵上に移動したか、あるいは別の地域から移住してきた可能性も考えられる。

宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群の評価でも想定したとおり（大谷2012）、太田川北岸の丘陵には、森山古窯群が開窯されたり、鉄器生産や窯業生産を行った集団の墓制と想定される横穴式木室をもつ林５号墳が築造されたり、さらに天王ヶ谷横穴墓群では鍛冶あるいは紡織生産などが想定されるなど、手工業生産が開始された可能性があり、それに伴って別の場所から移動してきた可能性も考慮しておくべ



第172図　太田川中流域における古墳時代後期～平安時代の主な遺跡の位置

遺跡名	時代		古墳時代	古墳時代終末期／飛鳥時代		奈良時代		平安時代			鎌倉	備考
	おおよそ時期		後期	前半	後半	前半	後半	前期	中期	後期		
	所在地	遺跡の性格	6 世紀	7 世紀		8 世紀		9 世紀	10世紀	11世紀	12世紀	
西峠水戸ヶ谷東峠遺跡	森町	集落										岩室廃寺関連か
朝日平遺跡	森町	集落										岩室廃寺関連か
涼松遺跡	森町	集落										岩室廃寺関連か
清水遺跡	森町	集落										
小国神社経塚	森町	祭祀										
大城戸遺跡	森町	集落										
円田大門遺跡	森町	集落										
北垣遺跡	森町	集落										
香勝寺遺跡	森町	集落										
金谷前古窯	森町	窯業										
陣屋峠古窯	森町	窯業										
西脇古窯	森町	窯業										
蓮華寺薬師堂	森町	寺院										
戸綿殿ノ谷遺跡	森町	集落？										
鴨ノ前遺跡	森町	集落										
天宮神社遺跡	森町	寺院										
中芝原遺跡	森町	集落										
青木Ⅱ遺跡	森町	集落										
平戸廃寺	森町	寺院										
坂田北遺跡	森町	集落										
如仲庵遺跡	森町	集落										
上川原遺跡	森町	集落										
稲荷領家遺跡	袋井市	郡衙関連										周智郡衙関連
春岡遺跡	袋井市	郡衙関連										同一遺跡か

確実　想定

第173図　太田川中流域における古墳時代後期～平安時代の主な遺跡の盛衰

きであろう。

奈良時代　奈良時代になると、遺跡数が増加するが、古墳時代終末期から続く北垣遺跡周辺や、如仲庵遺跡周辺、稲荷領家遺跡周辺などの遺跡が平安時代まで安定的に続く一方で、短期間に形成された可能性が高い戸綿殿ヶ谷遺跡や中芝原遺跡など小規模な遺跡もある。北垣遺跡は大城戸遺跡や稲荷領家遺跡などとともに古墳時代終末期以降平安時代まで安定的に集落が形成されていることから、当時の中心的な地域であった可能性が高い。円田地区は『和名類聚抄』の周智郡に記載された５郷のうちの「田椀郷」と想定されることから、円田地区の大城戸遺跡から北垣遺跡や草ヶ谷地区の香勝寺遺跡一帯が「田椀郷」であった可能性が高い。こうした状況の中、北垣遺跡は大城戸遺跡や香勝寺遺跡ともに継続的に営まれていた可能性が高く、地域の中心的な集落の一つであった可能性が高い。ただし、今後の検討課題であるが、大城戸遺跡近くには小国神社旧跡伝承地などが存在していること、北垣遺跡では墨書土器が少なく、硯などの遺物がないことなどから、一般的な集落であったと考えられること、大城戸遺跡に平安時代以降支配者の居館が造営されたと考えられることなどから、北垣遺跡よりも大城戸遺跡の方がより中心的な集落であった可能性が高い。今後の調査が俟たれる。

平安時代　平安時代には小国神社・神宮寺、蓮華寺、観音寺など中央と結びついた寺社が拠点となり、平安時代末には大城戸遺跡に、小国神社宮司となる清原氏が本拠（深養父、のち栗倉殿）を構えていたと想定されている（森町史編さん委1995，森町史編さん室1999，註４）。北垣遺跡のある小字名「北垣」は、清原氏の本拠の北側の屋敷であることから「北垣」と呼ばれたとされている。北垣遺跡はこの時期には掘立柱建物を中心に、いくつかの小規模な竪穴建物で構成された集落であった可能性が高く、緑釉陶器が出土することからもある程度の有力者も居住していた集落であり、大城戸遺跡を中心として地域の主体的な集落群であった可能性がある。

鎌倉時代　北垣遺跡では小規模な仏堂等を内部に抱える集落であった可能性がある。北垣遺跡周辺では、香勝寺遺跡などでも遺物量が増加していることが報告されており、香勝寺遺跡に近接する中屋敷遺跡でも遺物量がやや増加する。

次節でも述べるが、それまで中心であった北垣遺跡や大城戸遺跡では、続く14世紀～15世紀の遺物量が少ない。北垣遺跡では古瀬戸（前期・中期）段階の陶器は確認できず、常滑などの壺甕類も確認できなくなる。大城戸遺跡でも山茶碗とほぼ同時期の貿易陶磁は確認されるものの、これ以降の遺物は減少するようである。一方で、草ヶ谷地区の香勝寺遺跡や中屋敷遺跡などの香勝寺遺跡群では、14世紀代の遺物は少ないものの、香勝寺遺跡では15世紀代の大規模な堀が確認され、中屋敷遺跡でも15世紀以降遺物が増加する。

このように中世前期から中世後期にかけて、地域内での集落の変化が起こっていた可能性を想定しておきたい。

２　灰釉陶器の流通について

（１）灰釉陶器の産地

北垣遺跡では、灰釉陶器が猿投窯K90段階（９世紀後半）のものから出土しているが、中でも猿投窯O53併行期（10世紀）以降のものが多い。大部分が掛川市（旧大須賀町）清ヶ谷産で占められるが、浜松市（旧浜北市）宮口窯からの供給も受けていることが判明する。清ヶ谷産については太田川を利用して、宮口産についても天竜川を一旦下り、遠州灘に出た後で太田川を遡上して運ばれた可能性が高い。

（２）灰釉陶器の流通・消費

灰釉陶器碗には、過度の焼成を受けて表面が発泡しているものや、見込みに重ね焼きの痕跡が二重に残存する個体が複数確認できる。後者の事例からは、生産地では重ね焼きでうまく焼成できなかった個体をもう一度焼成することで、硬度な焼き上がりにして流通させていたことが判明する。

宮口窯の大屋敷１号窯でも同じように二重、三重の重ね焼きの痕跡が確認できるものが多々存在することから焼成に失敗したものを焼き台として使用したことを想定した（大谷2004）が、北垣遺跡の灰釉陶器の状態からみると、上記で想定したように二度焼成して、製品として流通させていたことが判明する。

灰釉陶器も10世紀以降の大量生産の段階になると、やや不良品も流通し、使用されていた可能性が高い。

第５節　中世の北垣遺跡

１　中世土器・陶磁器について

（１）土器・陶磁器の傾向について（第174図，第24・25表）

平安時代中期～後期（灰釉陶器の段階）　北垣遺跡における中世以前の土器・陶磁器については、灰釉陶器、須恵器、土師器、清郷甕が挙げられる。中世以前の状況はおおむね灰釉陶器で傾向を示すことができる。北垣遺跡は上述したように６世紀末頃に集落の形成が再開し、13世紀代までは継続的に集落が続いていたことが判明するが、中世の土器・陶磁器の傾向を見るために、本書に掲載した灰釉陶器数をまずみておきたい。

出土数のグラフ（第174図）には示していないが、９世紀代は須恵器と灰釉陶器が出土しており、10世紀になると灰釉陶器と土師器（清郷甕を含む）の組合せになっていた可能性が高い。実測した個体だけでも10点を超える数量が出土しており、10世紀から11世紀後半までのものが出土している。10世紀前半が多く、10世紀後半～11世紀後半はそれよりも少ない傾向にあるが、安定して出土している。

中世の土器・陶磁器　中世の土器・陶磁器については、山茶碗、渥美、常滑、瀬戸美濃系施釉陶器（古瀬戸・瀬戸美濃、初山、志戸呂）、貿易陶磁、土師質鍋・かわらけが出土している（第24・25表）。

山茶碗（渥美含む）　山茶碗は渥美湖西窯産のものが大部分（約90％）であるが、東遠（東遠江）系と尾張産（常滑・知多産）が少量ずつ出土している。渥美湖西産は松井編年Ⅰ期からⅢ－２期まで一定量が出土している。東遠系のものは松井編年Ⅰ期～Ⅲ－１期（渥美湖西とほぼ併行）のものが出土しており、時期が下るにつれて減少傾向にある一方で、尾張産は中野編年５～６a型式（渥美湖西のⅢ－１～Ⅲ－２期併行）のものが出土しており、６ａ型式期の方が多い。渥美湖西産を主体的に入手しながら、一部を東遠江・尾張産で賄っていたことが判明し、13世紀の前半を境に渥美湖西以外の入手先を東遠江から尾張へと変化させた可能性があることが判明する。

山茶碗は平安時代末～鎌倉時代の、おおむね12～13世紀代は安定的に出土しており、灰釉陶器の段階とも出土数は大きな変化はなく、平安時代から継続して集落が営まれていた可能性が高いことがわかる。したがって、前節でも報告したが、北垣遺跡は古墳時代後期後半以降山茶碗段階まで継続的に集落が営まれていたことが判明する。

瀬戸美濃系施釉陶器（古瀬戸段階）　山茶碗は一定量出土していたものの、古瀬戸段階には、極端に減少する。山茶碗と併行する古瀬戸前期段階（13世紀）や、中期段階（14世紀前半～中頃）のものは出土しておらず、古瀬戸後期段階（14世紀後半～15世紀後半）で瀬戸美濃の天目茶碗（後Ⅱ期）、平碗（後Ⅲ期）、四耳壺、志戸呂の擂鉢（後Ⅳ古）などが出土しているものの、北垣遺跡約12,000㎡の調査で10片に満たない出土数であり、13世紀代までと比較すると極端に減少していることがわかる。

この出土陶磁器の数量からみれば、14世紀前半段階に北垣遺跡では大きな物質的（消費の）変化が起こっていた可能性が高く、陶磁器の数量が減少したからといって一概には断定できないものの、古墳時代後期（６世紀後半）から継続していた集落が衰退した可能性が高い。この時期に遺物量が少なくなる傾向は、隣接する中屋敷遺跡でも確認できることから、この地域での大きな社会の変化があった可能性がある。

瀬戸美濃系施釉陶器（大窯段階）　15世紀末～16世紀代では、出土数が若干増加し、16世紀後半は、後述するかわらけを中心として、瀬戸美濃や初山などが出土している。陶器では瀬戸美濃の天目茶碗、丸皿、擂鉢、初山の丸皿、擂鉢などであり、器種も少なく、壺瓶類などの出土はない。

第24表　北垣遺跡出土中世土器・陶器の器種組成表・分類一覧表

器種組成表

項目	破片数	個体数
山茶碗類	261	95
山茶碗	191	91
小皿	62	0
小碗	7	3
その他	1	1
土師質土器類	22＋	22＋
かわらけ	17＋	17＋
鍋類	5	5
その他		
常滑産	237	23
甕	233	19
鉢	4	4
その他		
渥美・湖西産	32	7
甕(壺)	25	9
鉢	7	6
その他		
瀬戸・美濃産	28	10＋
天目茶碗	5	5
碗類	1	1
皿類	2	2
卸皿類		
擂鉢	19	1＋
壺・瓶類	1	1
仏具類		
その他		
不明		
貿易陶磁	9	9
青磁		
碗類	5	5
皿類		
盤類		
その他		
白磁		
碗類	1	1
皿類	3	3
その他		
志戸呂窯	1	1
天目茶碗		
碗類		
皿類		
盤類		
擂鉢	1	1
壺・瓶類		
仏具類		
その他		
初山窯	2	2
皿類	1	1
擂鉢	1	1
合計	592＋	169＋
調査面積(㎡)	12,200	12,200
㎡あたり点数	0.05	0.01

貿易陶磁分類一覧

器種名		分類		年代	破片数	備考
青磁	碗類	龍泉窯系	A1類	12C後～13C前葉	1	
			B1類	13C中～14C前	2	
			B4類	15C前	1	
			E類	15C後～16C前	1	D2か
白磁	皿類		碗	不明	1	
			皿	不明	3	
合計					9	

山茶碗類分類一覧

	湖西・渥美系								
	Ⅰ期		Ⅱ期		Ⅲ－1期		Ⅲ－2期		破片
	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	
山茶碗(無台碗含)	7	21	5	13	3	23	21	23	52
小碗			2				1		58
小皿					1	1	2	1	1
托		1							
合計	7	22	7	13	4	24	24	24	111
産地別破片数	236								
割合	90%								

	東遠江系										
	Ⅰ期		Ⅱ期		Ⅲ－1期		Ⅲ－2期		Ⅲ－3期		破片
	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	
山茶碗		2	1	1	1						10
小碗	1										
小皿		1									
合計	1	3	1	1	1						10
産地別破片数	17										
割合	7%										

	尾張系(知多・常滑)									合計	
	3型式		4型式		5型式		6a型式		破片	破片	個体
	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体			
山茶碗						1		7		100	91
小碗										62	0
小皿										4	3
托										0	1
合計						1		7		166	95
産地別破片数	8									261	
割合	3%									100%	

土師質土器類分類一覧

器種	かわらけ		伊勢鍋		内耳鍋(く字型)		羽釜	
破片/個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体
数量	0	17	0	0	5	4	0	1

※かわらけは実測個体数のみ

※１　山茶碗以外の遺物の分類及び年代観は菊川町教育委員会『横地城総合調査報告書資料編』2000による。
※２　山茶碗類分類一覧表中の時期区分は湖西・渥美及び東遠江製品は松井氏編年(松井1993)、尾張(知多)製品は中野氏編年(中野1994)による。また、Ⅰ～Ⅱ期のように複数時期でしか識別できなかったものは案分した。

第25表　北垣遺跡出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成

瀬戸美濃

器種名		古瀬戸後期					古瀬戸計	後Ⅳ期～大窯	大窯製品								大窯計	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
天目	天目茶碗		1				1	0	1						1		4	5
									2									
碗類	灰釉平碗			1			1	0									0	1
皿類	灰釉丸皿						0	0	1				1				2	2
鉢類	擂鉢						0	3	1				1				16	19
									1				1					
									12									
壺類	灰釉四耳壺	1					1	0									0	1
合計			1	1			3	3	1				1		1		22	28
		1							3				2					
									14									

志戸呂

器種名		古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品								大窯計	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
擂鉢	擂鉢				1		1	0									0	1
合計					1		1	0									0	1

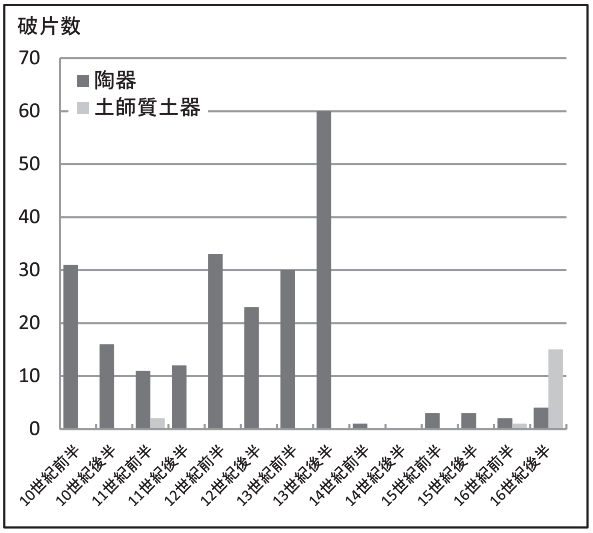
初山

器種名		古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品								大窯計	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
皿類	丸皿						0	0						1			1	1
擂鉢	擂鉢						0	0						1			1	1
合計							0	0						2			2	2

常滑　常滑は甕と鉢が出土しているが、大部分が甕の破片である。口縁部まで残存する個体が少ないため時期を特定することは難しいが、常滑６a型式（13世紀後半）のものが多く、３型式・６ｂ型式、９・10型式が若干出土している。山茶碗と同時期のものが多く、中世陶器が少ない14・15世紀のものは確認できない。この点からも14・15世紀は恒常的に集落が営まれた可能性は低いと想定する。

貿易陶磁　貿易陶磁も数量は少ない。青磁と白磁が出土しており、12世紀後半から13世紀後半～14世紀前半の青磁が３点とやや多く、15世紀前半の青磁、15世紀後半～16世紀前半と推定する青磁各１点が出土している。白磁については時期を特定できない。

かわらけ　かわらけは小片で多数が出土しているが、時期を特定できないことから正確な傾向を示すことは難しいが、16世紀前半以降確実に出土し、16世紀後半段階は中世墓の増加と軌を一にして急激に増加していることがわかる。出土した一石五輪塔や宝篋印塔が16世紀代のもののみであることからもかわらけは基本的に中世墓に伴っていた可能性が高い。



第174図　北垣遺跡出土中世土器・陶磁器の時期別出土数

土師質鍋　土師質鍋については、胴部破片などの場合、古墳時代後期～平安時代の土師器甕と区別が難しいことから正確な数量を把握することは難しいが、口縁部だけを取り上げても数量は多くはなく、土師器甕とした破片の中にそれほど多くの個体が存在しているとはいえない。土師質鍋のうち近世（江戸時代）前期～中期に位置づけられる個体を除くと、中世段階まで遡るのは、16世紀後半の内耳鍋のみであり、

非常に少ない。清郷甕が11世紀頃に位置づけられることから12世紀～16世紀前半までの土師質土器は非常に少なく、墓域となっていたことと関連してか、煮炊きをあまり行わないような遺跡であった可能性が想定できる。

（２）中屋敷遺跡との関係（第175～177図）

中屋敷遺跡の様相　中屋敷遺跡は、第175図に示したような土器・陶磁器の出土傾向がある。

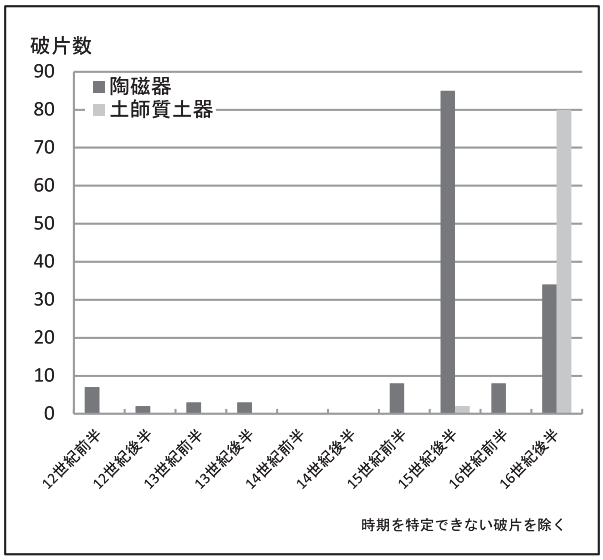
中屋敷遺跡では10世紀後半段階に遺物が出土するようになり、以後13世紀後半まで量は少ないながらも灰釉陶器と山茶碗が出土している（中屋敷中世Ⅰ段階）。14世紀に位置づけられる遺物はなく、15世紀前半から再び遺物が出土するようになり、この後近世まで継続して遺物が出土する（中屋敷中世Ⅱ段階）。ただし、遺構の特徴から中世から近世に移行するにあたり、墓域から集落へ変化した可能性を想定した（大谷2011）。

北垣遺跡との比較　両遺跡ともに14世紀の遺物は極端に少なく、この時期は円田・草ヶ谷地域の丘陵上では人の活動が行われていなかった可能性がある。

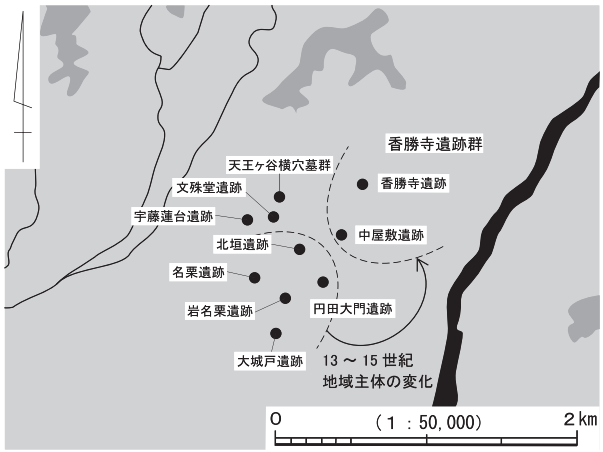
北垣遺跡と中屋敷遺跡を比較すると、山茶碗段階までは北垣遺跡の陶器の出土数が圧倒的に多い一方で、北垣遺跡の土器・陶器の出土量が少ない15～16世紀に中屋敷遺跡では出土数が多い。遺跡の盛衰としては好対照な遺跡として把握できる。

中世における地域構造の変化（第176・177図）　中屋敷遺跡の評価において想定したように、中屋敷遺跡は香勝寺遺跡群として武藤氏との関係が深い遺跡と考えられる（大谷2011）ことから、15世紀以降の武藤氏の居住地を中心とした地域の再編成が起こり、北垣遺跡は鎌倉時代の集落から墓地に変化した可能性がある。この時期に位置づけることができる建物が少ないことからもそのことを実証しているといえる。

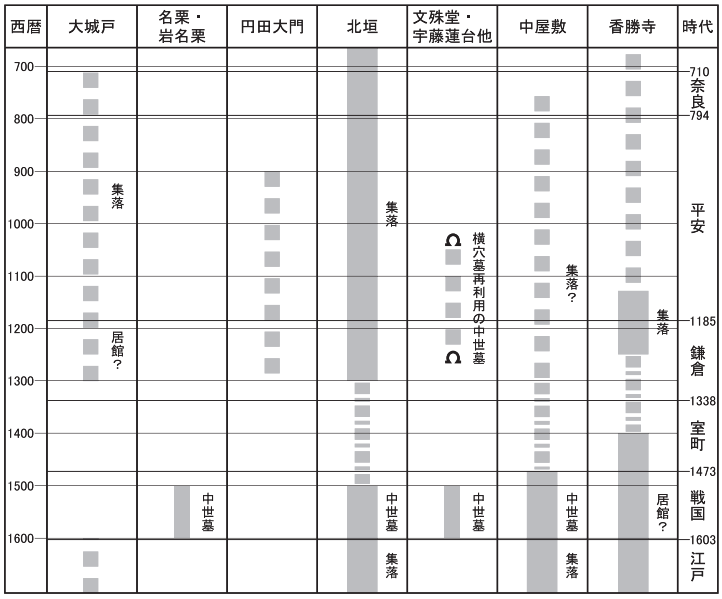
上述したように、円田地区にあった



第175図　中屋敷遺跡出土中世土器・陶磁器の時期別出土数



第176図　北垣遺跡周辺の中世の遺跡分布図



第177図　北垣遺跡周辺の遺跡の盛衰（古墳時代終末期～中世）

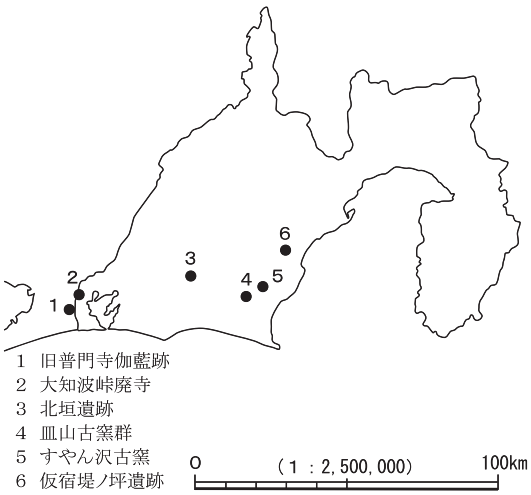
大城戸遺跡・北垣遺跡など古墳時代から続く集落が衰退し、草ヶ谷地区の中屋敷遺跡を含む香勝寺遺跡群を中心とする地域内の集落などの再編が行われた可能性がある。大城戸遺跡や香勝寺遺跡などの本格的な調査を俟って評価を行う必要があるが、大城戸遺跡は、小国神社（神領と領民）の実質的支配者であった（深養父）清原氏の居館があったと推定される（森町史編さん室1999-38頁）とともに、山名荘の領主山名七郎（粟倉明神神主家）がいたと伝えられる（森町史編さん室1999-42・43頁）ことから、山名氏との関係が想定され、香勝寺遺跡群は武藤氏（室町幕府奉公衆）との関連が想定されることから、清原氏や山名氏から武藤氏へというこの地域の支配層の変化を反映している可能性がある。今後の検討課題である。

（３）托からみた北垣遺跡の性格（第178・179図，第26表）

北垣遺跡では「突帯付碗」、「托付碗」、「托」などと呼称される陶器が出土した。報告では「托」として記述したが、この特徴的な遺物についてまとめておきたい。

類例　岩木智絵氏の集成（岩木2005）を基に、静岡県内および近接する愛知県豊橋市での事例を収集すると、県内で５遺跡、愛知県豊橋市で１遺跡の６遺跡で確認できる。このうち愛知県豊橋市の普門寺伽藍跡と湖西市大知波峠廃寺は、湖西連峰に営まれた関連する山林寺院であることから一連の遺跡としてとらえることができる。この地域以外では近接する複数の遺跡からは確認できない。

分類　灰釉陶器段階の大知波峠廃寺出土遺物では、台の上に托が載せられた状態のもの（ａ類）、台付皿に凸帯が付くもの（ｂ類）、碗に突帯を巡らせたもの（ｃ類）がある。一方、山茶碗段階になると、仮宿堤ノ坪遺跡、皿山古窯群、普門寺伽藍跡の事例をみると、前２者の形態は確認できず、後者（ｃ類）に限定された可能性が高い。この傾向からみれば、北垣遺跡の事例は仮宿堤ノ坪遺跡出土例のようなｃ類であった可能性が高い。



第178図　静岡県における托出土遺跡分布図

用途　今回出土したような托（特殊な碗）は、密教系仏具のうち「六器」と呼ばれるもので、本来は金属器であったものが緑釉陶器や灰釉陶器へ転写され、さらに山茶碗へと引き継がれた可能性がある（岩木2005，鋤柄2002）。

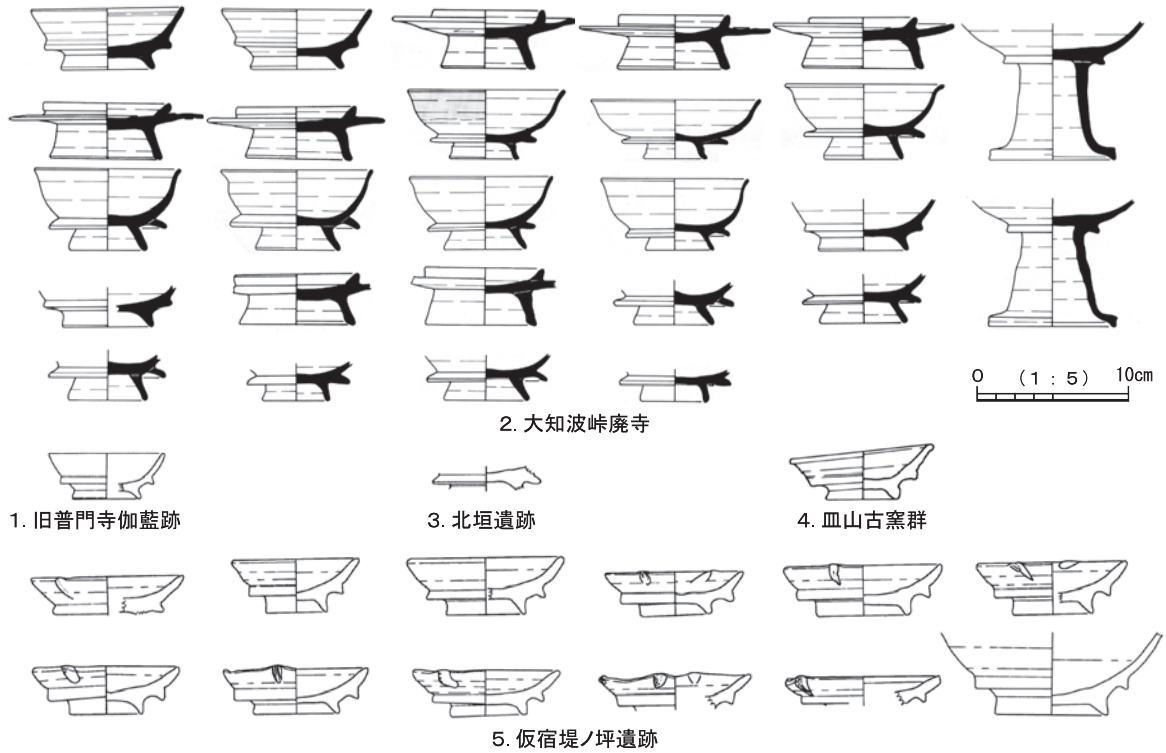
器台あるいは托の上に碗が置かれた状態のものが、退化していくことが如実に表れている可能性が高い。

遺跡の性格　皿山古窯群、すやん沢古窯群については、窯業遺跡であり、この後消費地に向けて供給され、前者は菊川流域の遺跡に、後者は主に志太平野の遺跡へ供給された可能性が高い。

大知波峠廃寺・普門寺伽藍跡は古代から中世の山林寺院跡である。

第26図　静岡県の托出土遺跡一覧表（大知波峠廃寺関連の愛知県普門寺跡を含む）

遺跡名	所在地	性格	種別	点数	産地	種類	時期	備考	文献
普門寺跡	愛知県豊橋市	寺院	山茶碗	1	猿投	托	10世紀後半	伽藍跡採集	湖西市2002
大知波峠廃寺	静岡県湖西市	寺院	灰釉陶器			托・台付托	10･11世紀		湖西市1997
北垣遺跡	静岡県森町	集落	山茶碗	1	渥美湖西	托	12世紀前半？	３区包含層	本書
皿山古窯群	静岡県菊川市	窯業遺跡	山茶碗	1	皿山	托			菊川町2003
すやん沢古窯	静岡県島田市	窯業遺跡	山茶碗	1	金谷	托			岩木2005
仮宿堤ノ坪遺跡	静岡県藤枝市	集落	山茶碗	18	東遠系	托･輪花小托･小托		漆塗仏(神)像など出土	藤枝市2005



第179図　静岡県内出土の托（大知波峠関連遺跡である愛知県普門寺伽藍跡出土資料を含む）

仮宿堤ノ坪遺跡では、Ｃ地区Pit189から出土しており、碗・托を重ね、その上に小碗を伏せておいた状態で横になった状態で出土している。当遺跡からは漆塗仏（神）像が出土しており、集落内にある「日常的な祭祀に伴う簡単な仏堂に相当するような施設か宗教者の居宅」が想定されている。

北垣遺跡については残念ながら包含層出土であり、この他、同時期の祭祀遺物も確認できない。皿山古窯群以外の托出土遺跡が、寺院あるいは祭祀関係と考えられることから、北垣遺跡にも小規模な仏堂が存在していた可能性が高い。

2　銅錘について（第180図，第27表）

北垣遺跡では、遺構外から銅錘が出土した。遺構に伴わないことから時期を特定することが難しいが、他の類例から時期的な位置づけを考えておきたい。

用途　北垣遺跡の銅錘は、紐を伴うことから、棹秤の錘であると断定できる（宮本1994）。

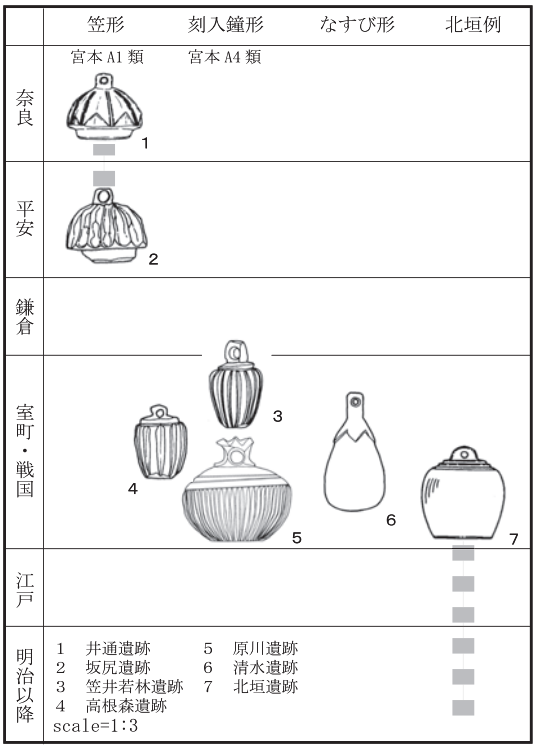
類例　まずは、静岡県内から出土した銅錘を集成・提示する（第27表）とともに、それらと比較しておきたい（第180図）。

北垣遺跡を除く静岡県内出土の銅錘７例は、笠形２例（井通遺跡・坂尻遺跡）、刻入鐘形４例（高根

第27表　静岡県内出土の銅錘資料

遺跡名	所在地	性格	遺構	材質	形態	鈕	宮本分類	重量(g)	時期	文献
井通遺跡	浜松市	官衙	Ⅳ区大溝中層	銅	笠形	環状	A1	70.3		静岡埋文研2007b
笠井若林遺跡	浜松市	集落	SH1−P3	銅	刻入鐘形	環状	A4	41.6		静岡埋文研2002
北垣遺跡	森町	集落	（遺構外）	銅	鐘形	環状	A4orB？	144.569	不明	本書
坂尻遺跡	袋井市	官衙		銅	笠形	環状	A1	82	平安	静岡県教委2003
原川遺跡	掛川市	集落		銅	刻入鐘形	山形	A4	31.1		静岡埋文研1990
清水遺跡	掛川市	集落	4−2区SP781	銅	なすび形	環状	C1類似	73.07	15−16世紀	静岡埋文研1996
高根森遺跡	島田市	集落	2区SP39	銅	刻入鐘形	環状	A4	35.386	16世紀	静岡埋文研2006
山廻遺跡	藤枝市	集落		銅	刻入鐘形		A4	(69.6)		静岡埋文研1990

括弧内は残存値
宮本分類＝宮本佐知子氏による分類（宮本1994）による



※宮本 1994 および各報告書を参考に作成

第180図　静岡県内出土銅錘編年図

森遺跡・笠井若林遺跡・原川遺跡・山廻遺跡）、なすび形１例（清水遺跡）に分類することができる。北垣遺跡は無刻鐘形に区分することができる。

分類と時期　宮本佐知子氏は国内の銅錘・分銅の集成に基づいた分類を行い、銅錘をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５種類に区分し、さらにＡ類は４類型に、Ｃ類は２類型に細分した（宮本1994）。この分類に基づけば、笠形がＡ１類（本体は半球形で、上部に釣り下げるための穴のあいた突出部を持ち、下端に円形の平らな突出部があるもの）、刻入鐘形がＡ４類（本体は球形かやや縦長で、その上辺には横方向の数段の稜があり、その下辺には縦方向の数本から10本以上の稜があり、本体の上には釣り下げるための穴のあいた突出部をもつもの）に位置づけることができる。なすび形は宮本氏の集成段階では国内で確認できないものであり、分銅ではなく別の用途も考慮しておく必要がある。Ａ１類は律令期のもので奈良時代を中心に平安時代頃まで、Ａ４類は中世後期～末を中心に位置づけることができる。

静岡県内では確認されていないＢ類（中国で束腰形と呼ばれている縦長の本体で、途中にくびれ『束腰』部があり、くびれの上は球形で、くびれの下は裾広がりの台状になるもの）は奈良時代から継続的に中世末まで利用されるが、大部分がＡ４類と同時期に位置づけられる。この他Ｄ類（直方体の上部に釣り下げるための穴のあいた突出部をもつもの）は中世末～江戸時代に利用されたものである。

なお、江戸時代の棹秤は、一定の基準を設けるため東国は守随家、西国は神家が棹秤の製造、検定権をもっていた。また、17世紀中頃から統制が厳しくなっており、他の形態のものは使用できなくなった可能性が高く、宮本Ｄ類が江戸時代を通じて一般的な棹秤の錘であった可能性が高い（宮本1994）。

北垣遺跡例の位置づけ　では、北垣遺跡例はどのような位置づけができるのであろうか？

北垣遺跡の無刻鐘形は形態的にみれば、原川遺跡出土例（Ａ４類）に近く、全国的にみた場合には、青森県の浪岡城出土例（Ａ４類）が近いが、刻みがないことが相違点である。一方で刻みがないもので同形態のものを探すと、宮本分類Ｂ類で、台付無刻鐘形として分類できるものであり、青森県浪岡城出土例や滋賀県桜内遺跡出土の銅錘の台部を取り除いた形状に類似する。形態が類似する銅錘は鎌倉時代から中世末に位置づけられるものである。一方で江戸時代には直方体の銅錘が用いられていることから判断して、完全に形態は一致しないものの、北垣遺跡の銅錘は形状が一致する浪岡城例を参考に、中世後期～末頃に位置づけておきたい（ただし、江戸時代以降の可能性を排除できないため、第180図には破線で江戸時代以降に下る可能性を示している）。

銅錘出土遺跡の様相　静岡県内で銅錘が出土した遺跡は、井通遺跡、坂尻遺跡が郡衙関連遺跡、原川遺跡、清水遺跡は東海道関連の遺跡、笠井若林遺跡、高根森遺跡や山廻遺跡は交通の要衝に位置する遺跡である。北垣遺跡についても、豊岡方面から一宮川を越え太田川へ至る道が丘陵地を超えたところに位置しており、園田丘陵の裾を通り掛川方面へ抜けていく要衝に位置していることから、やはり流通の拠点となるような性格を有する遺跡であった可能性がある。

３　墓域

北垣遺跡は中世後期（戦国時代）において、土壙墓が多く検出されていることから、墓域として機能していたと考えられる。北垣遺跡周辺の遺跡においても、中世の土壙墓や石塔が出土しており、香勝寺の本堂下では武藤氏に関連すると考えられる石塔が多く出土している。また、円田丘陵では林地蔵山や文殊堂山において石塔が集積されていた記録がある（足立2008）ことから、中世後期は、北垣遺跡を含む一帯が広く墓域として利用されていたと考えられる。ここでは、北垣遺跡の土壙墓と出土遺物から、墓域の様相を整理し、周辺の遺跡との比較によって北垣遺跡の性格について考察していきたい。

（１）土壙墓について（第181～183図）

北垣遺跡で検出された墓はすべて土壙墓である。その中でも、火葬と土葬の２種類の埋葬方法が見られる。副葬品に関しては、銭貨とかわらけがセットになっているものや、銭貨のみ、もしくは副葬品のないものまで様々である。また、遺構の主軸に関しては北方向を基本としているが、一部東西方向を主軸としているものも確認できる。土壙墓の配置は、ある程度間隔の開くものと、密集するものの差異が確認できる。こうした差異が確認できることから、埋葬方法、平面形、副葬品、土壙の主軸方向、配置について整理し、墓域の様相について考察していきたい。

埋葬方法　埋葬方法に関しては、火葬と土葬の２種類が選択されている。中世の土壙墓は全部で26基確認されており、その中で、火葬墓はSK06・07・09・21～23・30・31・34の９基であり、それ以外の土壙墓はすべて土葬である。火葬墓の中でも、SK06は、内部で焼土が検出されなかったことから、別の場所で火葬し、収骨して埋葬する火葬骨埋葬が行われたと考えられる。それ以外の火葬墓は炭化物が出土し、焼土が検出されたため、荼毘墓であると考えられる。火葬墓に関しては、内部構造から石敷のあるもの（SK06・07・21・22・31）とないもの（SK09・23・30・34）に区分できる。また、土葬墓ではSK50のみで石敷が確認されており、他の土葬墓とは異なる。石敷の有無に関しては、規模や副葬品の内容からはその差異は明確ではない。

SK04・09では鉄釘が出土しており、木棺を使用して埋葬された可能性が高い。これらの遺構は、SK04が土葬墓で、SK09が火葬墓であるため、火葬墓と土葬墓の両方で木棺が使用されていたと考えられる。なお、この２つの遺構は副葬品に関しては、ともにかわらけと銅銭が出土しており、その内容に明確な差は見られない。

平面形　土壙墓の平面形に関しては、火葬墓は方形、不整形の隅丸方形の２種類があり、土葬墓に関しては、長方形、隅丸長方形、不整形な隅丸長方形、楕円形に近いものなど様々な形状のものが見られる。その中で、SK02は楕円形の土壙の上下に石詰の土坑が掘られており、他の土壙墓と異なる。

火葬と土葬の違いを踏まえた上で、土壙墓の平面形を比較してみると、第183図－Aで見られるSK06・07・09の火葬墓は隅丸方形か不整形な隅丸方形で、Bで見られるSK21～23・30・31は長方形に近い平面形のものに限られ、後者の方がより規格性の高い土壙墓であった可能性がある。

副葬品　副葬品に関しては、銭貨のみ、かわらけのみ、もしくは銭貨とかわらけがセットのものがある。銭貨のみが出土した土壙墓は、火葬墓ではSK21・22・30・34で、土葬墓ではSK02・03・11・14である。この中で、SK11では永樂通寶が６枚出土しており、撰銭されていたことが分かる。

かわらけのみが出土した土壙墓はSK12で、銭貨とかわらけがセットになって出土した土壙墓は、SK04・09である。これらの遺構は、かわらけからSK09・12は16世紀後半に、SK04は16世紀前半にそれぞれ位置づけられる。また、SK09では、かわらけが土壙内の北側と中央付近でそれぞれ出土している。宇藤蓮台遺跡のSF03 ではこれと同じようなかわらけの出土状況を示している。SF03で出土した人骨は、一部移動した形跡が認められるが、頭骨、下顎骨、上位頸椎は原位置であるとされる（静岡埋文研

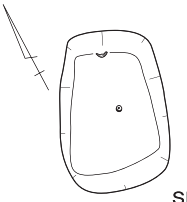
北垣遺跡の火葬墓（遺構１：40・遺物１：４）

SK21

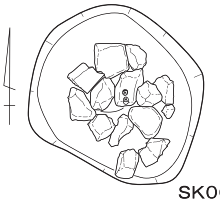
328 ～ 330

SK31

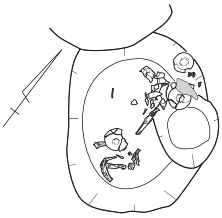
331・332


SK30

333・334


SK06

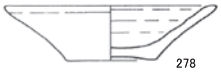
268 ～ 273


SK09

275

274　280 ～ 282

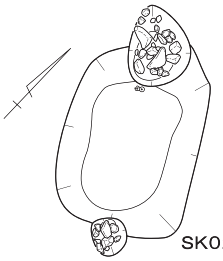
276


278

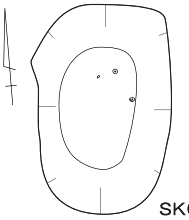
277

279

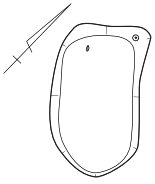
北垣遺跡の土葬墓（遺構１：40・遺物１：４）


SK02

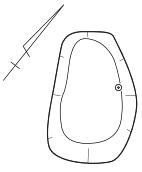
283 ～ 285


SK03

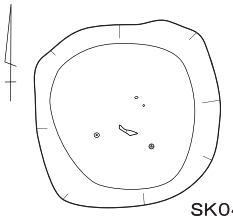
286 ～ 290


SK11

316 ～ 323


SK14

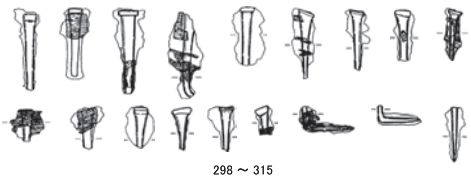
325 ～ 327

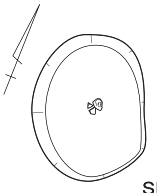

SK04

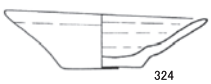
292 ～ 295

296

297

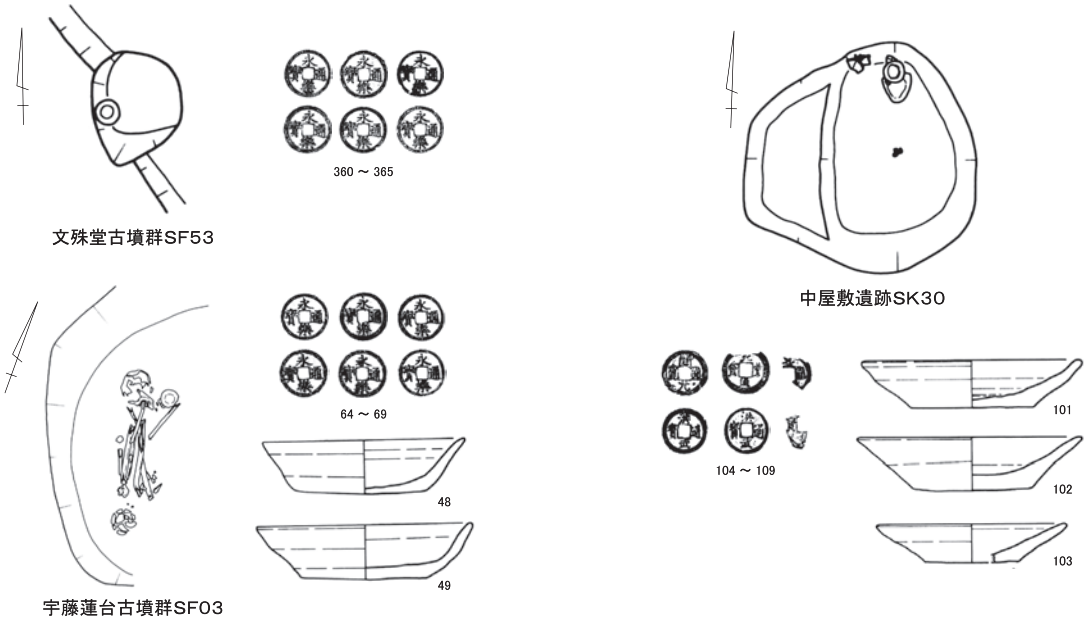

298 ～ 315


SK12


324

第181図　主な土壙墓と副葬品

北垣遺跡周辺遺跡の埋葬施設（遺構１：40・遺物１：４）



第182図　北垣遺跡周辺の中世墓と副葬品

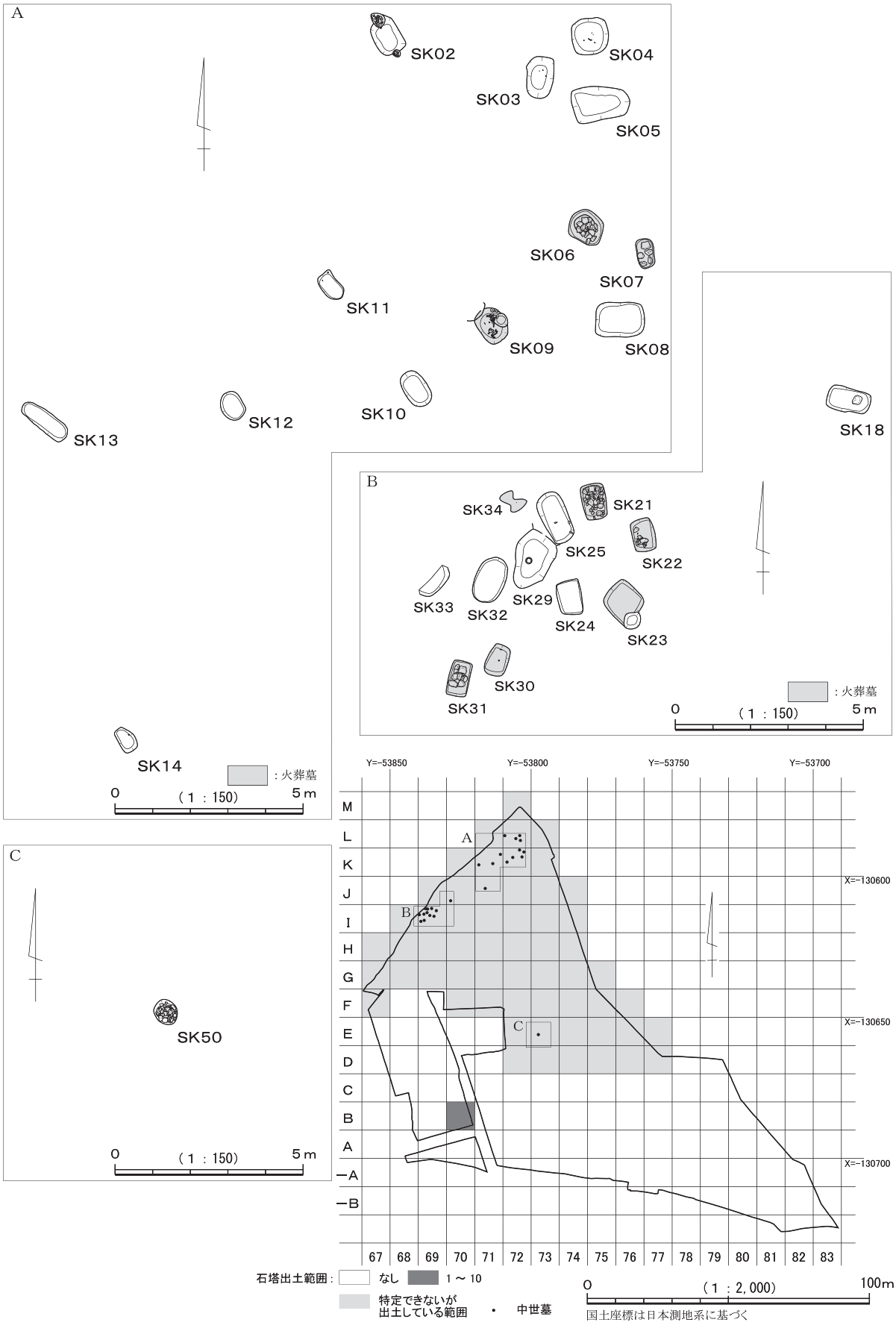
2008)。そのため、かわらけは横臥屈葬の状態で埋葬された被葬者の前後に置かれたと考えられる。北垣遺跡のSK09も、遺物の出土状況が類似するため、同様の埋葬方法が採られたと考えられる。

副葬品の出土した土壙墓は、火葬墓では９基中７基が該当し、土葬墓では17基中６基が該当する。火葬墓の方が副葬品を伴う割合が高い。土壙墓に見られる火葬・土葬の差は階層差を表す可能性が考えられている（足立1997）ことから、火葬墓の被葬者は土壙墓の被葬者より上位に位置付けられる可能性がある。ただし、副葬品はかわらけ・銅銭以外にないため、どの程度の階層差があるのかどうかは判然としない。

主軸方向　土壙墓の主軸方向は、北西を向くもの（SK02・06・07・09～14・21～25・50）と北東を向くもの（SK29～33）がある。また、SK03・04に見られるような真北を主軸とするものと、SK05・08・18のように東西方向を主軸とするものなどが確認できる。この差異は、埋葬時期の違いと想定できる可能性がある。

中世の墓は、被葬者を北枕西向に埋葬するのが通常であるが、北垣遺跡では、当時の埋葬状態を示すような人骨が出土していないことから、北枕西向に埋葬されていたかどうかは不明である。周辺の遺跡では宇藤蓮台遺跡において、SF03で北枕西向の状態で人骨が出土しており、この土壙墓に伴ってかわらけと永樂通寶が出土していることから（第182図)、16世紀代の遺構とされている（静岡埋文研2008)。この埋葬方法から、北垣遺跡でも同じように北枕西向の埋葬方法が取られていた可能性は高いと考えられる。北垣遺跡では、多くの遺構がおおよそ北を主軸にして構築されたことから、当時の埋葬方法に則ったものであると想定できる。一方でSK05・08に関しては、主軸方向が異なるため、違う埋葬方法が取られたか、あるいは時期が異なる遺構の可能性も考えられるが、出土遺物がないため判断できない。

墓の配置　第183図のA～Cで示したように、土壙墓はその立地によって、およそ３つのグループに分けられる。Aは調査区の北側にあり、やや間隔を開けて土壙墓が構築されている。この中でも、SK02・06・09～14に関しては、主軸がほぼ同じ方向を向いていることから、同じような意図で構築された土壙であるか、構築時期の近い遺構の可能性が考えられる。また、SK03、04といった北方向に主軸の向く遺構や、SK05・08といった東西方向に主軸のある遺構もAのグループに含まれることから、このグルー



第183図　土壙墓の配置

プ内でも時期差、もしくは系統差があった可能性が考えられる。Bは調査区の北西側にあり、斜面の裾部に密集して構築されている。その中でもSK21～25は北西方向を主軸としており、SK29～34は、北東方向を主軸にしている。Cは調査区の中央部分に位置しており、他の土壙墓群から離れた場所に位置している。

これらのグループの中で、土葬墓と火葬墓の配置を見てみると、火葬墓に関しては、SK06・07・09とSK21～23・30・31である程度のまとまりを示しているものの、土葬墓と混在しており、火葬墓が土葬墓に比べ、特別な位置を占めているということは窺えない。むしろ、土葬墓と火葬墓が混在する状況がこの遺跡における墓域の様相である可能性が考えられる。

墓域の様相　以上のように、土壙墓の主軸方向、平面形、副葬品について整理した。副葬品に関しては、その内容からは明確な違いは読み取れない。一方、土壙墓と配置によるグループ分けの中で、主軸方向の違いによって、さらに分類が可能であると考える（第28表）。

まずAの中ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ群に分けられる。Ⅰ群はSK03・04に見られるように主軸方向が北を向いている遺構に対して設定した。この中でも、SK04は出土したかわらけから16世紀前半に位置付けられる。また、SK03は、SK04と位置的にも近くにあり、主軸方向も同じである事から、同様の性格の遺構か、もしくは同時期の遺構の可能性が考えられる。Ⅱ群は、SK05・08がこの項目にあたる。このグループは遺構の主軸が、東西方向を向いているものについて設定した。これらの遺構は、時期を確定できる遺物が出土していないため、詳細な時期は確定できないが、時期の確定できるSK04・09・12とは、主軸の方向が異なり、遺構の規模もやや大きいため、構築時期の異なる遺構である可能性も考えられる。Ⅲ群は、SK02・06・09・10～14のように主軸方向が北西を向いて、やや間隔の開いた配置を見せるグループに対して設定した。これらの中では、SK09・12は出土したかわらけから16世紀後半の遺構と考えられる。また、SK06・10～13は、位置的にもSK09・12と近く、規模や平面形もほぼ同じであることから、構築時期も近い遺構である可能性が考えられる。

次にBに関してはⅣ・Ⅴ・Ⅵ群に分けられる。Ⅳ群は、SK21～25・34が該当する。これらの遺構は、Ⅲ群と同様に北西方向に主軸が向けているが、密集して構築されている点で異なる。また、土壙墓の平面形は、Ⅲ群は隅丸長方形、不整形な隅丸方形の平面形が主体であるのに対し、Ⅳ群は長方形のものが主体であり、この点においても違いが見られる。ただし、時期を特定できる遺物が出土していないため、Ⅲ群とどのような関係にあるかは判然としない。Ⅴ群はSK29～33が該当する。主軸がⅢ群とⅣ群と異なって北東方向へ向き、Ⅳ群と同様に密集して構築されている。これらの遺構では、時期を推定できる遺物が出土していないため、明確な時期は確定できない。ただし、Ⅳ群のSK21・22とⅤ群のSK30、31は、遺構の平面形や、出土遺物などの内容等において、共通する点がある。このことから、Ⅳ群とⅤ群は時期の近い遺構群である可能性が考えられる。Ⅵ群はSK18である。主軸方向が東西方向に近い傾きを示しており、密集傾向のⅣ・Ⅴ群やAのグループとも離れているため、これらの土壙墓と構築時期が異なる可能性がある。

CはSK50のみで、Ⅶ群に分けられる。他の遺構と離れた場所にあり、出土遺物がないため、構築時期が同じであるかは明確ではない。土葬墓で石敷のある遺構は、SK50のみであるため、他の土壙墓と時期が異なる可能性が高い。

北垣遺跡で検出された中世の土壙墓について、遺構の主軸方向と位置によって分類を試みた。出土遺物が少なく、時期の特定できない土壙墓が多いが、Ⅰ群のSK04やⅢ群のSK09・12のように、16世紀前半と16世紀後半に位置づけられる土壙墓が、それほど離れていないことから、16世紀代前半～後半にかけて、ほぼ同じ場所に連続して墓が営まれていたと想定できる。また、SK09・12を含むⅢ群が最も数が多いことから、Ⅲ群が同時期の遺構である仮定が正しければ、16世紀後半が墓域の盛期であった可能

第28表　土壙墓の分類

		遺構名	主軸	埋葬方法	平面形	副葬品・出土遺物	石敷	遺構の時期
A	Ⅰ	SK03	北	土葬	不整形な隅丸長方形	銅銭５枚	無	
		SK04	北	土葬	隅丸方形	銅銭４枚、鉄釘18点、かわらけ２点	無	16世紀前半
	Ⅱ	SK05	西？	土葬	やや不整形な隅丸長方形		無	
		SK08	西？	土葬	隅丸長方形		無	
	Ⅲ	SK06	北西	火葬骨埋葬	やや不整形な隅丸方形	銅銭６枚（３枚ずつ重なって出土）	有	
		SK07	北西	火葬	隅丸長方形		有	
		SK09	北西	火葬	やや不整形な隅丸長方形	銅銭（４枚が被熱で癒着、小銅塊３点）、かわらけ５点、鉄釘３点	無	16世紀後半
		SK02	北西	土葬	長方形	銅銭３枚重なって出土	無	
		SK10	北西	土葬	隅丸長方形		無	
		SK11	北西	土葬	やや不整形な隅丸方形	銅銭６枚（永樂通寶のみ）	無	
		SK12	北西	土葬	やや不整形な隅丸方形	かわらけ１点	無	16世紀後半
		SK13	北西	土葬	やや不整形な隅丸方形		無	
		SK14	北西	土葬	やや不整形な隅丸長方形	銅銭３枚が重なった状態で出土	無	
B	Ⅳ	SK21	北西	火葬	長方形	銅銭（５枚以上。２枚以上癒着が２セット、１枚破片）	有	
		SK22	北西	火葬	長方形	銅銭（被熱でつぶれた状態）	有	
		SK23	北西	火葬	やや不整形な正方形		無	
		SK34	？	火葬	瓢形	銅銭２枚	無	
		SK24	北西	土葬	長方形		無	
		SK25	北西	土葬	隅丸長方形		無	
	Ⅴ	SK30	北東	火葬	長方形	銅銭６枚が重なった状態で出土	無	
		SK31	北東	火葬	長方形	銅銭４枚（３枚錆着）	有	
		SK32	北東	土葬	隅丸方形あるいは楕円形		無	
		SK33	北東	土葬	隅丸方形あるいは楕円形		無	
		SK29	北東	土葬	不整形		無	
	Ⅵ	SK18	西	土葬	やや不整形な隅丸長方形		無	
C	Ⅶ	SK50	北西	土葬	やや不整形な円形		有	

火葬骨埋葬　火葬骨

性が考えられる。

（２）石塔について（第184・185図）

北垣遺跡及び周辺遺跡出土の石塔　北垣遺跡では、表土中に含まれた状態、近世の井戸に転用された状態で一石五輪塔と宝篋印塔の部材が出土した。第４章第５節で述べたとおり、一石五輪塔は各段の掘り込みが深いものを16世紀前半に、掘り込みの浅いものを16世紀後半に位置づけられる。宝篋印塔は、屋蓋・塔身・基部が出土した。屋蓋は軒上が３段で、最上段は無文、隅飾りとの境界はあいまいなもので、各段の段差が少ないものある。隅飾りの比率が大きく、隅飾間は狭い。隅飾りは素文という特徴を持つ。基台に関しては、２段で、段は低く、各段が不明瞭なものが多い。これらは掛川市峯遺跡の出土例（第184図）と類似しており、同時期の遺物である可能性が高い。掛川市峯遺跡出土例は、墳墓窟内で宝篋印塔の一部とともに、非ロクロ成形かわらけが出土していることから、16世紀後半に位置づけられる（戸塚1995）。

第184図
掛川市峯遺跡出土の石塔

北垣遺跡以外でも、円田丘陵では石塔が出土しており、文殊堂遺跡では宝篋印塔の屋蓋、宇藤蓮台遺跡では宝篋印塔の相輪部、基台、および五輪塔の火輪が出土している。多くは、この墓域の被葬者の供養塔と考えられるものであり、16世紀代に位置づけられる。ただし、組合せ五輪塔の火輪に関しては、ホゾ穴が大きいことから16世紀以前の可能性がある。また、記年銘資料が少ないため、年代比定は難しいが、森町内の組合せ五輪塔が16世紀のものは少なく、多くが15世紀代と想定される（足立2008）。そのため、文殊堂の組合せ五輪塔は、同じく15世紀に位置づけられる可能性がある。円田丘陵では14～15世紀には墓に関する遺構は検出されていないが、この時期にも墓な

第185図　円田丘陵で出土した石塔

どの遺構が存在した可能性が想定できる。この他にも、文殊堂山では、丘陵の先端に石塔が残っていた記録があり、これらは文殊堂遺跡の中世墓と離れていることから、墓塔ではなく供養塔と考えられている（足立2008）。

なお、このような五輪塔や宝篋印塔が造営された要因としては、戦国時代は曹洞宗の民衆への布教が浸透しており、石塔の造立にはそのような庶民が多く関わっていたと考えられる（足立2008）。この想定に基づけば、北垣遺跡の火葬墓の存在や一石五輪塔の出土は、北垣遺跡が庶民の墓域であり、墓域の被葬者は曹洞宗に帰依していた集団である可能性が考えられる。

４　北垣遺跡と周辺の中世遺跡

（１）北垣遺跡周辺の概要（第186図）

北垣遺跡以外では、円田丘陵の宇藤蓮台遺跡と文殊堂遺跡でそれぞれ土壙墓が検出されている。また、北垣遺跡の北に位置する中屋敷遺跡においても土壙墓が１基検出されている。これらの遺構は16世紀代に位置づけられることから、北垣遺跡周辺においても北垣遺跡と同時期の墓が展開していたことが窺える。ここでは、北垣遺跡周辺の遺跡について整理した上で、北垣遺跡一帯の様相について考えたい。

円田丘陵　円田丘陵においては、宇藤蓮台遺跡と文殊堂遺跡で、それぞれ中世の土壙墓が検出されている。まず、宇藤蓮台遺跡に関しては、北垣遺跡の土壙墓の同時期の遺構として、SF03が確認されている（第182図）。この遺構ではかわらけと銅銭が出土した。出土したかわらけから、SF03は16世紀代

と考えられている。また、銅銭は永樂通寶が６枚出土しており、撰銭が行われたと考えられる。宇藤蓮台遺跡では、中世後期以外にも、平安時代の土壙墓（SF01）が検出されている。この土壙墓からは、山茶碗の碗と皿、および短刀が出土している。山茶碗により、平安時代末期（12世紀後半）の遺構と考えられる（静岡埋文研2008）。

次に、文殊堂遺跡では、16世紀代と考えられる土壙墓（SF53）が検出された（第182図）。この遺構ではかわらけと銅銭が出土した。副葬された銅銭は永樂通寶が６枚であることから、撰銭が行われたと考えられる。文殊堂遺跡ではこの他に、中世前期に位置づけられる土壙墓が３基確認されている。SF101では灰釉陶器が出土しており、10世紀後半頃の遺構とされる。SF76では手づくねで製作されたかわらけが出土しており、この遺物から鎌倉時代と考えられる。SF100は、かわらけ３点、刀と砥石が出土しており、SF76と同様鎌倉時代と考えられる（静岡埋文研2008）。

円田丘陵ではこの他に、天王ヶ谷横穴墓群において、古墳時代終末期の横穴墓を再利用した墓が３基確認されている。天王ヶ谷５号横穴墓では11世紀代と考えられる土師器杯が２点､天王ヶ谷47号墓では、11世紀前半の灰釉陶器碗３点・小碗１点、54号横穴墓では、13世紀に位置づけられる山茶碗１点と小皿３点が出土している（静岡県埋文センター2012）。

香勝寺遺跡　香勝寺遺跡は、古墳時代から近世の遺物が出土しており、長期に亘り人為が及んでいたと考えられる。この他に香勝寺遺跡では、12～13世紀の遺物が多く出土している。また香勝寺の周囲を廻っていた堀の可能性がある遺構も検出されている。このことから、香勝寺遺跡には武藤氏の居館があった可能性が想定される（森町教委2004）。また、香勝寺の本堂の下より16世紀代とされる宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔が出土しており、この周辺を拠点としていた武藤氏の供養塔であると考えられている（森町史編さん委1998）。

中屋敷遺跡　中屋敷遺跡では、土壙墓が１基（SK30）検出されている。この遺構ではかわらけ３点と銅銭６枚が出土しており、かわらけにより、16世紀後半の遺構と考えられる。

中屋敷遺跡では、出土した中世土器・陶磁器の時期別出土数をみると、10世紀後半～13世紀後半と15世紀前半～17世紀初頭の２つの時期に盛期を迎えている。これは香勝寺遺跡で検出された溝が掘られた時期と埋められた時期と同じであり、特に後者の時期においては、武藤用定が一宮荘代官職になった時期と合致していることから、武藤氏と中屋敷遺跡の関係が窺える（大谷2011）。

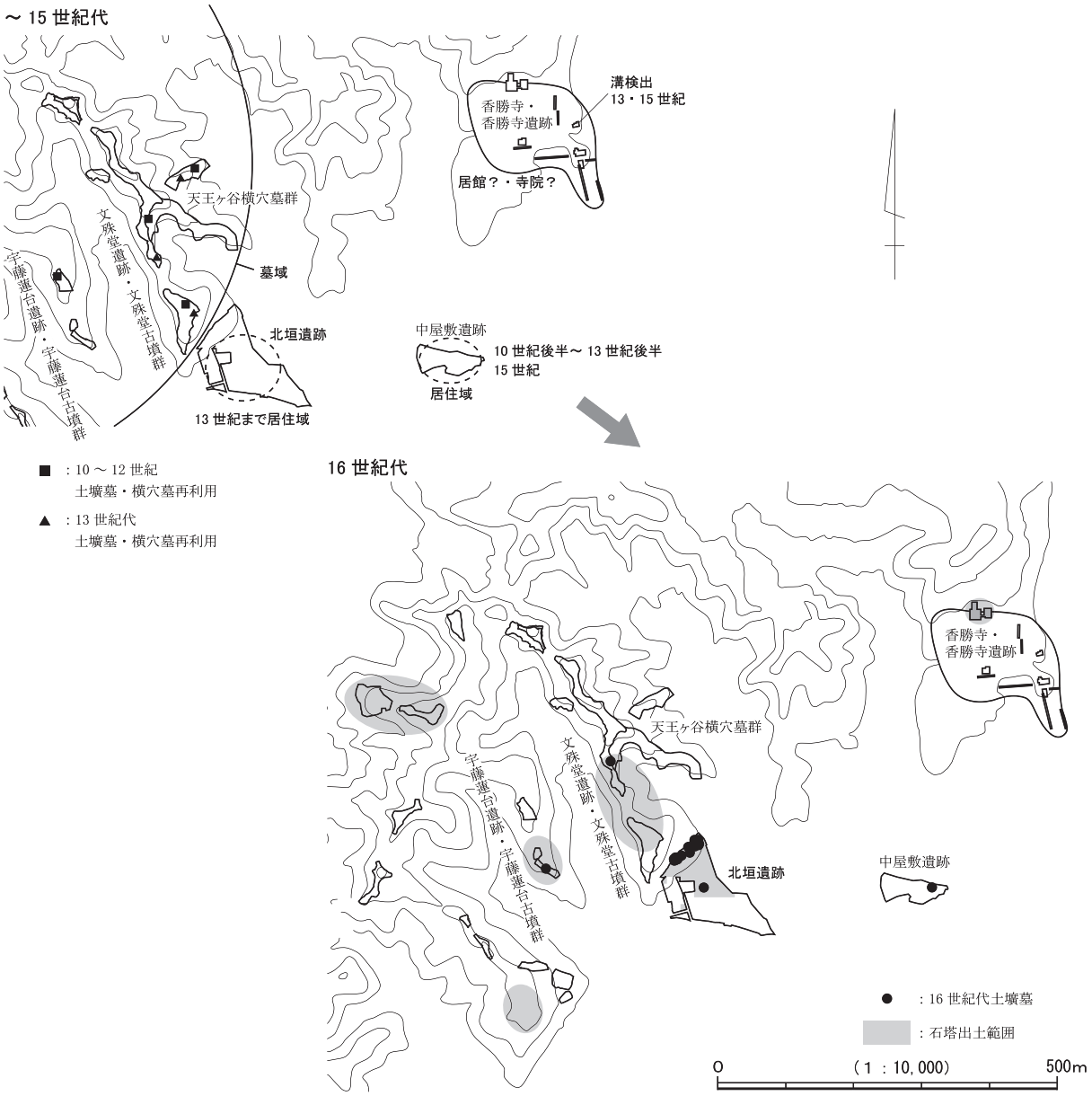
（２）北垣遺跡周辺の中世における時期的変遷

15世紀以前　第１項で述べたとおり、北垣遺跡では13世紀まで集落が存在するが、14世紀以降には廃絶する様相を示す。それに対して、中屋敷遺跡は15世紀以降に遺物の出土量が多く、二つの遺跡では消長に時期差があり、園田・草ヶ谷地区一帯の変遷の様子が窺える。

一方、丘陵上の文殊堂遺跡、宇藤蓮台遺跡、天王ヶ谷横穴墓群では、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、少ないながらも平安時代末期、鎌倉時代と考えられる土壙墓や古墳時代の横穴墓を再利用した墓が検出されており、中世前期も墓域が形成されていたと考えられる。その後、14世紀以降は墓などの遺構が検出されていないことから、北垣遺跡（居住域）の衰退と時を同じくして、丘陵上の墓域も衰退する可能性が考えられる。

16世紀以後　その後、北垣遺跡では16世紀前半～後半の土壙墓が検出されていることから、16世紀代は墓域として利用されるものと考えられる。また、16世紀後半と考えられる石塔の部材が多く出土していることから、16世紀後半が墓域の盛期と考えられる。

周辺の遺跡では、円田丘陵の文殊堂遺跡、宇藤蓮台遺跡において土壙墓が検出され、草ヶ谷地区においても中屋敷遺跡でも土壙墓が多く出土していることから、北垣遺跡と期を同じくして墓域が形成され



第186図　中世における北垣遺跡周辺の変遷図

ると考えられる。

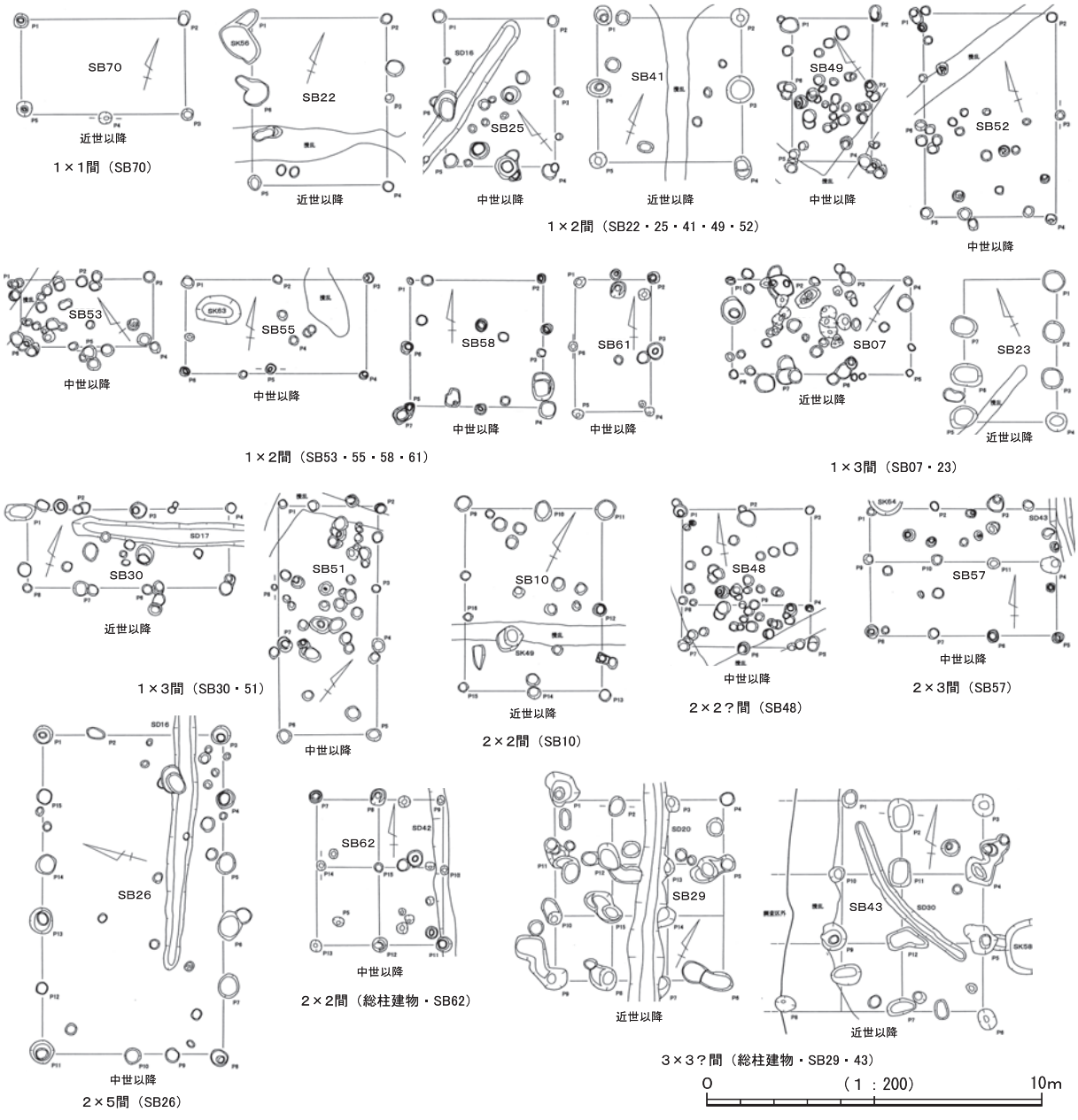
森町では16～17世紀に曹洞宗の寺院が多く建立されており、香勝寺（1545年開基）もそれらの寺院の一つである（足立2008）。円田丘陵では石塔の部材が多く出土していることと、周辺の遺跡でも土壙墓が検出されていることから、16世紀代の園田・草ヶ谷地区において、曹洞宗の布教が浸透していたことを示すものと考えられる。

第６節　近世の北垣遺跡

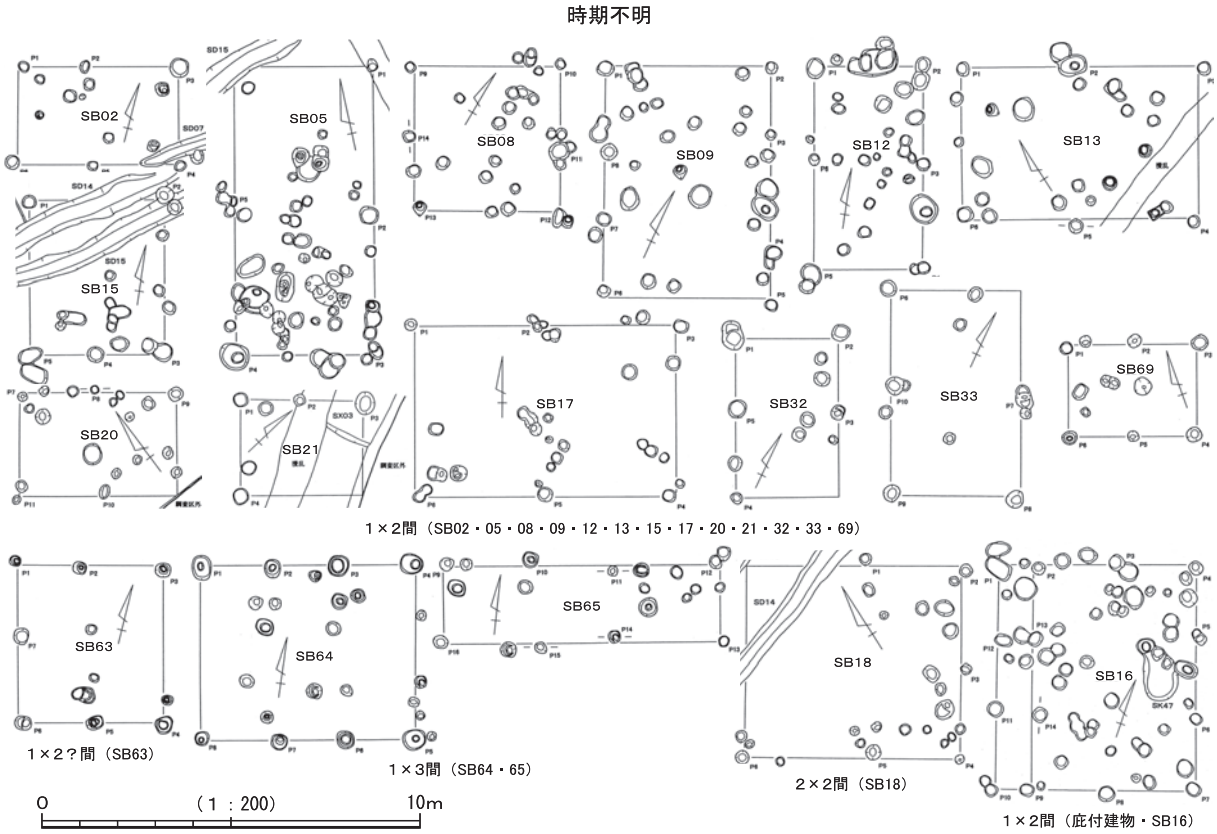
１　北垣遺跡の掘立柱建物・井戸・近世墓（第187～189図）

北垣遺跡の近世以降に位置づけられる掘立柱建物と時期不明の竪穴建物についてみておきたい。

間数と規模　柱穴から遺物が出土し近世以降（一部中世まで遡る可能性があるものを含む）に位置づけられる掘立柱建物は、１×２間（SB70は１×１間の可能性もある）、１×３間の建物が多く、これらの建物は小規模であり、おおむね30㎡以下のものが多い。平面形は正方形に近いものもあるが、基本的には長方形の建物が多い。これ以外では２×２間、２×３間、２×５間、２×２間の総柱建物、３×３間の総柱建物（？）が確認できる。２×２間のSB48や２×３間のSB57は柱間が不均等であることから、間仕切りのある建物か、庇のある建物であった可能性が高い。



第187図　北垣遺跡の掘立柱建物（中世～近世）



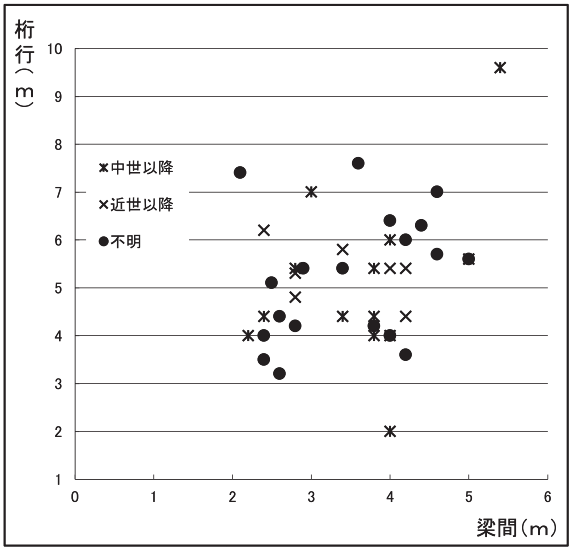
第188図　北垣遺跡の掘立柱建物（時期不明）

２×５間のSB26は規模も大きく、規格性の高い建物であり、北垣遺跡の中でも中心的な建物であった可能性が高い。

近世墓と掘立柱建物　近世墓は調査区の北西側で主に確認されており、中世墓と同じ場所に造営されている。掘立柱建物と墓地は区別されているが、集落の傍らに墓地が存在していたのか、集落の時期と墓地の時期が違う可能性がある。近世の遺物は近世前期から後期まで連綿と出土していることから、集落の傍らに墓地が営まれていた可能性が高い。

井戸　北垣遺跡では12,000㎡以上を調査したが、井戸は１基のみの確認である。石組の井戸である。

井戸の構築からみた北垣遺跡の特徴　近世には中世墓の石塔を解体して、井戸の石組として再利用していることから、石塔は忌避されるものではなく、単純に石材として利用されている。こうした石塔石材の利用は墓として、あるいは自分たちの先祖ではないという意識があったのではないかと想定できる。



第189図　北垣遺跡の掘立柱建物の規模
（中世～近世および時期不明）

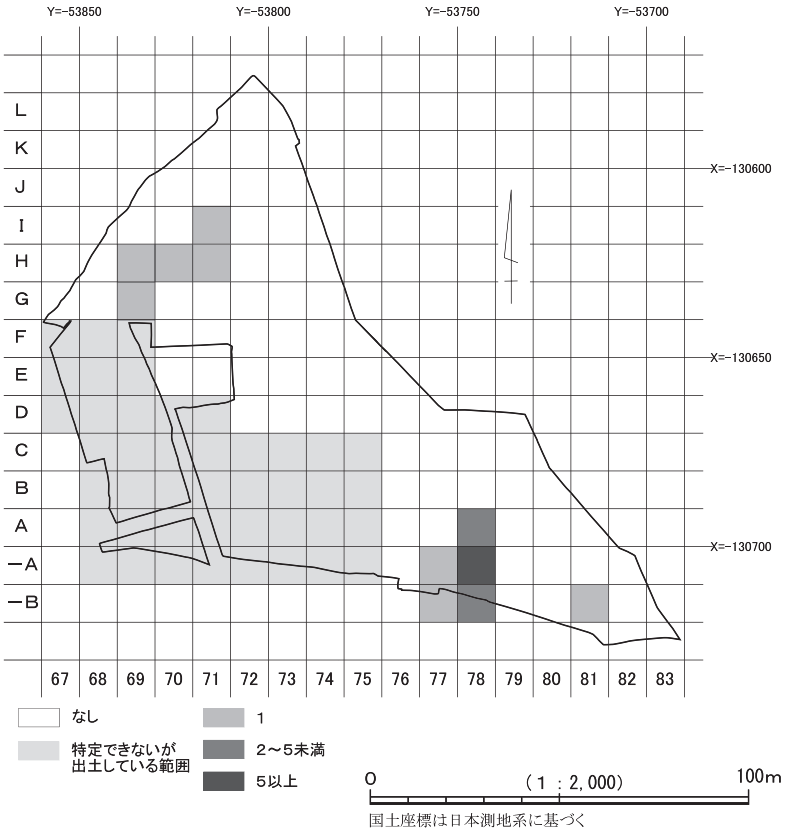
この点からみれば、近接する中屋敷遺跡でも想定したように（大谷2011）、中世墓を築造した集団と、近世に集落を営んだ集団が違っていた可能性が高いと考える。ただし、墓地を造営する場所については、おおむね同一の場所を選定しており、丘陵上の北西箇所が墓地という認識が中世後期以降連綿と続いて

いた可能性が高い。なお、これらの近世墓は後述する「粟倉村溜池絵図」や「粟倉村絵図」に残る「鷲岡寺」との関係が想定できるが、「鷲岡寺」の檀家であったかどうかの確証はない。

２　北垣遺跡と鍛冶

（１）鍛冶場の位置（第190～192図）

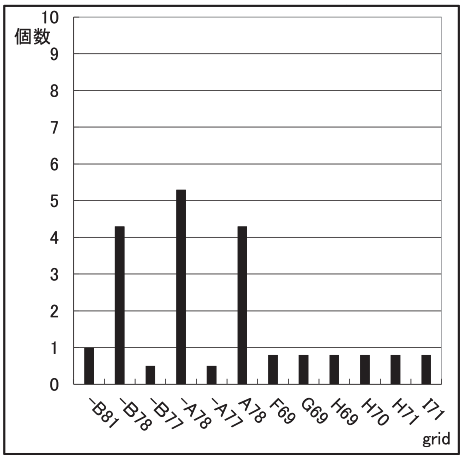
北垣遺跡では、鉄滓が出土しているが、直接鍛冶跡を示すような遺構は確認できない。また、鉄滓の大部分が遺構外からの出土であり、鍛冶場を推定することも難しい。ただし、ある程度の鉄滓の位置から鍛冶が行われていた可能性が高い場所については推測できる。



第190図　北垣遺跡における鉄滓出土位置

鉄滓の出土位置とその場所での数量を示したのが第190・191図、出土した鉄滓の重量と数量を示したものが第192図である。包含層や攪乱から出土したものについては出土グリッドを特定できないため広範囲から出土しているように見えるが、出土数が多い場所をみると、－A78グリッド周辺（１区）であり、この付近で鍛冶が行われていた可能性が高い。また、自然科学分析を実施した大型の鉄滓については１・３区に集中している。したがって、今回の調査区の南側中央～西側にかけての区域で鍛冶が行われていた可能性が高く、おおむね２箇所で実施されていた可能性が高いといえる。

１区－A78グリッド周辺では、SB57・SB59など中世以降に位置づけられる掘立柱建物が確認でき、こうした建物内で鍛冶が行われた可能性がある。３区では近世以降の掘立柱建物が多く、それらの建物内で鍛冶が行われた可能性が高い。

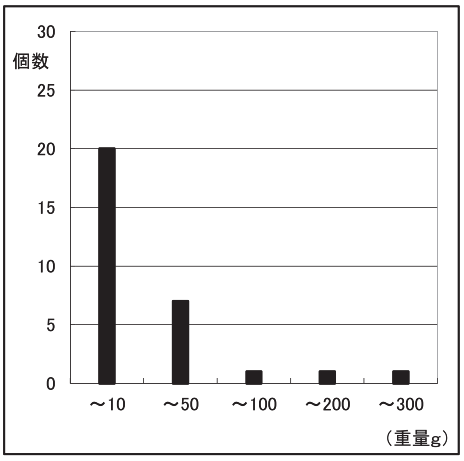


第191図　北垣遺跡グリッド別鉄滓出土数

（２）操業時期

北垣遺跡で鍛冶が行われていた時期は特定できないが、３区の掘立柱建物の時期からは鍛冶が行われたのは近世である可能性が高い。近接する中屋敷遺跡では北垣遺跡以上に鉄滓が出土しており、遺跡周辺に残る「鍛冶屋敷」などの地名から江戸時代に鍛冶が行われていたことを推測した（大谷2011）が、こうした大規模に行われていた鍛冶の影響を受けて北垣遺跡でも江戸時代に鍛冶が行われたと推測したい。

なお、北垣遺跡からは鉄製品が出土しているが完形に復原できるものは少ないことから、中屋敷遺跡でも想定した（大谷2011）ように、鉄素材として再利用するために集められた廃材であった可能性がある。



第192図　北垣遺跡出土鉄滓の重量別出土数

（３）鍛冶の内容

自然科学分析（第５章参照）の結果、北垣遺跡で行われた鍛冶は、小規模ながら精錬操作段階で生成した鉄滓と推測されている。推測の域を出ないが、分析を行った鉄滓の中に鉄器を伴う事例があることから、廃材を集めて精錬し、鉄塊を再生産することを目的としていた可能性が高い。また、それを利用して、製品を生産する小鍛冶も行われていた蓋然性が高い。

鍛冶の操業規模は、近接する中屋敷遺跡（静岡埋文研2011）と比較すると出土数が少なく、鉄滓の大きさも小さいことから、中屋敷遺跡よりも小規模であった可能性が高い。

３　「粟倉村」絵図と北垣遺跡

（１）「粟倉村溜池絵図」と北垣遺跡

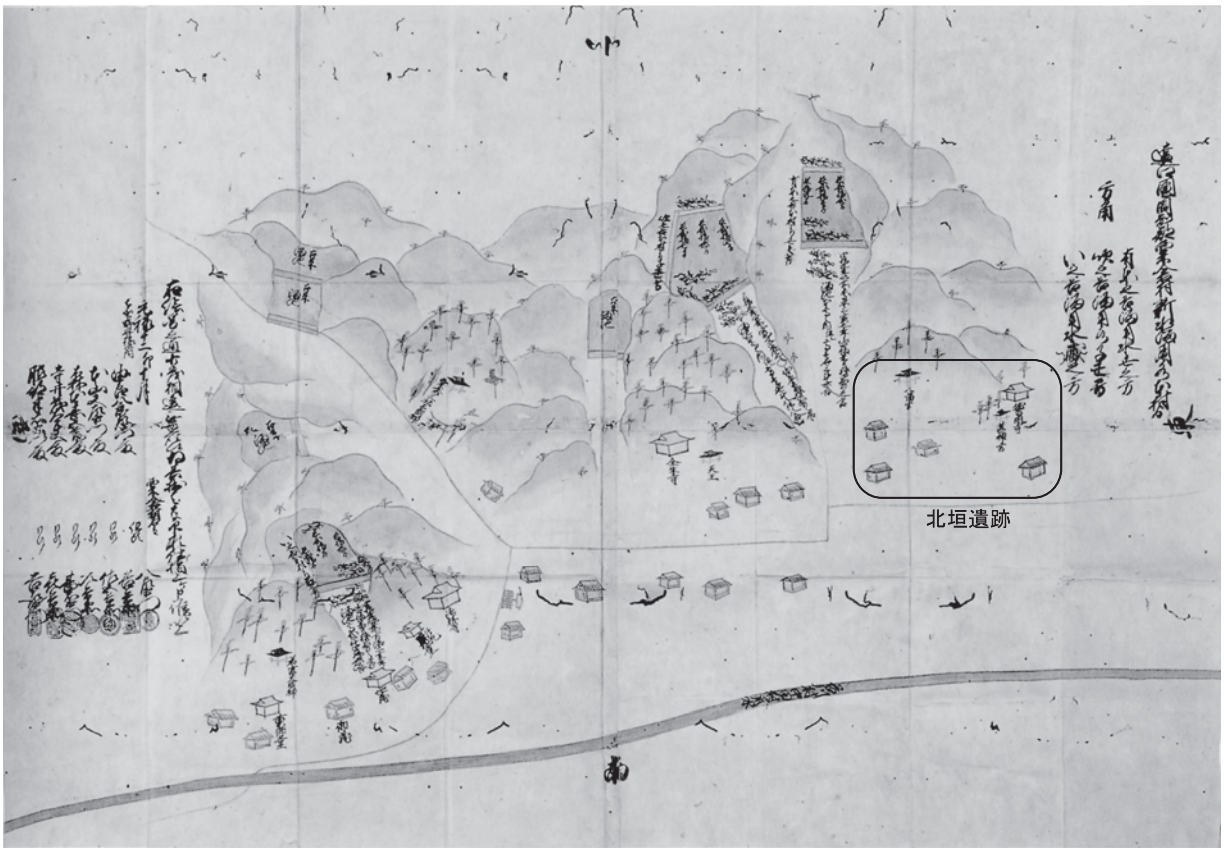
円田地区には、江戸時代の元禄12（1699）年に描かれた「粟倉村溜池絵図」（第二東名記念誌編集委2005-24頁）が残されており、江戸時代前半から後半にかけての北垣遺跡の様相を知る手がかりとなる。

北垣遺跡は、江戸時代において「粟倉村」に属していた。現在まで残存する寺院や丘陵との関係から絵図における北垣遺跡の位置をみると、北垣遺跡は絵図中央のやや右側の「八幡宮」や「萬神宮」、「鷲岡寺」（仏光山鷲岡寺，現在廃寺）とその南側にある切妻あるいは寄棟建物－草ヶ谷村絵図（第二東名記念誌編集委2005-23頁）を見ると寄棟の建物（大谷2011）であり、これを参考にすると「粟倉村溜池絵図」では切妻のようにも見えるが､寄棟であった可能性が高い－の位置であると推断できる。つまり、この絵図が当時の状況を反映しているとすれば、元禄12年（江戸時代前期末～中期初頭）段階には小規模な神社（八幡宮・萬神宮)・寺院（鷲岡寺）と一般的な集落が営まれていた可能性が高い。したがって、明確な江戸時代前期末～中期初頭の建物を特定することはできないが、少なくともこの時期には近くに寺社が存在する集落であった可能性が高いといえる。

また、集落の構造についてみると、溜池を記す絵図面のため、建物の形態が当時の様相を伝えているか明確ではないが、寺院は切妻造に表現していることから、建造物の性格により建物の構造が違っていた可能性が高く、一般的な建物は長方形で寄棟造の小規模な建物であったと想定できる。この絵図と北垣遺跡の掘立柱建物を比較すると、今回の調査で出土した建物は平面長方形の小規模な建物が多いことから、絵図面と一致している。絵図からみれば、大城戸遺跡周辺（絵図左側）と比較すると、４棟と建物数は多くなく、10棟以下の小規模な集落であった可能性が想定できる。

「八幡宮」の位置は遺跡の北東部であり、「鷲岡寺」や「萬神宮」は遺跡中央西側あたりにあった可能性が高いが、こうした仏堂等の一般的ではない建物は礎石建物であった可能性が高いことから今回検出した掘立柱建物の中にはこうした寺社の建物は含まれていない可能性が高いと想定している。

近世墓を確認した調査区北側～北西側の近在には、「八幡宮」が存在していた可能性があり、神社近くに墓を営んでいたか、近世墓と「八幡宮」の時期が異なる可能性が高い。



粟倉村溜池絵図　元禄 12（1699）年

元禄 12 年に諸国村々に提出を命じて描かれた絵図の控え。
中央に「金生寺」「天王」、その東側に「八幡宮」「鷲岡寺」「萬神宮」などが表現されている。現在も「金生寺」は存在しており、「八幡宮」は第二東名建設に伴って移転された。絵図中に隅丸の四角で囲った範囲が、北垣遺跡に該当する。
北垣遺跡の場所には、「八幡宮」「萬神宮」「鷲岡寺」などとともに平面長方形で寄棟造の建物が描かれている。これにより、元禄期には集落内あるいは集落に近在して小規模な寺社が祀られていたことが判明する。
北垣遺跡で確認した近世の建物は平面長方形の掘立柱建物が多く、この絵図面に描かれた建物と一致している。

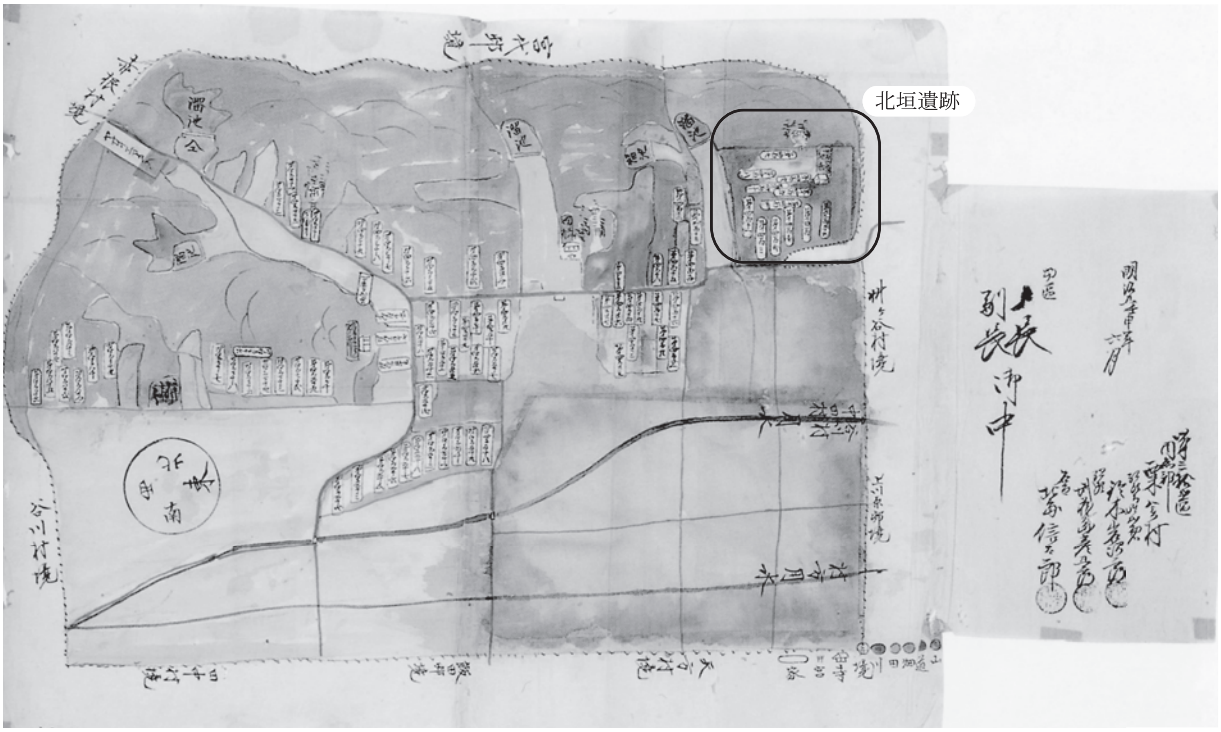
第193図　「粟倉村溜池絵図」と北垣遺跡

（２）「粟倉村絵図」と北垣遺跡

円田地区には明治５（1873）年６月に描かれた「粟倉村絵図」が残されている（第194図）。丘陵の位置関係や道路などとの関係から北垣遺跡の位置を推定すると、絵図面の右上部分に「粟倉村溜池絵図」に記載された「八幡宮」と想定される神社（鳥居）や、そのやや右下に「鷲岡寺」と想定する寺が描かれており、図右上の部分が北垣遺跡であることがわかる。

この絵図には一般的な建物は描かれていないが、家の位置が描かれており、北垣遺跡の部分には12軒が記されている。したがって、幕末から明治期にかけては10軒前後で構成される集落であった可能性が高い。元禄時代よりは増加している可能性が高いが、急激には増加していなかった可能性が高く、江戸時代は10軒前後で推移した可能性が高いと想定する。この想定を裏付けるように、近世以降の建物は数箇所にまとまる傾向にあり、５～６軒が今回の調査範囲内に存在した可能性が高い。

なお、今回の調査では、「八幡宮」や「文殊堂」があった場所などを調査しているが、その位置がどこにあったのかは特定できなかった。絵図面から見ると、平坦面から丘陵にかけての位置に寺社仏閣が描かれており、また中世墓や近世墓がおおむね北垣遺跡の北側を中心として確認されていることを考え合わせれば、丘陵尾根に近い、遺跡の北西側と北東側が「ハレ」（非日常）の場、南側が集落「ケ」（日常）の場として意識的に空間区分されていた可能性が高い。



粟倉村絵図　明治５（1873）年６月

明治維新後に、各村々の絵図を提出させた時の控え。

元禄 12 年の「粟倉村溜池絵図」と比較すると、北垣遺跡は隅丸の四角で示した範囲と想定できる。この絵図にも「八幡宮」と想定する鳥居や「鷲岡寺」と想定する建物が描かれている。右下隅に記入された土地の利用状況をみると「八幡宮」の前は畑地で、白い四角の場所は「家」であることがわかる。この絵図が当時の戸数を示しているとすれば、明治初期の段階に 12 戸（家）であった可能性が高い。

第194図　「粟倉村絵図」と北垣遺跡

第7章　結　語

北垣遺跡の調査では、縄文時代から近世・近現代までの遺構と遺物が確認されており、断続的な人々の活動の痕跡が窺える遺跡であることが明らかとなった。また、周辺の遺跡との比較によって、各時代の北垣遺跡の特徴も捉えることができた。ここではそのような周辺の遺跡との関係を踏まえた上で、北垣遺跡の調査成果を総括していきたい。

縄文時代の北垣遺跡　縄文時代の遺構と遺物に関しては､縄文時代の可能性がある竪穴建物が1軒と、縄文土器、石器が数点出土した。縄文土器は、南関東系、中部高地系、東海系の土器が出土しており、中期後葉と後・晩期に位置付けられる。森町ではこのように土器や石器が数点出土する遺跡が多く知られており、北垣遺跡もそれらの遺跡と同じように狩猟採集生活の中で形成された遺跡と考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期の北垣遺跡　この時期の遺構は、竪穴建物が4軒検出され、遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は多くが遺構外か包含層で出土しており、遺構に伴って出土した遺物は、SH15で菊川式土器（弥生時代後期中葉）が出土したのみである。そのため、検出された遺構の中で、時期を確定できるのはSH15のみであり、居住域がどのように展開していたのかは判然としない。

北垣遺跡の背後にある丘陵上では、文殊堂遺跡、宇藤蓮台遺跡で周溝墓や土壙墓が検出されており、北垣遺跡はそれらの墓域と関係のあった居住域である可能性が指摘できる。墓域では、弥生時代後期中葉に、周溝墓、土壙墓が西側に偏って分布する傾向を見せ、小規模な土壙墓が密集して構築されるという、それまでとは異なった展開を示す。そして、このような変化は当時の社会や環境の変化によるものと考えられている（静岡埋文研2006a)。北垣遺跡に関しても、SH15の形成は墓域墓域に変化の起こる時期と同時期であることから、当時の社会や環境の変化の中で新たに展開した居住域である可能性が想定できる。

古墳時代後期～平安時代の北垣遺跡　古墳時代後期後半以降に、北垣遺跡は再び集落を形成する。古墳時代後期後半以降は、平安時代まで遺物の出土が見られることから、恒常的に集落が営まれていたと考えられる。

検出された遺構は竪穴建物9軒と掘立柱建物21棟である。竪穴建物は、SH06・13が古墳時代後期後半に位置づけられ、SH07・11は平安時代の遺構である可能性がある。SH06・13は平面方形で北壁に竈をつけるもので、森町如中庵遺跡でも同様の例が見られる。如仲庵遺跡で検出された竪穴建物は、北垣遺跡のSH06・13と時期を同じくし、規模・形状も類似していることから、太田川中流域ではこのような形態の竪穴建物が一般的であったと考えられる。SH07・11に関しては、同時期の掘立柱建物が多数検出されていることから、平安時代の集落は掘立柱建物を主体として、少数の竪穴建物を伴う集落であった可能性がある。なお、SH07・11は竈を伴わず、規模の小さい竪穴建物であることから、集落の中で特別な役割を持った住居である可能性も想定できる。

掘立柱建物に関しては、SB03が古墳時代終末期と考えられ、SB06・14・31・36・40・44・45・50・54が平安時代に位置付けられる。この中でSB44・45は規模も大きく、規格性の高い掘立柱建物と考えられることから、集落の中でも中心的な役割の住居と考えられる。

このように、北垣遺跡では採集遺物や出土遺物によって6世紀中頃、遅くとも6世紀後半には、人の活動が始まっていたと考えられる。丘陵上の遺跡では、遠江Ⅲ期後半に文殊堂1・3号墳、天王ヶ谷44号横穴墓、林5号墳が築造され、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に文殊堂5号墳、宇藤蓮台3号墳、天王ヶ谷横穴墓群複数、宇藤横穴墓群複数が築造・開削されていたと考えられる。周辺の地形と遺跡の立地から、

林５号墳は墓道を一宮川の方へ伸ばしており、宇藤蓮台３号墳、宇藤横穴墓群、文殊堂１・３・５号墳は北垣遺跡の西側の谷を、天王ヶ谷横穴墓群は東側の谷を墓道としていたと考えられ、北垣遺跡はこれらの墓域と墓道を直接望める位置に立地している。これらの墓域と居住域の関係を明らかにする遺物は出土していないが、北垣遺跡の竪穴建物の規模が大きくないことと、北垣遺跡が古墳時代以降も居住域が存在し、天王ヶ谷横穴墓群、宇藤横穴墓群が古墳時代終末期を通して開削されることから、北垣遺跡に居住していた人々は、これらの横穴墓群に葬られた可能性が高い。

奈良時代における北垣遺跡は、戸綿殿ヶ谷遺跡や中芝原遺跡といった短期間に形成された遺跡に対して、如中庵遺跡、大城戸遺跡、稲荷領家遺跡とともに継続的に営まれる集落遺跡であったと考えられる。そして、円田地区は周智郡の「田椀郷」と想定されることから、円田地区の大城戸遺跡から北垣遺跡や草ヶ谷地区の香勝寺遺跡一帯が「田椀郷」であった可能性が高く、当時の中心地であったと可能性がある。ただし、大城戸遺跡付近は小国神社旧跡伝承地が存在しており、北垣遺跡より大城戸遺跡の方が中心的な役割を担っていた可能性がある。

平安時代では、先に述べた如中庵遺跡、大城戸遺跡、稲荷領家遺跡なども北垣遺跡と同じように集落として継続している。この中でも大城戸遺跡は小国神社宮司となる清原氏が居館を構えていたと想定される。北垣遺跡においても、緑釉陶器が出土していることから、有力者が居住していた可能性がある。平安時代には大城戸遺跡を中心とした集落群が形成されていた可能性が指摘できる。

鎌倉時代の北垣遺跡　一部は平安時代から続く建物もあったと考えられるが、明確な遺構が少ないため、鎌倉時代の集落の様相は判然としない。一方で、遺物は中世土器、陶器が多く出土しており、周辺の中屋敷遺跡と香勝寺遺跡の出土遺物の様相と比較することによって、北垣遺跡一帯の様相を推測することができる。北垣遺跡では、10～13世紀の灰釉陶器、山茶碗が出土していることから、13世紀までは継続的に人の活動があったと考えられる。その後、14世紀以降は遺物が激減し、15世紀以降も同じように遺物の量が少ない。そして15世紀末から16世紀初頭にかけて遺物の量が増え、16世紀後半にはかわらけを中心にして遺物の量が増える。

これに対して、中屋敷遺跡では、同じように13世紀まで山茶碗が出土し、14世紀では遺物の量が減少する。しかし、その後は北垣遺跡と異なって15世紀の遺物が多く出土している。一方、香勝寺遺跡でも、遺物の出土から、14世紀に空白期間を挟むが、13・15世紀代に遺跡の盛期があることが窺える。特に香勝寺遺跡は堀の跡が検出されていることから、居館もしくは寺院が存在した可能性が指摘されている（森町教委2004）。このことから、古代から続く集落（北垣遺跡、大城戸遺跡）が衰退し、現在の草ヶ谷地区を中心地域内で集落の再編が行われた可能性が考えられる。

室町～戦国時代の北垣遺跡　中世後期の北垣遺跡は土壙墓が主要遺構であるため、墓域が展開していたと考えられる。検出された土壙墓は26基で、時期の判断できる遺構はSK04・09・12の３基のみである。埋葬方法は火葬と土葬の２種類が見られ、火葬墓が９基、土葬墓が17基で土葬墓が多い。また、火葬墓は石敷のあるものが多いことも特徴である。副葬品は何も出土しなかった遺構が多く、出土しても、銅銭、かわらけ、もしくはその両方が出土するもので、身分を象徴するような特記すべき遺物は出土していない。そのため、火葬と土葬の違いが身分差を表す可能性もあるが、副葬品からはその違いが判然としない。一方、副葬品ではないが、鉄釘がSK04、09で出土していることから、いくつかの墓は木棺を使用したと考えられる。

北垣遺跡の土壙墓は、埋葬方法、副葬品により、特徴づけられるものは少ないが、土壙墓の配置、主軸方向の違いにより分類が可能である。土壙墓の配置によりA～C群に分けられ、さらにその分類の中で主軸方向の違いによりⅠ～Ⅶ群に分類した。この中でⅢ群に分類されるもの中に16世紀後半のSK04・09が含まれており、Ⅲ群が同時期の遺構であると想定した場合、Ⅲ群が最も遺構が多いことから、

16世紀後半がこの墓域の盛期であった可能性が考えられる。

周辺の遺跡に関しては、文殊堂遺跡や宇藤蓮台遺跡などの円田の丘陵上で土壙墓と、石塔の部材が出土しており、中屋敷遺跡では、土壙墓が1基と、遺構外で埋葬に使用されたと考えられるかわらけが出土したことから、現在の園田・草ヶ谷地区一帯で墓域が展開していた可能性が考えられる。

森町では、15世紀～17世紀にかけて曹洞宗の寺院が多く造立されており、曹洞宗の僧侶は葬祭と受戒会を行って、広く一般民衆に布教を行っていったとされる（森町史編さん委1998）。また、森町では16世紀に位置づけられる石塔が多く造られており、曹洞宗による葬祭と受戒会の拡大がこのような石塔造立の力になったとも考えられている（足立2008）。北垣遺跡では、火葬墓は9基（1基は火葬骨埋葬）検出されており、石塔も多く出土していることから、曹洞宗の強い影響が窺える。

北垣遺跡では、中世の特殊な遺物として、托と銅錘が出土している。托に関しては、県内では5例確認でき、窯業遺跡（すやん沢古窯、皿山古窯）か寺院跡（大知波峠廃寺、普門寺跡）で出土しており、唯一仮宿堤ノ坪遺跡では集落内で出土している。この遺跡で漆塗仏像が出土していることから、集落内に仏堂に相当する施設が存在した可能性がある。そのため、北垣遺跡も仏堂を有する集落であった可能性が想定できる。

北垣遺跡出土の銅錘は、形態が一致するものはないが、青森県浪岡城跡出土の銅錘に類似点が見られることから、北垣遺跡の銅錘は中世後期～末と考えられる。県内で銅錘が出土する遺跡は、郡衙関連遺跡（井通遺跡、坂尻遺跡）や交通の要所（笠井若林遺跡、高根森遺跡、山廻遺跡）と考えられる遺跡である。北垣遺跡が位置する園田丘陵付近も、豊岡方面から掛川方面へ抜ける交通の要所に位置することから、北垣遺跡も交通の拠点としての性格を有していた可能性がある。

近世以降の北垣遺跡　中世後期の土壙墓群は近世までは存続せず、中世末に墓域としての機能を終える。そして、中世から江戸時代初期まで掘立柱建物が構築されているが、これ以降は居住域も存続しない。そのため北垣遺跡はこの時期は江戸時代初期に居住域としての機能を終えるものと考えられる。これは森町周辺の支配層が変わった事が影響すると考えられる。

再び北垣遺跡で集落が形成されるのは、江戸時代中期以降である。主な遺構は掘立柱建物、井戸、近世墓である。掘立柱建物は1×1、1×2、1×3、2×2、3×3間など規模に違いがあり、特にSB26（2×5間）は規模が大きく、規格性の高い建物で、北垣遺跡でも中心的な建物であった可能性がある。また、井戸に関しては中世の墓域に伴っていた石塔を井戸の部材に転用していることから、この時期以降に居住していた集団は、中世とは別の集団が居住していたと考えられる。

特記すべき遺物として、鉄滓が出土したことが挙げられる。このことから、北垣遺跡は近世において鍛冶を営む集落であった可能性がある。ただし、鍛冶に関する遺構が検出されていないことから、掘立柱建物が多く検出された1・3区において鉄滓が出土したことを考慮して、このような掘立柱建物で鍛冶が行われていた可能性が考えられる。周辺の遺跡では、中屋敷遺跡でも鉄滓が出土しており、この遺跡と比較すると北垣遺跡の鉄滓が小さく、少量の出土であることから、北垣遺跡で営まれていた鍛冶は小規模なものだったと考えられる。

註

（第４・６章）

1　縄文土器の型式分類については、向坂鋼二氏（元財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所評議員）、澁谷昌彦氏（大正大学）、池谷信之氏、小崎晋氏、原田雄紀氏（沼津市教育委員会）に御教示頂いた。明記して深謝します。

2　灰釉陶器・山茶碗については、松井一明氏（袋井市教育委員会）に産地同定と型式分類について御教示頂いた。明記して深謝します。

3　中世土器・陶磁器については、藤澤良祐氏（愛知学院大学）、松井一明氏（袋井市教育委員会）、山本智子氏（愛知学院大学）に産地同定と型式分類について御教示頂いた。明記して深謝します。

4　足立順司氏は、小国神社経塚の造営についての評価を行うにあたり、小国神社の神職に任命された清原則房は中央の記録や貴族の日記に見られることから、在地の人が任官したとは考えられないとしている（足立1998）。『図説森町史』（森町史編さん室1999）などでは、清原氏が在地の開発領主であると想定されているが、大城戸遺跡の実態がまだ不明確であり、今後の調査によって判断していく必要があろう。

図の出典

第 80 図　（湖西市教委1997より）

第164図　（静岡埋文研2011-第27図に加筆）

第165図　（静岡埋文研2006a-第186図に加筆）

第166図　（静岡埋文研2006a-第185図に加筆）

第167図　（大谷2012-第257図に加筆）

第168図　文殊堂１・３・５号墳・林５号墳・宇藤蓮台３号墳（静岡埋文研2008より）
天王ヶ谷横穴墓群・宇藤横穴墓群（静岡埋文センター2012より）
北垣遺跡既往調査の出土遺物（広川2005より）

第169図　鴨ノ前遺跡（静岡埋文研2004bより）　如仲庵遺跡（森町史編さん委1998より）

第175図　（大谷2011より）

第179図　普門寺（伽藍）跡（湖西市教委2002より）　大知波峠廃寺（湖西市教委1997より）
皿山古窯群（菊川町教委2003より）　仮宿堤ノ坪遺跡（藤枝市教委2005より）

第180図　１　井通遺跡（静岡埋文研2007bより）　２　坂尻遺跡（静岡県教委2003より）
３　笠井若林遺跡（静岡埋文研2002より）　４　高根森遺跡（静岡埋文研2006b）
５　原川遺跡（静岡埋文研1990より）　６　清水遺跡（静岡埋文研1996）

第182図　文殊堂遺跡SF53、宇藤蓮台遺跡SF03（静岡埋文研2006aより）、中屋敷遺跡SK30（静岡埋文研2011より）

第184図　掛川市峯遺跡（戸塚1995より）

第185図　（静岡埋文研2006aより）

第193図　（第二東名記念誌編集委2005より）

第194図　（第二東名記念誌編集委2005より）

参　考　文　献

【論文等】（五十音・年代順）

赤羽一郎・中野晴久　1994　「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって資料集』　日本福祉大学
足立順司　1975　「森町宮代出土の瓶子と古銭」『森町考古』9　森町考古学研究会
足立順司　1997　「県下の六道銭と墓」『静岡県の中世墓』静岡県考古学会
足立順司　1998　「古代末期の地方経塚－森町における二例」『森町史』資料編一　考古　静岡県周智郡森町
足立順司　2008　『森町の中世石塔』（『森町考古』20）　森町考古学研究会
伊藤嘉章　1998　「遠江一宮谷田口出土の灰釉唐草文四耳壺」『森町史』資料編一　考古　静岡県周智郡森町
伊藤美鈴　1996　「西平子遺跡　まとめ」『静岡県森町飯田の遺跡』　静岡県周智郡森町教育委員会
井村広巳　2002　「弥生時代集落の概観－西部地域－」『静岡県における弥生時代集落の変遷』　静岡県考古学会
岩木智絵　2005　「仮宿堤ノ坪遺跡（平安時代末～中世前期）について」『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』　藤枝市教育委員会
内山眞龍　1799　『遠江風土記傳』（加藤菅根・皆川剛六訳　1969　『遠江風土記傳』歴史図書社）
大川清・鈴木公雄・工楽善通編　1996　『日本土器事典』　雄山閣
大橋康二　1993　『肥前陶磁』　考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社
大橋保夫　1980　「静岡県内出土の石冠」『森町考古』15　森町考古学研究会
大谷宏治　2004　「大屋敷１号窯の評価」『大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷１号窯』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2011　「中屋敷遺跡・中屋敷１号墳の評価」『弥勒平遺跡・中屋敷遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2012　「宇藤・天王ヶ谷横穴墓群の評価」『森町円田丘陵の横穴墓群』　静岡県埋蔵文化財センター
木村弘之　2008　「遠州の近世墓ー磐田市域の調査事例からー」『静岡県考古学研究』40号　静岡県考古学会
金子健一　1996　「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕　そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
金子健一　2005　「羽釜形土器からみた中世の東海」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』　2005菊川シンポジウム実行委員会
金子直行　1996　「加曽利Ｅ式土器」『日本土器事典』　雄山閣
河合　修　2009　「まとめ」『上志戸呂古窯』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
小林久彦　1999　「もう一つの台付甕」『三河考古』12　三河考古学談話会
齊藤孝正　1989　「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集』104　名古屋大学
佐藤由紀男・萩野谷正宏・篠原和大　2002　「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年－東海編－』　木耳社
鋤柄俊夫　2002　「都鄙のあいなか」『国立歴史民俗博物館研究報告』　国立歴史民俗博物館
鈴木敏則　1998　「古墳時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）　浜松市文化協会
鈴木敏則　2001　「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　補遺・論考編』　東海土器研究会
鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会
鈴木正貴　1996　「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕のデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
竹内直文　1998　「まとめ　１．奥谷田Ⅰ遺跡　（１）弥生時代後期～古墳時代前期」『奥谷田Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡』　静岡県周智郡森町教育委員会
竹内直文　2003　「明ヶ島の弥生時代墓群と中・東遠江における弥生時代墓制」『東部地区区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　磐田市教育委員会
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
田村隆太郎　2001　「遠江長福寺１号墳の研究　考察」『静岡県考古学研究』33号　静岡県考古学会
田村隆太郎　2004　「鴨ノ前遺跡　まとめ」『森町睦実の遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎　2006　「まとめ」『森町円田丘陵の遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎　2009　「綱掛山古墳群・片瀬遺跡の遺跡形成」『綱掛山古墳群・片瀬遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
永井久美男編　1994　『中世の出土銭』　兵庫県埋蔵銭調査会
永井宏幸　1996　「尾張平野を中心とした古代煮沸具の変遷」『鍋と甕　そのデザイン』
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
中嶋郁夫　1988　「いわゆる菊川式と飯田式の再検討」『転機』２号　転機刊行会
中嶋郁夫　1993　「東海地方東部における後期弥生土器の『移動』・『模倣』」『転機』４号（『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』）　転機刊行会
中嶋郁夫　1995　「静岡県内の古墳の動向」『古墳時代の集落』　静岡県考古学会
中嶋郁夫　1997　「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』13号　静岡県
中嶋郁夫・大谷宏治・田村隆太郎　2002　「遠江の様相」『古墳時代中期の大型墳と小型墳』　東海考古学フォーラム浜北大会実行委員会・静岡県考古学会
中野晴久　1986　「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ　常滑市教育委員会
中野晴久　1995　「常滑・渥美」『概説中世土器・陶磁器』　真陽社
中野晴久　2005　「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』　2005菊川シンポジウム実行委員会
贄　元洋　1998　「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』30号　静岡県考古学会

贄　元洋　2009 「二川窯の概要」『灰釉陶器のブラインドテスト』 東海土器研究会
原　廣志　1999 「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書－』 静岡県菊川町教育委員会
原田正雄　2005 「市右衛門様の由来」『先人の足跡』第二東名記念誌編集委員会（静岡県周智郡森町）
菱田哲郎　2011 「古墳時代の実年代　後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学』１　同成社
広川達麻　1998 「森町の縄文時代遺跡」『奥谷田Ⅰ・Ⅱ遺跡』静岡県森町教育委員会
広川達麻　2005 「第二東名高速道路建設と埋蔵文化財」『先人の足跡』 第二東名記念誌編集委員会（静岡県周智郡森町）
福島邦男　1996 「曽利式土器」『日本土器事典』 雄山閣
藤村東男　1984 『縄文土器の知識Ⅱ』 東京美術
藤澤良祐　1987 「本業焼の研究（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1995a 「瀬戸古窯址群Ⅲ」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』３　瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　1995b 「古瀬戸」『概説中世の土器・陶器』 真陽社
藤澤良祐　2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10　瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
文化財保護委員会　1966 『埋蔵文化財発掘調査の手びき』
文化庁文化財部記念物課監修　2010 『発掘調査のてびき－整理・報告書編』 同成社
増子康眞　1996 「咲畑式土器」『日本土器事典』 雄山閣
松井一明　1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会
松井一明　1993 「東海地域のかわらけ編年について」『久野城Ⅳ』 袋井市教育委員会
松井一明　2005 「中世見付とその周辺」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』（発表要旨・論考編） 2005菊川シンポジウム実
行委員会
松井一明・木村弘之・溝口彰啓　2009 「遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開」『研究紀要』32　静岡県博物館協会
溝口彰啓　2000 「笠井若林遺跡出土の銅錘について」『研究紀要』７　静岡県埋蔵文化財調査研究所
宮本佐知子　1994 「国内出土の権衡資料」『大阪市文化財論集』 大阪市文化財協会
向坂鋼二　1992 「縄文土器の編年」『静岡県史』３　考古３　静岡県
桃崎祐輔　2000 「石造物からみた中世の横地」『横地城跡－総合調査報告書－』 静岡県菊川町教育委員会
山下峰司　1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社
渡井英誉　2002 「ムラと墓－墓にかかわる集落の景観」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会

【報告書・市町村史等】（五十音・年代順）

磐田市教育委員会　1998 『馬坂　馬坂遺跡・馬坂上古墳群発掘調査報告書』
磐田市教育委員会　2005 『新豊院山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
磐田市教育委員会　2006 『新豊院山古墳群Ｄ地点の発掘調査』
磐田市史編さん委員会　1992 『磐田市史』資料編　磐田市
菊川町教育委員会　2000 『横地城跡－総合調査報告書－』（静岡県小笠郡菊川町）
菊川町教育委員会　2003 『皿山古窯跡群－第６次調査』（静岡県小笠郡菊川町）
湖西市教育委員会　1997 『大知波峠廃寺跡確認調査報告書』
湖西市教育委員会　2002 『湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書－平成13年度－』
静岡縣　1930 『静岡縣史』第１巻
静岡県教育委員会　2000 『静岡県の前方後円墳』
静岡県教育委員会　2003 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
静岡県埋蔵文化財センター　2012 『森町円田丘陵の横穴墓群』（森町―６）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990 『原川遺跡Ⅲ』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『水井遺跡・清水遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998a 『元島遺跡Ⅰ』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998b 『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002 『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004a 『寺山古墳群』（豊岡村－１）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004b 『森町睦実の遺跡』（森町－１）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006a 『森町円田丘陵の遺跡』（森町－２）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006b 『宮裏Ⅱ遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007a 『東原遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007b 『井通遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008 『森町円田丘陵の古墳群』（森町－３）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009 『片瀬遺跡・綱掛山古墳群』（森町－４）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010 『合代島丘陵の古墳群』（豊岡村―３）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2011 『弥勒平遺跡・中屋敷遺跡』（森町―５）

第二東名記念誌編集委員会　2005『先人の足跡』（静岡県周智郡森町）
豊岡村教育委員会　2000『大手内古墳群』（静岡県磐田郡豊岡村）
内藤晃・遠藤才文ほか　1979『観音堂横穴群』　日本楽器製造株式会社
袋井市教育委員会　1994『山田原遺跡群』
藤枝市教育委員会　2005『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』
森町教育委員会　1988『善千鳥遺跡確認調査報告書』（（静岡県周智郡森町）
森町教育委員会　1991『涼松・朝日平・西峠水戸ヶ谷東峠遺跡』（静岡県周智郡森町）
森町教育委員会　1996『森町飯田の遺跡』（静岡県周智郡森町）
森町教育委員会　1998『奥谷田Ⅰ・Ⅱ遺跡』（静岡県周智郡森町）
森町教育委員会　2004『鍛冶島遺跡　香勝寺遺跡　大鳥居遺跡　蓮華寺古墳群　三反田遺跡　北垣遺跡　天宮遺跡』（静岡県周智郡森町）
森町教育委員会　2007『町内遺跡試掘・確認調査報告書』（静岡県周智郡森町）
森町史編さん委員会　1995『森町史』通史編　上巻
森町史編さん委員会　1998『森町史』資料編一　考古　静岡県周智郡森町
森町史編さん室・社会教育課文化振興係　1999『図説森町史』　静岡県周智郡森町

附編　第二東名確認調査出土遺物

第１節　No.94地点

1　No.94地点の概要（第195図）

掛川市倉真の真砂地区に位置する。No.94地点はその地区に位置する山地の中の谷部に立地しており、その傾斜の緩い東向きの斜面地に位置する。

確認調査の結果、中世以前の遺構は確認されず、本調査には至らなかった（静岡埋文研2005）が、下記の遺物が出土していることからここで報告する。

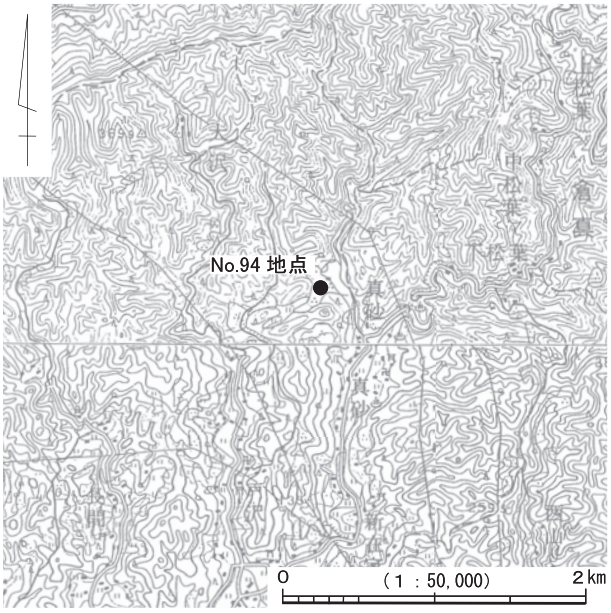
2　No.94地点出土遺物（第196図，第29表，図版76）

志戸呂の甕の底部片である。底部はほぼ高台と同じ高さまで下がるものである。口縁部付近まで残存していないことから時期を特定できないが、近世に位置づけられる可能性が高い。

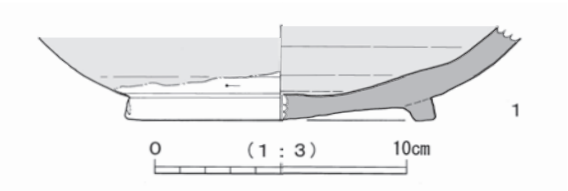
第29表　No.94地点出土遺物観察表

No	Fig	PL	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率	口径	器径	器高	底径	外面色調	内面色調	備考
1	196	76		志戸呂	甕	底部	40	−	−	−	(12.3)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	近世

単位　残存率（%）　口径・底径・器高（cm）　括弧内は復原値



第195図　No.94地点の位置



第196図　No.94地点出土遺物実測図

第２節　平島Ⅰ遺跡

１　平島Ⅰ遺跡（No.97地点）の概要（第197図）

平島Ⅰ遺跡は掛川市平島834他に位置し、原野谷川の南岸の丘陵から北に張り出した段丘上に立地する。平島Ⅰ遺跡が立地する丘陵は原野谷川に沿って東西に長い尾根の間の谷部分にあたる。

平島Ⅰ遺跡は発掘調査の結果、縄文時代の竪穴建物、縄文土器・石器のほか、室町～江戸時代の掘立柱建物や火葬（荼毘）墓などが確認されている（静岡埋文研2005）。

２　平島Ⅰ遺跡出土遺物（第198図，第30表，図版76）

第198図１は砂岩製の台石である。大部分が欠損している。重量は残存重量で1,730ｇであり、残存部位は1/4～1/5程度とすれば、８～９kg程度であった可能性がある。図上面には磨面が確認でき、やや窪んでいることから、ある程度の期間使用されたものである可能性が高い。

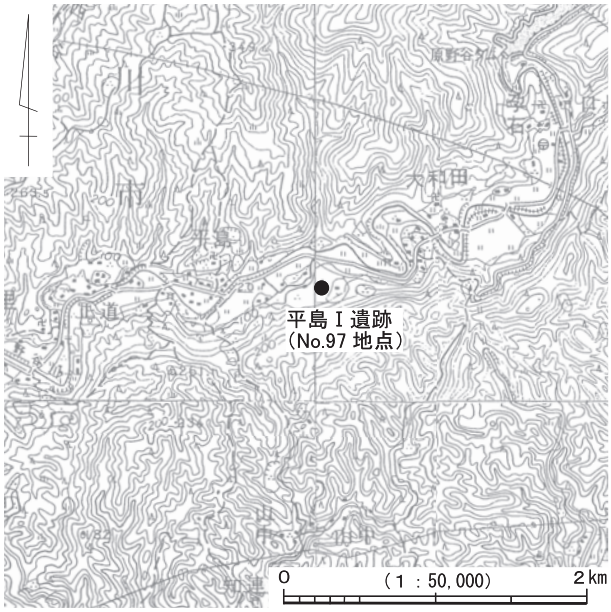
時期を特定し難いが、縄文時代の竪穴建物１軒や土器・石器が出土していることから、縄文時代の台石の可能性が高い。残念ながら排土から確認されたものでどのように使用されていたかは不明であるが、10kg程度であることから竪穴建物内に据え付けて利用した可能性が高い。

出土土器には、加曽利E式や曽利式の影響を受けて在地化した里木式に類似する土器が確認されており（静岡埋文研2005）、縄文時代中期後半の遺物である可能性が高い。

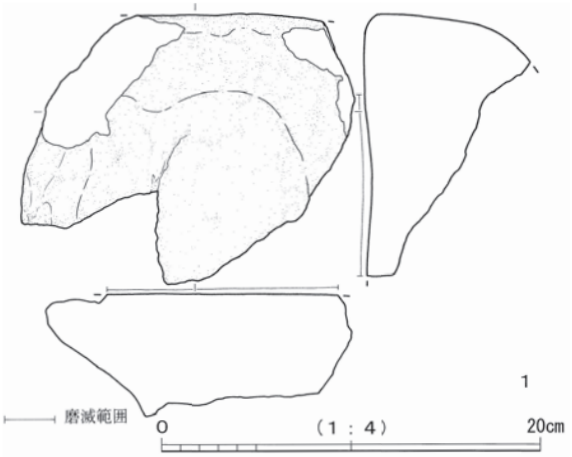
第30表　平島Ⅰ遺跡出土遺物観察表

No	Fig	PL	出土位置	種類	石材	全長	幅	厚さ	重量	備考
1	198	76	排土上表採	台石	砂岩	14.2	17.7	8.8	1730	

単位　全長・幅・厚さ（cm）　重量（ｇ）



第197図　平島Ⅰ遺跡の位置



第198図　平島Ⅰ遺跡出土遺物実測図

第３節　No.107地点

１　No.107地点の概要（第199図）

No.107地点は、森町睦実字善正庵に位置する。南戸綿の谷の最奥部にある丘陵の西斜面に位置する。この斜面の西側には善正庵池が存在しており、弥生土器片や須恵器が採集されていた善正庵遺跡に近接する地点であった。確認調査の結果、遺構は確認されなかったことから本調査には至らなかった。遺物も報告書（静岡埋文研2004）では出土していないとされているが、この地点から出土した可能性がある遺物２点が確認されたことから、ここで報告する。

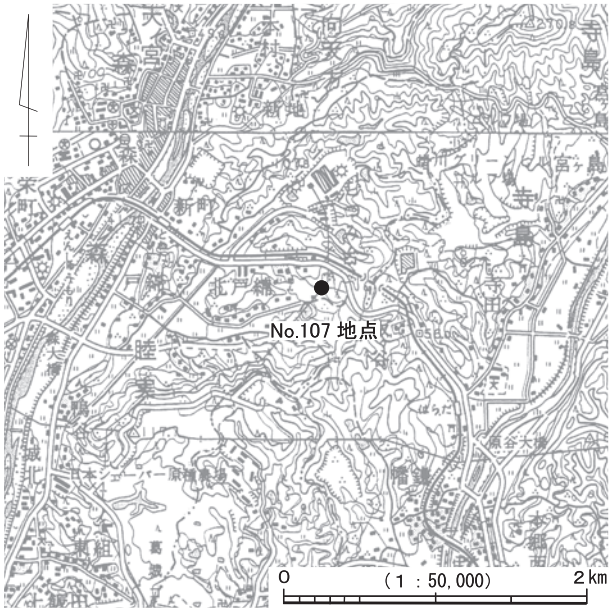
２　No.107地点出土と想定される遺物（第200図，第31表，図版76）

第200図１・２は、山茶碗の底部片である。底部は糸切り痕が雑にナデ消されている。高台には籾痕が残存する。胎土の特徴から、尾張産（常滑産）の山茶碗の可能性が高く、中野晴久氏による常滑編年６a型式（13世紀中頃）に位置づけられる可能性が高い（赤羽・中野1994，註１）。

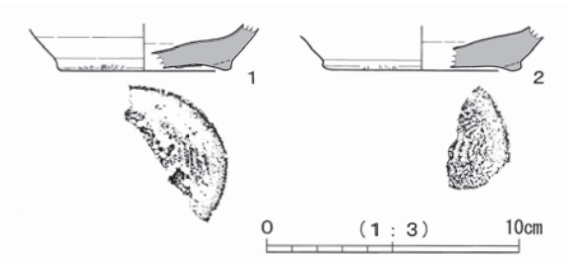
第31表　No.107地点出土遺物観察表

PL	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率	口径	器径	器高	底径	外面色調	内面色調	備考
76	Bトレンチ東	山茶碗	碗	底部	30	－	－	－	(6.9)	灰白(N8/)	灰白(N8/)	渥美湖西Ⅲ-1
76	Bトレンチ東	山茶碗	碗	底部	15	－	－	－	(7.8)	灰白(N8/)	灰白(N8/)	渥美湖西Ⅲ-1

単位　残存率（%）　口径・底径・器高（cm）　括弧内は復原値



第199図　No.107地点の位置



第200図　No.107地点出土遺物実測図

第４節　No.110地点

１　No.110地点の概要（第201図）

No.110地点は、森町睦実字堀之内に位置し、南戸綿の谷の南側丘陵から派生する、痩せた丘陵上に位置している。本地点に近接してツボノヤ遺跡が存在することから、それが当地点まで範囲が及んでいる可能性が想定されたため確認調査を行った（静岡埋文研2004b）。

調査では遺構は確認できず、古代～中世を中心に若干の遺物が出土した。

２　No.110地点採集遺物（第202図，第32表，図版76）

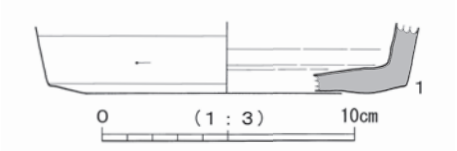
第202図１は、志戸呂の底部片であり、壺の可能性が高い。底部には高台が付けられておらず、底面・外面ともにヘラ削りの痕跡が明瞭に残る。小片のため時期を特定し難いが、近世に位置づけられる可能性が高い。

第32表　No.110地点出土遺物観察表

PL	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率	口径	器径	器高	底径	外面色調	内面色調	備考
76	表採	志戸呂	壺？	底部	15	－	－	－	(14.1)	灰褐(7.5YR6/2)	にぶい褐(7.5YR6/3)	近世

単位　残存率（%）　口径・底径・器高（cm）　括弧内は復原値

第201図　No.110地点の位置



第202図　No.110地点出土遺物実測図

第５節　鴨ノ前遺跡

１　鴨ノ前遺跡（No.111地点）の概要（第203図）

確認調査で遺構遺物が確認されたことから、本調査が実施され、すでに報告済（静岡埋文研2004）であるが、報告漏れの遺物があったことからここで追加して報告する。

２　鴨ノ前遺跡出土遺物（第204図，第33表，図版76）

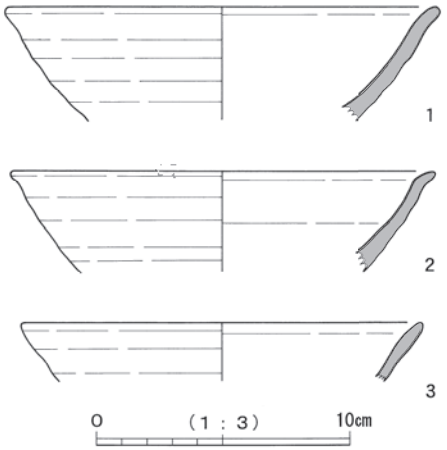
第204図１～３は山茶碗である。いずれも渥美湖西産である。底部まで残存していないことから、時期を特定することは難しいが、２は口縁部を外側に大きく屈曲させることから、松井一明氏編年山茶碗渥美湖西Ⅰ期１段階（松井1989）に、１は口縁部の外反度が弱いことから松井編年Ⅱ期に、３は口縁部が直線的に外上方へ向かって伸びることから松井編年Ⅲ期に位置づけられる可能性が高い。

第33表　鴨ノ前遺跡　出土遺物観察表

Fig	PL	出土位置	種別	器種	残存部位	残存率	口径	器径	器高	底径	外面色調	内面色調	備考
204	76		山茶碗	碗	口縁部	15	(17.4)	(17.4)	－	－	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	
204	76		山茶碗	碗	口縁部	12	(17.0)	(17.0)	－	－	灰白(10YR7/1)	灰白(2.5YR7/1)	
204	76		山茶碗	碗	口縁部	8	(16.0)	(16.0)	－	－	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	

単位　残存率（%）　口径・底径・器高（cm）　括弧内は復原値

第203図　鴨ノ前遺跡の位置



第204図　鴨ノ前遺跡出土遺物実測図

註（附編）

１　山茶碗の分類と編年的位置づけについては、袋井市教育委員会　松井一明氏に御教示頂いた。明記して深謝します。

参考文献（附編）

赤羽一郎・中野晴久　1994　「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって資料集』　日本福祉大学

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004　『森町睦実の遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2005　『掛川市大和田・平島の遺跡』

松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会

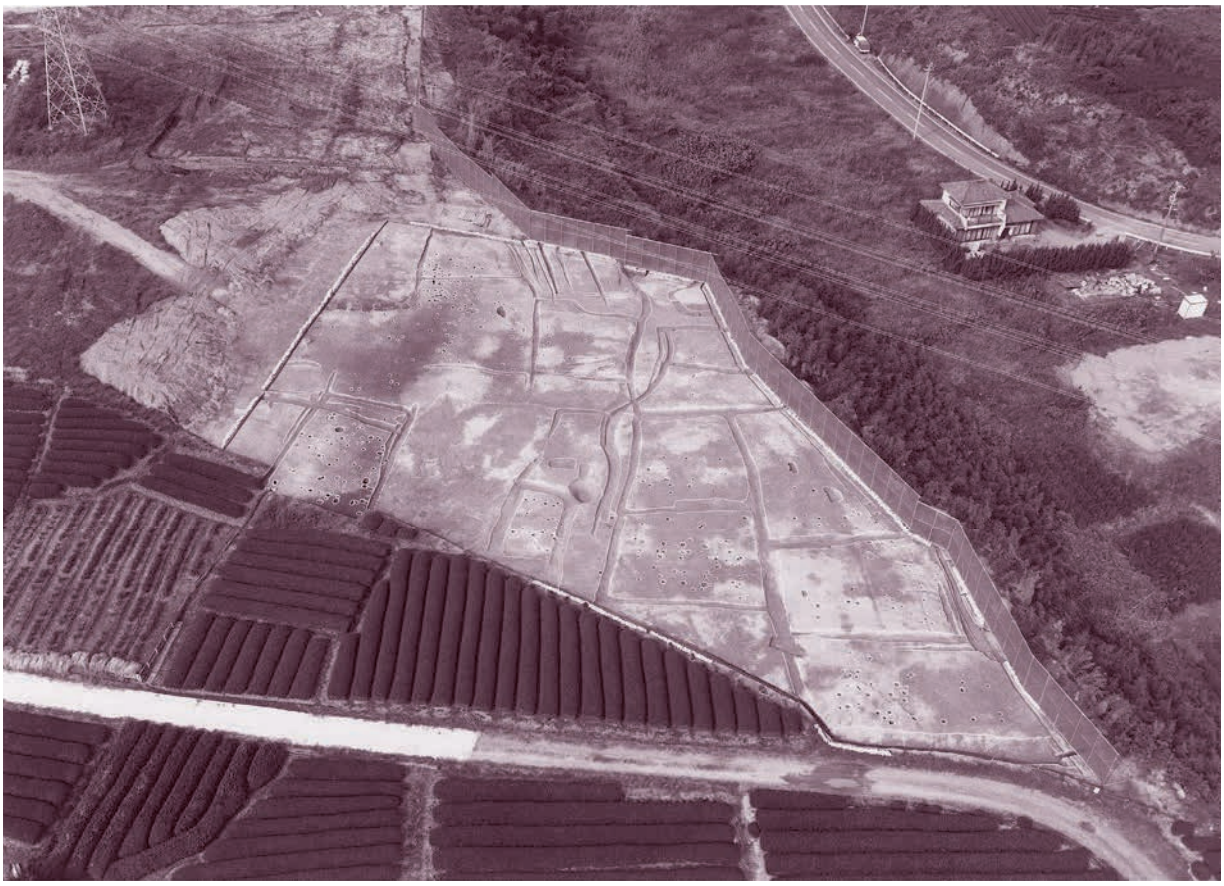
図　版

図版１

１.北垣遺跡　遠景（南から）　中央の丘陵が円田丘陵

２.北垣遺跡　調査区全景（南東から）　３区調査中

図版２



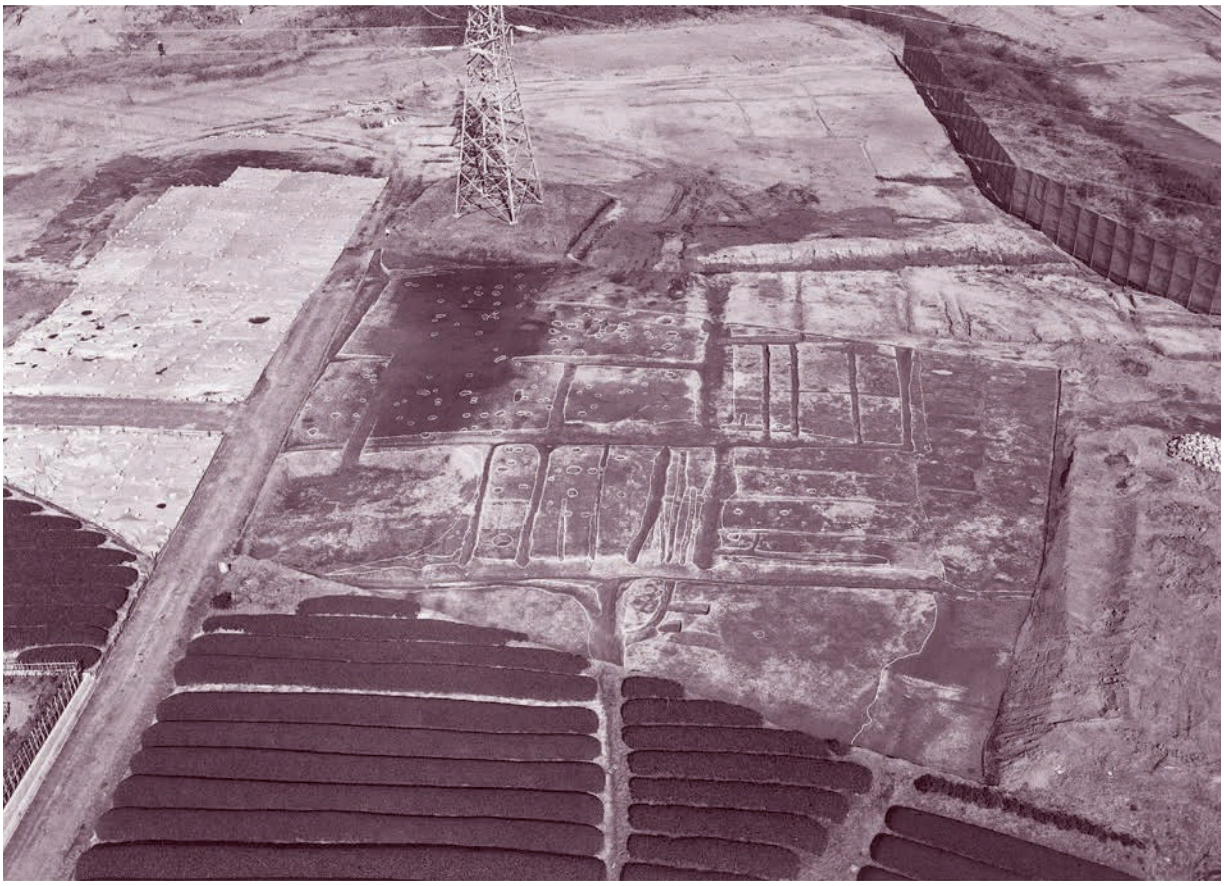
１.北垣遺跡１区　完掘状況全景（南から）

２.北垣遺跡１区　完掘状況全景（西から）

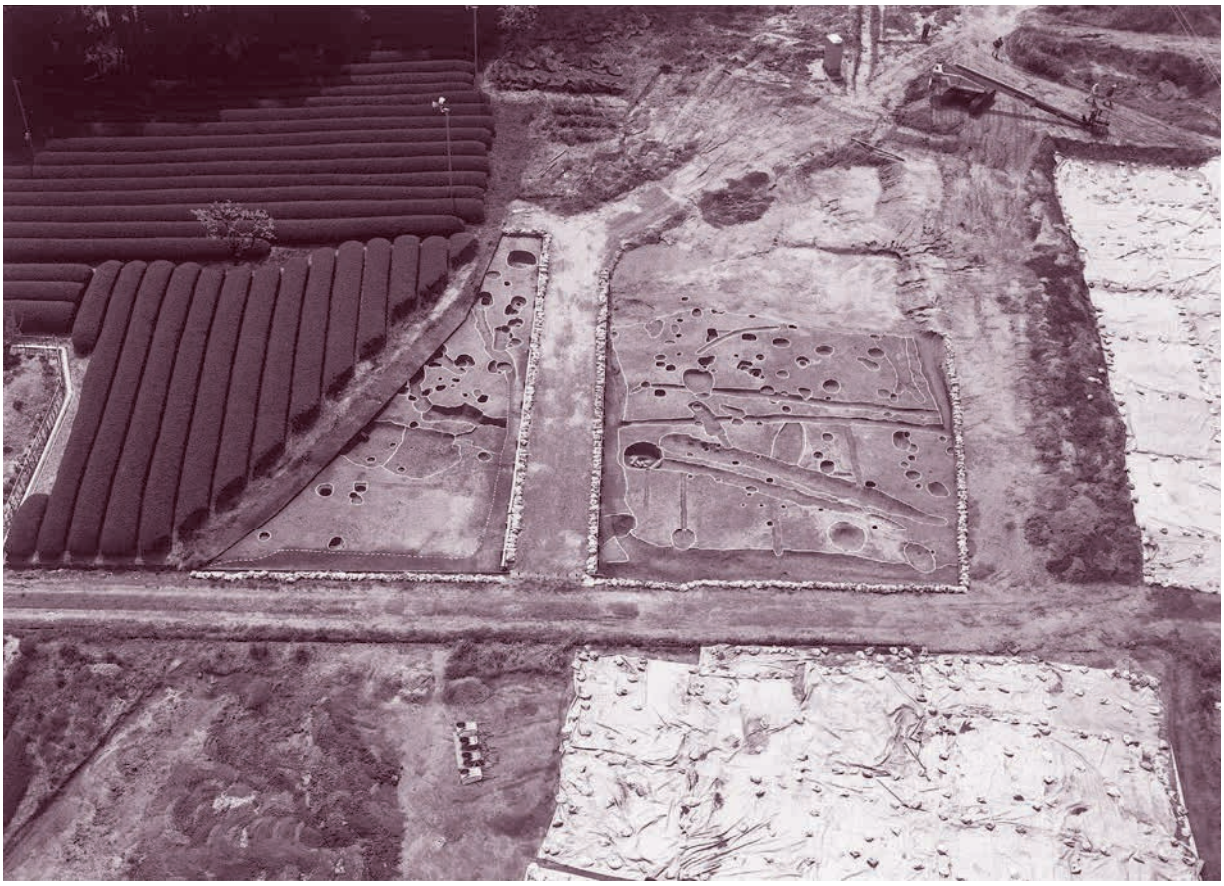
１.北垣遺跡２区　完掘状況全景（南東から）

２.北垣遺跡３区　完掘状況全景（南東から）

図版４



１.北垣遺跡３区東側　完掘状況全景（南から）



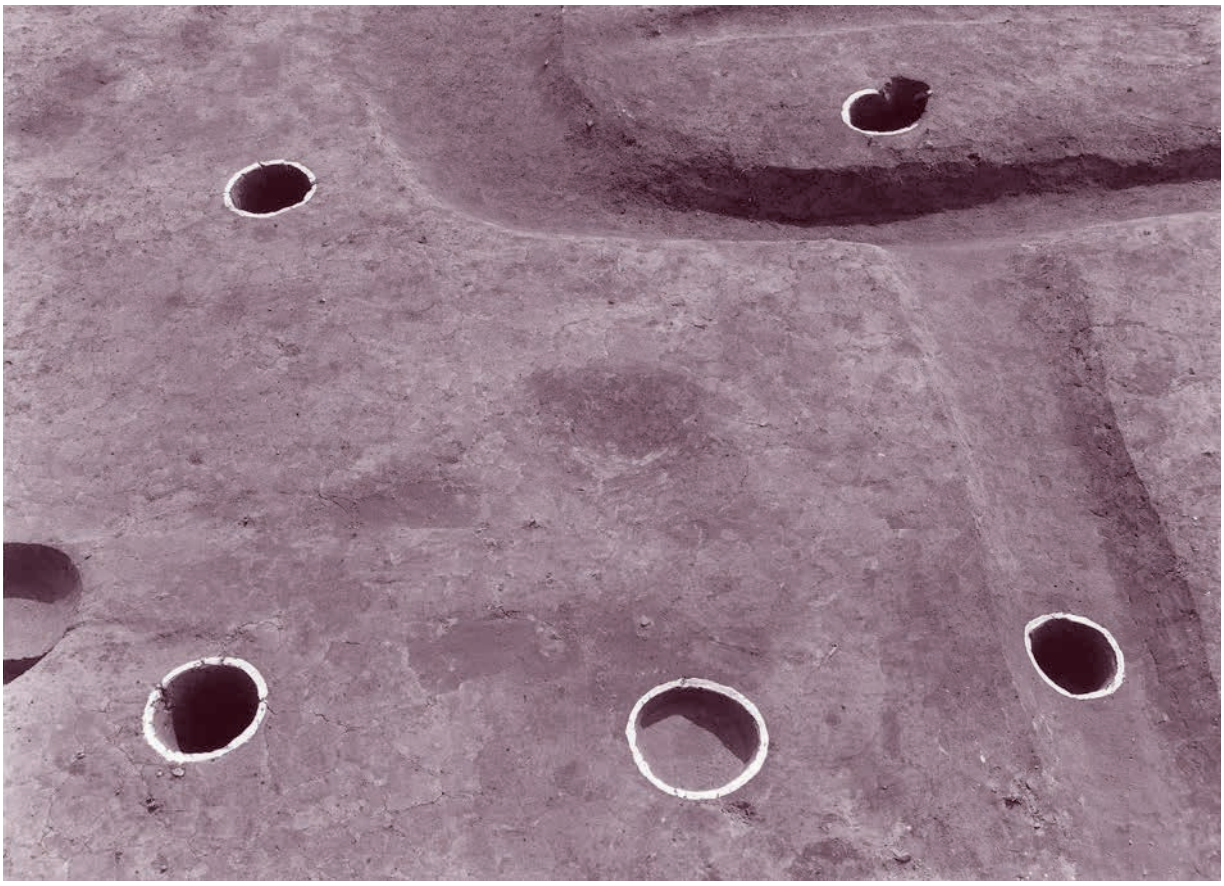
２.北垣遺跡３区西側　完掘状況全景（東から）

図版５

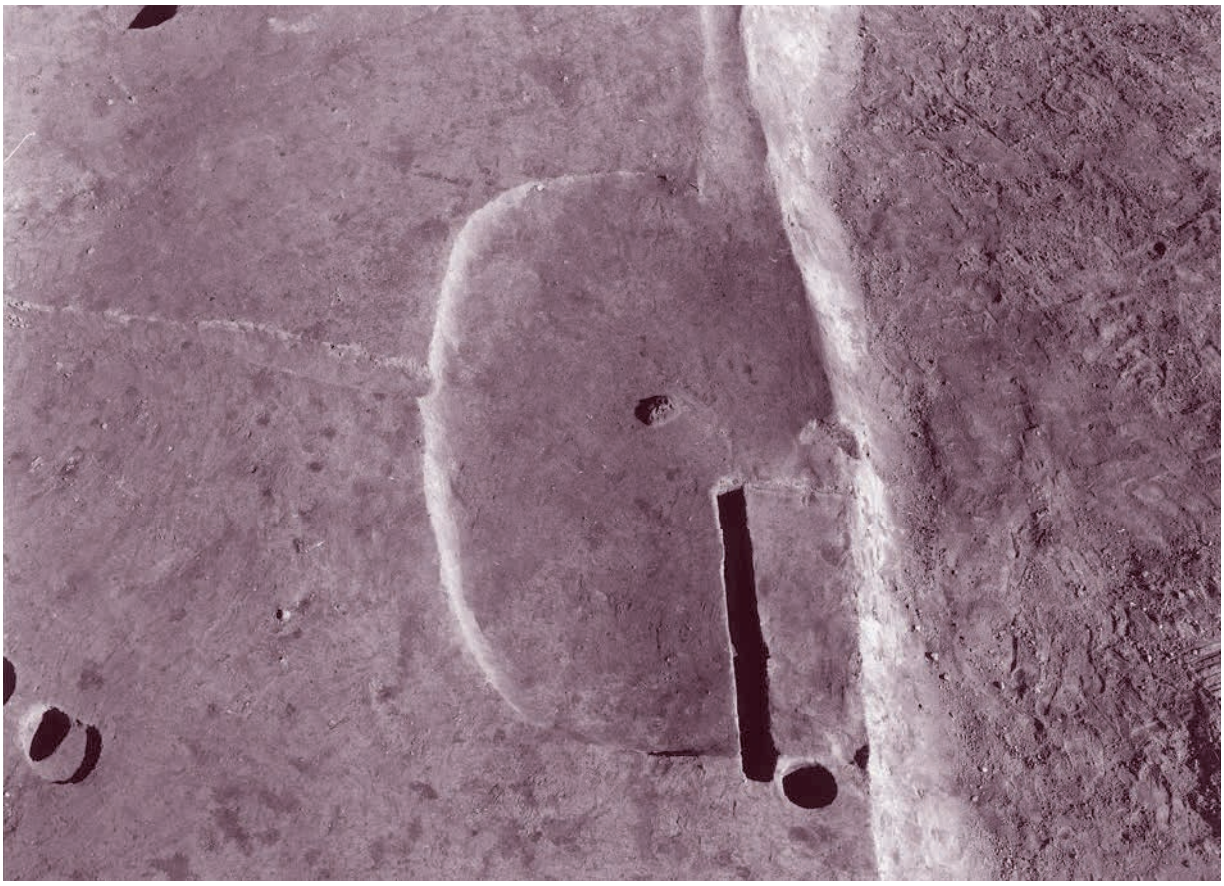
北垣遺跡　空中写真（上空から）　合成写真

図版６

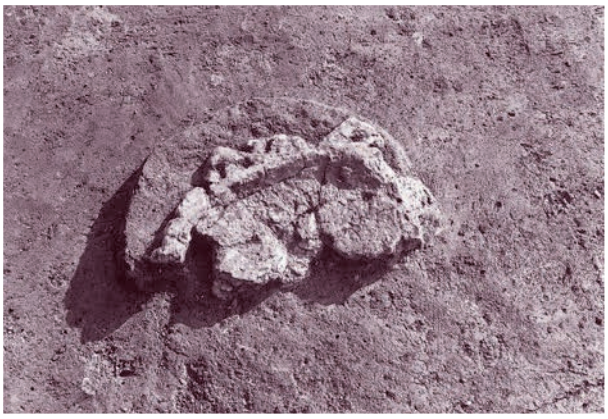
１.SH14　完掘状況（北から）



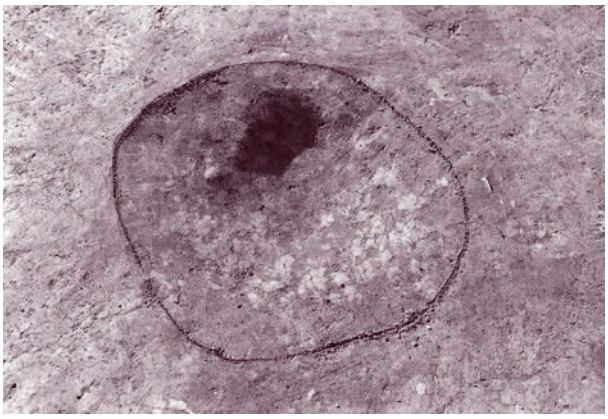
２.SH01　完掘状況（北から）



１.SH05　完掘状況（西から）



２.SH14　炉（北から）



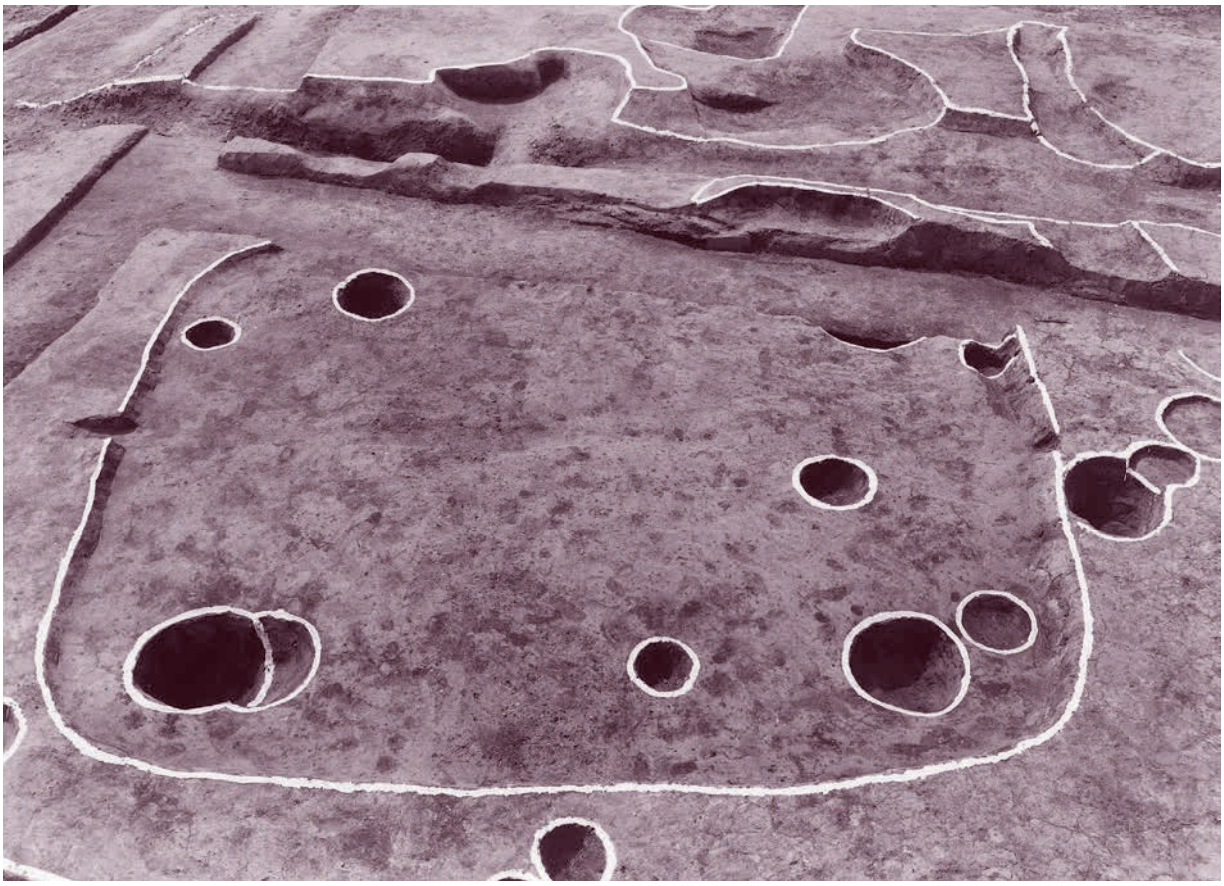
３.SH01　炉（北から）

４.SH05　炉（西から）

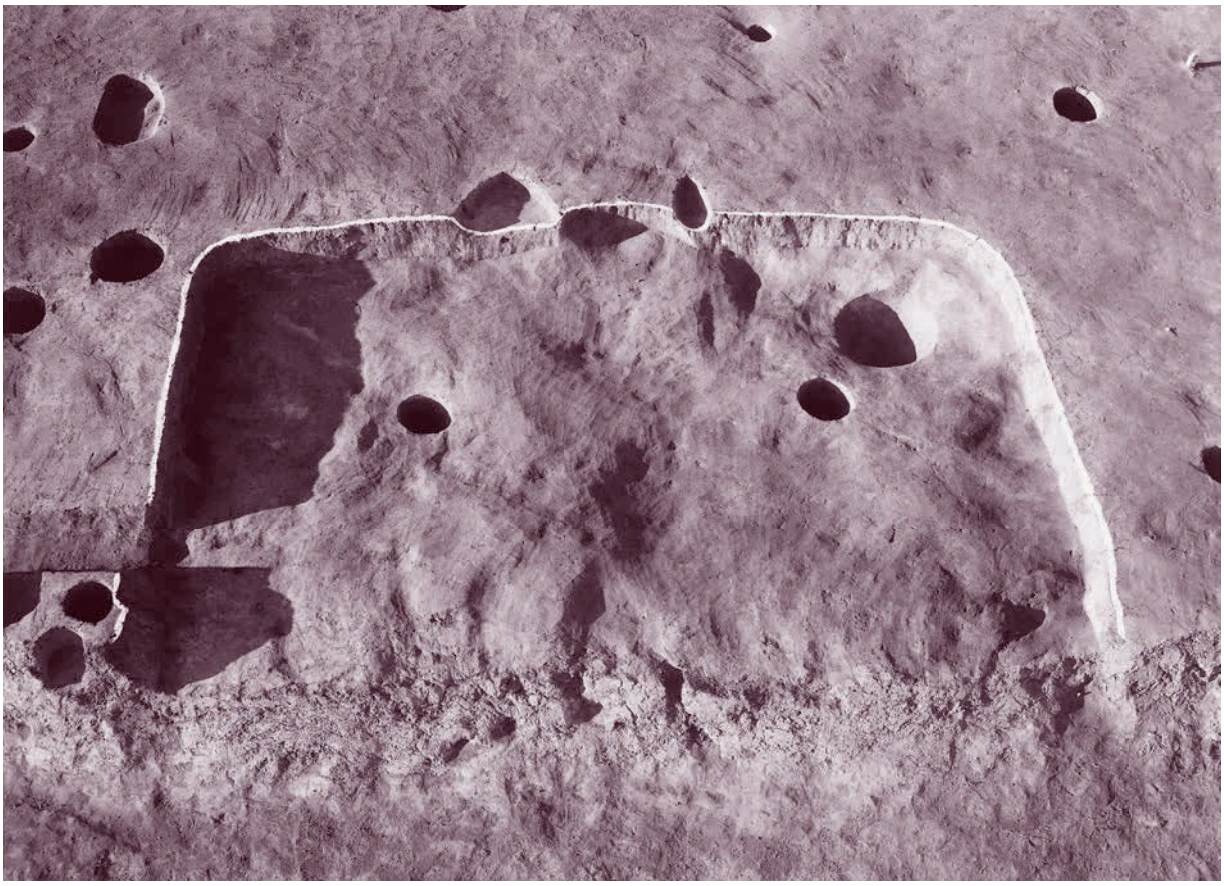
５.SH15　炉（東から）

図版８

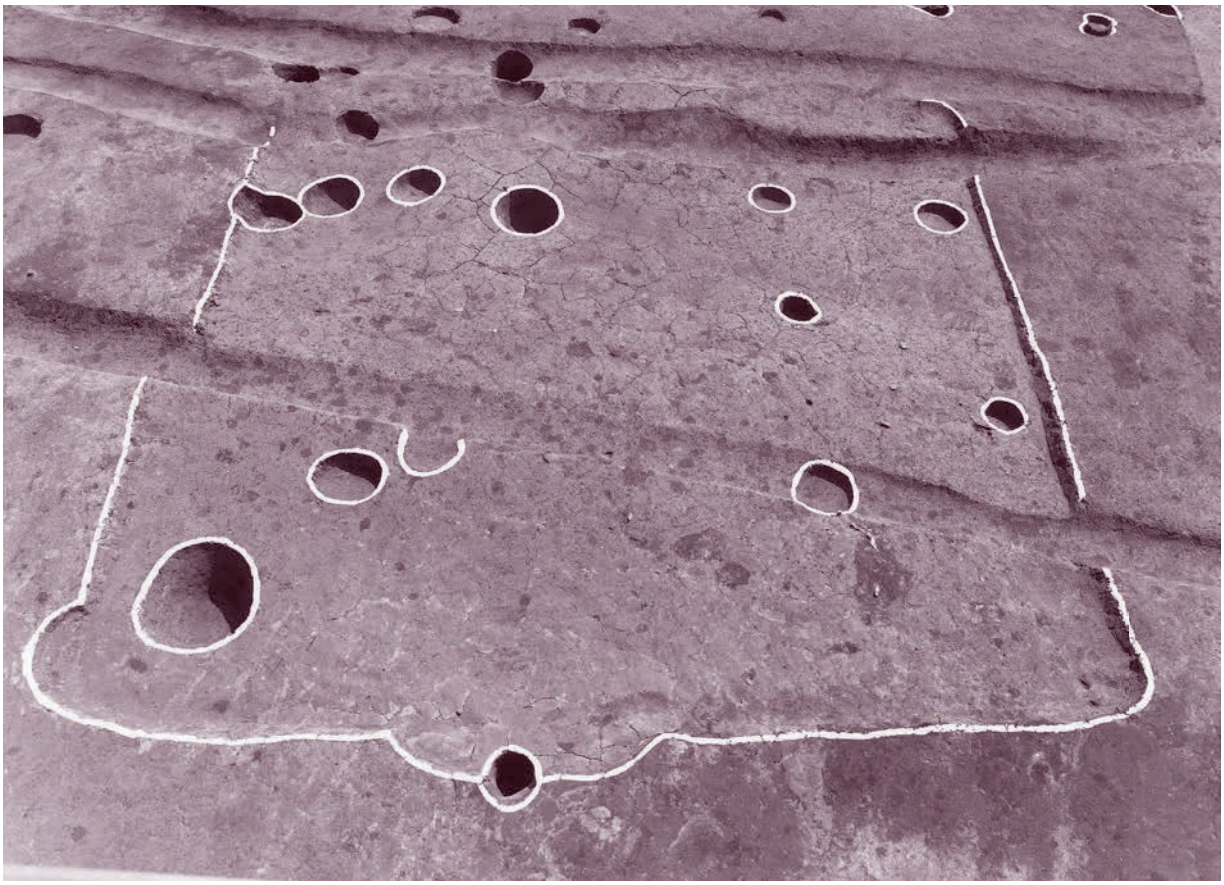
１.SH04　完掘状況（南から）



２.SH15　完掘状況（東から）



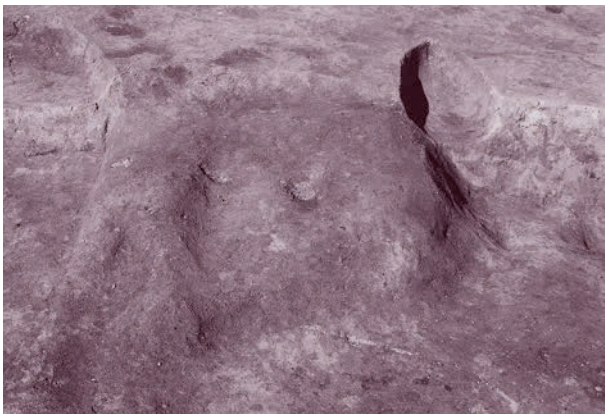
１.SH06　完掘状況（南から）



５.SH13　完掘状況（北から）

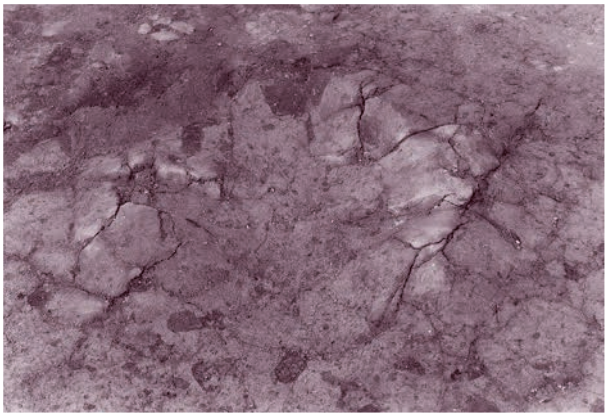
図版10

1.SH12　完掘状況（西から）



2.SH06　竈（南から）

3.SH12　遺物出土状況（南から）



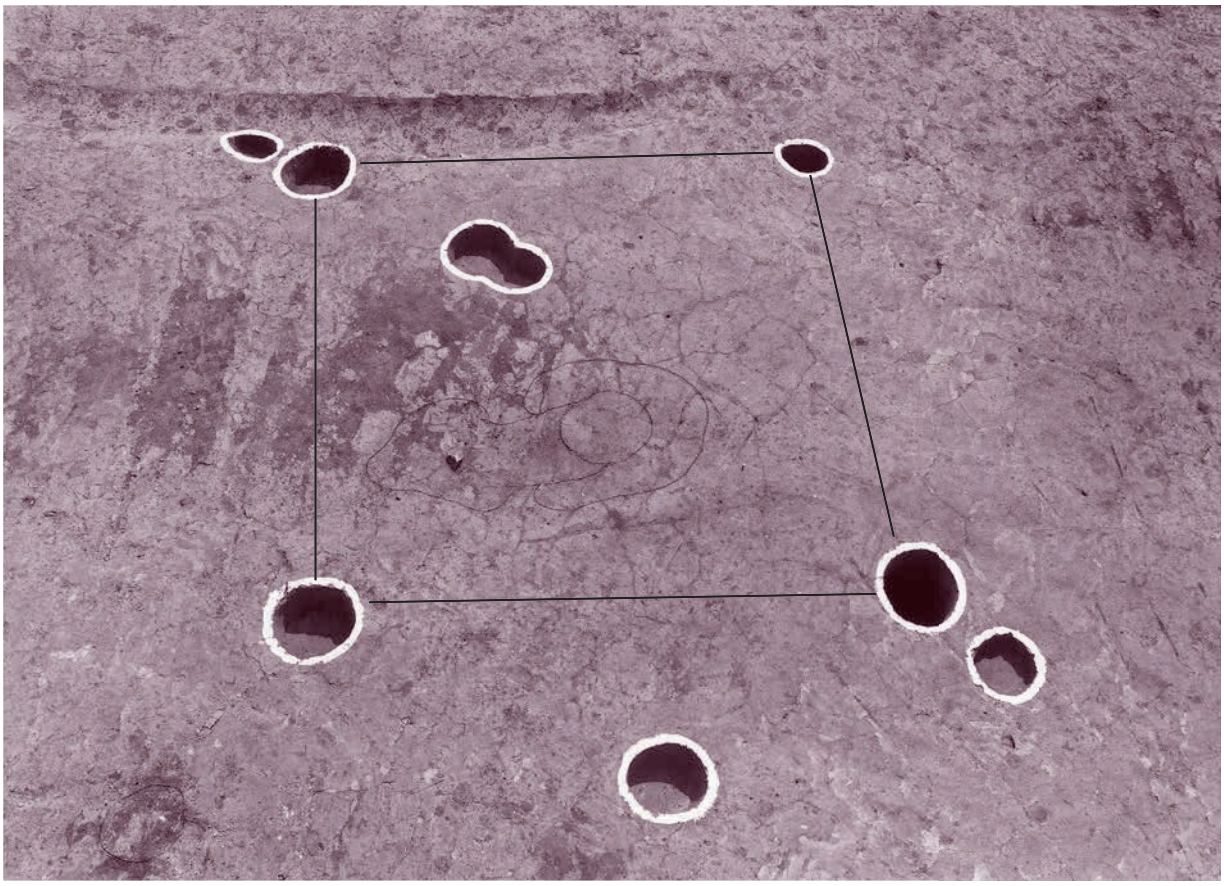
4.SH13　竈（南から）

5.SH13　貯蔵穴遺物出土状況　（南から）

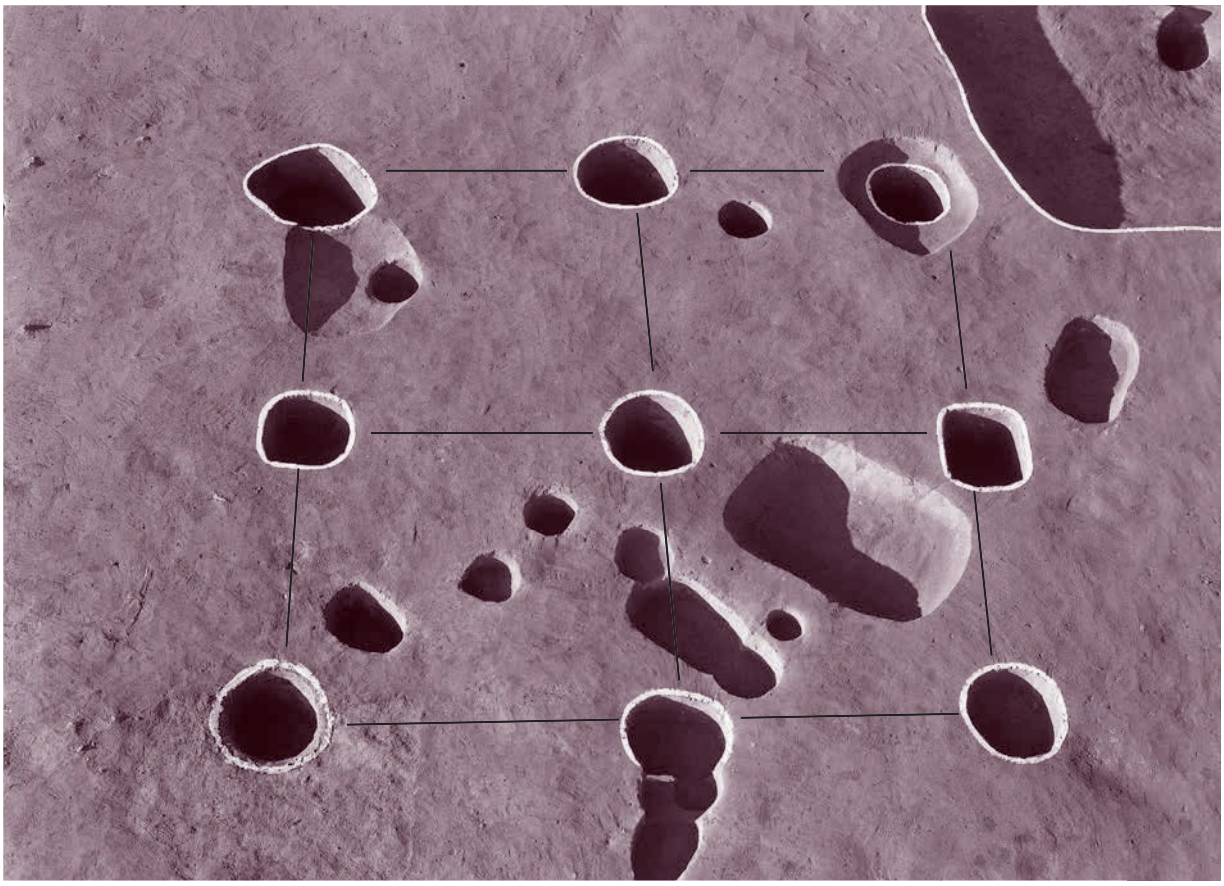
1.SH07　完掘状況（南から）

2.SH11　完掘状況（東から）

図版12

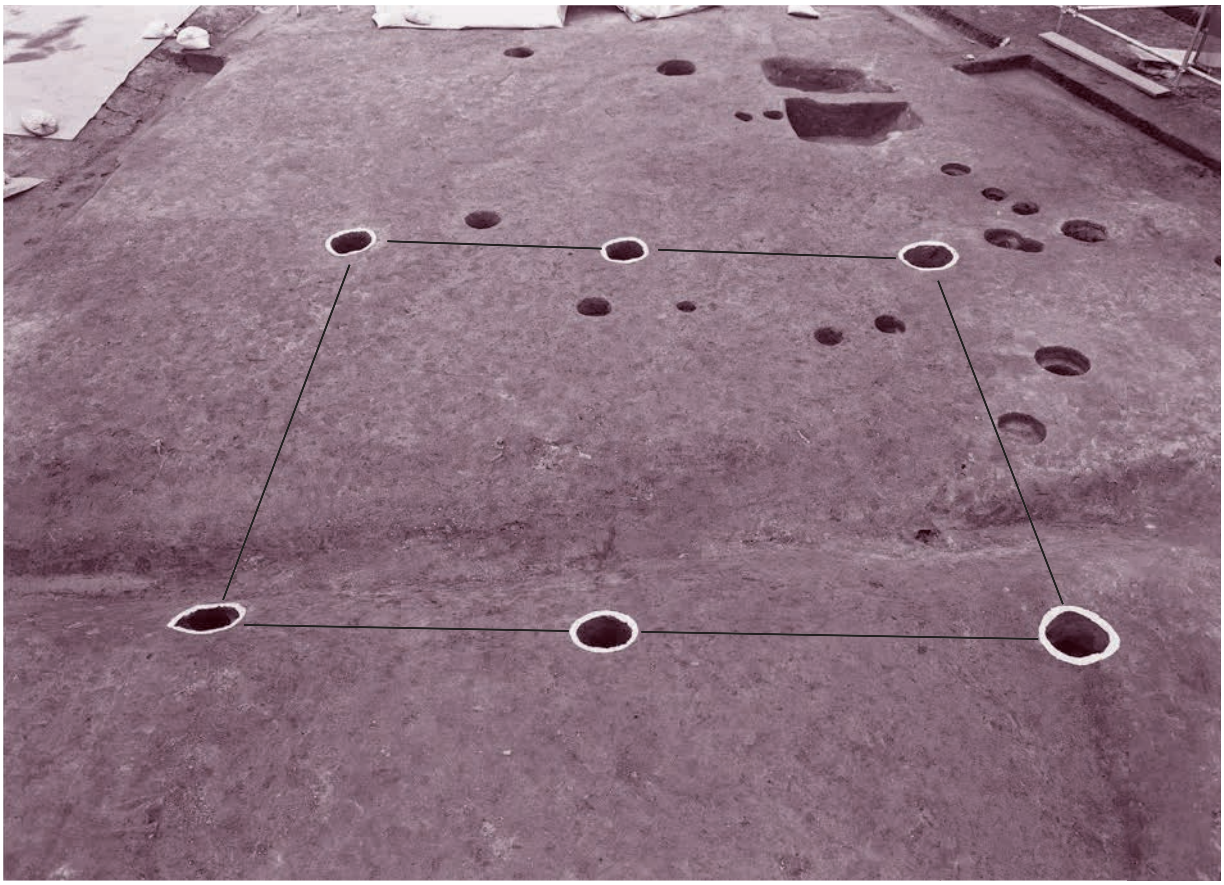


1.SH03　完掘状況（北から）



2.SB01　完掘状況（南から）

1.SB03　完掘状況（南から）



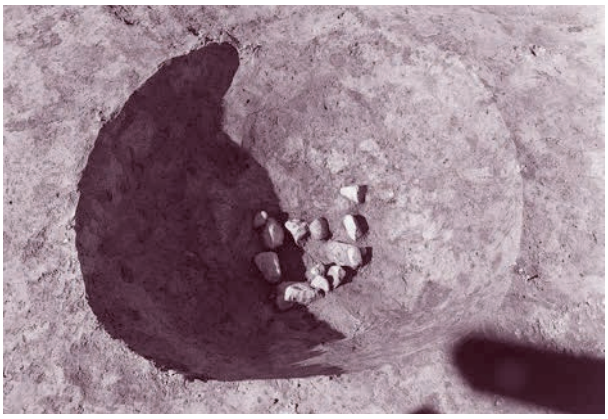
2.SB66　完掘状況（南から）

図版14

1.SB03-P３　遺物出土状況（北から）

３.SK60　遺物出土状況(南から）

２.SK49　遺物出土状況（北から）



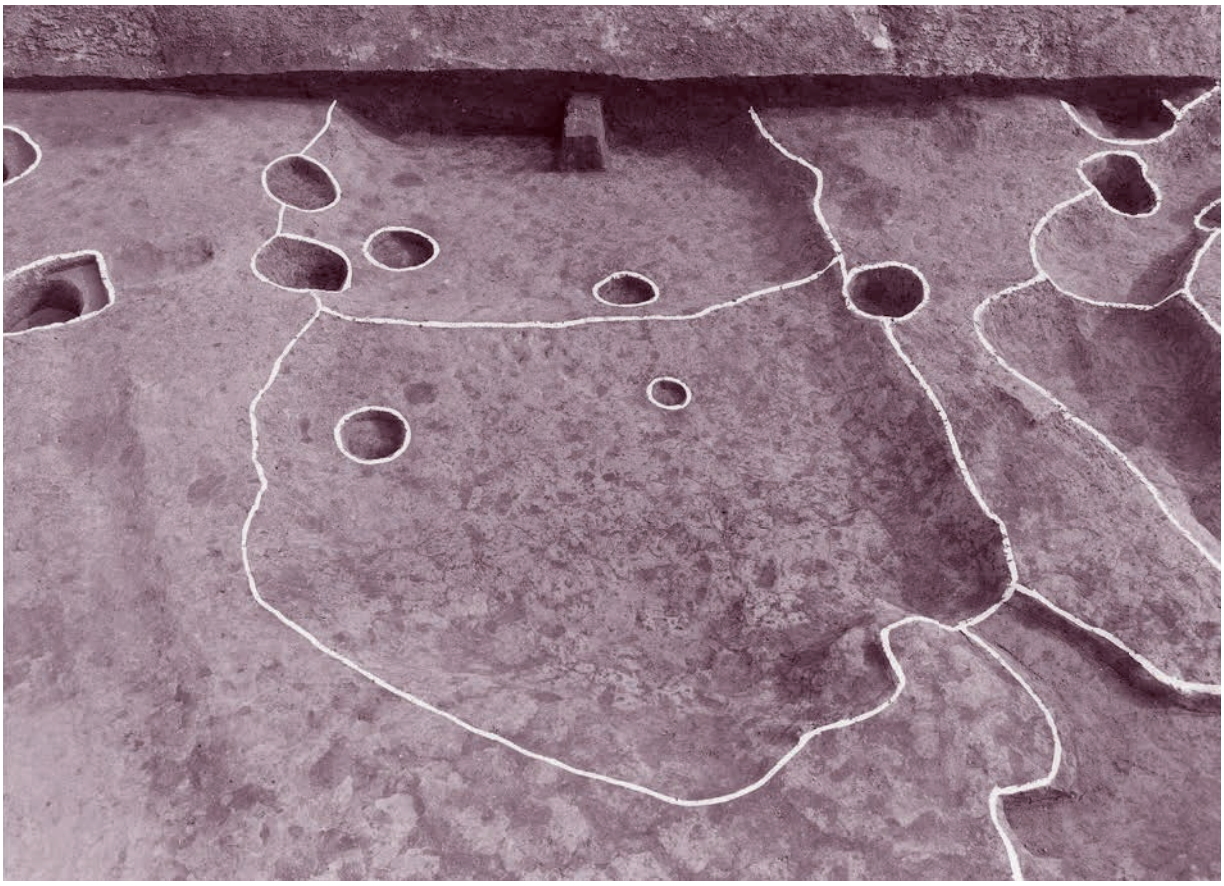
４.SK60　完掘状況（南から）

５.SK28　完掘状況（東から）

６.SK28　遺物出土状況①（北から）

７.SK28　遺物出土状況②（北から）

1.SK26・28・29　完掘状況（南から）

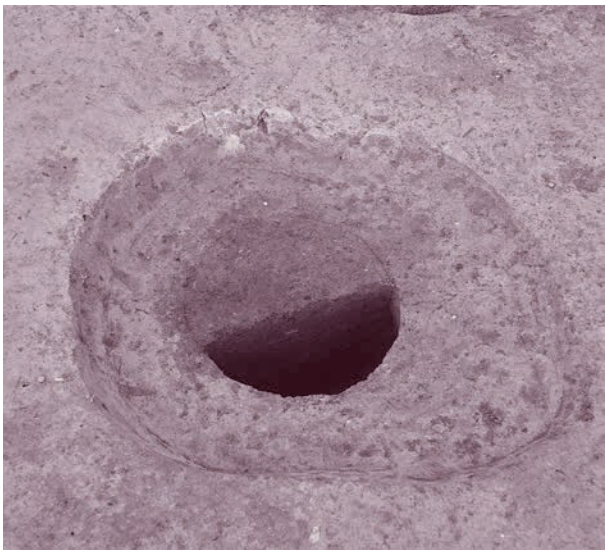


2.SX07・08　完掘状況（北から）

図版16

1.SK50　検出状況（北から）

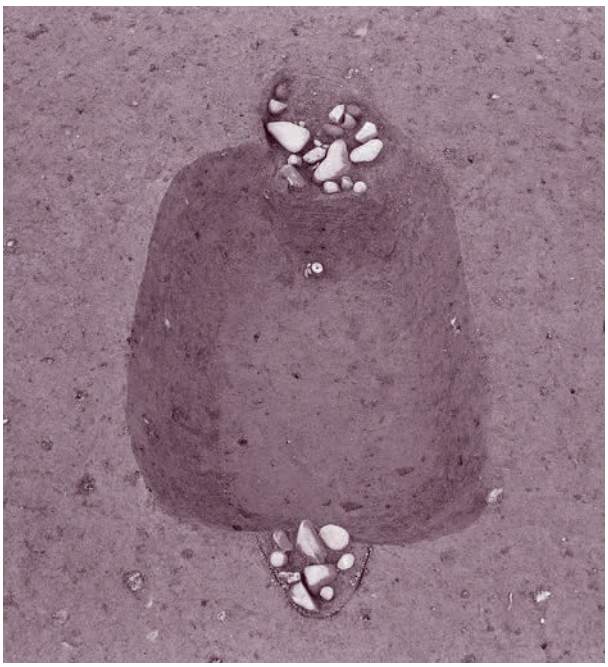
2.SK06　検出状況（南から）



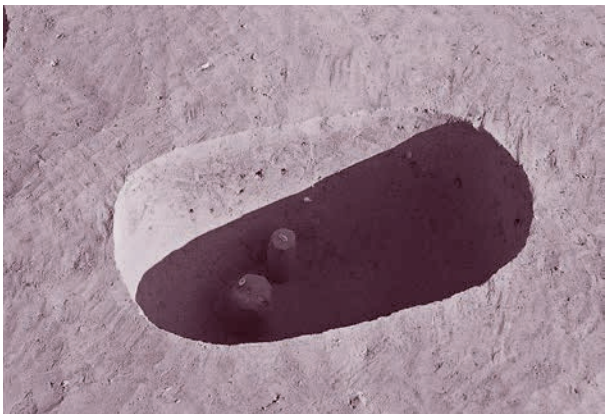
3.SK06　完掘状況（西から）

4.SK07　検出状況（西から）

5.SK09　検出状況（南から）



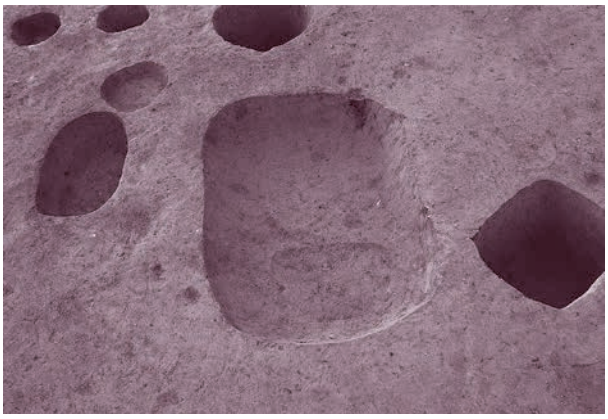
6.SK02　完掘状況（南東から）



1.SK03　完掘状況（西から）

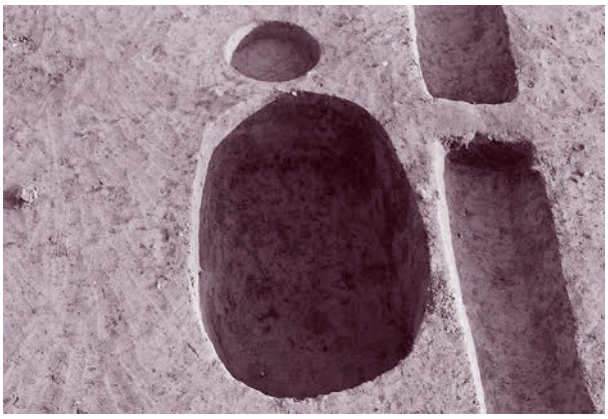
5.SK05　完掘状況（東から）

2.SK03　遺物出土状況（北西から）

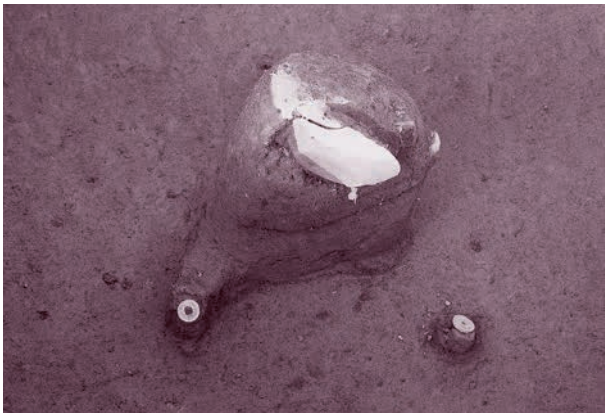


6.SK08　完掘状況（西から）

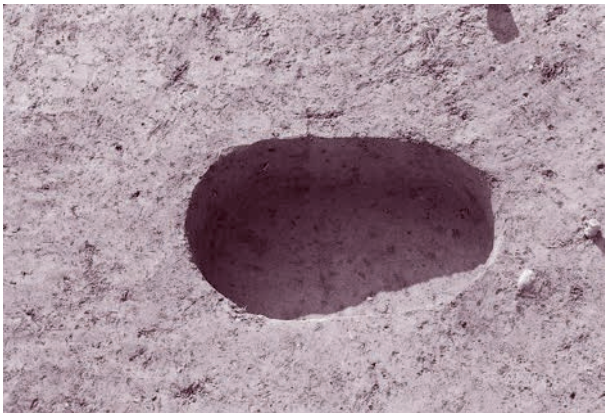
3.SK04　完掘状況（南から）



7.SK10　遺物出土状況（南東から）



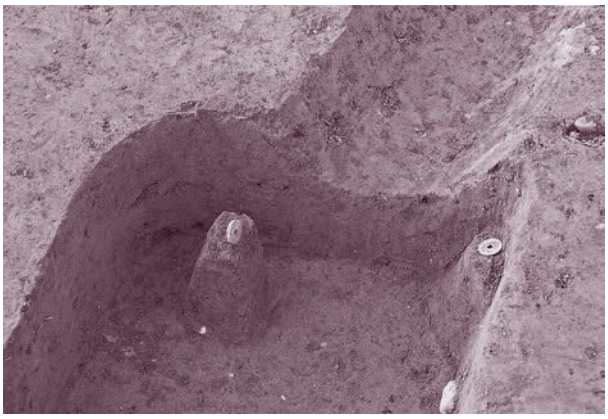
4.SK04　遺物出土状況（南から）



8.SK12　完掘状況（東から）

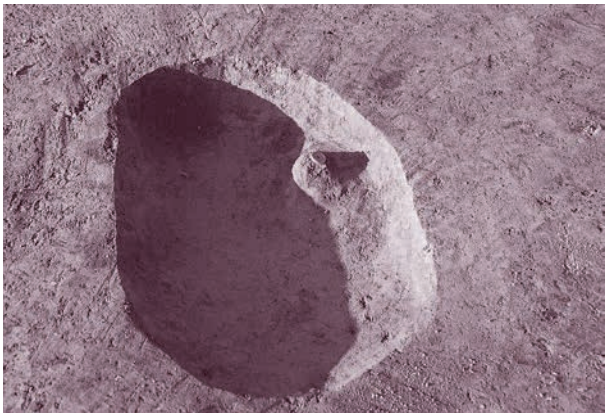
図版18

1.SK11　完掘状況（南東から）



2.SK11　遺物出土状況（南から）

3.SK13　完掘状況（南東から）



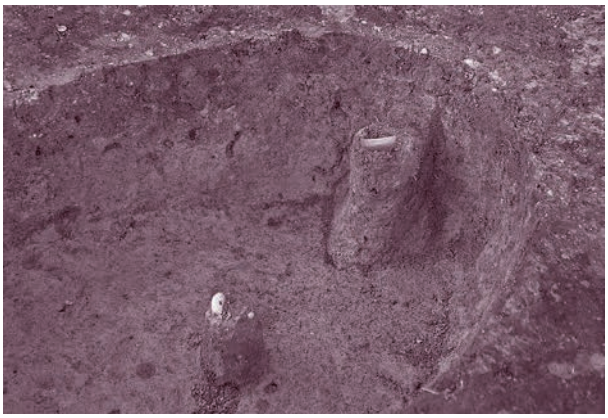
4.SK14　完掘状況（南東から）

5.SK18　完掘状況（南から）

6.SK21　検出状況（北から）

7.SK21　完掘状況（西から）

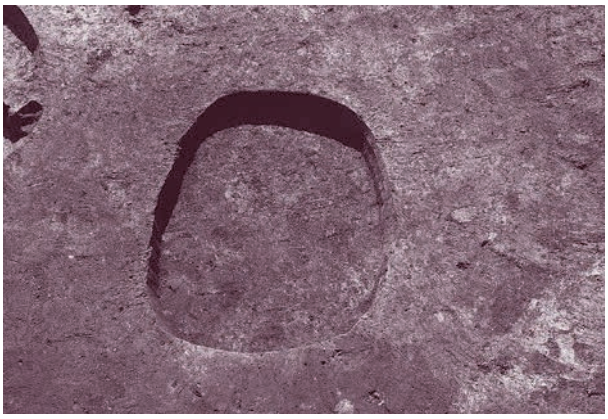
1.SK22　完掘状況（東から）



5.SK30　遺物出土状況（南東から）

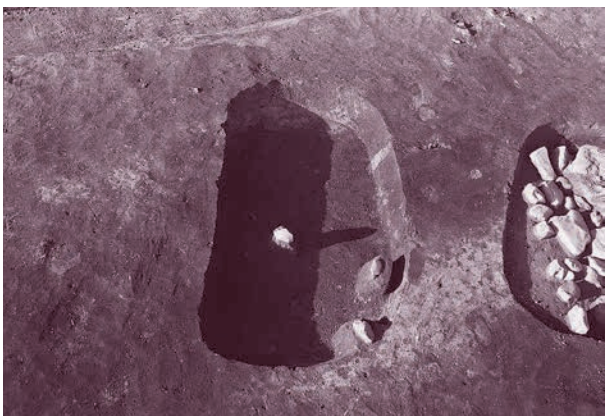
2.SK23　完掘状況（北西から）

6.SK31　完掘状況（西から）



3.SK24　完掘状況（北から）

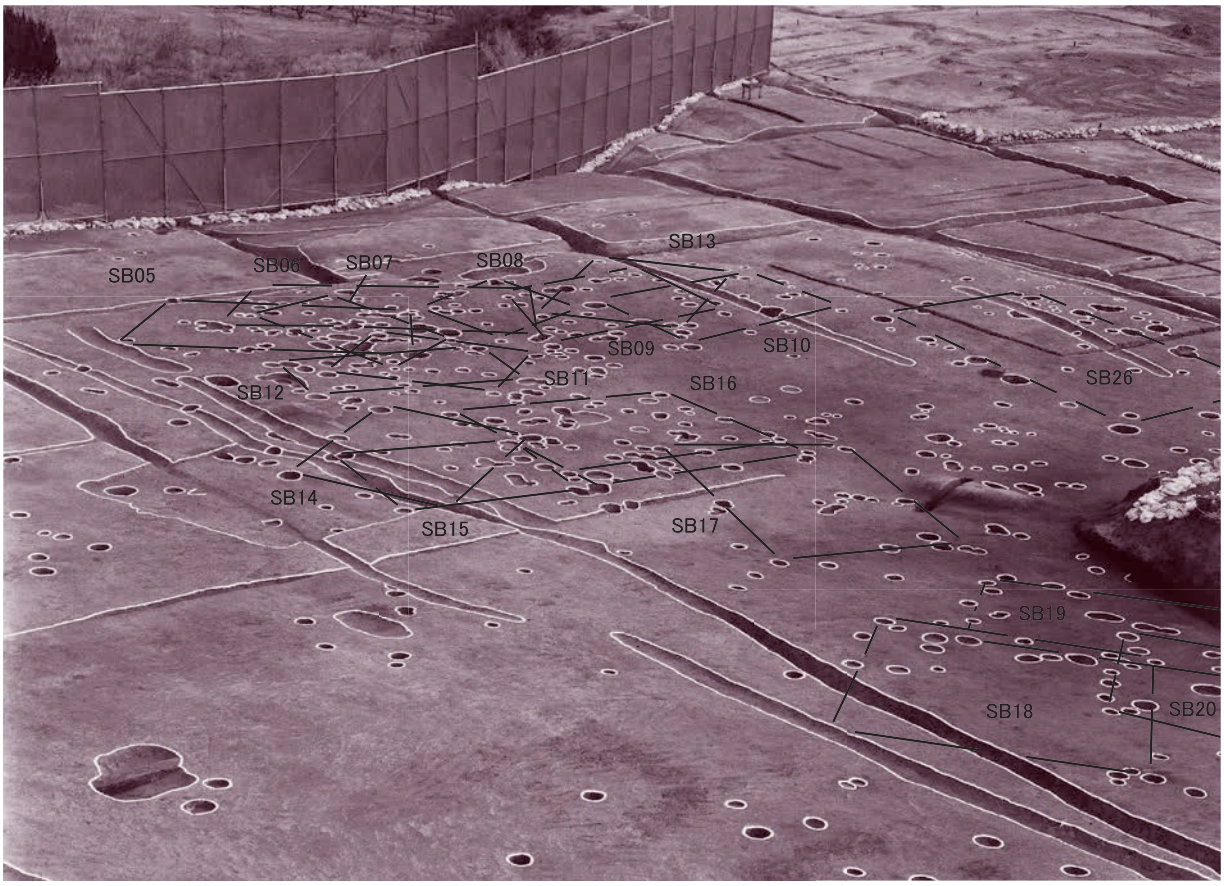
7.SK31　遺物出土状況（南西から）



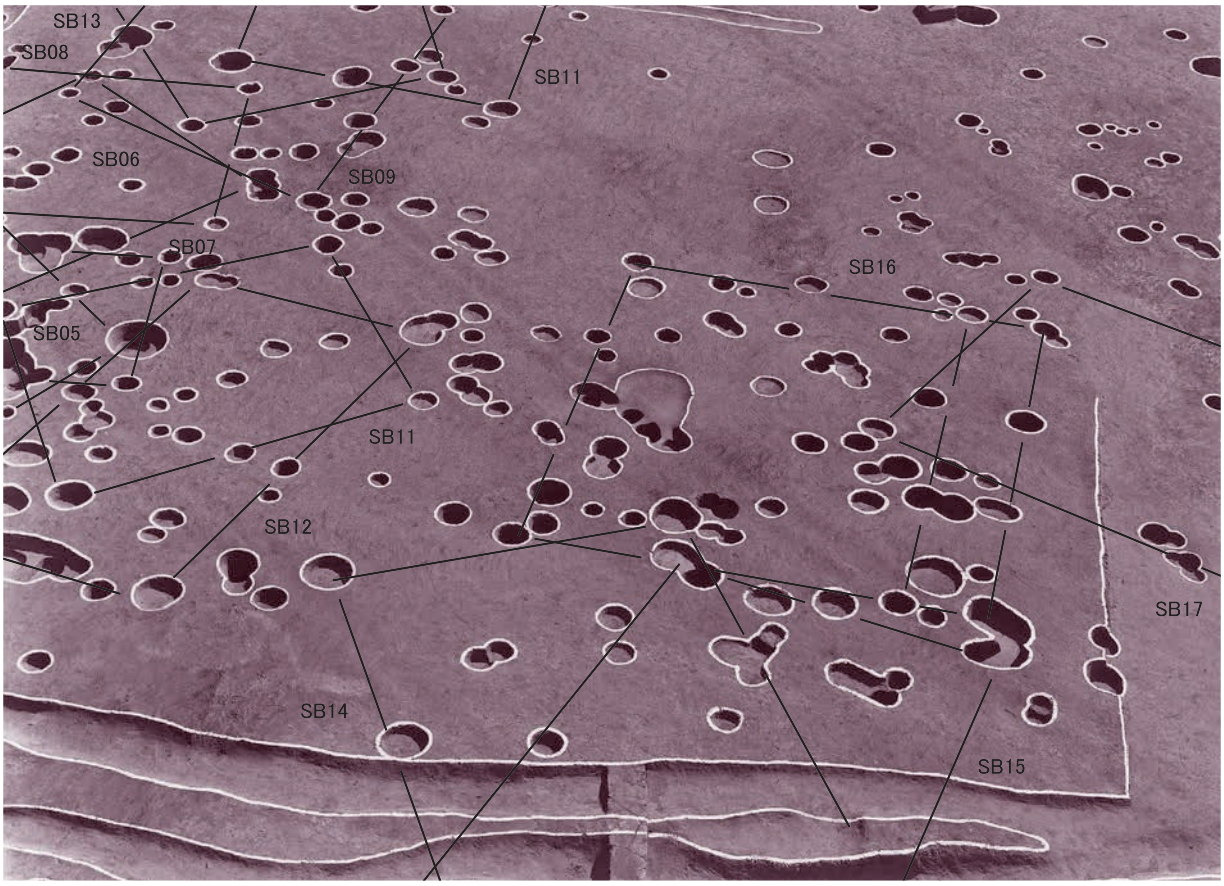
4.SK25　完掘状況（南から）

8.SK32　完掘状況（南東から）

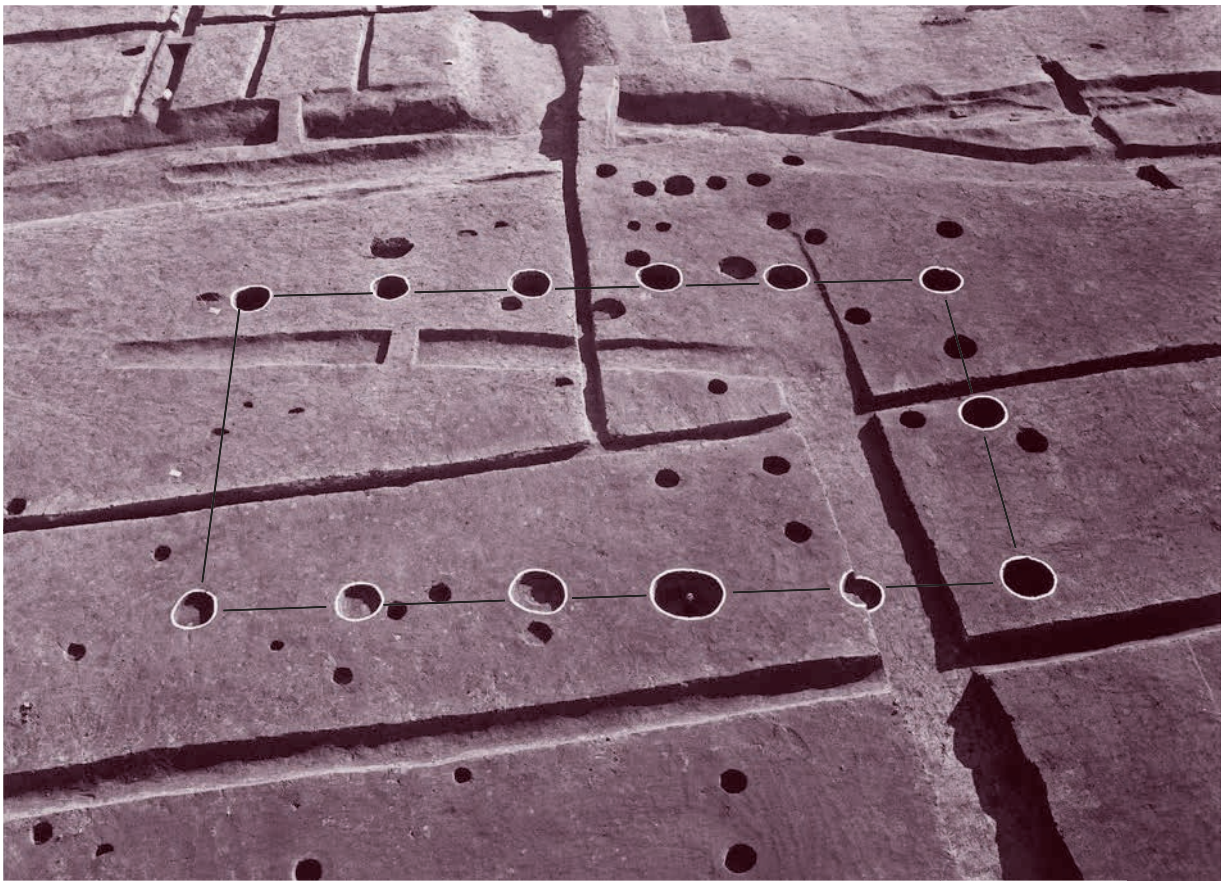
図版20



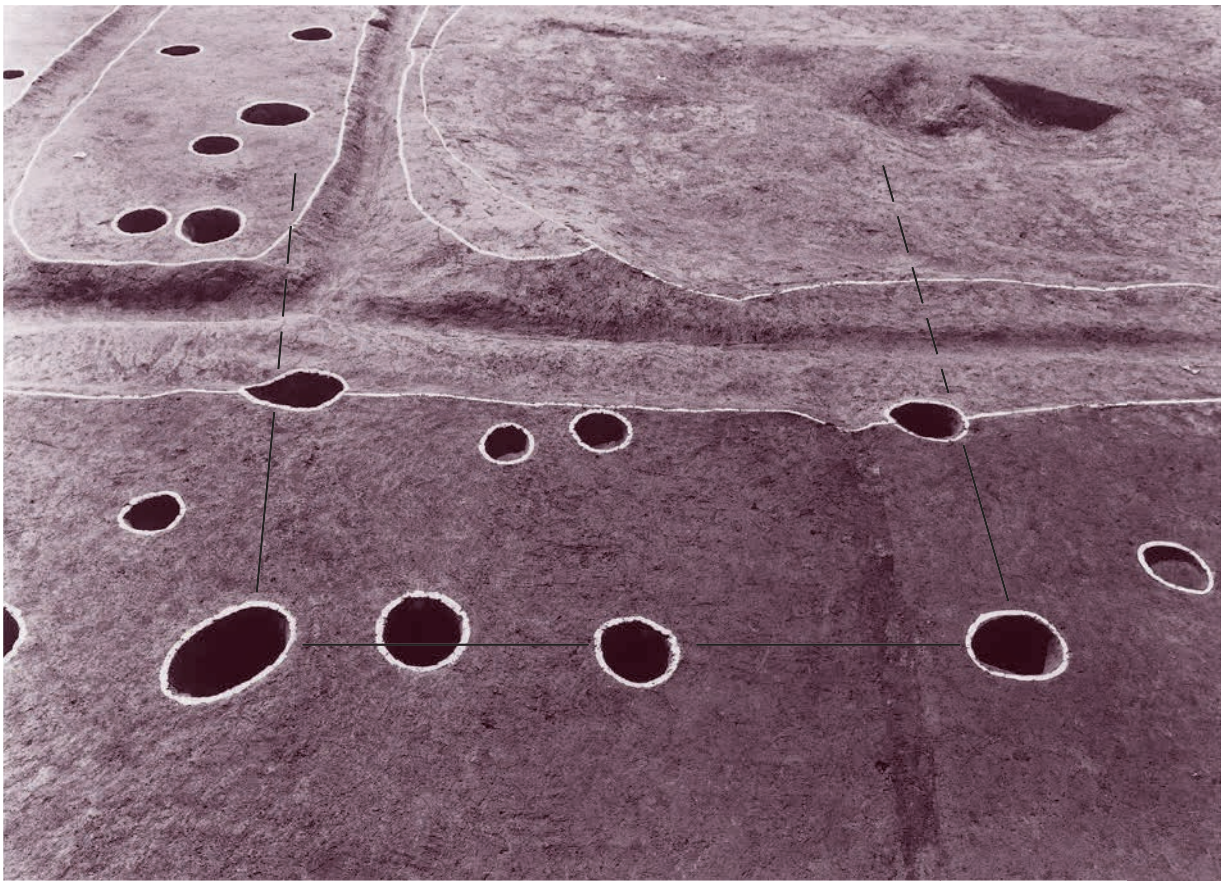
1.2区中央掘立柱建物群　完掘状況（SB14ほか，北西から）



2.SB14周辺掘立柱建物　完掘状況（北から）

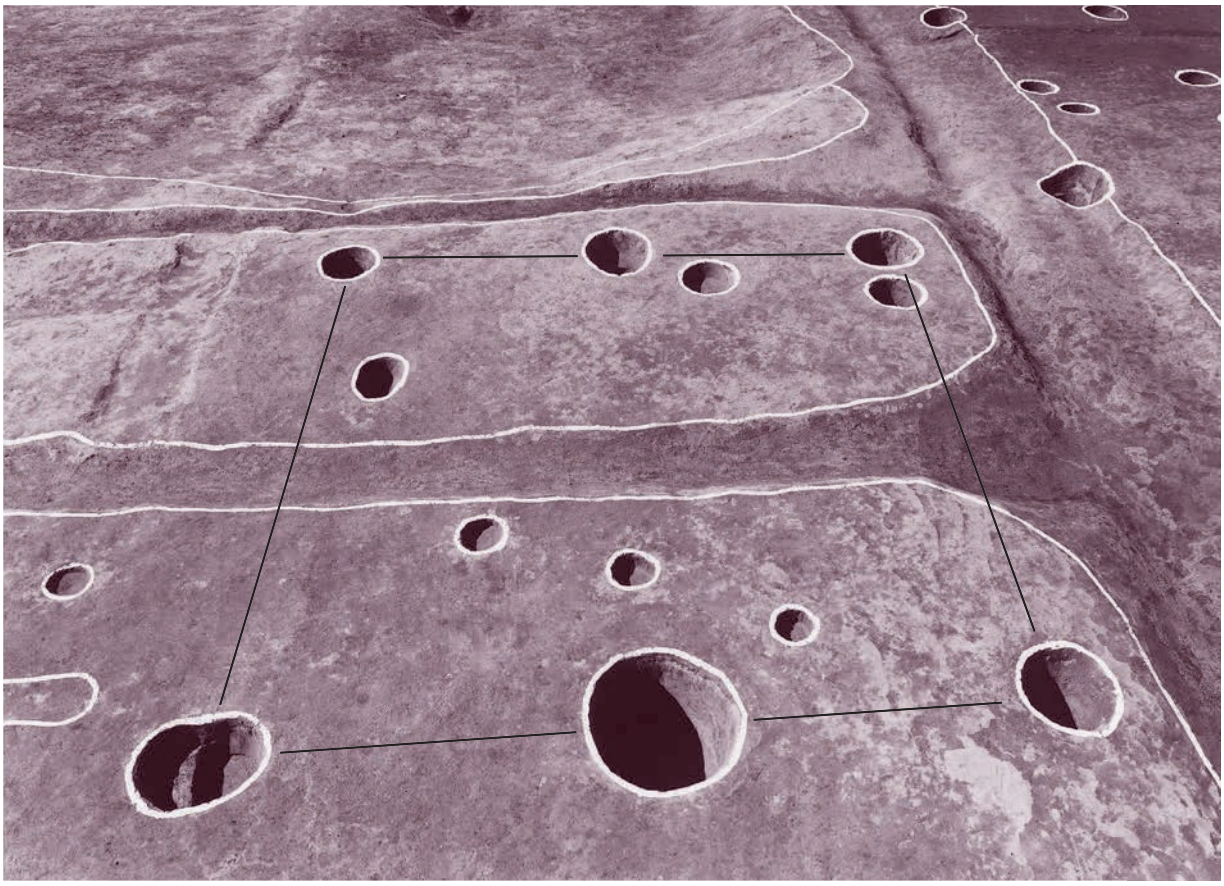


1.SB26　完掘状況（北から）



2.SB39　完掘状況（北から）

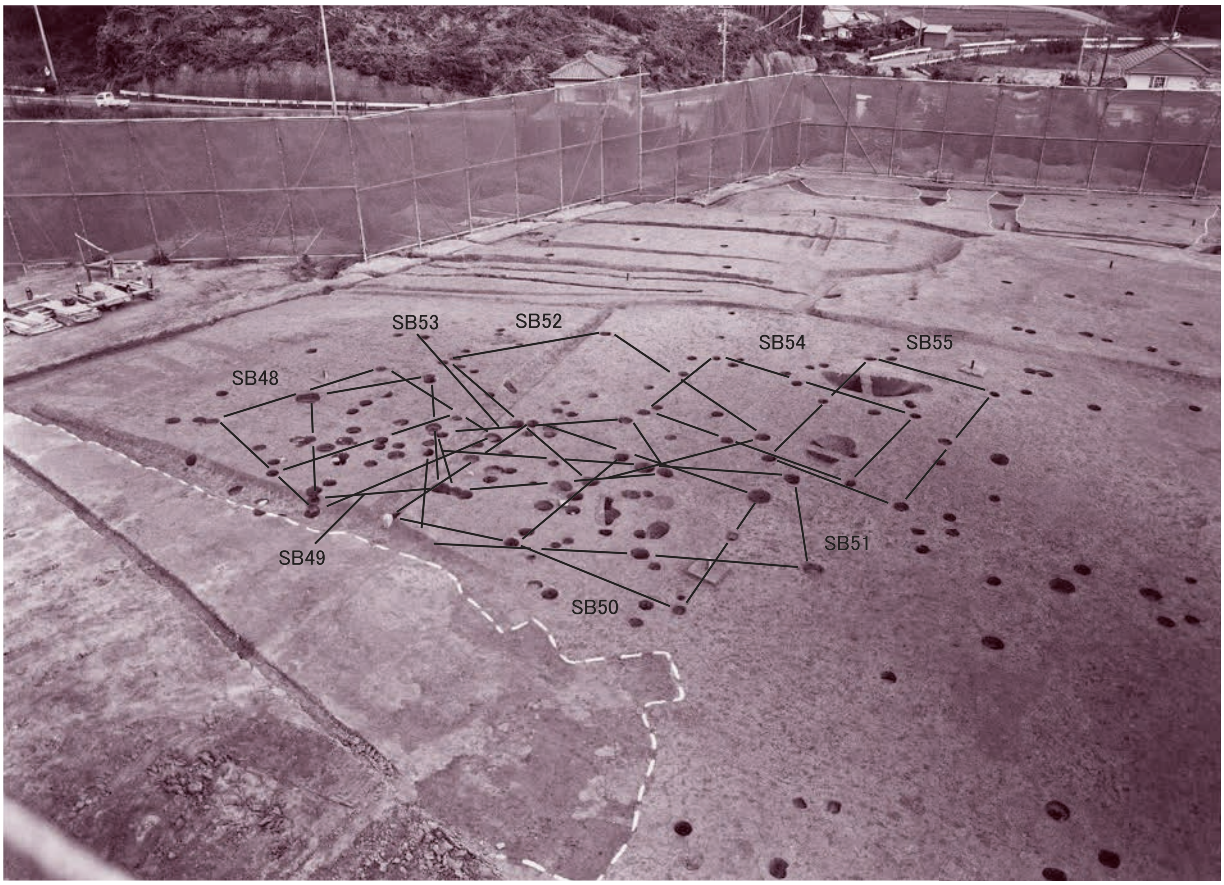
図版22



1.SB41　完掘状況（東から）

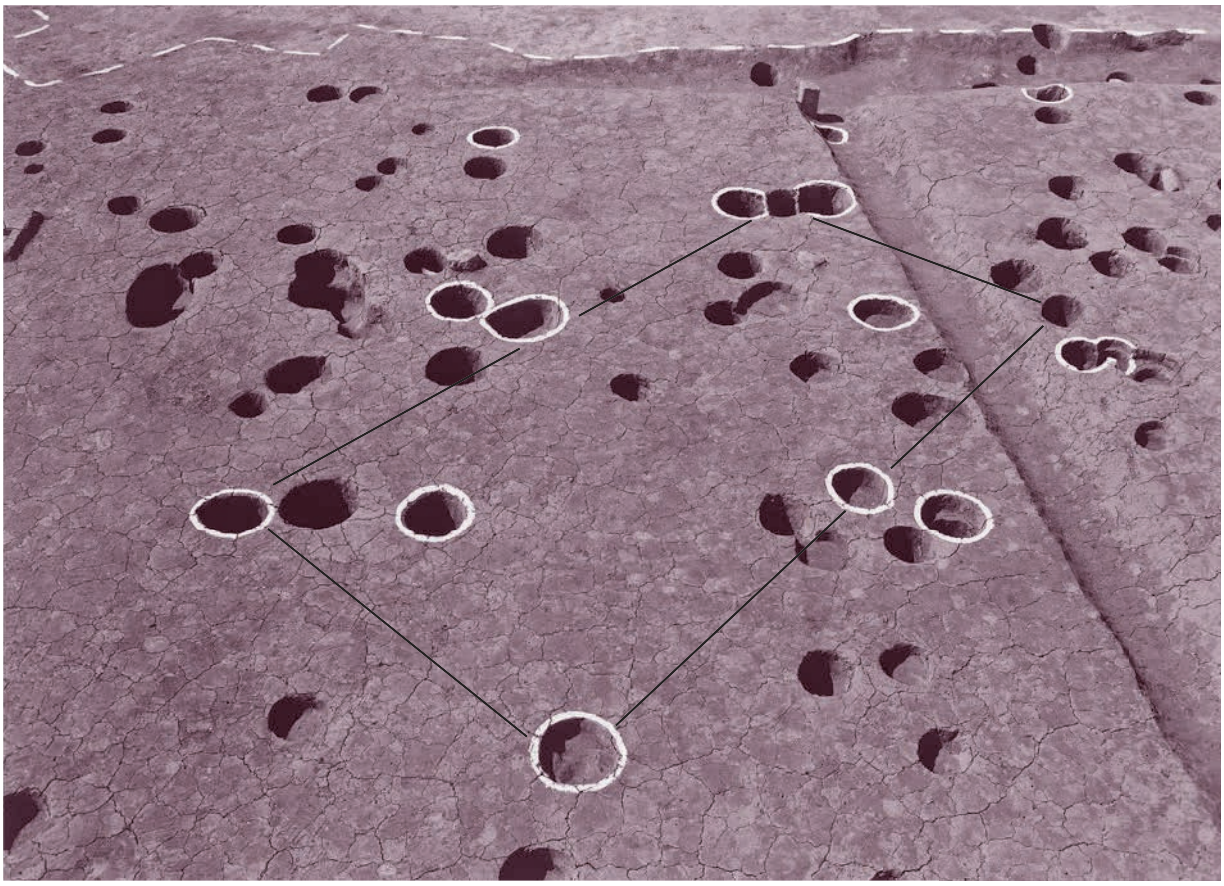
2.SB43　完掘状況（西から）

1.SB49　完掘状況（南東から）

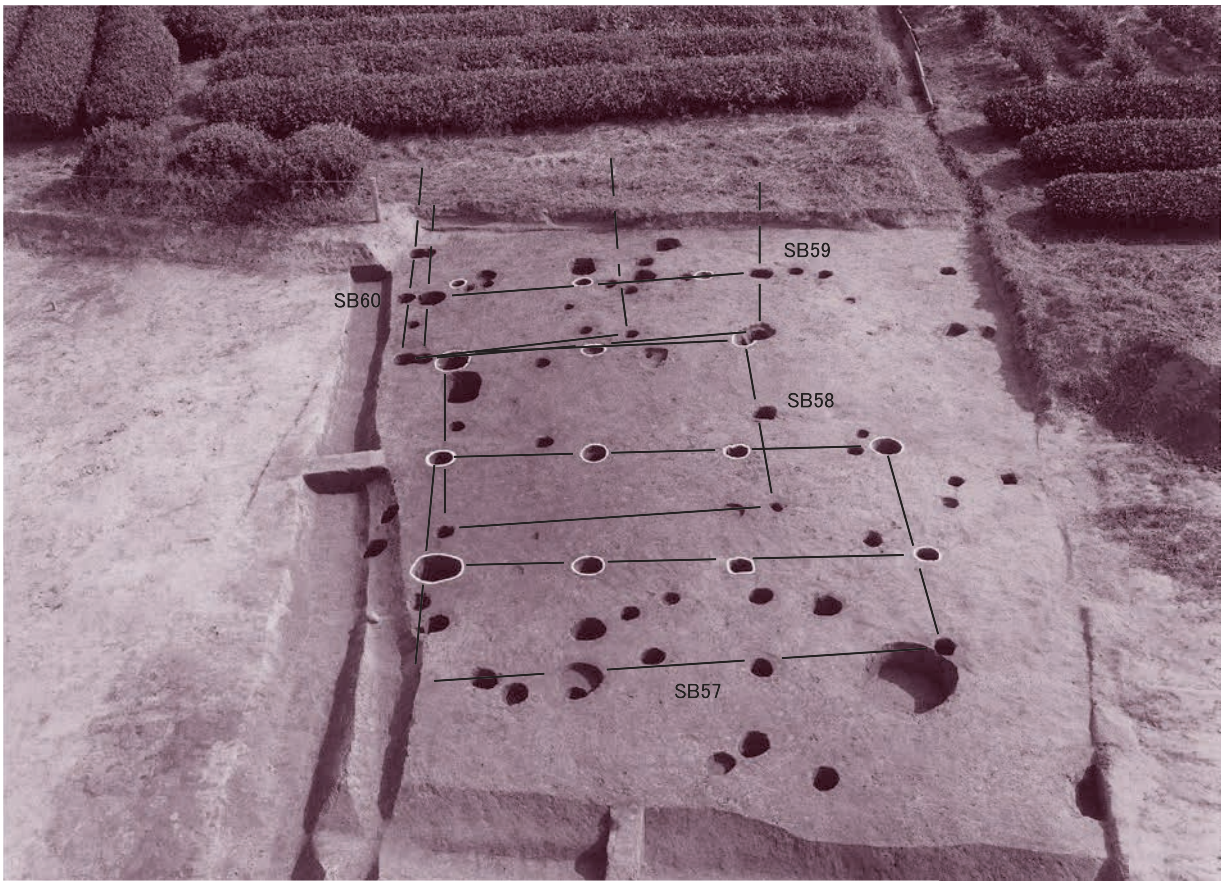


2.SB54周辺掘立柱建物群　完掘状況（南西から）

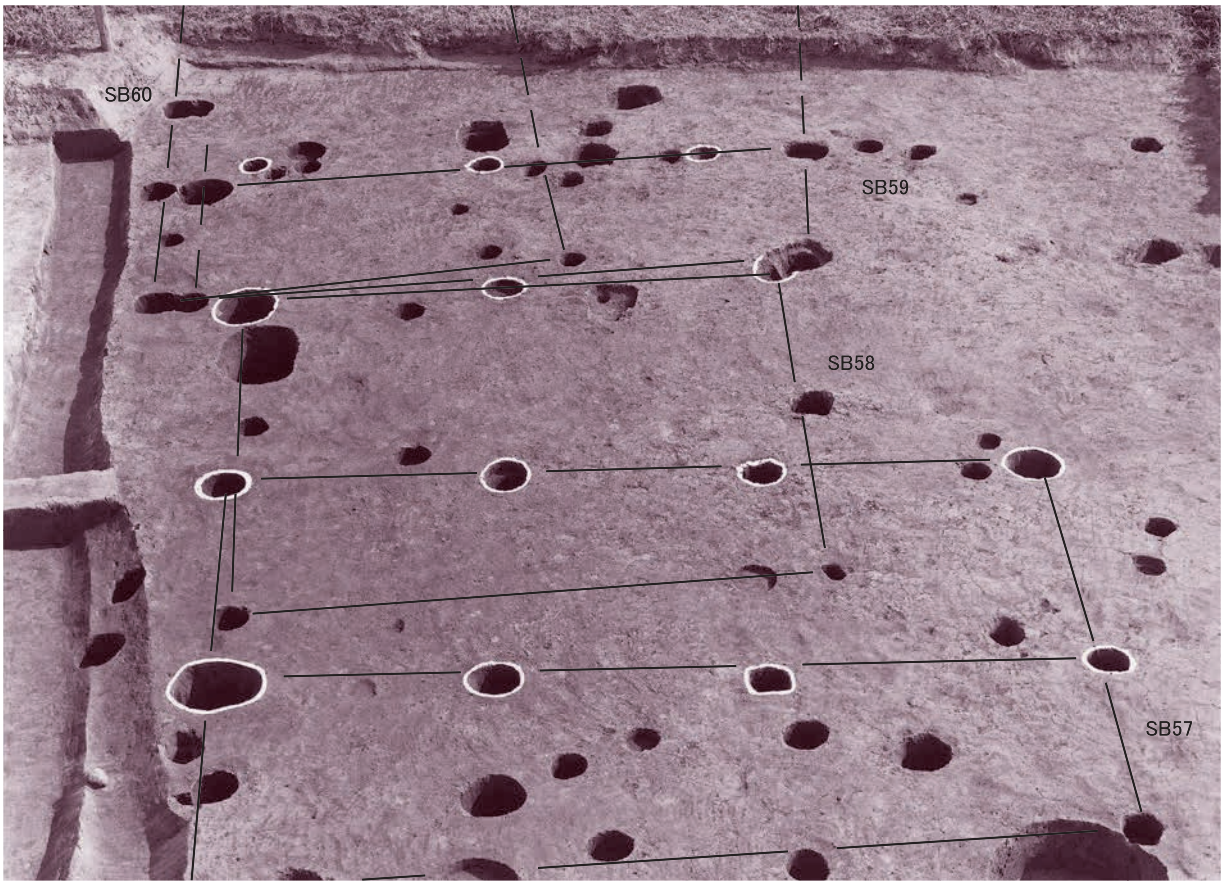
図版24



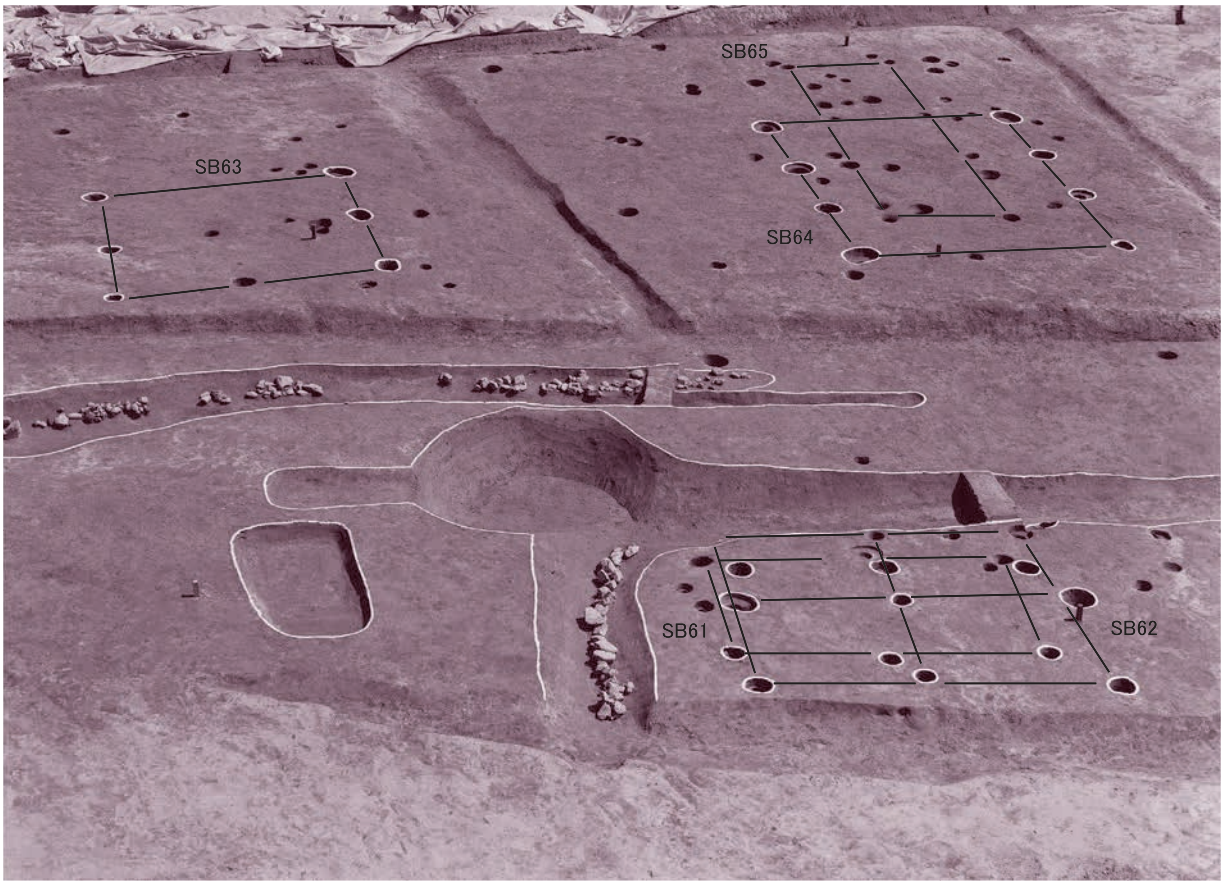
1.SB53　完掘状況（東から）



2.SB57～60　完掘状況（北から）

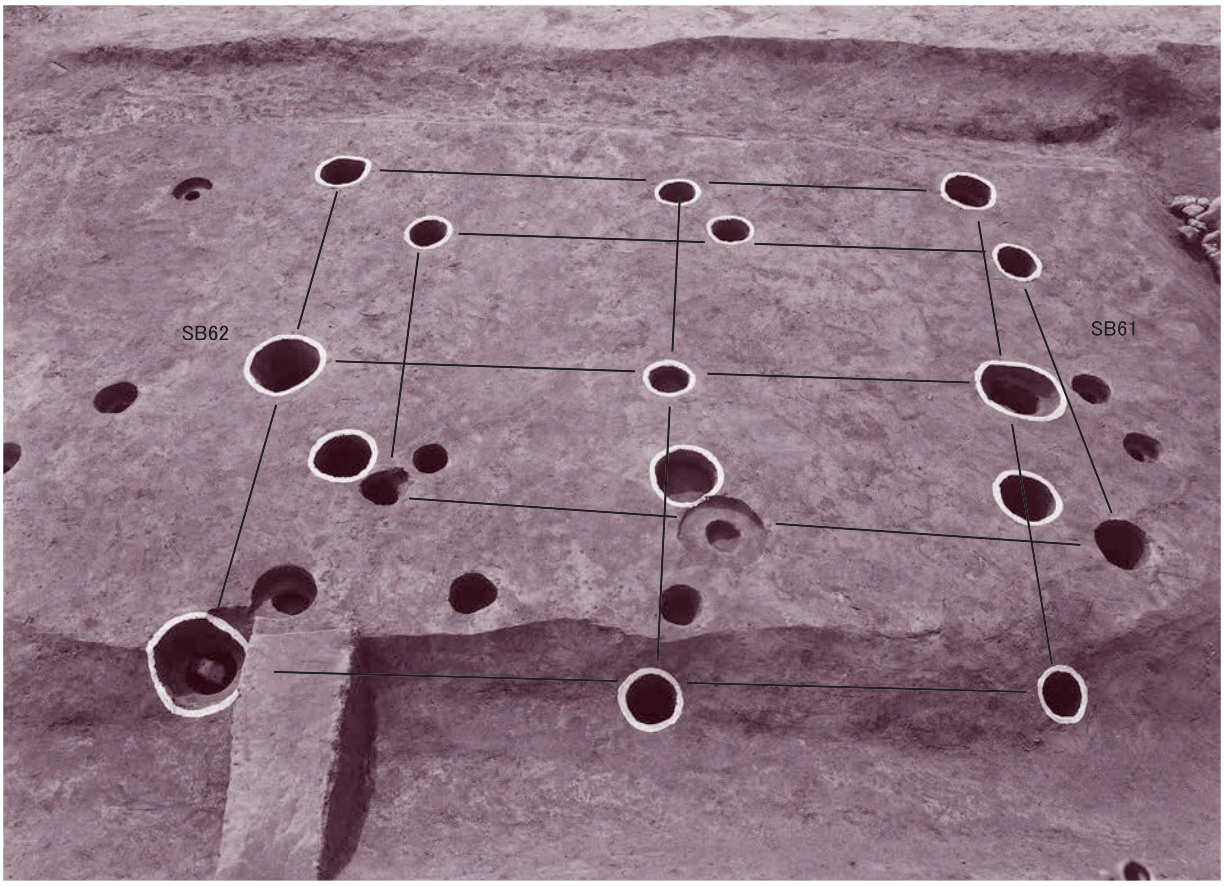


1.SB57～60　完掘状況（北から）

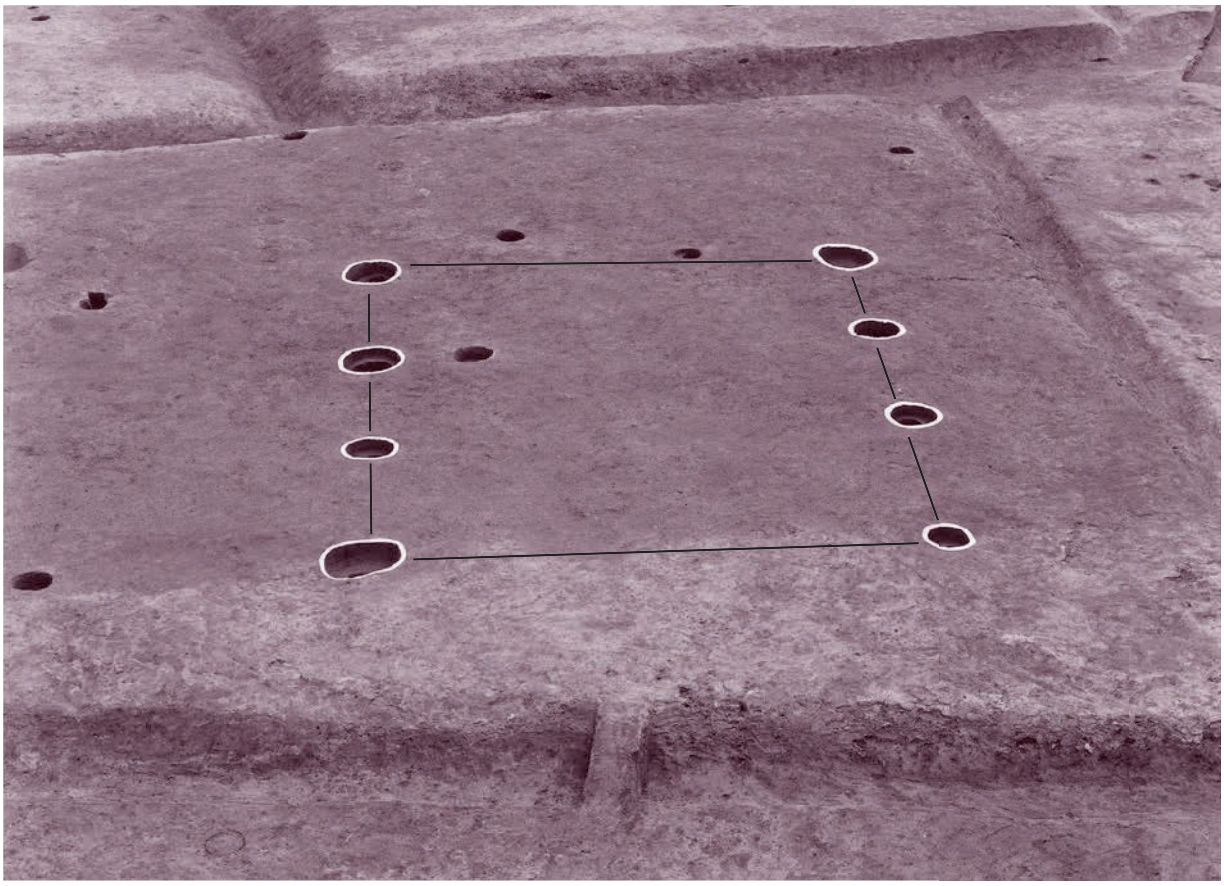


2.SB61・62周辺掘立柱建物群　完掘状況（北東から）

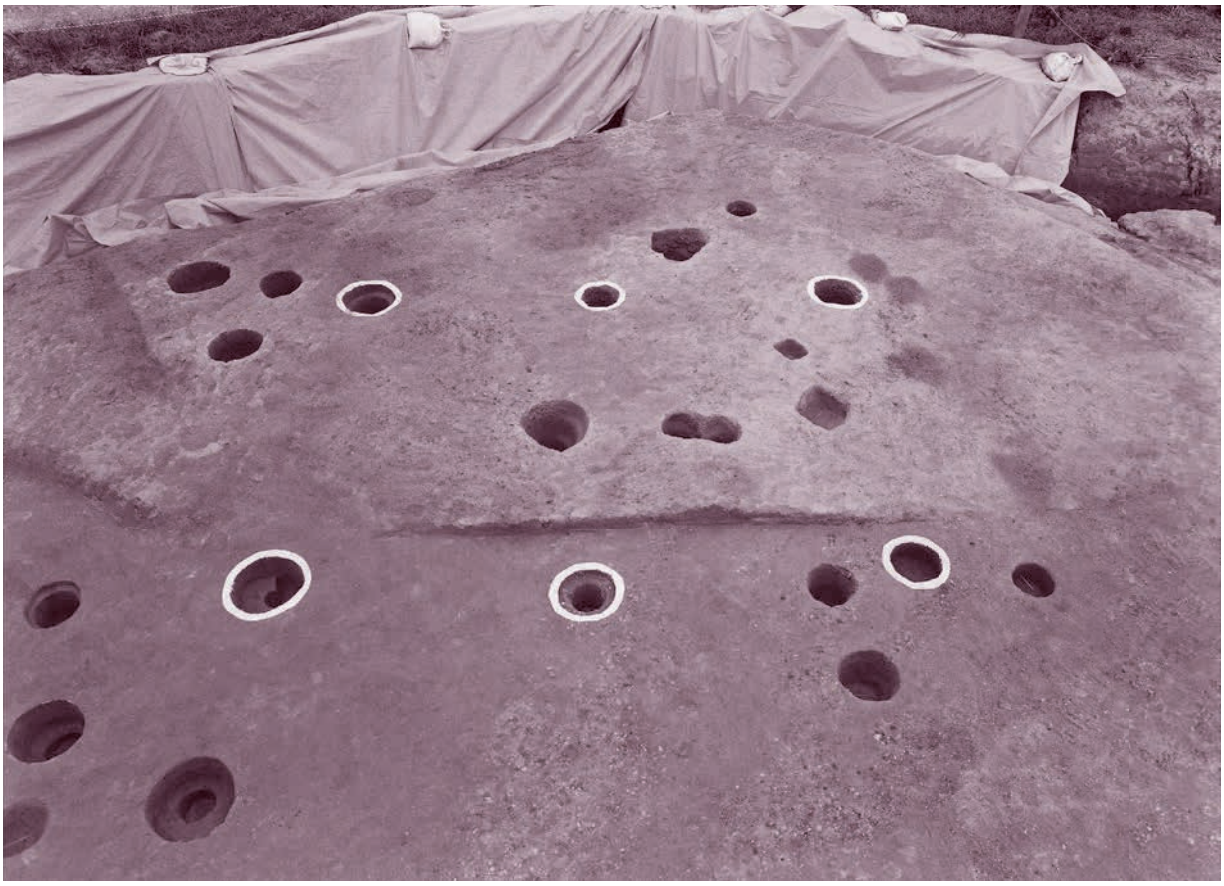
図版26



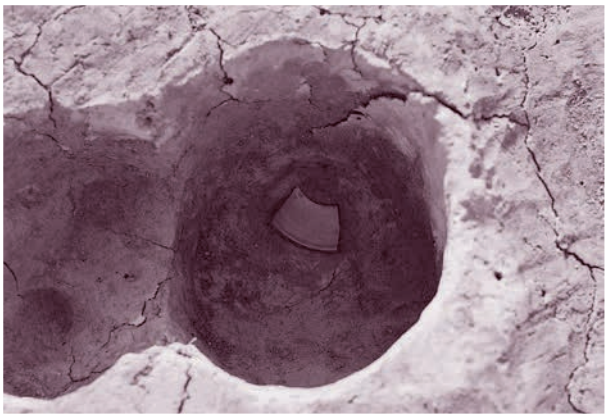
1.SB61・62　完掘状況（東から）



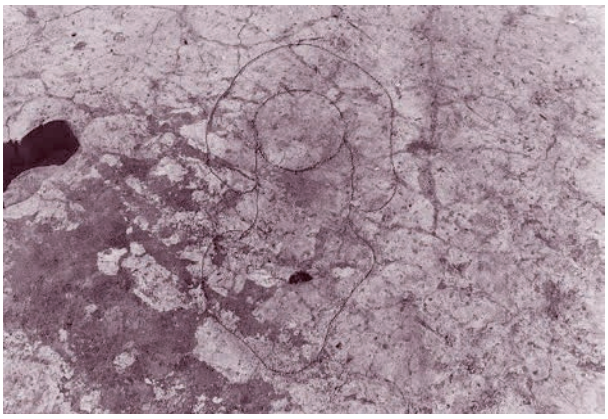
2.SB64　完掘状況（西から）



1.SB69　完掘状況（北から）



2.SB49-P 4　遺物出土状況（東から）

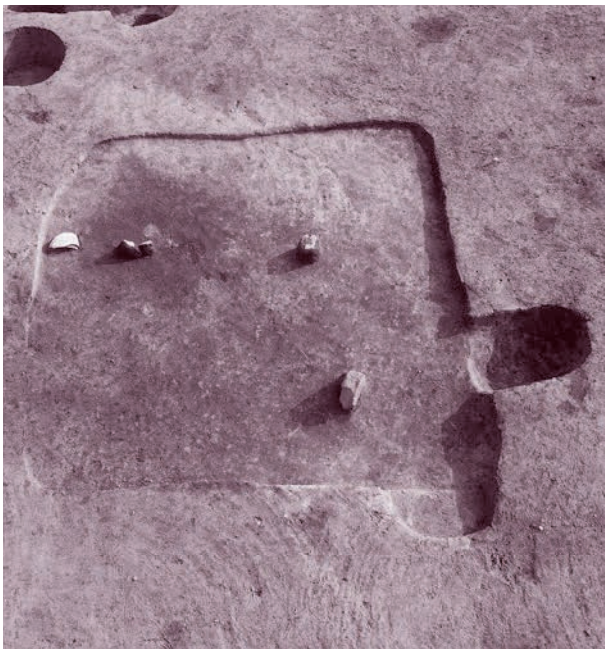


4.SK72　検出状況（東から）

3.SB62-P11　完掘状況（南から）

5.SK70　遺物出土状況（南から）

図版28

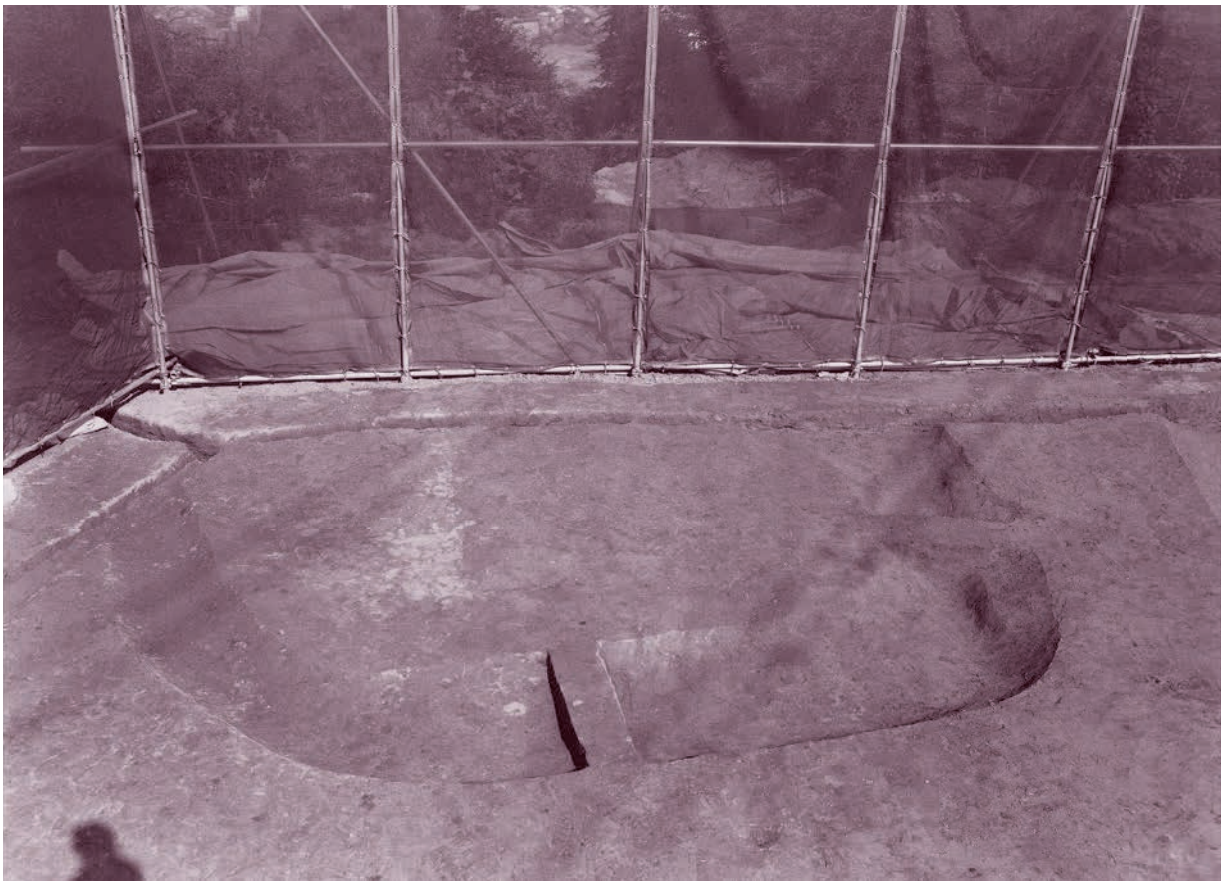


1.SK70　完掘状況（北から）　SK71掘削前

2.近世墓（SK37）　完掘状況

3.SD10～12　完掘状況（西から）

4.SD13・14　完掘状況（西から）



1.SD31　完掘状況（西から）

2.SD36　完掘状況（北から）

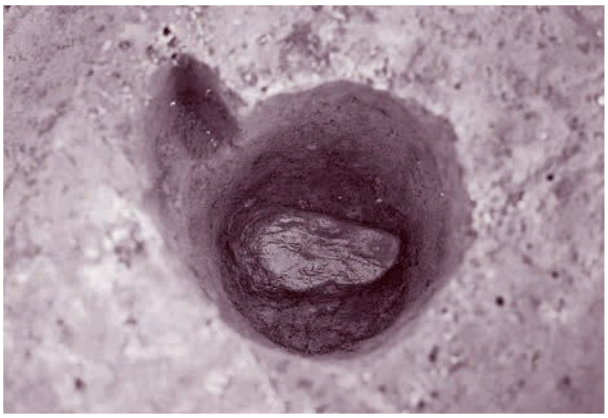
3.SD41　完掘状況（西から）

4.SK19　完掘状況（北から）

図版30

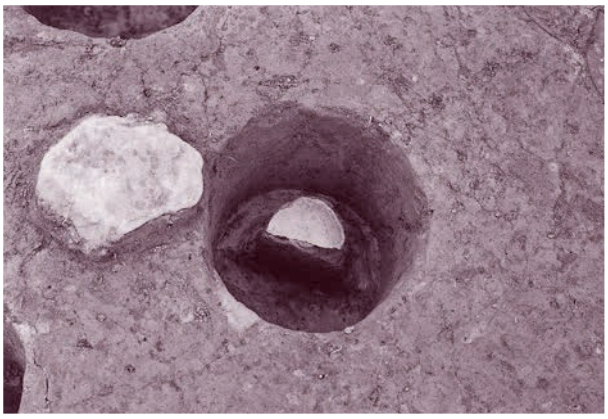
1.SE01　完掘状況（北から）

2.SE01　断ち割り状況（西から）

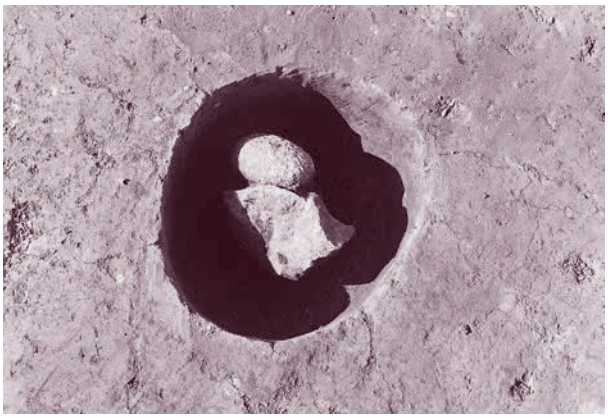


1.SP92　完掘状況（北西から）

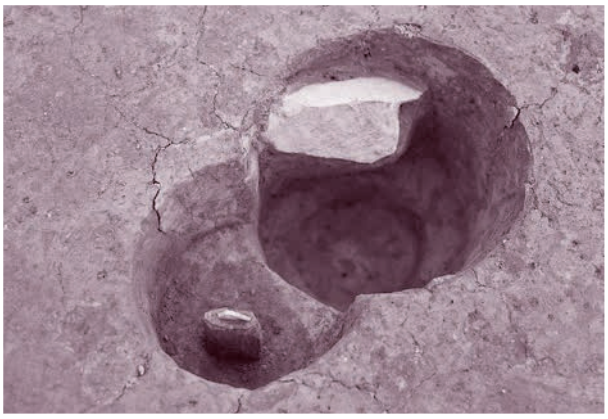
4.SP402　完掘状況（南東から）



2.SP363　完掘状況（西から）



5.SP635　完掘状況（南から）



3.SP398　完掘状況（南から）

6.SP702　完掘状況（東から）

図版32

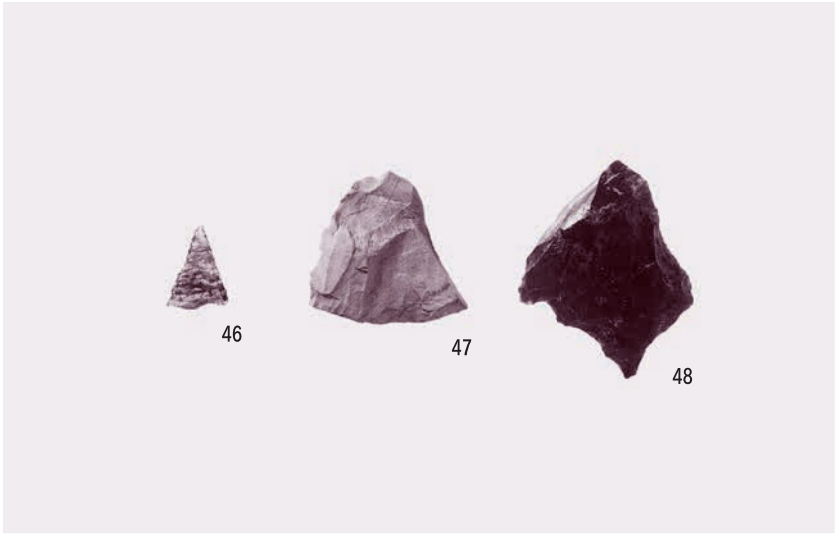
SH01-1・8・13 ～ 17　SH06-43　SH13-18
SH14-7　SH15-19・41
SB07-20・21　SB26-22　SB38-23
SK26-12　SD13-40　SD18-25　SP646-24
遺構外 -2 ～ 6・9 ～ 11・26 ～ 39

縄文土器①

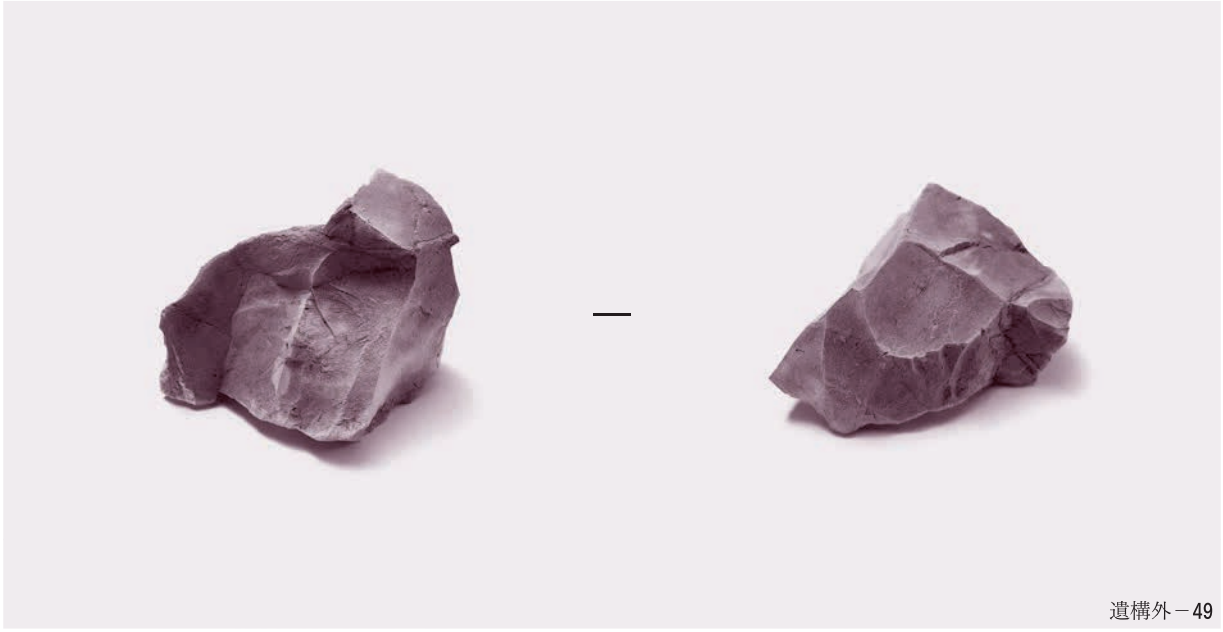
図版33

遺構外－45

1.縄文土器②



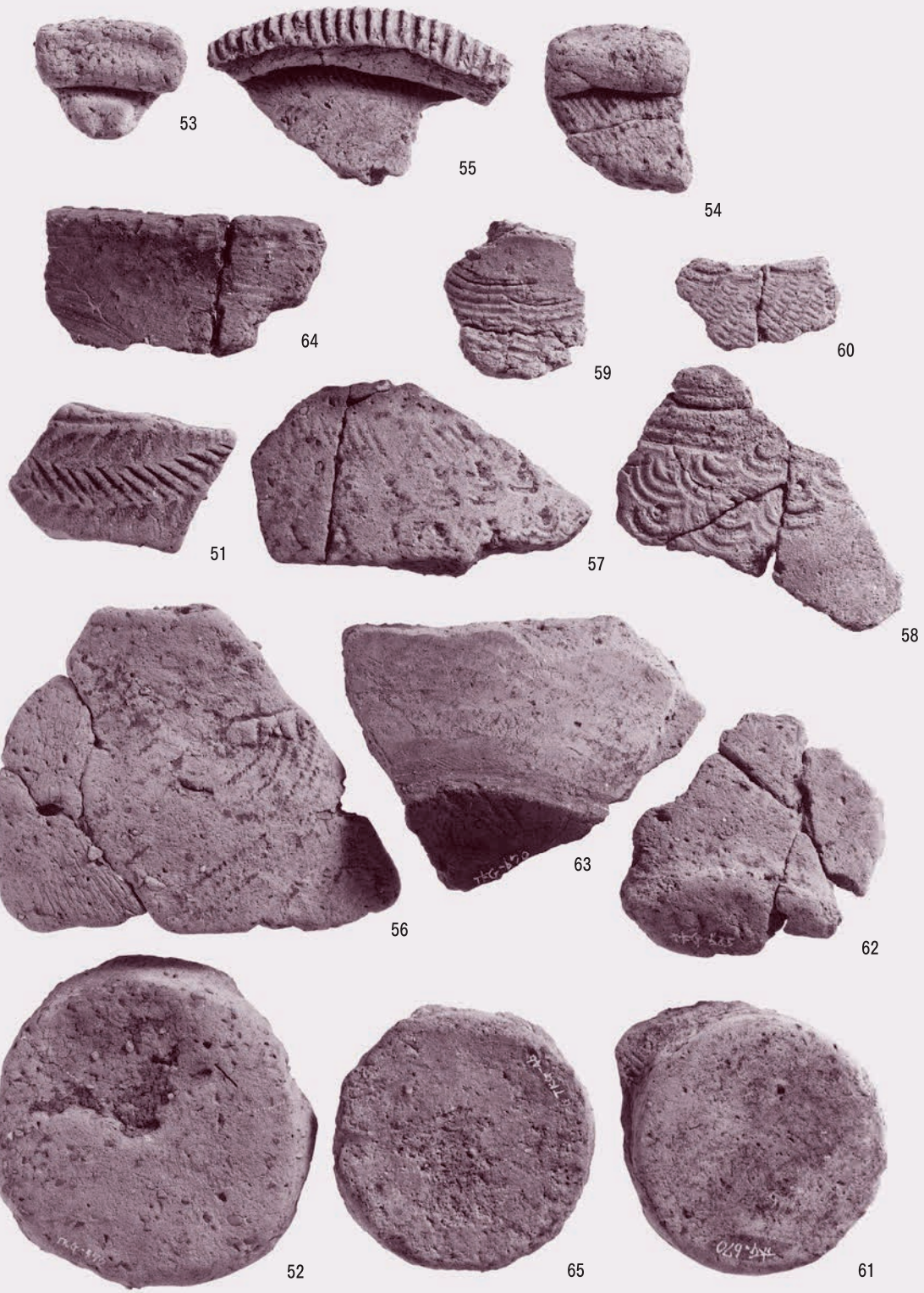
2.石器①



遺構外－49

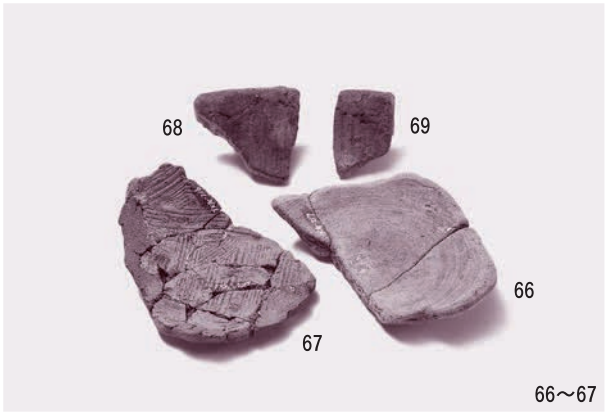
3.石器②

図版34



SB22-51 SB36-52 SB45-53
遺構外 -54 ～ 65

弥生土器（・古式土師器）



66～67

1.SH06出土　土師器

70

2.SH07出土　土師器

71

3.SH11出土　灰釉陶器

73

5.SH12-P 1 出土　土師器

72

6.SH12-P 4 出土　土師器

75

4.SH13出土　土師器

74

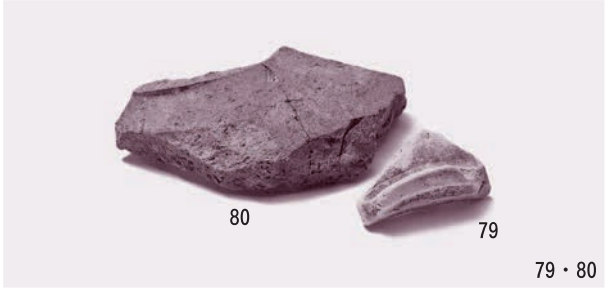
7.SH12出土　土師器

図版36

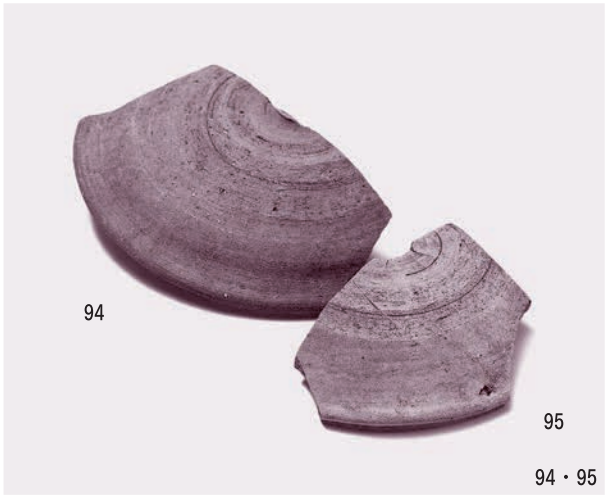
1.SB03-P 3 ・P 4 出土　須恵器

2.SB34-P 3 出土　土師器

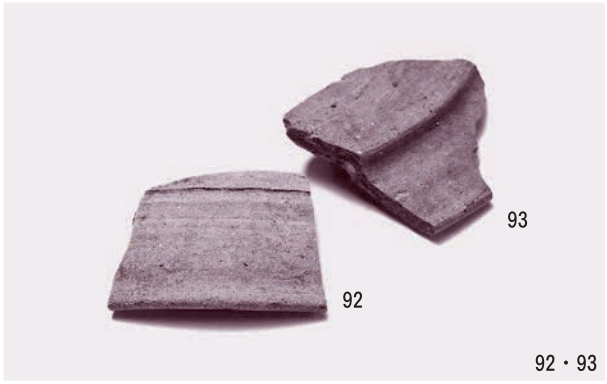
3.SB36-P 8 出土　須恵器



4.SB45出土　須恵器



5.SK51出土　須恵器



6.SK26出土　須恵器・灰釉陶器

7.SK49出土　土師器①

8.SK49出土　土師器②

図版37

SK28出土　須恵器・土師器（集合）

遺物番号は付図２参照

図版38

82

84

83

85

86

90

89

88

1.SK28出土　須恵器・土師器

106

108

2.SK60出土　灰釉陶器

1.SK60出土　遺物（集合）

2.SX08出土　須恵器

図版40

SX08出土　須恵器・土師器

遺物番号は付図２参照

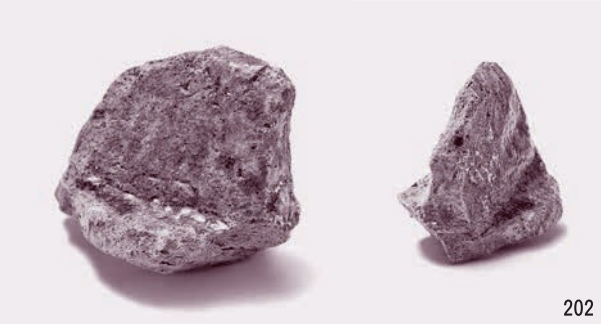
SX07出土　須恵器・土師器

遺物番号は付図２参照

図版42

1.SX07出土　須恵器

2.遺構外出土　土師器①（製塩土器の可能性あり）



3.遺構外出土　須恵器①

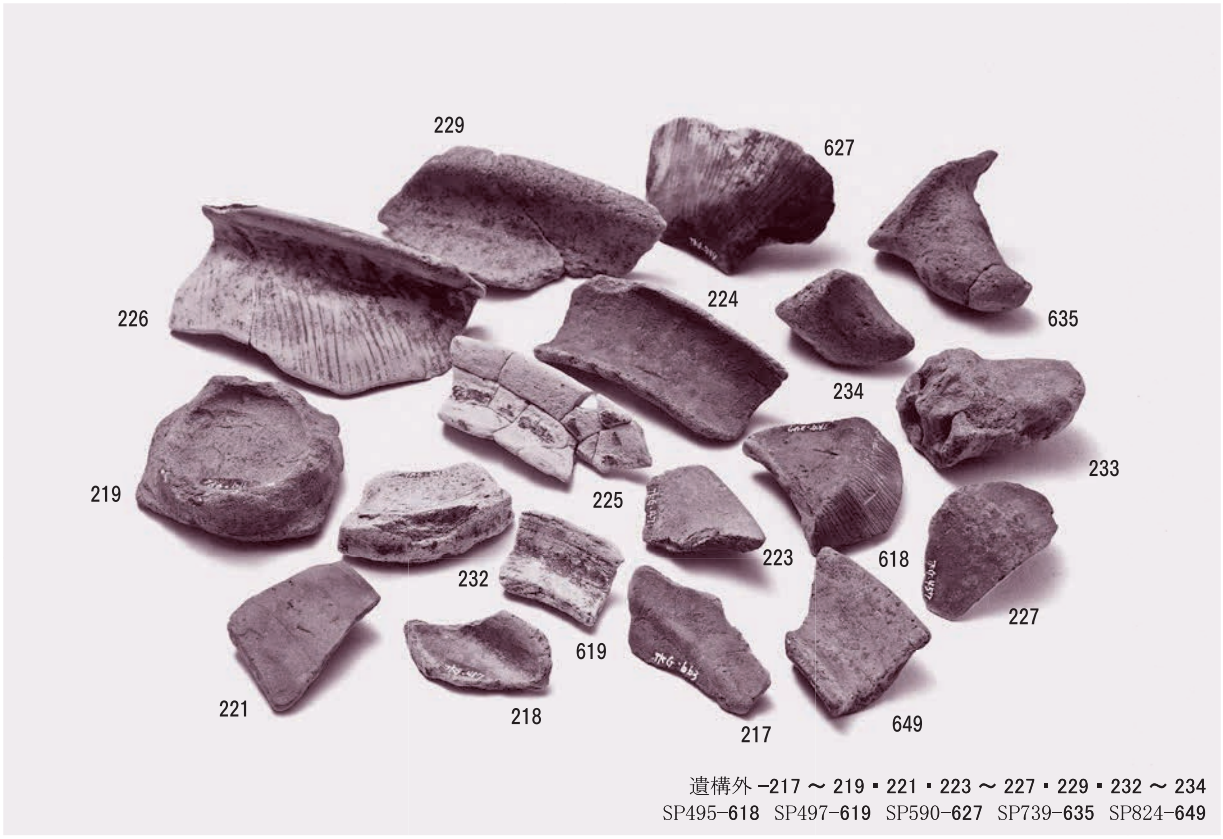
遺構外－216　SD27-557

4.溝・遺構外出土　緑釉陶器

遺構外出土　須恵器②

遺物番号は付図２参照

図版44



遺構外 –217 ～ 219・221・223 ～ 227・229・232 ～ 234
SP495–618　SP497–619　SP590–627　SP739–635　SP824–649

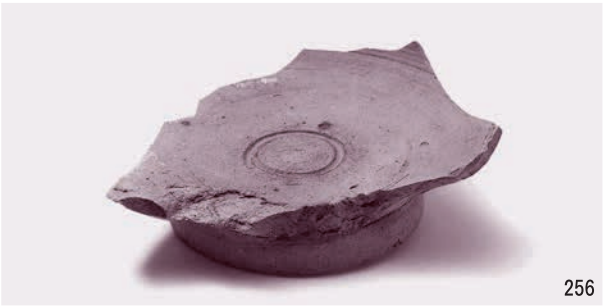
1.遺構外出土　土師器②

2.遺構外出土　土師器③

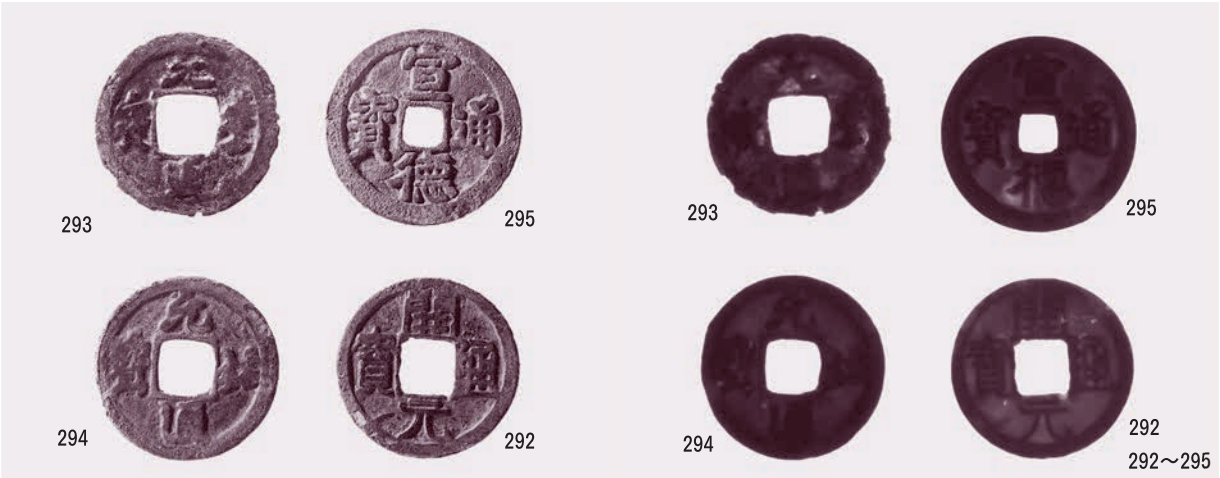
遺構外出土　灰釉陶器①

遺物番号は付図２参照

図版46



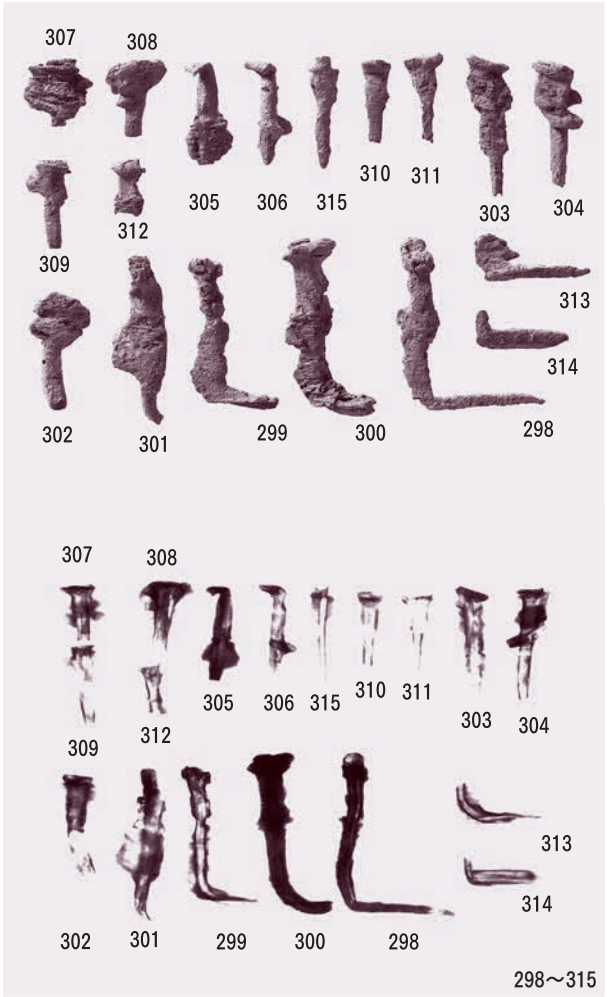
1.遺構外出土　灰釉陶器②



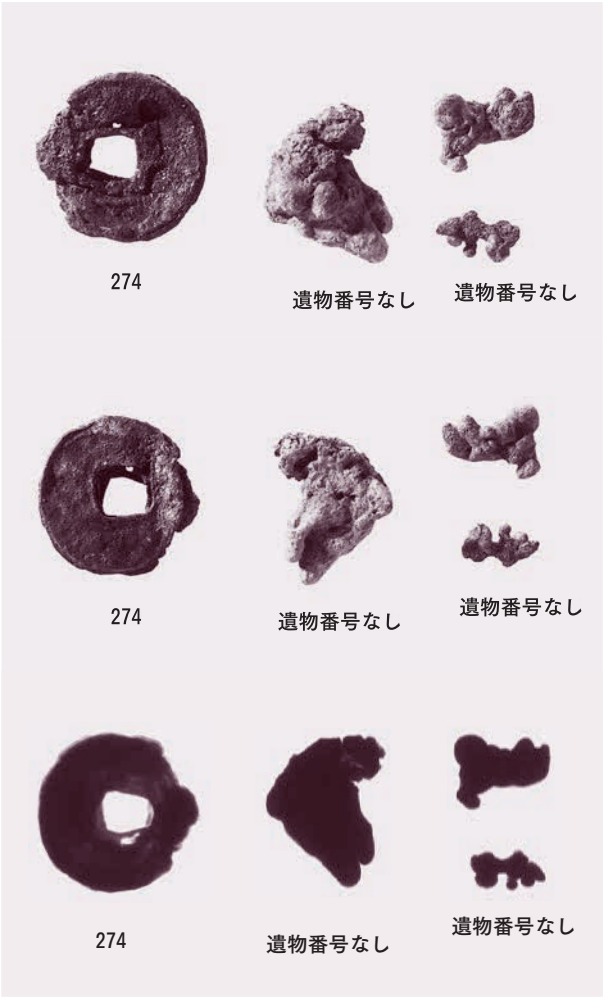
2.SK04出土　遺物①

1.SK04出土　遺物（集合）　遺物番号は付図1参照

3.SK09出土　遺物（集合）　遺物番号は付図1参照

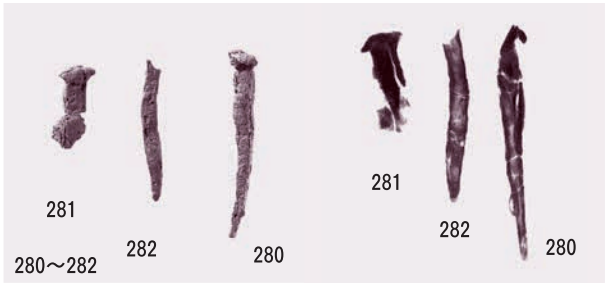


2.SK04出土　遺物②



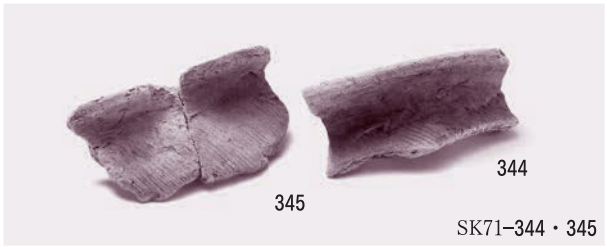
4.SK09出土　遺物①

図版48



1.SK09出土　遺物②

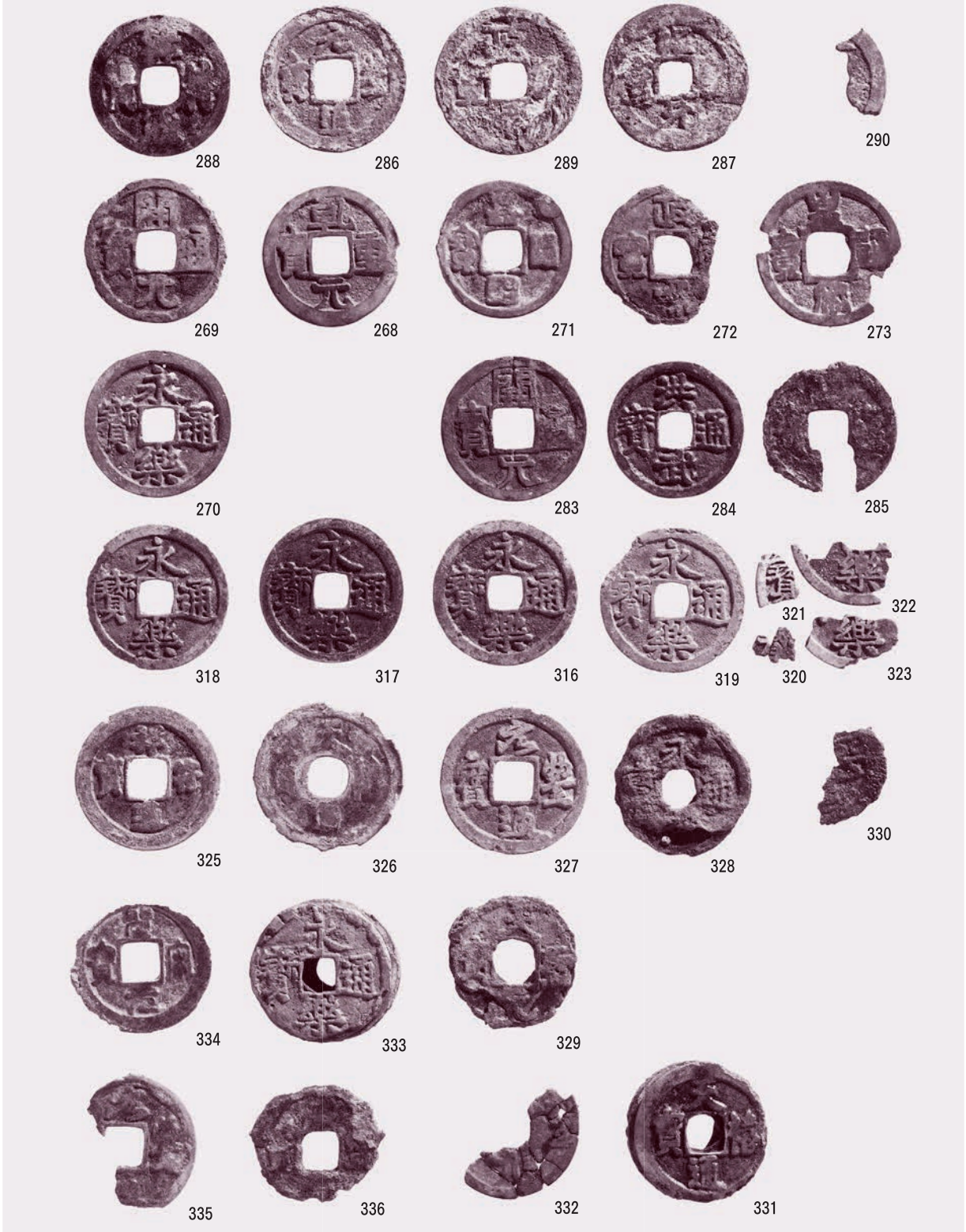
2.SK12出土　かわらけ



4.SK70・71出土　遺物

3.SK43出土　遺物

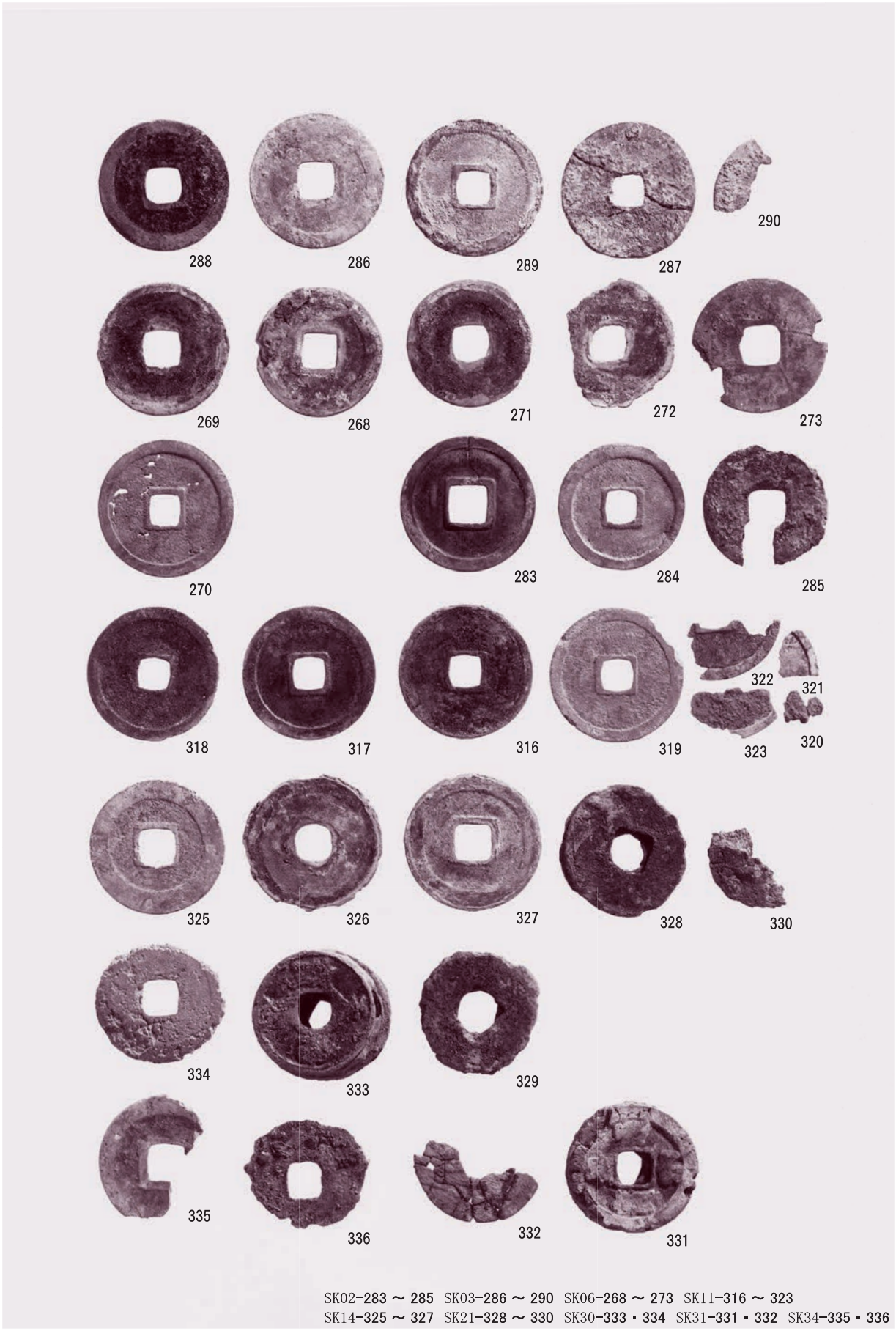
5.SK29出土　遺物



SK02-283 ～ 285　SK03-286 ～ 290　SK06-268 ～ 273　SK11-316 ～ 323
SK14-325 ～ 327　SK21-328 ～ 330　SK30-333・334　SK31-331・332　SK34-335・336

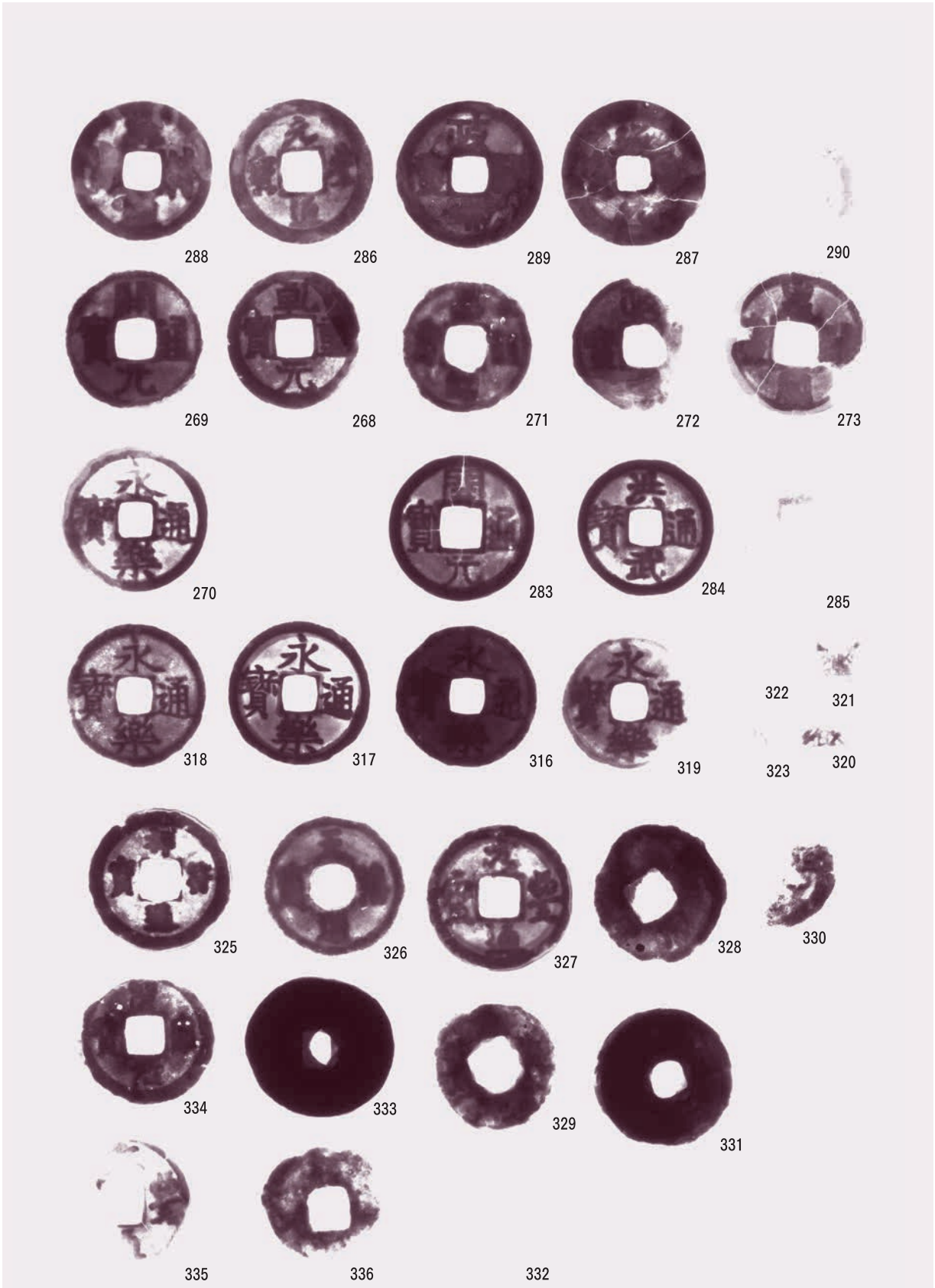
中世墓出土　銅銭①

図版50



SK02-283 ～ 285　SK03-286 ～ 290　SK06-268 ～ 273　SK11-316 ～ 323
SK14-325 ～ 327　SK21-328 ～ 330　SK30-333・334　SK31-331・332　SK34-335・336

中世墓出土　銅銭②

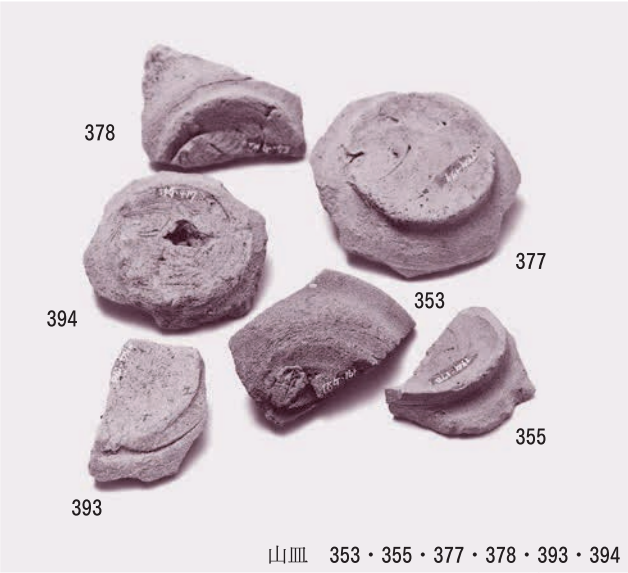


SK02-283 ～ 285　SK03-286 ～ 290　SK06-268 ～ 273　SK11-316 ～ 323
SK14-325 ～ 327　SK21-328 ～ 330　SK30-333・334　SK31-331・332　SK34-335・336

中世墓出土　銅銭③

図版52

1.SX06出土　遺物

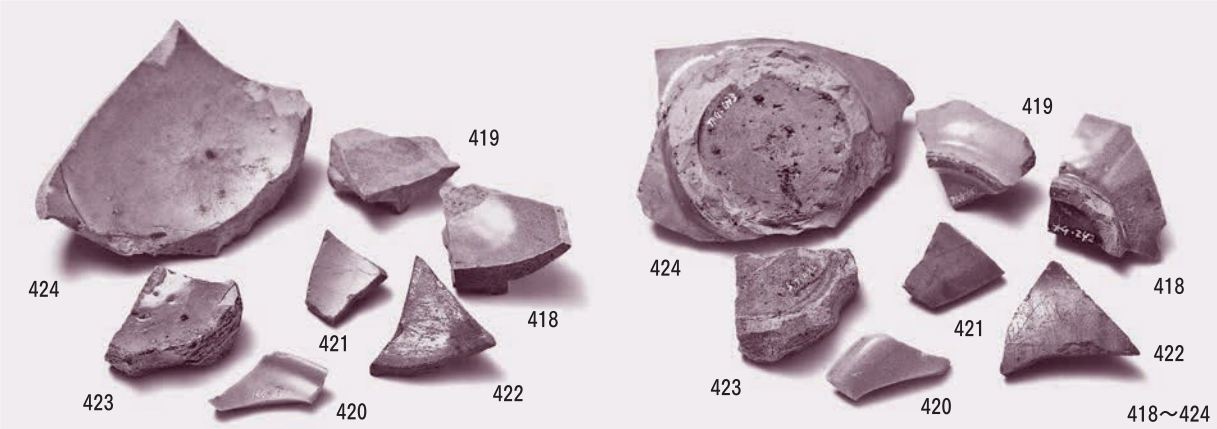


2.遺構外出土　山茶碗①

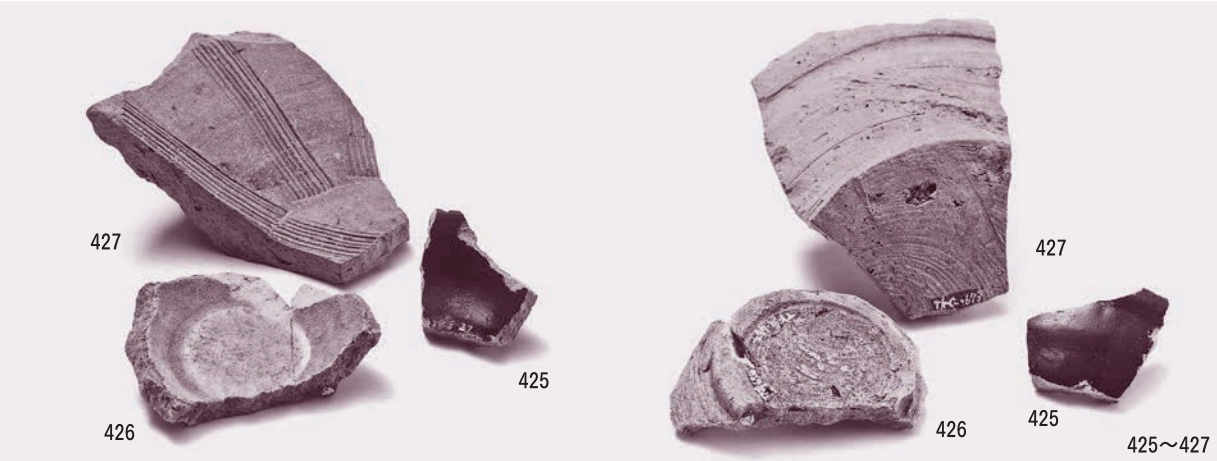
遺構外出土　山茶碗②

遺物番号は付図２参照

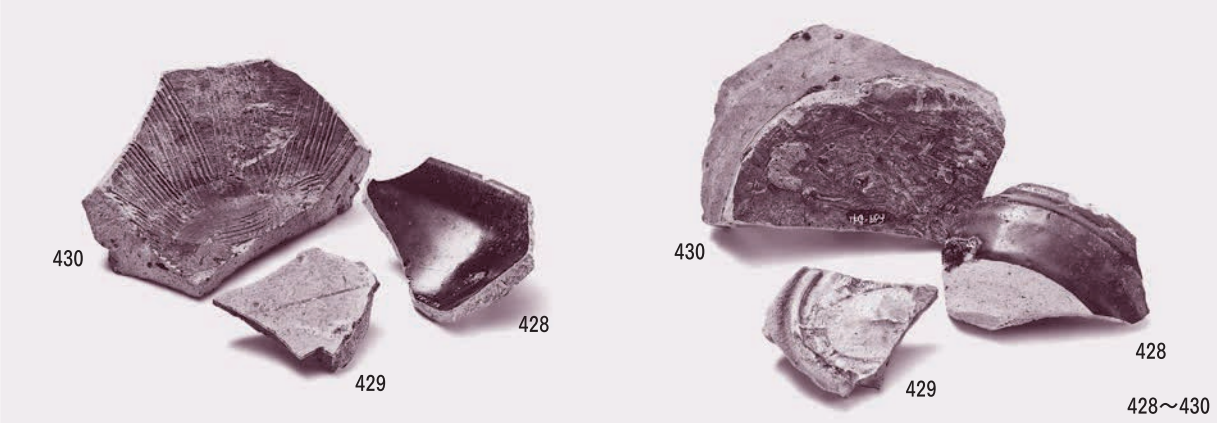
図版54



1.遺構外出土　青磁・白磁　　420以外は貿易陶磁　420は肥前青磁



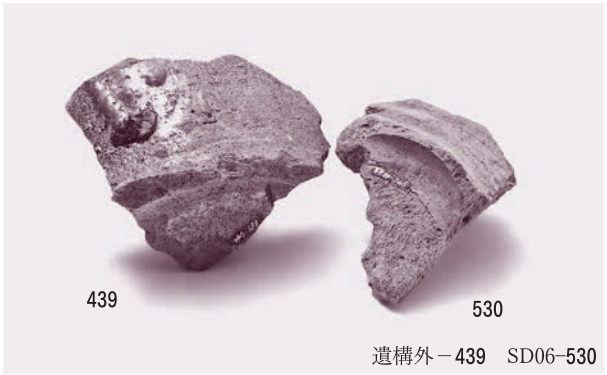
2.遺構外出土　瀬戸美濃（古瀬戸）



3.遺構外出土　瀬戸美濃(大窯)

4.遺構外出土　初山

1.遺構外出土　青磁　　貿易陶磁



遺構外－439　SD06-530

2.遺構外出土　渥美①・知多

4.遺構外出土　常滑①

3.遺構外出土　渥美②

図版56

遺構外出土　渥美③

（446は常滑か渥美）
遺物番号は付図２参照

遺構外出土　常滑②

遺物番号は付図２参照

図版58

遺構外－461～463　SD13・15-546　SD43-586

1.遺構外および溝出土　土師質鍋

2.SB26-P12出土　須恵器

5.SB37-P 3 出土　土師器

6.SB38-P 2 出土　須恵器

3.SB07-P 8 出土　土師器

4.SB26-P 4 出土　土師器

7.SB43-P 4 出土　かわらけ

図版59

遺構外出土　宝篋印塔・一石五輪塔（集合）　　遺物番号は付図１参照

SE01 の石組（再利用）−471 ～ 473・475・482 ～ 484・487

遺構外 −464 ～ 470・474・476 ～ 481・485・486・488・489

図版60

480

481

482

487

484

483

485

486

489

488

遺構外出土　宝篋印塔

SE01 の石組（再利用）482～484・487
遺構外 –480・481・485・486・488・489

図版61

467

468

472

475

466

464

465

遺構外出土　一石五輪塔①

SE01 の石組（再利用）−472・475
遺構外 −464 〜 468

図版62

469

471

474

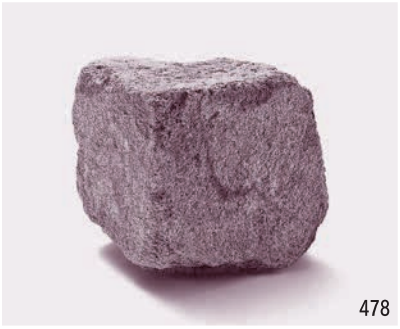
473

476

470

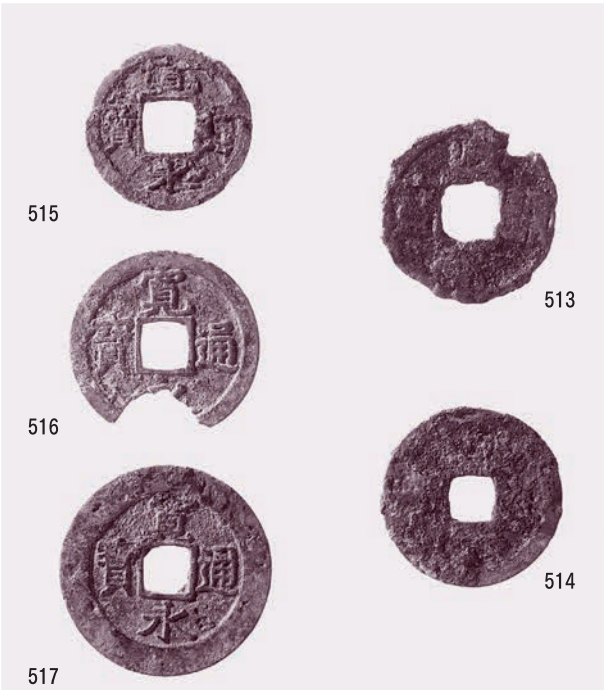
477

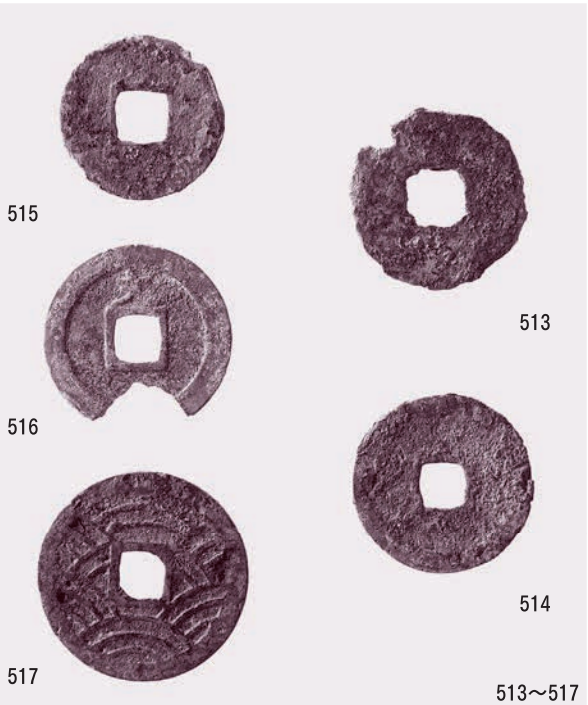
479

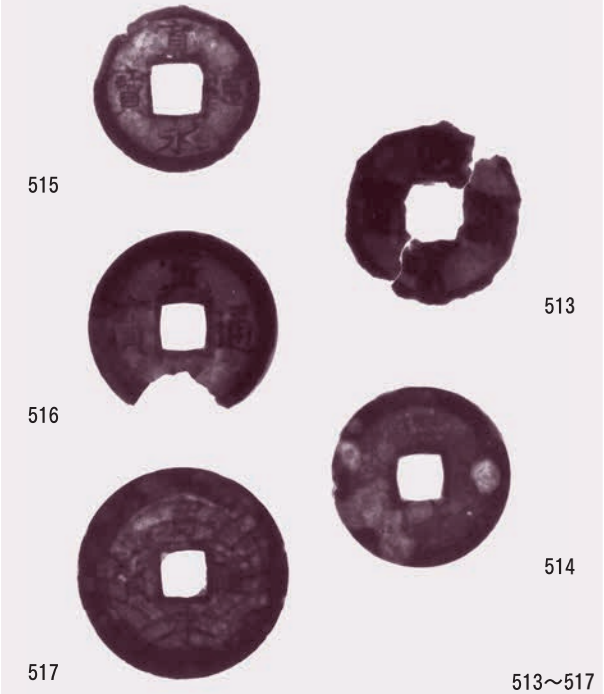

478

遺構外出土　一石五輪塔②

SE01 の石組（再利用）−471・473
遺構外 −469・470・474・476～479







1.近世墓SK37出土　銅銭

3.SK19出土　灰釉陶器

4.SK55出土　山茶碗

2.SE01出土　かわらけ

5.SD13出土　陶器

図版64

1.SD15出土　遺物

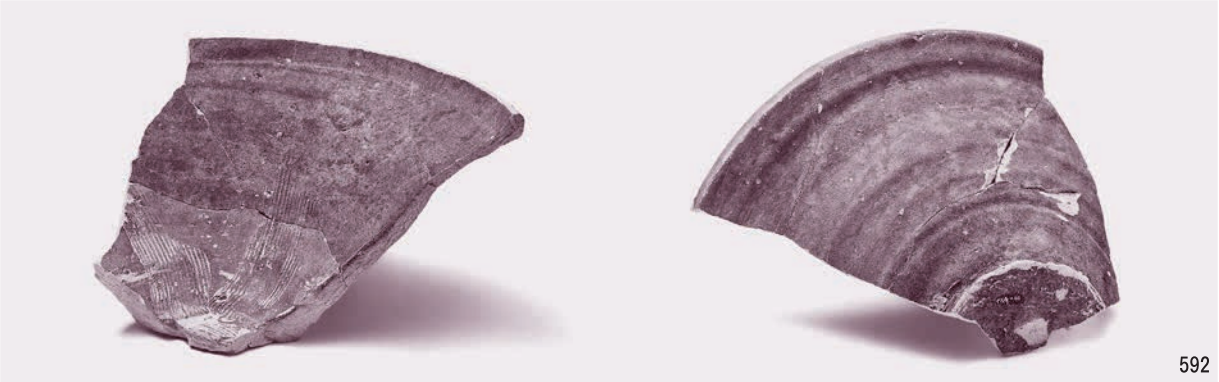
2.SD34出土　遺物

5.SP387出土　山茶碗

3.SD35出土　遺物

4.SD42出土　遺物

図版65



1.SD44出土　遺物

2.小穴出土　遺物

3.遺構外出土　かわらけ

図版66

内面

遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）①

遺物番号は付図２参照

外面

遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）②

遺物番号は付図２参照

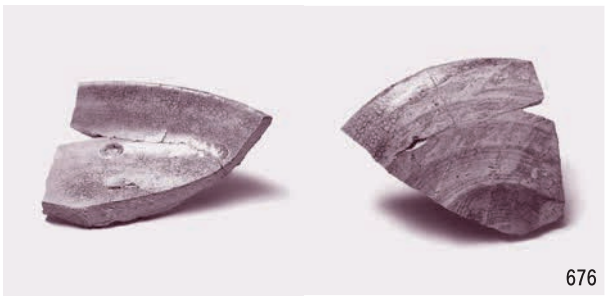
図版68

671

672

673

674


676

675

678

680

681

682

遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）③

686

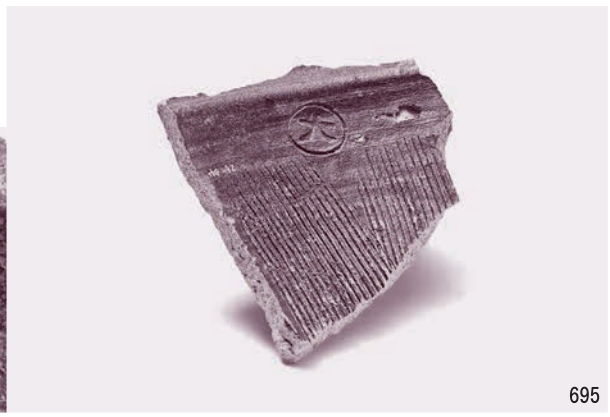
683

685

695　刻印拡大

688

692


695

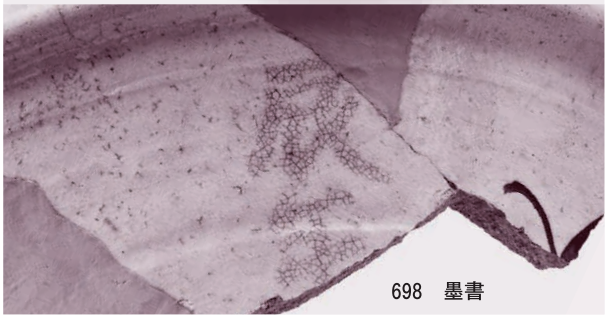
遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）④

図版70

700

698

701



698　墨書

699　墨書

699

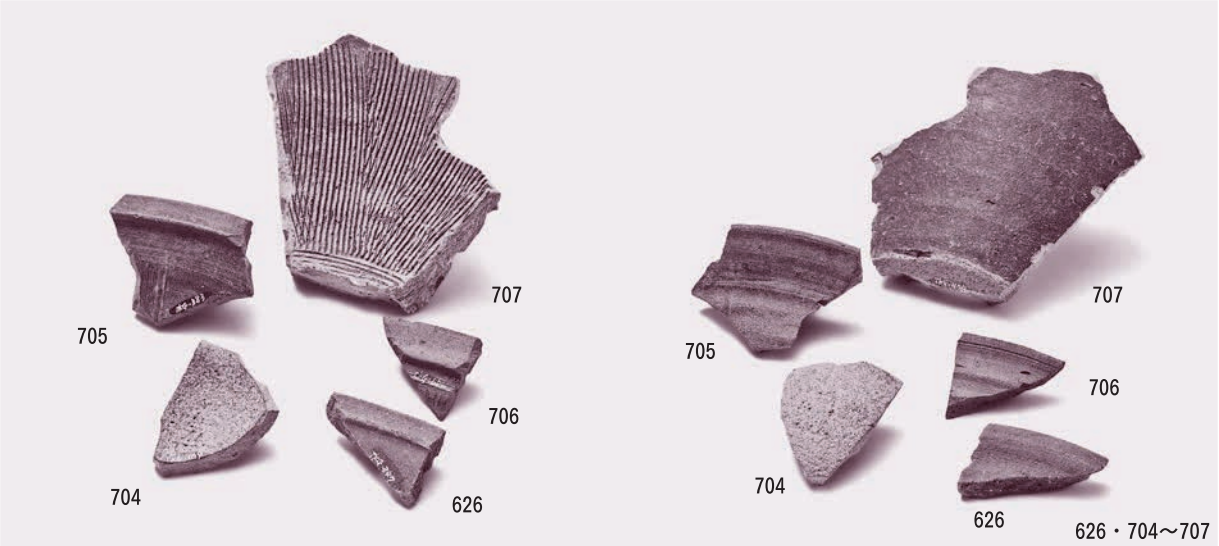
1.遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）⑤

703

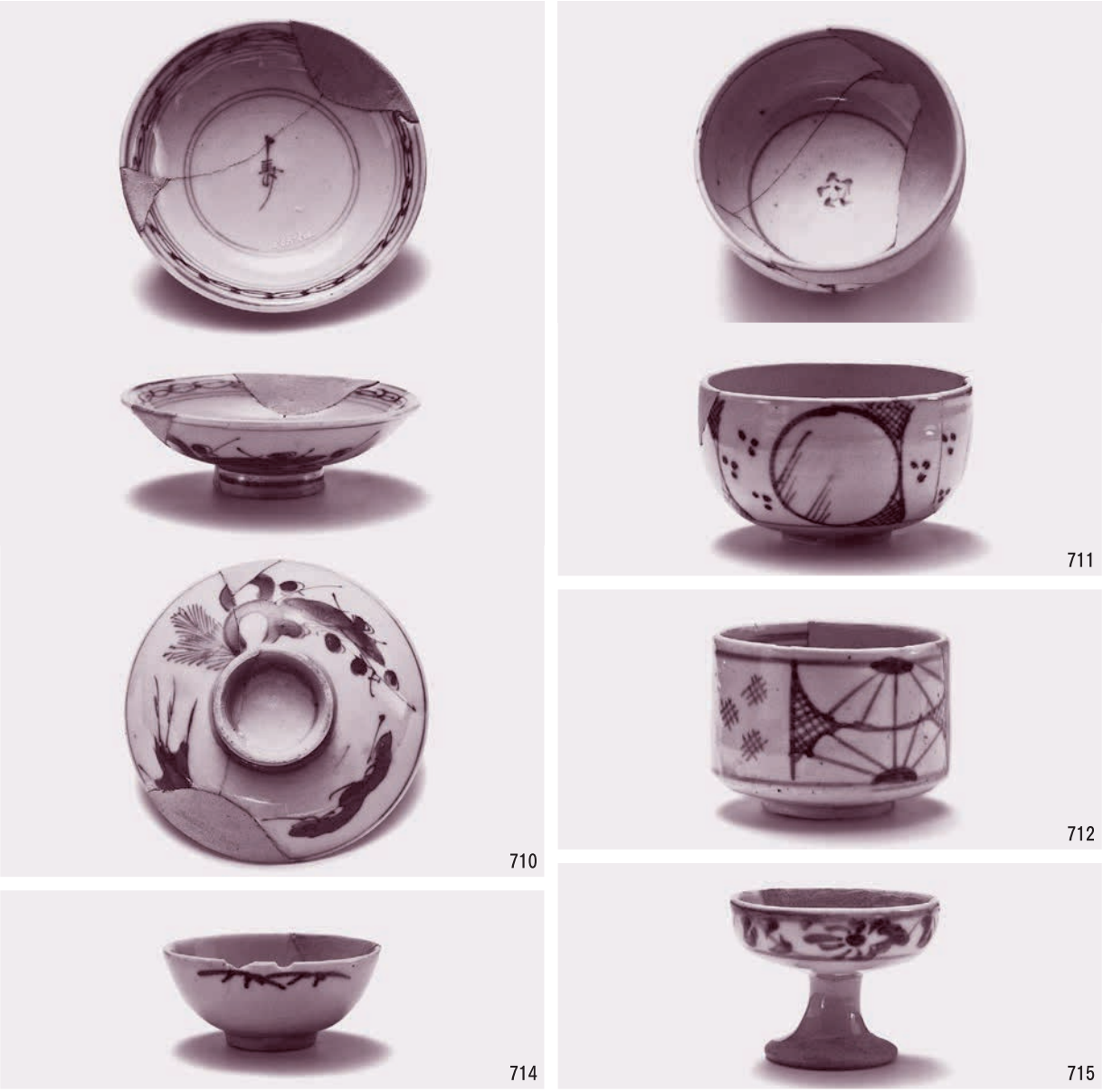
709

708

2.遺構外出土　志戸呂（近世）①



1.遺構外出土　古志戸呂・志戸呂（近世）②



2.遺構外出土　肥前①

図版72

713

716

1.遺構外出土　肥前②

717

716・717

718

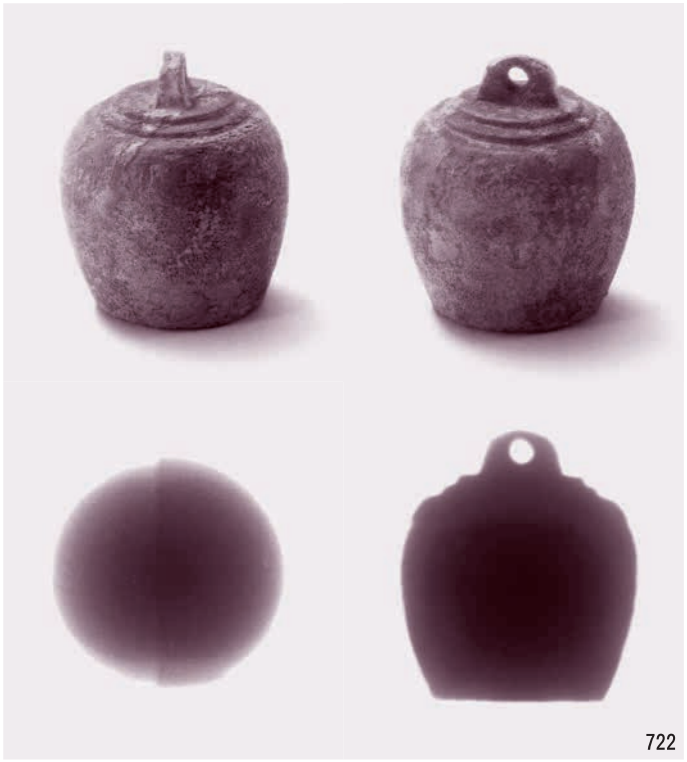
2.遺構外出土　陶器

719

720

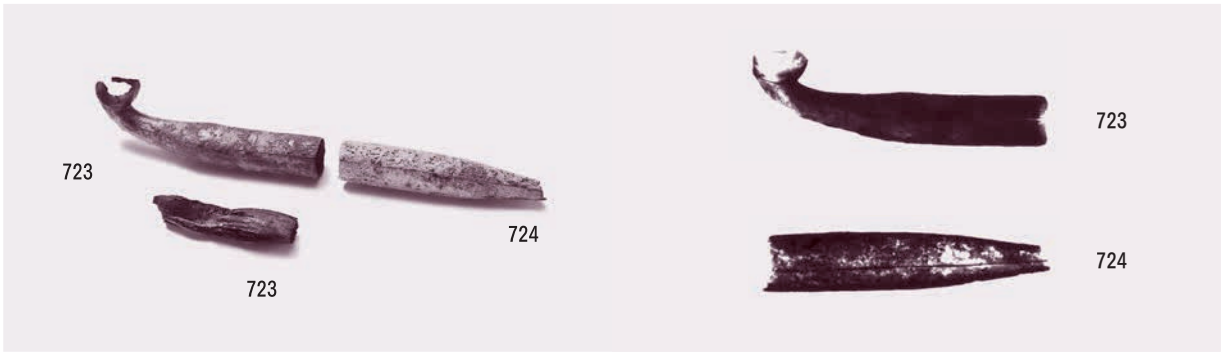
遺構外出土　瓦

図版74


722

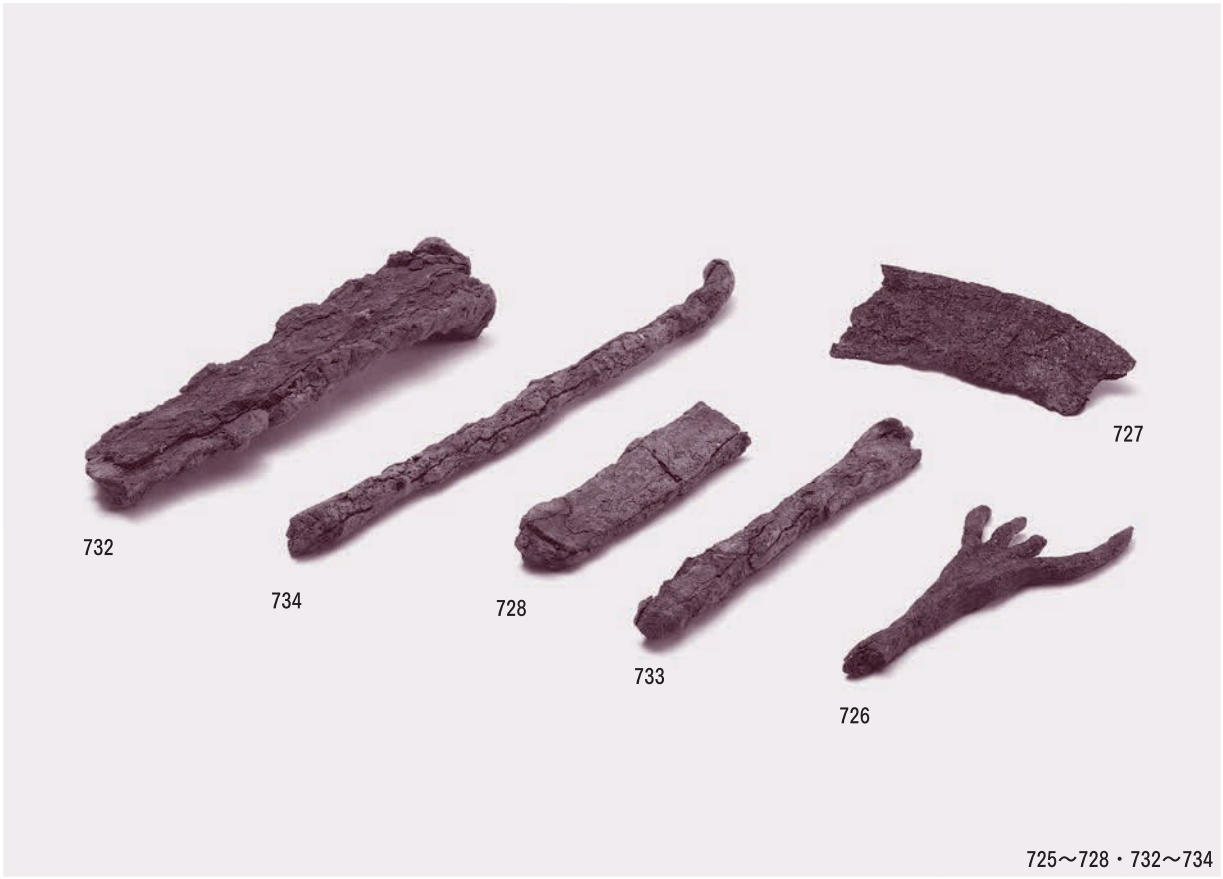
722拡大

725



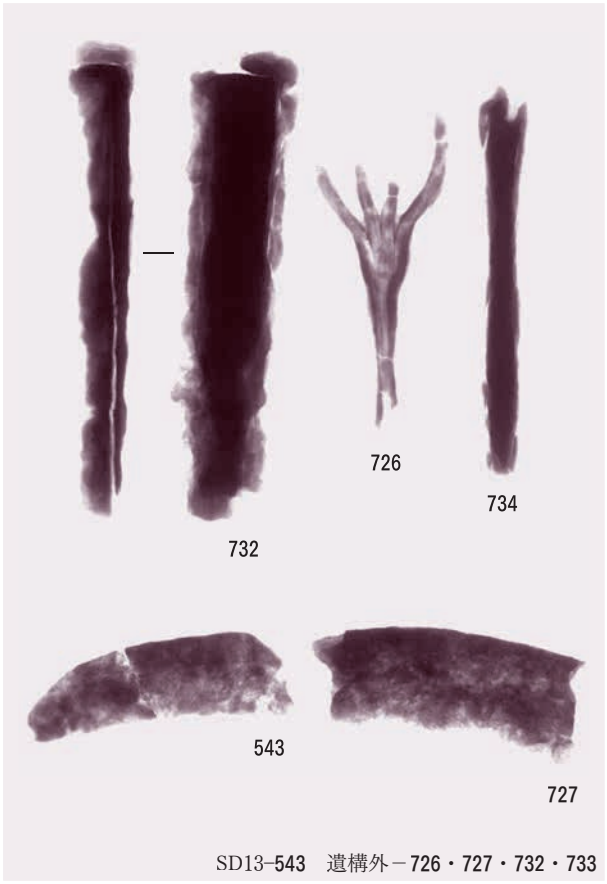
721

遺構外出土　銅製品・銭貨・煙管



725～728・732～734

1.遺構外出土　鉄製品①



SD13-543　遺構外－726・727・732・733

2.溝・遺構外出土　鉄製品②

SD61-507　遺構外－735～737・739・741

3.掘立柱建物・遺構外出土　鉄滓

遺物番号は付図2参照

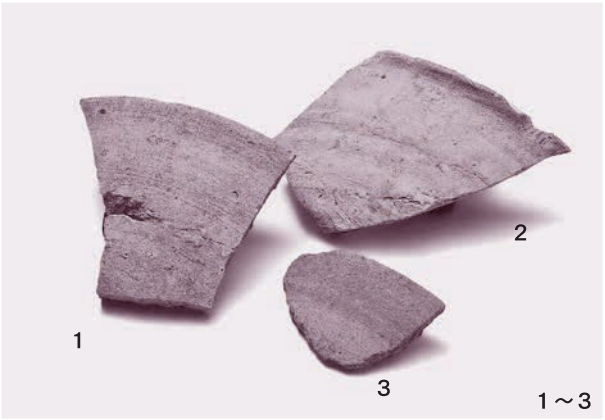
図版76

1.第二東名No.94地点出土遺物

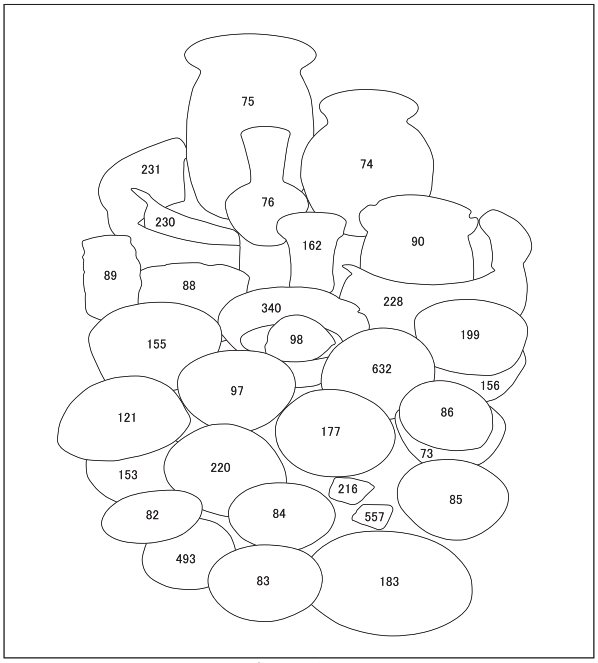
2.平島Ⅰ遺跡出土遺物

3.第二東名No.107地点出土遺物

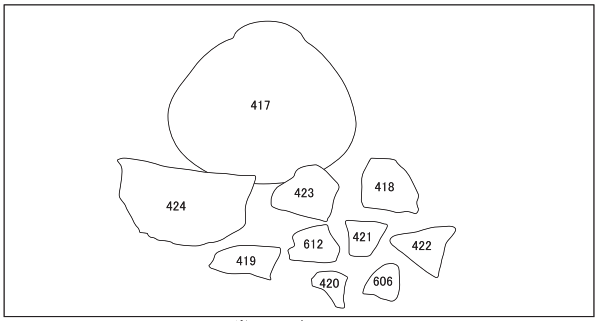
4.第二東名No.110地点出土遺物



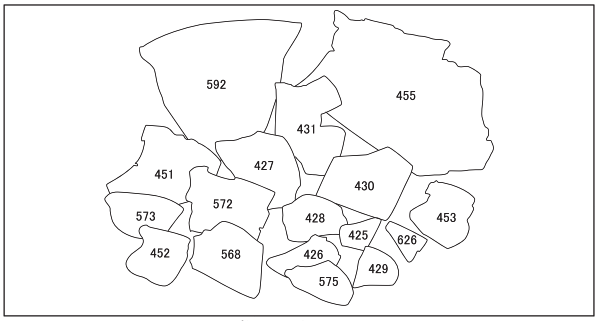
5.鴨ノ前遺跡出土遺物



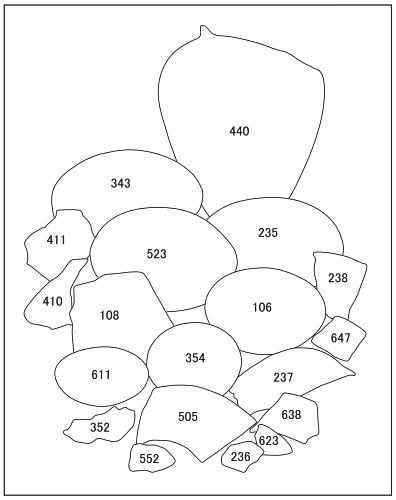
巻頭図版9



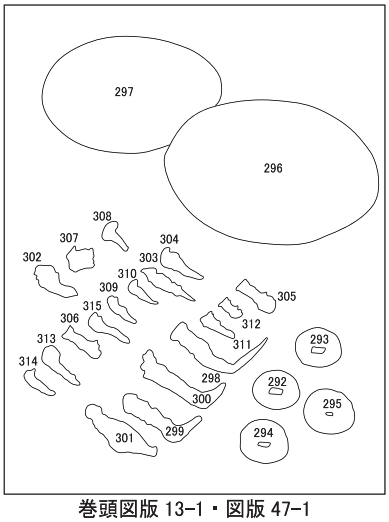
巻頭図版 12-1



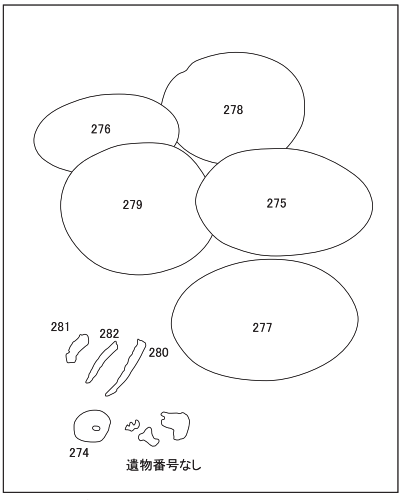
巻頭図版 12-2



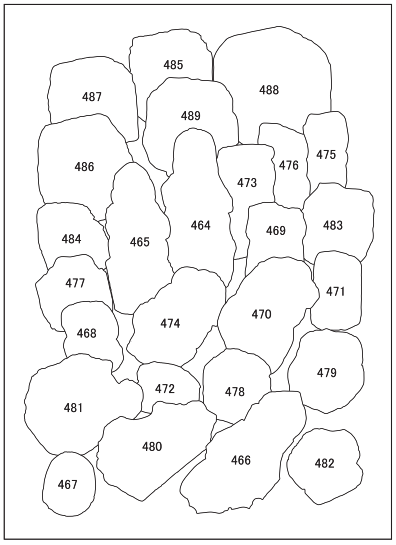
巻頭図版 11



巻頭図版 13-1・図版 47-1

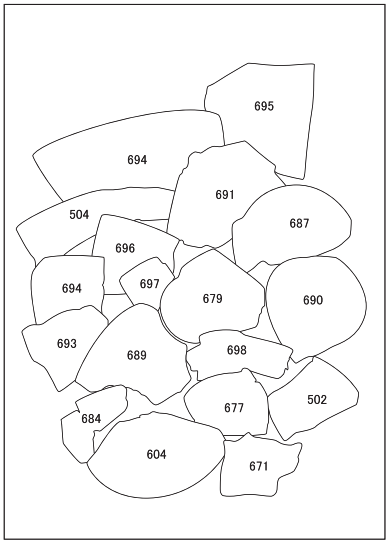


巻頭図版 13-2・図版 47-3

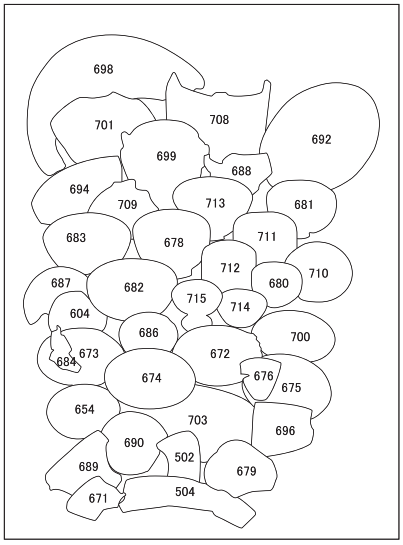


巻頭図版 14・図版 59

（巻頭図版 14 は 467 が逆の位置にあります）

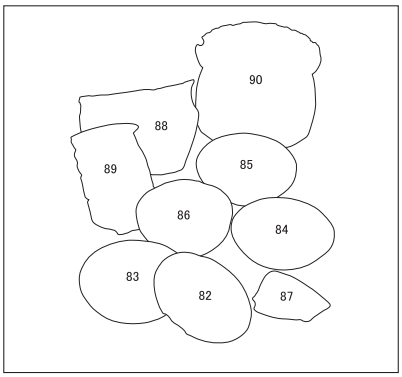


巻頭図版 15

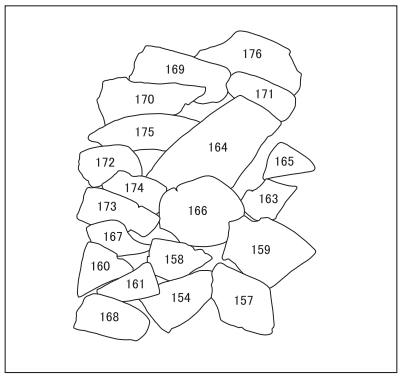


巻頭図版 16

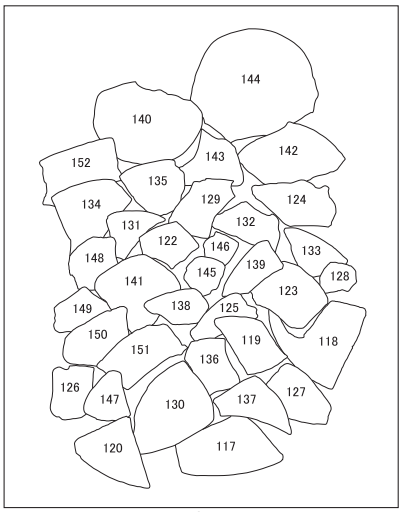
付図１　北垣遺跡出土遺物図版集合写真掲載遺物番号①



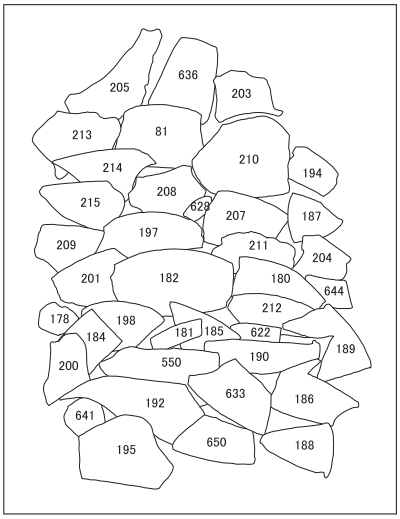
巻頭図版 10・図版 37



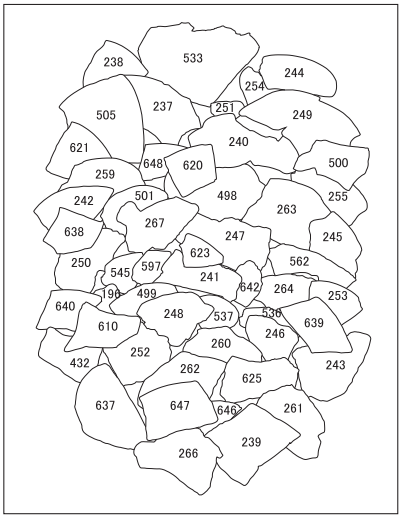
図版 40



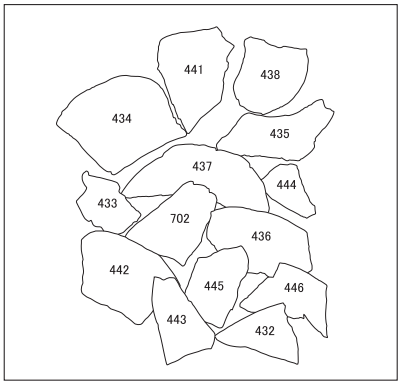
図版 41



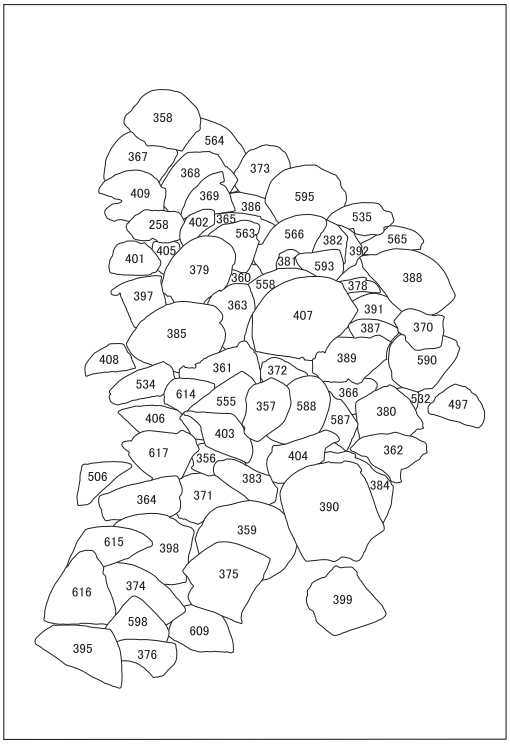
図版 43



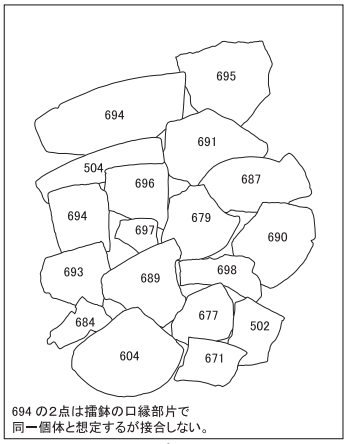
図版 45



図版 56

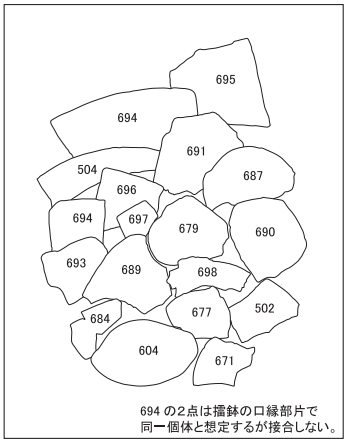


図版 53



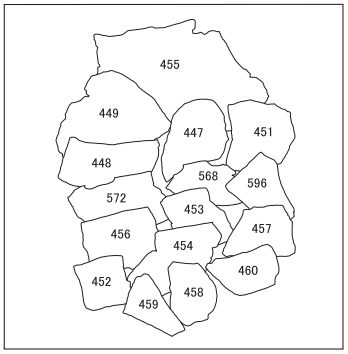
694 の2点は擂鉢の口縁部片で
同一個体と想定するが接合しない。

図版 66

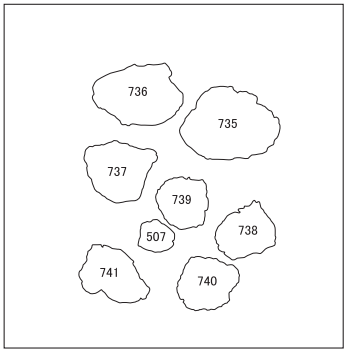


694 の2点は擂鉢の口縁部片で
同一個体と想定するが接合しない。

図版 67



図版 57



図版 75

付図２　北垣遺跡出土遺物図版集合写真掲載遺物番号②

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きたがきいせき
書 名	北垣遺跡
副 書 名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	森町－7
シ リ ー ズ 名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第22集
編 著 者 名	大谷宏治・大竹弘高（執筆・編集）片山一道・柴田亮平・株式会社日鐵テクノリサーチ（執筆）
編 集 機 関	静岡県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL　054-262-4261（代）
発 行 年 月 日	2012年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 （世界測地系）		発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
		市町	遺跡番号	北緯	東経			
きたがきいせき 北垣遺跡	しずおかけんしゅうちぐんもりまち 静岡県周智郡森町 えんでんあざきたがき 円田字北垣710-1・715・717・843・883-1・885・884-1ほか	22461	151	34°49′26″	137°54′32″	19990702-20000328 20000401-20010329	12,200㎡	道路建設（第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査）

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北垣遺跡	集落	縄文	竪穴建物	縄文土器・石器	縄文時代中期後半～末葉の加曽利式・曽利式・咲畑式土器が出土。 なお、竪穴建物は弥生時代の可能性がある。
	集落	弥生後期～古墳前期	竪穴建物・掘立柱建物・土坑	弥生土器	弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落。
	集落	古墳後期～平安	竪穴建物・掘立柱建物・溝状遺構・性格不明遺構・土坑・小穴	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器	古墳時代後期後半～鎌倉時代まで継続する一般的な集落。古墳時代後期～奈良時代までは竪穴建物と掘立柱建物で構成されていたが、平安時代に掘立柱建物が中心になった可能性が高い。
	集落・墓地	中世～近世	掘立柱建物・井戸・土坑・中世墓・近世墓・溝状遺構・性格不明遺構・小穴	山茶碗・渥美・青磁・瀬戸美濃（古瀬戸・大窯・登窯）・常滑・初山・志戸呂（古志戸呂・大窯・登窯）・銅銭・銅錘・銅碗・キセル・鎌・楔・用途不明鉄製品・鉄滓・石塔・かわらけ・鉄釘	時期を明確にできる掘立柱建物は少ないが土器の様相から判断して古墳時代から継続する集落が鎌倉時代まで繁栄し、室町以降急激に衰退し、16世紀代に墓地が形成されたことが判明した。鎌倉時代には、特殊な器形である山茶碗の托が出土したことから集落内に小規模な仏堂が存在した可能性がある。中世後期の中世墓は調査区北側に位置する。 近世は10軒程度の集落で鍛冶を行っていた可能性が高い。
	散布地	近現代		陶磁器	遠州製陶製汽車徳利が出土。

要 約

北垣遺跡は、縄文時代中期後半～近世に亘る複合遺跡である。

縄文時代は太田川中流域で遺跡数が増加する時期と呼応しており、この時期に人間の活動が活発化したことが窺える。

弥生時代後期～古墳時代前期は竪穴建物と掘立柱建物の小規模な集落であった可能性が高い。出土遺物や竪穴建物が平面方形であることから弥生時代後期でも中葉以降古墳時代前期に主体を有する集落である可能性が高い。

古墳時代後期～鎌倉時代までは継続的に集落であった可能性が高い。古墳時代後期～終末期には近接する尾根上に文殊堂古墳群や天王ヶ谷横穴墓群など古墳・横穴墓が多数築造されており、集落の継続時期と古墳群の存続時期を比較すると北垣遺跡の集団は横穴墓群に埋葬された可能性が高いことを想定した。また、この時期の建物は遺跡内に万遍無く建物が建設されるわけではなく、いくつかのグループに分かれていた可能性が高い。鎌倉時代の集落内には小規模な仏堂が存在する集落であった可能性が高い。

室町時代以降極端に出土遺物数が減少するが、近接する香勝寺遺跡群などと比較すると、香勝寺遺跡群では15世紀以降の遺物出土数が増加する傾向にあり、地域内の主体的となる集団や集落の変化があったことが想定できる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第22集

北垣遺跡

第二東名№113地点Ⅱ期
第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
森町－7

平成24年12月25日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054－262－4261㈹
FAX　054－262－4266
印　刷　所　文光堂印刷株式会社
〒410-0871　静岡県沼津市西間門68-1
TEL　055－926－2800